仙台市文化財調査報告書第43集

栗遺跡

栗囲式土師器標式遺跡調査報告

昭和57年8月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第43集

栗　遺　跡

栗囲式土師器標式遺跡調査報告

昭和57年8月

仙台市教育委員会

序

名取川南岸の中田地区は、栗遺跡をはじめ安久・安久東遺跡、安久諏訪古墳など数多くの遺跡包蔵地が周知されています。

昭和40年代以降、この付近一帯は豊かな穀倉地帯から一気に、東北新幹線開発事業や中田地区々画整理事業等々の進展に伴う市街化が進み、現在では良好な住環境の一画を形成しています。

古来、この地域は、名取川が形成した肥沃な土地柄と太平洋の影響を直接うける温暖な気候とが織り成して、古くから村落の発生をみた地域であることが、これまでの考古学の調査研究によって解明されています。

この栗遺跡は古墳時代に於ける、東北南半地方の標識的土器群「栗囲式土器」を出土する標準遺跡として、全国的にも著名な遺跡となっています。

この度、この遺跡の北縁に相当する地区に、学校建設の計画が提示され、遺跡保存問題で協議を重ねてまいりましたが、やむなく本調査を実施し、記録保存の措置を講ずるに至った次第であります。調査の結果、多くの遺構群と遺物が発見され、名取川南岸の村落の形成と生活の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

本報告は、その成果についてあますところなく解析し、まとめ上げた報告書であります。これらの資料は、郷土の歴史を学ぶ上で、また、歴史教育の上でも充分に活用されることは云うまでもありませんが、学術資料としても、また、文化財の保護・啓蒙の上にも大きく寄与するものであることは信じて難くありません。

最後に、遺跡の発掘調査や出土遺物の整理、報告書作成等については、多くの方々の御協力や御助言をいたゞきました。ここに深勘なる感謝を申し上げまして序といたします。

昭和57年5月18日

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は、仙台市立西中田小学校建設に伴う、栗遺跡の発掘調査報告書である。

2．栗遺跡は、従来『栗囲遺跡』と呼ばれていたが、昭和49年度の調査以降『栗遺跡』という名称に統一されている。

3．本書は、昭和56年度の発掘調査概要の記載を主とし、これに昭和49・50年の調査成果を加えた若干の考察を含んでいる。

4．石製品の材質の同定は、東北学院大学教授村山磐氏にお願いした。

5．本報告書中の土色は「新版標準土色帳」（小山・佐原：1970）に基づいている。

6．本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図、空中写真は、図中に示した。

7．本文の執筆は下記の通り担当し、編集は工藤哲司が行なった。

工藤哲司……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ1～5、8～9・Ⅳ・Ⅴ　　成瀬　茂……Ⅲ6～7

8．本報告書は、次の通り分担して作成した。

遺物実測……小林広美・神尾紀以子・相沢尚子

遺物トレース……高橋薫子・赤間郁子・真中信三

遺物復元……森　剛男・真中信三・渡辺紀雄

遺物写真……成瀬　茂・菊地雅之・赤間郁子

図面整理……菊地雅之・渡辺紀雄・真中信三

遺構トレース……工藤哲司

図表作成
台帳整理……小林広美・神尾紀以子・相沢尚子

9．本調査については、調査中に作成した現地説明会資料に一部紹介されているが、本書の記載内容がこれに優先するものである。

10．本調査においては、次の通りの遺構略号を使用した。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＫ：土　　壙

ＳＤ：溝　　跡　　ＳＸ：性格不明遺構

11．遺物番号は、本調査出土品については、第２表の通り前後２つの数字の組み合せ番号で示し、前調査報告書掲載資料は、第82～85表の通り１～287までの番号で示してある。

12．昭和49・50年調査の出土遺物実測図は、東北学院大学考古学研究部より借用した。

13．本報告書には、付編として次のものを収録した。

安田喜憲　「安久遺跡・栗遺跡周辺の微地形の形成について」

高橋　理　「栗遺跡出土動物遺存体」

光谷拓実　「栗遺跡出土炭化材樹種同定結果」

森　剛男　「栗遺跡出土土師器の使用痕観察」

本文目次

序
例言
Ⅰ．発掘調査の概要 …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査要項 …… 2
Ⅱ．栗遺跡の環境 …… 2
1．栗遺跡の位置と地理的環境 …… 2
1)．遺跡の位置 …… 2　2)．仙台平野の微地形の概要 …… 2
2．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 6
1)．旧石器時代 …… 7　4)．古墳時代 …… 11
2)．縄文時代 …… 7　5)．奈良・平安時代 …… 12
3)．弥生時代 …… 7
Ⅲ．調査遺構と出土遺物 …… 15
1．調査と整理の方法 …… 15
1)．調査区の設定 …… 15　4)．遺物整理 …… 17
2)．調査記録の作成 …… 16　5)．図面・遺物の収納、保管 …… 18
3)．遺跡、遺構の図面整理・作成 …… 16　6)．報告書の作成 …… 21
2．基本層序と遺構確認面 …… 22
1)．自然堤防面 …… 22　2)．旧河道面 …… 24　3)．自然堤防斜面 …… 26
3．遺構の分布状況 …… 26
4．住居跡とその出土遺物 …… 26
1号住居跡 …… 26　9号住居跡 …… 53　17号住居跡 …… 73
2号住居跡 …… 31　10号住居跡 …… 53　18号住居跡 …… 77
3号住居跡 …… 34　11号住居跡 …… 55　19号住居跡 …… 80
4号住居跡 …… 37　12号住居跡 …… 57　20号住居跡 …… 86
5号住居跡 …… 40　13号住居跡 …… 62　21号住居跡 …… 89
6号住居跡 …… 46　14号住居跡 …… 68　22号住居跡 …… 91
7号住居跡 …… 48　15号住居跡 …… 70　23号住居跡 …… 93
8号住居跡 …… 51　16号住居跡 …… 71
5．性格不明遺構 …… 95

1号性格不明遺構……95　2号性格不明遺構……97　3号性格不明遺構……100
6．溝　　跡 ……101
1号溝……101　3号溝……104
2号溝……103　4号溝……105
7．土　　壙 ……107
1号土壙……107　4号土壙……109　7号土壙……110
2号土壙……108　5号土壙……109　8号土壙……110
3号土壙……108　6号土壙……110　9号土壙……111
8．表土中よりの出土遺物 ……111
9．土師器以外の出土遺物 ……115
1)．土製品……115　4)．中世陶器……125　7)．自然遺物……128
2)．石製品……120　5)．施釉陶器……126
3)．須恵器……122　6)．金属製品……127
Ⅳ．遺構、遺物の総括 ……129
1．住居跡の総括 ……129
1)．住居跡の深さと床面標高……129　5)．カマドの構造について……136
2)．平面形と規模について……130　6)．住居跡の付属施設について……138
3)．柱穴について……131　7)．火災住居跡について……138
4)．住居跡の方向とカマドの方向……135　8)．廃絶後の住居跡について……139
2．溝跡の総括 ……140
3．土壙の総括 ……140
4．土師器の分類と年代 ……141
1)．土師器の機能的分類と使用実態について……141
2)．栗囲式土師器の細分……156
3)．土師器の年代……173
5．祭祀遺物について ……175
6．石製品について ……175
7．栗遺跡の集落構成 ……176
安久遺跡・栗遺跡周辺の微地形の形成について　安田　喜憲……275
栗遺跡出土動物遺存体　高橋　　理……295
栗遺跡出土炭化材樹種同定結果　光谷　拓実……299
栗遺跡出土土師器の使用痕観察　森　　剛男……301

挿図目次

第１図　栗遺跡の位置……3
第２図　仙台平野の微地形区分……4
第３図　名取川右岸の沖積平野の微地形分類図……5
第４図　周辺の遺跡……9・10
第５図　トレンチ配置、遺構分布図……13・14
第６図　調査区設定、地区割、水糸配り図……15
第７図　土師器実測図表現法(1)……18
第８図　土師器実測図表現法(2)……19・20
第９図　遺構実測図表現法……22
第10図　調査区南壁土層断面図……23
第11図　２トレンチ南壁断面図……24
第12図　調査区縦断地山断面図……25
第13図　栗遺跡遺構配置図……27・28
第14図　１号住居跡実測図……29
第15図　１号住居跡カマド実測図……30
第16図　１号住居跡出土土師器……31
第17図　２号住居跡実測図……32
第18図　２号住居跡出土土師器……33
第19図　３号住居跡実測図……35
第20図　３号住居跡出土土師器……36
第21図　４号住居跡実測図……38
第22図　４号住居跡柱穴復元図……39
第23図　４号住居跡出土土師器……40
第24図　５号住居跡実測図……41・42
第25図　５号住居跡カマド実測図……44
第26図　５号住居跡出土土師器……45
第27図　６号住居跡実測図……47
第28図　７号住居跡実測図……49
第29図　７号住居跡出土土師器(1)……50
第30図　７号住居跡出土土師器(2)……51
第31図　８号住居跡実測図……52
第32図　８号住居跡出土土師器……53
第33図　10号住居跡実測図……54
第34図　10号住居跡出土土師器……55
第35図　11号住居跡実測図……56
第36図　11号住居跡出土土師器……57
第37図　12号住居跡実測図……58
第38図　12号住居跡出土土師器(1)……60
第39図　12号住居跡出土土師器(2)……61
第40図　12号住居跡出土土師器(3)……63・64
第41図　12号住居跡出土土師器(4)……65・66
第42図　13号住居跡実測図……67
第43図　14号住居跡実測図……69
第44図　15号住居跡実測図……71
第45図　16号住居跡実測図……72
第46図　17号住居跡実測図……74
第47図　17号住居跡出土土師器(1)……76
第48図　17号住居跡出土土師器(2)……77
第49図　18号住居跡実測図……78
第50図　18号住居跡カマド実測図……79
第51図　18号住居跡出土土師器……80
第52図　19号住居跡実測図……81
第53図　19号住居跡出土土師器(1)……82
第54図　19号住居跡出土土師器(2)……83・84
第55図　19号住居跡出土土師器(3)……86
第56図　20号住居跡実測図……87
第57図　20号住居跡出土土師器……88
第58図　21号住居跡実測図……89
第59図　21号住居跡出土土師器……90
第60図　22号住居跡実測図……92
第61図　22号住居跡出土土師器……93
第62図　23号住居跡実測図……94
第63図　23号住居跡出土土師器……95
第64図　１号性格不明遺構実測図……96
第65図　１号性格不明遺構出土土師器……97
第66図　２号性格不明遺構遺物出土状況……97
第67図　２号性格不明遺構実測図……98
第68図　２号性格不明遺構出土土師器(1)……99

第69図　2号性格不明遺構出土土師器(2)……100
第70図　3号性格不明遺構実測図……101
第71図　3号性格不明遺構出土土師器……101
第72図　1号溝断面図……102
第73図　1号溝出土土師器……102
第74図　2号溝実測図……103
第75図　3号溝実測図……104
第76図　4号溝断面図……106
第77図　1号土壙実測図……107
第78図　1号土壙出土土師器……107
第79図　2号土壙実測図……108
第80図　3号土壙実測図……108
第81図　4号土壙実測図……109
第82図　5号土壙実測図……109
第83図　6・7号土壙実測図……110
第84図　8号土壙実測図……111
第85図　9号土壙実測図……111
第86図　表土中出土土師器(1)……112
第87図　表土中出土土師器(2)……113
第88図　表土中出土土師器(3)……114
第89図　表土中出土土師器(4)……115
第90図　土製品……116
第91図　小形手捏ね土器……118
第92図　小形土器、異形土器……119
第93図　石製玉類……120
第94図　石製品……121
第95図　輪状石製品……122
第96図　須恵器(1)……123
第97図　須恵器(2)……124
第98図　中世陶器、施釉陶器……126
第99図　鉄製品……127
第100図　古銭拓影……128
第101図　サメ歯……128
第102図　栗遺跡発見住居跡柱穴配置図……133・134
第103図　18号住居跡カマド焚口部復元図……137
第104図　昭和49・50年調査9号住居跡出土土師器
及び栗遺跡出土各器種……151・152
第105図　鉢Ⅰ類・甑小型関係図……154
第106図　昭和49・50年出土須恵器坏No. 272……174
第107図　時期別集落構成図……177・178
第108図　栗遺跡出土土師器集成図－1……189
第109図　栗遺跡出土土師器集成図－2……190
第110図　栗遺跡出土土師器集成図－3……191
第111図　栗遺跡出土土師器集成図－4……192
第112図　栗遺跡出土土師器集成図－5……193
第113図　栗遺跡出土土師器集成図－6……194
第114図　栗遺跡出土土師器集成図－7……195
第115図　栗遺跡出土土師器集成図－8……196
第116図　栗遺跡出土土師器集成図－9……197
第117図　栗遺跡出土土師器集成図－10……198
第118図　栗遺跡出土土師器集成図－11……199
第119図　栗遺跡出土土師器集成図－12……200
第120図　栗遺跡出土土師器集成図－13……201
第121図　栗遺跡出土土師器集成図－14……202
第122図　栗遺跡出土土師器集成図－15……203
第123図　栗遺跡出土土師器集成図－16……204
第124図　栗遺跡出土土師器集成図－17……205
第125図　栗遺跡出土土師器集成図－18……206
第126図　栗遺跡出土土師器集成図－19……207
第127図　栗遺跡出土土師器集成図－20……208
第128図　栗遺跡出土土師器集成図－21……209
第129図　栗遺跡出土土師器集成図－22……210
第130図　栗遺跡出土土師器集成図－23……211
第131図　栗遺跡出土土師器集成図－24……212
第132図　栗遺跡出土土師器集成図－25……213
第133図　栗遺跡出土土師器集成図－26……214

表　目　次

第１表　遺跡地名表……8
第２表　遺物番号一覧表……17
第３表　１号住居跡観察表……30
第４表　１号住居跡出土遺物集計表……31
第５表　２号住居跡観察表……33
第６表　２号住居跡出土遺物集計表……33
第７表　３号住居跡観察表……34
第８表　３号住居跡出土遺物集計表……36
第９表　４号住居跡観察表……39
第10表　４号住居跡出土遺物集計表……39
第11表　５号住居跡観察表……43
第12表　５号住居跡出土遺物集計表……46
第13表　６号住居跡観察表……47
第14表　６号住居跡出土遺物集計表……48
第15表　７号住居跡出土遺物集計表……48
第16表　７号住居跡観察表……49
第17表　８号住居跡観察表……53
第18表　８号住居跡出土遺物集計表……53
第19表　10号住居跡観察表……55
第20表　10号住居跡出土遺物集計表……55
第21表　11号住居跡観察表……56
第22表　11号住居跡出土遺物集計表……57
第23表　12号住居跡観察表……59
第24表　12号住居跡出土遺物集計表……62
第25表　13号住居跡出土遺物集計表……62
第26表　13号住居跡観察表……67
第27表　14号住居跡出土遺物集計表……68
第28表　14号住居跡観察表……68
第29表　15号住居跡出土遺物集計表……70
第30表　15号住居跡観察表……70
第31表　16号住居跡観察表……72
第32表　17号住居跡出土遺物集計表……75
第33表　17号住居跡観察表……75
第34表　18号住居跡観察表……78
第35表　18号住居跡出土遺物集計表……79
第36表　19号住居跡観察表……81
第37表　19号住居跡出土遺物集計表……85
第38表　20号住居跡観察表……86
第39表　20号住居跡出土遺物集計表……88
第40表　21号住居跡観察表……90
第41表　21号住居跡出土遺物集計表……90
第42表　22号住居跡出土遺物集計表……91
第43表　22号住居跡観察表……91
第44表　23号住居跡観察表……95
第45表　23号住居跡出土遺物集計表……95
第46表　住居跡床面標高表……129
第47表　栗遺跡発見住居跡の規模……130
第48表　住居跡南北軸、カマド主軸方向……135
第49表　月別最多風向（仙台）……136
第50表　炉の付設された住居跡……138
第51表　火災住居跡比較表……139
第52表　土壙一覧表……140
第53表　甕鉢類器高口径計測表……143・144
第54表　甑器高口径計測表……146
第55表　栗遺跡出土土師器器種別出土量……150
第56表　甕Ⅰ類大型分類表……157
第57表　甕Ⅰ類小型分類表……157
第58表　甕Ⅱ類大型分類表……158
第59表　甕Ⅱ類小型分類表……158
第60表　鉢Ⅰ類分類表……159
第61表　鉢Ⅱ類分類表……159
第62表　甑大型分類表……160
第63表　甑小型分類表……161
第64表　坏小型分類表……161
第65表　坏大型分類表……162
第66表　蓋Ⅰ類分類表……162
第67表　蓋Ⅱ類分類表……163
第68表　埦分類表……163
第69表　高坏分類表……163
第70表　栗遺跡出土土師器器種別・遺構別

分類集計表……165・166
第71表　住居跡内における器種別共伴状況……164
第72表　複数の住居跡から出土した
細分各器種……167
第73表　頸部無段土師器大形器種出土住居跡と
その共伴土師器坏小型……168
第74表　頸部有段土師器大形器種だけを出土する
住居跡とその共伴土師器坏小型……169
第75表　坏小型２・３類と４類の共伴状況……169
第76表　坏小型４Ｃ類と共伴する坏……169
第77表　坏小型４Ｃ類出土住居跡と
その共伴大形器種……170
第78表　坏小型２・３類出土住居跡と
その共伴大形器種……170
第79表　土師器共伴関係の類型化と
その住居跡……171
第80表　栗遺跡出土祭祀遺物集計表……175
第81表　栗遺跡発見住居跡一覧表……179
第82表　昭和49・50年出土遺物目録(1)……183
第83表　昭和49・50年出土遺物目録(2)……184
第84表　昭和49・50年出土遺物目録(3)……185
第85表　昭和49・50年出土遺物目録(4)……186

図版目次

図版１　栗遺跡周辺の空中写真……217
図版２　栗遺跡全景……218
図版３　栗遺跡全景……219
図版４　遺構検出状況、１号住居跡……220
図版５　１号住居跡カマド、２号住居跡……221
図版６　３号住居跡炭化材遺物出土状況
３号住居跡……222
図版７　４号住居跡、５号住居跡
遺物礫出土状況……223
図版８　５号住居跡カマド、５号住居跡……224
図版９　５号住居跡貼床下土壙、６号住居跡……225
図版10　７号住居跡遺物出土状況、
７号住居跡……226
図版11　８号住居跡、10号住居跡
炭化材出土状況……227
図版12　10号住居跡、11号住居跡……228
図版13　12号住居跡遺物出土状況、
12号住居跡遺物出土状況……229
図版14　12号住居跡、13号住居跡……230
図版15　14号住居跡、15号住居跡……231
図版16　16号住居跡、17号住居跡……232
図版17　17号住居跡遺物出土状況、
17号住居跡遺物出土状況……233
図版18　18号住居跡、18号住居跡カマド……234
図版19　18号住居跡遺物出土状況、19号住居跡……235
図版20　19号住居跡遺物出土状況、
19号住居跡遺物出土状況……236
図版21　20号住居跡、21号住居跡……237
図版22　22号住居跡、23号住居跡……238
図版23　西部住居跡群、中央部住居跡群……239
図版24　１号土壙、２号土壙……240
図版25　３、４、５号土壙、８号土壙……241
図版26　９号土壙、１号土壙……242
図版27　１号溝断面、１号溝断面……243
図版28　２号溝、３号溝……244
図版29　１～２トレンチ４号溝、
３トレンチ４号溝……245
図版30　４トレンチ４号溝、５トレンチ……246
図版31　４号溝断面、４号溝断面……247
図版32　１号性格不明遺構遺物出土状況、
１号性格不明遺構……248
図版33　２号性格不明遺構、
３号性格不明遺構……249
図版34　調査区縦断トレンチ、室内作業風景……250
図版35　現地説明会風景、現地説明会風景……251
図版36　調査風景、調査参加者……252

図版37　旧河川跡出土土師器……253
図版38　1、2、3、4、5号住居跡
出土土師器……254
図版39　7、8、10、11号住居跡出土土師器……255
図版40　12号住居跡出土土師器……256
図版41　12号住居跡出土土師器……257
図版42　12号住居跡出土土師器……258
図版43　17号住居跡出土土師器……259
図版44　18、19号住居跡出土土師器……260
図版45　19号住居跡出土土師器……261
図版46　20、22号住居跡
1号性格不明遺構出土土師器……262
図版47　2号性格不明遺構表土出土土師器……263
図版48　須恵器……264
図版49　須恵器……265
図版50　手捏ね土器……266
図版51　手捏ね土器小形土器……267
図版52　土製品……268
図版53　土製品・石製品……269
図版54　鉄製品・古銭……270
図版55　石製品……271
図版56　中世近世陶磁器……272
図版57　鉢Ⅰ類使用痕……273

栗遺跡発掘調査報告

Ⅰ．発掘調査の概要

1．調査に至る経過

栗遺跡は、昭和20年代に遺跡上の畑地開墾に際して多数の土師器が出土したことから、古代集落跡として知られるようになった。出土遺物については、東北史学会昭和29年度秋季大会研究発表会において、氏家和典氏により「仙台市中田町栗囲遺跡出土土師器について」と題して学界に報告された。その後ここから出土した土師器は、単一の型式を示すものが多いことから、氏家和典氏は「東北土師器の型式分類とその編年」（歴史14輯　東北史学会　昭和32年）のなかで、『栗囲式』として型式分類し、その７型式に分類された編年における第五型式として位置付けた。氏家氏は、７型式の絶対年代は第一型式を５世紀前後頃、第七型式は８世紀から９世紀初頭頃と想定し、第二型式から第六型式はその間の時期と考えた。『栗囲式』の年代については言及されていなかったが、横穴等より出土することがあるので、７世紀末頃という年代観が与えられるようになった。以後、同型式の土師器は『栗囲式』と呼ばれ、標式遺跡の調査とは別に一般化し、宮城県内はもとより他県の遺跡の年代決定に際しても適用されている。

栗遺跡が、実際に発掘調査されたのは、昭和49・50年になってからである。中田地区の土地区画整理に伴って、遺跡上を通る道路部分約2000㎡が、仙台市教育委員会の依頼を受けた東北学院大学考古学研究部により２ケ年延べ90日に及ぶ調査が行なわれ、18軒の竪穴住居跡と、15基の土壙が発見された。（第５図参照）（註１）

尚、この調査時において、調査を担当した東北学院大学文学部教授加藤孝氏により遺跡の名称は、『栗囲遺跡』から『栗遺跡』に改められ現在に至っている。

その後、区画整理地内は道路をはじめとする住環境の整備の進展に伴って住宅が増加し、さらに今後の増加を予想して、教育環境の整備が望まれるようになった。そこで仙台市教育委員会では区画整理計画において学校建設予定地となっていた栗遺跡を一部含む同地に、昭和56年度より仮称西中田小学校建設に着手することになった。これに伴い、同校の敷地にかかる遺跡部分の記録保存を行なうため、本調査をするに至った。

2．調査要項

遺跡の名称　栗遺跡　（旧称：栗囲遺跡）仙台市登録番号　C－136

遺跡所在地　仙台市西中田七丁目７番

調査面積　4700㎡

調査期間　昭和56年(1981) 4月13日～昭和56年(1981)10月２日

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

成瀬　茂　青沼一民　木村浩二　工藤哲司

調査参加者　入間川富一　阿部徳四郎　中沢正吉　高橋義巳　小沼ちえ子　佐伯みつゑ　遠藤いな子　鈴木つや子　阿部いしよ　嶺岸光子　嶺岸澄子　阿部美枝子　太田わくり　壱岐豊子　三塚正子　森屋とし子　浦山かおる　中沢さつき　大内志づゑ　渡辺重人

小林広美　神尾紀以子　相沢尚子　高橋薫子　男鼎映子　菊地雅之　渡辺紀雄　真中信三　黒沢孝志　森　剛男

調査協力　柿沼勝美

Ⅱ．栗遺跡の環境

1．栗遺跡の位置と地理的環境

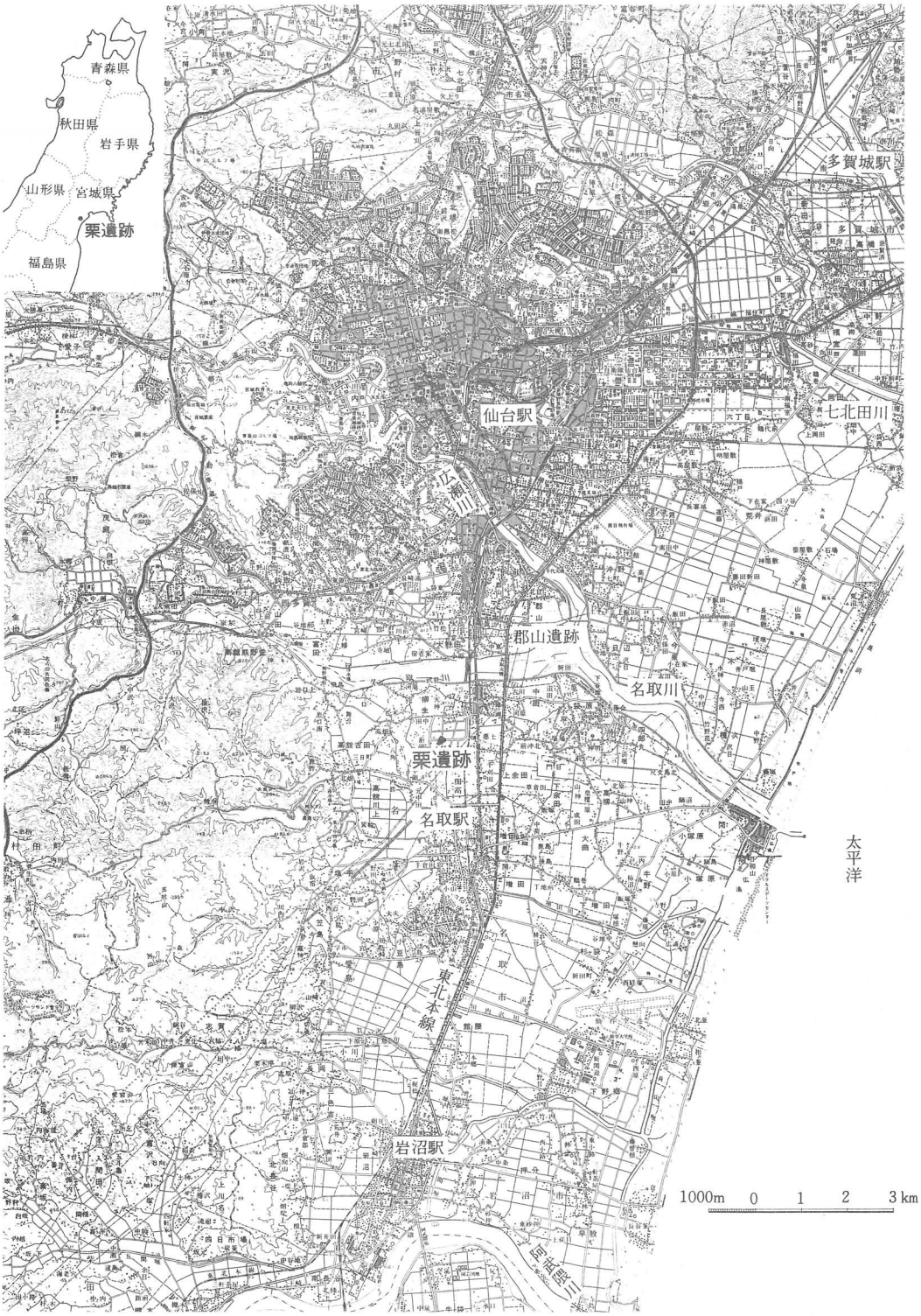
1)　遺跡の位置

栗遺跡は、宮城県仙台市西中田七丁目（旧地名は仙台市中田町字栗）に所在する。国土地理院発行1/25,000地形図「仙台東南部」では、北西角より26.8cm、南西角より10.2cmの地点である。位置的には、仙台市の中心部にある市役所の南方約8.5km、国鉄南仙台駅の南西約１kmの所で、遺跡の南方約250m からは名取市となる。

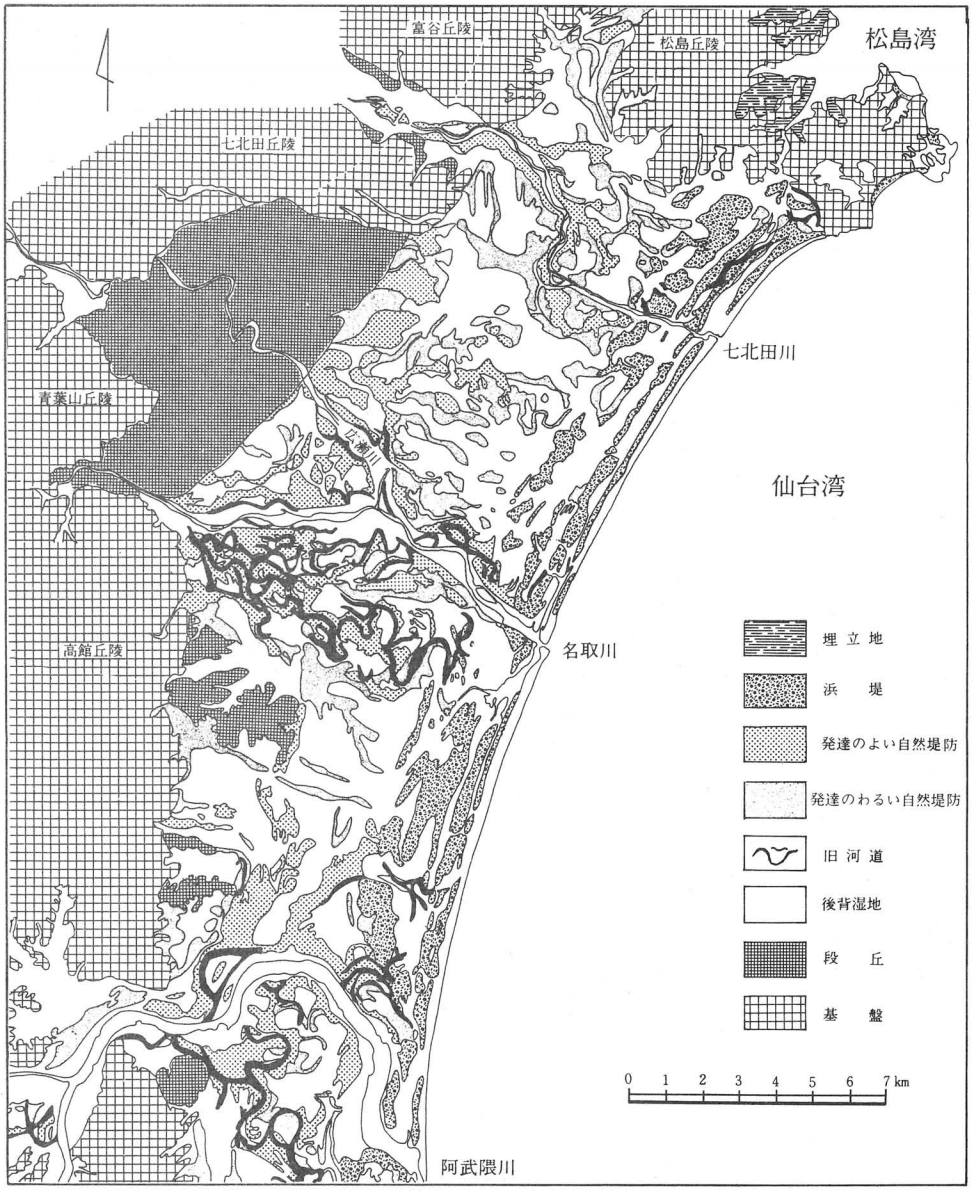
2)　仙台平野の微地形の概要

仙台市は、西部と東部で大きく地形が二分される。西部は奥羽山脈から派生する青葉山丘陵、高館丘陵と名取川支流の広瀬川の中流域に形成された段丘地帯とからなる。段丘面は、古期から青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘の五つに大別されているが、仙台市は、城下町以来、この段丘を中心として発展して来た。また、縄文時代前期以前の遺跡は、全てこの段丘及び丘陵に形成されており、沖積地への進出はみない。

仙台市東部は、幅約10kmの仙台平野と呼ばれる海岸平野が、北は仙台港から南は福島県境まで約40kmに亘って続いている。この海岸平野は、北から順に七北田川・広瀬－名取川・阿武隈



第１図　栗遺跡の位置（国土地理院１/50,000「仙台」「岩沼」を複製）

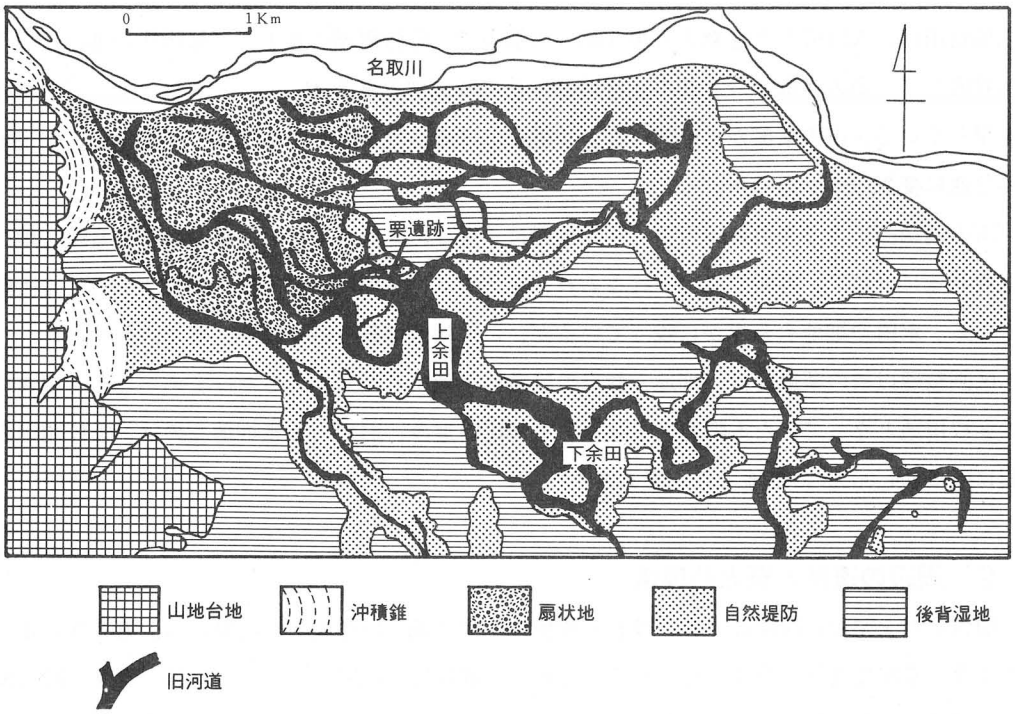


第２図　仙台平野の微地形区分（「新編仙台の地学」地学団体研究会 仙台支部編を再編集）

川が、今から約２万年前に始まる海進でできた海を、上流からの流出物によって埋めたてて形成したものである。３河川は、堆積の過程において、第２図にみられるように沖積錐、扇状地、自然堤防、後背温地、潟湖性低地、旧河道、浜堤といった様々な微地形を形成した。

名取川は、仙台平野においては中規模の河川であるが、流速が速く土砂の運搬力が強いため地形は特に複雑になっている。すなわち、名取川が青葉山丘陵と高館丘陵の間から開析し、平

野部に出る山田から富田、松木、高畑付近は両岸とも広汎な扇状地となっている。扇状地西側の舞台、北畑地区には沖積錐もみられる。名取川南岸側、扇央部の飛島から最奥部の浜堤の小塚原まで約９kmは、増田付近まで幅約７kmにわたって、旧河道が複雑に入り組んで存在する。他の２河川に比べると名取川が、頻繁に洪水を起こし、流路を変えていたことがわかる。旧河道の両岸には、河道に沿うように自然堤防が形成され、その外側には自然堤防に狭まれるように後背湿地が広がっている。旧河道がみられなくなる小塚原付近からは、現海岸線まで４から５列の浜堤が約2.5kmの幅で、海岸線と平行して緩やかな弧を描いて縦走する。扇状地および自然堤防上には、数多くの遺跡が形成されているが、自然堤防における遺跡の形成年代は近年まで弥生時代以降と考えられていたが、六反田（仙台市教育委員会1981）、山口遺跡（仙台市教育委員会1981）の調査により縄文時代中期に遡ることが明らかとなっている。このことは、仙台平野が、約8,000年前から約5,000年前にかけて、海水準上昇速度の鈍化に伴って、河川からの土砂供給量が相対的に増加し、結果的に海岸線が後退し、その後約5,000年前以降は安定期に入るという松本氏の地理学的研究成果と一致している。（註２）



第３図　名取川右岸の沖積平野の微地形分類図（安田原図）

3)　栗遺跡周辺の地形と地質

栗遺跡は、先に述べた名取川の形成した自然堤防のなかで、扇状地端部に近い所の一つに立地する。遺跡周辺は、旧河道が入り組み、旧河道間の重複も多く、自然堤防は小さく分断されている。栗遺跡の立地する自然堤防も北西から南東に長く延びていたものであったが、後の河道によって分断され、17,000㎡の広さの略三角形を呈する現在の形態となる。その三辺はいずれも旧河道によって画される。標高は9ｍ前後で、水田となっている旧河道面より1ｍ前後高くなっている。栗遺跡の立地する自然堤防及び、周囲の旧河道が、いつ形成されたかについては明らかでないが、本調査結果からみると、5世紀頃にも、遺跡上に小規模な河川があったことが知られる。

地質は、自然堤防上では褐色の砂または砂質シルト層が主体となって厚く堆積するが、小規模の河道となっていたと考えられる部分には、砂礫層の堆積が認められる。また遺跡北側の一部には、径が5㎝～15㎝程の礫を混える砂質シルト層も見られる。周囲の旧河道はシルトまたは粘土層とからなる。遺跡北東部に接する旧河道では、近年までかなりの湧水があったという。

なお、栗遺跡周辺の地形についての詳細は、本書掲載の安田氏の論文を参考にされたい。

4)　遺跡周辺の現状

仙台市は、人口67万人を数える東北第一の都市で、仙台駅周辺を中心に都市化が進み、これに対応して、市の西部から北部の丘陵地帯や北に隣接する泉市は、ベッドタウンとしての様相を呈している。市の東部から南部に広がる平野部は農業地帯から産業団地や商業地区、住宅地へ急速に変貌しつつある。

市の南端部にある栗遺跡周辺も、区画整理終了後は、それまでの近郊農業地帯から住宅地へと変わるにつれて、各所で盛土が行なわれ、現状では自然堤防と旧河道を観察することが困難である。水田や畑地もわずかに残っているが、この状態は長く続かないと考えられる。

区画整理以前の栗遺跡は、畑地と数戸の屋敷林に囲まれた家があるだけであったが、現在では学校用地となっていた本調査区を除くと宅地化が進み、旧来のまま畑地なのは、学校用地南側に残る約4,000㎡の畑地くらいである。

2．周辺の遺跡と歴史的環境

仙台平野を望む丘陵端部から、段丘・沖積錐・扇状地・自然堤防・浜堤には、第3図に示したように濃密な遺跡の分布が見られる。これらの遺跡は、前節で述べたように、丘陵・段丘面と沖積面との形成時期と密接な関係を示している。ここでは仙台市南部から名取市北部にかけての名取川流域の各時期における遺跡を概観して、栗遺跡の歴史的環境・歴史的位置付けを考える基礎としたい。

1)　旧石器時代

名取川流域の遺跡群のなかで最も古いのは、山田上ノ台遺跡と北前遺跡で、前期旧石器が発見されている。山田上ノ台遺跡は標高約50m で上町段丘または台ノ原段丘上に立地し、前期旧石器の４枚の文化層からチョッピングトゥール・三稜尖頭器・ポイント等が出土した。(註３)山田上ノ台遺跡の直北の北前遺跡は、標高約60m であるが、段丘としては山田上ノ台遺跡と同一で、篦状石器・両面加工石器・尖頭器・スクレイパー・コア等が出土し、この地域の遺跡の形成時期が非常に早かったことを物語っている。(註４)

後期旧石器時代の遺跡は、上記２遺跡の他に、青葉山遺跡（青葉山段丘面・標高200m）（註５）西野田遺跡（野田山丘陵・標高37m）(註６）がある。旧石器時代に遡る遺跡は、今後の段丘面の発掘調査により増加することも考えられる。

2)　縄文時代

縄文時代には、仙台市の北に位置する多賀城市から、石巻市にかけての松島湾沿岸には大規模な貝塚群が形成されるが、土砂の流入量の多い名取川沿岸は、貝類の生育に適する砂泥層の水域や潟湖性低地が発達せず、貝塚の形成される条件には欠けているため、貝塚遺跡は少ない。ただ、海岸線が最も奥深く浸入した頃、愛島丘陵の南縁に、縄文時代早期から前期にかけての宇賀崎貝塚が形成された。その他三地点で貝塚が発見されている。

早期の遺跡としては、三神峯遺跡・萩ケ丘遺跡・北前遺跡・山田上ノ台遺跡等があり、早期末の条痕文系土器を出土している。なかでも北前遺跡では、この時期としては珍しく８軒の竪穴住居跡が発見されている。前期には、50軒の住居跡の発見された今熊野遺跡や、三神峯遺跡がある。この時期の遺跡はやはり丘陵や段丘面に立地するが、集落のなかに、大規模なものが現れる。

縄文時代中期になると、丘陵や段丘だけでなく、沖積地の自然堤防にも集落が営まれるようになり、六反田遺跡では中期中葉（大木８b式）の住居跡が発見され、山口遺跡でも、同期の土器が出土している。これは両遺跡周辺に比較的早く自然堤防が形成されたことによると考えられる。段丘面でも多くの遺跡が形成され、山田上ノ台遺跡や上野遺跡・人来田遺跡など、複式炉をもつ竪穴住居跡で構成される大きな集落がある。後期は、中期の遺跡と重なる場合が多いが、さらに六反田遺跡周辺の沖積地での生活圏の拡大をみることができる。晩期になると遺跡数は減少する。金剛寺貝塚･六反田遺跡･真坂遺跡などがあるが、小規模な包含層から少量の遺物が発見されるに過ぎない。

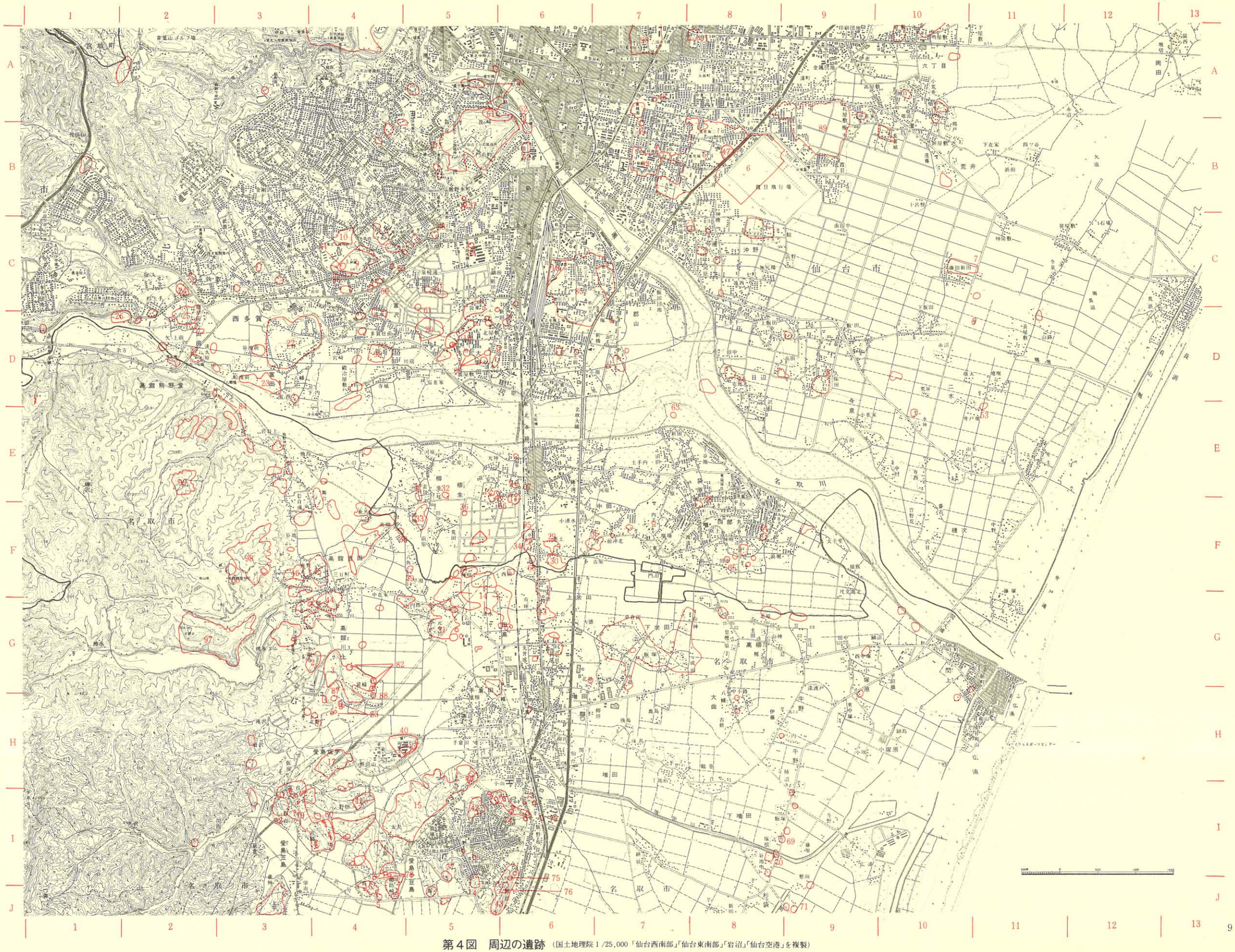
3)　弥生時代

弥生時代には、十三塚遺跡・宮下遺跡等が段丘上に、上川遺跡・鹿野東遺跡・真坂遺跡等が沖積錐に、南小泉遺跡・西台畑遺跡・田高遺跡・清水遺跡等が自然堤防上に、さらには藤田新

田遺跡が浜堤上に形成されるなど、段丘から沖積地の広汎な地域に亘って遺跡が形成されるよ

第1表　遺跡地名表

No.	遺跡名	種別	立地	年代	位置	No.	遺跡名	種別	立地	年代	位置
1	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳	F5	51	大年寺横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	A5
2	金剛寺貝塚	貝塚	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	G3	52	宗禅寺横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	A6
3	今熊野遺跡	貝塚集落跡	段丘	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	G4	53	三本塚古墳	前方後円墳？	自然堤防	古墳	E11
4	大木戸貝塚	貝塚	段丘	縄文	I5	54	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳（後期）	C4
5	宇賀崎貝塚	貝塚	段丘	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	J4	55	金洗沢古墳	円墳	段丘	古墳	C4
6	南小泉遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・中世	B8	56	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳	C4
7	藤田新田遺跡	集落跡	浜堤	弥生	C10	57	一塚古墳	円墳	段丘	古墳	B5
8	今泉遺跡	集落跡城館	自然堤防	弥生・古墳・平安～近世	D9	58	二塚古墳	前方後円墳	段丘	古墳	C5
9	三神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文	C4	59	金岡八幡古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	C5
10	芦ノ口遺跡	集落跡	段丘	平安	C4	60	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳	D5
11	安久東遺跡	集落跡古墳群	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安～近世	E6	61	教塚古墳	円墳	沖積平野	古墳（後期）	D5
12	安久遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・平安・中世	E5	62	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期）	B6
13	上余田遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	G6	63	仙台大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳	E7
14	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安・中世	G5	64	城丸古墳	円墳	自然堤防	古墳	F8
15	十三塚遺跡	集落跡	段丘	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	I5	65	弁天囲古墳	円墳	自然堤防	古墳	F8
16	宮下遺跡	集落跡	段丘	弥生・古墳・奈良・平安・近世	J4	66	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	E5
17	西野田遺跡	集落跡	段丘	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	H4	67	伊豆野権現古墳	円墳	自然堤防	古墳	E6
18	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳	C6	68	天神塚古墳	方墳	自然堤防	古墳（中期）	F6
19	六反田遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	D5	69	雷神塚古墳	円墳	浜堤	古墳	I9
20	山口遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	D5	70	毘沙門堂古墳	円墳	浜堤	古墳	I8
21	泉崎浦遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安	C5	71	経の塚古墳	円墳	浜堤	古墳（中期）	J9
22	上野遺跡	包含地	段丘	縄文・奈良・平安	D3	72	字町古墳	円墳	浜堤	古墳	I6
23	船渡前遺跡	包含地	自然堤防	縄文・弥生・平安	D3	73	雲南古墳	円墳	浜堤	古墳	I6
24	北前遺跡	包含地	段丘	縄文・古墳・平安	C2	74	飯野坂古墳群	前方後方墳	段丘	古墳	I6
25	山田上ノ台遺跡	包含地	段丘	旧石器・縄文・平安・近世	D2	75	小塚古墳	円墳	段丘	古墳	I6
26	羽黒台遺跡	包含地	段丘	縄文・古墳・奈良・平安	D1	76	雷神山古墳	前方後円墳	段丘	古墳	J6
27	清田原西遺跡	包含地	自然堤防	縄文・平安	D2	77	山の前古墳群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	I5
28	中田畑中遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	F8	78	宇賀崎古墳群	方墳・円墳	段丘	古墳	J4
29	中田北遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	F6	79	賽ノ窪古墳群	前方後円墳・円墳	段丘	古墳	I3
30	中田南遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	F6	80	名取大塚山古墳	前方後円墳	段丘	古墳	I4
31	田高遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	G5	81	北野横穴群	横穴	段丘	奈良・平安	H3
32	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安	E5	82	箕輪A地区古墳群	前方後円墳・方墳	段丘	古墳	G4
33	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	F5	83	箕輪B地区古墳群	円墳	段丘	古墳	H4
34	堰腰遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安	F6	84	熊野堂横穴	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	E3
35	後河原遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	F7	85	郡山遺跡	官衙(郡衙)	自然堤防	古墳・奈良	C6
36	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳・奈良・平安	F5	86	富沢金山窯跡	窯跡	段丘	古墳・奈良・平安	C4
37	雷遺跡	包含地	自然堤防	平安	E5	87	南台窯跡	窯跡	段丘	奈良・平安	H4
38	窪田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安	F4	88	北野窯跡	窯跡	段丘	平安	H4
39	北宮神妙遺跡	包含地	沖積平野	奈良・平安	F5	89	仙台東郊条理跡	条里跡	沖積平野	奈良	B9
40	野田山遺跡	包含地	段丘	弥生・古墳・奈良・平安	H4	90	陸奥国分寺跡	寺院跡	沖積平野	奈良	A7
41	前野田東遺跡	包含地	段丘	弥生・奈良・平安	I4	91	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	自然堤防	奈良	A8
42	飯野坂西遺跡	包含地	段丘	弥生・古墳・奈良・平安	I5	92	笠島廃寺跡	寺院跡	段丘	奈良・平安	I3
43	館腰遺跡	包含地	段丘	弥生・古墳・奈良・平安	J5	93	若林城跡	城館	自然堤防	中世・江戸	B7
44	川上遺跡	包含地	沖積錐	縄文・弥生・奈良・平安	G4	94	日辺館跡	城館	自然堤防	中世	D8
45	鹿野東遺跡	包含地	沖積錐	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	F3	95	前田館跡	城館	自然堤防	中世	F6
46	真坂遺跡	包含地	沖積錐	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	F3	96	富沢館跡	城館	自然堤防	室町	D4
47	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期）	B8	97	大館山館跡	城館	丘陵	中世	G2
48	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）	A7	98	高館城跡	城館	丘陵	中世	F3
49	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	B7	99	熊野堂大館跡	城館	丘陵	中世	E2
50	向山横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳・奈良	A5	100	熊野那智神社	神社跡	丘陵	中世・近世	F3



第４図　周辺の遺跡（国土地理院１/25,000「仙台西南部」「仙台東南部」「岩沼」「仙台空港」を複製）

うになる。これは、水田耕作という理由により沖積地に進出したということだけではなく、沖積面の地盤が安定してきたことによる影響も大きいと考えられる。栗遺跡周辺の自然堤防に遺跡が形成されるのもこの時期からで、北側には安久東遺跡、南側には清水遺跡がある。この時期には、遺物の発見量に比較して、遺構の発見される割合は低く、十三塚遺跡で数軒の住居跡と墓壙、南小泉遺跡で数地点から合口壺棺、今泉遺跡では土壙が1基発見されているくらいである。

4)　古墳時代

古墳時代になると、弥生時代の遺跡と重なる所が多いが、その規模は拡大し、さらに地盤の一層の安定化に伴って、それまで遺跡のみられなかった小規模な自然堤防や、より海岸線に近い浜堤へも進出するようになる。

この時期に入ると段丘・沖積地を通して住居跡の発見例も多くなる。段丘上の今熊野遺跡(註7）や、自然堤防上の安久東遺跡では集落に接近して方形周溝墓も発見されている。(註8）　その後、仙台平野における初期的古墳として、愛島地区の丘陵一帯には、宇賀崎1号墳(方墳)、雷神山古墳(前方後円墳)、飯野坂古墳群(前方後方墳)が造営され、広瀬川左岸の自然堤防には遠見塚古墳（前方後円墳）が造営される。雷神山古墳・遠見塚古墳はそれぞれ主軸長168m、110mを計り、東北地区の第1位・第3位の規模をもつ。このように多数の古墳が造営された背景には、仙台平野の生産力の増加が考えられる。愛島地区では中期から後期にかけての古墳も密集し、仙台平野の政治的中心地であったことが考えられる。同じ頃、名取川北岸の西多賀・富沢地区にも、裏町古墳（註9）や兜塚古墳（註10）など多くの古墳が造営されていた。

これらの地域においては、古墳主体部の調査例が少ないために、中央との文物の交流を示す遺物は少ないが、5世紀末頃の初期須恵器を生産した大蓮寺窯跡（註11）が仙台市の北部で発見されているので、同地域が国造制（註12）の外にあったとは言え、中央との関係が必ずしも疎であったとは言えないようである。

後期には、三神峯古墳群・箕輪B地区古墳群などの群集墳や、法領塚古墳（註13）のような横穴石室をもった古墳が散見されるようになる。栗遺跡の近くにも、この時期と考えられる安久諏訪古墳(註14)、伊豆野権現古墳(註15)、安久東古墳（註16）がある。

古墳時代の終末期から奈良時代にかけては、それまでの高塚古墳に変わって、横穴古墳が興隆するようになる。青葉山丘陵と広瀬川が接近する所には、向山横穴群・大年寺横穴群・宗禅寺横穴群（註17）の三群からなる愛宕山横穴群があり、高館丘陵と名取川が接近する所には熊野堂横穴群がある。また、愛島地区にも北野横穴群・山の前横穴群が造られている。横穴からは須恵器の出土が多くなる。全ての須恵器が現地生産品でないとしても、窯業生産の活発化を反映するものと考えることができる。

古墳時代の終末期、中央では白鳳時代と呼ばれる頃、名取川下流域に形成された遺跡のなかで、規模的に、あるいは歴史的な意味において大きな遺跡として郡山遺跡がある。郡山遺跡は、広瀬川と名取川の合流地点の自然堤防上に立地する多賀城以前の官衙遺跡で、柵木列と溝で囲まれた推定方四町の官衙域と、同じく柵木列で囲まれた推定方二町の寺院域とからなる。同遺跡の成立は、この地方が律令制的中央集権体制に編入され、以後中央政治の影響を強く受けることを意味し、さらに中央と直結する機関の成立は、この地方に多くの新技術・新文化をもたらしたと考えられる。

5)　奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡の立地は古墳時代と共通するが、遺跡数は一段と増加する。平安時代には谷の奥に入った丘陵斜面への進出もみられる。

奈良時代の前半には、仙台平野の北端に近い丘陵に国府多賀城が成立し、また、奈良時代の中葉には広瀬川の左岸に、築地に囲まれた800尺四方の寺院域に七堂伽藍を備えた陸奥国分寺や同尼寺が建立され，名取川下流域から七北田川流域にかけての地域が、陸奥国の中心地域であったことが窺われる。

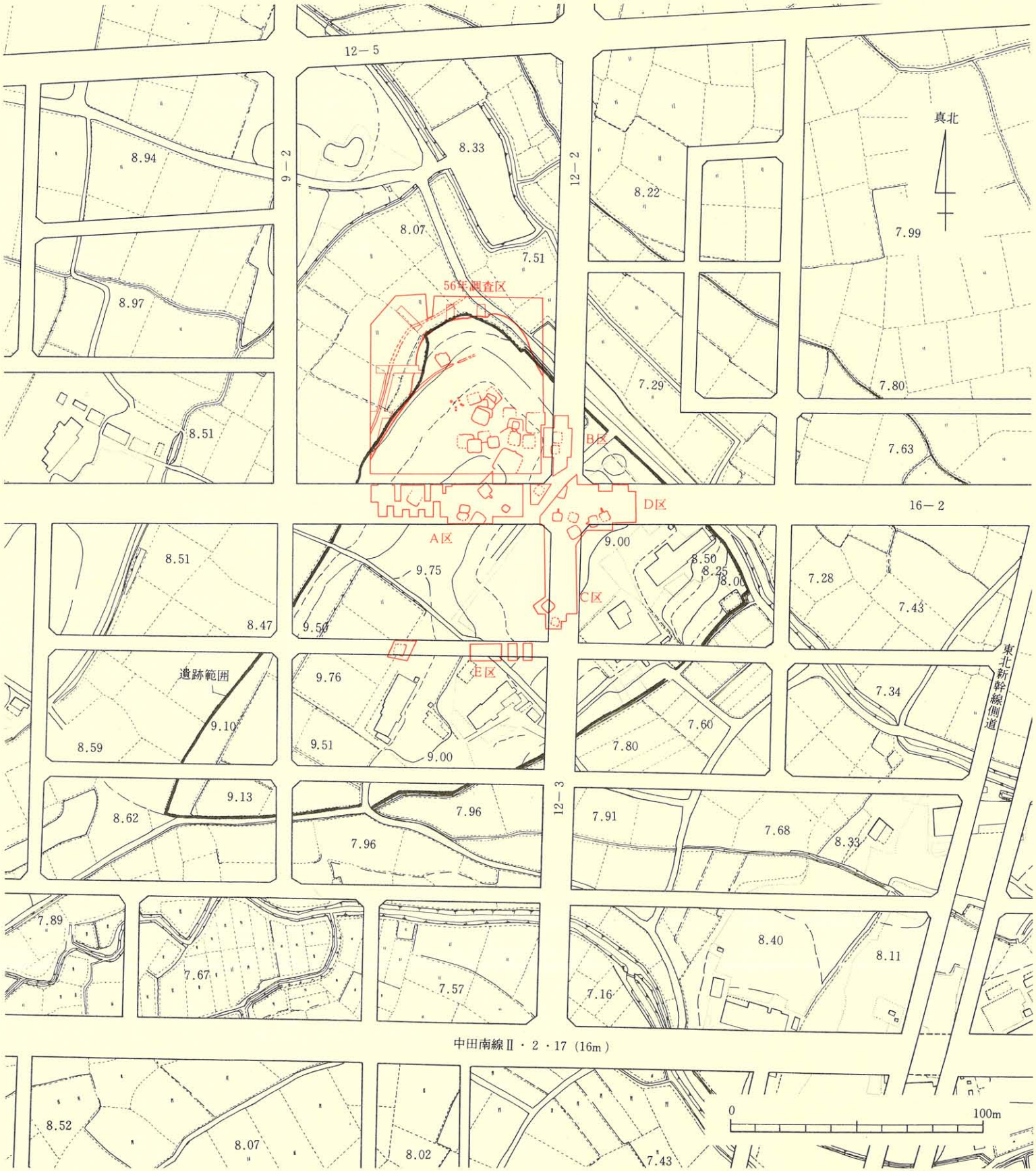
この頃になると、それまでの竪穴住居跡だけで構成される集落から、社会機構の整備発展を物語るかのように、小規模な掘立柱建物を含む集落や、逆に掘立柱建物を主体として構成される遺跡も、仙台市北部の台ノ原、小田原地区の古代窯業関連遺跡にはみられる。また、竪穴住居跡から須恵器の出土が一般化するのもこの時期からである。

以上、栗遺跡周辺の歴史的環境を概観したが、これを要約すると、次のようになる。

①　栗遺跡周辺における歴史は、前期旧石器時代に始源が求められる。旧石器時代以降縄文時代前期までは、生活の基盤は段丘上にあるが、縄文時代中期以降は沖積地の地盤の安定化に伴って、自然堤防等への進出が行われ、生活基盤が拡大する。弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡の分布範囲は、沖積地のほぼ全域に及ぶようになる。

②　名取川下流域は、東北地区第１位・第３位の古墳の存在をはじめ、大小の古墳が多数あり、仙台平野の中心というばかりでなく、東北地方の中心的役割を果していたことが考えられる。この伝統は、やがて多賀城以前の官衙跡である郡山遺跡の形成や、陸奥国分寺・尼寺の建立へと受け継がれていく。

③　栗遺跡の立地する自然堤防の近接地に遺跡が形成されるのは、弥生時代になってからで、安久東遺跡及び清水遺跡が最初である。周辺には方形周溝墓をはじめ、数基の古墳もみられる。



第5図　トレンチ配置・遺構分布図

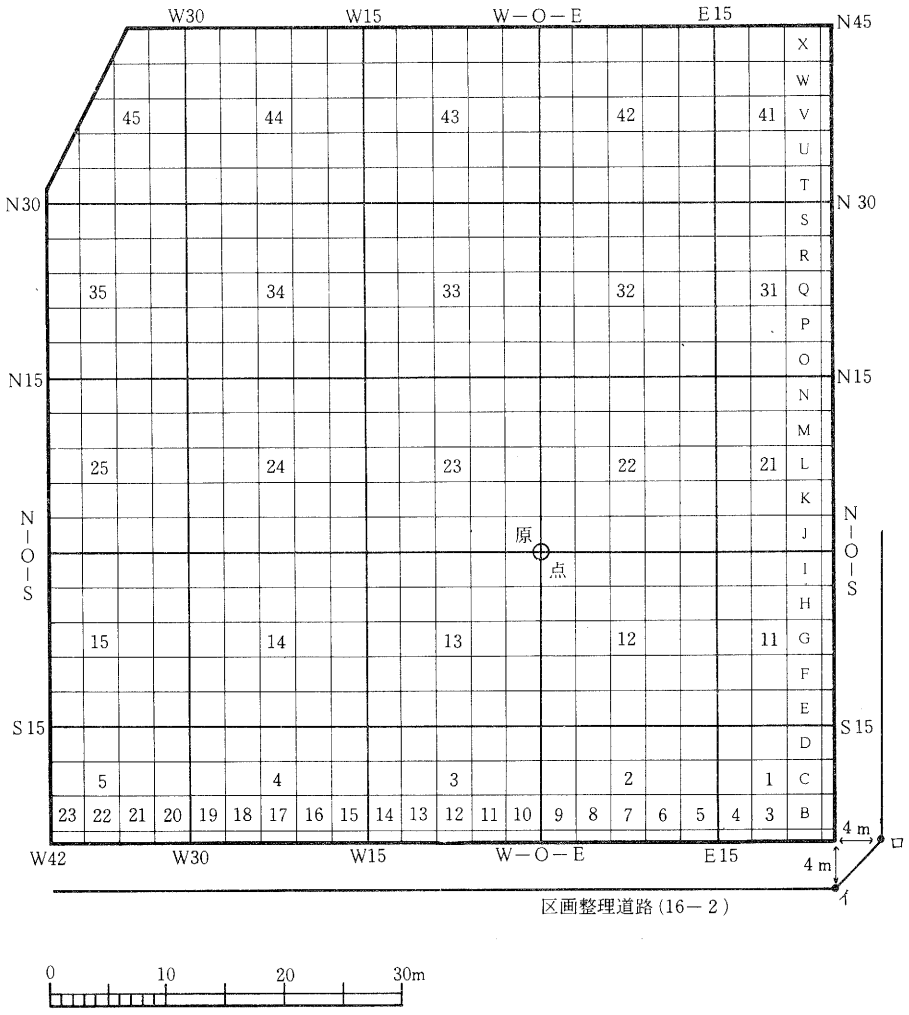
※A区～E区は昭和49・50年調査区

Ⅲ．調査遺構と出土遺物

1．調査と整理の方法

1)　調査区の設定

本調査に係る学校用地は、東西南北を、それぞれ12－２、９－２、16－２、12－５号の区画整理道路に囲まれた17,000㎡の敷地となっている。このうち東南部４分の１弱が遺跡内に入る。（第５図）そこで、調査区は、遺跡の立地する自然堤防と、その周辺の旧河道からなる低湿地帯を一部含む地域を対象とし、南北70m：東西68m（北西角を一部欠く）の調査区を設定した。



第６図　調査区設定・地区割・水系配り図

この調査区の南側は、昭和49・50年の調査におけるＡ区に接し、また東側はＢ区に接する。調査区の設定に当っては、16－２号道路と12－２号道路との北西角の境界杭２本（イ、ロ）からそれぞれ真北、真西に４ｍ離れた所を調査区南東角とした。（第６図）

測量の基準原点は、調査区南東角から真北、真西方向に25m（杭イ、ロからはそれぞれ真北真西方向に29m）の地点とした。測量基準線は、原点より真北に方向を合わせて設定し、北側のラインをＮ－、南側をＳ－、東側をＥ－、西側をＷ－の３ｍを基本単位とする距離数で表した。

調査区は第６図のように、原点を中心とした15m四方の25の大地区割と、調査区東南角を基準とした南北方向Ａ～Ｘ、東西方向１～23のアルファベットと数字を組み合わせた３ｍ四方の小地区割を設定し、遺物の取り上げの地区割とした。

自然堤防面の遺構検出作業の終了後、旧河道面の遺構分布状況を観察するために、放射状に１～５トレンチを設定した。この５トレンチからは、１～４トレンチまで延びる溝が１条検出されただけであった。この溝（４号溝）は２トレンチ以南だけを完掘した。

2)　調査記録の作成

①　実測図

実測図は調査の経過に応じて平面図、断面図、遺物出土状況図を作成した。平面図は遣り方測量による1/20実測図を基本にしたが、遺構の少ないＮ36ライン以北は1/100平板実測図とした。平面図には各ポイントの他に50cm間隔にレベルを記入した。水系の標高は9.60m に統一してある。断面図は、基本層位及び各遺構の層位を示すための土層断面図と、調査後の住居跡のエレベーション図を作成した。その他ピットについても全て土層断面図を作成した。断面図のスケールは1/20に統一してある。特に遺物の出土量の多い遺構及び実測の必要と考えられる遺物に関しては、1/10または1/20の遺物出土状況図を作成した。

②　写真撮影

写真は、遺跡全体、及び各遺構の確認状況、土層断面、（遺物出土状況）・（床面検出状況）、（細部）、完掘状況について撮影した。撮影は、35mm版モノクロ写真：35mm版カラーリバーサル写真（55mm・35mm・28mmレンズ使用）を多用し、必要に応じて６×７版モノクロ写真、カラー写真（75mm・105mmレンズ）による撮影も行った。

3)　遺跡、遺構の図面整理、作成

調査における実測図、及び調査の記録：報告のために集収、作成した各種図面は、下記の番号によって整理、分類した。

Ｏ類（No.1～No.7）－遺跡位置図、遺跡分布図、水糸配図、遺構配置図、地形図、その他

Ⅰ類（No.1～No.84）－1/20平面実測図

Ⅱ類（No.1～No.66）－1/20遺跡、遺構等土層断面図

Ⅲ類（No.1～No.11）－1/10、1/20遺物出土状況図

整理後は、図面番号、図面名称、縮尺、水系標高、年月日、実測者、記載遺構、備考を記した図面台帳を作成した。また、各遺構毎の関係平面図番号、断面図番号、遺物出土状況図番号を記入した遺構別図面台帳も作成した。

4)　遺物整理

出土遺物には、土師器、須恵器、中世陶器、施釉陶器、土製品（土製模造品、紡錘車、小形手捏ね土器）、石製品（玉類、砥石、磨石、その他）、金属製品（刀子、鉄鏃、古銭）等の人口遺物と、骨片、サメの歯、炭化材等の自然遺物がある。これらの遺物のなかで最も多いのは土師器で、全出土遺物の90％以上を占めている。

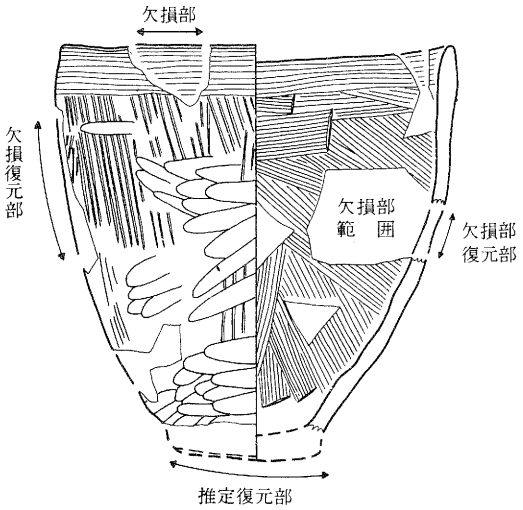
出土遺物は、実測または写真撮影し、報告書に掲載したものについて、第２表の通り前後２つの数字を組み合わせた遺物番号を付して登録した。各遺物については次の点に留意して整理を行った。

第２表　遺物番号一覧表

遺物番号	出土地点・種別		遺物番号	出土地点・種別	
0－1～39	表　土	土師器	33－　1	1号性格不明遺構	土師器
1－1～4	1号住居跡	土師器	41－　1	1号溝	土師器
2－1～3	2号住居跡	土師器	42－　●	2号溝	土師器
3－1～5	3号住居跡	土師器	43－　●	3号溝	土師器
4－1～6	4号住居跡	土師器	44－　●	4号溝	土師器
5－1～10	5号住居跡	土師器	51－　1	1号土壙	土師器
6－　●	6号住居跡	土師器	52－　●	2号土壙	土師器
7－1～8	7号住居跡	土師器	53－　●	3号土壙	土師器
8－1	8号住居跡	土師器	54－　●	4号土壙	土師器
9－	欠　番		55－　●	5号土壙	土師器
10－1	10号住居跡	土師器	56－　●	6号土壙	土師器
11－1	11号住居跡	土師器	57－　●	7号土壙	土師器
12－1～42	12号住居跡	土師器	58－　●	8号土壙	土師器
13－　●	13号住居跡	土師器	59－　●	9号土壙	土師器
14－　●	14号住居跡	土師器	60－　●	1～5トレンチ	土師器
15－　●	15号住居跡	土師器	61－1～5	旧河川跡	土師器
16－　●	16号住居跡	土師器	70－1～25	須恵器	
17－1～6	17号住居跡	土師器	71－1～10	骨　片	
18－1～4	18号住居跡	土師器	72－1～6	炭化材	
19－1～16	19号住居跡	土師器	73－1～25	土製品（小形手捏ね土器・小形土器）	
20－1～4	20号住居跡	土師器	74－1～14	土製品（模造品・その他）	
21－　1	21号住居跡	土師器	75－1～10	金属製品（鉄器・古銭・その他）	
22－1～4	22号住居跡	土師器	76－1～8	石製品	
23－　1	23号住居跡	土師器	77－　●	石　材（カマドの石組等）	
31－1～3	1号性格不明遺構	土師器	78－1～6	中・近世陶磁器	
32－1～5	2号性格不明遺構	土師器	●印は実測図・写真の掲載がないことを示す		

① 土師器

出土した土師器は、¼以上残存し、復元可能なものは全て実測し、また小破片であっても、器形の特徴をよく表す遺物は極力実測した。土師器の実測図の表現技法は第７図及び第８図に呈示した通りである。



第７図　土師器実測図表現法（１）

② 須恵器、中世陶器、施釉陶器

須恵器、中世陶器、施釉陶器は出土量が少なく、全器形を復元できるものは１点もないが、須恵器小破片で特徴のないものを除いて、実測、採拓を行った。

③ 土製品

土製品には、土製模造品（玉・鏡）・紡錘車がある。このほか、小形手捏ね土器と、壺や甕を模した小形土器、異形土器を土製品に含めて整理し、報告書においても土製品の項目において説明されている。土製品実測図の表現技法は土師器に準じている。

④ 石製品、金属製品

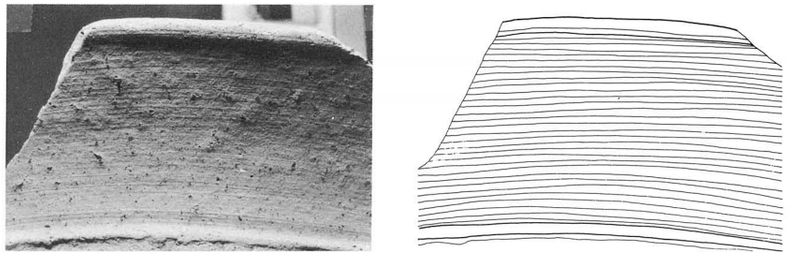
出土量が極めて少数であるため、これらの遺物は全て実測または写真撮影を行った。

⑤ 自然遺物

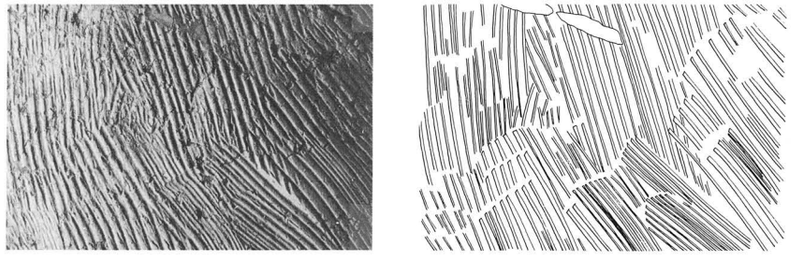
自然遺物中で実測したものはサメの歯だけである。骨片も各所から出土したが、全て小片であるため、写真による記録とした。

5) 図面、遺物の収納、保管

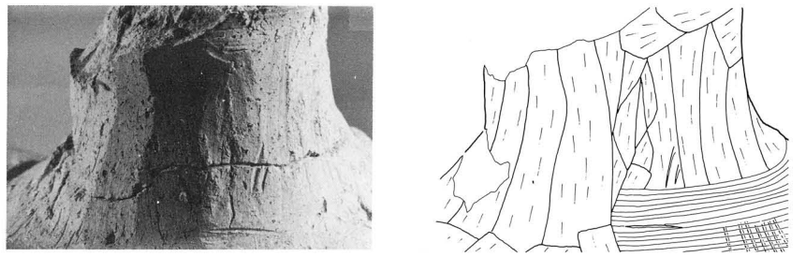
出土遺物及び作成図面は、全て仙台市教育委員会に保管してある。出土遺物は、土師器については出土地点（遺構）別に、その他は種別ごとにまとめてコンテナに収納した。収納に際しては、コンテナ毎の収納遺物台帳を作成し、コンテナには通し番号と出土地点（遺構）及び種別毎の遺物番号の前段を付してある。



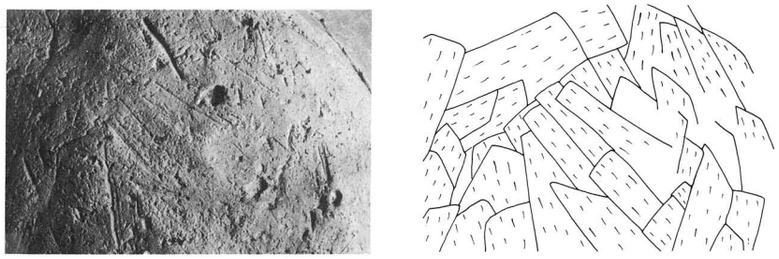
1．ヨコナデ(外面)No. 4 － 2



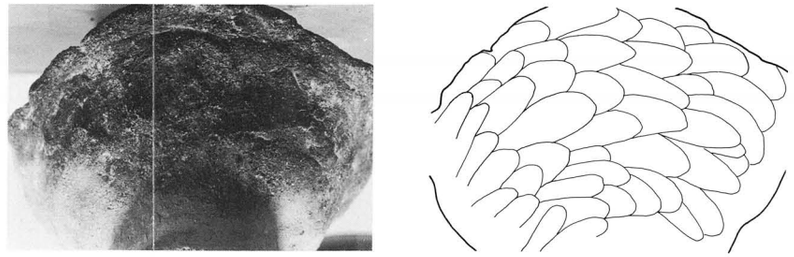
2．ハケメ(外面)No. 2 － 3



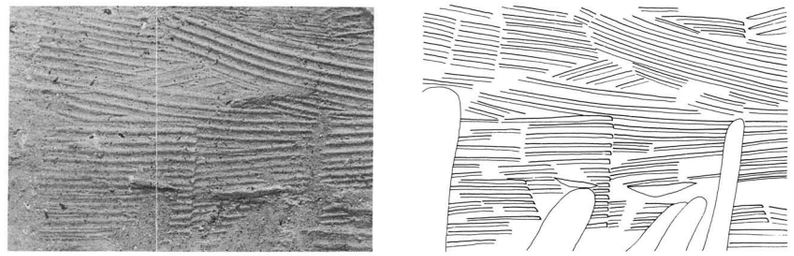
3．ヘラケズリ(外面)No. 0 －19



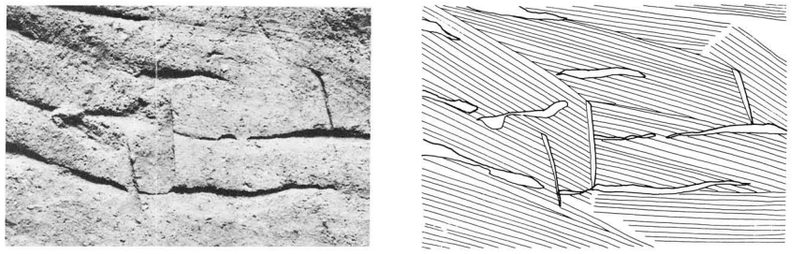
4．ヘラケズリ(外面)No. 4 － 1



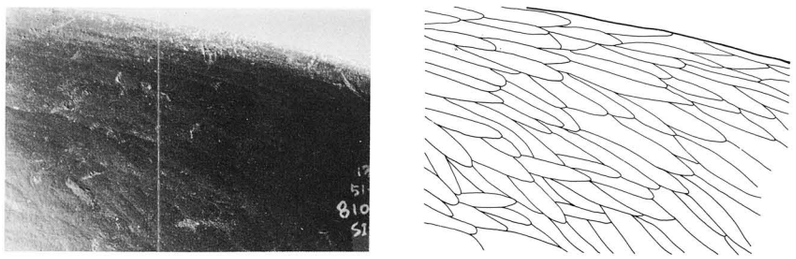
5．ナデ(外面)No.73－ 2



6．ハケメ(内面)No.12－27



7．ヘラナデ(内面)No.12－31



8．ヘラミガキ(内面)No.12－ 8

第８図　土師器実測図表現法（２）

6)　報告書の作成

①　遺構名の変更

調査及び整理の進展により、欠番となった住居跡１軒と、消滅または名称を変更した土壙がある。

〔９号住居跡〕……欠番

９号住居跡は、後述するように12号住居跡の一部であったことが判明したため欠番となり、その状況については12号住居跡において説明してある。

〔土壙〕……下記の通り変更

１号土壙－２号住居跡の一部	12号土壙－８号土壙と改称
８号土壙－消滅	13号土壙－９号土壙と改称
９号土壙－15号住居跡の一部	14号土壙－23号住居跡１号土壙
10号土壙－消滅（15号住居跡の汚れか？）	15号土壙－23号住居跡２号土壙
11号土壙－消滅	16号土壙－１号土壙と改称

②　実測図の縮尺

住居跡実測図、性格不明遺構は1/60、土壙は1/40、溝は1/40と1/60に、出土遺物は1/2と1/3に統一した。その他の図面はその用途に応じて縮尺した。

③　実測図の表現

遺構、平面実測図は上場を太線、下場を細線で表現し、攪乱部の傾斜は┬┬で表した。攪乱(断面図中)、石、焼土、炭化材（断面図中）については第９図の様にスクリーン・トーンを使用している。住居跡等から多量の遺物や炭化材が出土している場合には、遺構実測図の上に赤色で合成してある。

遺物実測図においては、復元実測する場合、半径が不明確なものは中心線を破線にしてある。外形線で、一部が欠損しその部分を復元した場合は、その両端を実存する部分から離してある。また、欠損部はその範囲を細線で囲んである。推定復元した場合は破線で表した。1/4以下の破片を復元実測した場合は、実測範囲を囲んである。遺物実測中、黒色処理されている土器については、斑状のスクリーン・トーンを貼り付けてある。

④　観察表、集計表の記載方法

住居跡の観察表は、次の基準によって記入した。

○規模は、東西及び南北間で計測できる最大値を計り、壁が欠損し大きさが不明な場合は、床面または残存する壁の長さを計測して、その数値を（　　）で括ってある。

○方向は、真北を基準とする東西の振れで測定している。

○カマド燃焼部の規模は、縦（住居跡壁から焚口までの長さ、または残存長）×横（カマド

本体の残存幅）で計測した。煙道は住居壁上面からの長さを計測した。

○主柱穴は、配置の略図とそのPit番号を記入し、実際に発見されているものを●印により、推定される柱穴の位置を○印で記してある。

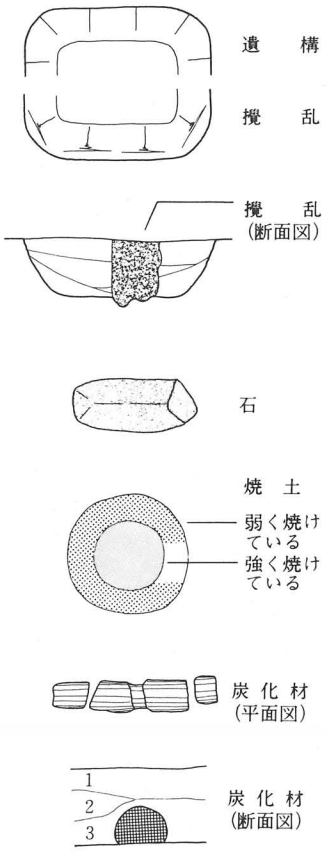
○重複関係については、古いものから順に記し、時間の経過を→で表してある。

遺物観察表は、次の基準で記入した。

○調整については、数種類または数段階に行われている場合は、主調整または最終調整についてのみ記入した。

○法量の計測においては、実測図により、最も大きな部分で計測した。一部欠損により実際の大きさを復元できないものは、残存部を計り、（　）で括ってある。坏の底部を計る場合は、底部と体部、または底部と口縁部を画する変曲点で計測した。

○残存状況については、大形の破片は、土器全体での残存割合を分数で表したが、口縁や底部等の部分的小破片は、各部位における残存割合を分数で表わし、この場合には（　）で括った。



第９図　遺構実測図表現法

遺物集計表において、坏としたものには高坏が含まれ、その他器種の不明確な破片は、全て甕類として分類した。

⑤　出土遺物実測図及び報告について

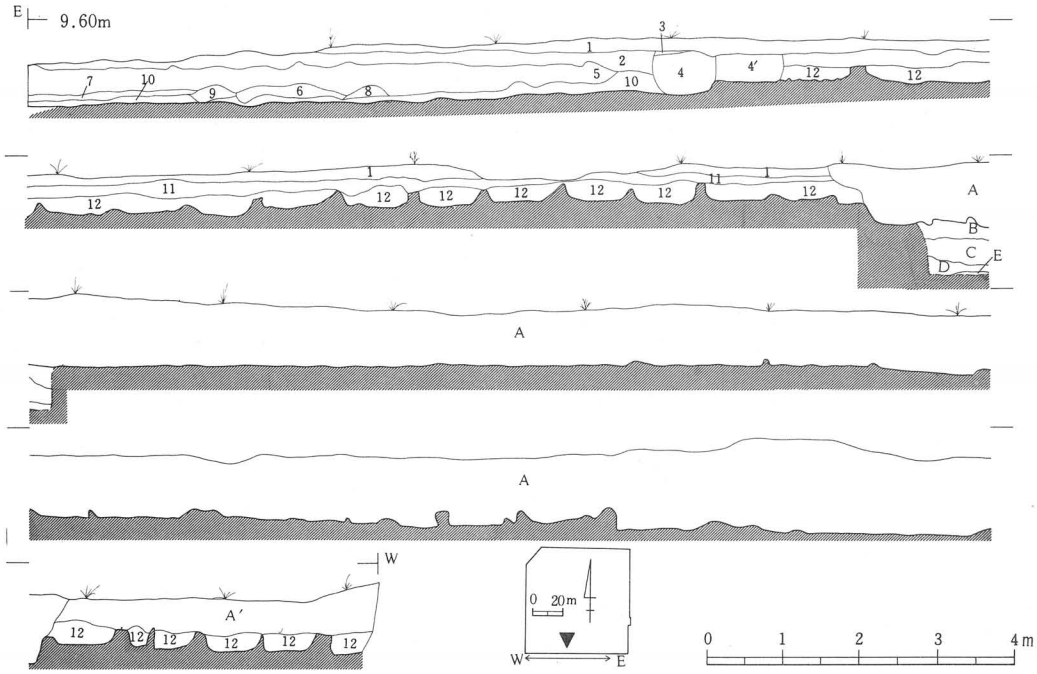
住居等の遺構からの出土遺物実測図は、土師器だけとし、それ以外の須恵器、中世陶器、施釉陶器、土製品、金属製品、自然遺物については、種別毎にまとめてある。

２．基本層序と遺構確認面

調査区は、畑地となっていた自然堤防面と水田となっていた旧河道面、および両者を結ぶ緩斜面からなっていた。それぞれの部分における基本層序は次のとおりである。

1)　自然堤防面

調査区の大半は自然堤防面が占める。調査区南壁の土層断面に示したように、遺構確認面までは、40～90cm程ある。この間の土層は、にぶい黄褐色から暗褐色のシルトまたは砂質シル



層No	土色	土性	その他				
1	10YR4/4褐色	シルト		9	10YR4/4褐色	砂質シルト	
2	10YR3/4暗褐色	シルト		10	10YR4/4褐色	シルト	炭化物を斑状に含む
3	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	黒褐色土のブロックを含む	11	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
4	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト		12	10YR3/4暗褐色	シルト	
4′	10YR4/4褐色	シルト		A	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	ユンボによる天地返し
5	10YR4/4褐色	シルト		A′	10YR4/4褐色	砂質シルト	ユンボによる天地返し
6	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む	B	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質砂	地山Ⅰ
7	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む	C	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	地山Ⅱ
8	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	砂礫を含む	D	10YR4/4褐色	砂	地山Ⅲ
				E	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	地山Ⅳ

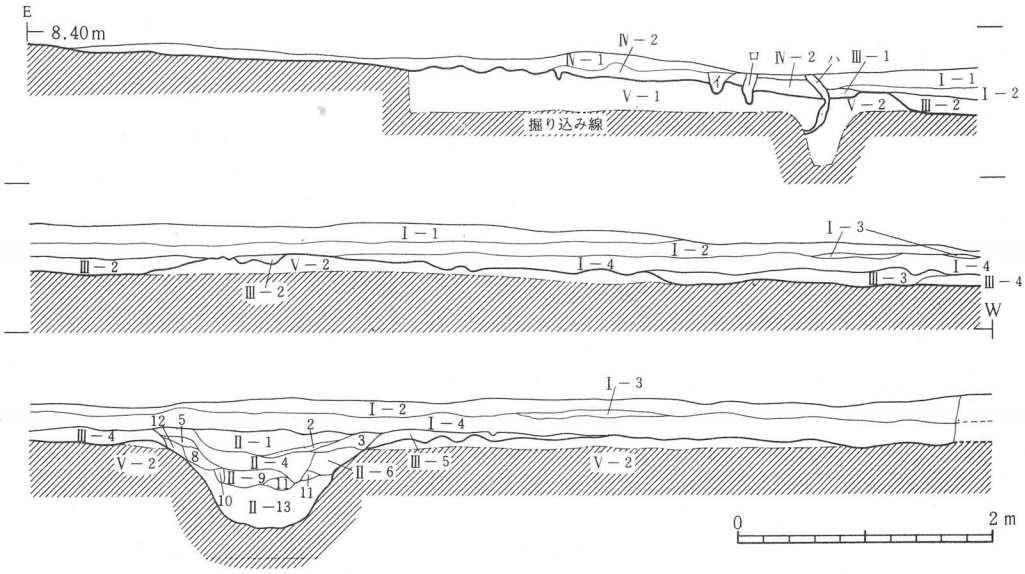
第10図　調査区南壁土層断面図

トである。土層は細分することはできるが、どの層も人力または重機（ユンボ）による著しい攪乱を受けているため、確認面より上部の層は全て表土として大別された。第10図中10層は東西方向の、12層は南北方向の人力による天地返し、A－A′層は重機による天地返しの状況を示す。

自然堤防上の確認面は、天地返しの他にも、土取りやゴミ穴による攪乱も受けているために各遺構は大小の差はあるものの、いずれも削平され、確認面にはかなりの凹凸がある。また、調査区の南西角付近などは、深い天地返しのために遺構の確認は困難であった。確認面を巨視的に見ると、調査区のほぼ中央N－O－Sライン付近が最も高く、北側は徐々に低くなり、旧河道へと移行する。南側もわずかに低くなるが、自然堤防上のわずかな起伏は、天地返しの深さの差によるものであろう。

確認面の土層は、砂質シルト（褐色）層を主体とするが、部分的に砂層または砂礫層が露出

する部分もある。断面観察の結果、第12図のように、砂層、及び砂礫層は、河床堆積物の様相を呈していた。また、地山層と考えていた層からも、＊印で示した地点から、栗遺跡が形成される以前に、土砂と共に流れて来たと考えられる摩滅した古式の土師器（塩釜式または南小泉式）も発見された。これは、５世紀以降にも自然堤防上に小規模な河川の通った可能性を示唆するものと思われる。(図版37)



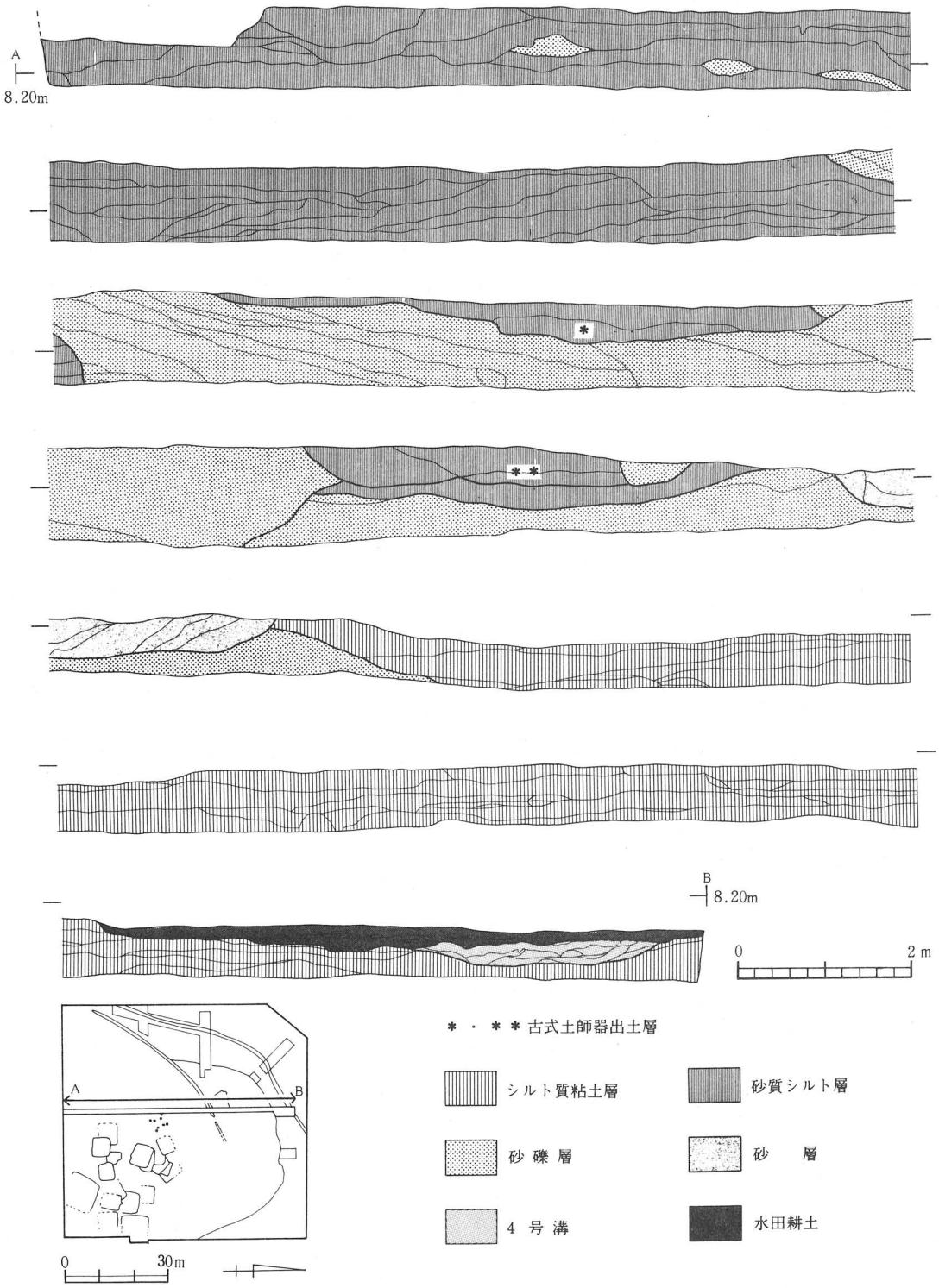
層	No	土色	土性	その他	
Ⅰ－1	2.5 Y 5/3暗 灰 黄 色	粘土質シルト			
	2	10YR 5/2灰 黄 褐 色	粘土質シルト		旧水田
	3	10YR 5/2灰 黄 褐 色	粘土質シルト	酸化鉄を含む	
	4	10YR 3/1黒 褐 色	シルト質粘土		
Ⅱ－1		10YR 3/1黒 褐 色	シルト質粘土		
	2	10YR 3/2黒 褐 色	粘土		
	3	10YR 3/2黒 褐 色	粘土		
	4	10YR 3/2黒 褐 色	砂質粘土		
	5	2.5 Y 3/1黒 褐 色	砂質粘土		
	6	2.5 Y 3/1黒 褐 色	粘土	植物遺体を多量に	4号溝
	7	10YR 4/1灰 色	粘土		
	8	2.5 Y 3/1黒 褐 色	粘土	含む	
	9	10YR 3/2黒 褐 色	粘土		
	10	10YR 3/1黒 色	粘土		
	11	10YR 3/2黒 褐 色	粘土		
	12	10YR 3/2黒 褐 色	粘土		
	13	10Y 3/1オリーブ黒色	粘土		

Ⅲ－1	10YR 5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト		
2	10YR 5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト		
3	10YR 3/1黒 褐 色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土を粒状に含む	
4	10YR 5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色土を含む	
5	10YR 5/2灰 黄 褐 色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土と黒褐色土粒の混合層	
Ⅳ－1	10YR 3/2黒 褐 色	シルト		
2	10YR 3/2黒 褐 色	シルト	褐色土を粒状に含む	
Ⅴ－1	10YR 5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト		地山
2	10YR 5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土		地山
イ	10YR 3/3暗 褐 色	シルト	根による攪乱	
ロ	10YR 3/3暗 褐 色	シルト	根による攪乱	
ハ	10YR 5/6褐 色	粘土質シルト	地山間に挟まれた強い酸化土層	

第11図　２トレンチ南壁断面図

2)　旧河道面

旧河道面には、20cm前後の近年までの水田耕土層の下に、2～3 枚の旧水田耕土層があり、その下は、地山層に黒褐色の土を含んだ、漸移層的な粘土質の土が層厚10cm前後に堆積する。更にその下が、自然堤防上の確認面の土層に続くにぶい黄褐色土層（地山）となる。(第11図)



第12図　調査区縦断地山断面図

但し、自然堤防の地山層と、旧河道の地山層との間には、自然堤防の境界を示すように、強く酸化した土層が帯状に走っている。

3)　自然堤防斜面

自然堤防斜面の傾きは、西辺の中央付近が急なほかは、北西から北東に至るまで緩やかな斜面となって旧河道へと続く。この部分も、多くは自然堤防と同様の攪乱を受けており、良好な状況で基本層を確認することはできなかったが、自然堤防の北西端に当る斜面に、部分的にではあるが、土師器の細片を含む黒褐色のシルト層が確認されている。(第11図) この層は、17号住居の西側の部分と、2号性格不明遺構の北側とに分けられるが、17号住居西側の部分では、一部17号住居跡の堆積土を覆っていた。

3．遺構の分布状況

今回の調査において発見された遺構には、竪穴住居跡22軒、土壙9基、溝4条、性格不明遺構3基がある。それぞれの遺構の分布状況を概観すると次のとおりである。(第13図)

住居跡は、自然堤防の中央に近い調査区の南東部に集中して分布する。この部分の南側と東側においても、昭和49・50年の調査で、多数の住居跡が発見されている。住居跡の集中区では、数時期の重複が認められた。集中区以外では、自然堤防の西北端に近い斜面において1軒の住居跡が発見されただけである。

土壙は、住居跡の分布範囲と一致し、自然堤防の中央付近に集中し、周辺部にはみられない。2基あるいは3基が比較的接近して分布する傾向にある。

溝は、自然堤防縁辺から斜面にかけてのものが3条と、旧河道面において自然堤防に平行する溝が1条検出されている。

性格不明遺構については、後で詳述するが、 自然堤防北端に位置するSX2と住居跡集中区に位置するSX1・3がある。

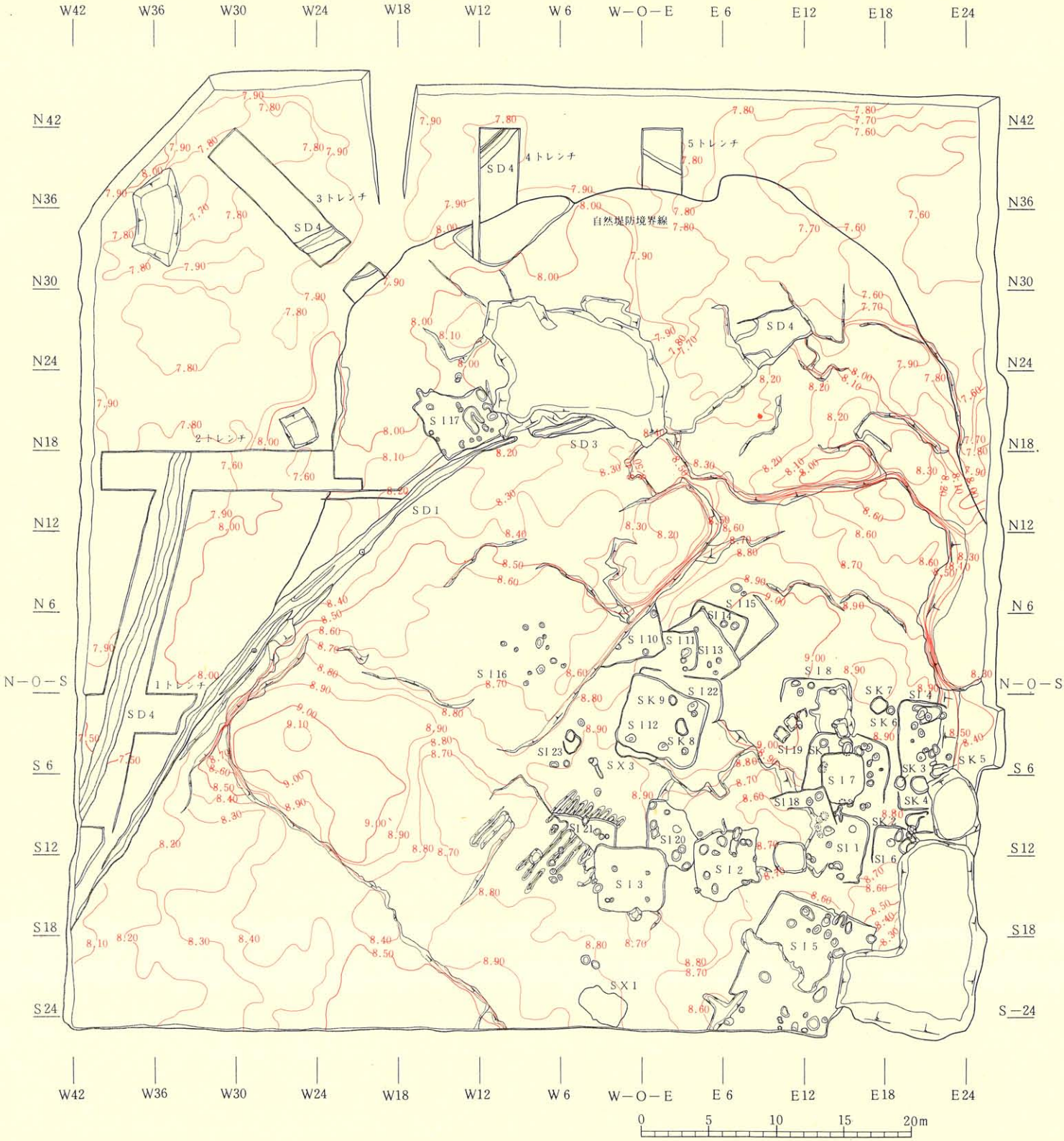
4．住居跡とその出土遺物

1号住居跡（SI 1）

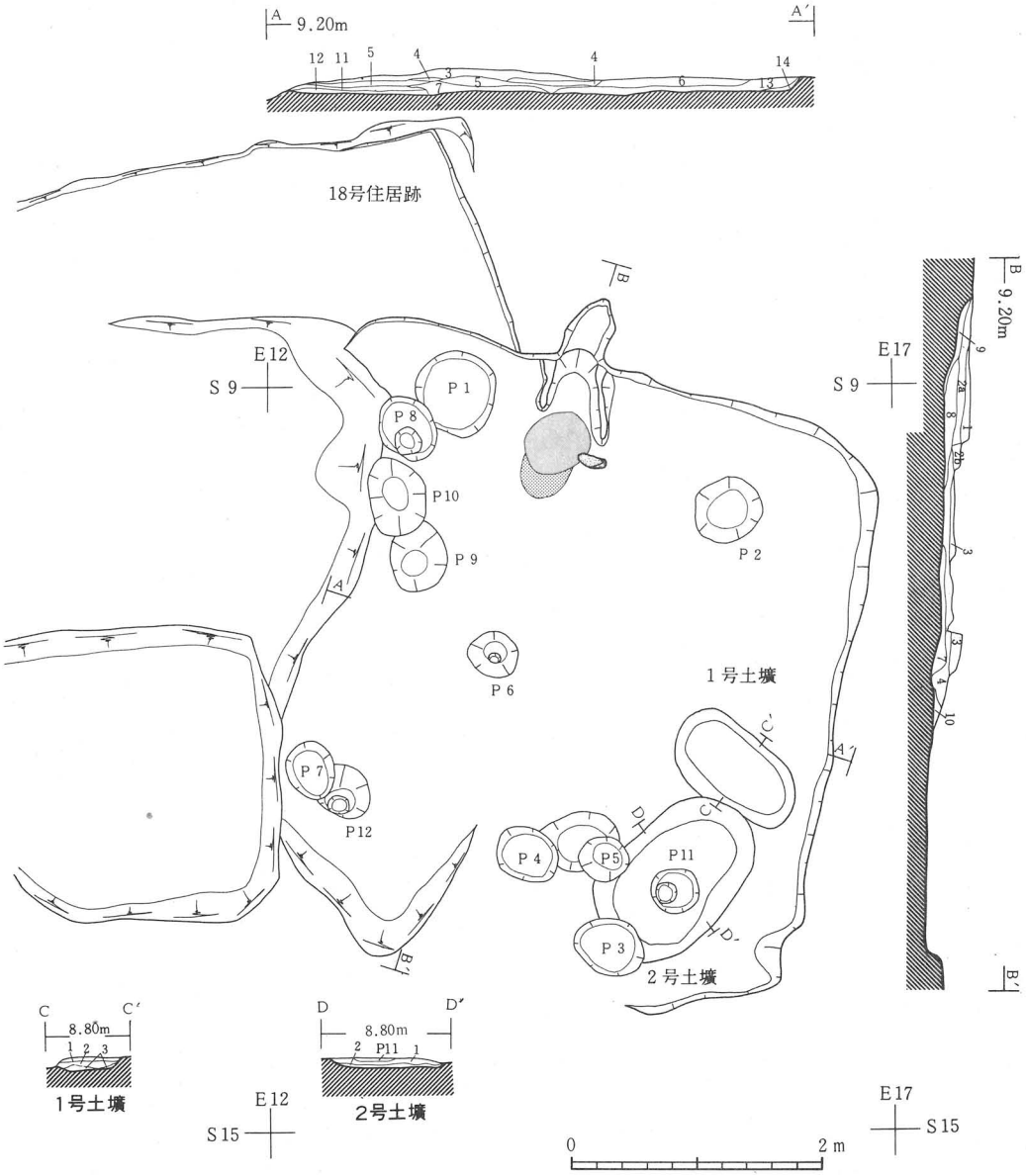
〔平面形・保存状況・重複〕南辺と西辺が削平されているが、隅丸方形を呈する住居跡である。北西角付近は、1号住居跡より床面レベルの高い18号住居跡によって切られている。

〔規模〕西辺及び南辺がやや不明確なため、正確な寸法ではないが、南北4.91m、東西4.49mを計る。

〔堆積土〕堆積土は、14層に細別されたが、概ね、褐色から暗褐色の砂質シルト層である。堆



第13図　栗遺跡遺構配置図　　※経緯の線は真北線を基準としている



層No	土　　色	土　性	そ　の　他	7	10ＹＲ3/4暗　褐　色	砂質シルト	焼土、暗赤褐色土を含む
1	10 ＹＲ5/8黄　褐　色	砂質シルト		8	10ＹＲ3/3暗　褐　色	砂質シルト	焼土を含む　煙道部埋土
2 a	10 ＹＲ5/4褐　　色	砂質シルト		9	10ＹＲ5/6褐　　色	砂質シルト	焼土を含む　煙道部埋土
2 b	7.5ＹＲ3/3暗　褐　色	砂質シルト		10	10ＹＲ5/6褐　　色	砂質シルト	
3	10 ＹＲ3/4暗　褐　色	砂質シルト		11	10ＹＲ3/2黒　褐　色	砂質シルト	
4	10 ＹＲ3/4暗　褐　色	砂質シルト	炭化物を含む	12	10ＹＲ5/4褐　　色	砂質シルト	
5	10 ＹＲ3/4暗　褐　色	砂質シルト		13	10ＹＲ5/4褐　　色	砂質シルト	10ＹＲ2/3黒褐色土を含む
6	10 ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト		14	10ＹＲ5/4褐　　色	砂質シルト	

1号土壙断面

層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ3/4暗褐色	砂質シルト	
2	10ＹＲ5/4褐　色	砂質シルト	
3	10ＹＲ5/6褐　色	砂質シルト	

2号土壙断面

層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ5/4褐　色	砂質シルト	
2	10ＹＲ5/6褐　色	砂質シルト	

第14図　1号住居跡実測図

第3表　1号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸（4.91m） 東西軸（4.49m） 面積（22.0459㎡）	南北軸 N－11°－E 東西軸 N－75°－W	東9～11cm 西 南1～3cm 北5～9cm	位置　北壁中央付近 燃焼部　82×60 煙道　（60×35）cm	なし 床面標高 8.70m	●P8　●P2 ●P7　●P5	SI18 ↓ SI1	西壁削平

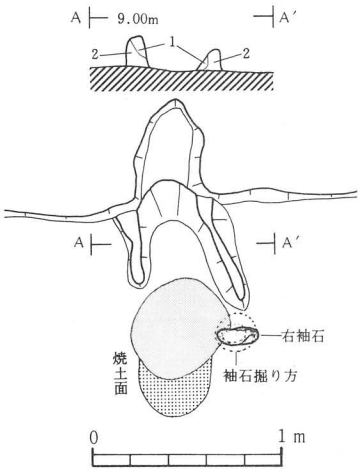
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	円形	円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形
規模	70×65	56×52	56×46	50×41	37×36	41×36	46×39	55×46	56×47	64×48	38×37	46×41
深さ	17	14	16	19	29	39	23	25	32	25	17	37
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

（cm）

積土は厚い所で20cmあり、層中より土師器細片が多数出土した。

〔壁・床〕床面はほぼ平担で、残存する壁の立ち上がりは緩やかである。

〔柱穴〕床面では、12個のPitが確認された。このうち、P.2・5・7・8が主柱穴と思われるが、P.2—P.5は、東辺と平行していないので、P.2—P.11が組むことも考えられる。また、P.12はP.7に先行する柱穴とも考えられる。P.2—P.8は心々距離で270cm、P.5—P.7は250cm、P.11—P.12は275cm、P.2—P.5は295cm、P.2—P.11は305cm、P.8—P.7は300cm、P.8—P.12は295cmを計る。P.2—P.8（北列）を基準とした場合、西列及び東列はそれより30cm前後長い。南列は、どの組み合わせを取るかによって変化する。



層No.	土色	土性	その他
1	10YR4/4褐色	砂質シルト	
2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	炭化物を混入

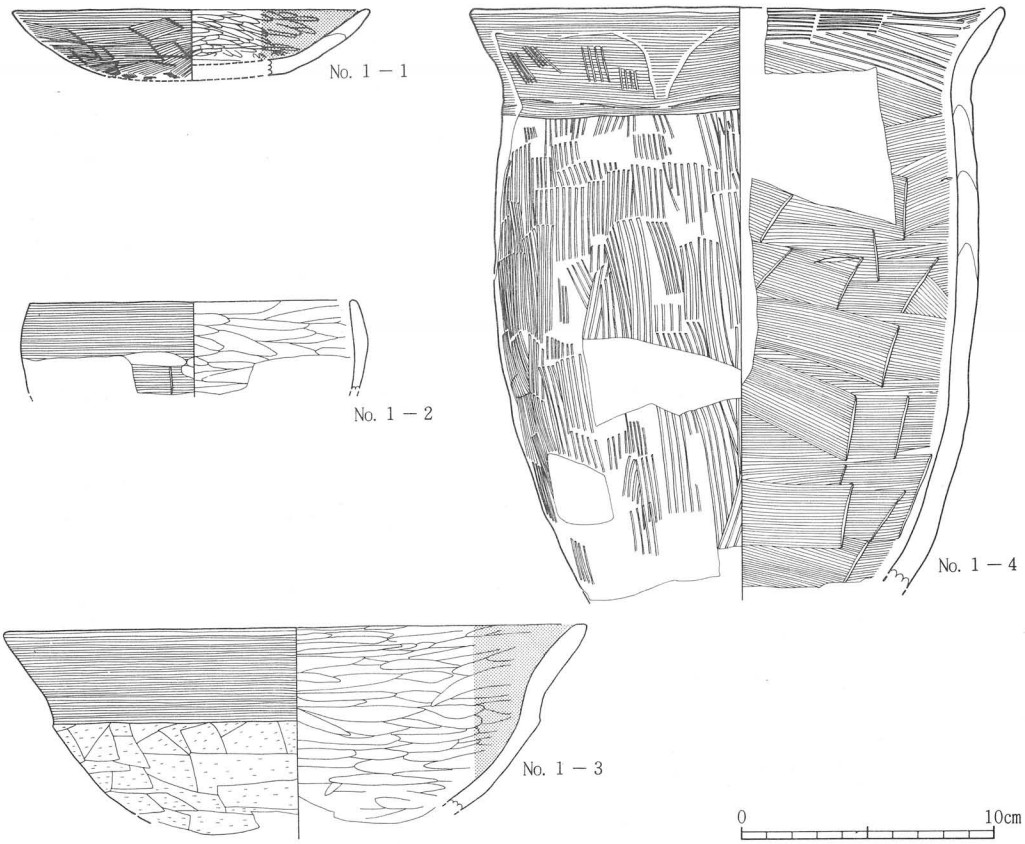
第15図　1号住居跡カマド実測図

〔カマド〕住居北辺の中央よりやや西に偏した位置にある。両袖とも砂質シルトで築かれた基底部だけが残存する。右袖の前方には、焚口部に置かれた袖石が残っている。石の下には浅い掘り方がある。袖右から住居跡の北壁までは82cmあり、残存する袖の幅は60cmを計る。袖石の右側は、直径50cm程の範囲が強く焼けている。北壁からは約50cmの所まで、幅35cmの煙道底面が残っている。

〔その他の施設〕南東角付近で、P.5・11に先行する重複する2基の土壙（古いものから1号・2号）が検出された。どちらも平面形は楕円形で、浅い舟底状を呈する。1号は長軸112cm、短軸63cm、深さ21cmを計り、2号は長軸142cm、短軸92cm、深さ8cmを計る。この2基の土壙は、P.5及びP.11との関係により、SI1に先行する可能性がある。

〔遺物出土状況〕遺物は全て破片となった状態で出土した。

堆積土中からは369点と多くの土師器片が出土じている。床面からは土師器坏４点、甕類27点が出土している。出土土器片のうち実測可能なものは４点である。遺物の出土状況に規則性は認められない。



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
1—1	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ヘラナデ	ミガキ		ミガキ	(2.8)	14 0	7.4	⅓	2 A	
1—2	土師器	坏小	堆積土１層	ヨコナデ		ヘラナデ・ナデ	ミガキ		ミガキ	(3.7)	12.8		(⅓)	2 A	
1—3	土師器	坏大	Ｐ１	ヨコナデ		ヘラケズリ	ミガキ		ミガキ	(8.3)	22.9	19.2	⅖	3	38
1—4	土師器	甕Ⅱ大	床面	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ	ヘラナデ		(23)	20.6		¾	2 B	38

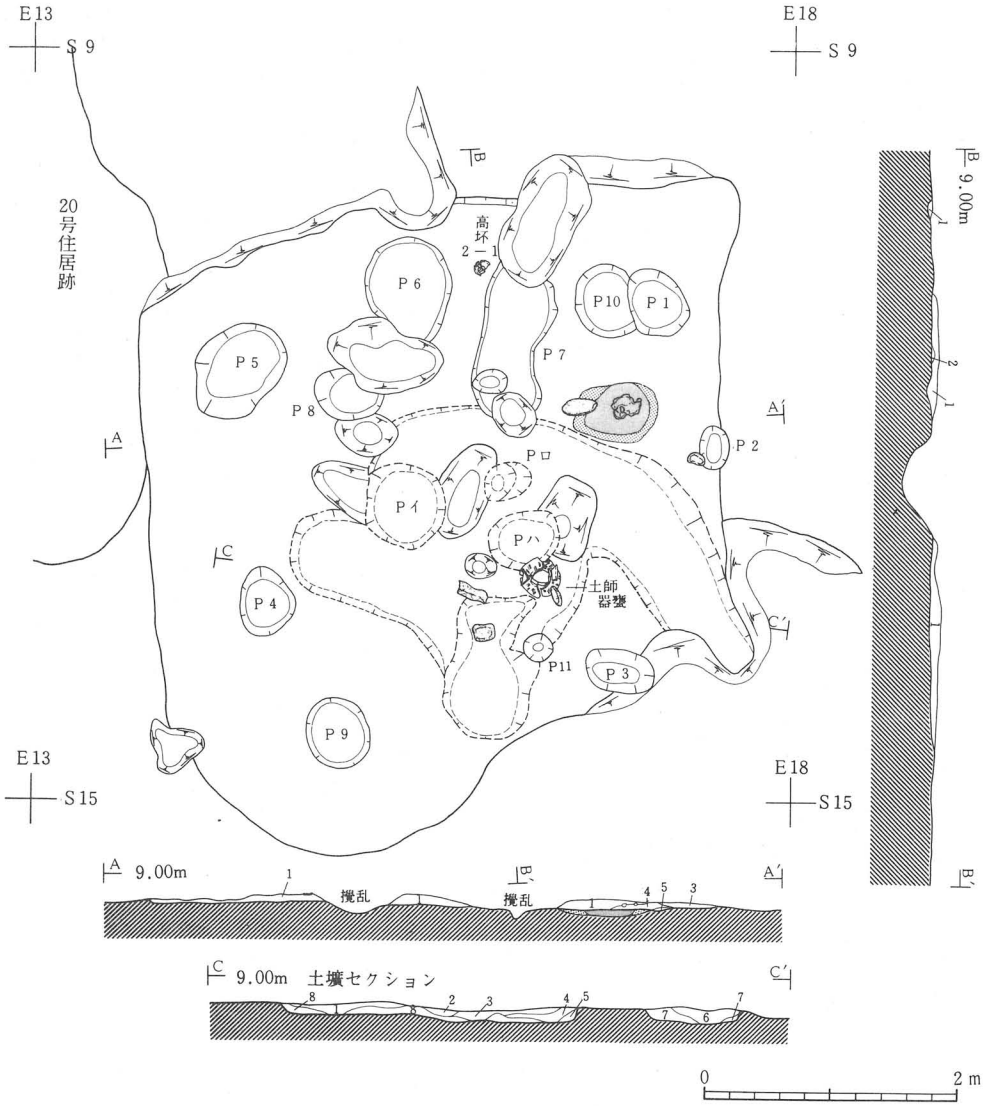
第16図　１号住居跡出土土師器

第４表　１号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中		ピット内		床面		カマド袖	計
種別	土師器							
器種	坏	甕類	坏	甕類	坏	甕類	甕類	
個体・破片数	15	353	3	49	4	27	9	460
実測点数	1		1		1	1		4

２号住居跡（SI　2）

〔平面形・保存状況・重複〕削平と土壙状の攪乱坑によって壁面は全て失なわれ、床面と堆積土の最下層がわずかに残っている状態で検出された。特に北辺と南辺の削平が著しい。このため平面形は、残存する床面の状況によって判断せざるを得ないが、西辺と東辺が平行しているので、方形あるいは長方形を呈すると考えられる。北



2号住居跡土層註記

層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10 YR3/4暗褐色	砂質シルト	骨片、土師器を少数含む
2	10 YR5/4褐　色	砂質シルト	
3	10 YR5/4褐　色	砂質シルト	暗褐色シルトブロックを含む
4	7.5YR3/4暗褐色	砂質シルト	焼土をブロック状に含む
5	10 YR5/4褐　色	砂質シルト	暗褐色砂質シルト小ブロックを含む

土壙断面

層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10YR5/4褐　色	シ　ル　ト	土師器片を含む
3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	土師器片を多く含む
4	10YR5/4褐　色	砂質シルト	砂粒を多量に含む
5	10YR5/4にぶい黄褐色	砂	
6	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
7	10YR5/3にぶい黄褐色	砂	
8	10YR5/4褐　色	砂	

第17図　2号住居跡実測図

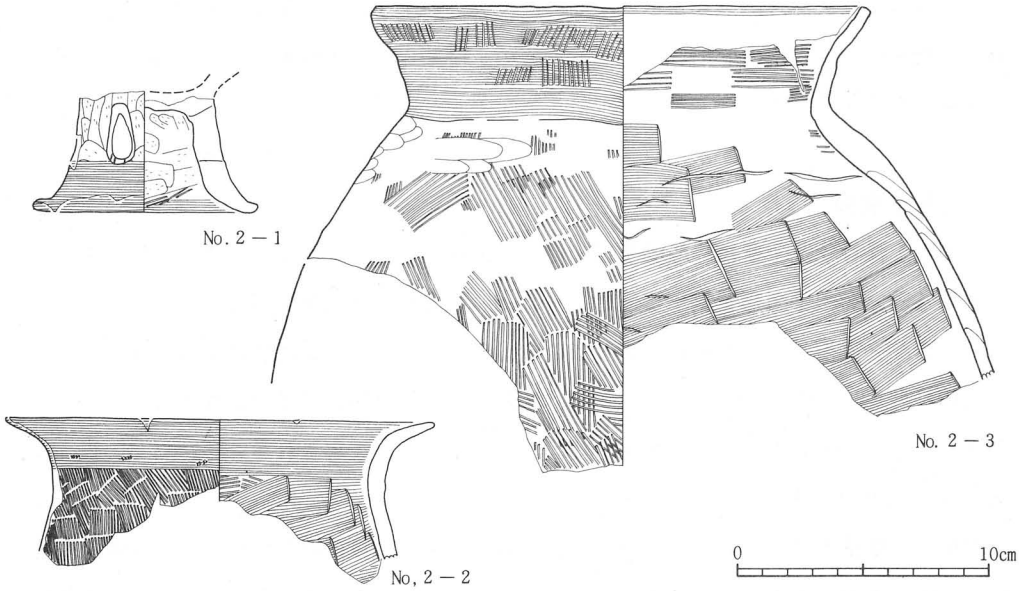
西側の床面は、20号住居跡の床を切っているように観察された。

第5表　2号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸(15.0m) 東西軸(4.55m) 面積(22.75㎡)	南北軸 N－4°－W 東西軸 N－？－	東 西 南 北1cm	位置　東壁中央付近 燃焼部　―― 煙道　――	なし 床面標高 8.73m	● P5　● P10 ● P4　● P3	SI20 ↓ SI2	西半削平 南半削平

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11
平面形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	不整楕円形	楕円形	円形	円形	円形
規模	60×47	34×29	56×34	56×45	88×62	86×70	126×52	56×46	58×50	60×54	24×24
深さ	13	12	17	9	13	6	3	14	5	10	不明
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	不明	不明

(cm)



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
				脚柱部	脚裾部	その他	脚柱部	脚裾部	その他	脚径	脚柱径	脚裾径			
2－1	土師器	高坏	堆積土	ケズリ	ヨコナデ	1孔スカシ	ケズリ	ヨコナデ		4.5	5.7	8.9	(完)	3	38
2－2	土師器	甕Ⅱ		ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(5.4)	16.9		(¼)	1	
2－3	土師器	甕Ⅰ小	床面	ヨコナデ	ハケメナデ		ハケメ	ヘラナデ		(18)	19.8		½	2A	38

第18図　2号住居跡出土土師器

〔規模〕壁がないので、住居跡の規模は不明であるが、現存する床面の範囲は、南北5.00m、東西4.55mを計る。

〔床面〕床面は、中央部がわずかに高くなっていて、焼土・炭化物による汚れが観察された。床面上には、少量の土師器片と石が散布していた。

〔柱穴〕床面においPitは11個検出された。主柱穴としては、配列関係からP.3・4・5・10が考えられる。

第6表　2号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中					ピット中		床面		土壙		計
種別	土師器			須恵器・坏	輪状石製品	土師器		土師器		土師器		
器種	坏	甕類	手担ね			坏	甕類	坏	甕類	坏	甕類	
個体・破片数	20	125	1		1	1	30		5	12	159	354
実測点数	1	1	1	2	1				1			7

P.10—P.3は290cm、P.5—P.4は190cm、P.10—P.5は290cm、P.3—P.4は285cmを計り、柱穴の配置は台形を呈す。

〔カマド〕カマドは、燃焼部と考えられる焼土面が、東壁中央付近に検出された。直径40cmの範囲が強く焼け、周辺部はわずかに焼けていた。中央部には硬く焼けた粘土があり、また焼土面上に焚口の袖石と思われる長円形の石が転倒していた。袖・煙道とも残存しない。

〔その他の施設〕床面精査の結果、中央部から東壁にかけて不定形の土壙が検出された。土壙の深さは10cm前後で、底面はほぼ平坦である。この底面においてもイ～ニのPitが検出された。

〔遺物出土状況〕堆積土中から土師器の破片多数のほか、須恵器片2点が出土した。土師器片には1孔透かしの高坏脚部がある。床面の遺物には、下半部を欠損する甕が1個体出土した他、輪状石製品片が1点出土している。土壙からの土師器片の出土量も多く、土壙のP.ハからはサメ歯が1点出土した。

3号住居跡（Si 3）

〔平面形・保存状況・重複〕西壁及び南壁が天地返しによって削平されているが、床面の残存状況から、方形の平面形を呈すると考えられる。北東及び北西角周辺は、それぞれ20号住居跡21号住居跡と重複し、両住居跡を切っている。床面レベルは、両住居跡よりも深い。

〔規模〕西壁、南壁が失われているが、北西及び南東の角の一部分が検出されているので、各壁は残存する床面のラインと大きな差はなかったものと推定される。残存部での範囲は、南北4.76m、東西5.18mを計る。

〔堆積土〕堆積土は、保存の良い所で23cm程ある。層は11層に細別されるが、4層以上とそれ以下の層に大別できる。1～4層はにぶい黄褐色の砂質シルトで、それ以下の層は炭化物を多く含む暗褐色から黒褐色の砂質シルトを主体としている。大別層の境には、特に小さく割れた礫の出土が目立った。

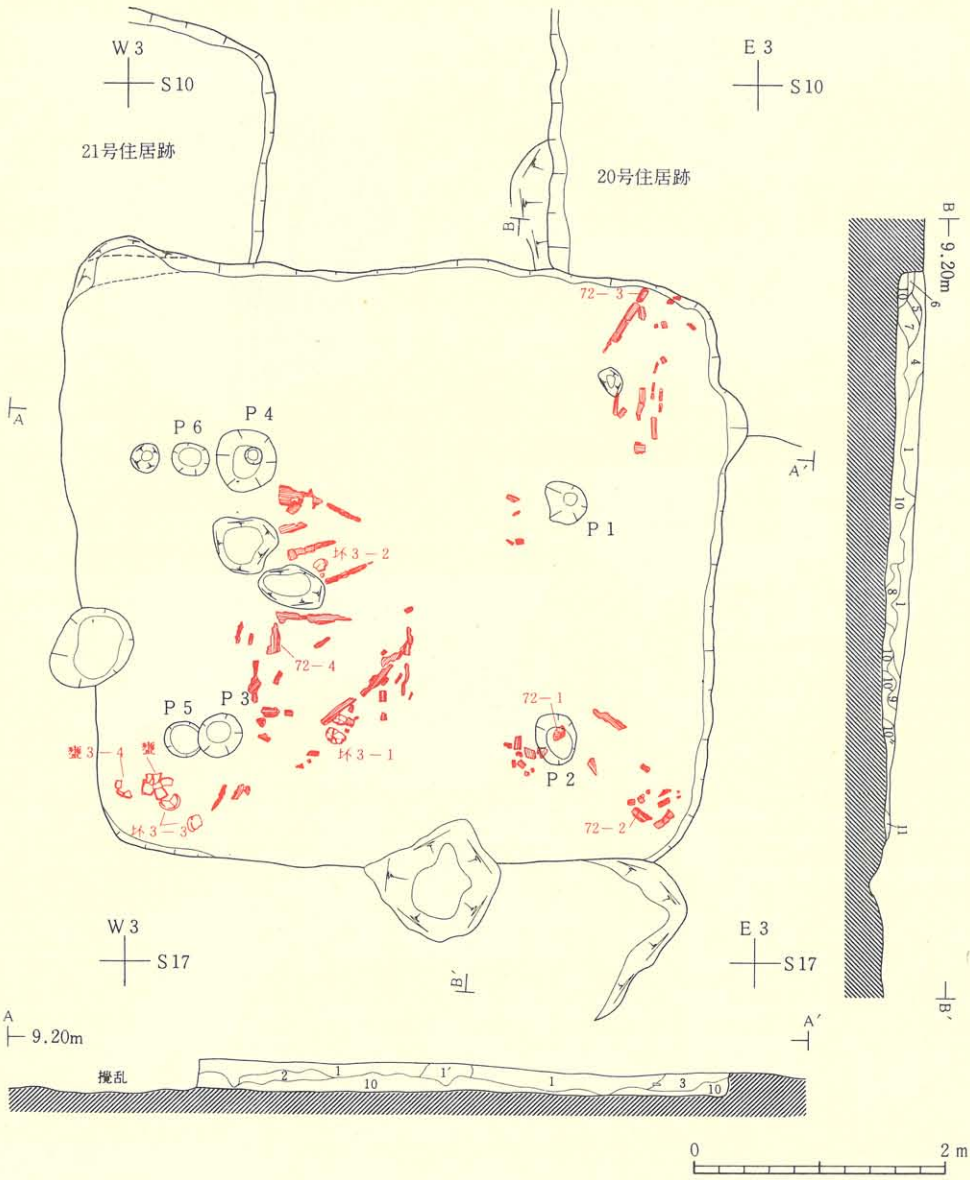
〔床面〕床面はほぼ平坦で、北寄りはシルト、南寄りは粗い砂となっている。床面では数点の

第7表　3号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸(4.76m) 東西軸(5.18m) 面積(24.65m²)	南北軸 N－7°－W 東西軸 N－88°－E	東8～15cm 西 南 北7～25cm	位置不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 8.75m	●P4 ●P1 ●P3 ●P2	SI20・SI21 ↘ ↙ SI3	西半削平 南半削平

	P1	P2	P3	P4	P5	P6
平面形	不正楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形
規模	47×32	42×32	37×34	50×47	32×29	30×25
深さ	7	28	26	13	4	8
堆積土	不明	シルト質砂	シルト質砂	砂質シルト	シルト質砂	シルト質砂

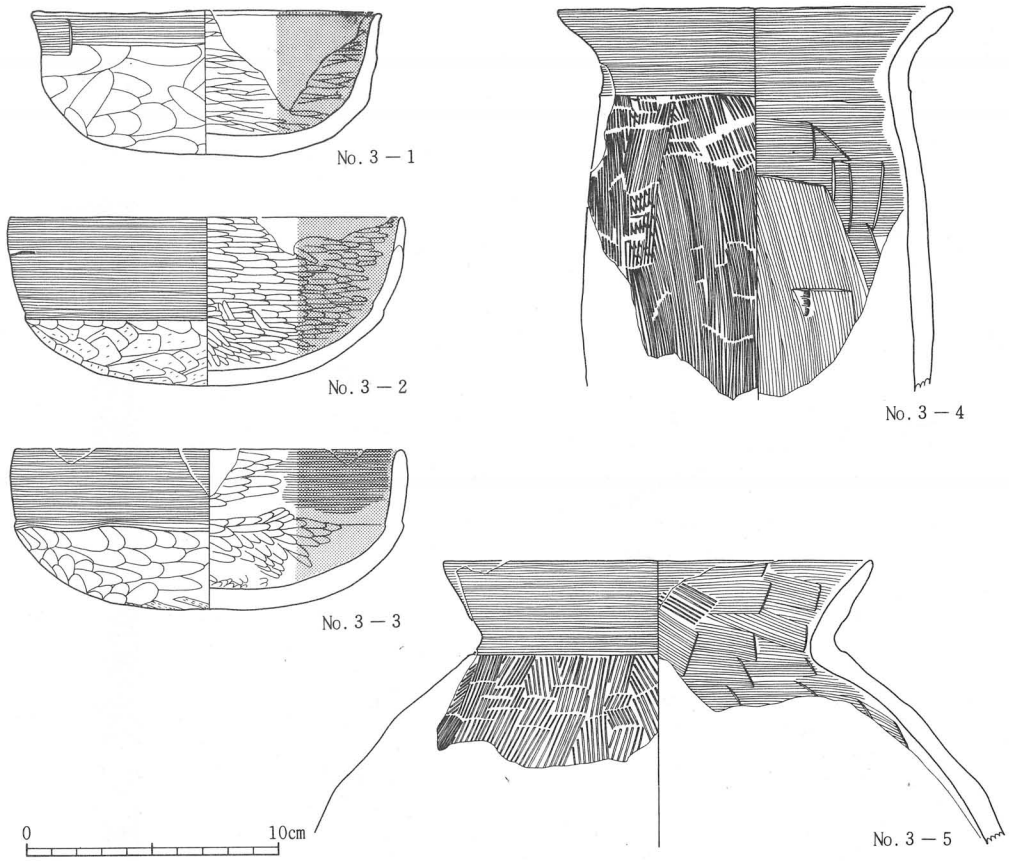
(cm)



層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
1′	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	砂をブロック状に含む
2	10ＹＲ4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	砂を全体に含む
3	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	砂を全体にブロック状に含む
4	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	極小の砂を全体に含む
5	10ＹＲ3/3暗　褐　色	砂質シルト	極小の炭化物を全体に含む
5	10ＹＲ4/4褐　　色	砂質シルト	極小の炭塊を含む
7	10ＹＲ3/4暗　褐　色	砂質シルト	極小の砂と炭化物を含む
8	10ＹＲ3/3暗　褐　色	砂質シルト	炭化物を含む
9	10ＹＲ4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	焼土を含む
10	10ＹＲ3/2極 暗 褐 色	砂質シルト	炭化材を多く含む
10′	10ＹＲ3/2黒　褐　色	砂質シルト	炭化材を多く含む
10″	10ＹＲ3/3黒　褐　色	砂質シルト	炭化材を多く含む
11	10ＹＲ3/3暗　褐　色	シルト質砂	

第19図　３号住居跡実測図

土師器の他に、多量の炭化物と焼土粒が検出され、３号住居跡は火災に遇ったことを示している。炭化材は、北東・南東・南西の各角付近に特に集中して検出された。北東及び南西の炭化



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
3−1	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	5.7	13.8	12.9	完	2B	38
3−2	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	6.7	15.5	14.2	完	4Aa	38
3−3	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ミガキ		ミガキ	6.3	15.4	15.4	½	4Aa	38
3−4	土師器	甕Ⅱ小	堆積土下層上面	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(15.3)	15.6		⅔	2B	
3−5	土師器	甕Ⅰ小	堆積土1層	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ・ハケメ	ヘラナデ		(11.3)	16.9		⅓	2A	

第20図　3号住居跡出土土師器

第8表　3号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中				床面		計
種別	土師器			須恵器	土師器		
器種	坏	甕類	手捏ね	甕	坏	甕類	
個体・破片数	13	300	1	2	3	16	335
実測点数		2	1	2	3		8

材は、住居跡の対角線に沿って延びた状態で検出された。

〔壁〕残存する北壁・東壁は、ともに直立に近い立ち上がりをもっている。

〔柱穴〕Pit は6個検出されている。主柱穴と考えられるのは、P.1・2・3・4である。P.5・6も位置的にみると柱穴の可能性もあるが、P.3・4に比べると浅い掘り方である。P.1も浅いが、北東角ではこの Pit だけであるので、柱穴と考えた。P.1−P.2は190

cm、P．4－P．3は215cm、P．1－P．4は260cm、P．2－P．3は270cmを計る。P．1－P．2列は東辺と平行するが、P．1－P．3は北辺とずれている。P．1－P．2－P．3だけが直角になる。

〔カマド〕カマドは残存する壁付近では検出されなかったので、南壁または西壁にあったと考えられる。

〔遺物出土状況〕堆積土中からの出土土器片は316点を数えるが、床面からの出土遺物は3個体分の坏と、2個体分の甕片16点が出土したに過ぎない。坏2個体分は住居中央付近から南西部に、坏1個体と甕2個体分は南西角から出土した。床面の土器は二次的な火を受けて赤化したり、内黒処理が飛んでいるものがほとんどである。

4号住居跡（SI　4）

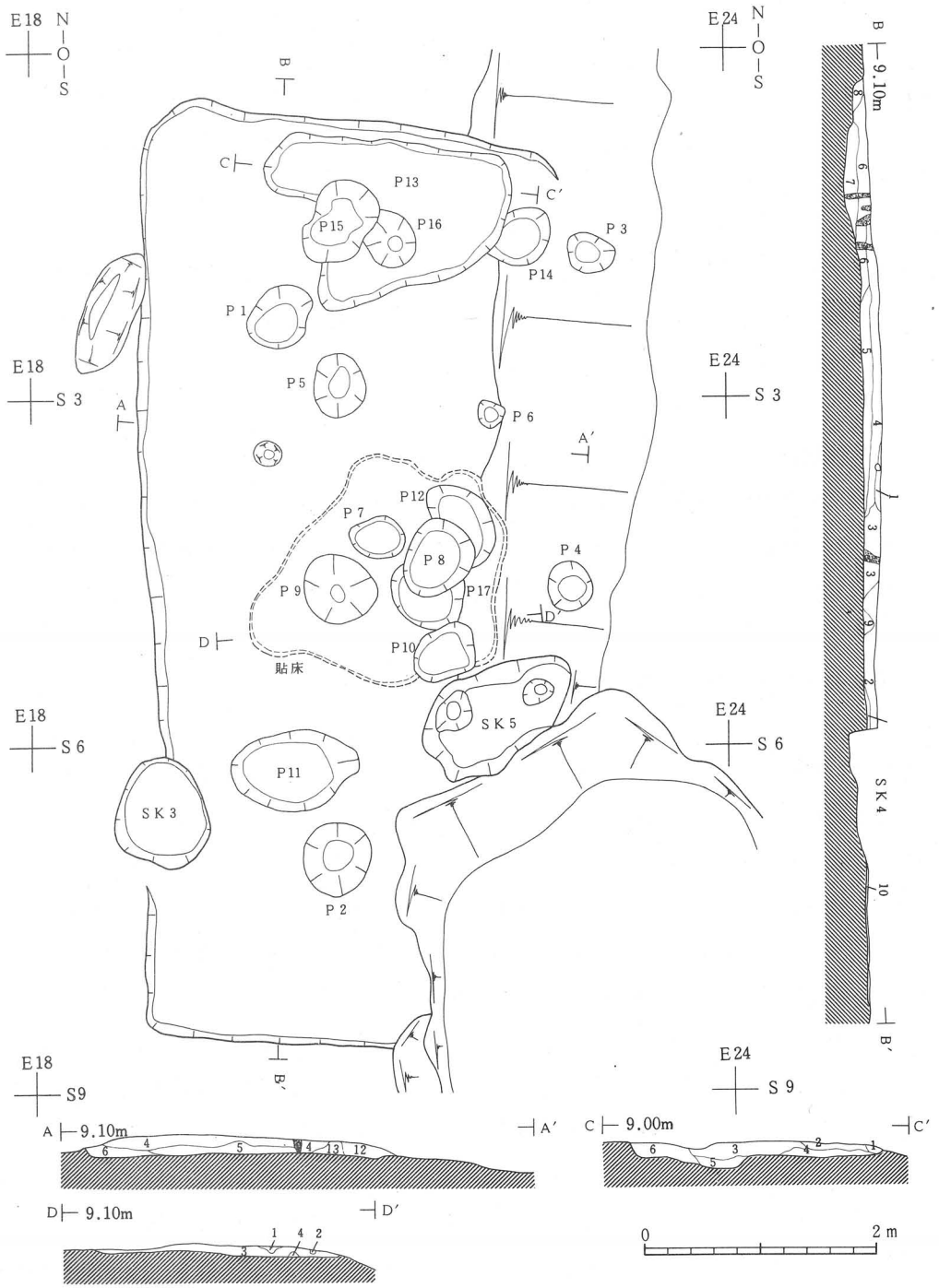
〔平面形・保存状況・重複〕土取り、及びゴミ穴によって東半部が完全に失われている。このため現状では南北に長い長方形となっているが、後述するように柱穴の配置関係から推定するとほぼ正方形に近い平面プランであったと考えられ、3号土壙、4号土壙、5号土壙によって切られている。4号住居跡の床面レベルは、4号土壙より深く、3号・5号土壙より浅い。

〔規模〕現存する南北壁の間は7.98mを計り、栗遺跡にあっては大規模な住居跡である。東西は、西壁より3.16mの所まで残存している。

〔堆積土〕堆積土は、褐色から暗褐色の砂質シルトで、中央部から北部は、10～20cm程の厚さで堆積土が残っていたが、南部は3cm程と残りが良くない。

〔壁・床面〕床面は中央部がやや高いが、ほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。壁・床面とも砂質シルト層である。残存する床面の中央には、東西210cm、南北200cmの範囲で6個のPitに切られる貼床状の落ち込みが確認された。深さは3～10cmで、土師器や炭化物を含む黄褐色から褐色の砂質シルト層が硬く締って堆積していた。

〔柱穴〕床面において17個のPitが検出された。このうち柱穴と考えられるのは、西壁に沿って並ぶ、北側からP.15・5・9・2と、P.15とP．9に対応するP.3・P.4の6個である。P．9は北壁から403cm、南壁から390cmの地点にあり、南北のほぼ中央に位置する。ただし、P．9の北側には、P．9から175cmと315cmの所に2個の柱穴があるが、南側には230cmの所に1個の柱穴があるだけであった。P.15・P．9に対応するP．3・P．4は、P.15とP．9からそれぞれ210cmと200cmあり、P．3・P．4から西壁までは、それぞれ385cmと375cmを計り、P．9から南壁及び北壁までの距離と近い数字となる。このことから、P．3－P．4のラインと、P．9－P．4のラインは、住居跡の南北・東西のほぼ中心を通ると考えられる。従って、P．3から西壁までの距離（385cm）を折り返して東壁の位置を推定すると、東西軸は770cmとなり、南北軸の793cmに近似する。削平を受けた東辺には、西辺と同様の柱列が、また、南北中心線の南壁寄りにも



層No	土　色	土　性	そ の 他	7	10YR⅚褐　色	砂質シルト	
1	10 YR⅚褐　色	砂質シルト		8	10YR⅚褐　色	砂質シルト	
2	10 YR⅚褐　色	砂質シルト		9	10YR⅚褐　色	砂質シルト	黄色がかる
3	10 YR⅜暗褐色	砂質シルト	10YR⅜暗褐色土を含む	10	10YR⅚褐　色	砂質シルト	
4	10 YR⅚褐　色	砂質シルト	10YR⅚にぶい黄褐色土を斑点状に含む	11	10YR⅚褐　色	砂質シルト	
5	10 YR⅜暗褐色	砂質シルト		12	10YR⅜暗褐色	砂質シルト	
6	7.5YR⅚褐　色	砂質シルト	土師器片を含む	13	10YR⅚褐　色	砂質シルト	

第21図　4号住居跡実測図

P13　C－C′

層No	土　色	土　性	その他
1	7.5YR4/4褐　色	砂質シルト	10YR4/6褐色土を含む
2	10 YR4/6褐　色	砂質シルト	10YR3/4暗褐色土をブロック状に含む
3	10 YR4/4褐　色	砂質シルト	10YR4/6褐色土を含む
4	10 YR5/6黄褐色	砂質シルト	10YR3/4暗褐色土を含む
5	10 YR4/6褐　色	砂質シルト	10YR3/4暗褐色土を含む
6	10 Y　4/6褐　色	砂質シルト	

貼床　D－D′

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR5/4にぶい黄褐色 10YR4/4褐　色	砂質シルト	土師片、炭化物を含む
2	10YR5/6黄　褐　色	シ　ル　ト	ブロック状の堆積層
3	10YR4/4褐　色	砂質シルト	炭化物、焼土を少量 土師器片少数
4	10YR4/4褐　色	砂質シルト	黄褐色土を含む

第9表　4号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸7.93m 東西軸(3.16m) 面　積	南北軸 N－4°－W 東西軸 N－85°－W	東 西1～16cm 南3～4cm 北3～4cm	位置不明 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.88m	P15●　●　○ P5●　P3○ P9●　●　○ P2●　P4○	S I 4 ↓ SK3,4,5	東半削平

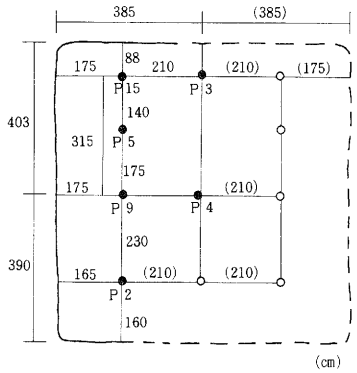
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	楕円形	円　形	楕円形	円　形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形	楕円形	楕円形	楕円形
規　模	60×48	65×60	41×36	48×40	55×46	24×22	46×36	69×55	65×60	57×43	112×69	74×46
深　さ	20	37	19	14	32	4	7	12	37	14	28	9
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17
平面形	不整楕円形	楕円形	不整楕円形	楕円形	楕円形
規　模	225×146	60×48	80×55	62×47	67×62
深　さ	22	7	36	30	16
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

P. 2に対応する柱穴の存在が、この結果から推定される。(第22図参照)

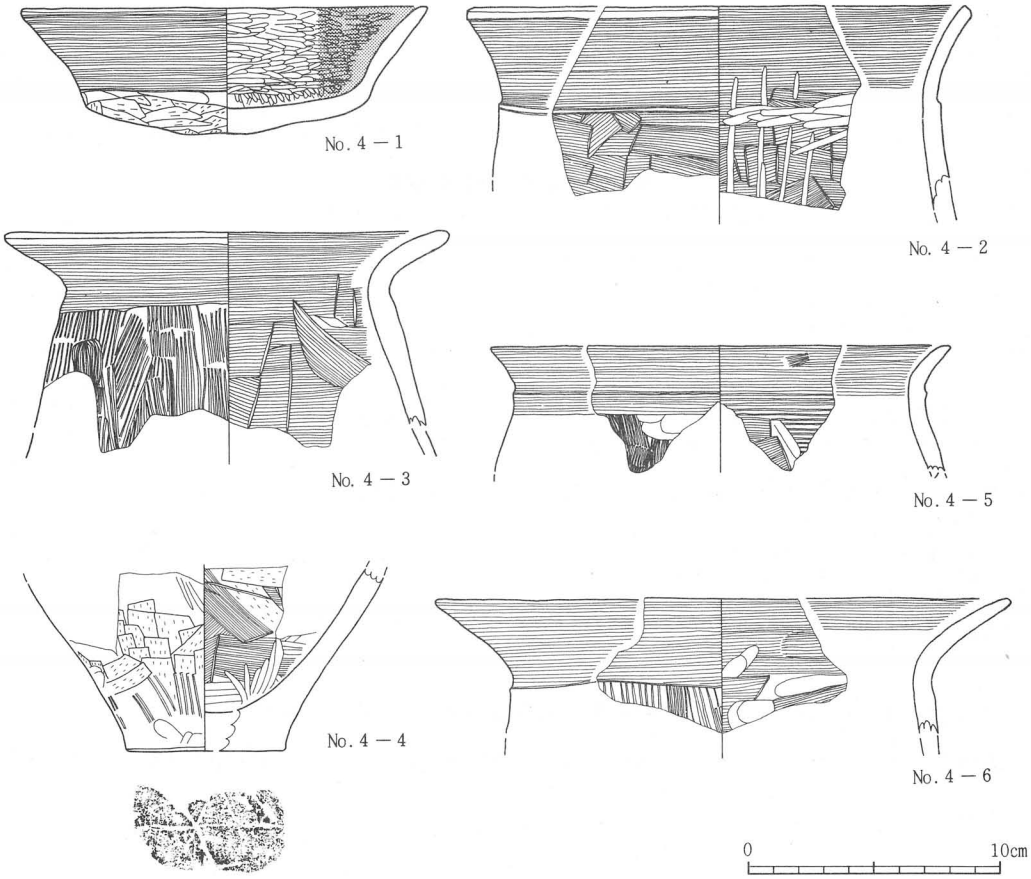
〔遺物出土状況〕堆積土・床面・貼床中からの遺物出土量が少なく、Pit中より多くの土師器片が出土した。



第22図　4号住居跡柱穴複元図

第10表　4号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中			ピット中			床面	貼床中		計
種別	土師器									
器種	坏	甕類	甑	坏	甕類	甑	甕類	坏	甕類	
個体・破片数	6	1	1	21	201	1	3	1	2	237
実測点数				1	4	1				6



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
4−1	土師器	坏小	P 8	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	5	16	12.1	完	4Eb	38
4−2	土師器	甑大	P 6	ヨコナデ	ヘラナデ		ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ		8.2	20.9		(1/10)		
4−3	土師器	甕Ⅱ	P11	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		7.7	17.6		(1/12)	2	
4−4	土師器	甕Ⅱ	P13		ケズリ	ハケメ・ナデ		ケズリ・ヘラナデ	ミガキ	7.3		6.3	(1/2)		
4−5	土師器	甕Ⅱ	P11	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ		5	18.1		(1/7)	2	
4−6	土師器	甕Ⅱ	P17	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ		5.4	22.7		(1/12)	2	

第23図　4号住居跡出土土師器

5号住居跡（SI 5）

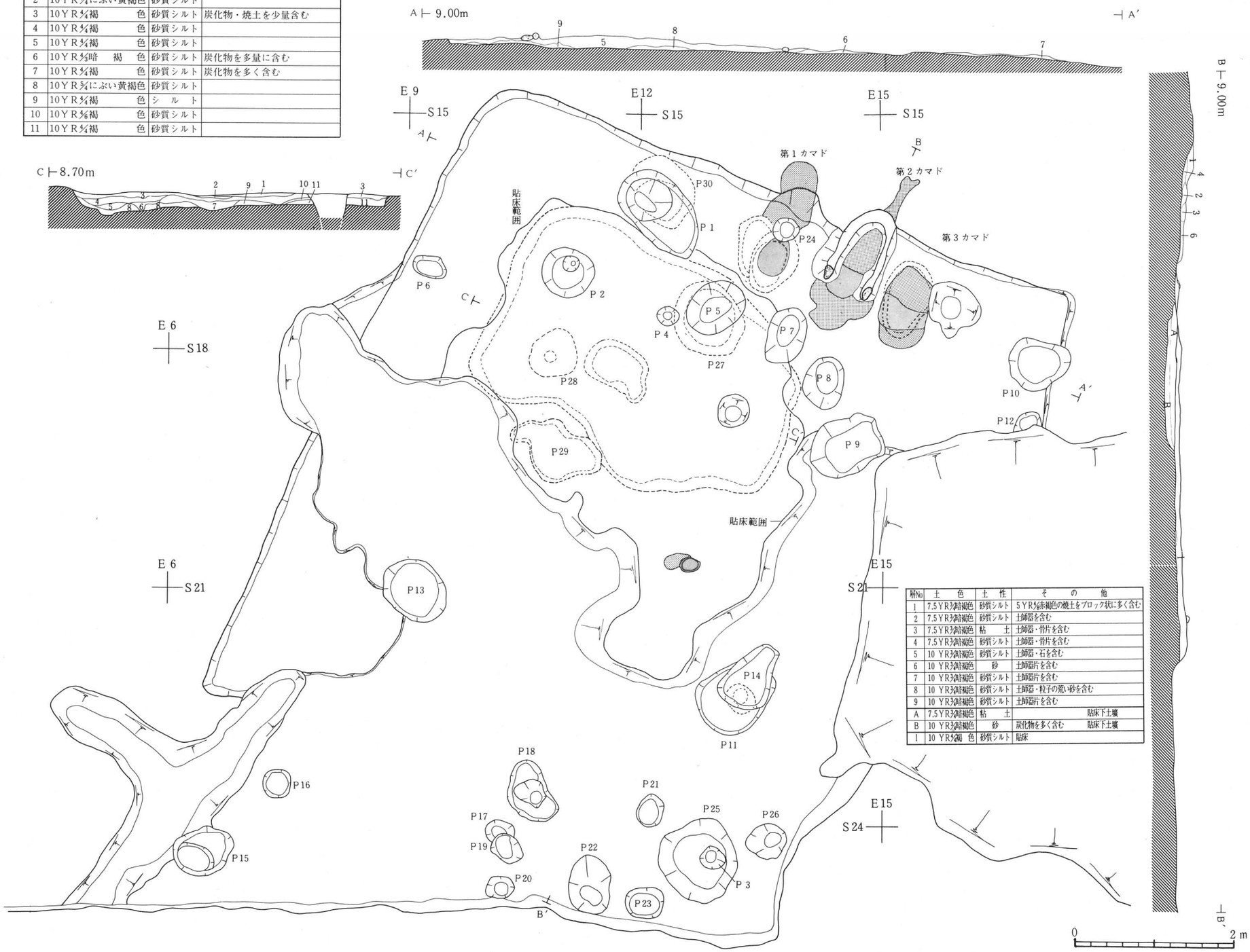
〔平面形・保存状況・重複〕住居跡の東辺は土取りによって完全に失われ、また中央から南辺にかけても、天地返しによる削平を受けており、南西角辺付近に一部床を残すだけであった。残存部から住居跡の平面形は方形を呈するものと考えられる。重複は観察されなかった。

〔規模〕住居跡の規模は、南北軸が西辺で8.50m を計れるが、東西軸は北辺の残りの良い部分で7.95m の所まで計ることができる。4号住居跡と並ぶ大形の住居跡である。

〔堆積土〕堆積土は南に厚く北に薄い。貼床上で1～9層に細分された。暗褐色の砂質シル

S15 貼床下土壙

層No	土色	土性	その他
1	10YR5/4褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土を霜降状に含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
3	10YR5/4褐色	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む
4	10YR5/4褐色	砂質シルト	
5	10YR5/4褐色	砂質シルト	
6	10YR5/3暗褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む
7	10YR5/4褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む
8	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	
9	10YR5/4褐色	シルト	
10	10YR5/6褐色	砂質シルト	
11	10YR5/4褐色	砂質シルト	



層No	土色	土性	その他
1	7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	5YR5/8赤褐色の焼土をブロック状に多く含む
2	7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器を含む
3	7.5YR3/3暗褐色	粘土	土師器・骨片を含む
4	7.5YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器・骨片を含む
5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器・石を含む
6	10YR3/3暗褐色	砂	土師器片を含む
7	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器片を含む
8	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器・粒子の荒い砂を含む
9	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	土師器片を含む
A	7.5YR3/3暗褐色	粘土	貼床下土壙
B	10YR3/3暗褐色	砂	炭化物を多く含む　貼床下土壙
I	10YR5/2褐色	砂質シルト	貼床

第24図　5号住居跡実測図

第11表　5号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸 8.62m 東西軸(7.95m) 面積(68.5m²)	南北軸 N−24°−E 東西軸 N−65°−W	東 西1～8cm 南 北1～8cm	位置 北壁中央 燃焼部・68×94 煙道 (17×51) (第2カマド計測) (cm)	床面標高 8.50m	●P2 ●P9 ●P13 ●P11	なし	南半削平 東半削平

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形
規模	126×71	65×62	30×29	26×24	79×61	45×36	73×47	66×51	94×81	80×64	80×70	(33×20)
深さ	8	33	35	4	37	7	18	19	16	16	48	6
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20	P 21	P 22	P 23	P 24
平面形	楕円形	不整楕円形	楕円形	円形	楕円形	不整楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形
規模	86×69	90×56	76×60	36×34	34×29	81×50	42×31	36×27	40×32	70×50	47×39	32×31
深さ	17	17	31	24	18	37	15	29	13	39	4	3
堆積土	砂	砂質シルト	砂	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂	砂	砂質シルト	砂	砂質シルト	砂質シルト

	P 25	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30
平面形	円形	楕円形	円形	円形	不整楕円形	楕円形
規模	100×95	44×44	92×85	65×59	120×70	86×72
深さ	17	50	41	11	8	47
堆積土	砂	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

トを主体とし、砂・粘土を混える。また土中に小骨片が多く含まれている。5層中からは大形の礫や土器片が多量に出土した。

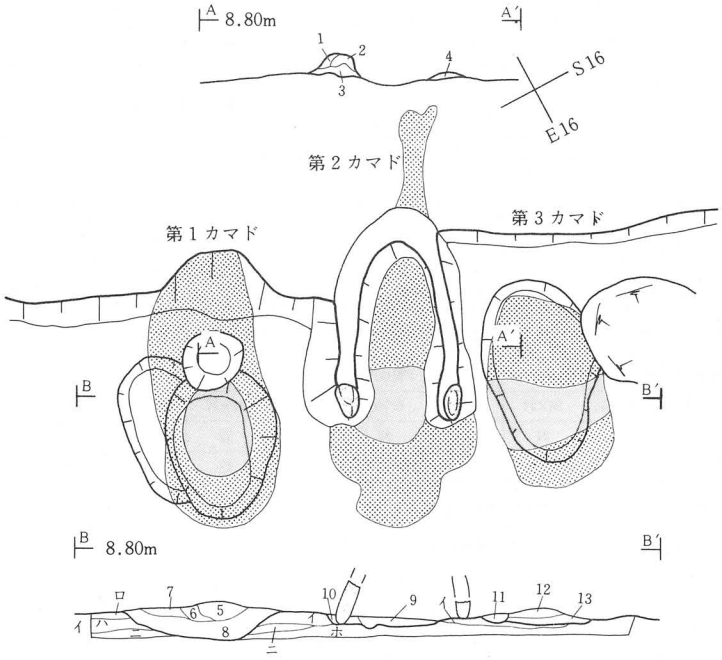
〔壁〕残りが悪いため本来の形状は不明であるが、現状では緩やかな立ち上がりを呈している。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、わずかに壁近くが高い。中央から西寄りに広範囲に1枚の貼床が検出された。（Ⅰ層）貼床は、南側で8cm、北側で5cm程の厚さで、褐色の砂質シルト層からなる。貼床の下部からは、土壙・Pit (P.29)・焼土面が検出された。

〔柱穴〕住居跡内、及び住居南壁付近から、貼床下のものを含めて30個のPitが検出された。このうち主柱穴と考えられるのはP.9・P.11・P.2・P.13の4個である。P.9−P.3は335cm、P.2・P.13は435cm、P.2−P.9は410cm、P.13−P.11は430cmで、台形に組む。P.2・P.13ラインと西壁は190cmの距離で平行する。P.2から北壁までは189cm、P.13から南壁までは、推定復元で238cmあり、南側が広くなるようである。

〔カマド〕カマドは、北壁中央部から東壁寄りに、新旧3基確認された。西側より第1・第2・第3カマドとした。

第1カマドは、柱穴P.2とP.9のほぼ中間に位置する。北壁から南北に144cm、幅60cmに亘って焼土面が観察された。袖・煙道は残存しない。焼土面は特に中央よりやや南側が強く焼けている。焚口と推定される焼土の南端部で、上面から土製の小玉が2点出土した。焼土面の直下には、焼土を多く含んだ南北84cm、東西80cmで2段に掘られた深さ20cm程のPitが検出され



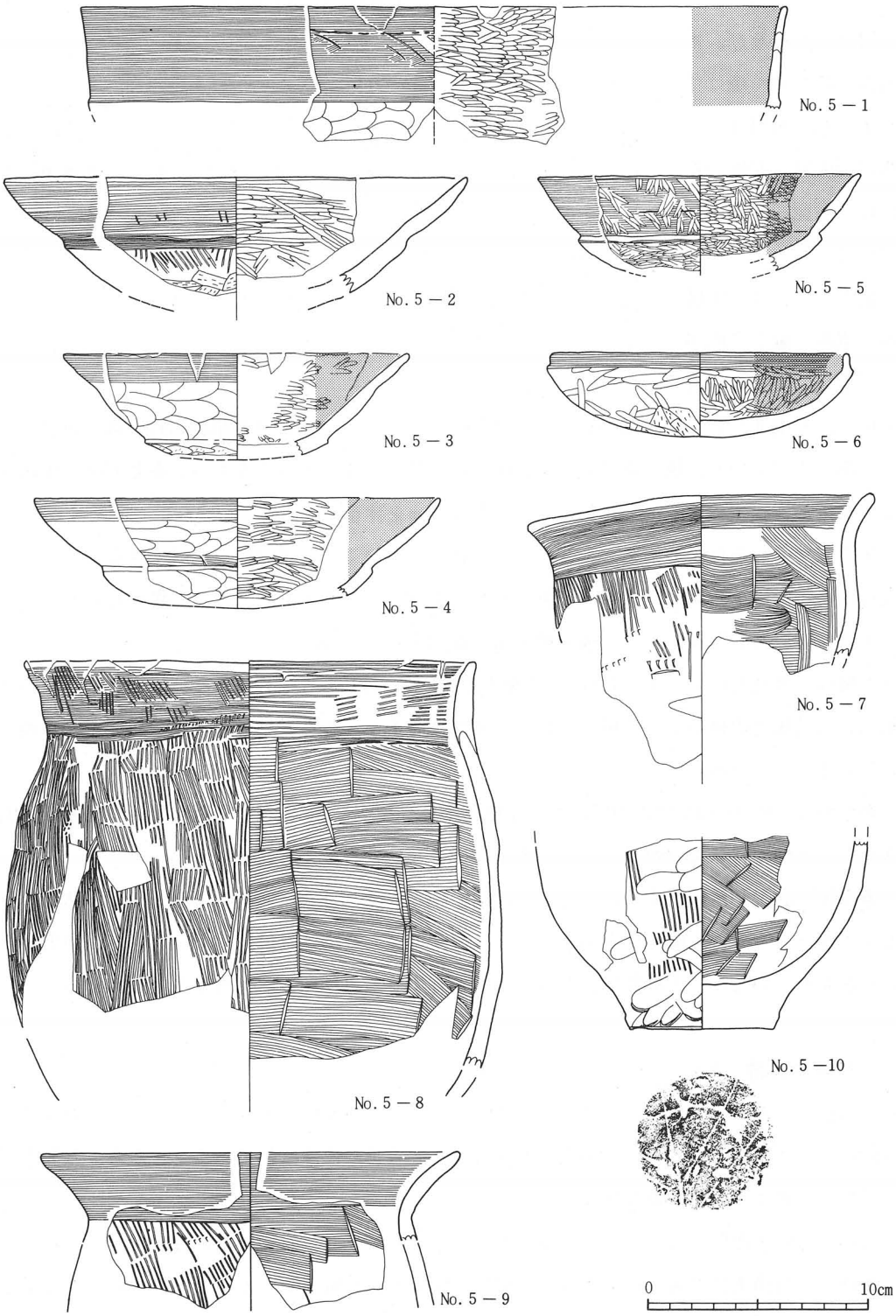
層No	土　色	土　性	その他				
1	10 YR 5/4 褐　色	砂質シルト		9	7.5YR 5/6 褐　色	砂質シルト	〈焼土層〉
2	10 YR 5/6 褐　色	砂質シルト	暗赤褐色焼土を含む	10	10 YR 5/4 褐　色	砂質シルト	暗褐色土をわずかに含む
3	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト		11	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	炭化物、焼土・骨片を含む
4	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	赤褐色	12	7.5YR 5/4 褐　色	砂質シルト	〈焼土層〉
5	7.5YR 5/6 褐　色	砂質シルト	赤褐色焼土ブロックを含む〈焼土層〉	13	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト	
6	10 YR 5/4 褐　色	砂質シルト	赤褐色焼土を少量含む〈焼土層〉	イ	10 YR 5/4 褐　色	砂質シルト	
7	10 YR 5/6 褐　色	砂質シルト	焼土をわずかに含む	ロ	10 YR 5/6 褐　色	砂質シルト	
8	7.5YR 5/4 褐　色	砂質シルト	骨片・土師器片・焼土を含む	ハ	10 YR 5/6 褐　色	砂質シルト	
				ニ	10 YR 5/6 褐　色	砂質シルト	

第25図　5号住居跡カマド実測図

ている。

第2カマドは、最終時のカマドで、第1と第3カマドの中間にあり、両袖の基底部と焚口の両袖石が残存している。また、北壁の外側には、煙道の底面と考えられる焼土痕が、長さ51cm、幅10cm前後で残っている。カマド本体は、袖石の外側で68cm、内外で40cmを計る。焼土面はカ

遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
5—1	土師器	坏大	P33	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(6.2)	31.9	31.3	(1/12)	3	
5—2	土師器	坏大	堆積土	ヨコナデ		ケズリ・ハケメ	ミガキ		ミガキ	(5.2)	20.9	15.4	1/6	2	
5—3	土師器	坏小	堆積土	ナデ・ヨコナデ		ケズリ	ミガキ		ミガキ	(4.8)	15.5	8.2	1/3	4Eb	
5—4	土師器	坏小	P18	ナデ・ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(4.7)	18.3	12.2	1/7	4Ea	
5—5	土師器	坏小	カマド堀り方中	ヨコナデ・ミガキ		ミガキ	ミガキ		ミガキ	(4.3)	14.6	11.0	1/6	4Eb	
5—6	土師器	坏小	貼床下	ヨコナデ		ケズリ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ		ミガキ	4.8	13.3	13.8	1/2	4Cb	38
5—7	土師器	鉢Ⅱ	堆積土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(12.4)	15.5		(5/6)	1C	38
5—8	土師器	甕Ⅰ小	堆積土	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ	ヘラナデ		(18.5)	20.3		1/2	1B	38
5—9	土師器	甕Ⅱ	堆積土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(7.1)	18.9		(1/6)	1	
5—10	土師器	甕Ⅱ	堆積土		ハケメ ナデ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	(8.5)		6.5	(1/3)		



第26図　５号住居跡出土土師器

マド内はもとより、カマド前面にも及び、袖石間が特に強く焼けている。袖の石材は、右側が凝灰岩、左側が安山岩の河原石を使用している。

第12表　5号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中					ピット中		床面		貼床中				貼床下面		貼床下土壙			第1カマド焼土中			第1カマド堀方		第2カマド堀方	第3カマド堀方	計
種別器種	土師器				須恵器・蓋	土師器							須恵器・坏	土師器		土師器		土製土玉	土師器		土製小玉	土師器				
	坏	甕類	鉢	手捏ね		坏	甕類	坏	甕類	坏	甕類	手捏ね		坏	甕類	坏	甕類		坏	甕類		坏	甕類	甕類	甕類	
個体・破片数	90	738	1	2	1他1	27	163	2	8	6	103	1	1	2	29	17	122	1	4	12	2	1	15	2	1	1351
実測点数	2	3	1	2		2						1	1	1				1			2	1				16

第３カマドは、住居跡の東側に偏してP．９の近くに位置する。焼土面だけが南北に103cm、幅60cmに亘って残存する。中央やや南寄りが帯状に特に強く焼けている。第３カマドでも、焼土面の直下に、焼土面とほぼ同様の広がりをもつ、南北97cm、東西58cmの楕円形を呈するPitが検出された。深さは６cmを計る。

第２カマドに先行する第１・第３カマドの新旧については、層位的に検討できなかったが、北壁中央に位置する第１カマドが、第３カマドより古いと考えるのが適当と思われる。

〔その他の施設〕貼床の下で土壙と焼土面が検出されている。

土壙は、南北2.90m、東西4.0mの不整方形で、深さは15～25cm程である。堆積土はにぶい黄褐色から暗褐色の砂質シルト層で、焼土や炭化物を多く含む層が見られる。底面は東から西へかけて下がっている。

焼土面は、P．９とP.11の中間のやや住居跡中央寄りに南北に20cm、東西に45cmの範囲で検出された。東側が特に強く焼けている。地床炉ではないかと考えられる。

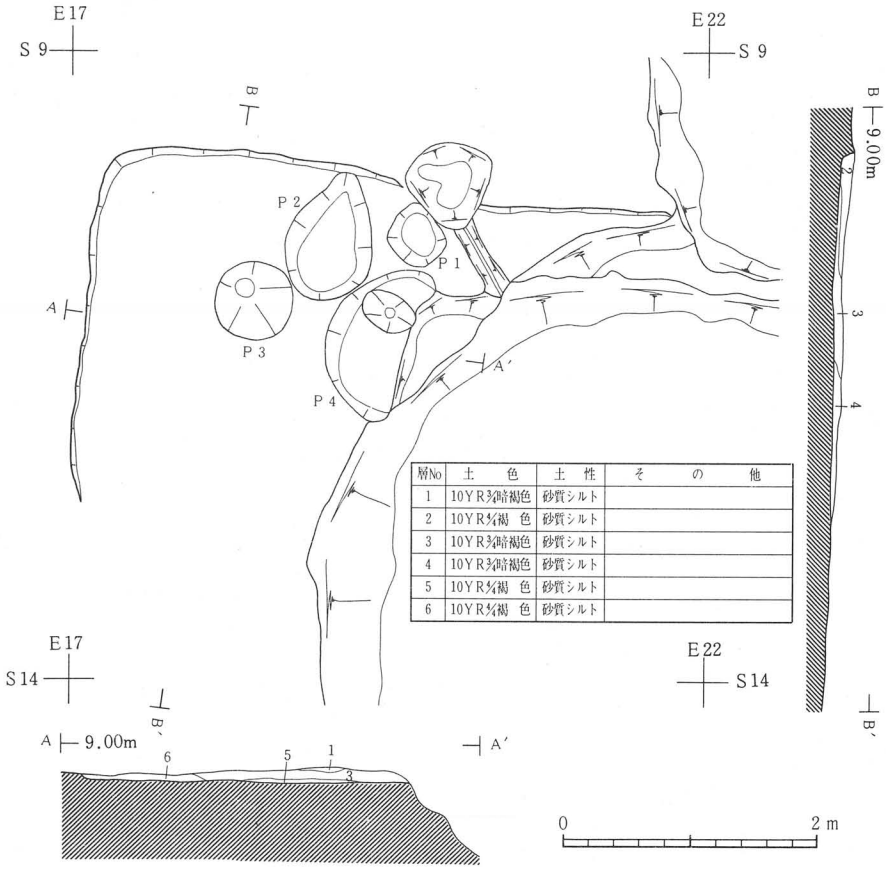
〔遺物出土状況〕堆積土中には、大小の礫とともに800点以上の土師器片が出土した。貼床の上面・下面とも少量の土師器片が出土したが、復元可能な遺物はない。貼床中にも多くの土師器片が含まれていたが、土師器片に混って受部を有する須恵器坏の口縁部が出土している。

６号住居跡（SI　６）

〔平面形・保存状況・重複〕東側は土取り穴により、また南側も天地返しによって削平され、北西角付近が残っているだけである。平面形は、北西角がほぼ直角であることから、方形または長方形と考えられる。重複はない。

〔規模〕北壁と西壁の残存長は、北西角からそれぞれ4.45m、2.96mである。

〔堆積土〕堆積土は６層に細別される。褐色～暗褐色の砂質シルトからなり、堆積土層の厚さは５～15cmある。少量の遺物を含んでいる。



層No	土　色	土　性	そ　の　他
1	10YR3/3時褐色	砂質シルト	
2	10YR4/4褐　色	砂質シルト	
3	10YR3/3時褐色	砂質シルト	
4	10YR3/3時褐色	砂質シルト	
5	10YR4/4褐　色	砂質シルト	
6	10YR4/4褐　色	砂質シルト	

第27図　6号住居跡実測図

第13表　6号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸(2.96m) 東西軸(4.45m) 面　積	南北軸 N－6°－E 東西軸 N－85°－W	東 西2～12cm 南 北2～6cm	位置不明 燃焼部 — 煙　道	なし 床面標高 8.70m	不　明		

	P 1	P 2	P 3	P 4
平面形	楕円形	不整楕円形	円　形	不整楕円形
規　模	45×42	104×70	64×64	126×65
深　さ	10	19	48	42
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

〔壁・床面〕床面はほぼ平坦である。壁は下端が残るだけであり、本来の形状は明らかでないが、残存部は緩い傾斜をもって立ち上がっている。

〔柱穴〕Pit は北壁中央寄りに4個検出された。このうちP. 3は、北壁及び西壁からそれぞれ1.19m、1.28m の位置で、ほぼ住居跡の対角線上に乗っていることから、北西角の柱穴と考え

られる。

〔遺物出土状況〕住居跡の保存状態が不良なため、堆積土中とPit内から数十点の土師器片が出土しただけである。復元できる土器はない。

第14表　6号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中		ピット中			計
種別	土師器				土玉	
器種	坏	甕類	坏	甕類		
個体・破片数	9	52	2	49	1	113
実測点数					1	1

7号住居跡（SI　7）

〔平面形・保存状況・重複〕当初7号住居跡は、19号住居跡の平面プランをもって7号住居跡としていたが、調査中にこの大形の住居跡のプラン内に掘り込まれている小形の住居跡が検出された。そこで、新しい方の小形住居跡を7号住居跡、古い方の大形住居跡を19号住居跡として調査した。北壁の東半から東壁は、調査中に失われている。また南壁は天地返しの削平を受け、南西・南東の両角付近を失っている。平面形は南北にやや長い方形を呈す。重複関係においては19号住居跡を切る。また、18号住居跡とも重複するが、天地返しにより堆積土のない床面上で18号住居跡が検出されているために、両住居跡の新旧関係は不明である。

〔規模〕北壁の東半から南壁まで失われているが、断面の観察によって各壁の位置が確認され、その結果、南北3.8m、東西3.26mを計る。

〔堆積土〕堆積土は北側で25cm、南側で10cm程あり、4層に細別される。褐色～黒褐色の砂質シルトで、各層中より多くの土器や石が出土した。特に2層中から2層上面には、巨礫や土師器の一括遺物が出土している。

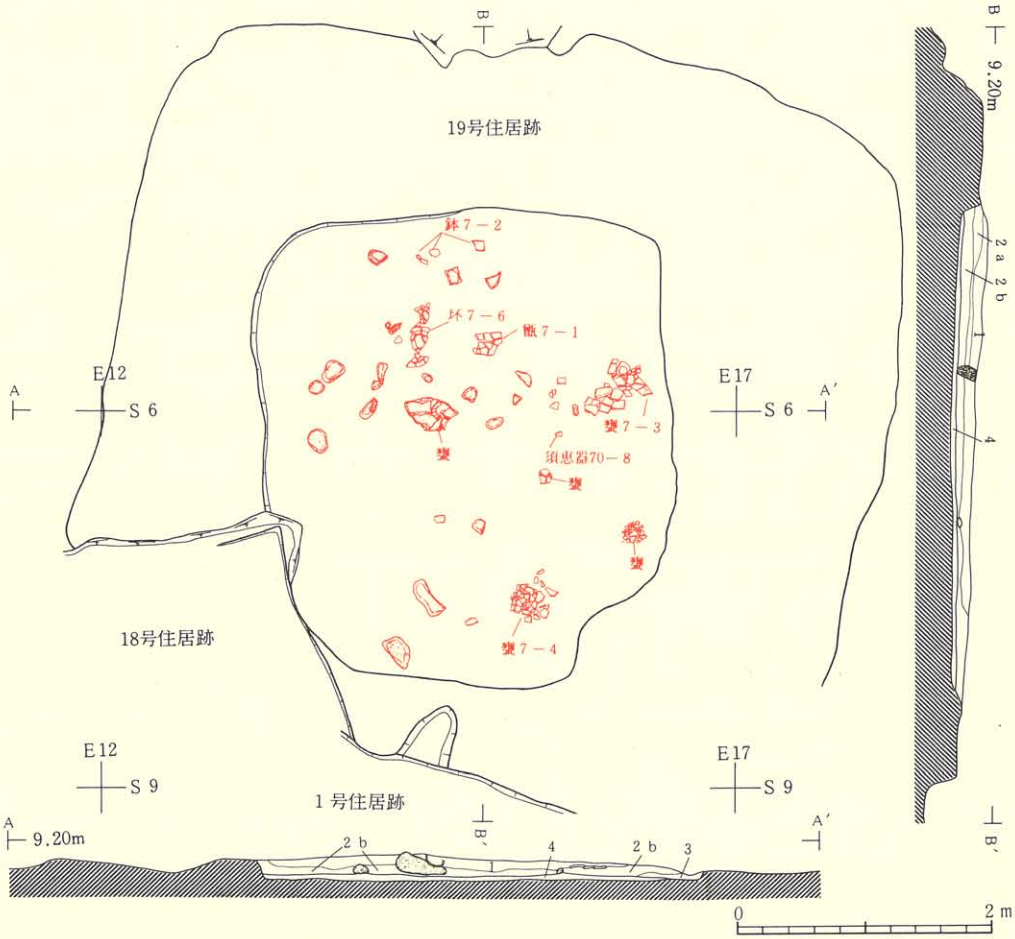
〔壁・床面〕壁面は70°くらいの傾斜で立つ。床面には3～5cmの厚さで、炭化物や褐灰色の土をブロック状に含むにぶい黄褐色のシルトによる貼床が存在した。この面はほぼ平坦で、上面がかなり汚れて黒くなっていた。7号住居の床面レベルは19号住居跡より高い。

〔柱穴・その他〕柱穴・カマド及びその他の施設は検出されなかった。

〔遺物出土状況〕堆積土中の土器片は、大小の礫とともに散乱した状態で出土している。接合の結果、坏2点と甕3点が復元できた。床面からも多くの土師器片が出土し、坏・甑・鉢・手捏ね土器が各1点復元できた。床面の遺物には特に規則性は認められなかった。

第15表　7号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中				床面						貼床中			計
種別	土師器			臼玉	土師器					須恵器・坏	土師器		土玉	
器種	坏	甕類	蓋		坏	甕類	甑	鉢	手捏ね		坏	甕類		
個体・破片数	54	694	1	1	11	93	1	1	1	1	3	61	1	923
実測点数	2	3	1	1			1	1	1	1			1	12

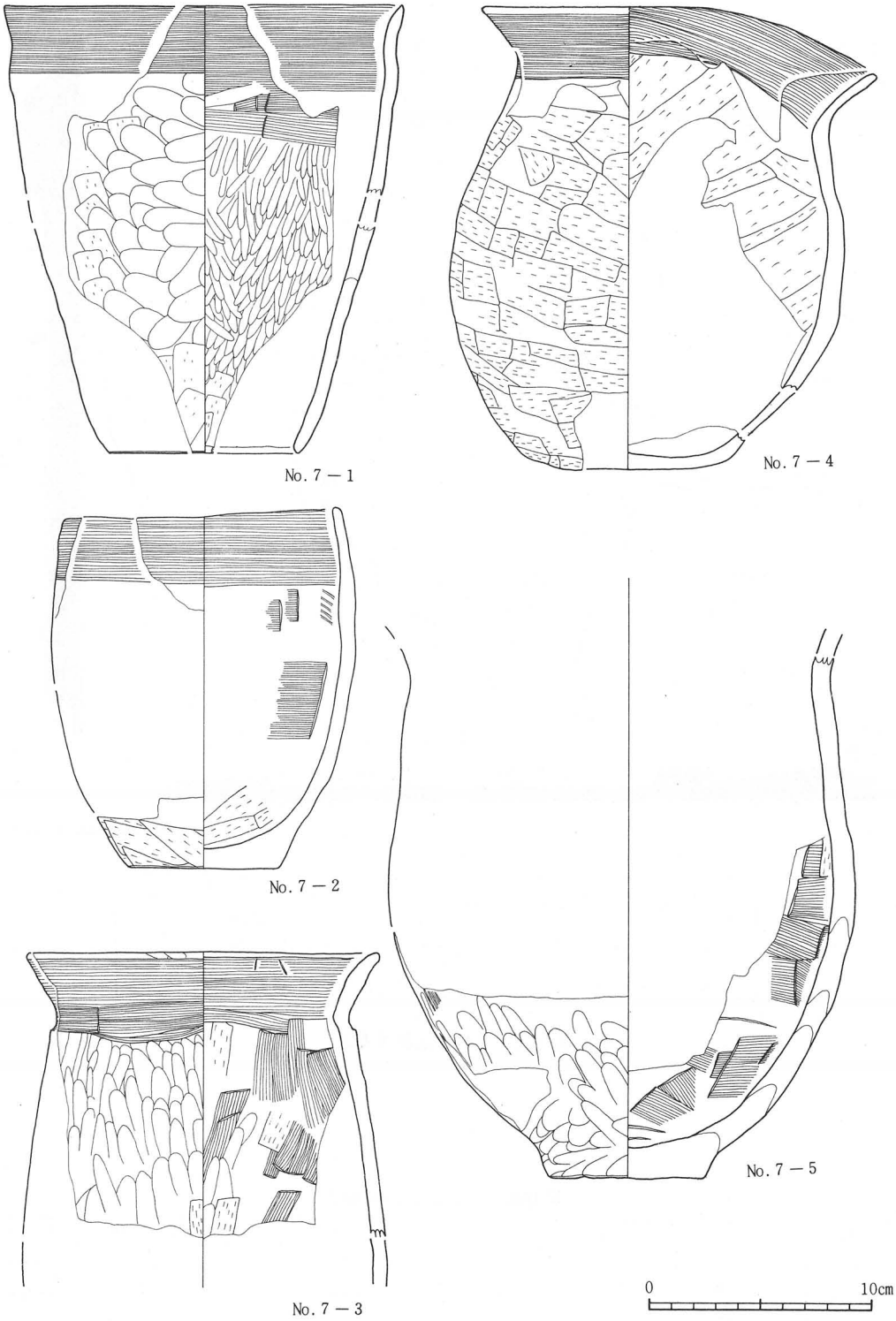


層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR4/4褐　　色	砂質シルト	遺物片を多量に含む
2a	10YR3/3暗　褐　色	砂質シルト	炭化物・焼土を含む　多くの一括遺物を含む
2b	10YR3/2黒　褐　色	砂質シルト	10YR5/4褐色をブロック状に含む（炭化物）
3	暗　褐　色	砂質シルト	
4	10YR5/4にぶい黄褐色	シ　ル　ト	炭化物　10YR5/1褐灰色等ブロック状に混入している　貼床

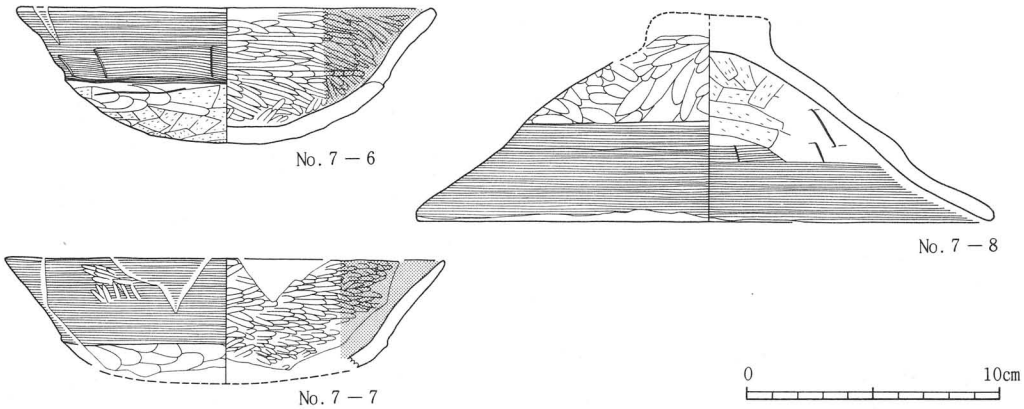
第28図　7号住居跡実測図

第16表　7号住居跡観察表

規　　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　　複	備　考
南北軸3.8 mm 東西軸 3.26m 面 積 12.38m²	南 北 軸 N－10°－W 東 西 軸 N－82°－E	東 西2cm 南 北2～6cm	位 置 不 明 燃焼部 煙 道	なし 床面標高 8.88m	不明	SI19 ↓ SI 7 ↘ SI 1 ↓ SI18	東半削平 南半削平



第29図　7号住居跡出土土師器（1）



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
7－1	土師器	甑 大	床面	ヨコナデ	ケズリ・ナデ	ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	20.0	17.	8.4	¼	2A	
7－2	土師器	鉢 Ⅰ	床面	ヨコナデ		ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ケズリ	15.7	12.	6.6	¾	1Ba	39
7－3	土師器	甕 Ⅱ	堆積土中	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ケズリ・ヘラナデ		(12.8)	15.		¼	2	
7－4	土師器	甕Ⅱ小	堆積土2層上	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	ヨコナデ	ケズリ	ケズリ	20.6	17.	6.0	¾	1A	39
7－5	土師器	甕Ⅱ大	堆積土2層上		ハケメ・ナデ	ナデ		ケズリ・ヘラナデ	ヘラナデ	23.3		6.8	½	1A	
7－6	土師器	坏 小	堆積土2層上	ヘラナデ・ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	5.3	16.	12.5	完	4Eb	39
7－7	土師器	坏 小	堆積土中	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(4.3)	17.	12.8	¼	4Ea	
				端部	頂部	つまみ部	端部	頂部	つまみ径	器高	端部径	つまみ径			
7－8	土師器	蓋 Ⅰ	堆積土1層	ヨコナデ	ナデ		ヨコナデ	ケズリ・ヘラナデ	ケズリ	(8.2)	23.5	(4.3)	⅚		39

第30図　7号住居跡出土土師器(2)

8号住居跡（SI 8）

〔平面形・保存状況・重複〕著しい攪乱を受け、北西角付近から北東角の壁寄りの一部分を残すだけである。また、攪乱部において、この住居跡に関係するPitが2個検出されている。残存部の状況から平面形は方形または長方形と推定される。19号住居跡と重複関係にあると思われるが、床面レベルが高く、また攪乱により堆積土が残存しないために新旧は不明である。

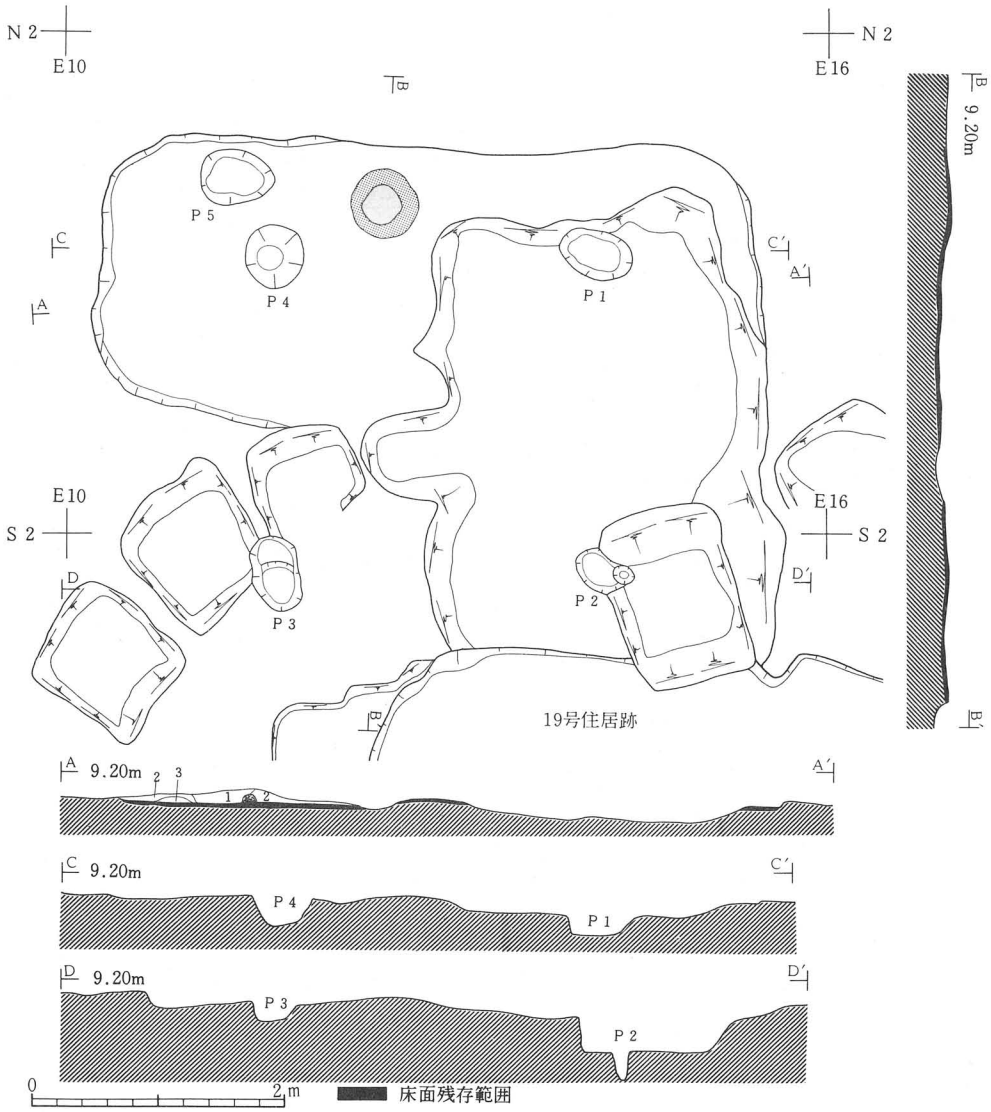
〔規模〕東西軸は、5.05mを計る。南北軸は、北壁からP. 3の南端までで、3.74mを計る。

〔堆積土〕堆積土は、北西角付近に部分的に残っているだけである。1～3層に細分され、3層とも褐色の砂質シルトである。

〔壁・床面〕壁は、北西角付近が北壁・西壁とも1.5～2m残り、また東壁の北端部が1.3m程残る。残存する壁下部の立ち上がりは緩やかである。床面は、部分的に残っているだけであるが、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕Pitは床の残存部で2個、攪乱部分において3個検出された。このうち、P. 1－P. 4が主柱穴となると考えられる。P. 1－P. 2は255cm、P. 4－P. 3は260cm、P. 1－P. 4は255cm、P. 2－P. 3は255cmを計り、ほぼ正方形の配列となっている。

〔カマド〕北壁の中央よりやや西寄りに、直径約55cmの範囲に焼土面が観察された。中央がよ



層　No.	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ4/4 褐色	砂質シルト	暗褐色シルトを霜降状に含む
2	10ＹＲ4/4 褐色	砂質シルト	
3	10ＹＲ4/4 褐色	砂質シルト	暗褐色シルト粒を含む

第31図　8号住居跡実測図

り強く焼けている。本体は残っていなかったが、この部分にカマドがあったと考えられる。

〔遺物出土状況〕堆積土及び床面の残存状況が悪いため、出土遺物は少なく、堆積土中から甕13点、Pit 中から甕片10点、甑片１点が出土しただけである。床面上の遺物は認められなかった。

第17表　８号住居跡観察表

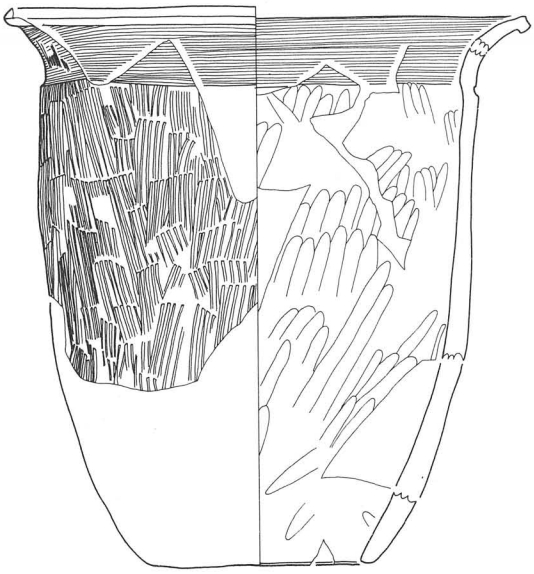
規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸（2.3m） 東西軸　5.05m 面　積	南北軸 N－8°－W 東西軸 N－85°－E	東２～６cm 西２～３cm 南２～５cm 北１～４cm	位　置　北壁中央付近 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.95m	● P４　● P１ ● P３　● P２	ＳＩ８ ↓↑ ＳＩ19	

	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形	楕円形
規　模	59×38	40×26	60×35	50×45	58×44
深　さ	15	51	18	24	9
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

第18表　８号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中	ピット中		計
種別	土師器			
器種	甕類	甕類	甑	
個体・破片数	13	10	1	24
実測点数			1	1



No. 8－1

0　10cm

遺物No	種　別	器　形	層　位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体　部	底　部	口縁部	体　部	底　部	器高	口径	底径			
8－1	土師器	甑　大	Ｐ　1	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	22	20.7	8.7	½	３Ｂ	39

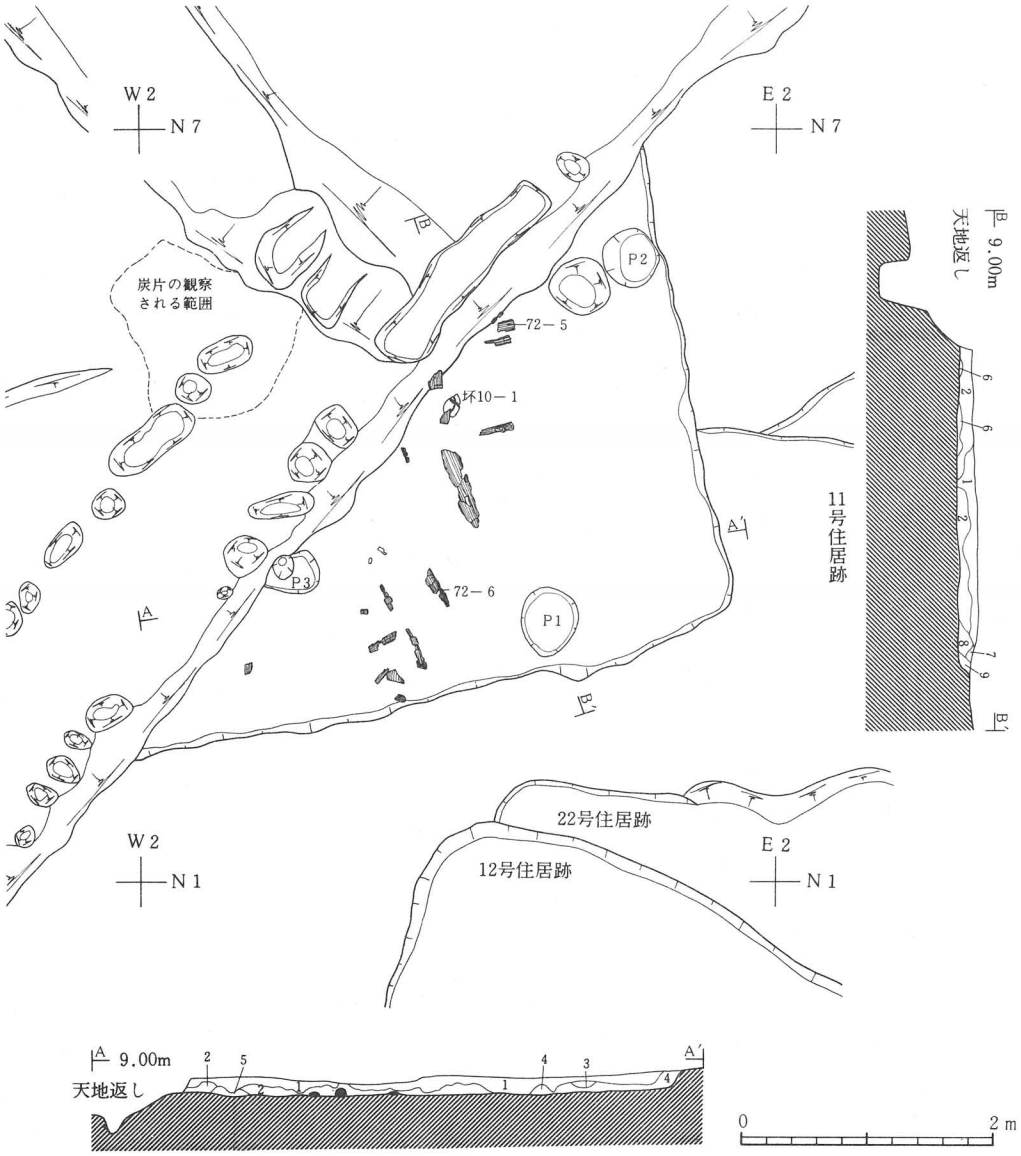
第32図　８号住居跡出土土師器

９号住居跡（ＳＩ　９）

９号住居跡は、12号住居跡の一部を、重複関係にある新しい住居跡と誤認して調査したものであった。したがって、９号住居跡は12号住居跡と同一で、その一部を形成するものである。

10号住居跡（ＳＩ　10）

〔平面形・保存状況・重複〕方形または長方形を呈すと考えられるが、天地返しによって対角線と平行に北西部が半分以上削平されている。10号住居跡南東角は、11号住居跡の北西角を切っている。床面レベルは10号住居跡が低い。



層No.	土　　色	土　性	そ　の　他	5	10ＹＲ3/4暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む
1	10ＹＲ5/4褐　色	砂質シルト	炭化物・土師器を含む	6	10ＹＲ5/3褐　色	砂質シルト	炭を斑点状に含む
2	10ＹＲ3/4暗褐色	砂質シルト	炭化物を多量に含む	7	10ＹＲ5/4褐　色	砂質シルト	炭化物を含む
3	10ＹＲ5/6褐　色	砂質シルト	炭化物を極小量含む	8	10ＹＲ5/4暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む
4	10ＹＲ5/4褐　色	砂質シルト	米つぶ大の炭を小量含む	9	10ＹＲ5/4暗褐色	砂質シルト	No.8層より暗い

第33図　10号住居跡実測図

〔規模〕北壁・西壁が残存しないため、規模は不明である。東壁の残存長は3.75m、南壁の残存長は4.48mを計る。

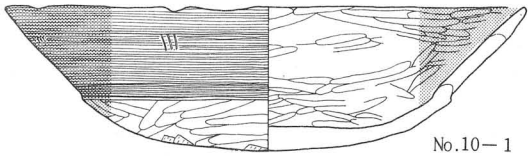
〔堆積土〕残存部の堆積土は10～16cmあり、9層に細分される。褐色～暗褐色の砂質シルトで、層中には炭化物を多く含む。また部分的に焼土も観察された。

第19表　10号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸（3.75m） 東西軸（4.84m） 面積	南北軸 N－10°－W 東西軸 N－80°－E	東4～12cm 西 南3～12cm 北	位置不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 8.68m	不明	SI15 ↓ SI14→SI22 ↓ ↙ ↓ SI13 SI12 ↓ SI11 ↓ SI10	北半削平 西半削平

	P1	P2	P3
平面形	楕円形	円形	不整円形
規模	56×45	46×44	40×34
深さ	3	9	9
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)



No.10－1

0　10cm

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
10-1	土師器	坏大	床直	ヨコナデ		ナデ・ケズリ	ミガキ		ミガキ	5.7	20.4	15.3	½	3	39

第34図　10号住居跡出土土師器

〔壁・床面〕東壁・南壁とも約50°程の比較的緩やかな立ち上がりをもつ。床面はほぼ平坦である。床面上からは多量の炭化材が出土し、また、床面も炭化物・焼土によって汚れていた。床面の状況から10号住居跡は、火災に遇っていると考えられる。なお、攪乱部分においても10号住居跡の北西部にあたる所に、東西・南北とも140cm程の範囲で地山に刺さる炭化物が観察された。

〔柱穴〕床面上で3個のPitが検出されたが、どのPitも浅く、かつ配置をみても柱穴と考えられるものはない。

〔遺物出土状況〕堆積土中からは、坏・甕類の小片が72点出土したが、復元できるものはない。床面からの出土遺物は、住居跡中央付近で、炭化材の下より発見された坏が1点あるに過ぎない。

第20表　10号住居跡出土遺物集計表

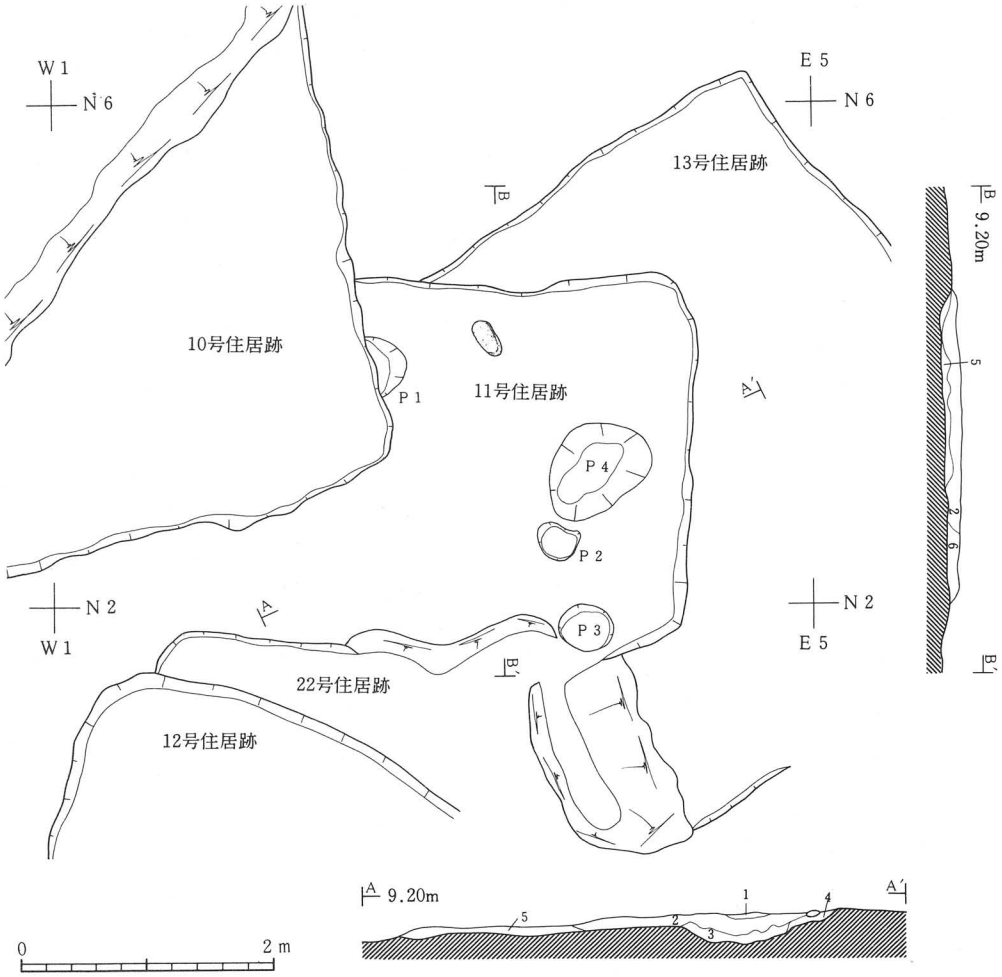
出土地点・層位	堆積土中		床面	計
種別	土師器			
器種	坏	甕類	坏	
個体・破片数	7	65	1	73
実測点数			1	1

11号住居跡（SI 11）

〔平面形・保存状況・重複〕南東角を除く南辺と西壁を削平及び10号住居跡との重複によって失っている。平面形は、方形または長方形を呈すと考えられる。13号住居跡の西側角付近を切り、10号住居跡に切られる。床面レベルは13号住居跡より低く、10号住居跡より高い。

〔規模〕西南両壁を失っているために大きさは不明である。残存部の範囲は南北3.04m、東西3.45mを計る。やや東西軸が長く、比較的小形の住居跡である。

〔堆積土〕5～33cmの層厚で堆積土が残り、6層に細別される。褐色・黒褐色・にぶい黄褐色



層No.	土　　色	土　性	そ　の　他	4	10ＹＲ4/4褐　　色	砂質シルト	10ＹＲ3/2を含む
1	10ＹＲ4/4褐　　色	砂質シルト	炭化物を含む	5	10ＹＲ4/4褐　　色	砂質シルト	炭化物を含む
2	10ＹＲ3/2黒　褐　色	砂質シルト	炭化物を含む	6	10ＹＲ5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄・炭化物を含む
3	10ＹＲ5/3にぶい黄褐色	砂質シルト					

第35図　11号住居跡実測図

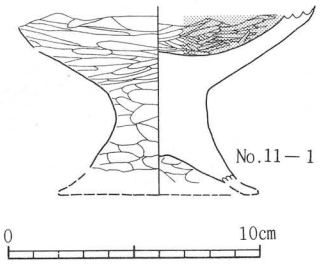
第21表　11号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸(3.04m) 東西軸(3.54m) 面　積	南　北　軸 N－3°－E 東　西　軸 N－90°－W	東6～10cm 西 南 北7～12cm	位　置 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.88m	不　明	S I 15 ↓ S I 14 ↘ ↓ S I 13 ↙ ↓ S I 11 ↓ S I 10 S I 22 ↓ S I 12	西半削平 南半削平

	P 1	P 2	P 3	P 4
平面形	半　円　形	楕　円　形	円　　形	楕　円　形
規　模	48×24	34×27	47×37	86×66
深　さ	4	4	3	14
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

の砂質シルトからなり、炭化物を含む層が多い。

〔壁・床面〕残存する北・東両壁は約40°で緩く立つ。東壁の中央部はやや住居の内側に入っている。床面にはわずかな起伏が認められ、東壁中央付近には長軸90cm、短軸60cmの楕円形のPit（P．6）が存在する。また北壁の中央付近には長さ32cm、直径10cm程の河原石が、地山に刺さった状態で傾斜して立っていた。



第36図　11号住居跡出土土師器

第22表　11号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中			計
種別	土師器		須恵器・甕	
器種	坏	甕類		
個体・破片数	16	86	1	103
実測点数	1			1

遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
				脚柱部	脚裾部	その他	脚柱部	脚裾部	その他	脚高	脚柱径	脚裾径			
11－1	土師器	高坏	堆積土	ナデ			ナデ			4.1	3.8	(7.9)	⅔	1	39

〔柱穴〕床面からはP．4を含めてPitは4個検出された。Pitはいずれも浅く、また配列からも柱穴と判断できるものもない。

〔遺物出土状況〕堆積土中より不規則な状況で、土器片が103点出土した。実測できるものは土師器高坏の脚部片が1点だけである。床面上の遺物はない。

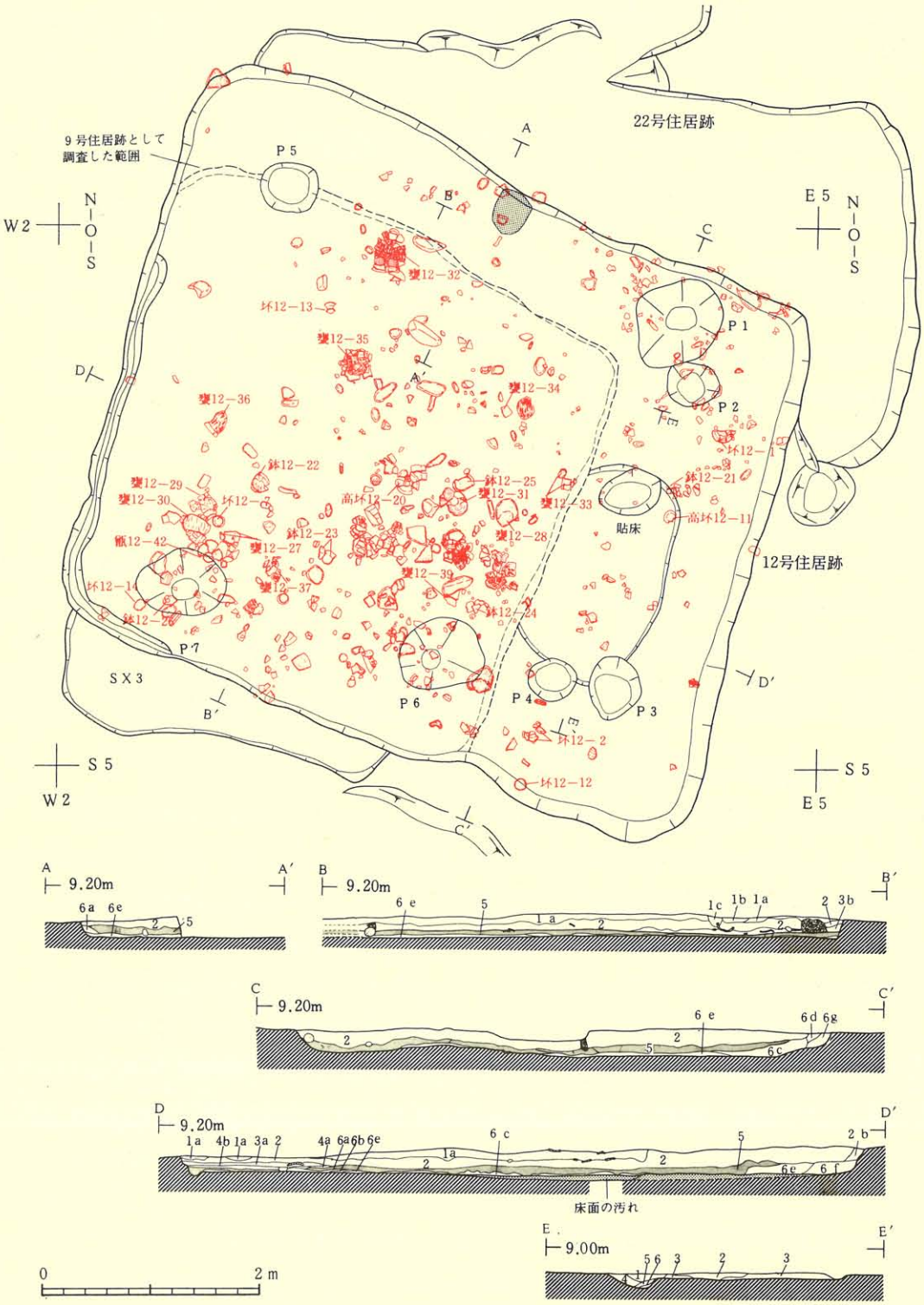
12号住居跡（SI 12）

12号住居跡は、確認時において褐色の堆積土（2層）を切っているかのような暗褐色土層（1層）が、ほぼ方形を呈して住居跡西南部に分布していたので、これを12号住居跡を切る新しい住居跡の重複と誤認し、9号住居跡として調査した。しかし、12号住居跡の調査後、遺物出土状況、柱穴の配列、土層断面図の検討、及び両住居跡出土遺物の接合関係の検討（両住居跡の出土遺物で9号とした部分の壁から離れたものが多数接合）により、9号住居跡と12号住居跡は、同一の住居跡を堆積土の違いによって別々の住居跡として調査していたことが判明した。これにより、9号住居跡は欠番となり、出土遺物等は、12号住居跡出土遺物に編入した。

〔平面形・保存状況・重複〕平面形は、菱形に近い東西方向の長方形を呈す。遺存状況は、本調査の22軒中では良好で、四壁が全て残存している。22号住居跡と3号性格不明遺構を切っており、床面レベルは両遺構より低い。

〔規模〕南北軸5.36m、東西軸6.16mを計り、80～100cm程東西軸が長い。

〔堆積土〕堆積土は15～24cm残り、16層に細別された。16の層は、6層に大別できる。1層は9号住居跡と誤認した暗褐色の砂質シルトで、住居跡南西部を中心として分布する。2層は褐



第37図　12号住居跡実測図

層No.	土　色	土　性	そ の 他
1 a	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	土器片多数出土・木炭片・礫多数含む
1 b	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
1 c	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	土器片出土
2	10YR4/4褐　色	砂質シルト	木炭片・骨片・土器片を多く含む
3 a	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
3 b	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
4 a	10YR4/4褐　色	砂質シルト	
4 b	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	土器片、炭化物、骨片を含む
6 a	10YR4/4褐　色	砂質シルト	
6 b	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	粒子の粗い白色の砂を含む
6 c	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
6 d	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
6 e	10YR4/4褐　色	砂質シルト	
6 f	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
6 g	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	

貼　床

層No.	土　色	土　性	そ の 他
1	10YR4/4褐　色	砂質シルト	炭化物を少量含む
2	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物片を含む
3	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	炭化物・焼土を含む
4	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	土師器・坏出土炭化物を含む
5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	
6	10YR4/4褐　色	砂質シルト	

第23表　12号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ マ ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸　5.36m 東西軸　6.16m 面　積 33.01㎡	南 北 軸 N−15°−E 東 西 軸 N−65°−W	東13～26cm 西9～10cm 南14～18cm 北9～20cm	位　置　北壁中央付近 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.76m	P5　P2 P7　P3	SI15 → SI14 → SI13 → SI11 → SI10 SI14 → SI22 SI13 → SI12	

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
平面形	楕 円 形	円　形	円　形	円　形	円　形	楕 円 形	楕 円 形
規　模	91×81	48×38	58×49	45×38	52×48	75×64	82×62
深　さ	24	13	21	7	20	21	18
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

色の砂質シルトで、住居跡の北辺部・東辺部及び1層の下に広く分布する。3・4層は住居跡の壁際に狭い範囲に薄く分布する。5層は土器片や炭化物・骨片を含み、汚れた土層で住居跡内に広く分布する。また5層の上面からは、多量の土器が出土した。6層は壁直下または床面上に分布する褐色または暗褐色の砂質シルトである。

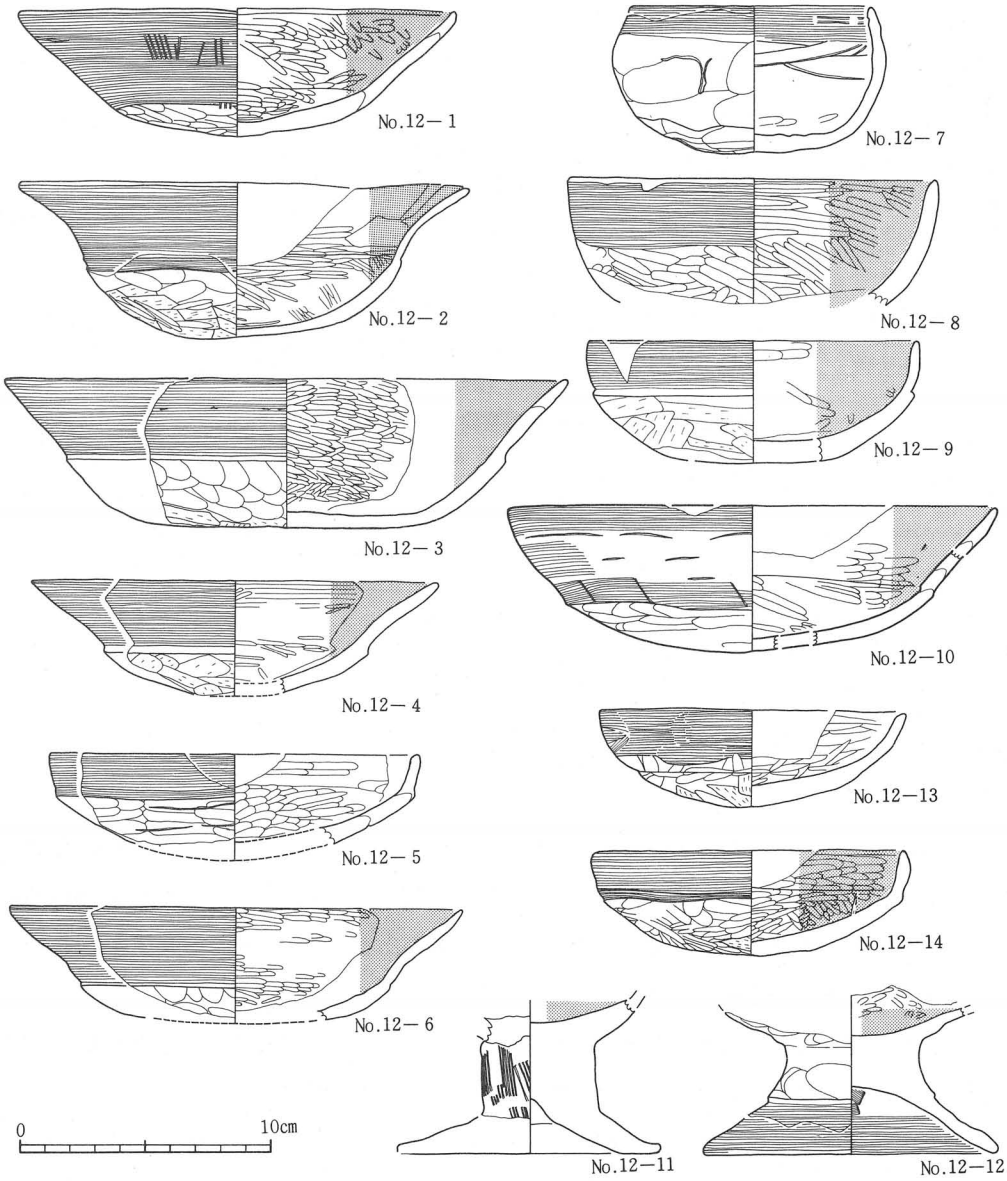
〔壁〕平面的にみると、西壁と東面はほぼ直線となっているが、南壁は緩い凹凸があり、北壁は西半部が外側に張り出している。壁の立ち上がりは60°～70°で立つ。

〔床面〕床面はほぼ平坦である。砂質シルト層を床面としているが、中央部を中心にかなり汚れている。東辺中央付近には部分的に貼床が認められた。貼床の範囲は南北2.05m、東西1.11mで楕円形に広がり、これを剝ぐと浅い落ち込みとなり、北端はPit状に下がる。

〔柱穴〕Pitは7個検出された。配列状況からP.2・P.3・P.5・P.7が主柱穴と考えることができる。P.2−P.3は286cm、P.2−P.5は413cm、P.3−P.7は406cm、P.5−P.7は375cmを計り、柱の組み方は住居跡と同じ東西方向に長い台形となる。

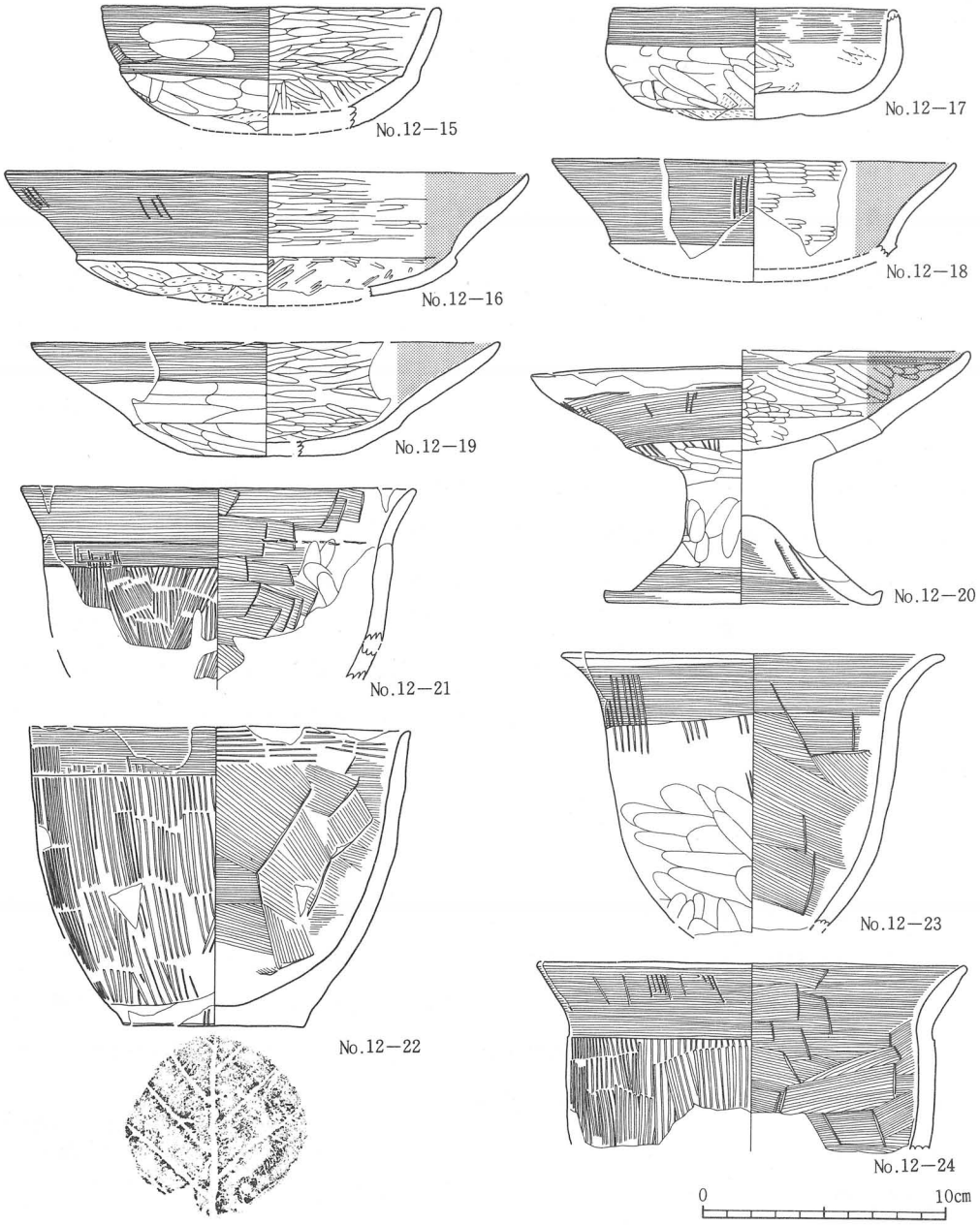
〔カマド〕カマドは、本体・煙道とも検出されなかったが、北壁中央付近に残る焼土面は、カマドの位置を示していると考えられる。焼土面の範囲は、南北40cm、東西32cmを計る。

〔周溝〕西辺の南寄り⅔と南辺の西南角付近に、上面幅10～20cm、深さ6cm前後（床面より）の周溝状の溝が検出された。断面観察によれば、5層と同様の堆積土が入っているので、住居



遺物№	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
12－1	土師器	坏小	堆積土中	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	5.0	17.2	9.8	½	4Ea	40
12－2	土師器	坏小	堆積土中	ヨコナデ		ケズリ・ミガキ	ミガキ		ミガキ	6.1	17.8	12.4	½	4Eb	40
12－3	土師器	坏大	堆積土中	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	5.9	22.2	17.3	⅙	3	
12－4	土師器	坏小	1～4層	ヨコナデ		ヘラケズリ	ハケメ・ミガキ		ミガキ	(4.5)	16.1	10.4	⅙	4Eb	
12－5	土師器	坏小	1～4層	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(3.6)	14.5	14.2	⅙	4Ab	
12－6	土師器	坏小	1～4層	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(4.3)	17.8	12.2	⅙	4Ea	
12－7	土師器	坏小	1～4層	ヨコナデ		ナデ	ヨコナデ		ナデ・ミガキ	5.7	9.4	8.8	完	2A	40
12－8	土師器	坏小	1～4層	ヨコナデ		ミガキ	ミガキ		ミガキ	(5.0)	14.5	14.0	½	2B	
12－9	土師器	坏小	5層上面	ヨコナデ		ケズリ	ミガキ		ミガキ	4.8	13.1	12.7	½	3	40
12－10	土師器	坏小	5層上面	ヘラナデ・ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	5.8	19.3	14.6	⅔	4Ea	40
				脚柱部	脚裾部	その他	脚柱部	脚裾部	その他	脚高	脚柱径	脚裾径			
12－11	土師器	高坏	5層上面	ハケメ						5.2	4.5	10.3	(½)	1	40
12－12	土師器	高坏	5層上面	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ヘラナデ	ヨコナデ	ミガキ	4.7	5.3	11.5	(⅔)	1	40
12－13	土師器	坏小	6層及び床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	3.8	12.1	8.6	完	2B	40
12－14	土師器	坏小	6層及び床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	4.1	12.2	11.8	完	4Ab	40

第38図　12号住居跡出土土師器（1）



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整				内面調整				法量(cm)			残存	分類	写真図片
				口縁部	体部	底部		口縁部	体部	底部		器高	口径	底径			
12−15	土師器	坏小	6層及び床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ		ミガキ		ミガキ		(5.0)	13.7	12.1	½	4D	40
12−16	土師器	坏大	6層及び床面	ヨコナデ		ケズリ		ヨコナデ		ミガキ		(5.5)	21.2	15.5	½	2	40
12−17	土師器	坏小	6層及び床面	ヨコナデ		ケズリ・ナデ		ミガキ		ミガキ		4.5	11.5	12.0	½	2A	40
12−18	土師器	坏小	6層及び床面	ヨコナデ				ミガキ		ミガキ		(4.0)	16.4	11.8	1/10	4Ea	
12−19	土師器	坏小	貼床中1層	ヨコナデ		ナデ		ミガキ		ミガキ		4.6	19.2	11.0	½	4Ea	
				坏口縁部	坏底部	脚柱部	脚裾部	坏口縁部	坏底部	脚柱部	脚裾部	器高	脚柱径	脚裾部			
12−20	土師器	高坏	6層及び床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ナデ	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	ヘラナデ	ヨコナデ	10.4	17.8	11.0	完	2B	40
12−21	土師器	鉢Ⅱ	堆積土中	ヨコナデ	ハケメ			ヘラナデ	ヘラナデ			(7.0)	16.0		½	1C	
12−22	土師器	鉢Ⅱ	1〜4層	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ		ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ		12.1	15.5	7.4	½	1A	
12−23	土師器	鉢Ⅱ	5層上面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ		(11.3)	15.6		(⅓)	1C	
12−24	土師器	甕Ⅱ	1〜4層	ヨコナデ	ハケメ			ヘラナデ	ヘラナデ			(7.5)	17.3		(⅓)	2	

第39図　12号住居跡出土土師器（2）

第24表　12号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中（1～6層）								1～4層						5層上面			6層及び床面				ピット中			貼床中		計
種別	土師器				須恵器		滑石製丸玉	輪状石製品	土師器					琥珀片	土師器			土師器				土師器			土師器		
器種	坏	甕類	鉢	手捏ね	甕類	壺？			坏	甕類	甑	鉢	手捏ね		坏	甕類	鉢	坏	甕類	甑	手捏ね	甕類	鉢	手捏ね	坏	甕類	
個体・破片数	182	1181	1	4	2	1	1	1	26	173	2	2	1	1	12	166	2	26	160	1	1	24	1	1	4	10	1986
実測点数	3		1	3	2	1	1	1	5	7	2	2	1	1	4	6	2	7	1		1		1	1	1		54

跡使用時には開口していた可能性がある。この溝は、他辺においては検出されなかった。

〔遺物出土状況〕堆積土各層及び床面から多量の遺物が出土している。堆積土の1層から5層上面までは、大小の礫とともに土師器片を主とする多量の遺物が散乱した状態で出土し、特に5層上面においては、潰れているが復元可能な土師器の坏4個体、甕6個体、鉢2個体の計12個体が出土している。床面上からの遺物としては坏が多く、復元可能なものが7個体ある。甕は坏に比べて少なく1個体だけである。床面の遺物に特に規則性は認められない。

13号住居跡（SI 13）

〔平面形・保存状況・重複〕西角から南角付近を11号住居跡及び攪乱によって削平され、東南辺の中央付近も耕作により削平されて壁が残存しない。平面形は残存部の状況から方形または長方形と考えられる。14号住居跡・15号住居跡・22号住居跡を切っており、11号住居跡に切られる。床面レベルは、11号住居跡・14号住居跡・22号住居跡より高く、15号住居跡より低い。

〔規模〕西北壁から東南壁までは5.08m、東北壁から残存部までは3.76mを計る。

〔堆積土〕堆積土は5～10cmと薄く、保存状態は良くない。土層は5層に細別され、暗褐色と褐色の砂質シルトからなる。堆積土中の遺物量は少ない。

〔壁・床面〕壁面は下端部だけが残るが、20°～50°とかなり緩い傾斜となっている。

床面は中央部がわずかに高いがほぼ平坦である。壁・床面とも褐色の砂質シルトである。

〔柱穴〕床面上では4個のPitが検出された。このうちP.1とP.2は、

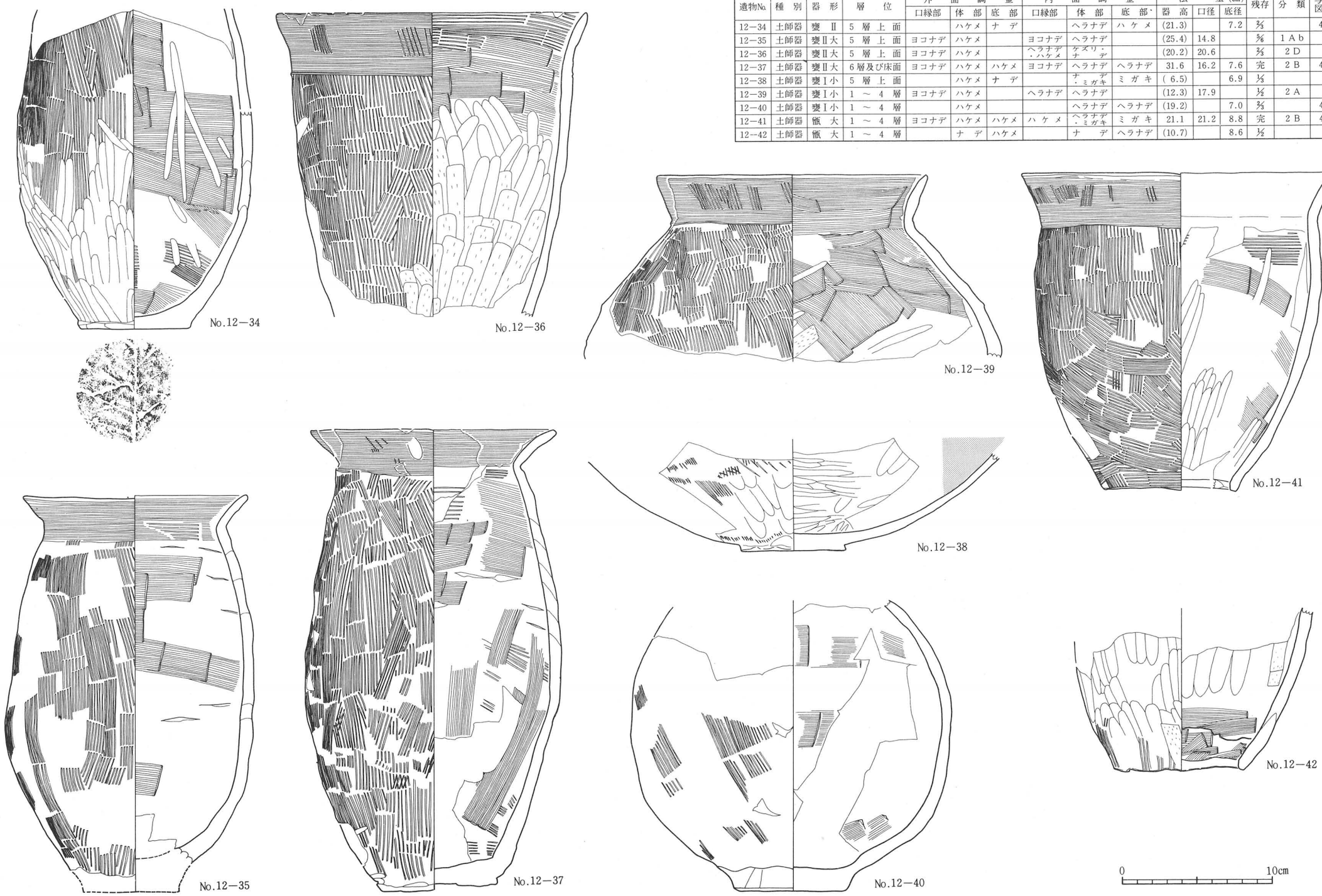
第25表　13号住居出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中			計
種別	土師器		土製紡錘車	
器種	坏	甕類		
個体・破片数	9	50	1	60
実測点数			1	1

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
12−25	土師器	鉢 Ⅱ	5層上面	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ・ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	13.4	17.6	6.7	½	1C	41
12−26	土師器	鉢 Ⅱ	P2	ナデ	ケズリ・ナデ	ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	8.6	18.1	5.6	⅓	1D	
12−27	土師器	甕Ⅱ小	1～4層	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ヨコナデ	ケズリ・ハケメ		(15.2)	17.9		⅔	2C	41
12−28	土師器	甕 Ⅱ	1～4層	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ	ヘラナデ		(7.2)	24.6		(¼)	2	
12−29	土師器	甕Ⅱ小	1～4層	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ		20.3	13.3	7.9	⅚	2B	41
12−30	土師器	甕Ⅱ小	1～4層	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	23.3	22.4	7.3	½	2C	41
12−31	土師器	甕Ⅱ大	1～4層	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ・ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	30.9	15.4	6.4	完	1Ab	41
12−32	土師器	甕Ⅱ大	5層上面	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	32.0	17.6	6.3	¾	2A	42
12−33	土師器	甕 Ⅱ	5層上面	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(10.8)	19.6		⅓	2	

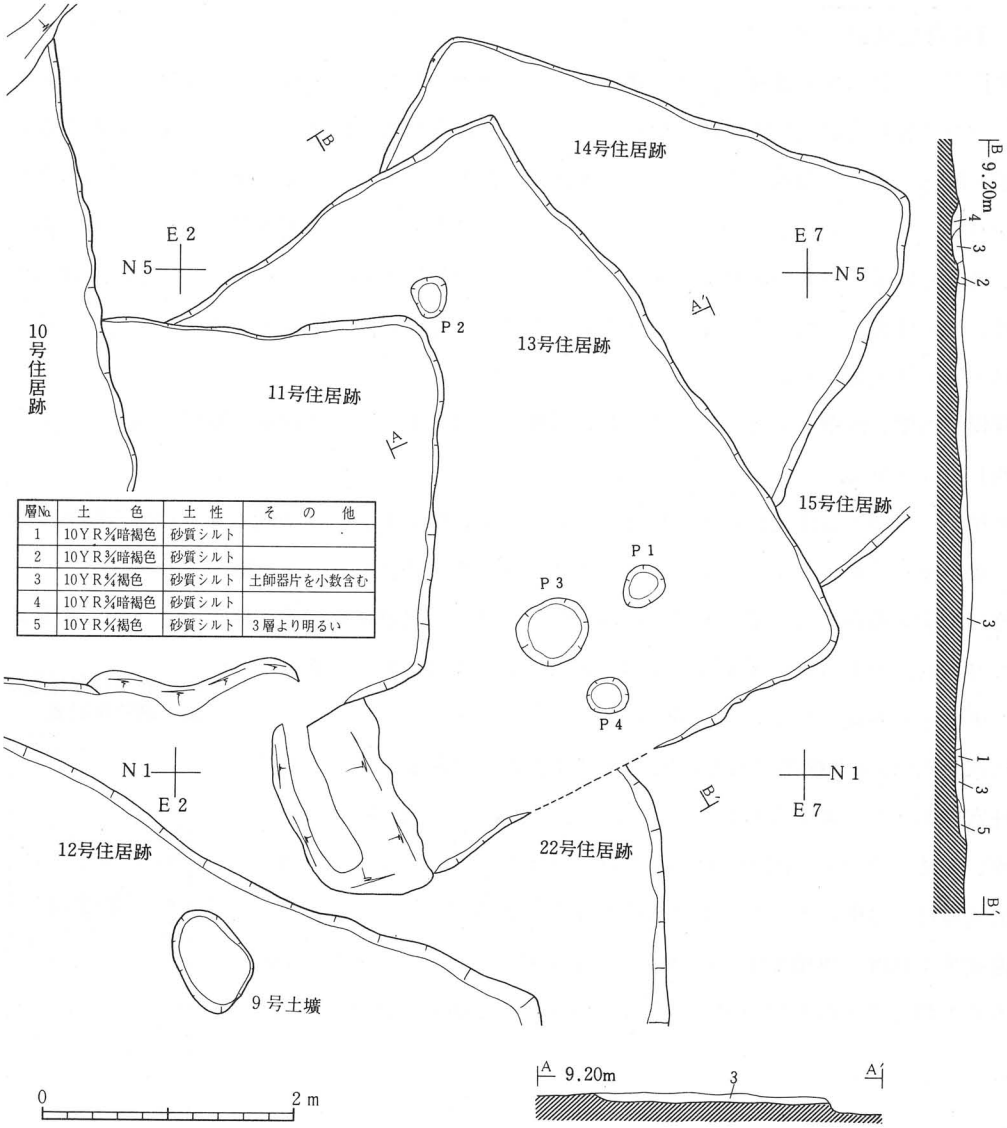
第40図　12号住居跡出土土師器（3）

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
12−34	土師器	甕Ⅱ	5 層上面		ハケメ	ナデ		ヘラナデ	ハケメ	(21.3)		7.2	⅔		42
12−35	土師器	甕Ⅱ大	5 層上面	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(25.4)	14.8		⅚	1Ab	
12−36	土師器	甕Ⅱ大	5 層上面	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ・ハケメ	ケズリ・ナデ		(20.2)	20.6		⅔	2D	
12−37	土師器	甕Ⅱ大	6 層及び床面	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	31.6	16.2	7.6	完	2B	42
12−38	土師器	甕Ⅰ小	5 層上面		ハケメ	ナデ		ナデ・ミガキ	ミガキ	(6.5)		6.9	⅓		
12−39	土師器	甕Ⅰ小	1 ～ 4 層	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ	ヘラナデ		(12.3)	17.9		½	2A	
12−40	土師器	甕Ⅰ小	1 ～ 4 層		ハケメ			ヘラナデ	ヘラナデ	(19.2)		7.0	⅔		42
12−41	土師器	甑大	1 ～ 4 層	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラナデ・ミガキ	ミガキ	21.1	21.2	8.8	完	2B	42
12−42	土師器	甑大	1 ～ 4 層		ナデ	ハケメ		ナデ	ヘラナデ	(10.7)		8.6	½		



第41図　12号住居跡出土土師器（4）

配置状況から主柱穴と考えられる。P．1－P．2は285cm、P．1から南東壁・北東壁はそれぞれ118cm・123cm、P．2から北西壁・北東壁はそれぞれ107cm・124cmを計る。



層No.	土　色	土　性	その他
1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
3	10YR5/4褐色	砂質シルト	土師器片を小数含む
4	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	
5	10YR5/4褐色	砂質シルト	3層より明るい

第42図　13号住居跡実測図

第26表　13号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸　5.08m 東西軸　(3.76m) 面　積	南北軸 N－32°－W 東西軸 N－62°－E	東4～7cm 西 南2～6cm 北2～4cm	位　置 燃焼部 煙　道	床面標高 8.94m	P2 ●　P1 ● ○　○	SI15→SI14→SI13→SI11→SI10 SI22→SI12	西半削平

	P1	P2	P3	P4
平面形	楕円形	楕円形	円　形	円　形
規　模	36×32	31×29	57×51	34×28
深　さ	8	12	7	8
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

〔遺物出土状況〕堆積土中に含まれる遺物の量も少なく、また床面上の遺物もない。

14号住居跡（SI 14）

〔平面形・保存状況・重複〕上面を耕作によって削平されたうえ、残っている部分も11号住居跡・13号住居跡及び22号住居跡に切られているため保存状況は良好ではなく、北辺の西端から西辺・南辺・東辺の南端を失っている。現状では長方形のような平面形を呈すが、西辺の立ち上がりは、住居跡の西部が削平されていることによるもので、本来の西壁はさらに西側にあったと考えられる。14号住居跡は、先述したように、11号住居跡・13号住居跡・22号住居跡に切られ、15号住居跡は切っている。床面のレベルは、13号住居跡・15号住居跡より低く、11号住居跡・22号住居跡より高い。

〔規模〕西壁と南壁を失なっているため、規模は不明であるが、残存部の範囲は南北5.50m、東西4.11m を計る。

〔堆積土〕堆積土は住居跡北側で15cm、13号住居跡に切られている南側は５～10cmの厚さで残る。褐色から暗褐色を呈し、１・５・６層はシルトで、他は砂質シルト層からなる。

〔壁・床面〕残存する北壁と東壁は約50°で立ち上がる。北壁は直線的に検出できたが、東壁はかなりの凹凸があった。床面は、多少の起伏はあるがほぼ平坦であった。壁・床面とも砂質シルトからなる。

〔柱穴〕Pit は４個検出された。P.１・２は位置的にみると、どちらかが柱穴であったと考えられる。P.３はP.１に対応する北辺の柱穴にみえるが、先述したように西辺が西へ延びると考えられることから、P.１に対応する柱穴は別にあったと考えるのが妥当であろう。

〔遺物出土状況〕堆積土中から126点の土師器片が出土し、　床面と Pit 中からも数点の土師器片が出土したが、いずれも小破片が散乱した状態

第27表　14号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中		ピット中	床面	計
種別	土師器				
器種	坏	甕類	甕類	甕類	
個体・破片数	13	113	5	9	140
実測点数					

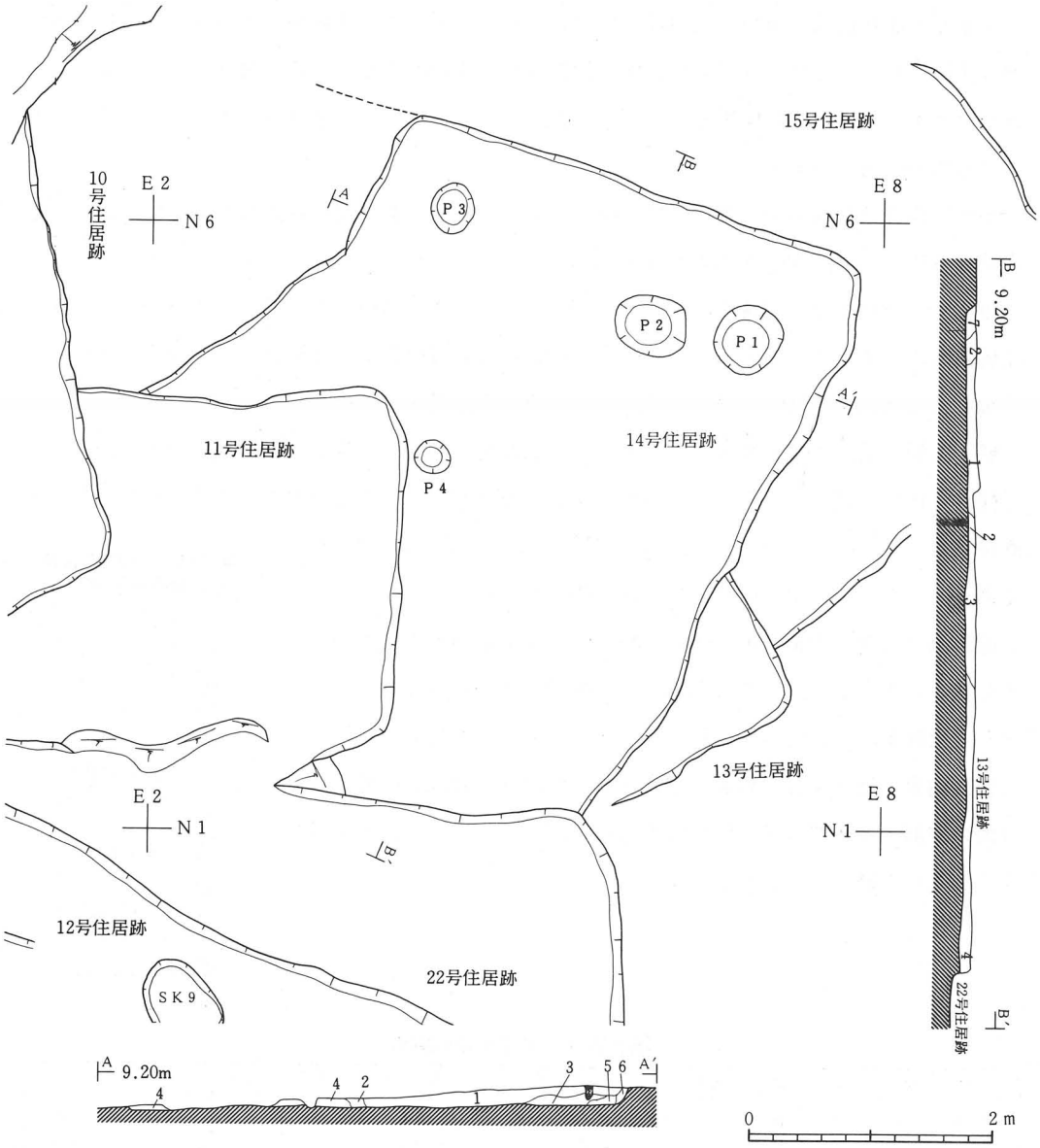
第28表　14号住居跡観察表

規模　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸（5.50m） 東西軸（4.11m） 面　積	南北軸 N－26°－E 東西軸 N－70°－W	東３～14cm 西 南 北４～11cm	位置不明 燃焼部 煙　道	なし 床面周溝 8.92m	● P１	SI15 ↓ SI14↘ ↓ SI13↙ ↓ SI11 ↓ SI10 SI22 ↓ SI12	

	P１	P２	P３	P４
平面形	円　形	楕円形	円　形	円　形
規　模	56×52	58×48	42×35	30×29
深　さ	14	24	23	16
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

であった。復元できる資料はない。出土した土師器片は、他の住居跡から出土した土師器と類似する特徴をもっている。床面から出土した破片のうち、口縁部の破片２点は両方とも口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラナデ調整されるものであるが、１点には口縁部と



層No.	土　色	土　性	そ　の　他	4	10ＹＲ⅚褐色	砂質シルト	
1	10ＹＲ⅚褐色	シ　ル　ト	にぶい黄褐色土を含む	5	10ＹＲ⅚褐色	シ　ル　ト	
2	10ＹＲ⅚褐色	砂質シルト		6	10ＹＲ⅚褐色	シ　ル　ト	5層に比し可塑性がやや小さい
3	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト		7	10ＹＲ⅚褐色	砂質シルト	5層に比し可塑性・粘性がやや小さい

第43図　14号住居跡実測図

体部の境に段があるが、他方には段が認められない。

15号住居跡（SI 15）

〔平面形・保存状況・重複〕北西部は耕作によって削平され、西部から西南部は、13号住居跡、14号住居跡によって切られており、保存状態は良くない。残存部から平面形は、方形または長方形と考えられる。9号住居跡から15号住居跡及び22号住居跡の7軒の重複関係にある住居跡中、最古の住居跡である。

〔規模〕西北及び西南壁がないので規模は不明であるが、東北壁から西南方向には3.85m、東南壁からP.1の西北端までは4.47mを計る。

〔堆積土〕堆積土は住居跡北部のPit（P.1）を含めて5層に細分される。このうち1・2層が住居跡内の堆積土で、層厚は3～8cmと薄い。にぶい黄褐色または褐色を呈す砂質シルトで、2層中には炭化物や焼土が含まれていた。堆積土中の遺物量は少ない。

〔壁・床面〕壁は下端が残るだけであるが、比較的急に立つ。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕Pitは3個あるが、このうちP.3は堆積土中より掘り込まれたもので15号住居跡とは直接関係しない。P.1・P.2も柱穴と考えることはできないものである。したがって本住居跡の柱穴は不明である。

〔遺物出土状況〕堆積土中、床面・Pit中から少量の土師器片が出土した。いずれも小片となったもので、復元できるものはない。出土した土師器片は、他の住居跡より出土したものと類似する。坏片には、内黒で外反する口縁部片が含まれ、Pit 1から出土した甕には、外面の体部と口縁部の境に弱い段を有し、内面へラミガキ、外面へラナデされた破片が含まれる。

第29表　15号住居跡出土遺物集計表

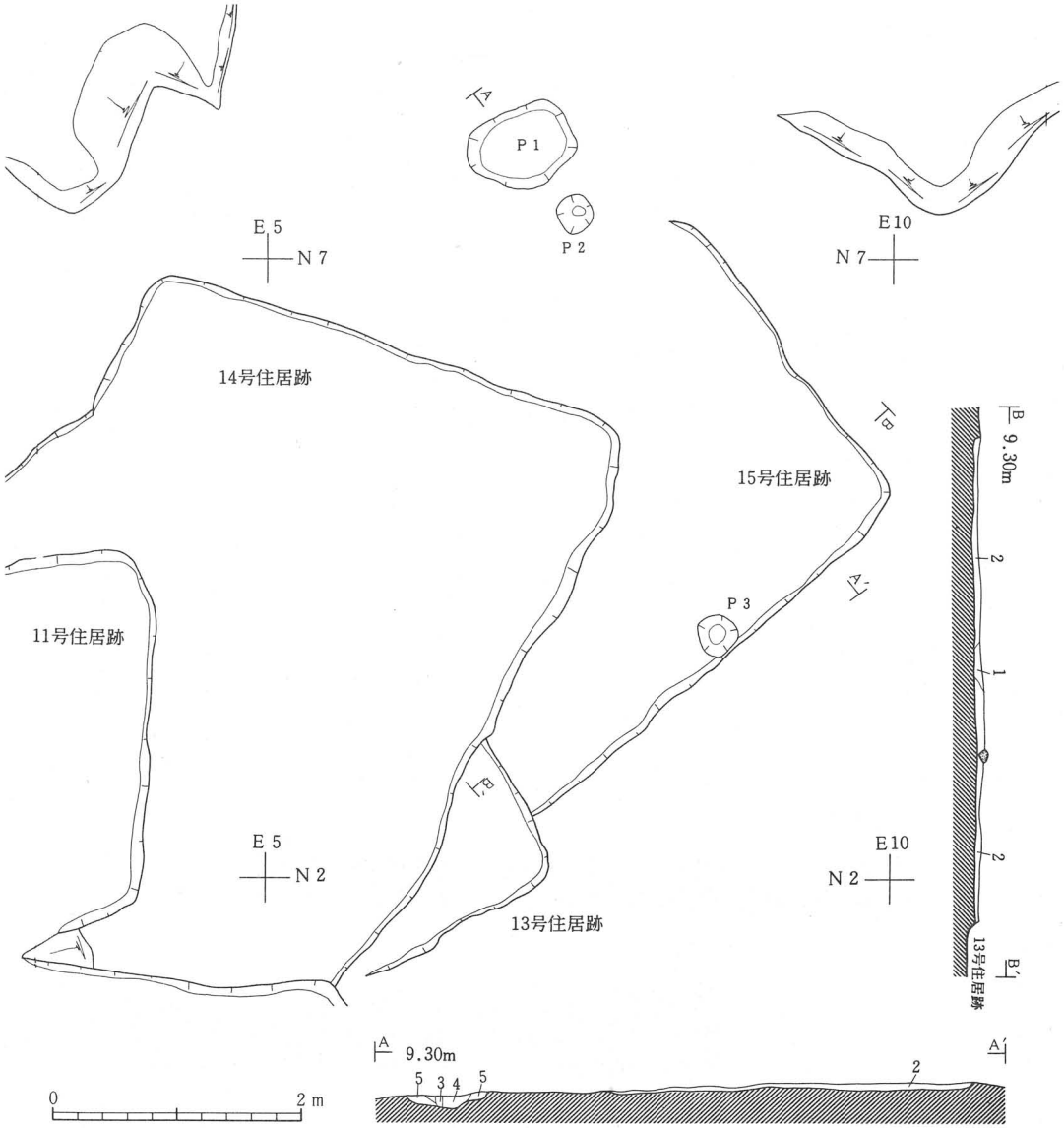
出土地点・層位	堆積土中		ピット中	床面		計
種別	土師器					
器種	坏	甕類	甕類	坏	甕類	
個体・破片数	3	28	11	2	5	49
実測点数						

第30表　15号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸（4.47） 東西軸（3.85） 面積	南北軸 N－38°－W 東西軸 N－50°－E	東2～5cm 西 南3～6cm 北	位置不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 9.06m		SI15 ↓ SI14↘ ↓ SI13 ↓ SI11 ↓ SI10 SI22 ↓ SI12	北半削平 西半削平

	P1	P2	P3
平面形	楕円形	楕円形	円形
規模	85×65	30×26	34×34
深さ	11	22	16
堆積土	シルト質砂	シルト	シルト

(cm)



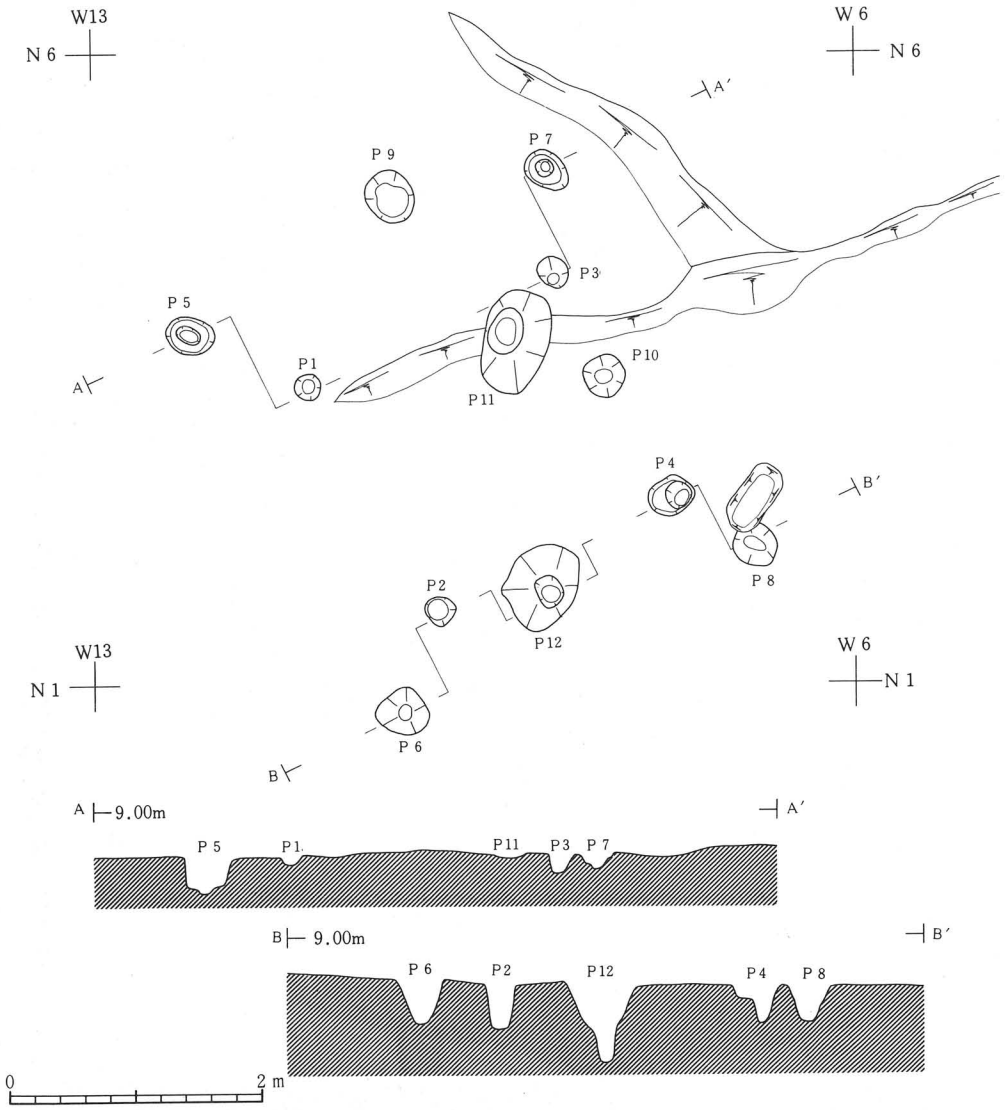
層No.	土　　色	土　性	そ　の　他	3	10ＹＲ4/4褐色	砂質シルト	
1	10ＹＲ4/4褐色	砂質シルト	土師器片を含む	4	10ＹＲ5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	土器片・炭化物を含む
2	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	焼土・炭化物を含む	5	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	

第44図　15号住居跡実測図

16号住居跡（SI 16）

〔平面形・保存状況・重複〕壁・床面ともに完全に削平されて、12個のPitが残るだけである。平面形は柱穴の配列、及び他の住居跡との関係からみて方形または長方形と推定される。

〔柱穴〕12個検出されたPitのうち柱穴は、小形のP.１・P.２・P.３・P.４の組み合わせと、



第45図　16号住居跡実測図

第31表　16住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸(4.12m) 東西軸(3.45m) 面積	南北軸 N−29°−W 東西軸 N−65°−E	東 西 南 北	位置不明 燃焼部 煙道	不明 床面標高 (8.60m)	P5 P7 P1 P3 P2 P4 P6 P8		全面削平 Pitのみ残存

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
平面形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	楕円形	不整楕円形
規模	22×20	25×24	26×21	38×30	41×30	37×36	36×28	35×32	42×36	34×32	82×53	70×54
深さ	6	35	17	30	27	36	10	28	18	23	31	64
堆積土	不明	砂質シルト	不明	砂質シルト	砂質シルト	シルト砂質	不明	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

これを囲む大形のP．5・P．6・P．7・P．8の組み合わせとが、ほぼ同一対角線上にあり、16号住居跡は拡張のための建替えが行われたと推定される。小形プランの柱穴間の距離は、P．1－P．2が204cm、P．3－P．4が230cm、P．1－P．3が211cm、P．2－P．4が204cmを計り、ほぼ方形に組む。これに対し、大形プランの柱穴間の距離は、P．5－P．6 341cm、P．7－P．8が339cm、P．5－P．7が309cm、P．6－P．8が307cmを計り、わずかに南北に長い方形に組んでいる。

〔その他の施設〕柱穴以外のPitのうちP.10は、小形プラン東辺のP．3とP．4の中間に位置し、P．9は大形プラン北辺のP．5とP．7のほぼ中間に位置する。P．9の上面からは、他のPitに比較してやや多くの焼土が検出された。P.11・P.12は大型のPitで、深く掘り込まれている。

〔遺物出土状況〕堆積土・床面が失われているため、P．9から甕片3点、P.10から甕片2点、P.12から甕片3点の計8点の土師器片が出土したに過ぎない。土師器片を出土したPitは柱穴以外である。土師器片はいずれも他の住居跡のものと類似する。

17号住居跡（SI 17）

〔平面形・保存状況・重複〕17号住居跡は、自然堤防の北西端に近い緩斜面に、他の住居跡から離れて1軒だけ検出された。住居跡の北西部は耕作土の下に住居跡の堆積土上面及び住居跡の周辺部一帯に広がる黒褐色土層に覆われていた。しかし、住居跡北西壁及び床面の保存状況は良好ではなかった。これは、住居跡が傾斜面に立地していることから、廃絶後山側からの埋没と同時に、谷側は浸食を受けて壁面を失っていたと推定される。住居跡北東部南側は土取りによって攪乱されている。平面形は残存部から方形、または長方形と考えられる。重複はない。

〔規模〕北西壁から東南壁は5.20m、北東壁から南西壁は5.22mを計る。

〔堆積土〕堆積土は南西部が厚く20～28cmあり、北半部は薄く5cm前後である。土層は8層に細分され、南半部は褐色から暗褐色の砂質シルトで、北半部は褐色及び暗褐色の酸化鉄を含んだ粘土質シルトからなる。層全体において2層の占める割合が多い。

〔壁〕南西壁は完全に残るが、南東壁は東端部欠損、東北壁は中央付近だけが残存。北西壁は西端部だけが残っている。残存する各壁は著しい凹凸がある。壁面は非常に緩やかな立ち上がりで、特に南東側は壁だけでなく、床面も住居跡中央へ向って傾斜している。

〔床面〕床面は北西側⅔はほぼ平坦であるが、南東側⅓は緩やかに高くなっている。東南側の床の汚れが目立った。壁、床面はシルトからなる。

〔柱穴〕Pitは、不定形のものを含めて20個検出された。どのPitも浅く、柱穴と成りうるか疑問もあるが、配列からみるとP．4・P．5・P.20が組みそうである。北側角はP.13、また

層No.	土　色	土　性	そ　の　他	4	10YR5/4褐　色	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物を含む
1	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物・粘土を含む	5	10YR5/4褐　色	シルト質粘土	炭化物を含む
1′	10YR5/4褐　色	砂質シルト	1層に比し粘性が少ない	6	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	砂・炭化物を含む
2	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物を含む多量の遺物出土(平安頃の須恵器出土)	6′	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	砂・炭化物を含む(6層に比し可塑性が小さい)
3	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄・炭化物を含む				

第46図　17号住居跡実測図

はP.14が組む可能性もあるが、かなり北西壁に寄っているので柱穴とは別のものと考える方が良いと思われる。P.4－P.5は312cm、P.5－P.20は372cmを計り、P.4－P.5－P.20はほぼ直角になる。17号住居跡では、主柱穴の他に、南西壁から南東壁の壁際に小さなPitが並んで検出される。これは何らかの施設に付随する可能性も考えられる点で注目される。

〔遺物出土状況〕堆積土中からは、堆積土の保存状況が良好でなかった割には500点を超す土器片が大小の礫とともに出土した。床面からの遺物の出土量も多く、住居跡南東角付近からは大型の甕2個体と坏2個体が出土し、住居跡中央南壁寄りからは、体部球形の甕1点と鉢1点、それに小形手捏ね土器6点がまとまって出土した。

第32表　17号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中					床面				計
種別	土師器		須恵器			土師器				
器種	坏	甕・類	坏	高坏	壺？	坏	甕類	鉢	手捏ね	
個体・破片数	28	500	1	1	1	3	60	1	6	601
実測点数			1	1	1	2	3	1	6	15

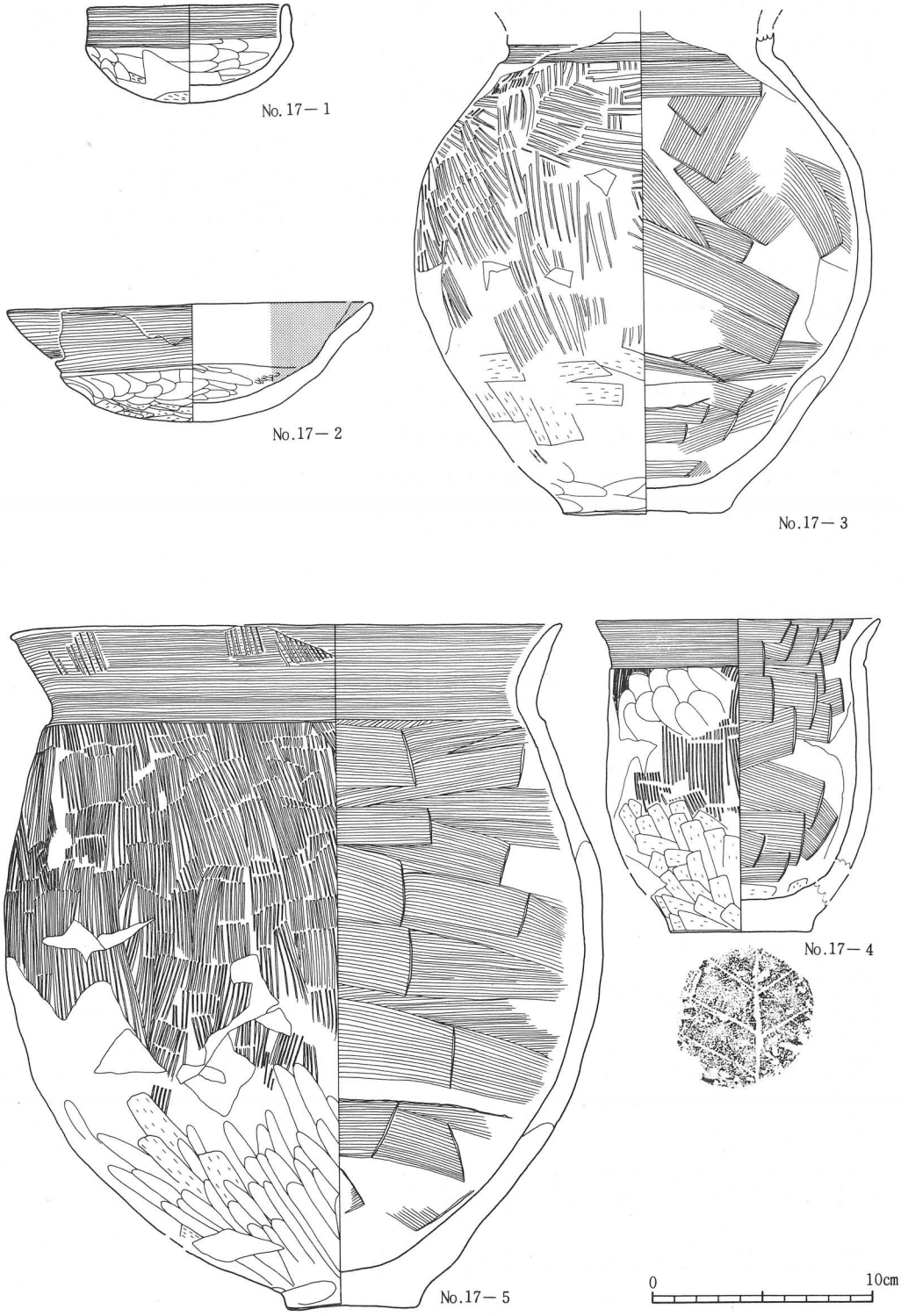
第33表　17号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸 5.22m 東西軸 5.20m 面積 27.14㎡	南北軸 N－32°－W 東西軸 N－62°－E	東1～3cm 西1～10cm 南0～13cm 北0～4cm	位置不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 7.96m	●P4　○ ●P5　●P20		

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
平面形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	不整楕円形	楕円形	不整楕円形	円形	楕円形
規模	36×34	37×24	34×31	57×46	59×52	29×27	19×17	25×19	35×26	190×139	36×35	44×27
深さ	11	7	6	5	13	3	6	5	4	8	9	8
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	不明

	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20
平面形	楕円形	楕円形	円形	楕円形	円形	不整楕円形	楕円形	楕円形
規模	39×32	48×41	25×22	49×31	25×21	100×54	84×60	67×47
深さ	6	6	10	9	6	12	5	12
堆積土	不明	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	不明	砂質シルト	砂質シルト

(cm)



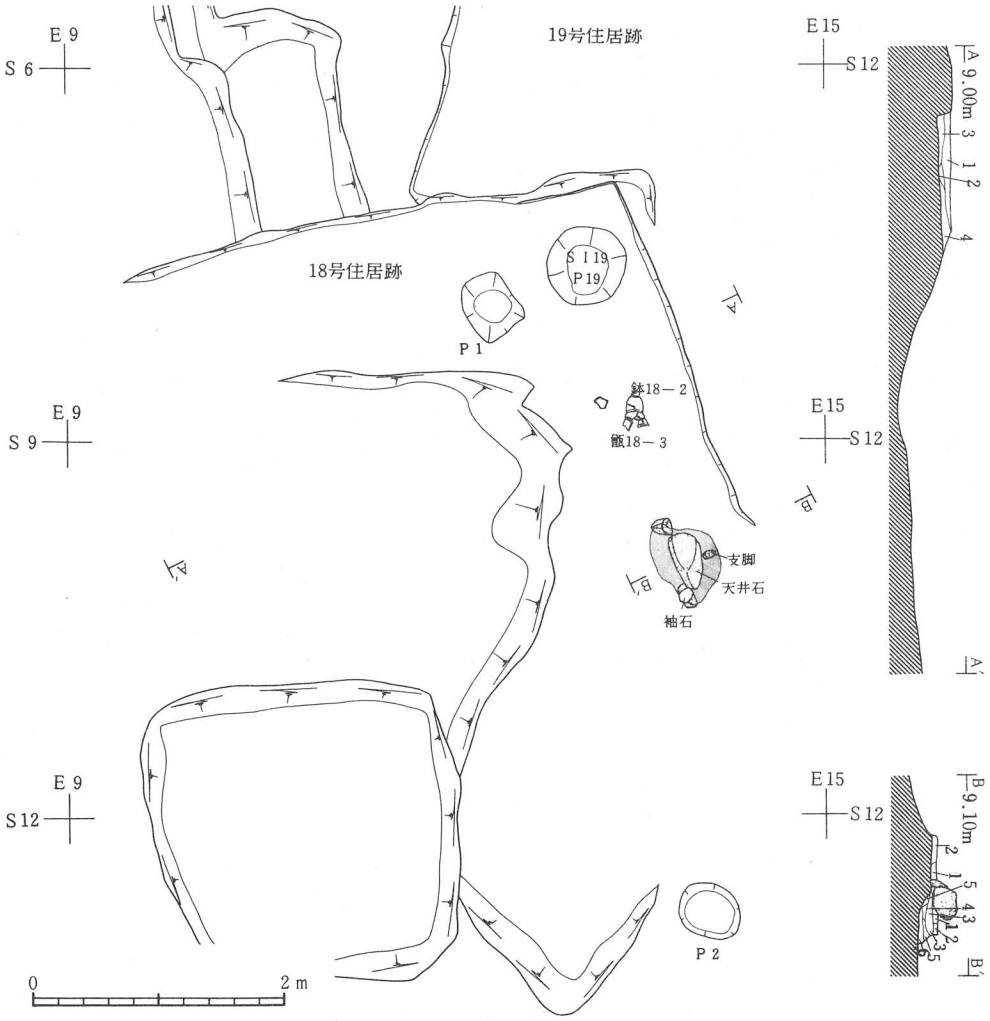
第47図　17号住居跡出土土師器（1）

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
17-1	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ケズリ	ヨコナデ		ナデ	4.4	9.1	9.4	½	4Ca	43
17-2	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ナデ・ケズリ			ミガキ	5.3	16.5	11.7	⅔	4Eb	43
17-3	土師器	甕Ⅰ小	床面		ハケメ・ケズリ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	22.7		7.4	⅔	2A	43
17-4	土師器	鉢Ⅱ	床面	ヨコナデ	ナデ・ハケメ	ケズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	14.1	12.8	6.3	¾	2C	43
17-5	土師器	甕Ⅰ小	床面	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	30.7	24.8	5.9	完	2E	43
17-6	土師器	甕Ⅰ大	床面	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	42.9	24.4	(8.0)	⅚	2Bc	43

第48図　17号住居跡出土土師器（2）

18号住居跡（SI 18）

〔平面形・保存状況・重複〕耕作による削平が著しく、北東角付近から東壁中央付近の壁際が残存するだけである。平面形は、北東角が直角に折れることから方形または長方形と考えられ



層No.	土　色	土　性	その他	層No.	土　色	土　性	その他
1	10YR¾褐色	砂質シルト	炭化物を含む	3	10YR⅝にぶい黄褐色	シ　ル　ト	
2	10YR⅔暗褐色	シ　ル　ト		4	10YR⅝褐色	シ　ル　ト	

第49図　18号住居跡実測図

第34表　18号住居跡観察表

規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸(6.1m) 東西軸(1.5m) 面　積	南　北　軸 N－20°－W 東　西　軸 N－76°－E	東11～12cm 西 南 北2～5cm	位　置　東壁中央付近 燃焼部　73×76 煙　道	なし 床面標高 8.77cm	○ ● P1 ○ ● P2	S I 19 ↓ S I 1　S I 7 ↓ S I 18	西半削平 南半削平

	P 1	P 2
平面形	楕　円　形	楕　円　形
規　模	51×40	52×42
深　さ	13	16
堆積土	砂質シルト	

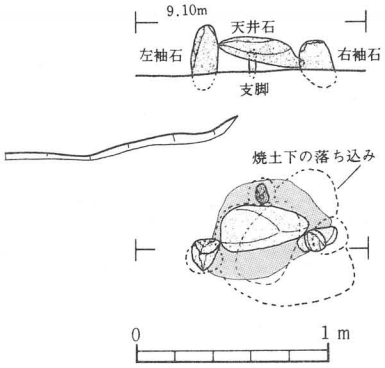
る。１号住居跡・19号住居跡を切っており、床面レベルは19号住居跡より低く、１号住居跡よりも高い。

〔規模〕西壁と南壁が残存しないため規模は不明であるが、北壁からカマド南端までは3.62m、P.２　南端までは6.10m を計る。東壁から西壁方向へは約1.5m の所まで床面が確認できた。

〔堆積土〕堆積土はベルト位置で４層に分けられた。１層は炭化物を含む褐色の砂質シルト層で、２層以下は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色のシルト層からなる。

〔壁・床面〕残存部の壁は垂直に近く立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕床面では３個の Pit が検出されたが、このうち北東隅の Pit は後の調査によって、18号住居跡に切られる19号住居跡南西角の柱穴であることが判明した。残るP.１・P.２は18号住居跡東壁と平行に並び、さらにカマドを挟んでほぼ等距離（多少P.１の側が短い）にあることから柱穴と考えられる。P.１－P.２は508cmあり、P.１から北壁までは約65cm、東壁までは130cmを計る。仮にP.１から北壁までの距離と、P.２から南壁までの距離が等しかったとすれば、18号住居跡の南北軸は640cm前後程あったと推定される。



層No	土　　色	土　性	その他
1	10ＹＲ3/2黒褐色	砂質シルト	
2	10ＹＲ3/4褐　色	砂質シルト	
3	10ＹＲ3/4褐　色	砂質シルト	
4	10ＹＲ3/4暗褐色	砂質シルト	
5	10ＹＲ3/4褐　色	砂質シルト	
6	10ＹＲ3/4暗褐色	砂質シルト	

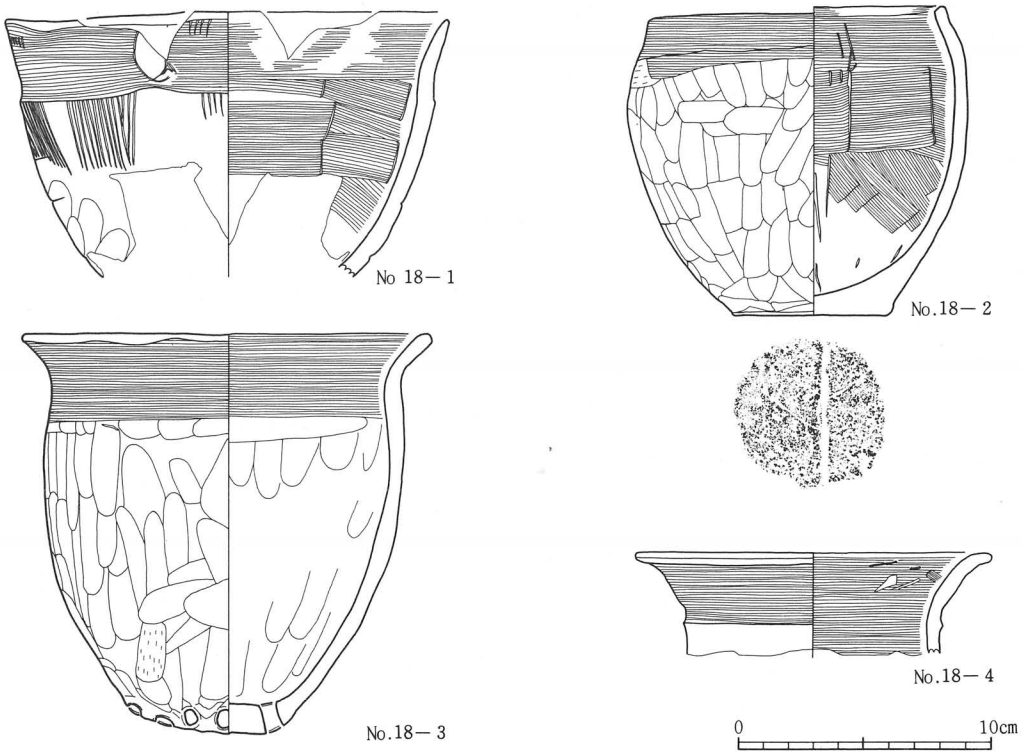
第50図　18号住居跡カマド実測図

第35表　18号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	ピット中	床面					カマド底面		計
種別	土師器								
器種	甕類	坏	甕類	甑	鉢	甕類	鉢		
個体・破片数	3	5	31	1	1	3	1		45
実測点数			1	1	1		1		4

〔カマド〕著しい攪乱を受けていたにもかかわらず、東壁中央付近と推定される所に石組みと焼土面が検出された。石組みは両袖石、天井石、支脚からなる。袖石の幅は外側で76cm、内側で44cmを計り、東壁までは73cmある。両袖石は立ったままの状態にあり、左側の石は上部を欠損するが、右側の石は完形で、その上端は床面のレベルより26cm高い。天井石は長さ46cm、幅23cm、厚さ16cmを計る楕円形の石で両袖石の間に落ちた状態で出土した。支脚の上端は床面レベルより12cm高い。石材は両袖石と支脚が安山岩、天井石が凝灰岩で全て加工されない河原石である。焼土面は、焚口の前面から袖石間、そして支脚の後方まで広がる。両袖と煙道は検出されなかった。なおこのカマドの焼土面を除去したところ、両袖石と支脚の基部の周りに小さく浅い掘り方が検出された。また、焼土面の範囲よりやや南（右）に偏して東西75cm、南北75cmの不整円形で深さ８cmの落ち込みが検出されている。この落ち込みの中心はP.１・P.２の中点に直交する。

〔遺物出土状況〕堆積土がほとんど残っていなかったため、堆積土層中の遺物はない。床面からは残存状況に比して多くの遺物が出土した。カマドの左側から出土した鉢と甑は、鉢の上に甑を重ねて置いたものが転倒した状態で出土し、またカマドの焚口部からは、鉢が潰れた状態で出土している。

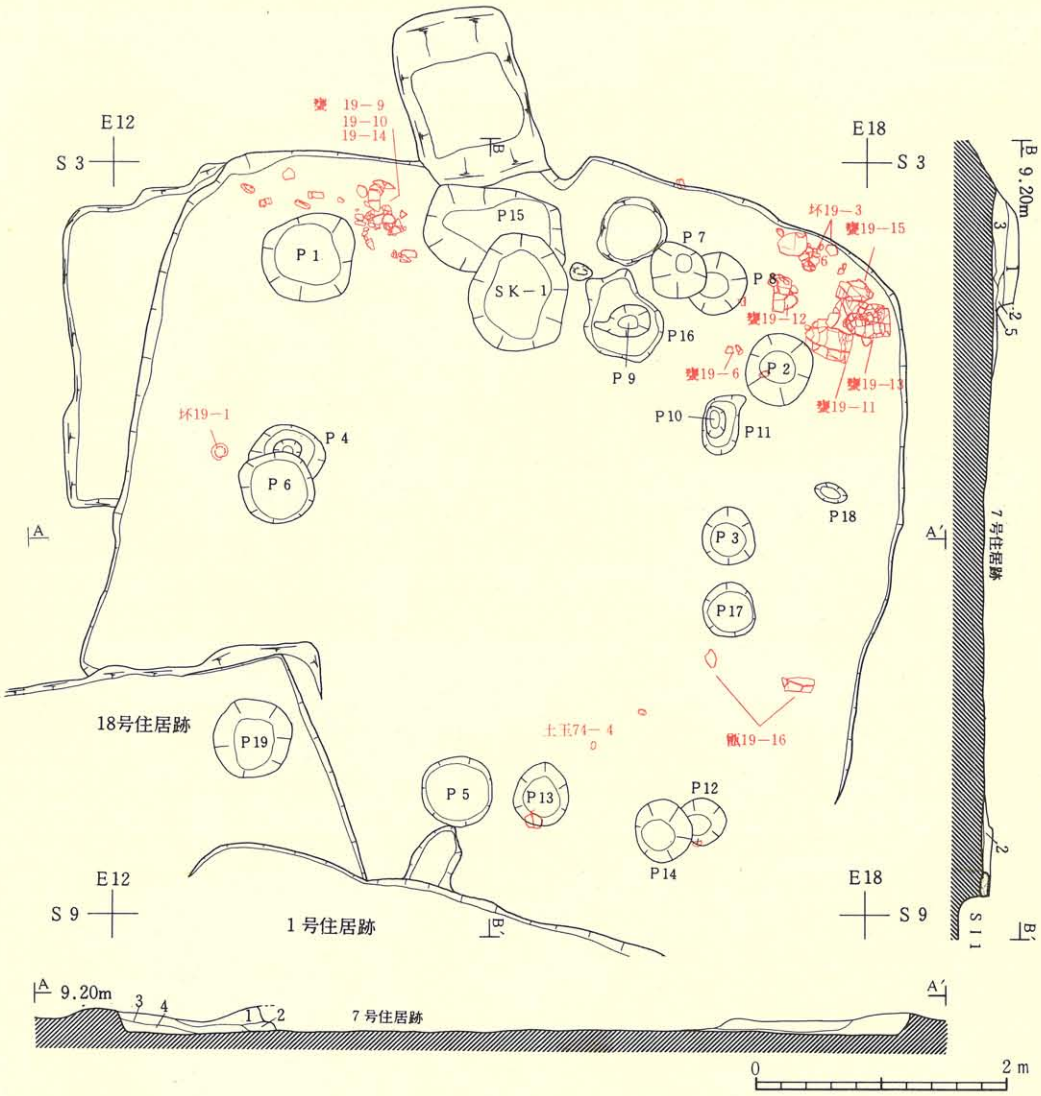


遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
18－1	土師器	鉢Ⅱ	かまど底面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		10.5	17.5		⅔	2C	44
18－2	土師器	鉢Ⅰ	床面	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	12.2	11.8	6.2	完	1Bb	44
18－3	土師器	甑小	床面	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	ナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	15.8	16.1	6.7	完	1C	44
18－4	土師器	甕Ⅱ小	床面	ヨコナデ			ヨコナデ			4.0	14.1		(¼)	2	

第51図　18号住居跡出土土師器

19号住居跡（SI 19）

〔平面形・保存状況・重複〕南壁と西南角、東南角を耕作による削平と、1号住居跡・18号住居跡に切られて欠損している。住居跡中央部は、19号住居跡の埋没後に掘り込まれた7号住居跡により堆積土と床面が失われている。また、カマド中央部も床面より掘り込まれた1号土壙により切られている。平面形は、残存部の形状から方形または長方形と考えられる。床面レベルは、1号住居跡・7号住居跡・18号住居跡より高い。

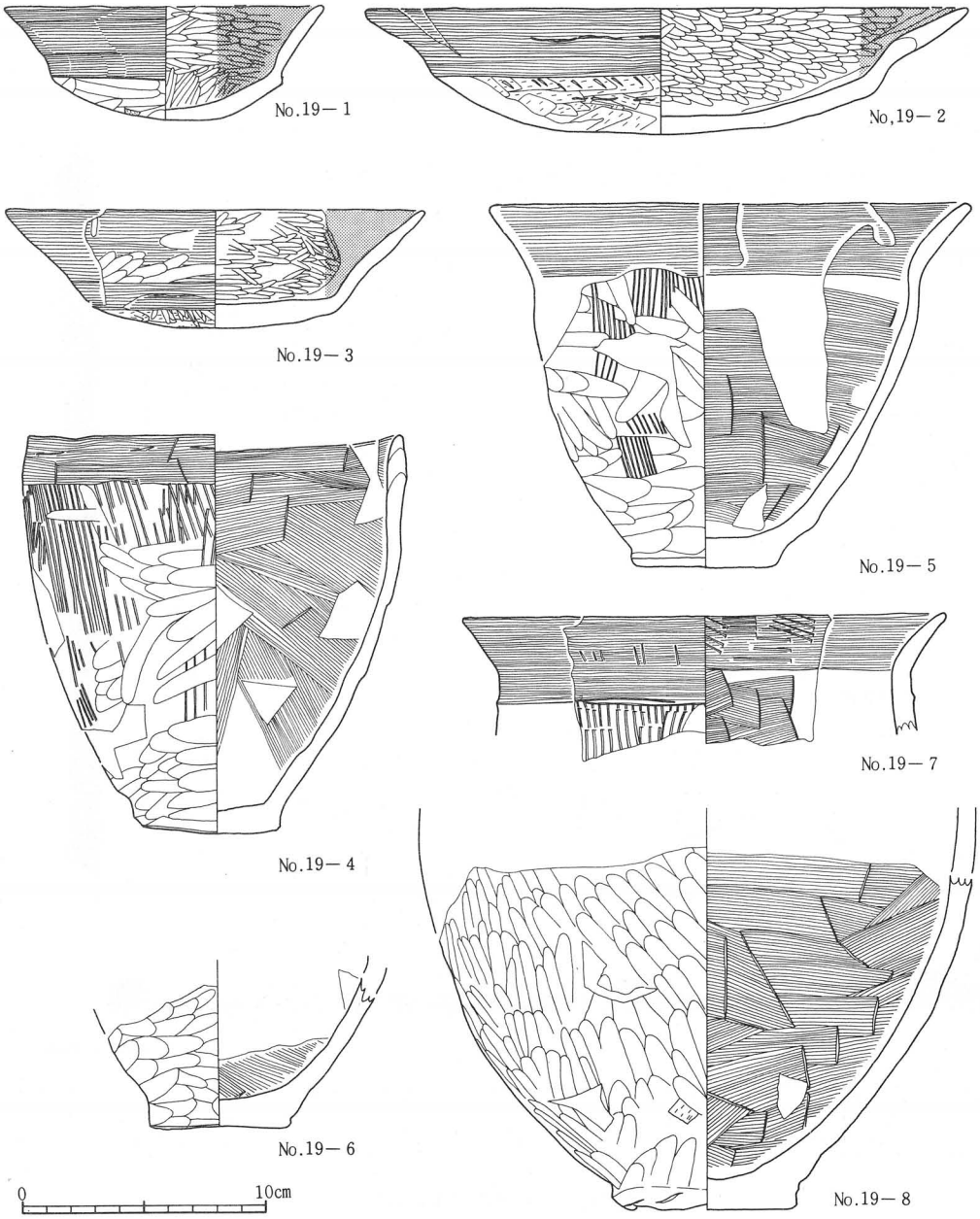


層No	土　色	土　性	その他	3	10YR4/4褐　色	砂質シルト	小石を多量に含む、炭化物を含む
1	10YR4/4褐　色	砂質シルト	小石を多量に含む	4	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	炭化物を含む
2	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	〃	5	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	炭化物、焼土・遺物を多量に含む

第52図　19号住居跡実測図

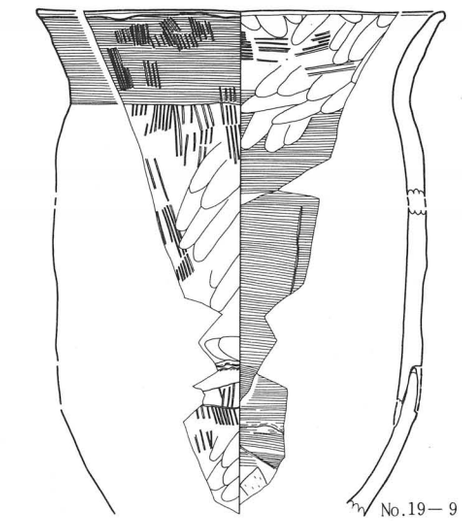
第36表　19号住居跡観察表

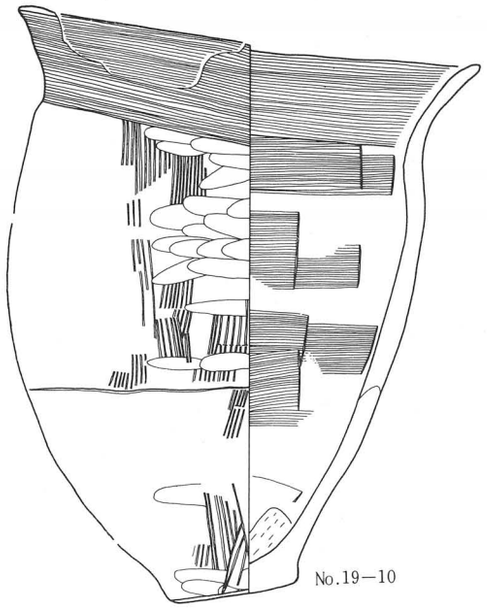
規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主　柱　穴	重　複	備　考
南北軸(5.93m) 東西軸 6.15m 面　積	南　北　軸 N－10°－E 東　西　軸 N－85°－W	東4～9cm 西3～16cm 南 北5～8cm	位　置　北壁中央付近 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.86m	P1 P2 P6 P17 P19 P5 P14	SI19 → SI1 → SI18 SI1 → SI7	南半削平



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
19－1	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ナデ・ケズリ	ミガキ		ミガキ	4.6	13.1	9.4	完	4Eb	44
19－2	土師器	坏大	P15	ヨコナデ		ケズリ	ミガキ		ミガキ	5.1	24.5	18.2	⅔	3	44
19－3	土師器	坏小	床面	ヨコナデ・ナデ		ケズリ・ミガキ	ミガキ		ミガキ	4.8	17.1	10.2	⅔	4Eb	44
19－4	土師器	鉢Ⅰ	床面	ヘラナデ	ハケメ・ナデ	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	16.3	15.3	5.6	完	1A	44
19－5	土師器	鉢Ⅱ	床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	14.8	19.3	5.6	⅔	1C	44
19－6	土師器	甕Ⅱ	床面			ナデ			ヘラナデ	(6.7)		5.8	(¼)		
19－7	土師器	甕Ⅱ	P15	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ		(5.2)	19.7		(⅛)	2	
19－8	土師器	甕Ⅰ小	床面		ナデ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	(14.3)		7.5	⅓		

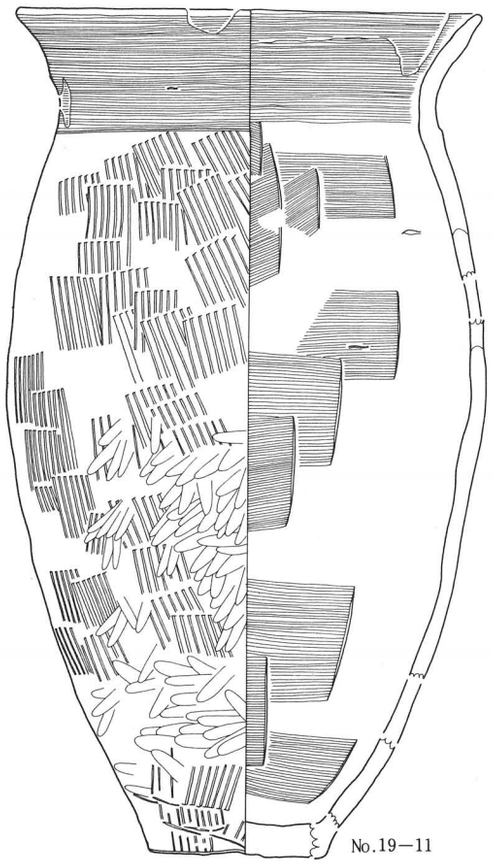
第53図　19号住居跡出土土師器（1）

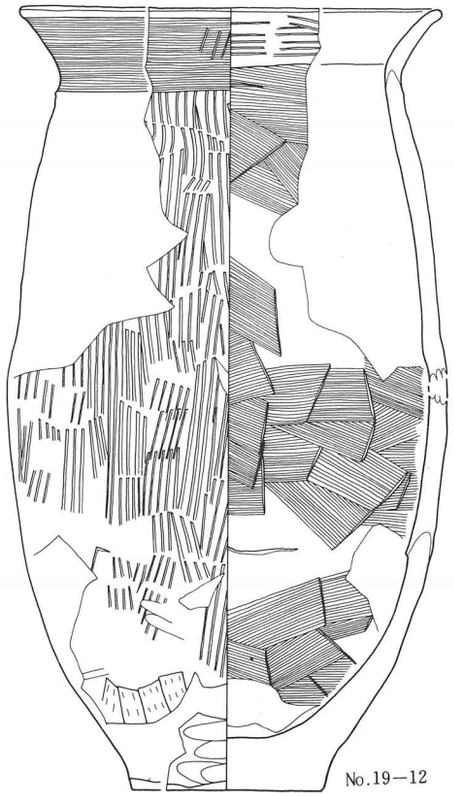

No.19－9

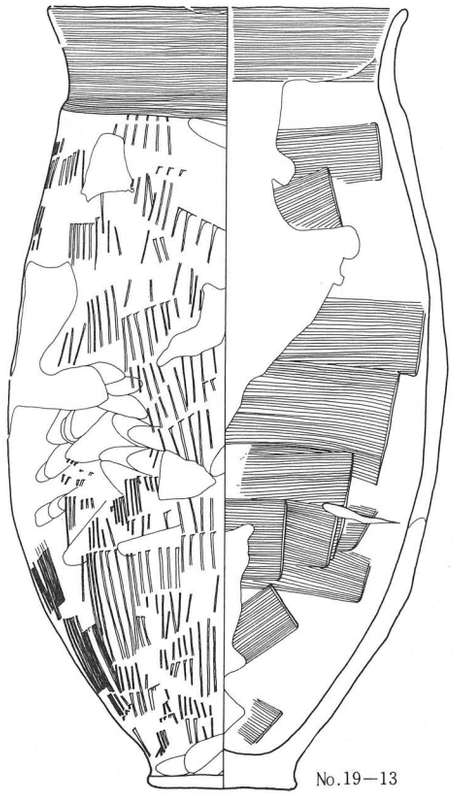

No.19－10

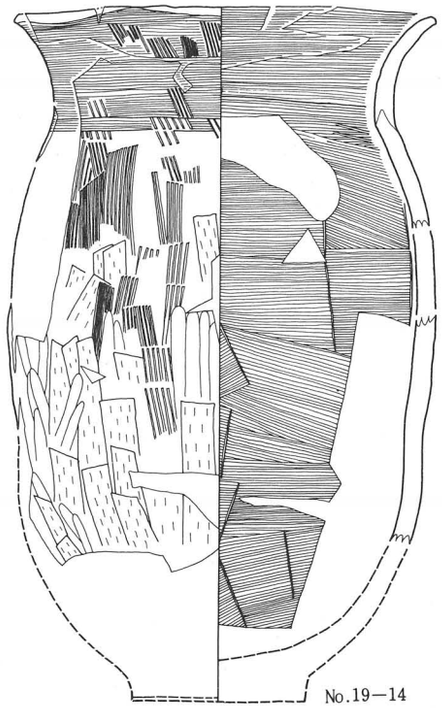
遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
19－9	土師器	甕Ⅱ小	床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ナデ・ハケメ	ナデ・ヘラナデ		(20.6)	16.6		⅔	1C	
19－10	土師器	甕Ⅱ小	床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ・ケズリ	22.5	19.0	5.1	⅔	2C	44
19－11	土師器	甕Ⅱ大	床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	34.5	19.1	7.4	完	2C	45
19－12	土師器	甕Ⅱ大	床面	ヨコナデ	ハケメ	ケズリ・ナデ	ハケメ	ヘラナデ	ヘラナデ	31.9	17.3	7.7	⅔	2B	45
19－13	土師器	甕Ⅱ大	床面	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	32.0	14.7	6.1	完	2B	45
19－14	土師器	甕Ⅱ大	床面	ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ケズリ		ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	28.3	17.3	(7.1)	⅔	2B	45

0　10cm


No.19－11


No.19－12


No.19－13


No.19－14

第54図　19号住居跡出土土師器（2）

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	不整楕円形	楕円形	楕円形	円形
規模	75×70	58×50	50×43	60×50	56×56	56×56	48×44	50×49	35×24	24×16	49×29	38×36
深さ	23	28	22	22	16	12	10	27	20	6	8	30
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19
平面形	円形	円形	楕円形	不整楕円形	円形	楕円形	円形
規模	51×47	50×46	110×67	74×58	44×42	26×14	62×61
深さ	20	21	20	10	10	6	29
堆積土	不明	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	不明	砂質シルト

(cm)

第37表　19号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中			ピット中		床面					計
種別	土師器		砥石	土師器		土師器				土製玉	
器種	坏	甕類		坏	甕類	坏	甕類	甑	鉢		
個体・破片数	22	277	1	20	90	2	18	1	2	1	434
実測点数			1	1	1	2	9	1	2	1	18

〔規模〕東西軸は6.15m、南北軸は南壁が失われているため不明であるが、北壁から5.93mの所まで残る。

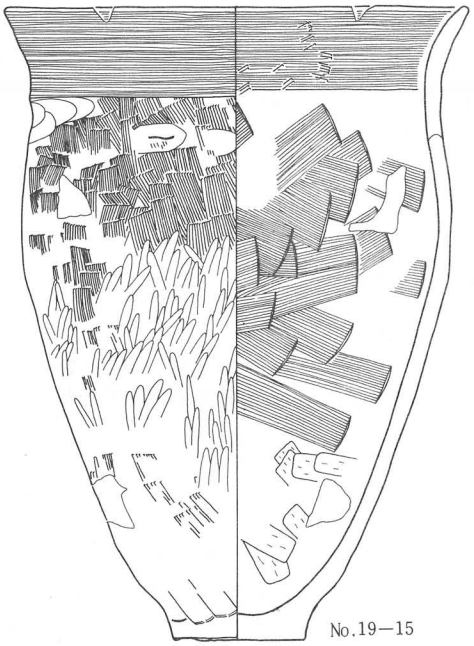
〔堆積土〕堆積土は壁際に残存するだけである。北側が厚く20cm前後、南側が薄く5cm前後残る。褐色または暗褐色の砂質シルト層からなり5層に細分できた。

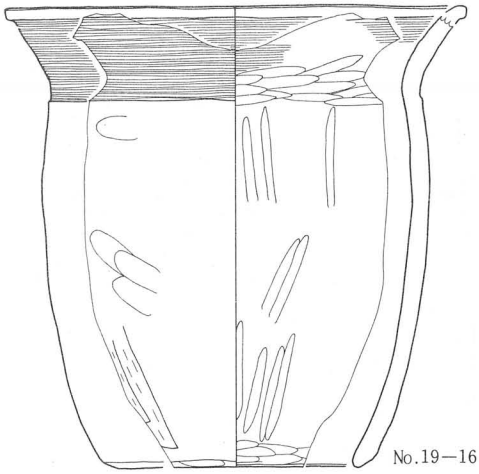
〔壁・床面〕壁面は北壁と東壁の中央部がやや脹む。壁の立ち上がりは60°～70°を計る。床面はほぼ平坦であるが、中央部は7号住居跡によってわずかに削られている。

〔柱穴〕床面上では19個のPitが検出された。このなかで配列関係から主柱穴と考えられるのは、西列P.1・P.6・P.19、東列P.2・P.17・P.14、及び南列中央P.5の7個である。P.1－P.6は185cm、P.6－P.19は202cm、P.1－P.19は387cm、P.2－P.17は193cm、P.17－P.14は187cm、P.2－P.14は380cm、P.1－P.2は384cm、P.19－P.5は170cm、P.5－P.14は167cm、P.19－P.14は337cmを計り、南北方向の長方形に近い台形を呈する。

〔カマド〕カマドは、その右袖石と考えられるものが北壁中央付近の1号土壙とP.9の間に残存するだけで、袖・煙道等は残っていない。また、左袖石や焼土面も1号土壙によって削られている。

〔遺物出土状況〕堆積土中及び床面より多くの土師器が出土した。床面からの遺物は1個体の土器が潰れた状態のものが多く、北東角付近では甕6個体、鉢1個体、坏1個体、及び甕の底部等がまとまって出土し、カマドの左側にあたる北壁の中央よりやや西側からは甕が3個体分出土した。また西壁中央付近から坏1個体、東壁中央付近から甑の¼程の破片が出土している。なお、カマド左側の甕とP.15の床面から約10cm下がった所から出土した甕片とは接合関係にあることから、19号住居跡の廃絶時においてはP.15は完全に埋まっていないことが判明している。





0　10cm

遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
19−15	土師器	甕Ⅱ小	床面	ヨコナデ	ハケメ・ミガキ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ケズリ	24.9	18.4	5.2	½	1 D	45
19−16	土師器	甑大	床面	ヨコナデ	ナデ	ケズリ・ミガキ	ヨコナデ	ミガキ	ミガキ	18.2	18.2	10.6	⅔	3 B	

第55図　19号住居跡出土土師器（3）

20号住居跡（SI 20）

〔平面形・保存状況・重複〕耕作による削平が著しく、西壁と北壁の一部と西半の床面が残っているだけで、保存状況は極めて悪い。西南角を3号住居跡に切られ、東南角付近は2号住居跡の床面に覆われる。西北角が直角に折れることから、平面形は方形または長方形を呈すると推定される。床面レベルは3号住居跡より高く、2号住居跡とほぼ同じであった。

〔規模〕残存部の範囲は北壁から5.20m、西壁から3.70mを計る。

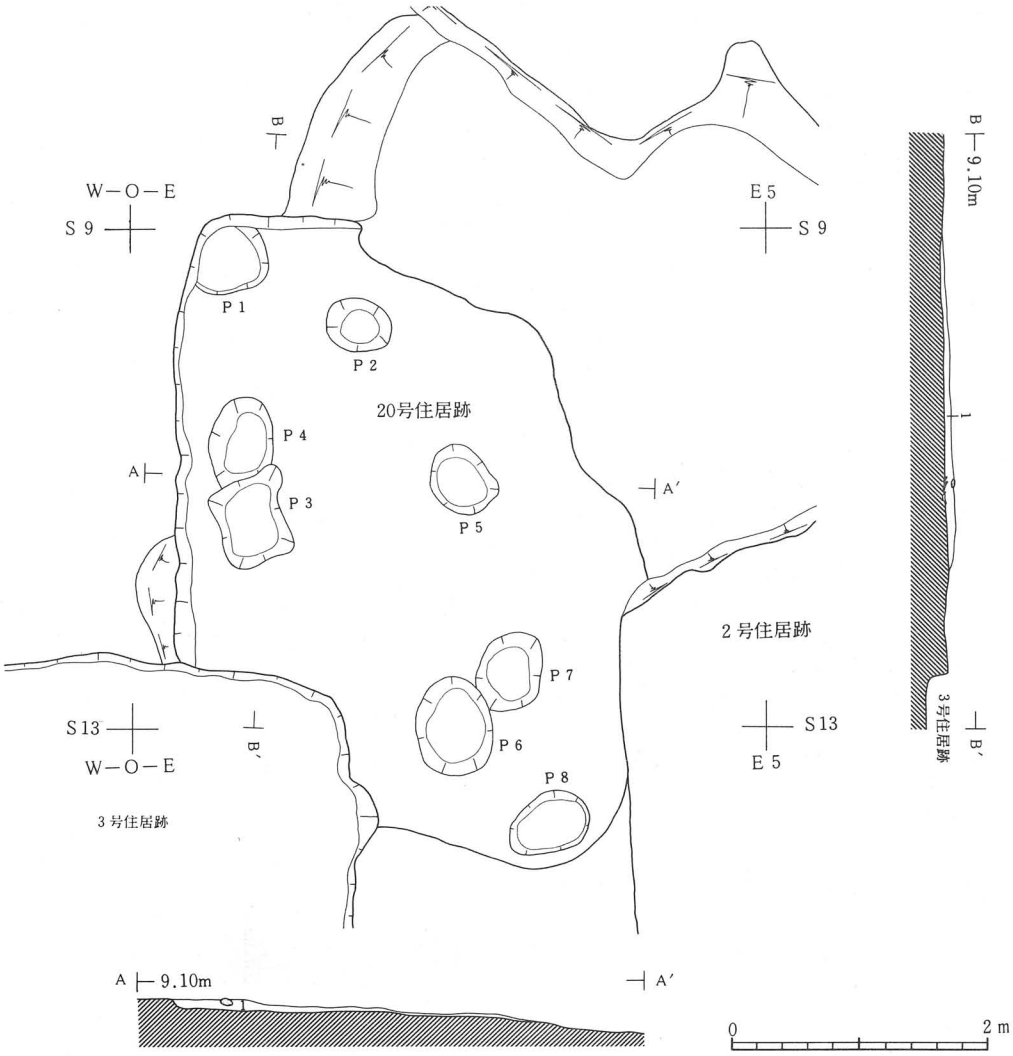
〔堆積土〕削平が著しいために堆積土の残りも悪く2～10cm程しかない。堆積土は、黄褐色土

第38表　20号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸(5.20m) 東西軸(3.70m) 面積	南北軸 N−2°−E 東西軸 N−87°−W	東 西9～12cm 南 北2～5cm	位置不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 8.80m		SI20 ↙ ↘ SI3　SI2	東半削平 南半削平

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
平面形	楕円形	楕円形	不整楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形
規模	64×54	50×42	65×60	65×49	57×46	79×60	61×52	68×48
深さ	2	2	13	14	6	19	6	4
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)



層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土の小ブロックを含む(土師器をも含む)壁際の堆積土は褐色となるが中央部との区別は明確ではない

第56図　20号住居跡実測図

の小ブロックを含む暗褐色の砂質シルトからなる１層だけで、細分はできなかった。

〔壁・床面〕壁は西壁約3.5m と北壁約1.3m が残存する。西壁の立ち上がりは約50°を計るが、北壁側は緩い斜面となって残るだけである。床面はほぼ平坦であるが、わずかに北東側が下がっている。

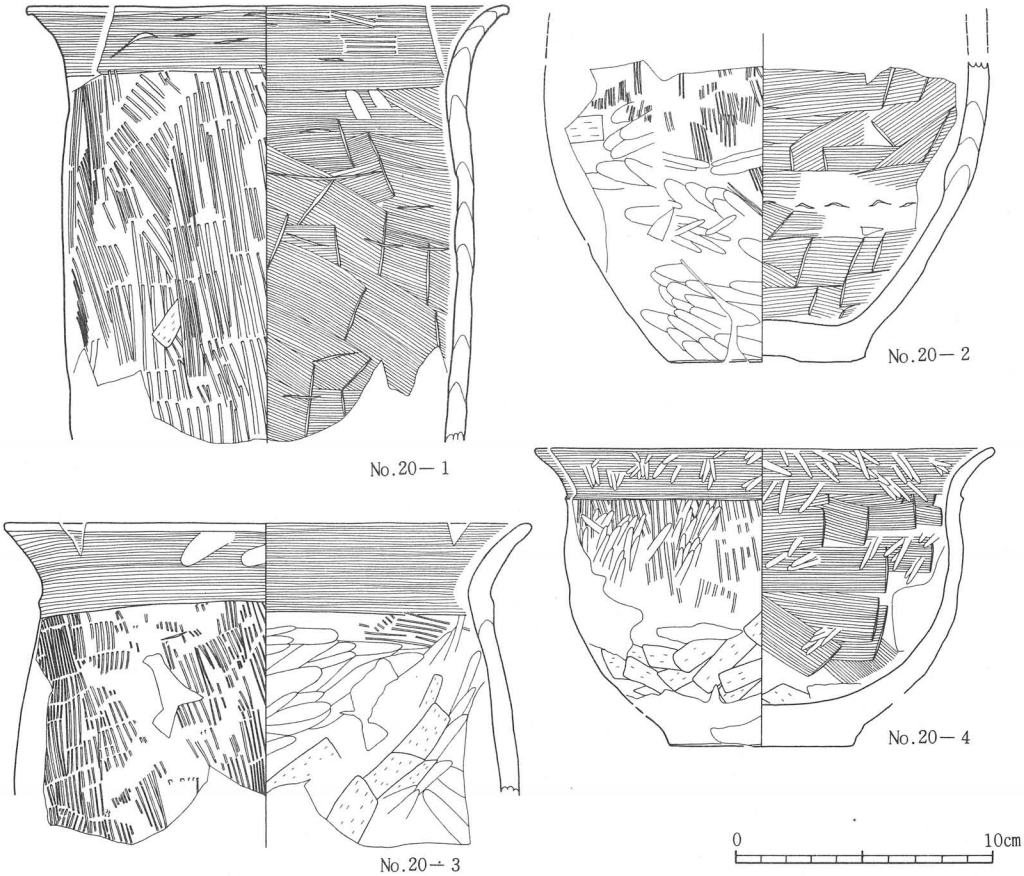
〔柱穴〕Pit は８個検出されたが浅いものが多く、配列からみても柱穴と考えられるものはない。

〔遺物出土状況〕住居跡の保存状況に比して遺物の出土量は多い。堆積土中のものは、大小の

礫とともに床面近くから出土し、完形に復元できるものはないが、実測可能な甕３点が含まれる。床面からも土師器片が散乱した状態で出土し、甕と鉢が各１個実測できた。

第39表　20号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中				床面			計
種別	土師器			須恵器・甕	土師器			
器種	坏	甕類	甑		坏	甕類	鉢	
個体・破片数	20	126	2	1	3	44	1	197
実測点数		3				1	1	5



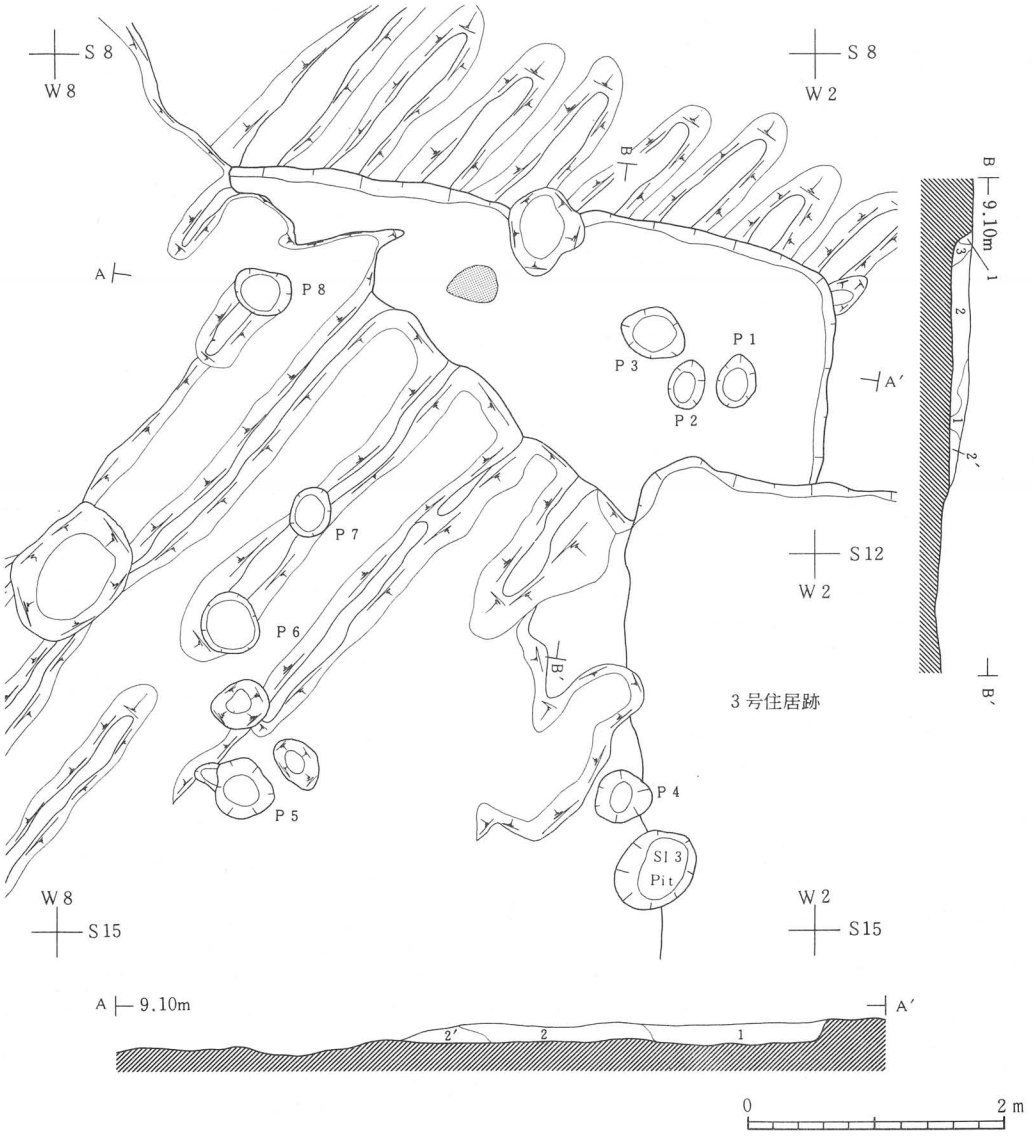
遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
20－1	土師器	甕Ⅱ	床面	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ・ハケメ	ヘラナデ		(17.2)	19.0		⅔	1	
20－2	土師器	甕Ⅱ	床面		ハケメ・ナデ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	(12.0)		7.8	⅓		
20－3	土師器	甕Ⅱ	床面	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ナデ・ケズリ		(10.8)	20.7		⅓	2	
20－4	土師器	鉢Ⅱ	床面	ヨコナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	ケズリ	ヘラナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	ヘラナデ・ケズリ	11.8	17.9	7.2	完	2C	46

第57図　20号住居跡出土土師器

21号住居跡（SI 21）

〔平面形・保存状況・重複〕北辺と東辺の一部が残るだけで、西南部は天地返しによって削平されてPitだけが検出された。東南部は3号住居跡によって切られている。残存する壁と柱穴の配列状況から方形または長方形の住居跡と推定される。床面のレベルは3号住居跡より高い。

〔規模〕西壁と南壁を失っているので規模は不明であるが、残存部の範囲は、東西軸で東壁か



層No	土　色	土 性	そ の 他	2	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR5/4褐色土をブロック状に含む
1	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物を斑状に含む	2′	10YR5/4褐　色	砂質シルト	極小の砂と10YR3/3暗褐色土を含む
1′	10YR5/4褐　色	砂質シルト		3	10YR5/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	

第58図　21号住居跡実測図

第40表　21号住居跡観察表

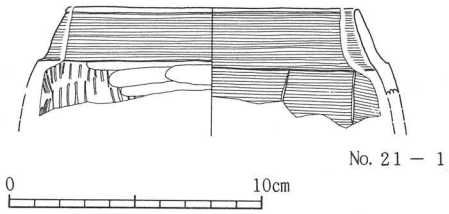
規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸(5.20m) 東西軸(4.90m) 面　積	南北軸 N－5°－E 東西軸 N－78°－W	東14～16cm 西 南 北8～9cm	位　置　北壁中央付近？ 燃焼部 煙　道	なし 床面標高 8.80m	●P8　●P3 ●P5　●P4	SI21 ↓ SI3	西半削平 南半削平

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
平面形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円　形	楕円形	楕円形
規　模	44×31	39×29	54×40	45×44	47×44	48×45	40×30	45×36
深　さ	11	24	26	37	18	3	10	13
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)

第41表　21号住居跡出土遺物集計表

出土地点・層位	堆積土中		ピット中			計
種別	土師器					
器種	坏	甕類	坏	甕類	鉢	
個体・破片数	2	27	1	18	1	49
実測点数					1	1



遺物No	種　別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体　部	底部	口縁部	体　部	底部	器　高	口径	底径			
21－1	土師器	鉢Ⅰ	P3	ヨコナデ	ナデ・ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ	(3.4)	(3.4)	11.5		(1/6)	2Bb	

第59図　21号住居跡出土土師器

ら4.90m、南北軸で北壁からP.5南端まで5.20mを計る。

〔堆積土〕残存部の堆積土は15cm程残り、5層に細分された。にぶい黄褐色または褐色の砂質シルトからなり、部分的に炭化物や暗褐色土を含んでいる。

〔壁・床面〕壁は60°～70°で立ち上がり、床面はほぼ平坦である。壁・床面ともに砂質シルトからなる。

〔柱穴〕Pitは床面残存部で3個、削平部で5個検出された。このうち柱穴となるのは配列関係からP.3、P.4、P.5、P.8の4個と考えられる。P.3－P.4は370cm、P.8－P.5は394cm、P.3－P.8は309cm、P.4－P.5は296cmを計る。柱穴の組み方は南北方向の長方形を呈するが、P.3についてみると北壁までは87cm、東壁までは143cmあり、東西の距離が長い。このことは、柱穴の配列は長方形であるが、住居跡自体は方形に近いものであったことを示すと考えられる。

〔カマド〕カマドは残存しなかったが、北壁の中央付近に東西40cm、南北30cmの範囲で焼土面が検出されたので、この部分にカマドがあったことが推定される。焼土の南端は北壁より約80cm離れている。

〔遺物出土状況〕遺物の出土量は少なく、堆積土中からは土師器坏と甕の破片29点と、Pit内から土師器坏、甕、鉢の破片が20点出土したに過ぎず、残存する床面上から遺物は出土しなかった。

22号住居跡（SI 22）

〔平面形・保存状況・重複〕耕作により削平されたうえ、13号住居跡に堆積土を、12号住居跡に南辺から西辺にかけてを大きく切られているために保存状況は良くない。平面形は残存部からみると長方形を呈するが、南東の角が住居跡の南東角であるのか、また攪乱によってこのように残ったのか判然としない。なお22号住居跡は14号住居跡の南辺を切っている。床面レベルは12号住居跡より高く、13号住居跡・14号住居跡より低い。

〔規模〕長方形の住居跡とした場合は、南北軸3.30m、東西軸6.05mを計る。

〔堆積土〕残存部の堆積土は10～20cm残り、5層に細分された。褐色、または暗褐色の砂質シルトからなる。

〔柱穴〕Pitの配置からみて、P.5が北西角の柱穴となる可能性が考えられたが、他にこれと組むPitを検出することができず、22号住居跡の柱穴は判然としない。

〔遺物出土状況〕堆積土、床面及びPit中より多くの遺物が出土した。遺物にあっては土製の玉の出土が多く、堆積土中に1点、P.3から2点、床面から1点の計4点が出土している。床面上ではP.3からP.2付近にかけて遺物が集中するほか、P.3内には前記の玉とともに鉢の半分に割れたものが出土している。

第42表　22号住居跡出土遺物集計表

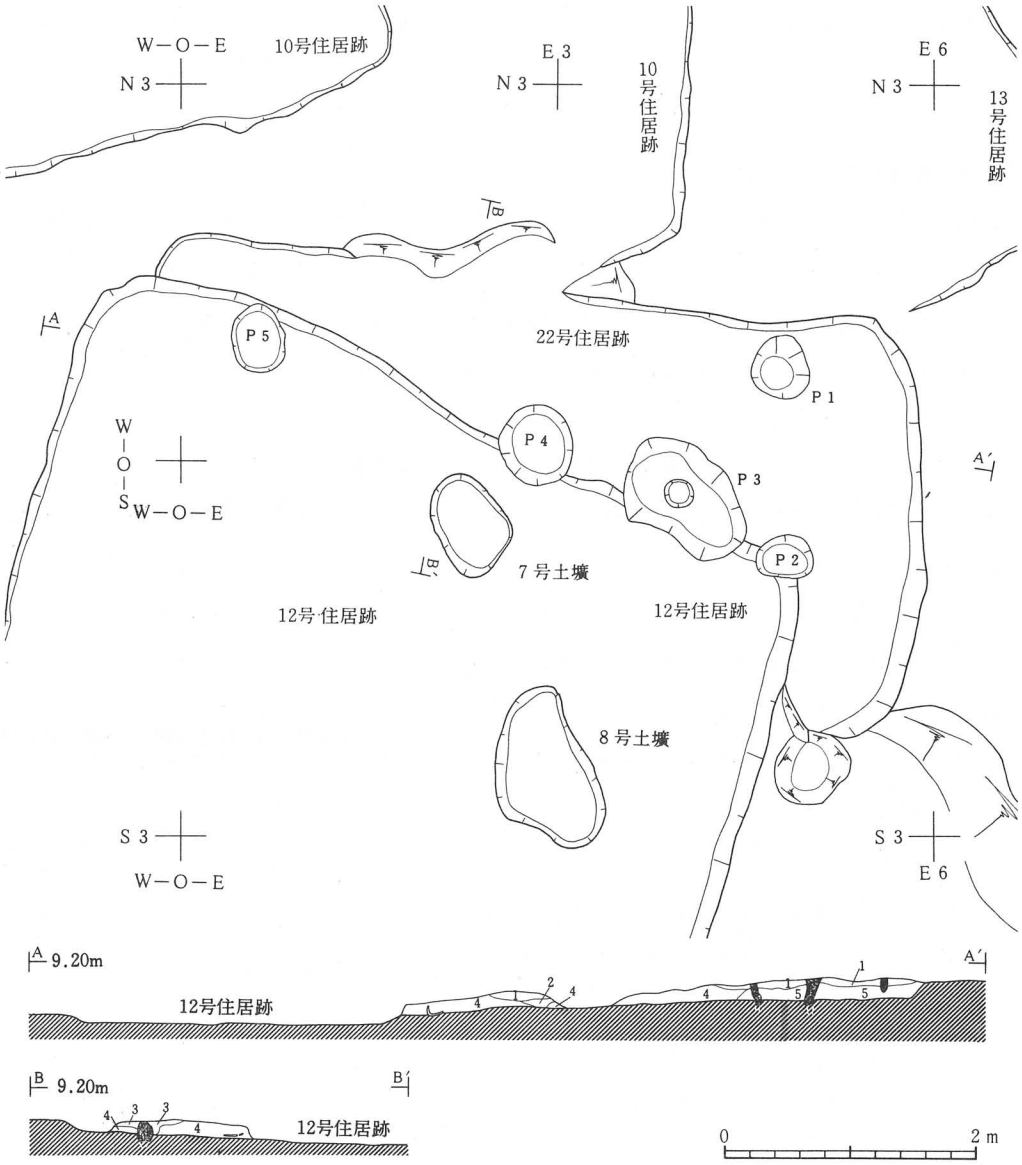
出土地点・層位	堆積土			ピット中				床面				計
種別	土師器		土製	土師器			土製	土師器			土製	
器種	坏	甕類	玉	坏	甕類	鉢	玉	坏	甕類	鉢	玉	
個体・破片数	20	108	1	10	121	1	2	10	14	2	1	290
実測点数			1			1	2	1		2	1	8

第43表　22号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	周溝	主柱穴	重複	備考
南北軸　3.30m 東西軸　6.05m 面　積(19.96m²)	南北軸 N－3°－E 東西軸 N－81°－W	東10～15cm 西 南 北7～12cm	位置　不明 燃焼部 煙道	なし 床面標高 8.80m	不明	SI 14 ↓ SI 22 ↓ SI 12	西半削平 南半削平

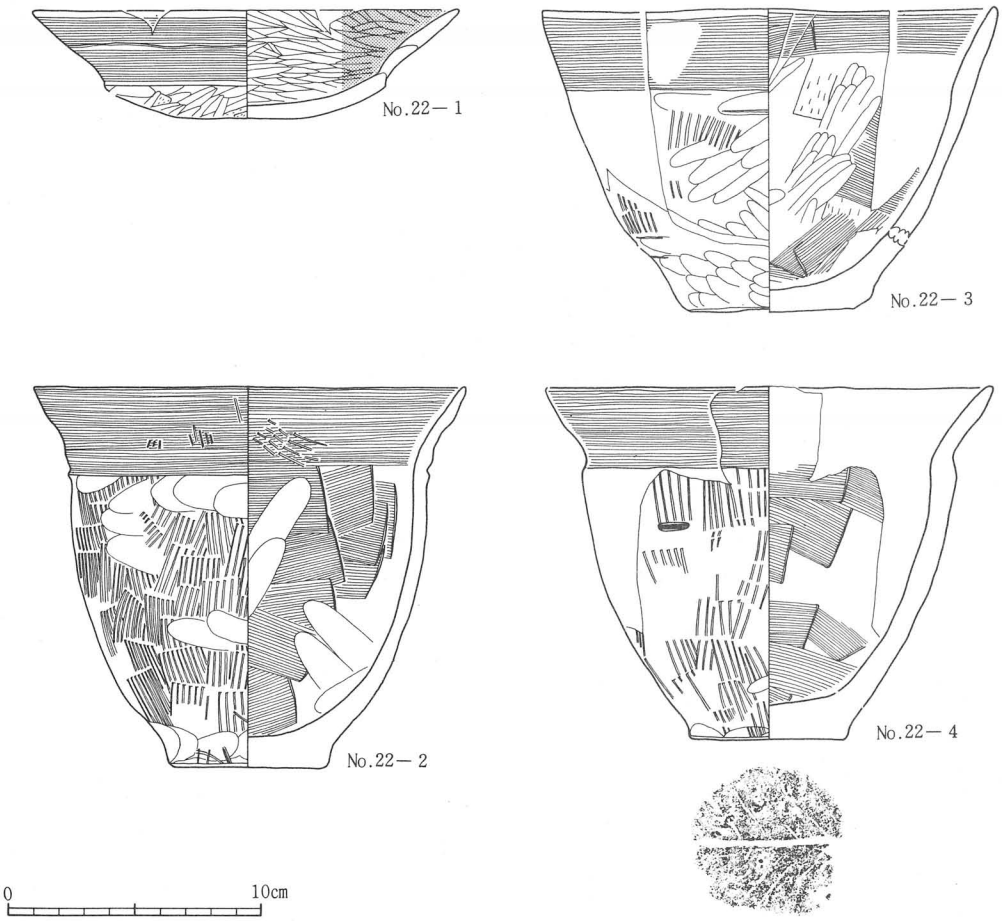
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
平面形	楕円形	楕円形	不整楕円形	円形	楕円形
規模	50×46	45×35	113×76	64×58	54×52
深さ	23	13	27	19	6
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト

(cm)



層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト	５層に比し、パミスを多く含む
2	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト	焼土、骨片を含む
3	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト	褐色土ブロックを含む
4	10ＹＲ⁴⁄₄褐　色	砂質シルト	にぶい黄褐色土(10Ｙ⁵⁄₄)のブロックを含む
5	10ＹＲ¾暗褐色	砂質シルト	炭化物、褐色土を含む

第60図　22号住居跡実測図



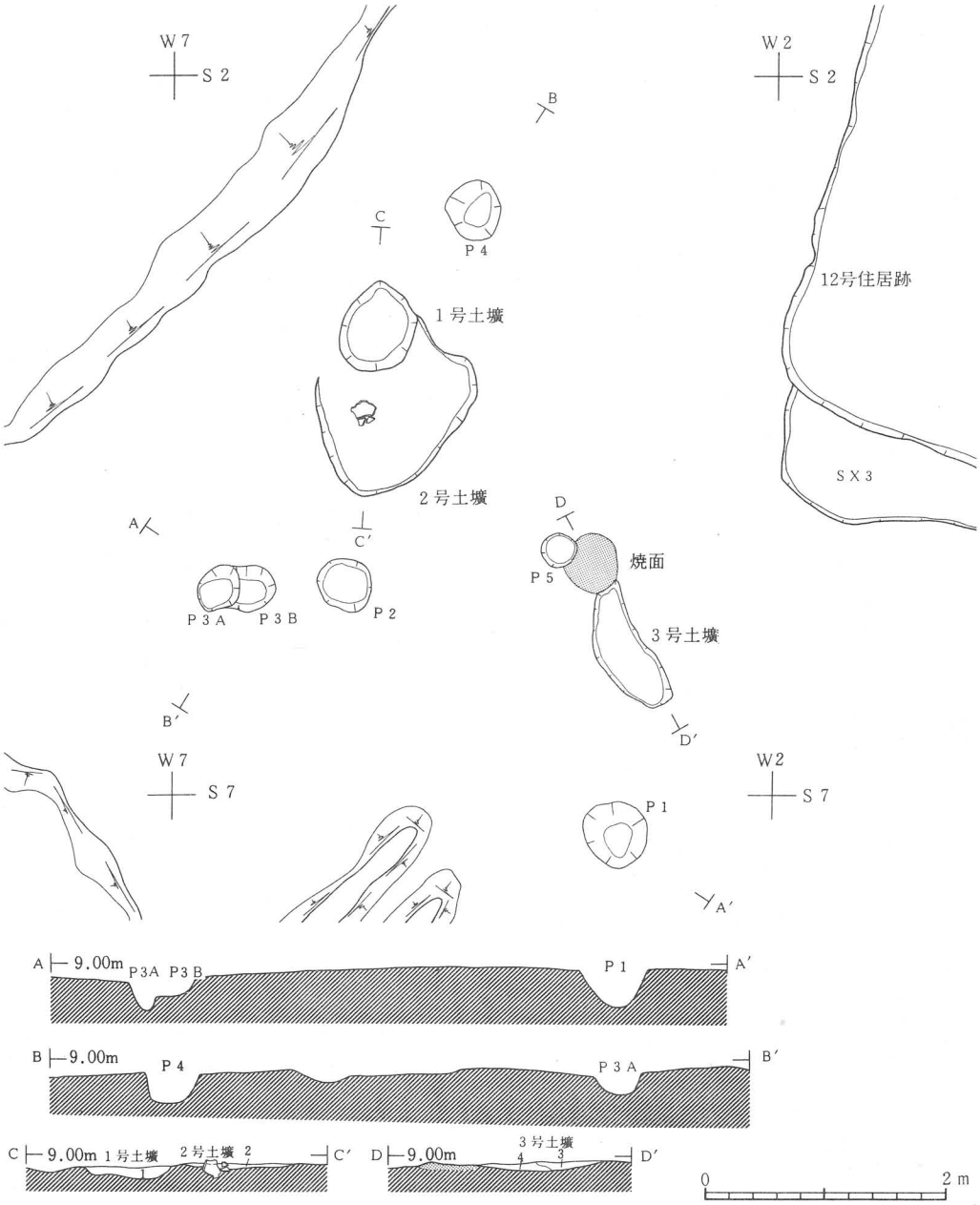
遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
22－1	土師器	坏小	床面	ヨコナデ		ケズリ・ミガキ	ミガキ		ミガキ	4.3	16.7	11.0	⅔	4 Eb	46
22－2	土師器	鉢Ⅱ	P3	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	15.1	16.9	6.3	½	2C	46
22－3	土師器	鉢Ⅱ	床面	ヨコナデ	ハケメ・ナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ・ケズリ	ヘラナデ	12.0	17.8	6.6	¼	1A	46
22－4	土師器	鉢Ⅱ	床面	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ・ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	14.0	17.3	6.1	¼	2C	46

第61図　22号住居跡出土土師器

23号住居跡（SI 23）

〔平面形・保存状況・重複〕12号住居跡の西南方に焼土面が検出されたので、周辺部を精査したところ、6個のPitと3基の土壙が検出された。これらの各遺構を総合して考えると、この部分は上部を削平された住居跡であると推察されたので、23号住居跡として調査した。

〔規模・柱穴〕Pitの配列からみるとP.1－P.3A－P.4がほぼ直角となり柱穴と考えられ、さらに、P.3Aと対角線をつくるPitは、12号住居跡と重複する位置にあったと推定される。P.1－P.3Aは380cm、P.3A－P.4は385cmを計る。柱穴間の距離からすれば、住居跡の大



層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR⅔暗　褐　色	砂質シルト	酸化鉄を含む(1号土壙堆積土)
2	10YR⅝にぶい黄褐色	砂質シルト	土師器片を含む(2号土壙堆積土)
3	10YR⅝褐　　色	砂質シルト	(3号土壙堆積土)
4	10YR⅝暗　褐　色	砂質シルト	(3号土壙堆積土)

第62図　23号住居跡実測図

きさは1辺6m程と思われる。

〔その他の施設〕最初に検出された焼土面は柱穴の配列からみると、住居の中央寄りにあるの

第44表　23号住居跡観察表

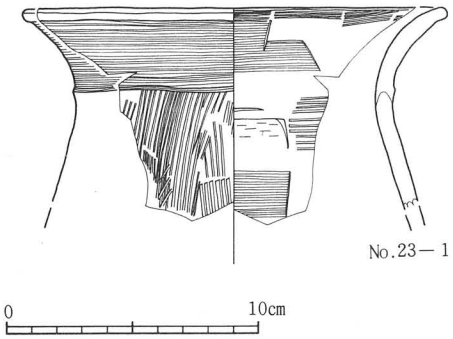
規　模	方　向	壁残存高	カ　マ　ド	周　溝	主柱穴	重　複	備　考
南北軸（3.85m） 東西軸（3.80m） 面　積	南　北　軸 N－(34°)－E 東　西　軸 N－(59°)－W	東 西 南 北	位置　不　明 燃焼部 煙　道	不明 床面標高 8.90m	●P4　○? ●P3　●P1		

	P 1	P 2	P3a	P3b	P 4	P 5
平面形	円　形	円　形	円　形	楕円形	円　形	円　形
規　模	56×55	46×43	37×35	40×30	50×47	30×29
深　さ	30	6	30	14	25	3
堆積土	砂質シルト	砂質シルト	砂質シルト	シルト質砂	シルト質砂	砂質シルト

(cm)

第45表　23号住居跡
出土遺物集計表

出土地点・層位	ピット中		1号土壙		2号土壙	計
種別	土師器					
器種	坏	甕類	坏	甕類	甕類	
個体・破片数	2	32	2	11	6	53
実測点数					1	1



遺物No	種　別	器形	層　位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体　部	底部	口縁部	体　部	底部	器高	口径	底径			
23-1	土師器	甕Ⅱ	堆積土	ヨコナデ	ハケメ		ヘラナデ	ケズリ・ヘラナデ		8.5	16.4		⅓	2	

第63図　23号住居跡出土土師器

で、カマドの燃焼部とは考え難い。地床炉ではなかったかと考えられる。焼土の範囲は、直径約50cmを計る。

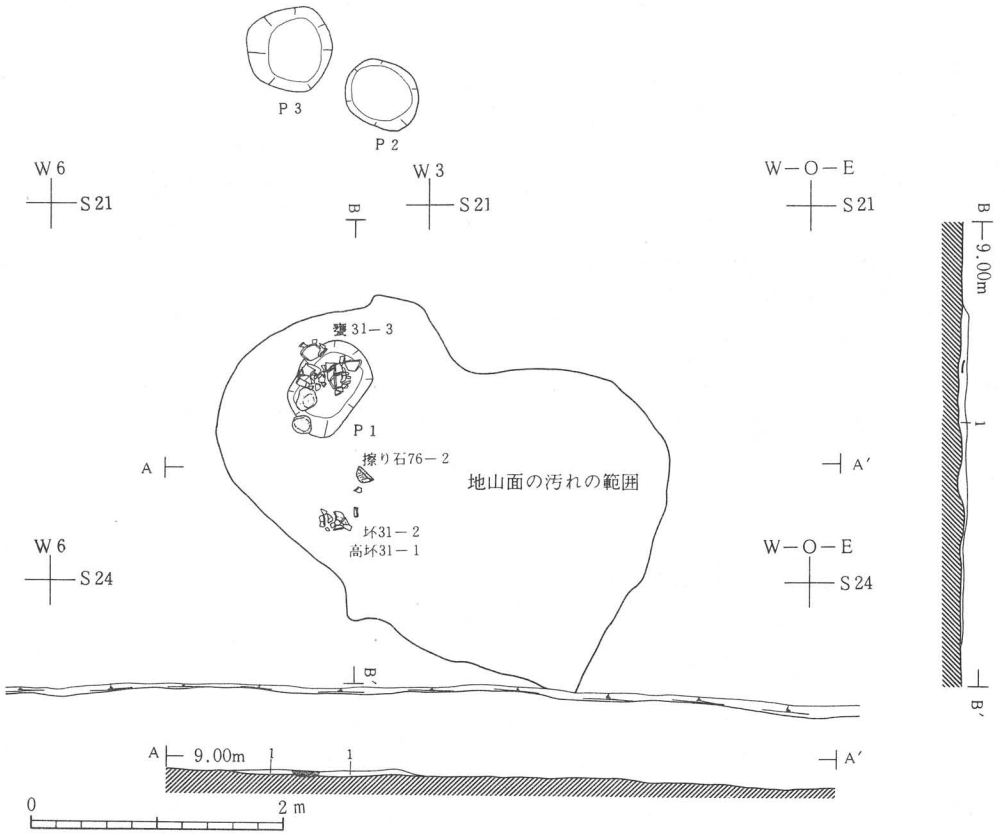
〔遺物出土状況〕堆積土・床面がないため、出土遺物はPit中からの土師器片34点と、１号・２号土壙からの土師器片19点だけである。いずれも小破片で、実測できるものは２号土壙より出土した甕の口縁部片１点だけである。

５．性格不明遺構

１号性格不明遺構（SX　1）

調査区の南東部で検出され、一部南壁に接する。東西3.50m、南北3.10mの範囲に不整形の広がりをもつ。北部から西部には１～数cmの暗褐色の砂質シルトの堆積土が残るが、周辺部がわずかに低くなっているために壁は残っていない。東部から南部にかけては、地山(床面か？)の汚れによって遺構の範囲が確認された。確認された範囲の底面はほぼ平坦である。北西部で

層No	土　色	土　性	そ　の　他
1	10YR3/4暗褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土をブロック状に含む

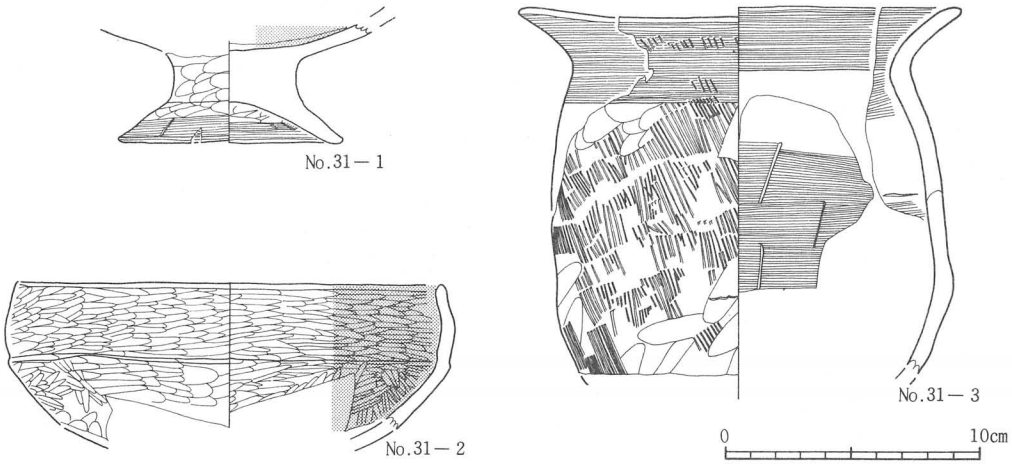


第64図　1号性格不明遺構実測図

長軸78cm、短軸54cm、深さ12cmのPitが検出された。また、遺構の北側でも直径58cm（P．2）と直径68cm（P．3）の2個のPitが検出されている。

出土遺物は、南西部底面から土師器高坏脚部1点、土師器坏で復元できるもの1点、その他坏片3点が出土し、P．1上面からは土師器の甕で体部下半を欠損するものが出土している。他にP．1の東南方向の底面上から、細かい溝状の擦痕の見られる半分に割れた平偏な円礫も出土している。

この遺構の性格として、壁及び壁周辺の床面の削平された住居跡を考えることができるが、柱穴が不明であることにより、住居跡床面の残存部とすることには疑問が持たれる。時期的には、出土遺物から見て住居跡群と同時期と考えられる。

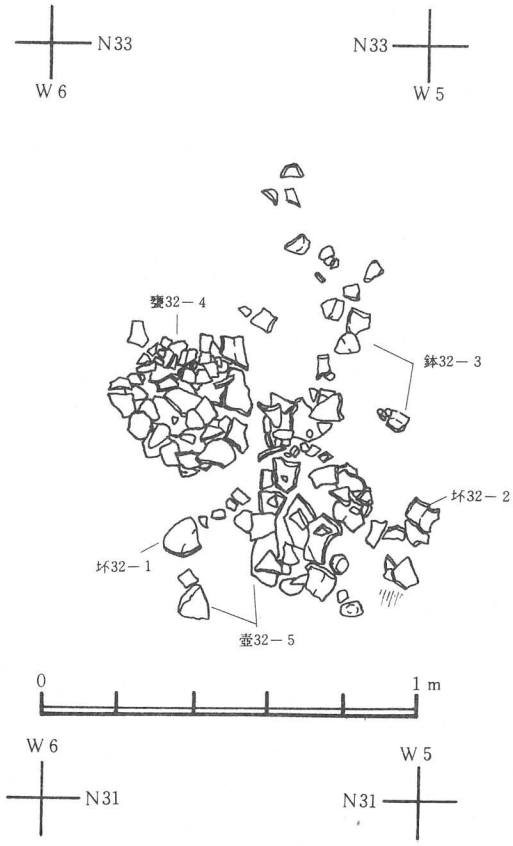


遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
				脚柱部	脚裾部	その他	脚柱部	脚裾部	その他	脚高	脚柱径	脚裾径			
31－1	土師器	高坏	堆積土	ナデ	ヘラナデ		ナデ	ヘラナデ		3.6	4.8	8.7	(完)	1	46
31－2	土師器	坏小	堆積土	ミガキ		ナデ・ミガキ	ミガキ		ミガキ	(5.7)	16.7	17.3	⅓	4Aa	46
31－3	土師器	甕Ⅱ小	堆積土	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		(14.5)	17.3		⅔	1C	46

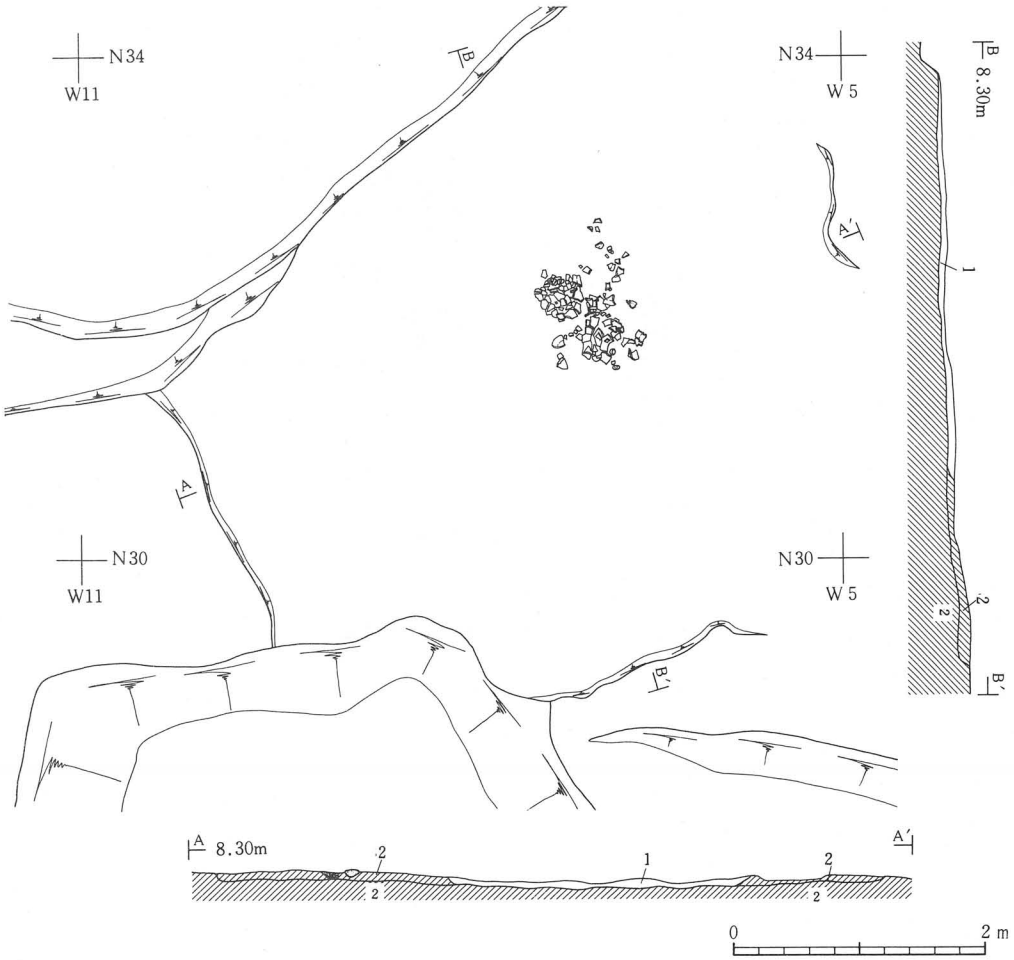
第65図　1号性格不明遺構出土土師器

2号性格不明遺構（SX 2）

調査区の北部中央付近の自然堤防北端で検出された。発見時において地山中に土師器が刺さった状態で検出されたので、周辺部を再三精査し平面プランの検出に努めたが、何ら、プランの発見もできなかった。そこで、土器の出土地周辺を5cm前後下げたところ、土器の乗る面に達し、多数の土師器片が検出された。断面観察によれば、土器周辺はにぶい黄褐色砂質シルトの地山と異なる褐色砂質シルト層が、東西幅約120cmで自然堤防から旧河道へ向って堆積していることが判明した。検出状況からすると、自然露出、または人為的に露出された地山上に土器が置かれ、それが潰れた後に周辺の地山



第66図　2号性格不明遺構遺物出土状況

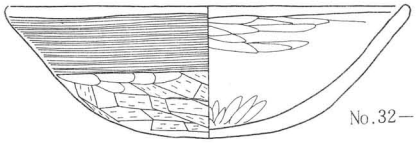


層No	土　　色	土　性	そ の 他
1	10ＹＲ4/4褐　　色	砂質シルト	褐灰色土を含む
2	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色土を含む

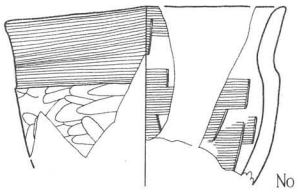
第67図　２号性格不明遺構実測図

土が流れ込んで土器が覆われたと考えられる。

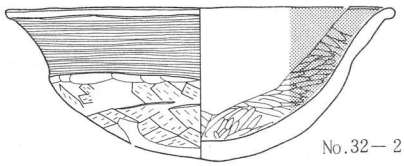
検出された土器群は全て潰れており、南北約130cm、東西約90cmの範囲に散乱するが、比較的良くまとまって出土した。復元の結果、ここに置かれた土器は大型の甕１点、壺１点、小型の鉢１点、坏２点、小形手捏ね土器２点の計７点であった。



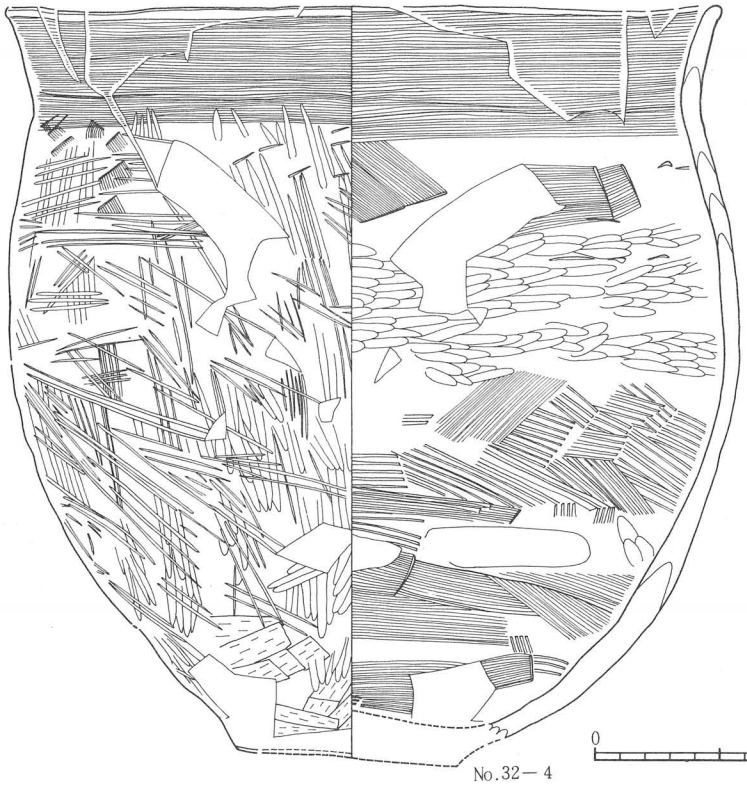
No.32－1



No.32－3



No.32－2

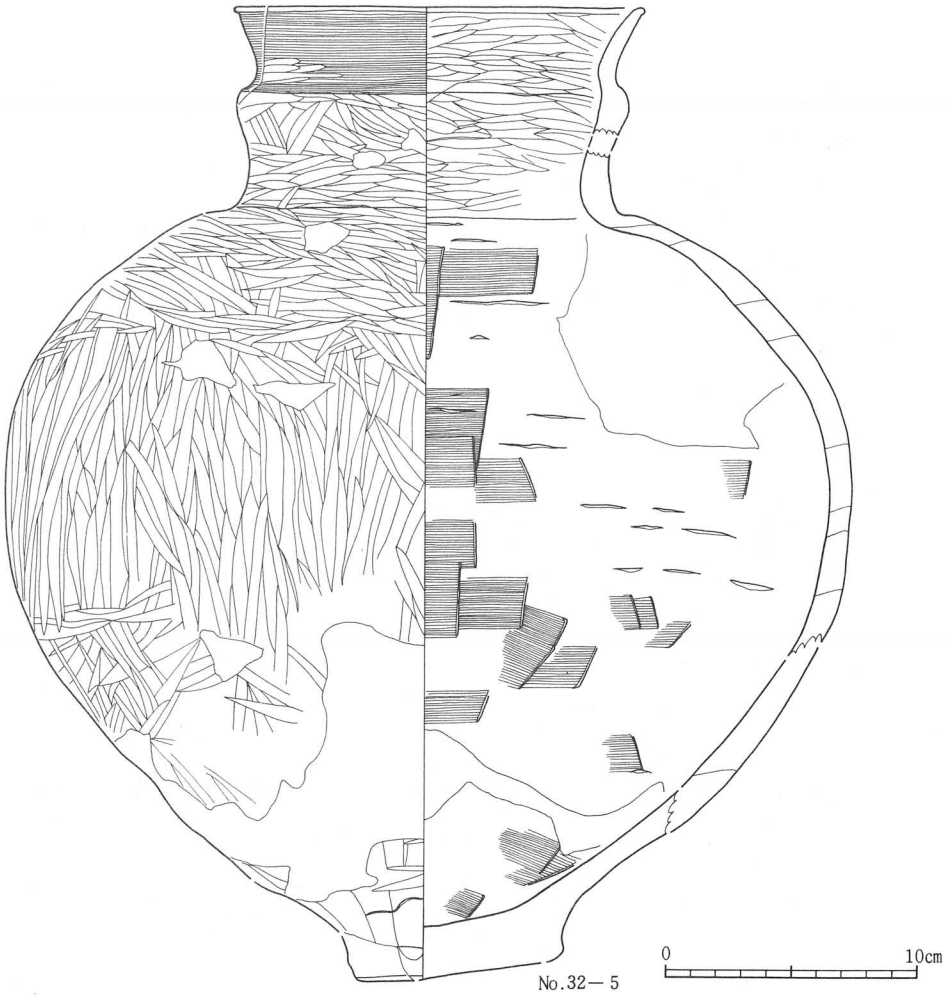


0　10cm

No.32－4

遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
32－1	土師器	坏小	地山層	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	5.2	15.7	12.3	⅓	2B	47
32－2	土師器	坏小	地山層	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	6	15.2	11.6	¾	4Eb	47
32－3	土師器	鉢Ⅱ	地山層	ヨコナデ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ		(7.2)	11.1		(½)	2B	47
32－4	土師器	甕Ⅰ小	地山層	ヨコナデ	ミガキ	ケズリ	ヨコナデ	ハケメ・ミガキ	ヘラナデ	29.7	27.9	8.6	½	1C	47

第68図　2号性格不明遺構出土土師器（1）

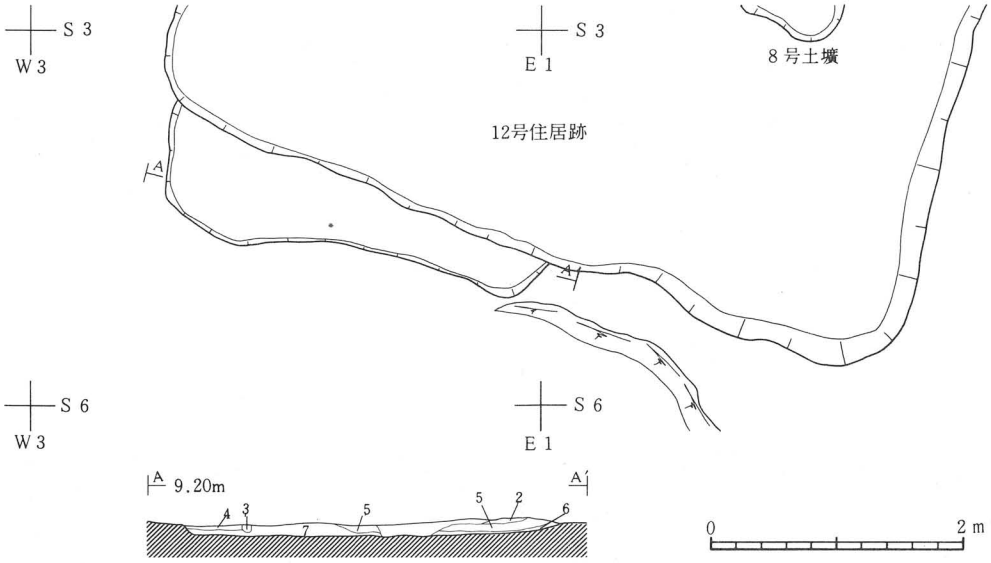


遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
32－5	土師器	甕Ⅰ大	地山直上	ヨコナデ・ミガキ	ミガキ	ナデ	ミガキ	ヘラナデ	ヘラナデ	38.7	16.0	17.7	½	1Aa	47

第69図　2号性格不明遺構出土土師器（2）

3号性格不明遺構（SX 3）

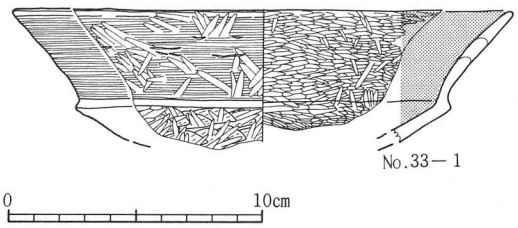
12号住居跡に北辺を切られているため、全容は明らかではない。平面形は残存部の状況から判断すると方形、または長方形と考えられるか、どちらにしても不整形となるようである。西壁から南壁にかけては緩やかに曲り、南壁の中央部は内側に緩く張り出す。残存部の大きさは、東西318cm、南北76cmを計る。堆積土は10～15cm程残り7層に細別される。1層は暗褐色の砂質シルトで、2～6層はにぶい黄褐色と暗褐色のシルト砂質、7層は褐色砂層となっている。住



層No	土　色	土 性	そ の 他	4	10YR⅔にぶい黄褐色	シルト質砂	
1	10YR⅜暗　褐　色	砂質シルト	炭化物・土師器片を含む	5	10YR⅔にぶい黄褐色	シルト質砂	暗褐色土を含む
2	10YR⅔にぶい黄褐色	シルト質砂	暗褐色土を含む	6	10YR¾暗　褐　色	シルト質砂	
3	10YR⅔にぶい黄褐色	シルト質砂		7	10YR⅘褐　色	砂	

第70図　３号性格不明遺構実測図

居跡の堆積土に比べると砂の混入が多い。壁は、西壁では約50°で立ち上がるが、東壁側10°程で、緩やかに立ち上がる。



遺物No	種 別	器形	層 位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口 縁 部	体部	底 部	口縁部	体部	底 部	器 高	口径	底径			
33－1	土師器	坏小		ヨコナデ・ミガキ		ケズリ・ミガキ	ミガキ		ミガキ	(5.4)	19.6	14.7	⅓	4Eb	

第71図　３号性格不明遺構出土土師器

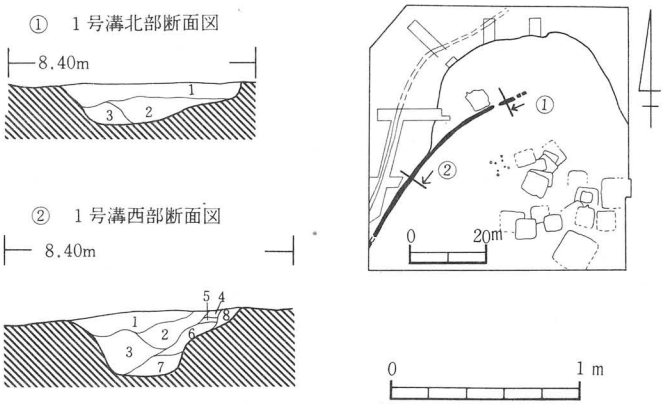
6．溝　　跡

1号溝（SD 1）

この溝は、調査区西南角から中央部北寄りまで54.5m にわたり検出された。遺構確認面は地山である。自然堤防状の微高地と旧水田面を区画するかのようにこの溝は掘り込まれ、微高地

の西辺に沿い、南西から北東方向に延び、17号住居跡の南側で東方に曲がり、3号溝を切っている。さらに北東方向に延びていたものと思われるが、攪乱を受けているので不明である。南西部も西壁側が特に削平を受けているが、辛うじて東壁側が残っていた。

規模は上端幅40～90cm、下端幅13～47cm、深さは8～35cmである。断面形は、①地点で舟底形で、東壁では緩く立ち上がり、さらにその上方ではほぼ垂直に近く内弯しながら立ち上がっている。西壁は東壁より急な立ち上がりで、中ほどで段があり、その上方では外傾しながら延びている。②地点では「U」字形で、東壁では中ほどに段があり外傾しながら延び、その上方では、わずかに内弯して立ち上がっている。西壁では中ほどよりやや上に段があり、さらにその上方では外傾しながら延びている。(第72図)



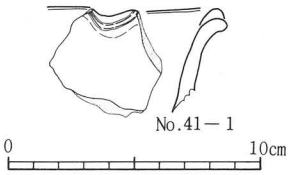
北部断面

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR3/3暗褐　褐　色	シ　ル　ト	
2	10YR3/4暗褐　褐　色	シ　ル　ト	褐色土ブロックを斑状に含む
3	10YR3/3黒褐　褐　色	粘土質シルト	褐色土の小ブロックを斑状に含む

西部断面

層No	土　色	土　性	その他
1	10YR4/2灰　黄　褐　色	シ　ル　ト	マンガンを霜降状に含む
2	10YR4/3にぶい黄褐色	シ　ル　ト	マンガンを霜降状に含む、黄褐色シルト粒を含む
3	10YR4/2灰　黄　褐　色	シ　ル　ト	マンガン・酸化鉄を含む
4	10YR4/2灰　黄　褐　色	シ　ル　ト	マンガンを霜降状に含む
5	10YR4/3にぶい黄褐色	シ　ル　ト	マンガン褐色土粒を含む
6	10YR3/3暗　褐　色	粘土質シルト	マンガンを含む、褐色土粒を6層よりも多く含む
7	10YR3/2黒　褐　色	粘土質シルト	マンガン酸化鉄を含む、褐色土の小ブロックを含む
8	10YR3/4にぶい黄褐色	シ　ル　ト	酸化鉄を含む

第72図　1号溝断面図



遺物No	種　別	器　形	層　位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
41－1	土師器	片口土器	堆積土中	ナデ			ヘラナデ			(4.1)			(1/12)		

第73図　1号溝出土土師器

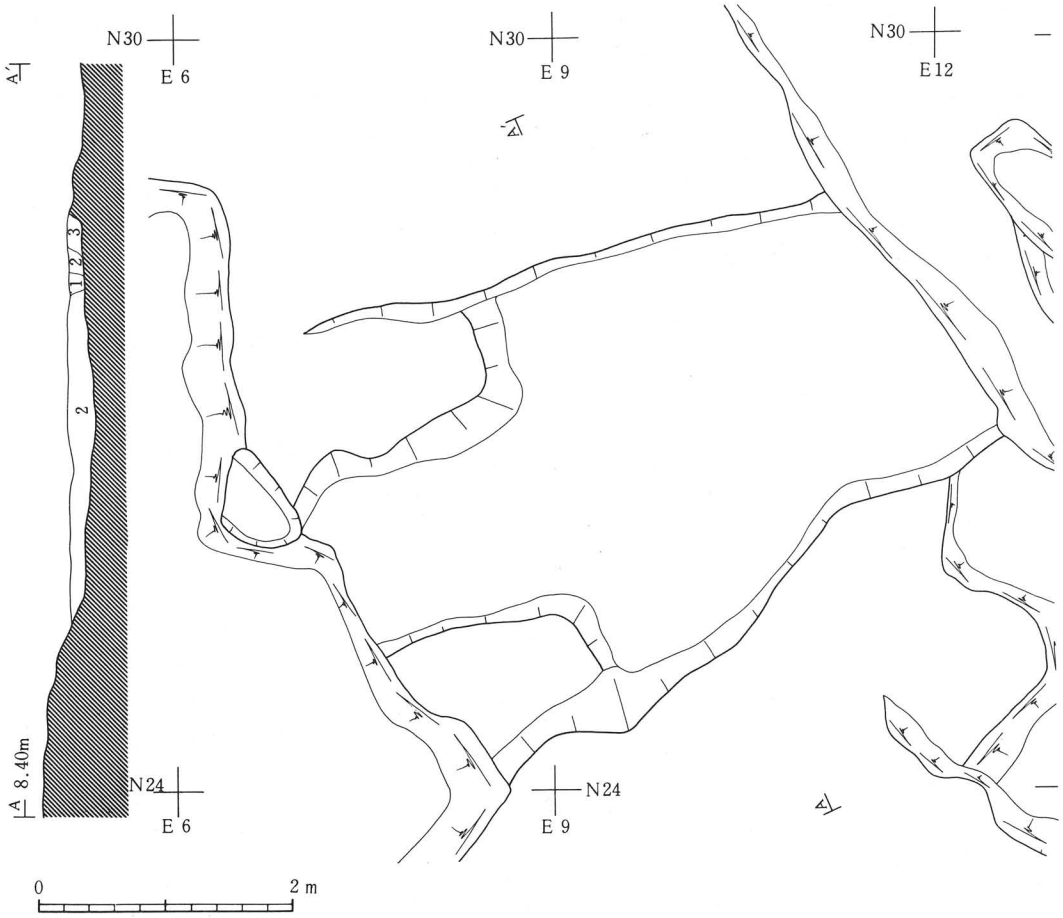
溝内堆積土は、北側ベルトでは3層に分かれ、第1・第2層は暗褐色シルト、第3層は黒褐色粘土質シルトで、第2・第3層では褐色土のブロックを斑状に含んでおり、よくしまっている。南側ベルトでは8層に細分された。第1・第3・第4層は灰黄褐色シルト、第2・第5・第8層はにぶい黄褐色シルト、第6層は暗褐色粘土質シルト、第7層は黒褐色の粘土質シルトである。第1層から第7層まではマンガンを含み、第7・第8層では酸化鉄を含む。第7層はやや粘性があるが、他の層は全て粘性はなく、よくしまっている。

遺物は、土師器の坏、甕などの破片が出土した。掘り込まれた時期は、17号住居跡より新しく、なおかつ、3号溝よりも新しいといえる。

底面の傾きは、北東側が高く東西側が低くなっている。

2号溝（SD 2）

この溝は、E－9、N－27の地点で検出され、微高地の東北端部にわずかに残っている。遺構確認面は地山である。溝の方向は、南西部、北東部ともに攪乱を受け、又、上面も削平されていて残存部が短いため不明であるが、北東、及び南西方向に延びていたものと推定される。この2号溝の残存部と他の遺構との重複関係にあるものはない。



層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ⅘褐　　色	砂質シルト	極小の砂と炭化物を含む
2	10ＹＲ⅝にぶい黄褐色	砂質シルト	極小の砂と炭化物を含む
3	10ＹＲ⅝にぶい黄褐色	砂質シルト	極小の砂と炭化物を含む 砂利を含む

第74図　2号溝実測図

規模は、上端幅248～372cm、下端幅218～315cm、深さは26～56cmである。断面形は逆台形で、北壁では緩く立ち上がり、さらにその上方で外傾しており、南壁側では垂直に近い立ち上がりである。

溝内堆積土は3層に分けられ、第1層は褐色砂質シルト、第2・第3層はにぶい黄褐色砂質シルトで、全て粘性、しまり共になく、中に炭化物を含んでいる。第3層は砂利を含んでいる。

遺物の出土状況をみると、不規則ながらどの層からも土師器や須恵器の破片が多量に出土した。

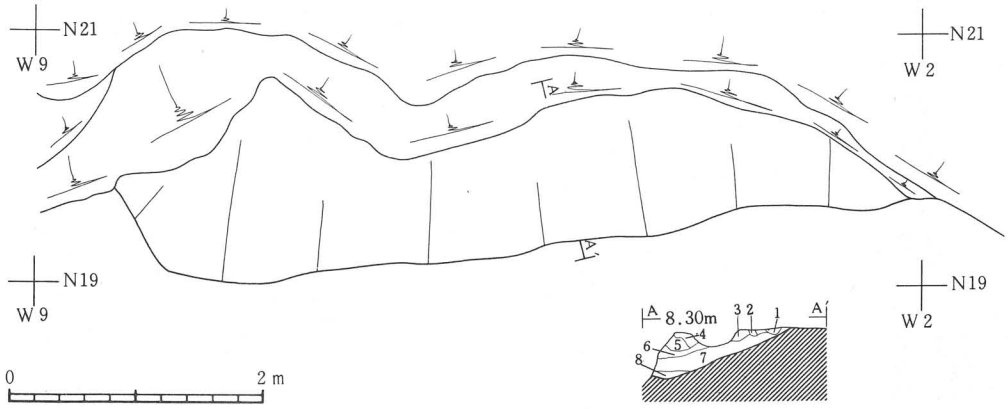
底面の傾きは、残存部が短いために不明である。

3号溝（SD 3）

この溝は、微高地の北側N－19.5、W－6の地点で検出され、微高地の北端部にわずかに残っている。遺構確認面は地山である。溝の方向は、残存部でN－71°－Eで、微高地北端に沿って東北東から西南西方向へ延びていたものと推定されるが、西南西部分、東北東部分、及び北壁側の攪乱が著しく、又、残存部も極めて短いため不明である。

3号溝は、堆積土上面を1号溝によって切られている。

残存部の規模は、上端幅33～75cm、下端幅26～49cm、深さは35～50cmである。断面形は、北



層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
2	10YR3/2黒　褐　色	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂質シルト	火山灰を少量含む
4	10YR3/3にぶい黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土を含む
5	10YR4/3にぶい黄褐色	砂質シルト	暗褐色土をブロック状に含む
6	10YR7/3浅　黄　色 10YR4/4褐　色	シルト	酸化鉄を含む、7・8層より火山灰が多い
7	10YR7/3浅　黄　色 10YR4/4褐　色	シルト	酸化鉄を含む、
8	10YR7/3浅　黄　色 10YR4/4褐　色	シルト	酸化鉄を含む、7層より酸化鉄の量が多い
6、7、8層は、浅黄色（火山灰）と褐色の相互である。			

第75図　3号溝実測図

壁側が攪乱を受けているために明確ではないが、開いた「V」字状であったろうと推定される。南壁は、外傾も内弯もせずに緩やかに立ち上がっている。

溝内堆積土は８層に細分され、第１・第３・第５層はにぶい黄褐色の砂質シルト、第２層は黒褐色の砂質シルト、第４層は暗褐色の砂質シルト、第６・第７・第８層は浅黄色のシルトである。又、第３層には薄い縞状に火山灰が含まれている。

遺物は、堆積土中より土師器の坏、甕の破片が出土した。

底面の傾きについては、残存部が極めて短いために不明である。

４号溝（SD ４）

この溝は、１号、２号、３号溝が微高地周辺に掘り込まれていたのと異なり、微高地周辺より一段下がった旧河道部で検出された。遺構検出面は、旧水田耕作土直下のⅣ層上面である。溝の方向は、１トレンチの南側ではN－18.5°－Eで、南南西へはほぼ真っすぐに延び、１トレンチから３トレンチまでは北東方向にほぼ真っすぐに延びている。又、３トレンチから４トレンチ以北では、東寄りに傾きながら延びているものと推定される。

規模は、上端幅110～165cm、下端幅38～82cm、深さは48～67cmである。断面形は、４トレンチでは溝を斜めに切っているために正確にとらえられないので、ここでは２トレンチ、３トレンチでみることにする。２トレンチでは下半部の部分はほぼ「U」字形で、東壁は、中央部から外傾しながら緩やかに立ち上がり、上端部でほぼ垂直に立ち上がっている。西壁は、中央部からやや外傾しながら緩やかに立ち上がっている。４トレンチでは、壁の立ち上がり方は３トレンチと逆になっており、幅もやや広がっている。これは、この４号溝が３トレンチで「く」の字状に曲がっているためと考えられる。

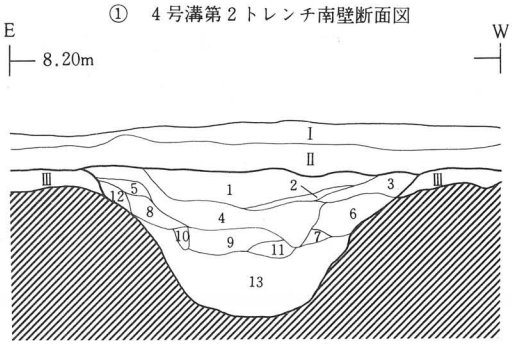
溝内堆積土は、２・３・４トレンチで微妙に異なっているために分けて見ると以下のようになる。

２トレンチでは、13層に細分された。第１・第２・第３・第６・第８・第９・第11・第12層は黒褐色粘土、第４・第５層は黒褐色砂質粘土、第７層は灰色粘土、第10層は黒色粘土、第13層はオリーブ黒色粘土である。

３トレンチでは、８層に細分され、いずれも黒褐色粘土であるが、第２・第８層は砂粒を含んでいる。第１・第２・第３層では植物遺体が含まれており、第７・第８層ではグライ化している。

４トレンチでは、溝を斜めに切っているために溝本来の形はでていないが、12層に細分された。第１・第２・第８層は黒褐色粘土、第３・第５・第９層は灰黄褐色粘土、第４層は褐灰色粘土、第６層は黒褐色シルト質粘土、第７層は灰黄褐色砂質シルト、第10・第11・第12層は褐

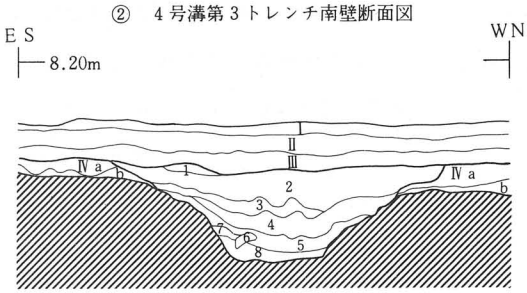
① 4号溝第2トレンチ南壁断面図

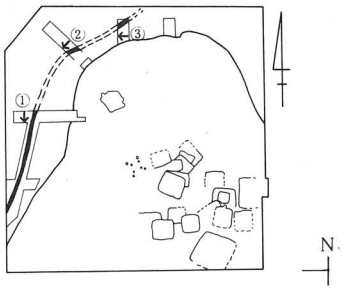


第2トレンチ

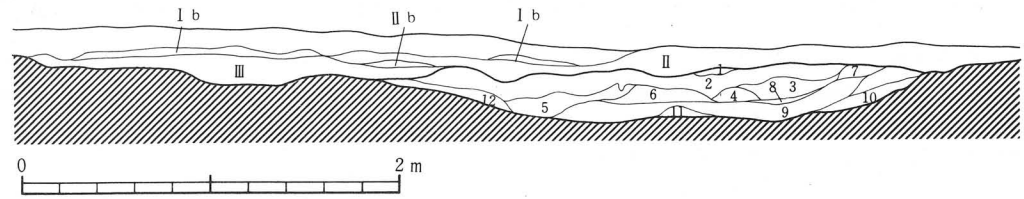
層No	土　色	土　性	そ　の　他
Ⅰ	2.5YR4/2暗灰黄色	粘土質シルト	
Ⅱ	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	
Ⅲ	10YR5/6灰黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土と黒褐色土粒の混合層
1	10YR3/1黒褐色	粘　土	暗灰黄土を含む
2	10YR3/2黒褐色	粘　土	
3	10YR3/2黒褐色	粘　土	
4	10YR3/2黒褐色	砂質粘土	
5	2.5YR3/1黒褐色	砂質粘土	
6	2.5YR3/1黒褐色	粘　土	
7	10YR5/1灰　色	粘　土	
8	2.5YR3/1黒褐色	粘　土	
9	10YR3/2黒褐色	粘　土	
10	10YR3/1黒　色	粘　土	
11	10YR3/2黒褐色	粘　土	
12	10YR3/2黒褐色	粘　土	
13	10YR3/1オリーブ黒色	粘　土	

② 4号溝第3トレンチ南壁断面図





③ 4号溝第4トレンチ西壁断面図



第3トレンチ

層No	土　色	土　性	そ　の　他
Ⅰ	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を多く含む
Ⅱ	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を多く含む
Ⅲ	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	酸化鉄をブロック状に含む
Ⅳa	10YR3/1黒褐色	粘　土	酸化鉄粒を含む
b	10YR5/3にぶい黄褐色	粘　土	酸化鉄を線状に含む
1	10YR3/3黒褐色	粘　土	植物遺体を含む
2	10YR3/3黒褐色	粘　土	雲母を多く含む
3	10YR3/3黒褐色	粘　土	
4	10YR3/2黒褐色	粘　土	
5	10YR3/3黒褐色	粘　土	
6	10YR3/2黒褐色	粘　土	
7	5YR3/1黒褐色	粘　土	酸化鉄を含む
8	2.5YR3/1黒褐色	粘　土	

第4トレンチ

層No	土　色	土　性	そ　の　他
Ⅰa	10YR4/1褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
Ⅰb	10YR5/2灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む
Ⅱ	10YR5/2灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む
Ⅱb	10YR5/2灰黄褐色	砂	極小の砂粒を多量に含む
Ⅲ	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	中世陶器出土
1	10YR3/2黒褐色	粘　土	
2	10YR3/1黒褐色	粘　土	水気を含み酸化鉄を含む
3	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	水気を含み酸化鉄を含む
4	10YR5/1褐灰色	粘　土	
5	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を含む
6	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	
7	10YR5/2灰黄褐色	砂質シルト	極小の砂粒を多量に含む
8	10YR3/2黒褐色	粘　土	
9	10YR5/2灰黄褐色	粘　土	
10	10YR5/1褐灰色	砂	酸化鉄を含む
11	10YR5/1褐灰色	砂	
12	10YR4/1褐灰色	砂	

第76図　4号溝断面図

灰色砂である。

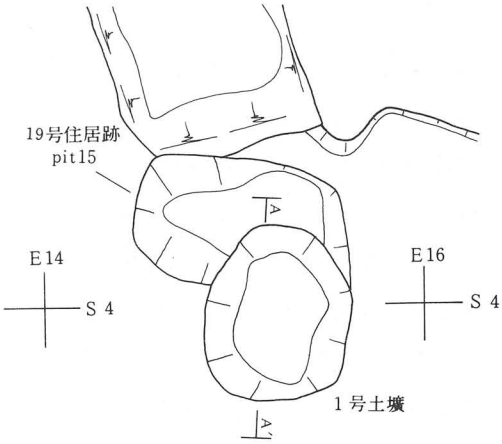
遺物は、土師器の坏、甕の破片が大部分であるが、須恵器片や石器片、古銭(寛永通宝)、骨なども出土した。この溝が掘り込まれた時期は、江戸時代以降のものと想定される。

底面の傾きは、北東側が高く、南西側が低くなっている。

7．土　　壙

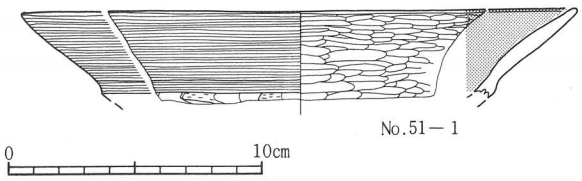
1号土壙（SK　1）

この土壙は、19号住居跡床面上で確認された。この土壙は、19号住居跡に伴うP.15　を切って堀り込まれ、カマドも掘り抜いている。このことから、掘り込まれた時期は19号住居跡より新しいことになる。このため19号住居跡に伴う土壙とは考えられない。平面形は長軸95cm、短軸77cmのほぼ楕円形である。壁高は東壁24cm、西壁で22cm、南壁で16～21cm、北壁で26cmを計る。断面形は「U」字状を呈し、東壁・西壁で緩く立ち、南壁・北壁では垂直に近く立ち上がり、北側が深く掘り込まれている。埋土は2層に分けられ、第1層は暗褐色砂質シルト、第2層は黒褐色の砂質シルトであるが、いずれも炭化物や木炭片を多く含んでいる。遺物は、実測可能な土師器の坏が1点と、土師器の甕や坏の破片が出土した。



層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10YR⅜暗褐色	砂質シルト	炭化物・灰黄褐色土をブロック状に含む
2	10YR⅜黒褐色	砂質シルト	木炭を含む

第77図　1号土壙実測図

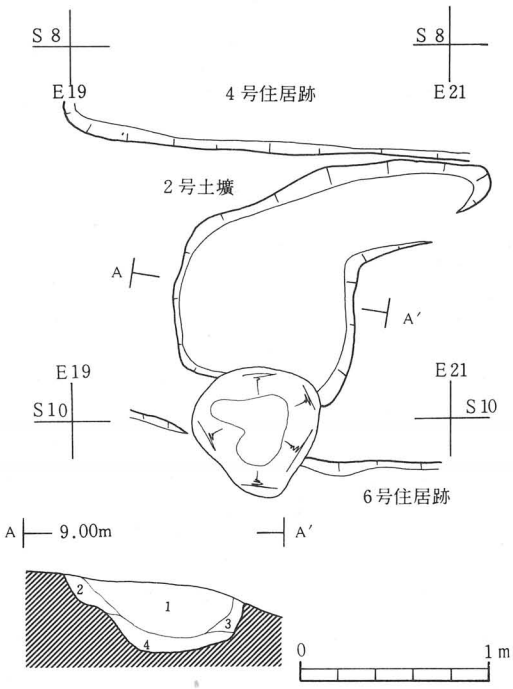


遺物No	種　別	器形	層　　位	外面調整			内面調整			法　量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底　部	口縁部	体部	底　部	器　高	口径	底径			
51－1	土師器	坏大	堆積土1層	ヨコナデ		ケズリ・ナデ	ミガキ		ミガキ	(3.8)	21.7	15.4	⅕	3	

第78図　1号土壙出土土師器

2号土壙（SK 2）

この土壙は、地山面で検出された。位置は、4号住居跡南側の西寄り、6号住居跡北側のほぼ中央付近で、両住居跡にはさまれた場所に掘り込まれている。平面形は不整形で、南半分では隅丸方形を呈し、北側は溝状に東側へのびる形になっており、長軸190cm、短軸110cmを計る。壁高は、東壁で17～19cm、西壁で18～30cm、南壁で23cm、北壁は4号住居跡の南壁と接近しており、東に延びながら消滅する。断面形は擂鉢形であり、西壁では中ほどで段をつくりながら立ち上がり、東壁では垂直に近く立ち上がっている。埋土は4層に分けられ、第1層は、褐色砂質シルト、第2・第3・第4層はいずれもにぶい黄褐色で、第2と第4層は粘土シルト、第3層は砂質シルトである。遺物は、第1層中から土師器の破片や白色の骨片が出土した。

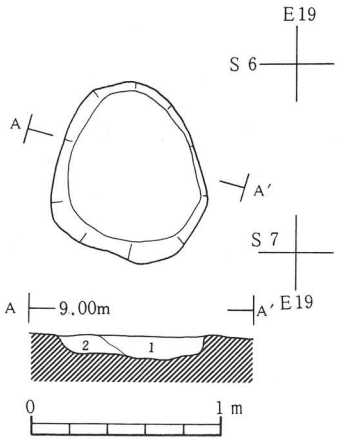


層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10YR4/4褐　色	砂質シルト	骨片並びに土器片を含む
2	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR5/3にぶい黄褐色	砂質シルト	
4	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	粘性が有る

第79図　2号土壙実測図

3号土壙（SK 3）

この土壙は西側半分は地山面で、東側は4号住居跡内堆土第1層上面で検出された。4号住居跡西壁を切り、床面下まで掘り込まれている。このため、4号住居跡が完全に埋没した後に掘り込まれたものと思われ、時期は4号住居跡より新しいということになる。平面形は、南北に長い楕円形で、長軸95cm、短軸71cmを計り、北側半分より南側半分のほうが大きい。壁高は東壁で7～16cm、西壁で9～15cm、南壁で7～16cm、北壁で15～16cmを計る。断面形は逆台形で、西壁は緩く立ち上がり、東壁で垂直に立ち上がる。埋土は2層



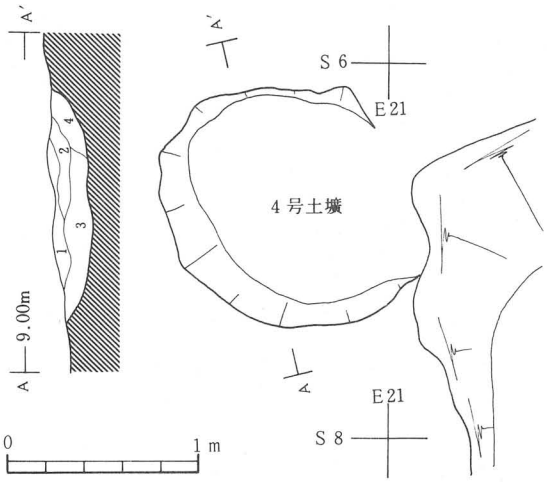
層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10YR4/4褐色	砂質シルト	炭化物と酸化鉄を多く含む
2	10YR4/4褐色	砂質シルト	炭化物と酸化鉄を含む

第80図　3号土壙実測図

に分けられるが、共に褐色砂質シルトで、炭化物と酸化鉄を多く含み、粘性がなく、しまりがない。遺物は、土師器の破片を出土した。

4号土壙（SK 4）

この土壙は、4号住居跡内の南西側寄りの位置で、住居跡内埋土第1層上面で検出された。切り合い関係は、4号土壙が4号住居跡床面より掘り込まれたと思われるP. 2を完全に切り、又、P.11の南東側半分も切っている。平面形は不整楕円形で、長軸126cm、短軸118cmを計るが、東壁は削平を受けている。壁高は西壁で8～11cm、南壁で4～7cm、北壁で14～25cmを計る。断面形は皿形で、どの方向の壁も緩く立ち上がっているが、東側に行くにつれて削平のため消失している。埋土は4層に分けられ、第1・第2層は黄褐色砂質シルトで炭化物を含み、第3・第4層は褐色砂質シルトで酸化鉄、炭化物を含む。第4層では焼土も含んでいた。これら4層すべては、粘性がなく、しまりもない。遺物は、土師器の破片を出土した。

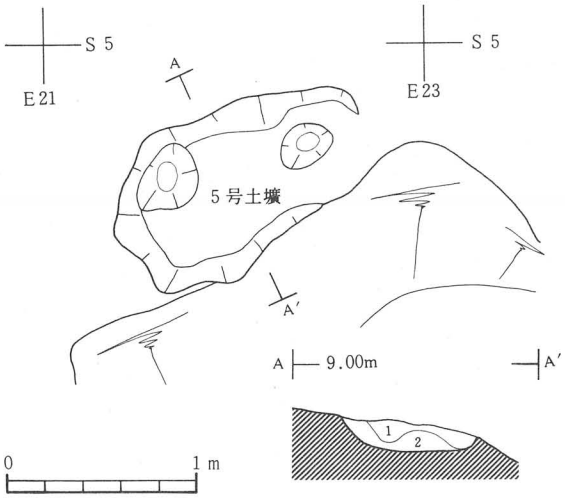


層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR5/4黄褐色	砂質シルト	炭化物と極小の砂粒を含む
2	10YR5/4黄褐色	砂質シルト	炭化物と荒目の粒と酸化鉄を含む
3	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物と酸化鉄を含む
4	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物と酸化鉄・焼土を含む

第81図　4号土壙実測図

5号土壙（SK 5）

この土壙は4号土壙と同じく、4号住居跡内の中央南寄り（4号住居跡は攪乱を受けているため東側半分は不明である。）の位置で、東側は地山面、西側の残りのよい部分は、4号住居跡内埋土第12層上面で検出された。5号土壙は、4号住居跡の床面下まで掘り込まれている。平面形は不整形で、長軸142cm、短軸79cmを計るが、東側は攪乱を受け消失している。壁高は、西壁17



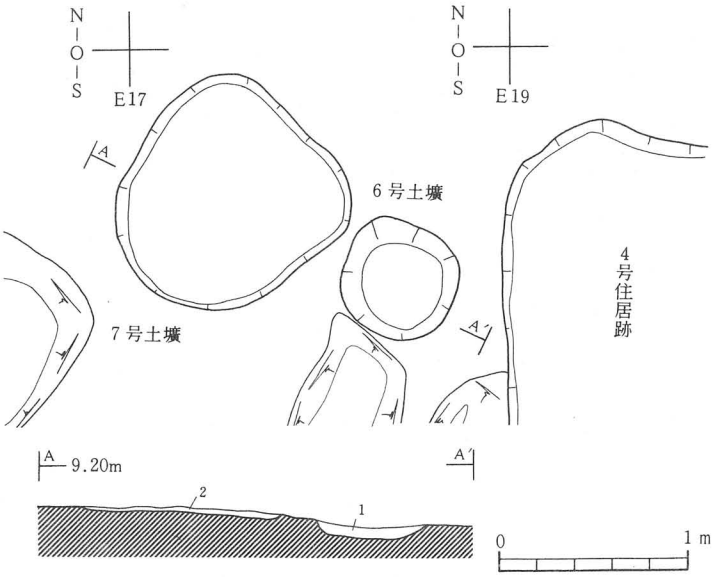
層No	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR5/4黄褐色	砂質シルト	炭化物を含む
2	10YR5/4褐　色	砂質シルト	炭化物を含む

第82図　5号土壙実測図

～22cm、南壁１～12cm、北壁は３～19cmを計る。断面形は舟底形で、北壁は緩く立ち上がり、南壁は垂直に立ち上がる。又、断面形には表現されていないが、北壁の西側で10cm、東側では20cmほどピット状に掘り込まれた部分があるが、その性格は不明である。埋土は２層に分けられ、第１層は黄褐色砂質シルト、第２層は褐色砂質シルトで、共に炭化物を含み、粘性はなく、しまりもない。遺物は、土師器の破片を出土した。

６号土壙（SK ６）

この土壙は地山面で検出された。位置は、４号住居跡と７号土壙にはさまれるように、４号住居跡の北西壁より西へ22cm離れている。平面形は楕円形で長軸61cm、短軸59cmを計る。壁高は東壁５cm、西壁６cm、南壁６cm、北壁は５～６cmを計る。断面形は逆台形で、東壁は緩く立ち上がり、西壁は垂直に近く立ち上がる。埋土は１層で褐色砂質シルト、粘性があり、しまっている。遺物は何も出土しなかった。



層No	土　色	土　性	そ　の　他
1	10ＹＲ⅔褐色	砂質シルト	黄褐色土をブロック状に、暗褐土を斑状に含む
2	10ＹＲ⅔褐色	砂質シルト	暗褐色土を斑状に含む

第83図　６・７号土壙実測図

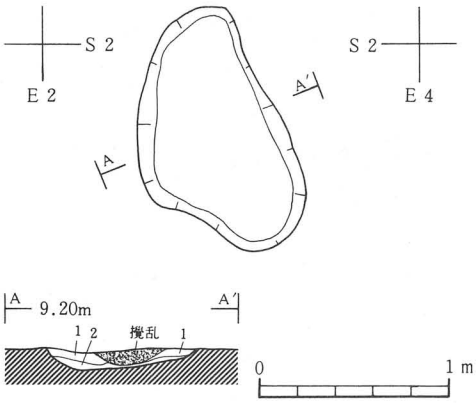
７号土壙（SK ７）

この土壙は６号土壙と同じく、地山面で検出された。位置は、６号土壙の西隣りで、その最狭部が８cm。又、４号住居跡の北西壁から西へ80cmである。平面形は隅丸方形で、長軸117cm、短軸107cmを計る。壁高は東壁２～３cm、西壁１～２cm、南壁２cm、北壁１～３cmを計る。断面形は皿形で、壁は緩く立ち上がゃている。埋土は１層で、褐色砂質シルト、粘性はなく、しまっている。遺物は出土しなかった。

８号土壙（SK ８）

この土壙は、12号住居跡の埋土第１層上面で検出され、第２層上面まで掘り込まれている。

中央部は攪乱を受けている。平面形は不整形で長軸132cm、短軸77cmを計る。壁高は、東壁で3～6cm、西壁6～9cm、南壁6～7cm、北壁で5cmを計る。断面形は舟底形で、東壁、西壁とも緩く立ち上がっている。埋土は2層に分けられ、共に暗褐色の砂質シルトで、粘性はなく、しまっている。遺物は1層中から土師器の破片を、2層中からは白色の骨片を出土した。

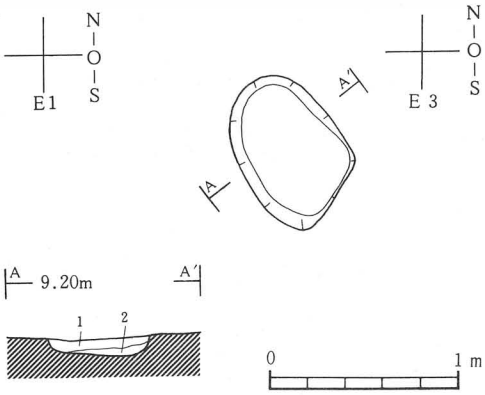


層No	土　色	土 性	そ の 他
1	10YR3/3暗褐色	砂質シルト	黒褐色土を小ブロックで含む
2	10YR5/4黄褐色	砂質シルト	骨片を含む

第84図　8号土壙実測図

9号土壙（SK 9）

この土壙は、12号住居跡埋土第1層上面で検出され、第2層上面まで掘り込まれている。平面形は不整楕円形を呈しており、長軸76cm、短軸59cmを計る。壁高は東壁で5～6cm、西壁で6～8cm、南壁で6～8cm、北壁で6～9cmを計る。断面形は逆台形で、東壁は垂直に近く立ち上がり、西壁はやや緩く立ち上がっている。埋土は2層に分けられる。共に砂質シルトで、粘性はなく、第1層はややしまっているが、第2層はしまりがない。土色については、註記前にサンプルを紛失したため不明である。遺物は第1層中から土師器の破片と白色の骨片を出土した。



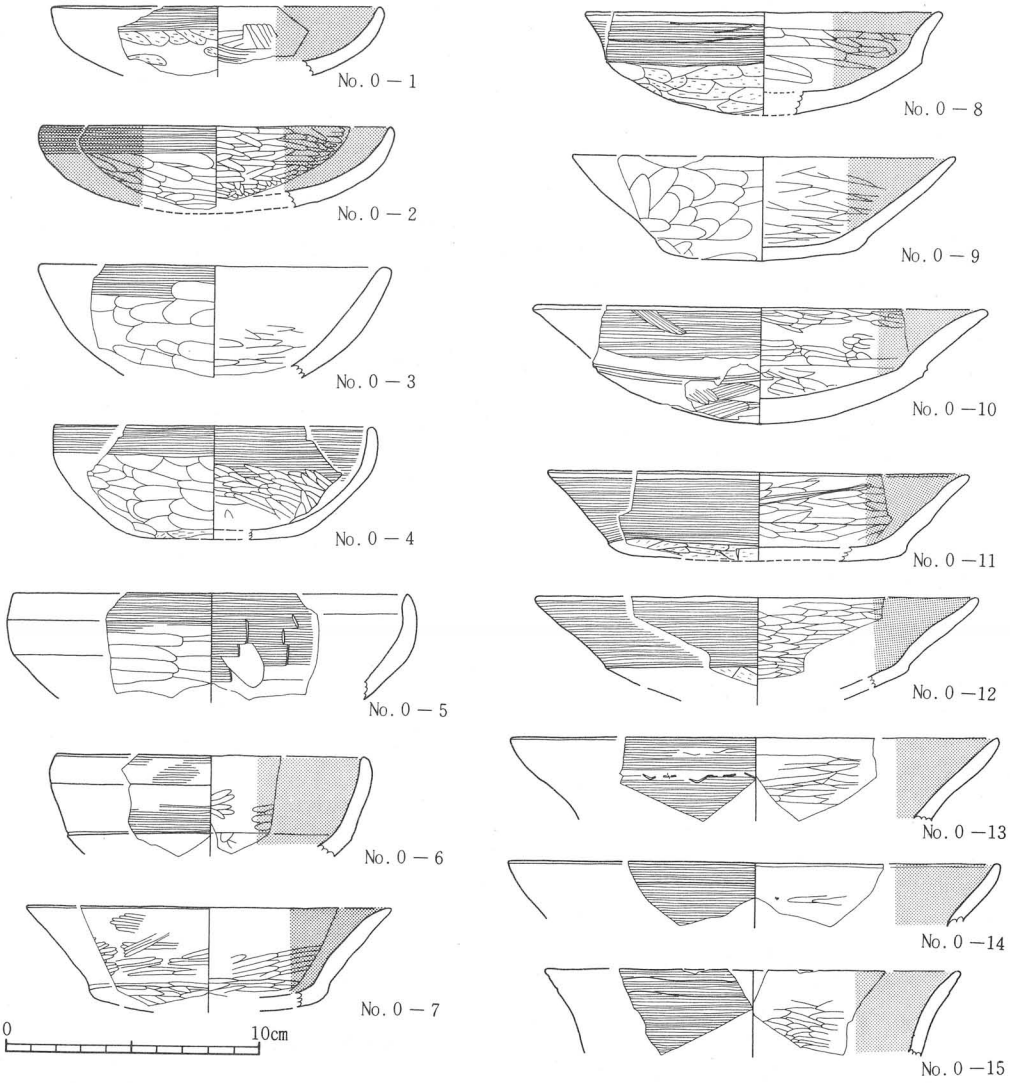
層No	土　色	土 性	そ の 他
1		砂質シルト	土器片・木炭片・骨片を含む
2		砂質シルト	

第85図　9号土壙実測図

8．表土中よりの出土遺物

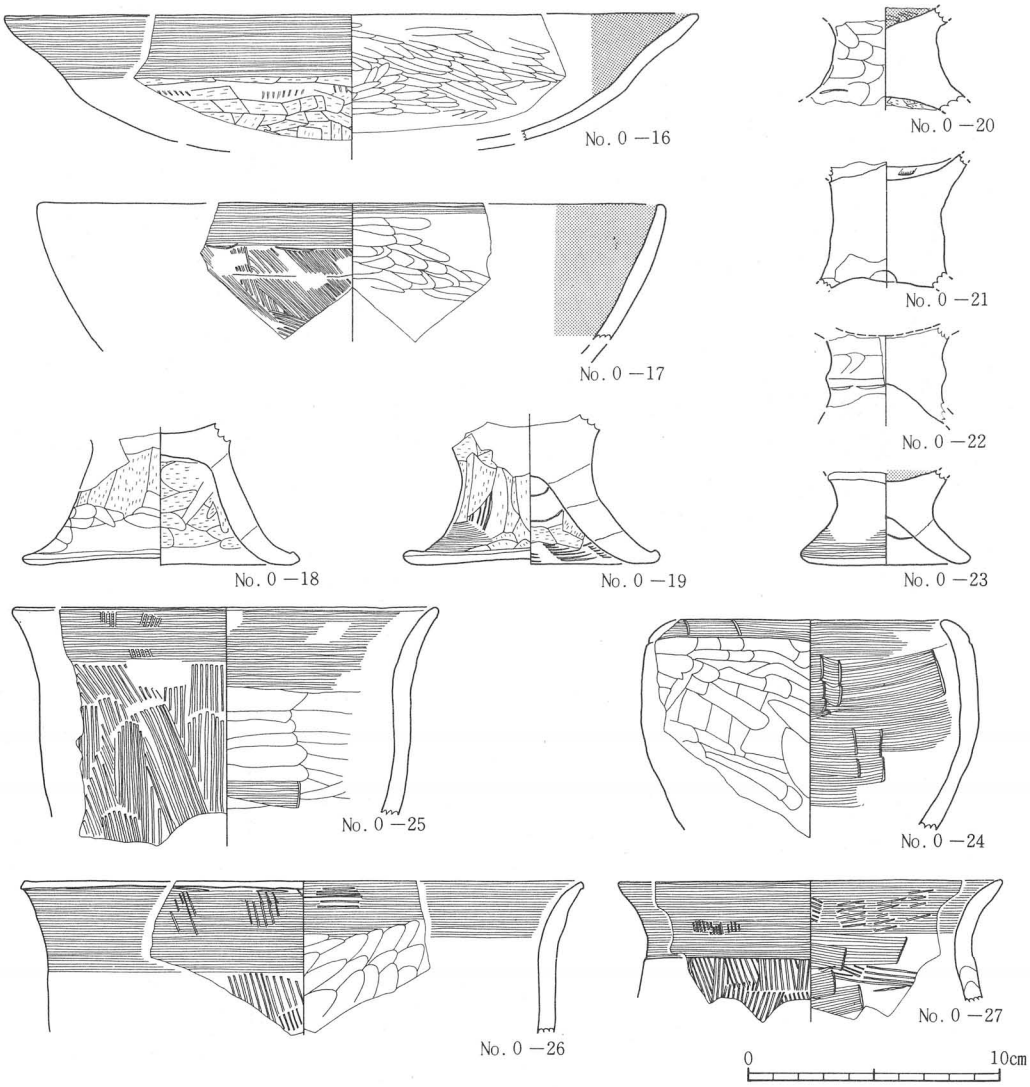
栗遺跡は、すでに述べたように天地返しにより攪乱されているため、表土中にも多くの土器片等の遺物が含まれている。表土中の遺物は第86図から第89図に見るように多くは小片となっているが、なかには、No.0－28のように完形に近いものも出土している。

表土中の土師器は、住居跡等の各遺構から出土しているものとほぼ同形態で、類似技法によ



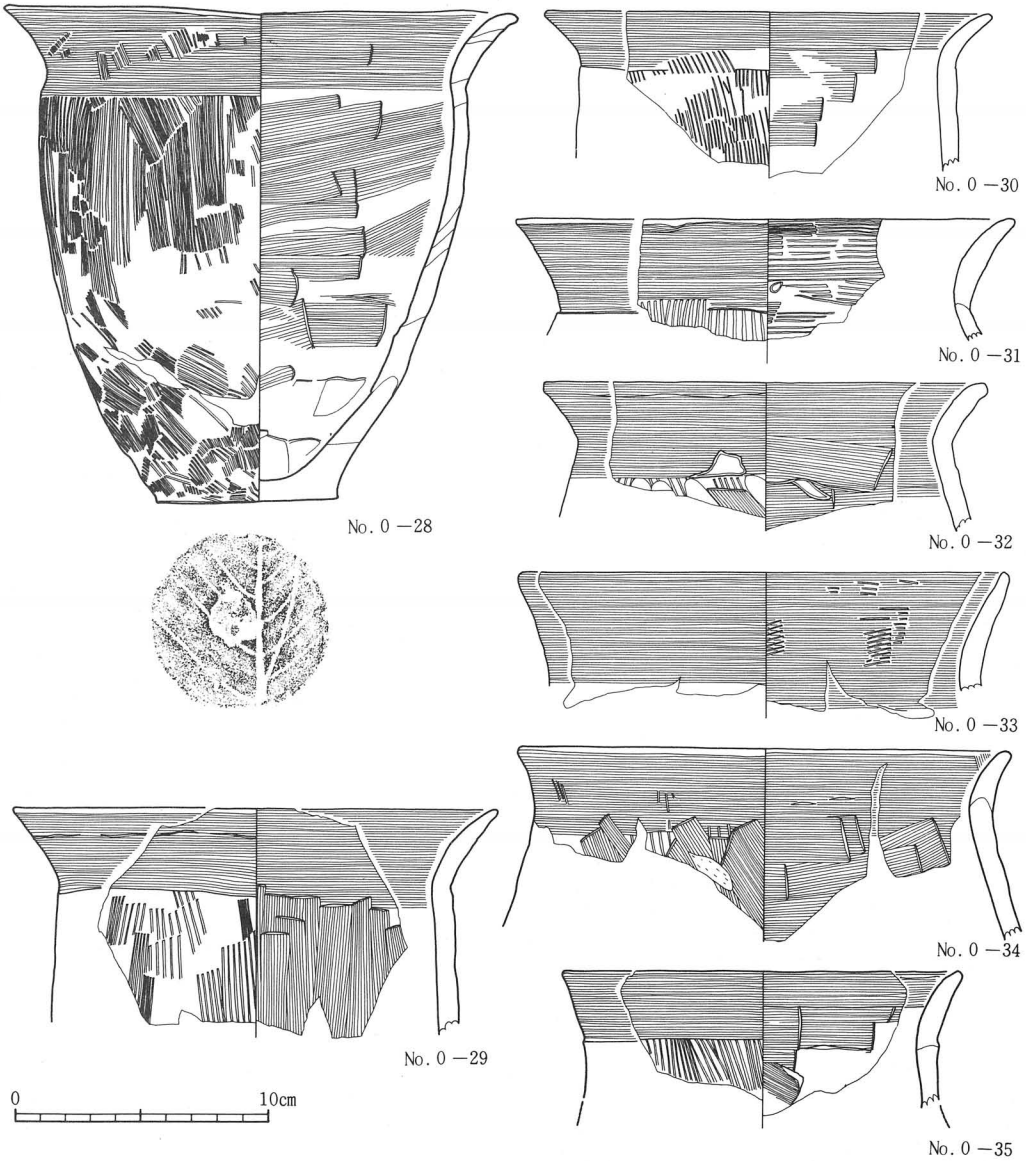
遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量（cm）			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
0 − 1	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ケズリ			ミガキ	(2.7)	13.0		⅛	2A	
0 − 2	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(3.2)	13.8		⅙	2A	
0 − 3	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ナデ			ミガキ	(4.4)	13.9		(¼)	2B	
0 − 4	土師器	坏小	表土										(¼)	2A	
0 − 5	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ナデ	ヨコナデ		ヘラナデ・ナデ	(4.3)	15.6	(15.5)	⅙	2A	
0 − 6	土師器	坏小	表土	ヨコナデ			ミガキ		ミガキ	(4.0)	12.2	(11.2)	⅛	3	
0 − 7	土師器	坏小	表土	ミガキ		ミガキ	ミガキ		ミガキ	(3.9)	14.3	(9.3)	⅙	4Eb	
0 − 8	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ケズリ			ミガキ	4.1	14.0	12.4	¼	4Ec	
0 − 9	土師器	坏小	表土	ナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	4.1	15.1	8.3	¼	4Eb	
0 −10	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	4.6	18.0	12.8	¼	4Eb	
0 −11	土師器	坏小	表土										⅕	4Eb	
0 −12	土師器	坏小	表土	ヨコナデ		ナデ	ミガキ		ミガキ	(3.8)	17.5	11.9	¼	4Ea	
0 −13	土師器	坏小	表土	ヨコナデ			ミガキ		ミガキ	(3.2)	19.2		(⅕)	4Ea	
0 −14	土師器	坏小	表土	ヨコナデ			ミガキ			(2.5)	19.4		(1/10)	4Ea	
0 −15	土師器	坏小	表土	ヨコナデ			ミガキ			(3.4)	16.4		(1/10)	4Eb	

第86図　表土中出土土師器（1）



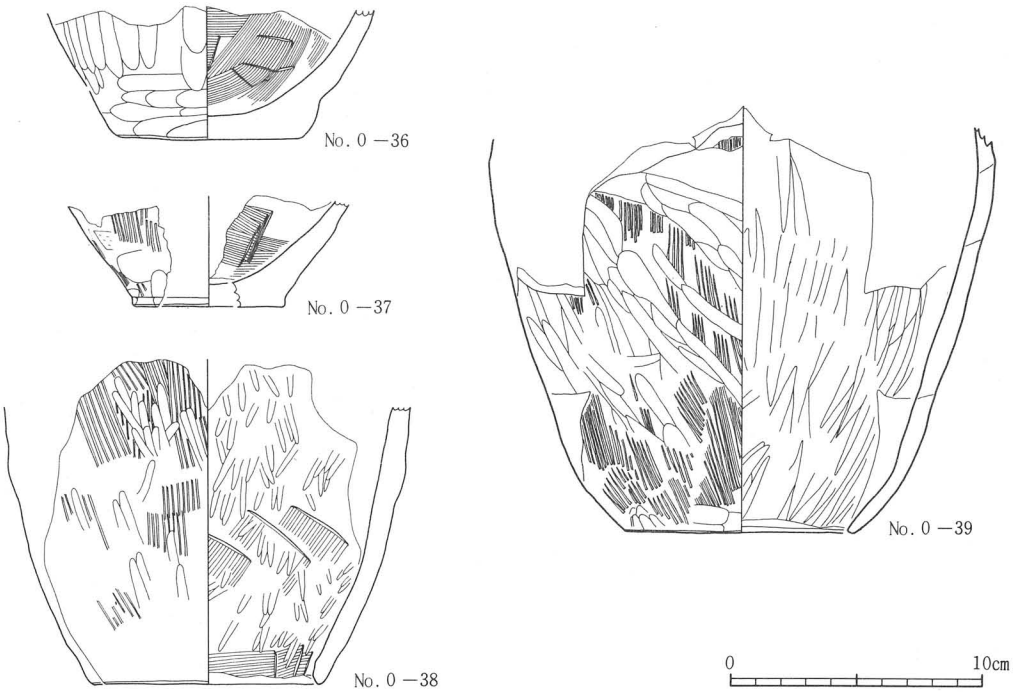
遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
0−16	土師器	坏大	表土	ヨコナデ		ハケメ・ケズリ	ミガキ		ミガキ	(4.9)	27.0	21.6	⅓	3	
0−17	土師器	坏大	表土	ヨコナデ		ハケメ	ヨコナデ		ミガキ	(5.3)	24.6		1/10	1	
				脚柱部	脚裾部	その他	脚柱部	脚裾部	その他	脚高	脚柱径	脚裾径			
0−18	土師器	高坏	表土	ケズリ	ナデ		ケズリ	ケズリ		5.2	5.9	10.8	(1/2)	3	47
0−19	土師器	高坏	表土	ケズリ	ケズリ・ヨコナデ		ケズリ	ハケメ		5.4	5.1	10.1	(完)	2	47
0−20	土師器	高坏	表土	ナデ			ケズリ			(3.3)	4.1		(1/4)		47
0−21	土師器	高坏	表土	ナデ			ヘラナデ			(4.6)	4.3		(1/2)		47
0−22	土師器	高坏	表土	ヨコナデ・ナデ						(3.4)	4.6		(1/4)		47
0−23	土師器	高坏	表土	ヨコナデ	ヨコナデ		ナデ	ナデ		3.6	3.8	6.7	(完)		47
0−24	土師器	鉢Ⅰ	表土	ヘラナデ	ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		(8.6)	10.8		⅓	1Bb	
0−25	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ナデ・ヘラナデ		(9.1)	16.8		(1/6)	1	
0−26	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ナデ		(6.1)	22.1		⅔	1	
0−27	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ・ヨコナデ	ヘラナデ・ハケメ		(5.4)	15.1		(1/4)	2	

第87図　表土中出土土師器（2）



遺物No	種別	器形	層位	外面調整			内面調製			法量(cm)			残存	分類	写真関係
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
0−28	土師器	甕Ⅱ小	表土	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘワナデ	19.3	20.2	7.1	¾	2D	
0−29	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	(9.0)	19.1		⅓	2	
0−30	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(6.6)	17.4		(¼)	1	
0−31	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ハケメ	ハケメ		(4.8)	19.5		(1/12)	2	
0−32	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ・ナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		(5.9)	17.3		(⅙)	2	
0−33	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	~~ハケメ~~・ヘラナデ		ハケメ・ヨコナデ			(5.5)	19.2		(⅕)	1	
0−34	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ・ヘラナデ		ヨコナデ	ヘラナデ		(7.6)	19.4		(⅕)	1	
0−35	土師器	甕Ⅱ	表土	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ		(5.7)	15.7		(⅙)	2	

第88図　表土中出土土師器（3）



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法量(cm)			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径			
0 −36	土師器	甕Ⅱ	表土		ナデ	ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	(5.3)		7.0	(完)		
0 −37	土師器	甕Ⅱ	表土		ケズリ・ハケメ	ハケメ・ナデ		ヘラナデ	ヘラナデ	(4.4)		5.9	(1/3)		
0 −38	土師器	甑大	表土		ハケメ・ミガキ			ヘラナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	(12.8)		8.9	1/3		
0 −39	土師器	甑大	表土		ハケメ・ミガキ	ハケメ・ナデ		ミガキ	ミガキ	(16.8)		9.0	2/3		

第89図　表土中出土土師器（4）

って調整されているものがほとんどである。ロクロを使用した土師器は出土していないが、基盤層の一部を成す小河川跡から出土した古い土師器（塩釜式または南小泉式）に類似するものは数点あるようである。

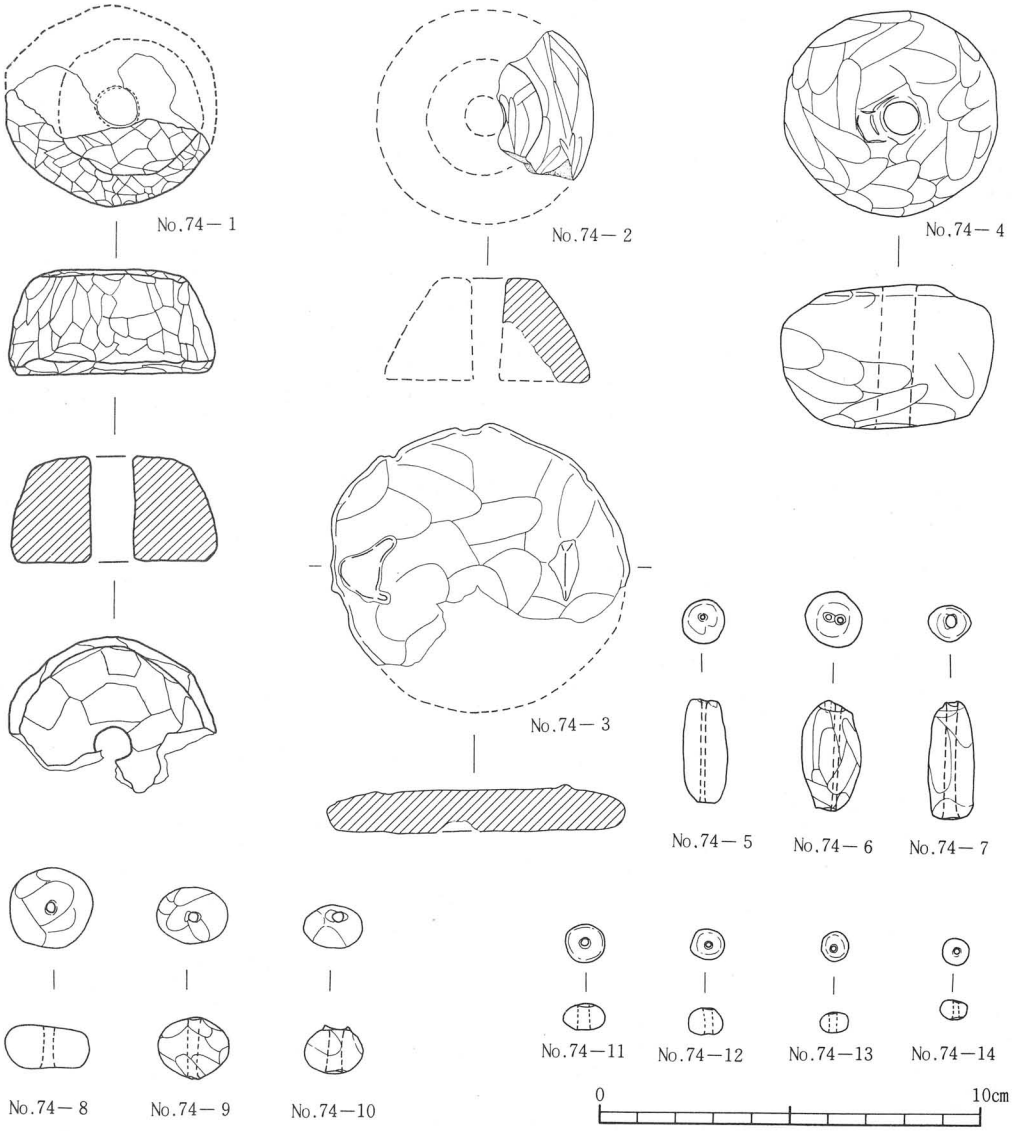
土製器のほかには、須恵器片、土師品、金属製品が少量出土している。各個体については後述してある。

9．土師器以外の出土遺物

1)　土製品

①　紡錘車

土製紡錘車は表土中と13号住居跡からの２点が出土した。いずれも、底面直径約5.5cm、高さ2.7cm程で円錐台形を呈する。表面はナデ及びヘラミガキにより、丁寧に調整されている。



遺物No.	種別	遺構名	層位	形態	法量 (cm) 厚さ(長さ)	直径	孔直径	重量	色調	残存	分類	写真図版
74－1	紡錘車	表採	表土	截頭円錐形	2.8	5.5	1.0	47.7g	暗赤褐	½		52
74－2	紡錘車	SI 13	堆積土	截頭円錐形	2.7	5.6	1.1	18.6g	灰黄褐	¼		52
74－3	円盤状土製品	SI 12	堆積土	鏡？	1.1	7.8		57.3g	灰褐	完		52
74－4	土玉	SI 19	床面	球	3.7	5.6	0.9	110.9g	にぶい黄橙	⅔	1類	52
74－5	管玉	SI 7	貼床中	管状	2.7	1.1	0.1	3.9g	黒褐	完	2類	53
74－6	管玉	SI 22	床面	管状	2.9	1.5	0.2	6.3g	黒褐	完	2類	53
74－7	管玉	SI 22	堆積土	管状	3.1	1.1	0.3	4.4g	黒褐	完	2類	53
74－8	土玉	SI 6	P 2	球	1.1	2.2	0.2	5.4g	にぶい黄橙	完	3類	53
74－9	土玉	SI 22	P 3	球	1.6	18.5	0.2	4.8g	黒	完	3類	53
74－11	土玉	SI 22	P 3	球	1.2	1.5	0.3	2.4g	褐灰	完	3類	53
74－12	小玉	SI 5	焼面上	球	0.7	1.0	0.2	0.55g	黒褐	完	4類	53
74－13	小玉	SI 5	カマド焼面	球	0.7	0.9	0.1	0.5g	黒褐	完	4類	53
74－14	小玉	SI 5	貼床下土壙	球	0.6	0.7	0.1	0.3g	黒	完	4類	53
74－1	小玉	表採	表土	球	0.5	0.7	0.1	0.25g	明赤褐	完	4類	53

第90図　土　製　品

胎土、焼成とも土師器と同様であるが、厚いためかやや脆い。

② 円盤状土製品

No.74－３は、直径7.8cm、厚さ1.1cmの円盤状の土製品である。片面はほぼ平坦であるが、他面の側縁付近には１対の粘土の微隆起がある。実測図では、右側が二等辺三角形を呈し、高まりの範囲も明確であるが、左側は範囲が不明瞭で低いものである。胎土・焼成とも土師器と同様である。表面全体に指紋が観察できる。用途としては、鏡の模造品と考えられる。

③ 土　玉

土玉は11個出土した。胎土・焼成とも土師器と同様である。調整としてはナデの認められるものもあるが、単に粘土を丸め、棒で孔を穿って製作されている。形状と大きさにより４類に分けられる。

１類(No.74－４)　直径5.5cm、厚さ3.7cmを計る大型で偏平な球形を呈するもので、１点だけ出土した。他類に比べると孔径も大きく作られている。

２類(No.74－５～７)　長さ2.7～3.1cm、直径1.15～1.6cmの円筒形を呈するもので、３点出土した。孔径は１～2.5mmを計る。

３類(No.74－８～10)　直径1.5～2.2cmの偏平な球形または球形を呈する中形の土玉で３点出土した。孔径は２～３mmを計る。

４類(No.74－11～14)　直径７～10mmのやや偏平な球形を呈する小形の土玉で、４点出土した。孔径は１～1.5mmを計る。

④ 小形手捏ね土器

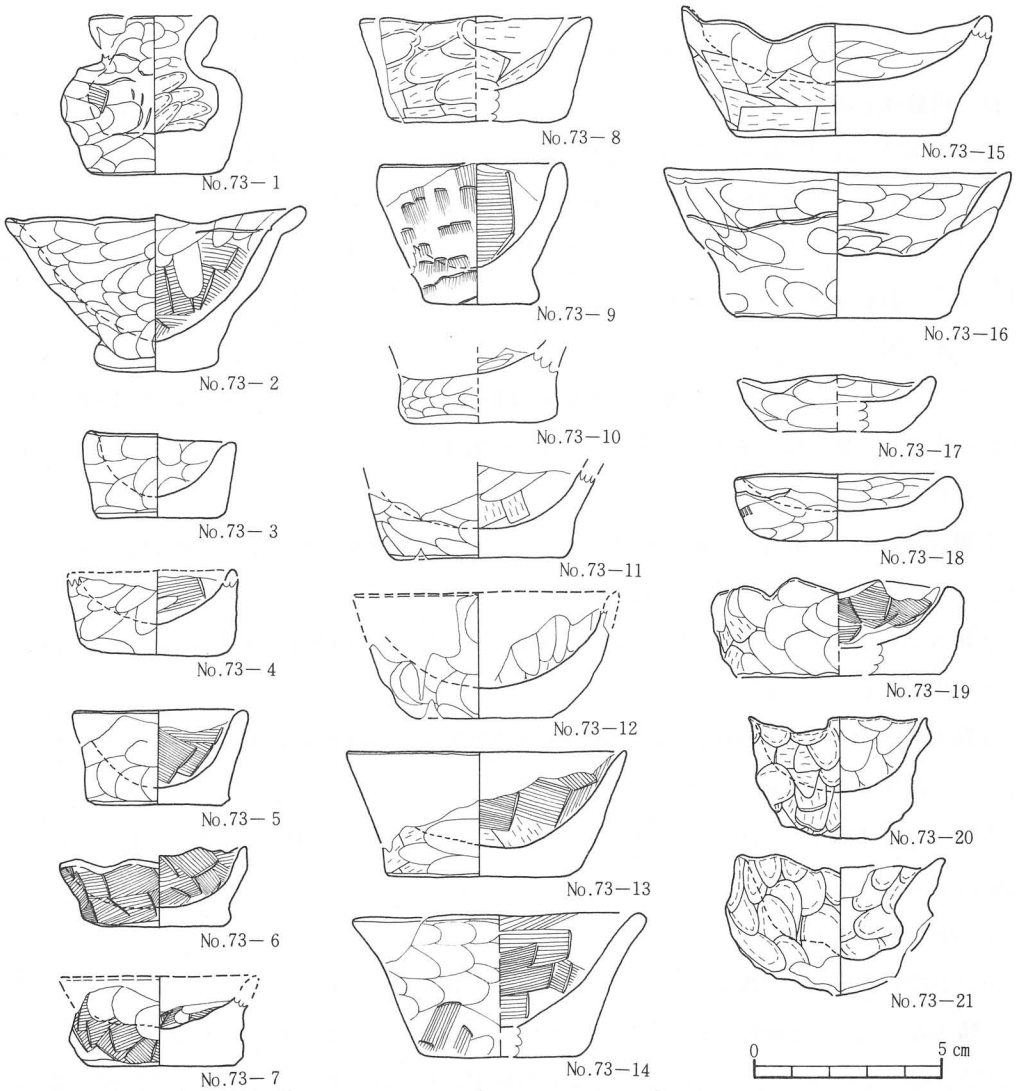
小形手捏ね土器は21点出土した。形状によって５類に分けられる。

１類(No.73－１)　土師器の器形を模倣したと考えることができるものが１類である。No.73－１は壺を模しているもので、手捏ねで造られた体部に粘土紐を巻き付けただけの口縁が造られている。本調査において１類は１点しか出土していないが、昭和49・50年の調査においては、壺のほかにも甑や甕、鉢を模したものも出土している。

２類(No.73－２)　小さな台状の底部から体部及び口縁部が浅鉢状に広がりをもって立つものである。底径に比して口径が２倍以上あり、器高も高い。２類は１例しか出土していない。

３類(No.73－３～16)　平らな底部から直線的で垂直に近く立ち上がる盃形のものである。口径と底径の差が小さく、底部が大きく感じられる。No.73－９を除くと器高は底径より小さいが、底径の½よりは大きく作られている。３類は14点出土し、本遺跡における小形手捏ね土器の主要形態を成している。

４類(No.73－17～19)　円盤状の粘土の周縁部を軽く立ち上がらせて口縁部とした皿形を呈するものである。３類に類似するが、器高が極めて低く、底径の½以下となっている。３点出土



遺物No.	種別	遺構名	層位	器形	外面調整	内面調整	法量(cm) 器高	口径	底径	残存	分類	写真図版
73－1	手捏ね	SI 17	床面	壺	ナデ・ヘラナデ	ナデ	4.2	3.3	3.4	(完)	1類	50
73－2	手捏ね	SI 17	床面	盃	ナデ	ナデ・ヘラナデ	4.1	7.9	3.2	完	2類	50
73－3	手捏ね	SI 17	床面	盃	ナデ	ナデ	2.2	4.0	3.2	完	3類	30
73－4	手捏ね	表採	表土	盃	ナデ	ヘラナデ・ナデ	(2.2)	(4.5)	4.0	(完)	3類	50
73－5	手捏ね	SX 2	地山	盃	ナデ	ヘラナデ	2.5	4.6	3.4	¾	3類	50
73－6	手捏ね	SI 17	床面	盃	ヘラナデ	ヘラナデ	2.1	5.0	3.8	完	3類	50
73－7	手捏ね	SI 2	堆積土	盃	ナデ・ヘラナデ	ナデ・ヘラナデ	(2.4)	(5.2)	3.9	⅓	3類	50
73－8	手捏ね	SI 7	床面	盃	ナデ・ケズリ	ケズリ	2.8	6.1	4.6	⅓	3類	
73－9	手捏ね	SI 17	床面	盃	ヘラナデ	ヘラナデ	3.7	5.0	3.0	⅔	3類	50
73－10	手捏ね	SI 12	堆積土	盃	ナデ	ナデ	(1.8)		4.1	¾	3類	
73－11	手捏ね	SD 2	堆1～2層	盃	ナデ	ナデ・ケズリ	(2.4)		4.7	½	3類	50
73－12	手捏ね	SI 12	床面	盃	ナデ	ナデ	(3.3)	(7.0)	3.6	⅔	3類	50
73－13	手捏ね	表採	黒色土	盃	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ケズリ	3.3	7.4	5.0	⅔	3類	50
73－14	手捏ね	SX 2	地山	盃	ナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	3.8	7.8	4.3	⅔	3類	
73－15	手捏ね	SI 17	床面	盃	ナデ・ケズリ	ナデ	3.5	8.2	5.6	⅔	3類	51
73－16	手捏ね	SI 3	堆1層	盃	ナデ	ナデ	4.3	9.1	5.7	⅔	3類	51
73－17	手捏ね	表採	表土	皿	ナデ	ナデ	1.5	5.2	3.2	⅓	4類	
73－18	手捏ね	表採	表土	皿	ナデ	ナデ	1.8	5.8	5.2	完	4類	51
73－19	手捏ね	SI 5	堆積土	皿	ケズリ・ナデ	ヘラナデ	2.6	6.5	5.4	¼	4類	
73－20	手捏ね	SI 12	P 1	盃	ナデ・ケズリ	ナデ	3.2	4.7	3.6	完	5類	51
73－21	手捏ね	SI 12	堆1～4層	盃	ナデ	ナデ	3.7	5.5	4.3	完	5類	51

第91図　小形手捏ね土器

している。

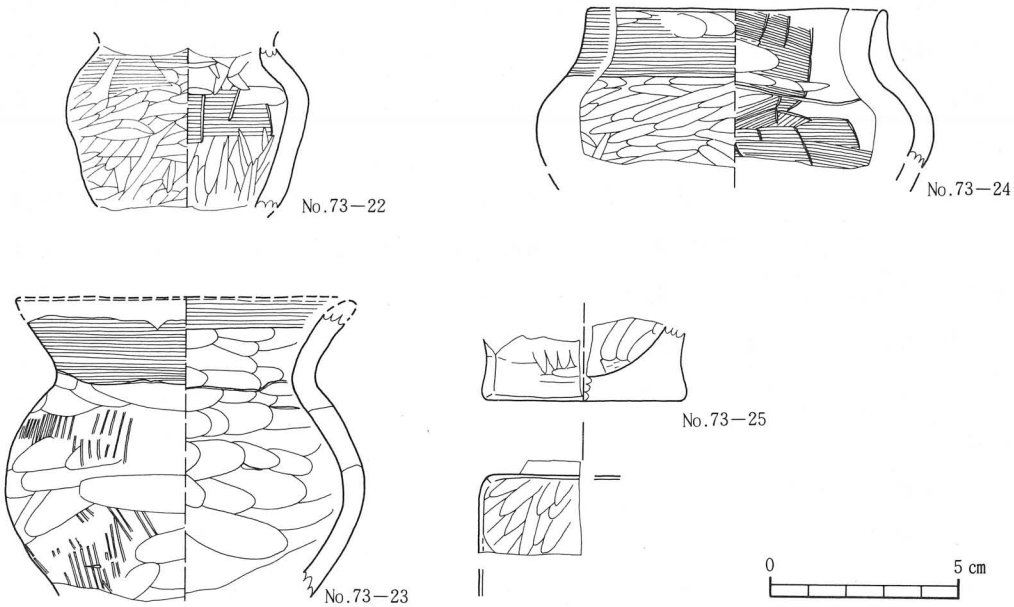
5類(No.73−20〜21)　1類から4類は、底部が平坦で、ナデやヘラナデによって比較的丁寧に作られているのに対し、5類としたものは、粘土を撮んで半球形にしただけの極めて粗雑なものである。明確な底面は形成されておらず、表面には指の圧痕の凹凸がついている。5類は2点出土している。

⑤　小形土器

小形土器は、土師器に含まれるものであるが通常の形態よりも著しく小形のものである。大きさとしては、小形手捏ね土器と一般的土師器の中間に位置づけられる。量的には、3点の例があるだけである。

No.73−22は、壺または甕形を呈するもので、内外面ともヘラミガキ調整によって丁寧に仕上げられ、両面とも黒色処理されている。

No.73−23は、壺形を呈し、偏平な球形の体部に外反する口縁が付いている。口唇部と底部を欠損しているため器高は不明であるが、10cmに満たないものと推定される。器面調整は、外面が口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデ、内面が口縁部ヨコナデ、体部ナデによる。



遺物No.	種別	遺構名	層位	器形	外面調整	内面調整	法量(cm) 器高	口径	底径	残存	分類	写真図版
73−22	小形土器	SI 5	貼床中	壺形	ヨコナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	(4.2)			⅓		51
73−23	小形土器	SI 12	堆積土	壺形	ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	(8.0)	8.9		½		51
73−24	小形土器	SI 12	堆積土	甕形	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヘラナデ・ナデ・ミガキ	(4.1)	7.9		¼		51
73−25	異形土器	SI 5	堆積土	不明	ミガキ	ケズリ・ナデ	(2.2)		5.3	不明		51

第92図　小形土器・異形土器

No.73－24は、甕形を呈し、張りのある肩部に直立する口縁が付く。内外面ともヘラミガキされ、丁寧に仕上げられている。

⑥　異形土器

No.73－25は底部破片であるが、他の底部と異なり底部が方形を呈するように直角に曲っている。１つの角だけであるため一辺の大きさは不明であるが、破片内面の内側項部は中心部と考えられることから、一辺は５cm前後あったようである。

2)　石製品

①　磨り石

No.76－１は縦9.0cm、横7.0cm、厚さ5.9cmを計り、卵形を呈する磨り石で、全面が滑らかに磨かれている。擦痕は認められない。泥岩製。

②　砥石

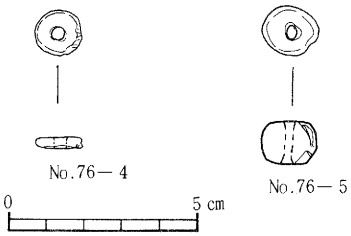
砥石は、自然礫を利用したものと、石を切り出して作製したものの各１点が出土した。

No.76－２は、偏平な楕円礫を砥石として使用したものである。½～⅓程度残存している。残存部で幅13.3cm、長さ7.3cm、厚さ4.9cmを計る。両面が使用されている。Ａ面は幅１mm前後、深さ１mm前後の「Ｖ」字状の溝が多数確認される。Ｂ面は中央部が同一方向に磨かれ、残存部で幅1.2～2.3cmの帯状の面が８面形成されている。各面は中央部がわずかに凹んでいる。安山岩製。

No.76－３は、長さ18.1cm、幅・厚さは中央部でそれぞれ3.6cm、2.7cmを計る。四面が使用されており、Ｂ面とＤ面は平滑であるが、中央部が孤状に著しく磨り減っている。Ａ面とＣ面は使用された形跡はあるが、平滑面は形成されず緩い凹凸ができている。さらにＡ面は両端に近い部分に幅１mm以下、深さ0.5mm以下で断面が「Ｖ」字形の細い溝が多数観察される。また、Ｃ面には最大幅2.5mm、深さ３mm程で多少蛇行しながら11cmにも及ぶ溝が刻み込まれている。シルト岩製。

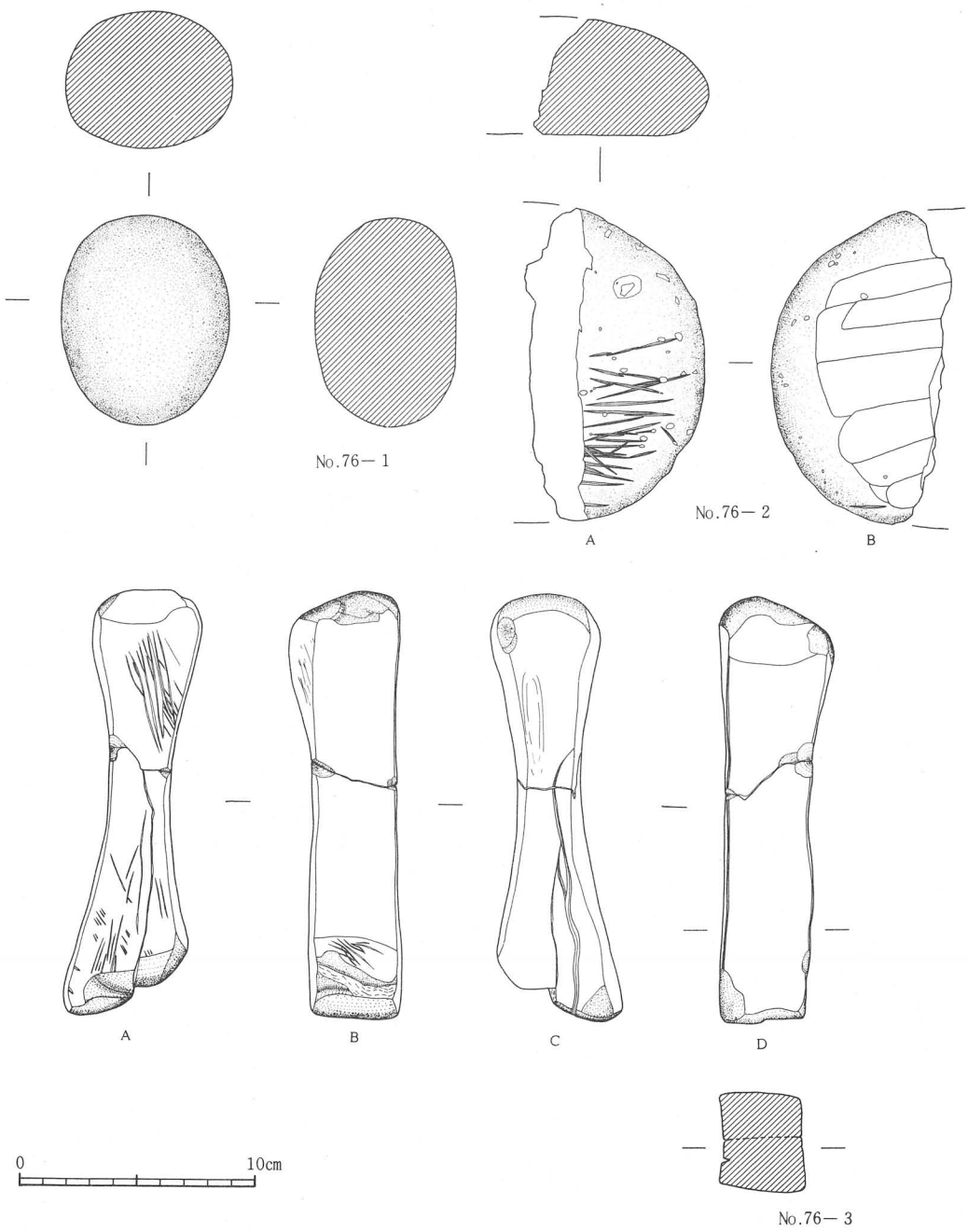
③　玉類

玉類は滑石製の平玉（No.76－４）１点と、同じく滑石製の丸玉（No.76－５）１点の計２点と、琥珀片が１点出土している。平玉は縁辺の角が磨滅し、また紐ずれも観察される。丸玉は、円筒形に近い形状



遺物No.	種別	遺構名	層位	法量(cm) 直径	孔径	厚さ	石質	残存	写真図版
76－4	石製玉類	ＳＩ　7	1　層	1.2	0.3	0.3	滑石	完	53
76－5	石製玉類	ＳＩ　12	堆積土中	1.5	0.2	1.1	滑石	完	53

第93図　石製玉類



遺物No.	種　別	遺構名	層　位	法　量（cm）			石　質	残　存	写真図版
				縦	横	幅			
76－1	磨り石	SX　3	床　面	9.0	7.0	5.9	泥　岩	完	55
76－2	砥　石	SX　1		13.3	7.3	4.9	安山岩	$\frac{1}{2}$	55
76－3	砥　石	SI　19	床　面	18.1	3.6	2.7	シルト岩	完	55

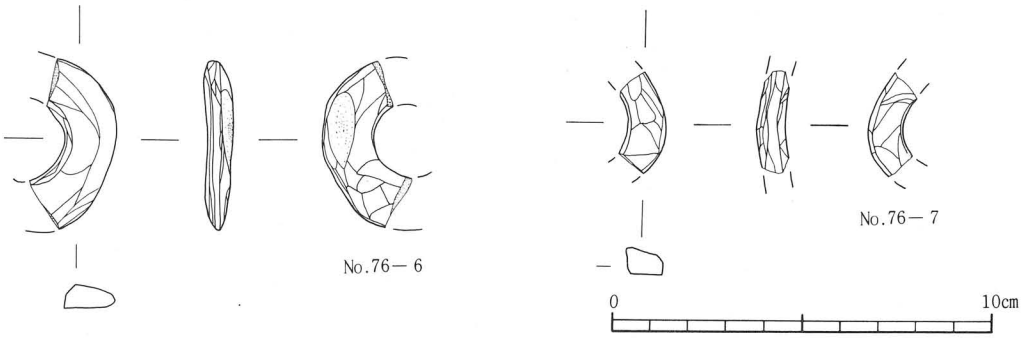
第94図　石　製　品

で、孔の両端は紐ずれにより丸くなっている。琥珀片は、小片であり、かつ保存状況が良くないため、形状及び製品化されたものであるかどうかについても不明である。(写真図版53)

④　輪状石製品

円盤状の薄い石の中央をくりぬいたと考えられる石製品の破片が２点出土した。破片であるために、缺状であるのか、輪状であるのか不明であるが、輪状石製品として取扱った。全面に金属器（刀子か？）によって削られた痕跡が観察できる。

No.76－６は、直径約4.7cm、孔径約2.0cm、輪幅約1.4cm、厚さ0.6cmを計る。No.76－７は、No.76－６よりやや小さく、直径3.8cm、孔径約2.0cm、輪幅0.9cm、厚さ0.7cmを計る。どちらも灰白色の凝灰岩質シルト岩である。



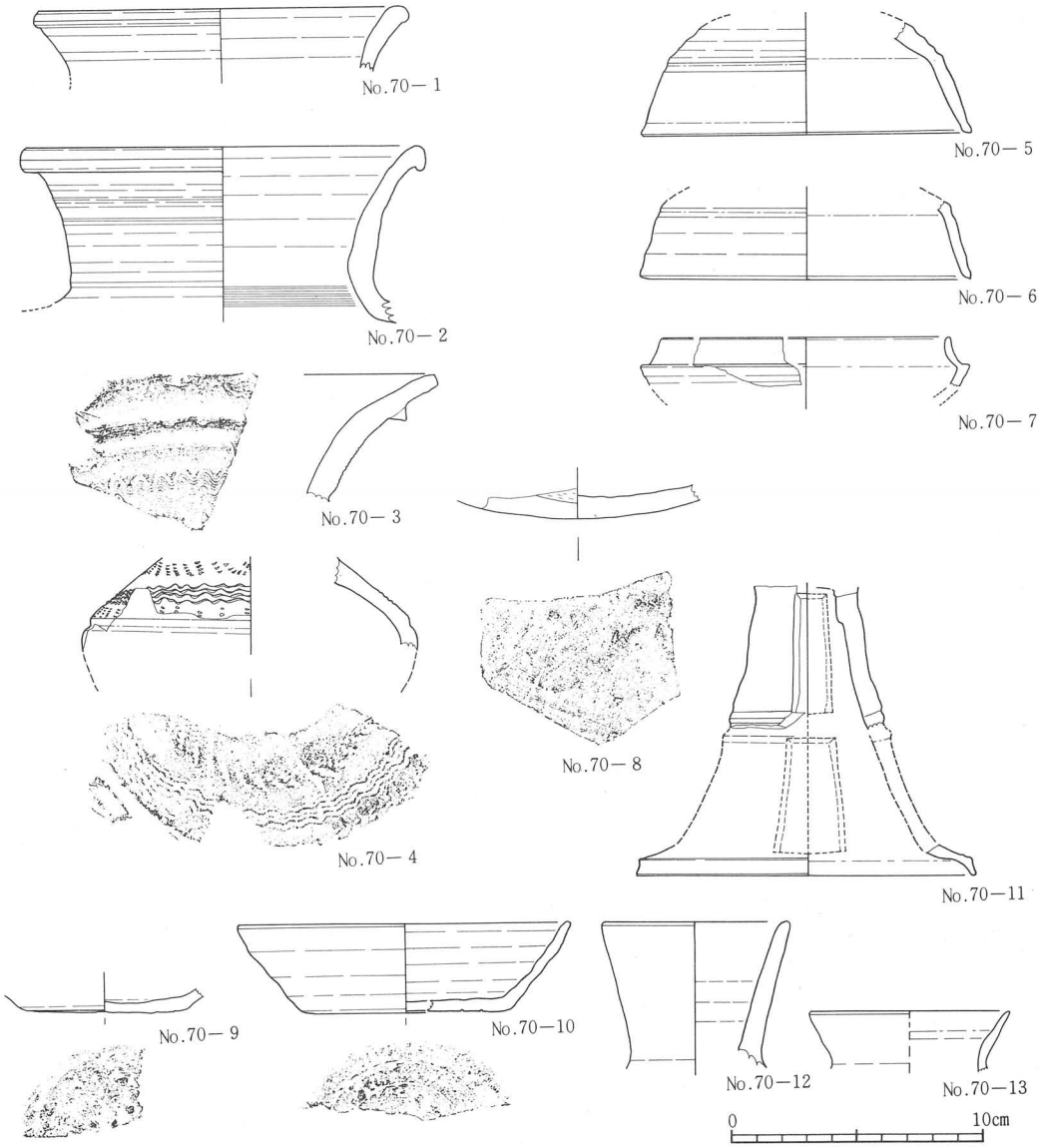
遺物No.	種　別	遺構名	層　位	法　量（cm）				石　質	残存	写真図版
				直径	孔径	輪幅	厚さ			
76－６	輪状石製品	ＳＩ　12	堆積土	4.7	2.0	1.4	0.6	凝灰岩質シルト岩	⅓	53
76－７	輪状石製品	ＳＩ　２	床　面	3.8	2.0	0.9	0.7	凝灰岩質シルト岩	¼	53

第95図　輪状石製品

3)　須恵器

須恵器は36点出土したが、全て小破片で器形全体を復元できるものは１点もない。36点のうち約半数は、甕の体部片が占めている。器種としては、甕、壺、蓋、坏、高坏がある。

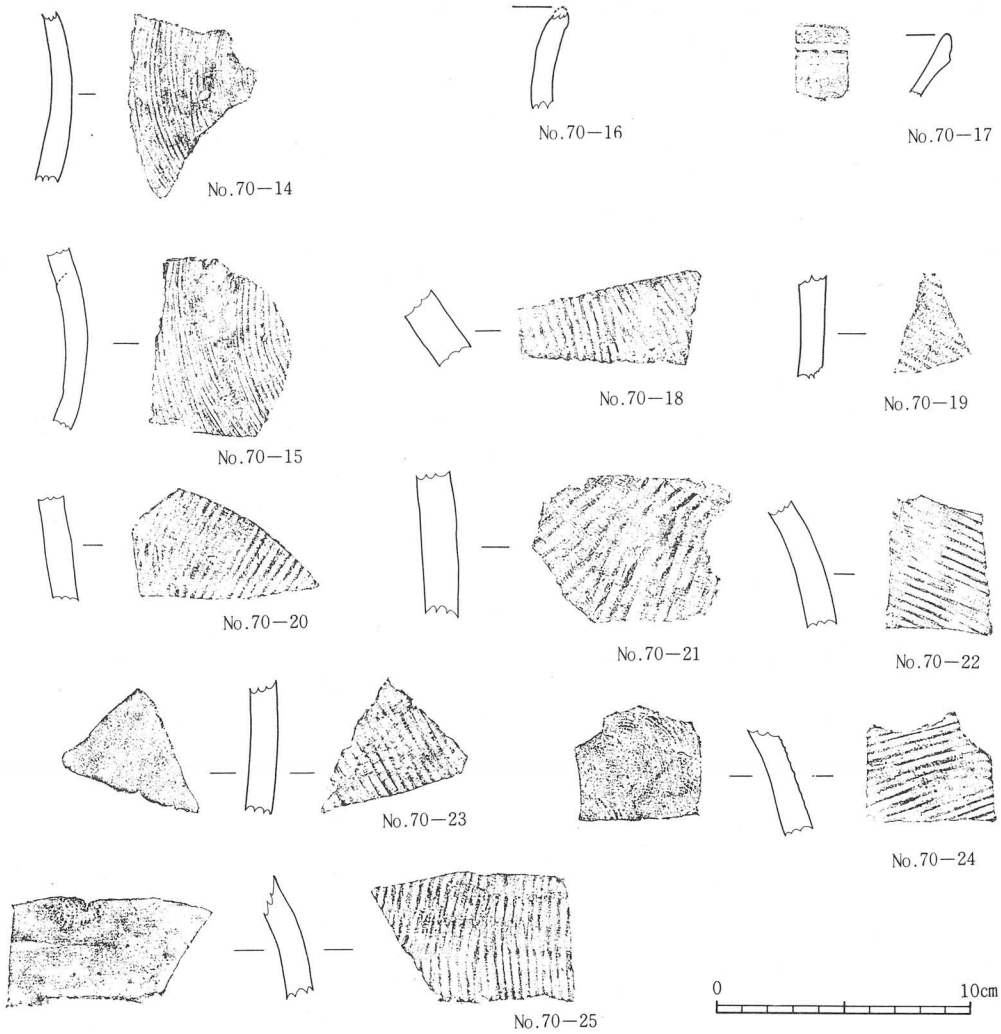
甕(No.70－１～３、17～25)　口縁部片No.70－１は頸部から外反し、端部は丸く肥厚する。No.70－2は肩部から外反して立ち、口縁端部は丸味をもって肥厚し、軽く下方へ折れている。No.70－３は強く外反する口縁部で、平らな口唇部の直下に断面三角形の隆帯が巡り、さらにその下に1.7cm幅に15条の細かい波状沈線文が施されていて、その下には沈線が巡る。No.70－17は端部が直立に近い口縁部で、その変曲部がわずかに盛り上がっていて、破片の下端部に３条の波状沈線文が残っている。甕体部片は外面に平行叩き目痕を有し、内面はナデによるものと、青海波をナデにより消しているものとがある。



遺物No.	種別	遺構名	層位	器形	部位	外面調整	内面調整	法量(cm) 器高	口径	底径	写真図版
70－1	須恵器		表土	甕	口縁部	ロクロ	ロクロ	(3.0)	14.4		48
70－2	須恵器		表土	甕	口縁部	ロクロ	ロクロ	(7.0)	15.6		48
70－3	須恵器	SI 3	堆積土1層	甕	口縁部	突帯・波状文	ナデ	(5.1)			48
70－4	須恵器	SD 2	1～2層	壺	体部	波状文・刺突文	ナデ	(3.8)			48
70－5	須恵器	SI 2		蓋	口縁～天井	ロクロ	ロクロ	(4.4)	12.9		48
70－6	須恵器	SI 2		蓋	口縁～天井	ロクロ	ロクロ	(3.2)	12.9		48
70－7	須恵器	SI 5	貼床中	坏	体部～口縁	ロクロ	ロクロ	(1.8)	11.3	12.9	48
70－8	須恵器	SI 7	床面		底部	手持ちヘラケズリ	ロクロ				48
70－9	須恵器	第1トレンチ		坏	底部	ヘラ切り後ナデ	ロクロ			6.3	48
70－10	須恵器	SI 17		坏	完形	ロクロ	ロクロ（底部一回転ヘラケズリ）	3.5	13	8.0	48
								脚高	脚柱径	脚裾径	
70－11	須恵器	SI 17	堆積土	高坏	脚部	ロクロ	ロクロ	(11.5)	4.1	(13.3)	48
70－12	須恵器	SI 17	堆積土	壺？	口縁部	ロクロ	ロクロ	(6.0)	7.4		48
70－13	須恵器	SI 9		壺？	口縁部	ロクロ	ロクロ	(2.5)	7.9		48

※70－7の底径は受部径である。

第96図　須恵器（1）



遺物No.	種別	遺構名	層位	器形	部位	外面調整	内面調整	法量(cm) 縦	横	厚さ	写真図版
70−14	須恵器	表採	表土	瓶?	体部	かき目	ロクロ	6.6	5.1	0.8	49
70−15	須恵器	1T		瓶?	体部	かき目	ロクロ	7.2	5.4	0.9	49
70−16	須恵器	表採	表土	壺	口縁部	ロクロ	ロクロ	3.9	3.7	0.9	49
70−17	須恵器	表採	表土	甕?	口唇部	波状文	ロクロ	2.4	2.1	0.5	49
70−18	須恵器	1T		甕	体部	平行叩き目	ナデ	3.0	6.9	1.5	49
70−19	須恵器	表採	表土	甕	体部	平行叩き目	ナデ	4.0	2.4	0.9	49
70−20	須恵器	SI 12	堆積土	甕	体部	平行叩き目	青海波後ナデ	4.0	6.0	1.1	49
70−21	須恵器	1T南	旧耕土下部	甕	体部	平行叩き目	ナデ	5.8	6.9	1.4	49
70−22	須恵器	SI 12	堆積土	甕	体部	平行叩き目	ナデ	5.1	3.8	1.1	49
70−23	須恵器	表採	表土	甕	体部	平行叩き目	青海波後ナデ	5.3	5.1	1.0	49
70−24	須恵器	SI 3	堆下層(10〜10′)	甕	体部	平行叩き目	青海波後ナデ	4.2	4.9	1.0	49
70−25	須恵器	表採	表土	甕	体部	平行叩き目	青海波後ナデ	4.8	6.6	1.0	49

第97図　須恵器（2）

壺(No.70－４、16)　No.70－４は体部上半の破片である。体部中央よりやや上に１条の沈線が巡り、その直上と体部上端部に櫛状工具による刺突文が２段に巡る。刺突文帯の間には0.9cm幅に４条の波状沈線文が巡らされている。残存部からみると、比較的小さい口頸部が、中心からずれた位置に取り付けられたようである。No.70－16は著しく磨滅した口縁部片で、端部を欠損している。

蓋(No.70－５～６)　２点とも口縁部の幅が多少違うだけで、胎土、焼成、色調とも同一の製品である。口唇部は平らで内側に傾斜する。口縁部と体部の境には両側に浅い沈線を伴う丸味のある隆帯が巡る。天井部は下端部がロクロ調整で頂部は回転ヘラケズリされている。

坏(No.70－７～10)　丸底の坏２点と平底の坏２点が出土している。No.70－７は口縁部が内傾し、端部は丸くなっている。受部は平行にわずかにのびている。No.70－９は回転ヘラ切りの後手持ちヘラケズリされた底部片である。No.70－10は底部が回転ヘラケズリされ、体部から口縁部はロクロ調整による凹凸が認められる。No.70－８は比較的平らな底部で、手持ちヘラケズリされる。坏ではなく蓋の天井部とも考えられる。

高坏(No.70－11)　長脚二段三方透かしの高坏脚部の破片で、上段の１本と、脚裾部の小片が17号住居跡の堆積土中から出土した。下段部の破片は出土していないが、これを復元すると第96図のようになる。

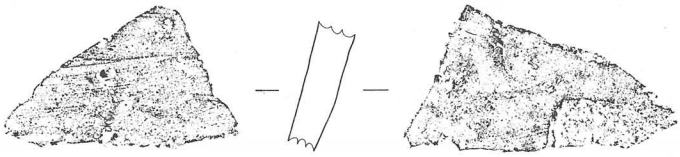
横瓶(No.70－14～15)　２点ともロクロ回転によるカキ目調整された体部片である。No.70－14は偏平な側の破片で、No.70－15は球形の側の破片である。

その他(No.70－12～13)　この２点は壺、鴟、甑、横瓶等の類の口縁部資料である。No.70－12の口縁は直線的に立ち、端部は丸くなっている。No.70－13は口径は割に短い口縁で、一度外反した後緩く立ち上がり、端部は尖っている。

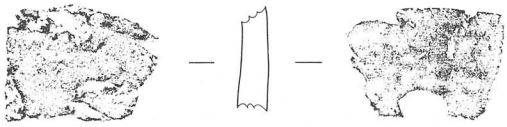
以上のような須恵器が出土しているが、このなかで次の資料については、ある程度の年代を推定することができる。すなわち、陶邑古窯址群（註18）における編年に照合すると、甕No.70－３はⅠ期(５Ｃ代－６Ｃ前半)、蓋No.70－５～６、坏No.70－７、高坏No.70－11はⅡ期（６Ｃ前半－７Ｃ前半)、坏70－９～10はⅣ期(７Ｃ後半－８Ｃ末)の年代を求めることができる。

4)　中世陶器

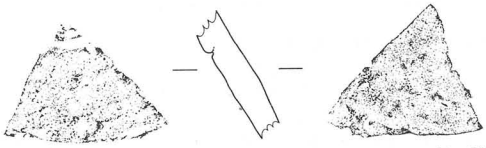
中世陶器（No.78－１～４）は、旧河道面を調査した１～４トレンチ内の旧耕土中から４点出土した。全て体部の小片であり、内外面ともナデにより調整されている。No.78－１の外面が黒色を呈するほかは、いずれも褐色を呈している。



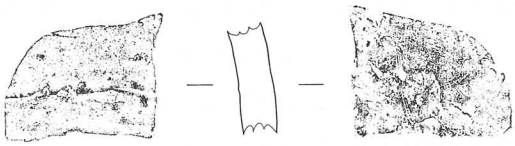
No.78－1



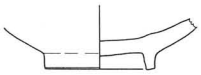
No.78－2



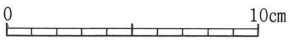
No.78－3

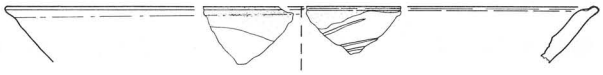


No.78－4



No.78－5





No.78－6

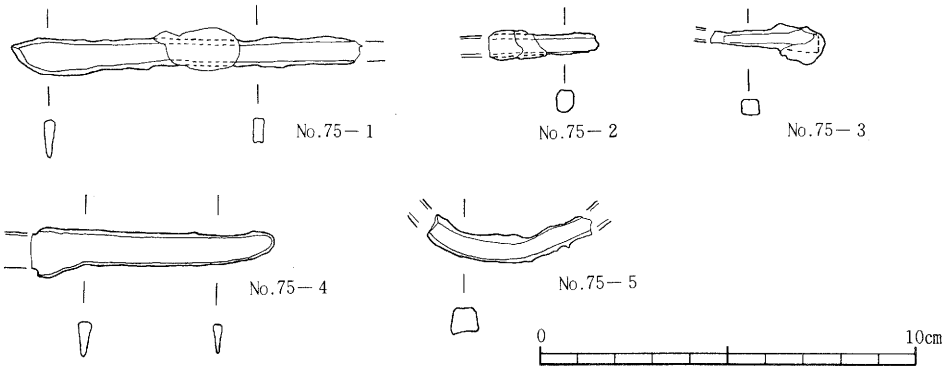
遺物No.	種　別	遺構名	層　位	器形	部位	外面調整	内面調整	法　量（cm）			写真図版
								縦	横	厚さ	
78－1	中世陶器	2　T	旧耕土	甕	体部	ナデ	ナデ	5.1	8.6	1.4	56
78－2	中世陶器	4　T	旧耕土中部	甕	体部	ナデ	ナデ	4.1	5.9	1.1	56
78－3	中世陶器	1T南	旧耕土下部	甕	体部	ナデ	ナデ	5.0	3.9	1.1	56
78－4	中世陶器	4　T	旧耕土下部	甕	体部	ナデ	ナデ	4.4	6.3	1.4	56

遺物No.	種　別	遺構名	層　位	器形	部　位	外面調整	内面調整	法　量（cm）			残存	分類	写真図版
								器高	口径	底径			
78－5	施釉陶器	2　T	旧耕土	椀	底部付近	鉄釉	鉄釉	(2.0)		4.4	(1/2)	56	
78－6	施釉陶器	2　T	旧耕土上部	鉢	口唇部	緑釉	沈線	(2.5)	23.6		(1/12)	56	

第98図　中世陶器・施釉陶器

5)　施釉陶器

施釉陶器（No.78－5～6）も旧河道面の調査トレンチから出土した小破片である。No.78－5は高台付きの椀で、外面には極暗赤褐色、内面には浅黄色の釉がかけられている。No.78－6は口縁部の内側に段を有し、口縁部だけに釉が施されている。また内面には斜め方向の沈線が3条残っている。



遺物No.	種別	遺構名	層位	法量(cm)			写真図版
				長さ	刃幅	棟幅	
75－1	鏃		表土	9.3	0.8	0.2	54
75－2	鏃	SI 12	堆積土層	2.9	0.5	0.6	54
75－3	鏃	SD 2	1～2層	3.1	0.4	0.4	54
75－4	刀子	SI 12	堆積土層	6.4	0.9	0.4	54
75－5	不明	SD 2	1～2層	4.4	0.7	0.6	54

第99図　鉄　製　品

6)　金属製品

鉄鏃、刀子、使途不明鉄製品、古銭の4種類、計9点の金属製品が発見された。

①　鉄鏃

No.75－1は有茎片刃式の鉄鏃である。茎部先端部を欠損して銹化も進んでいるが、現存長は9.3cmを計る。刃部幅は最も広い所で1.0cm、茎部に向って狭くなり7mmを計る。棟幅は刀身部中央付近で2mmを計り、断面形は逆三角形を呈する。茎部は茎幅6.5mm、断面幅は3mmを計り、断面形は縦長の長方形を呈する。No.75－2・3とも鉄鏃の茎部先端部と思われる。No.75－2の現存長は2.9cm、茎幅は6mm、断面幅は4～5mmを計り、断面形は縦長の長方形を呈する。No.75－3の現存長は3.05cm、茎幅は4mm、断面幅は5mmで横長の長方形を呈する。

②　刀子

No.75－4は12号住居跡、北辺中央付近の堆積土中より出土した。刀身部は欠損しており、茎のみでわずかに棟区、刀区が確認できるが、刀身長は不明であり、全体的に銹化が進んでいる。目釘孔はあけられていない。現存長は6.4cmを計る。区付近でしか測定できないが、棟幅4mm、身幅は9mmを計る。茎は長さ6.2cm、棟幅は3mm、刃部側で1mm、茎幅は区付近で1.4cm、茎尻付近で5mmを計る。茎の形は区付近では幅が広く、茎尻にかけて細く丸味を帯びておさまる。断面形は逆三角形を呈している。

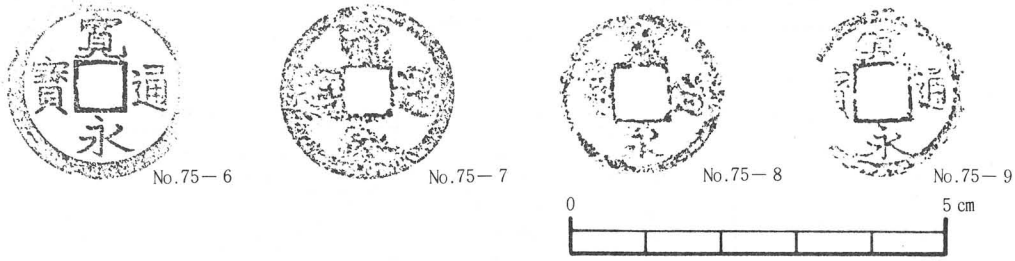
③　使途不明鉄製品

No.75－5は使途不明の鉄製品である。現存長は、弯曲し銹化も進んでいるため不正確である

が4.4cm以上である。身幅は５～6.5mm、断面幅は上部４mm、下部４～８mmを計り、断面形は台形を呈する。

④　古銭

４点出土している。錆の附着が著しく判読が困難なものがあるが、全て寛永通宝である。No.75－６～８は表採、No.75－９は旧耕作土層上部より発見された。



遺物No.	種　別	遺構名	層位	法　量（cm）			写真図版
				直　径	中央穴の辺	縁　幅	
75－6	寛永通宝		表　土	2.5	0.7	0.2	54
75－7	寛永通宝		表　土	2.3	0.7	0.2	54
75－8	寛永通宝		表　土	2.2	0.8	0.2	54
75－9	寛永通宝	ＳＤ４	旧耕土	2.2	0.7	0.2	54

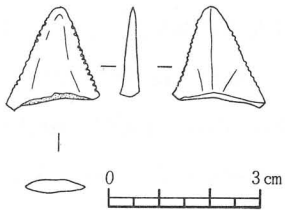
第100図　古 銭 拓 影

7)　自然遺物

自然遺物には炭化材、骨片、サメ歯がある。炭化材と骨片については、後述の通り同定された。

サメ歯（No.71－１）

２号住居跡 Pit ８から出土した。長さ1.8cm、基部幅1.9cm、厚さ３mm（基部）で、ほぼ二等辺三角形を呈する。保存は良好で、白色から暗青灰色を呈する。両側縁は細かな鋸歯状になっていて、加工痕跡は認められない。このサメ歯も、他の骨片と同様に火を受けている。



遺物No.	種別	遺 構 名	層　位
71－1	鮫歯	ＳＩ　2	貼床下中央Pハ

法　量（cm）			写真図版
長　さ	幅	厚　さ	
1.8	1.9	0.3	高橋　1

第101図　サ　メ　歯

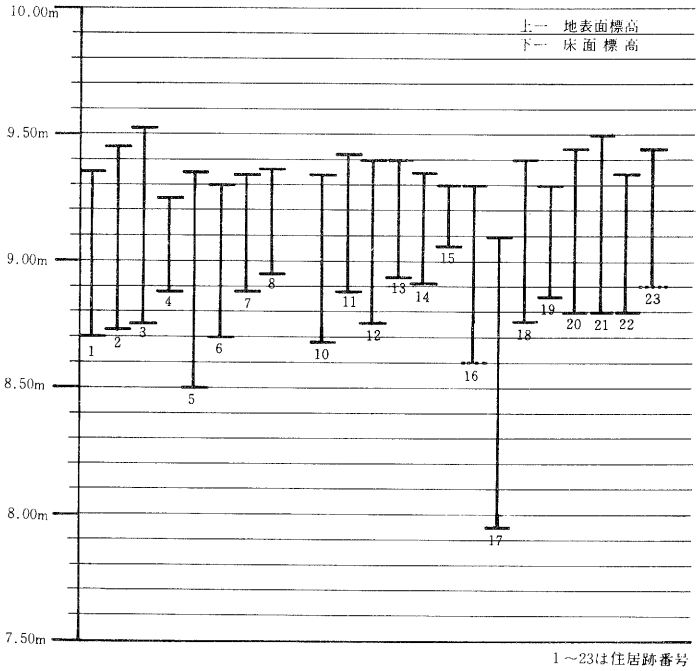
Ⅳ．遺構・遺物の総括と考察

1．住居跡の総括

1）住居跡の深さと床面標高

栗遺跡で今回調査された22軒の住居跡は全て竪穴住居跡であった。これらの住居跡がどのくらいの深さに掘られたのかは、どの住居跡も耕作による削平を受けて、掘り込み面がわからなくなっているために不明である。しかし、当時の地表面と現在の地表面とに大きな高低差が無いとすれば、地表面の標高と床面標高との差によって、おおよその深さを推察できると考えられる。この標高差を表にしたものが第46表である。

第46表　住居跡床面標高表



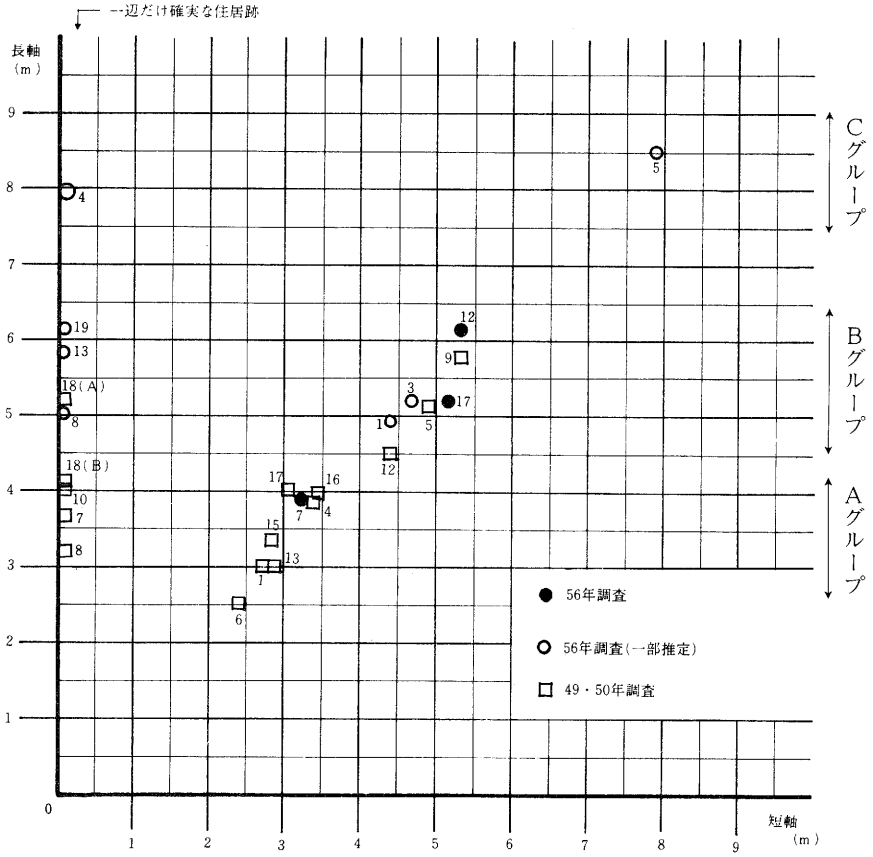
住居跡の検出される部分の標高は、他の住居跡から離れて自然堤防斜面に立地する17号住居跡を除くと、9.25mから9.52mの標高差30cm以内の所にある。これに対し床面標高は、5号住居跡の標高8.50mから15号住居跡の標高9.06mまでの標高差60cmの幅をもっている。1・2・3号住居跡をみると、地表標高と床面標高とは比例関係にあるが、4・15号住居跡などは地表標高の割に、床面標高が高くなっている。地表面の標高差より床面の標高差が大きく、また地表面の表高と床面の床高とが必ずしも一致しないことから推察すると、住居跡を掘り込む深さについては、各住居跡による差が大きく統一性や基準がなかったものと考えられる。17号住居跡を除くと、地表標高と床面標高の差が小さいのは15号住居跡の24cm、差の大きいのは5号住居跡の86cmである。平均すると約57cmの差がある。

自然堤防の中央部にある住居跡に対し、自然堤防斜面にある17号住居跡は、地表面の標高も低いがそれ以上に床面標高が低く、その差は115cmと22軒の住居跡中最大となっている。これは、本来深く掘り込まれたものか、後世に傾斜面に土砂が堆積したために相対的に深くなったものか明らかではない。

2)　平面形と規模について

栗遺跡発見の住居跡は、昭和49・50年の調査時のものと本調査時のものとを合計すると40軒になる。この中で平面形の明らかなものについてみると、ほぼ正方形のものと、やや長方形のものがほとんどである。ただ今年度調査した22号住居跡は、長方形を呈する可能性がある。各住居跡の角は丸味を持っており、いわゆる隅丸方形となっているが、これは本来的な形態であるのか、栗遺跡の地盤が砂質シルト、砂を基調とする崩れ易い土壌であることによるものか明

第47表　栗遺跡発見住居跡の規模



らかではない。

住居跡の規模について表にしたものが第47表である。これによると、最小の住居跡は昭和49・50年に調査された６号住居跡の2.5×2.4ｍで、最大は、本調査の５号住居跡の8.37×(7.95)ｍである。この間に各住居跡が分布するが、分布頻度が高いのは、長軸2.5ｍから長軸6.2ｍの範囲である。一辺だけが確実な住居跡を含めると、この範囲に23軒の住居跡がある。これはさらに、長軸が4.5ｍに満たないグループ（Ａグループ）12軒と、長軸が4.5ｍを超えるグループ（Ｂグループ）12軒に分かれて集中的に分布する。ＡグループとＢグループでは後述するように住居内で柱穴の発見される割合が大きく異なり、Ａグループでは柱穴の検出される例が少ない。しかし、ＡグループとＢグループの違いは、その規模と住居内柱穴の発見される割合を除くと、分布状況・遺物出土状況・カマド付施状況においては大きな差は認めることができない。この点からみるとＡ・Ｂグループの差は、住居構成員の人数差に起因するところが大きいと考えられる。

本調査の４号・５号住居跡は、それぞれ長軸が7.98cm・8.50cmを計り、栗遺跡としては特に大きな住居跡（Ｃグループ）である。ＡグループとＢグループは長軸の差が50cm以下であるのに対し、Ｂグループ中最大の住居跡としグループの間には、一辺で２ｍ前後の大きな差があり、両住居跡が飛び抜けて大きな住居跡であることがわかる。両住居跡とも、大きさ以外の構造・遺物出土状況・カマド付設状況においては、Ａ・Ｂグループの住居跡と大差はなかったがこれだけの住居規模を必要とした要因が単なる住居構成員の多少に係わるものか、集落構成における社会的要因に係わるものかは、再考を要する問題として提示しておくだけにしたい。

3)　柱穴について

①　柱穴の有無

昭和49・50年調査と本調査の住居跡の柱穴について総括すると、住居跡内で柱穴が発見できるものと、できないもの（pitは検出されるが柱穴として組まない住居跡を含む）とに２分される。柱穴が発見できないのは住居跡の規模におけるＡグループの長軸４ｍ以下の住居に集中している。Ａグループ中、昭和49・50年調査の１・６・７・８・10・13・15・17号住居跡、本調査の７号住居跡の９軒からは柱穴が検出されず、Ａグループで柱穴が検出できたのは昭和49・50年の４号住居跡と18号住居跡のＢプランの２軒だけである。小規模な住居跡内で柱穴が検出されないのは、住居内の空間をより広く利用するために、竪穴外に柱穴を配置させたことによるものと考えられる。第47表及び柱穴の有無からみると柱穴を竪穴内に配置させるか、竪穴外に配置させるかの目安は、現在の単位で竪穴の長軸４ｍを基準としていたように考えられる。

②　柱穴の配置

竪穴内に柱穴を有する住居跡の柱穴の配置をまとめたものが第102図である。栗遺跡の調査では、柱穴の掘り方と柱痕跡とを区別することができなかったので、柱穴間の距離、及び柱穴と壁との距離は柱穴の中心を基準として計測してある。

各住居跡を羅列してみると、柱穴の数によって竪穴内無柱穴の住居跡、4本柱の住居跡、及び5本以上の多柱穴の住居跡に分けられる。また、柱穴の組み方の平面形から、方形・略方形台形の住居跡に分けられる。この2項目によって柱穴配置を分類すると、第102図に示したように、方形4本柱型・台形4本柱型・台形多柱穴型・方形多柱穴型・竪穴内無柱穴型に分けることができる。

方形4本柱型には、8号住居跡や昭和49・50年調査の9号住居跡のように、ほぼ正方形を呈す住居跡と、1号・3号・17号・21号住居跡のようにやや長方形を呈す住居跡とがある。長方形を呈す4軒のうち、1号・21号住居跡は南北方向に長辺を有し、3号・17号住居跡は東西方向に長辺を有している。南北方向に長辺を有する1号・21号住居跡は、北方短辺側にカマドを付設するという共通性がある。

台形4本柱型は、カマドとの関係において、さらに2類に分けることができる。1類は、台形の側辺側にカマドが付設されるもので、5号・12号の2軒の住居跡がある。2類は、台形の平行する2辺（底）のうち長い方の底（仮に長底と呼ぶ）にカマドが付設されるもので、2号住居跡と昭和49・50年調査の5号・12号住居跡がある。カマドの方向から台形4本柱型の住居跡をみると、1類のカマドは北東辺に付設されるが、2類のカマドの方向は個々別々で規則性は認められないようである。また住居跡の規模からみた場合には、1類は大形または比較的大形の住居跡に伴うもので、2類は中形の住居跡に伴う傾向がありそうである。

台形多柱穴型は、19号住居跡が1軒だけである。柱穴数は7個で、側辺に各3個と、短い方の底（仮に短底と呼ぶ）の中央に1個ある。カマドは台形4本柱型2類と同様に長底側に付設されている。

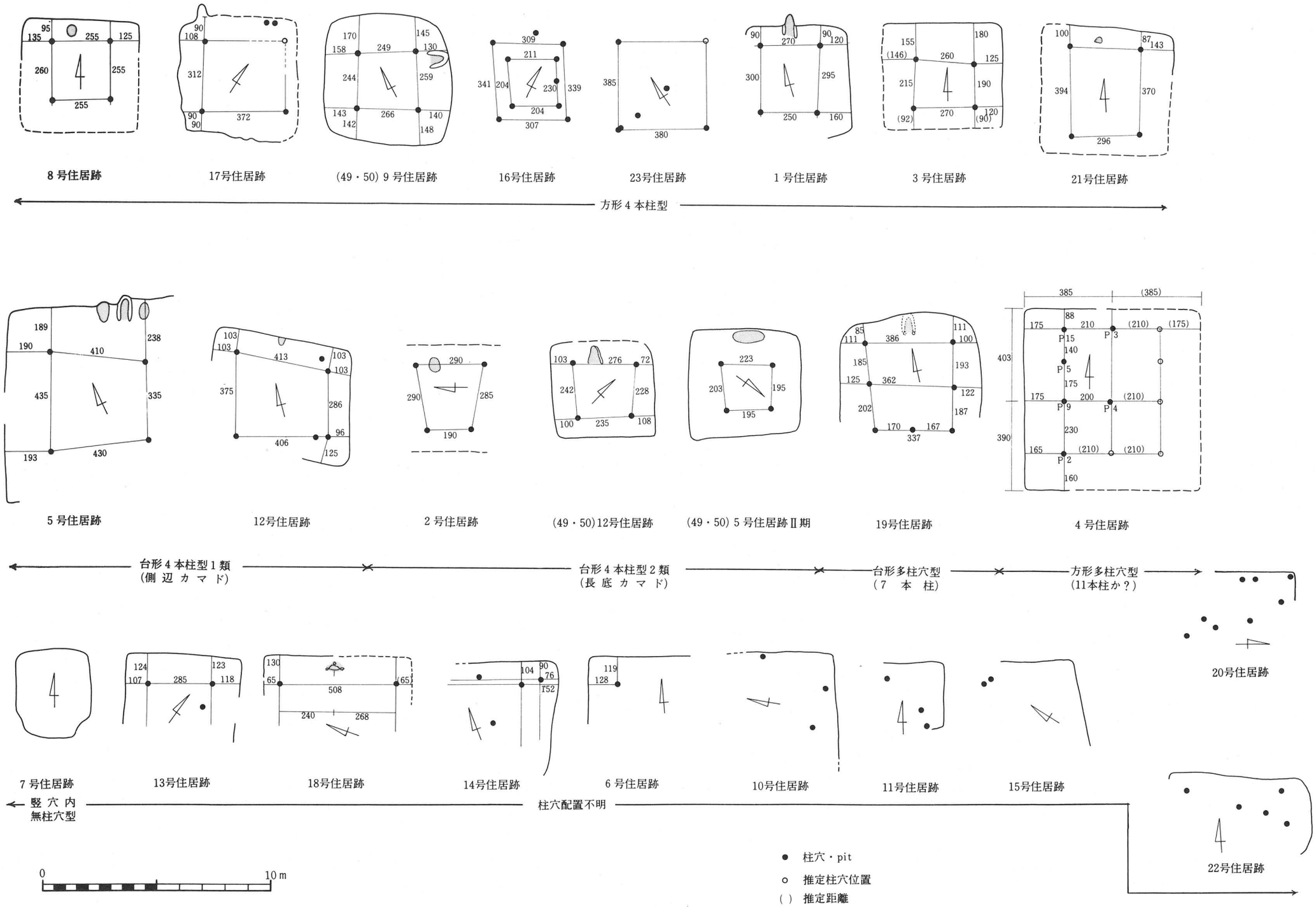
方形多柱穴型には、4号住居跡がある。東半部が削平されているために全体の配置は不明であるが、残存部には6個の柱穴がある。残存部の状況から削平部の柱穴を復元すると第102図のように、11個の柱穴があったと推定される。

竪穴内無柱穴型は、先述したように長軸4m以内の住居跡に多く認められるもので、竪穴外に柱穴があったと考えられるものである。

栗遺跡の住居跡の柱穴配置は、以上のように類型化される。

③　柱穴の配置と竪穴の平面形

柱穴配置と竪穴の平面形の関係についてみると、柱穴配置が正方形を呈す場合と長方形を呈



第102図　栗遺跡発見住居跡柱穴配置図

す場合とではやや異なり、また正方形の場合でも２つに分けて考えることができる。

柱穴配置が正方形を呈する第１は、昭和49・50年調査の９号住居跡に代表されるパターンで各柱穴列から住居跡各壁面までの距離が最小で130cm、最大で170cmあるが、全体としては等間隔になっている。

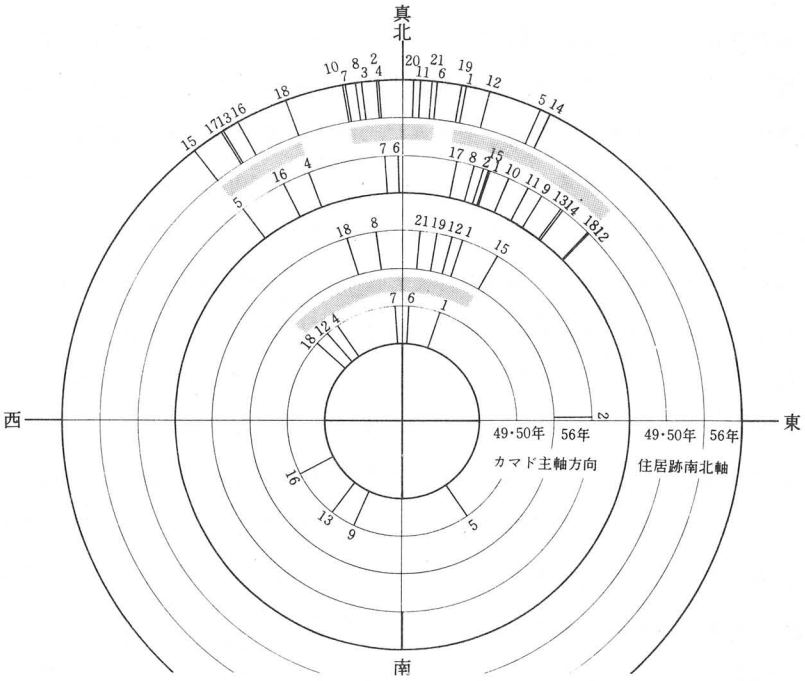
第2は、本調査1号住居跡に代表されるパターンで、カマドが付設されている壁面とこれに対する柱穴列との距離が、他の壁面と柱穴列との距離よりも接近しているものである。１号住居跡では、カマドの付設される北壁と北側柱穴列との距離が90cmであるのに対し、東壁と東側柱穴列との距離は、北側で120cm、南側で160cmとなっている。８号住居跡もこのパターンに入る。

柱穴配置が長方形を呈す場合は、本調査21号住居跡のように、両長辺側の柱穴列と壁面の路離が短辺側よりも広く取られ、住居跡全体としては正方形に近くなるように設計されている。21号住居跡の場合は、東側長辺の北側で東壁までが143cmであるのに対し、北壁までは87cmと短くなっている。

4)　住居跡の方向とカマドの方向

本調査の住居跡と、昭和49・50年の住居跡の南北軸の方向と、カマド主軸の方向をまとめると第48表のようになる。これによると、栗遺跡の住居跡の方向には指向性を認めることができ

第48表　住居跡南北軸・カマド主軸方向



ないようである。すなわち、ほぼ真北を指す住居跡から、これに対して45°傾く住跡跡まであり、特に集中する方角はなかったと考えられる。

第49表　月別最多風向　（仙台）

1月	4月	7月	10月
北北西	北北西	南南東	北北西

東京天文台編算 理科年表 昭和55年

これに対し、カマドの方向についてみると、カマドの方向の明らかな18軒の住居跡中、13軒までがN－49°－W（北西）からN－30°－E（北北東）に集中している。他の方向としては、南西方向に3軒、南東方向に1軒、東方向に1軒あるだけである。カマドの方向が北西から北北東に集中しているということは、住居跡の方向とは別に、住居跡北側の壁にカマドを付設することが、栗遺跡で一般的に行なわれたことを示している。

栗遺跡の住居跡に付設されているカマドのうち、比較的保存が良く、煙道は竪穴の外へ延びている。煙道が住居外に出た場合、風による影響を強く受けることは当然と考えられる。そこで、カマドの方向と風向の関係についてみると、仙台の風向は、第49表の通り年間を通じて北北西の風の日が多いことから、栗遺跡の住居跡のカマドは風上に向かって付設されていたことが多かったと考えられる。強風のときに煙の逆流の可能性もある方向に敢て煙道を向けているのは、住居の利用計画においてどのような理由によるかは、今後さらに検討されるべき問題と考えられる。

5)　カマドの構造について

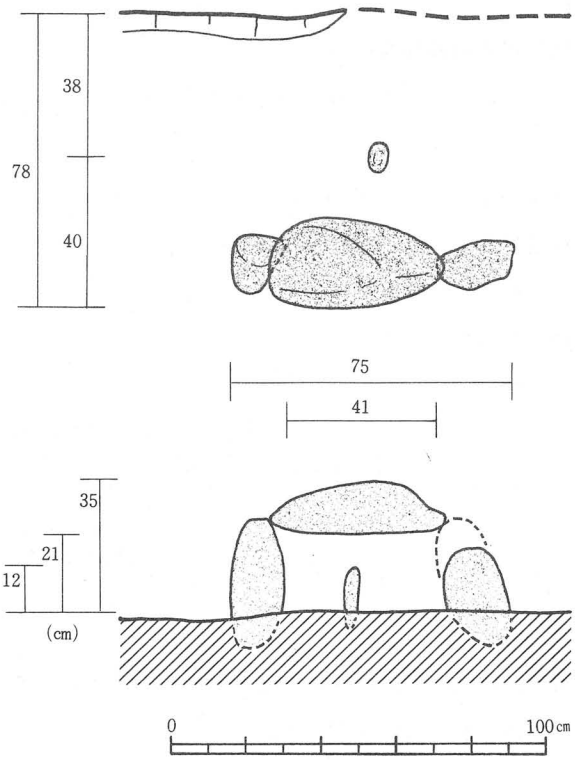
これまで調査されたカマドは、比較的保存の良いものであっても、焚口部の両袖石と袖部の下端部分が残存する程度であり、その構造及び大きさがわかるものは未だ発見されていない。そこで、栗遺跡のカマドの基本的構造と大きさについて、本調査の18号住居跡のカマドを代表例として複元を試みることにする。18号住居跡のカマドは第50図の通り、焚口部の両側に袖石、その間に落下した焚口部天井石、両袖石の中間の後方に支脚として利用された石が立っている。石組だけが残り、土の部分はすでに崩壊し尽くしている。4個の石のうち天井石だけは原位置から動いているが、他の石は右袖石の上部を欠損するだけで原位置にある。そこで、まずこの石組部分を復元すると、右袖石の頂部高は、左袖石の頂部高とほぼ同様で、その上に天井石がバランス良く上がっていたと考えられる。これを復元図化すると第103図のようになる。

復元図上での計測値は、焚口部の高さは床面から天井石上面まで35cm、天井石下面まで21cmを計る。焚口部の幅は、両袖石の外側で75cm、内側で41cmを計る。カマドの奥行きは、天井石前面から支脚中心まで40cm、支脚から壁残存部まで38cmの計78cmを計る。この計測値は、実際の数値と多少の差異は当然考えられるが、かなり近似値であると思われる。

焚口以外の部分の状況を、他のカマドの調査成果によって復元すると、焚口部の石組背後か

ら壁面までは土壁によりカマド本体が造られ、天井部の高さは、低くても焚口部天井石と同レベルで一般的には、中央部または壁に向かってやや高くなっていたと推察される。煙道部は壁の床面よりやや高い所から竪穴の外に向かってトンネル状に掘られていたと思われる。

支脚についてみると、支脚はカマドのほぼ中央部（焚口より30～40cm奥）に立てられている。支脚頂部の高さは床面レベルより12cm高くなっている。栗遺跡でこれまでに支脚が立ったまま検出されている他の住居跡（昭和49・50年調査の９・12号住居跡）の場合も、床面と支脚頂部の差は10cm前後であり、両方とも18号住居跡と同様に棒状の自然石を利用している。



第103図　18号住居跡カマド焚口部復元図

次に、この支脚を利用して、カマド本体の天井部にあけられた穴から土器を挿入した場合を想定すると、先に述べた通り、天井石上面の高さが35cmで、支脚頂部の高さが12cmであるので、その差は23cmとなる。したがって、この支脚を有効に利用するためには、23cm以上の器高を有する土器でなければならない。ただ、実際に使用されている状態では、土器の口縁部がカマド天上部上面より出ていたと考えられ、また、カマド中央が焚口天井石上面よりも多少高く造られていたとすれば、このカマド支脚を使用するための土器は、23cm＋α（口縁部の高さ）＋β（カマド天井高と、焚口天井石上面との差）の器高が必要であったと考えられる。

18号住居跡のカマドだけの検討によって、栗遺跡のカマドの標準型とすることはできないかもしれない。しかし、各カマドの残存状況を総合してみると、寸法や構造に多少の差異はあるにしろ、焚口部は２つの両袖石とそれを結ぶ天井石の３個の石で構築し、カマド本体は土壁で造り、煙道は竪穴の外へトンネル状に延びるという基本構造と、支脚は自然石が多様されたこ

とは、各カマドに共通する構造であったと考えられる。

6)　住居跡の付属施設について

カマド、柱穴以外で、竪穴内に付属する施設について検討すると、炉、周溝、土壙、Pit がある。

炉が検出されている住居跡は、現在までに4軒ある。いずれも地床炉と呼ばれる形態で、特別の構造はなく、単に床面が焼けているだけのものである。住居跡内において炉が検出される位置は、柱穴列の中央付近が一般的なようであり、また、住居跡の規模としては比較的大形の住居跡に集中している。

第50表　炉の付設された住居跡

調査年次	住居跡番号	炉の位置	炉の形態
昭和49・50年	9　号	東側柱穴列中央付近	地　床　炉
昭和49・50年	18号（A）	北側柱穴列中央付近	地床炉(土器埋設)
昭和　56　年	5　号	東側柱穴列中央付近	地　床　炉
昭和　56　年	23　号	住居跡中央付近(？)	地　床　炉

周溝は、12号住居跡の一部で検出されただけであるので、栗遺跡の住居跡には周溝が巡らされていないのが一般的なようである。

土壙、及びPitは多数検出されているが、その性格については不明である。

栗遺跡の住居跡に付属する施設は以上のような状況であり、間仕切溝や貯蔵穴といった施設は、現在までのところ検出されていない。（註、昭和49・50年調査10号に貯蔵穴類似Pitあり）

7)　火災住居跡について

栗遺跡では、昭和49・50年に調査された18軒のうち3軒が火災住居跡で、本調査においても2軒の火災住居跡が発見されている。昭和49・50年の調査における火災住居跡は、2つの異なる状況を呈していることが報告されている。（註19）第1の状況は、9号住居跡のように住居跡内の床面近くに多量の炭化物とともに多量の遺物が残存する場合で、偶発的な火災の状況を呈しているものである。第2は12号住居跡のように、住居跡内は焼け、炭化物も多く出土しているが、遺物がほとんど残っていない場合で、住居内の主な物品が運び出されてから意図的に燃やされたような状況を呈するものである。仮に、前者のような状況の住居跡を「失火型火災住居跡」、後者のような状況の住居跡を「焼却型火災住居跡」と呼ぶことにすると、本年調査した3号・10号住居跡は両方とも「焼却型火災住居跡」に類するもので、遺物量が少なかったことは、12号住居跡に記した通りである。「焼却型火災住居跡」の炭化材の出土量は「失火型

第51表　火災住居跡比較表

調査年次	住居跡番号	炭化材出土量	床面遺物出土量	火災の状況	堆積土の遺物出土量	重　複　関　係
昭和49・50年	9号	極めて多量	各種18点	失　火　型	少　量	な　し
昭和49・50年	12号	少　量	破片6点	焼　却　型	少　量	な　し
昭和49・50年	18号(B)	多　量	破片のみ	焼　却　型	多　量	18（B）→18（A）
昭和　56　年	3号	多　量	坏3点・その他甕片	焼　却　型	少　量	20→3 21→
昭和　56　年	10号	少　量	坏1点	焼　却　型	極めて少量	15→14→13→11→10

火災住居跡」に比べて少ないことも先の報告書で述べられているが、3号・10号住居跡の炭化材も、やはり、昭和49・50年の9号住居跡に比べるとかなり少ないようである。「焼却型火災住居跡」の発生原因としては、その住居跡の構成員の集落内での移動（住居跡の新築）と集落外への移動とが考えられる。どちらが原因したかについては、集落内での移動の場合は、焼却後の凹地が、後述する12号住居跡のようなゴミ穴として利用され、堆積土中から多くの廃棄土器が出土する可能性がある。これに対し、集落外への大量移動の場合には、焼却後、集落の活動が行なわれなくなるために、土器が捨てられる可能性が少なくなり、住居跡堆積土から遺物が出土する可能性が多くなると考えられる。また、これに加えて各火災住居跡が、切り合い関係において最も新しい場合には、集落内及び集落外の両方への移動の可能性があり、古いものであれば集落内での移動の可能性の方が強いと考えられる。各火災住居跡の状況を比較すると第51表のようになる。これによると、昭和49・50年の12号住居跡と、本調査の3号・10号住居跡は、集落外への移動を示唆する状況にあり、栗遺跡の廃絶時のことを推察するうえで大きな意味を持っていると思考される。

8)　廃絶後の住居跡について

廃絶後の住居跡の埋没状況を検討することによって、集落の動態を知る手掛かりが得られることは以前より指摘されている。栗遺跡では、前述した火災住居跡以外にも、他の住居跡に比べて、堆積土中に多量の土器と礫を含む特異な埋没状況を呈する住居跡が4軒ある。昭和49・50年調査の18号（A）住居跡と、本調査の5号・7号・12号住居跡がこれにあたる。5号・7号・12号の各住居跡の堆積土中からは集計表に示した通り、完形、破片を含めてそれぞれ831点、750点、1,758点と多くの土器片が出土し、その出土量は、他の住居跡の数倍から十数倍となっている。その出土状況は、12号住居跡を例とすると、第37図、及び図版13の通りである。

このように、多くの遺物が何故、竪穴内に埋没したかについて考えると、その量からいって竪穴周辺から自然に流入したとは考え難い。とすれば、人為的な行動がその背後にあったと考えられる。その行動としては、出土した土器の大部分が破片、または一部を欠損していることからみて、投棄行動と解釈するのが妥当であろう。すなわち、栗遺跡の住居跡のなかのあるも

のは、廃絶後に集落内で出た廃棄物の投棄場として利用されていたと考られるものである。また、この投棄の相乗的作用として、竪穴の凹地の平担化も意図されていた可能性もあるかと推察される。

堆積土中より多量の遺物を出土する住居跡の廃絶後の状況については、以上のことが考えられる。

2．溝跡の総括

溝跡は4条検出された。このうち2号溝と3号溝については、その幅に比べて検出範囲が狭いために本当の溝状の遺溝であるのか、あるいは土壙状の遺構であったのか明確ではない。

各溝跡の年代についてみると、4号溝は江戸時代以降ということが明らかである以外は、年代を決定する資料に欠けている。ただし2号溝は、保存状況の割には住居跡群から出土する土師器と同様のものが、かなり多量に包含されているので、住居跡群と同年代である可能性が強い。また、3号溝の堆積土には火山灰の薄層が幾重も観察されるが、この火山灰層が多賀城跡で検出されているものと時期が同じであれば、多賀城跡の調査によってこの火山灰層に与えられている10世紀前後の年代をこの溝にも与えることができる。1号溝は3号溝よりも新しい時期であることが明らかなだけで、時期を決定する資料はない。

次に溝の性格についてみると、4号溝は旧河道面に作られた水田の用水路と考えられる。1号溝は自然堤防上から旧河道へ向っていることから、排水溝的性格が強かったのではないかと考えられる。2号溝、3号溝の性格については不明である。

3．土壙の総括

土壙は今回の調査で9基検出された。平面形は、円形または楕円形といった形の整ったものは少く、楕円形や方形に近い不整形の土壙が多い。断面形は底面が平坦で逆台形を呈するものと、底面が丸味をもった舟底形を呈するものとがある。土壙の大きさは、最小が6号土壙の61×59cmのものから、最大が2号土壙の190×110cmのものまである。出土遺物には明確に土壙

第52表　土壙一覧表

No.	平面図形	断面形	大きさ	深さ	備考
1	不整形（楕円形）	逆台形	長軸95×短軸77	26	土器片出土、Pit15を切っている　2層
2	不整形	逆台形	190×　110	37	土器片、東壁不明、南壁攪乱、ＳＩ４に臨接　4層
3	楕円形	逆台形	95×　71	16	炭化物　2層
4	不整形（楕円形）	擂鉢形(舟底形)	126×　118	25	炭化物、東壁攪乱　4層
5	不整形（楕円形）	舟底形	142×　79	22	炭化物、東壁攪乱　2層
6	円形	舟底形（皿形）	61×　59	6	無遺物　1層
7	不整形(隅丸方形)	逆台形（皿形）	117×　107	3	無遺物　1層
8	不整形（楕円形）	舟底形	132×　77	9	土器片、骨片、中央部攪乱、ＳＩ12を切る　2層
9	不整形（楕円形）	逆台形	76×　59	9	土器片、炭化物、骨片、ＳＩ12を切る　2層

(cm)

に伴うと考えられるものはないが、堆積土中から出土する土師器片は、住居跡群から出土しているものとほぼ同一である。これらの土壙群の年代を決定する資料はないが、住居跡群と時代を別にする遺物や遺構はかなり限られていることから、住居跡群と時代的に密接な関係が考えられる。土壙の機能についても、これを究明する資料に欠けているので、住居跡と何らかの関係があったのではないかという問題を提示するだけに留めざるを得ない。

4．土師器の分類と年代

栗遺跡からは、表面採集及び前後二度の調査によって多数の土師器が出土し、その数は実測点数にして434点に達している。これらの土師器は、『栗囲式』の前後の形式に類似する器形を呈するものも存在するが、大きくみると、『栗囲式』の範中で考えられるものである。本項では、栗遺跡からこれまでに出土した土師器を網羅して、栗囲式期における土師器の機能的（器形）分類と、編年的（細）分類を試みることにする。

1)　土師器の機能的分類と使用の実態について

これまでに出土した土師器には、小さなものでは小形手捏ね土器から、大きなものでは甕形土器まで様々あるが、各土師器は、その器形と大きさに応じて、それぞれある特定的、あるいは多目的役割（機能）を果していたと考えられる。機能を器形として具体化させたものが、坏や甕といった各器種であり、器種にどのようなものがあるかの分類が、ここで言う「機能的分類」である。

機能的分類を行うにあたっては、器形の差異による分類ばかりではなく、同器形を呈する場合であっても、その器形に大小の区分が認められる場合は、それぞれ別個の器種として考えることにした。大小の区分を行うためには、統計的な検討を行い、また器種の成立を考えるためには、使用法の検討も行った。

①　器種の分類

栗囲式の土師器の器種について、氏家和典氏はその編年において、壺形土器、甕形土器、甑形土器、坏形土器、高坏形土器という分類を行い、甑形土器と甕形土器については大形と小形の例を図示している。(註20) 本報告では、氏家氏が壺形土器とした器形を呈する土器は、他の報告書の事例に従って、甕形土器として分類（甕Ⅰ類）した。他の器形は、基本的分類として共通する。

栗遺跡の土師器は、調査によって新たに発見された器種と、基本的器形の検討により次のように分類された。

《甕類概観》甕類には、氏家氏の編年における長胴の甕と、壺形から器形変化したと考えた体部が球形の甕とがある。本報告書では、体部が球形を呈するものを甕Ⅰ類とし、体部が長胴を呈するものを甕Ⅱ類として大別した。

〈甕Ⅰ類概観〉甕Ⅰ類は、体部が偏平な球形を呈するものから倒卵形を呈するものまであるが、大きさ（器高）によって大型と小型に分類される。大型のものは器高が35cmを超すもので、最大のものは43.5cmを計る。大型のものは小型に比べて個体数は少ない。小型のものは、器高が15～30cm前後まであるが、30cm前後のものが一般的で、各住居跡での出現率が高い。

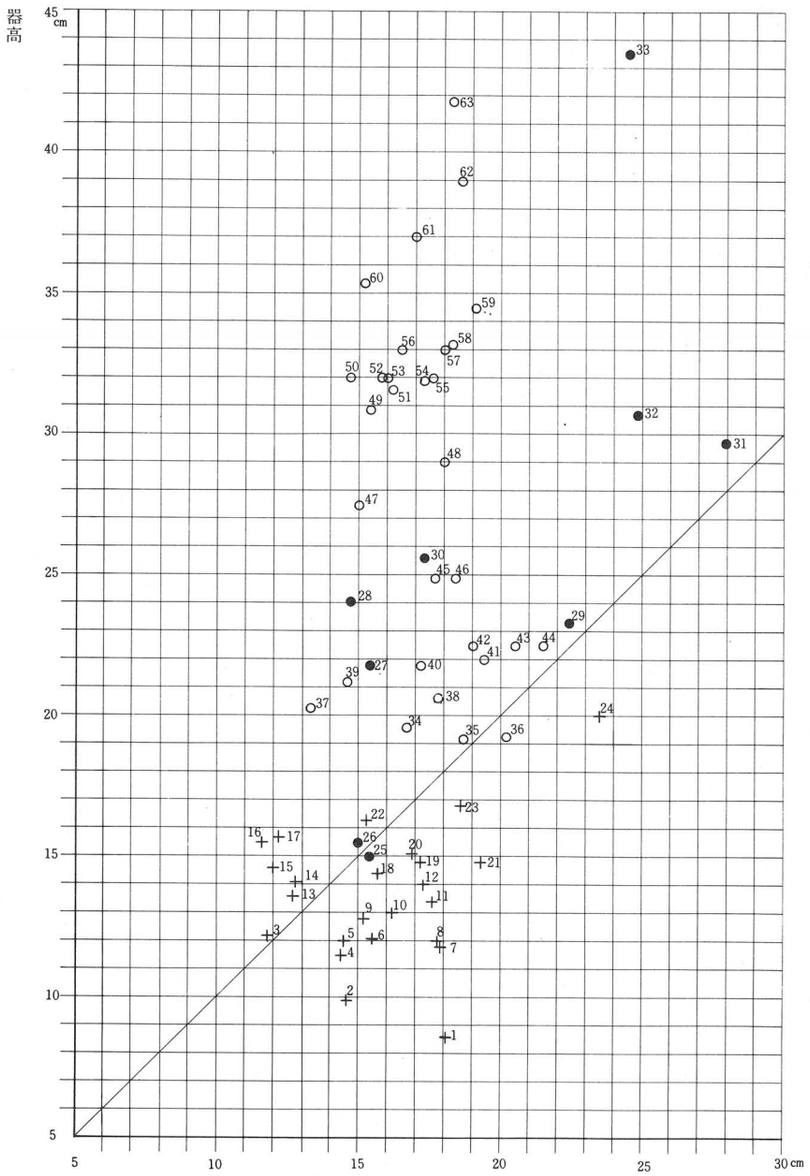
器　種	特　徴
甕Ⅰ類　大型	体部が球形を呈し、器高が35cmを超える甕
甕Ⅰ類　小型	体部が球形を呈し、器高が35cm未満の甕

（甕Ⅰ類の機能）甕Ⅰ類は、体部を球形に脹らませて容量を大きく作っていることから、貯蔵を目的とする機能が与えられていたと考えられる。甕Ⅰ類のうち保存状態の良好な資料の観察によれば、二次的な火を受けた痕跡がないことも、この甕類が貯蔵を主目的としたことを裏付けるように思われる。

〈甕Ⅱ類概観〉甕Ⅱ類は、体部が長胴を呈し、器高が口縁径より大きく（第53表36を除く）口縁部が外反するものである。器高は完形品で19.2cmから41.8cmあるが、この間に一様に散在するのではなく、器高が30～35cmの範囲にある大型の部類と、19～25cmの範囲にある小型の部類の二つに分かれて、集中的に分布するのが第53表からわかる。甕Ⅱ類の大型と小型との境界は、第53表によると器高25cmが目安になるようである。

器　種	特　徴
甕Ⅱ類　大型	体部が長胴を呈し、器高が25cmを超えるもので、器高は口径より大きく、口縁が外反するもの。
甕Ⅱ類　小型	体部が長胴を呈し、器高が25cm未満で、器高は口径より大きいのを原則とし、

第53表　甕・鉢類器高・口径計測表



十 鉢
● 甕Ⅰ
○ 甕Ⅱ

No	年 次	遺物No	器形	器高	口径	No	年 次	遺物No	器形	器高	口径
1	56	12—26	鉢	8.6	18.1	33	49・50	20	甕Ⅰ	43.5	24.5
2	49・50	107	鉢Ⅱ	9.9	14.6	34	49・50	63	甕Ⅱ	19.6	16.7
3	56	18—2	鉢Ⅰ	12.2	11.8	35	49・50	60	甕Ⅱ	19.2	18.7
4	49・50	109	鉢Ⅱ	11.5	14.4	36	56	0—28	甕Ⅱ	19.3	20.2
5	49・50	110	鉢Ⅱ	12.0	14.5	37	56	12—29	甕Ⅱ	20.3	13.3
6	56	12—22	鉢Ⅱ	12.1	15.5	38	56	7—4	甕Ⅱ	20.6	17.8
7	56	20—4	鉢Ⅱ	11.8	17.9	39	49・50	53	甕Ⅱ	21.2	14.6
8	56	22—3	鉢Ⅱ	12.0	17.8	40	49・50	67	甕Ⅱ	21.8	17.2
9	49・50	108	鉢Ⅱ	12.8	15.2	41	49・50	43	甕Ⅱ	22.0	19.4
10	49・50	106	鉢Ⅱ	13.0	16.2	42	56	19—10	甕Ⅱ	22.5	19.0
11	56	12—25	鉢Ⅱ	13.4	17.6	43	49・50	66	甕Ⅱ	22.5	20.5
12	56	22—4	鉢Ⅱ	14.0	17.3	44	49・50	62	甕Ⅱ	22.5	21.5
13	49・50	124	鉢Ⅰ	13.6	12.7	45	49・50	58	甕Ⅱ	24.9	17.7
14	56	17—4	鉢Ⅰ	14.1	12.8	46	56	19—15	甕Ⅱ	24.9	18.4
15	49・50	123	鉢Ⅰ	14.6	12.0	47	49・50	23	甕Ⅱ	27.5	15.0
16	49・50	125	鉢Ⅰ	15.5	11.6	48	49・50	45	甕Ⅱ	29.0	18.0
17	56	7—2	鉢Ⅰ	15.7	12.2	49	56	12—31	甕Ⅱ	30.9	15.4
18	49・50	117	鉢Ⅱ	14.4	15.7	50	56	19—13	甕Ⅱ	32.0	14.7
19	49・50	112	鉢Ⅱ	14.8	17.2	51	56	12—37	甕Ⅱ	31.6	16.2
20	56	22—2	鉢Ⅱ	15.1	16.9	52	49・50	48	甕Ⅱ	32.0	15.8
21	56	19—5	鉢Ⅱ	14.8	19.3	53	49・50	24	甕Ⅱ	32.0	16.0
22	56	19—4	鉢Ⅰ	16.3	15.3	54	56	19—12	甕Ⅱ	31.9	17.3
23	49・50	118	鉢Ⅱ	16.8	18.6	55	56	12—32	甕Ⅱ	32.0	17.6
24	49・50	113	鉢Ⅱ	20.0	23.5	56	49・50	49	甕Ⅱ	33.0	16.5
25	49・50	9	甕Ⅰ	15.0	15.4	57	49・50	46	甕Ⅱ	33.0	18.0
26	49・50	14	甕Ⅰ	15.5	15.0	58	49・50	68	甕Ⅱ	33.3	18.3
27	49・50	10	甕Ⅰ	21.8	15.4	59	56	19—11	甕Ⅱ	34.5	19.1
28	49・50	19	甕Ⅰ	24.0	14.7	60	49・50	31	甕Ⅱ	35.4	15.2
29	56	12—30	甕Ⅰ	23.3	22.4	61	49・50	69	甕Ⅱ	37.0	17.0
30	49・50	6	甕Ⅰ	25.6	17.3	62	49・50	37	甕Ⅱ	39.0	18.6
31	56	32—4	甕Ⅰ	29.7	27.9	63	49・50	26	甕Ⅱ	41.8	18.3
32	56	17—5	甕Ⅰ	30.7	24.8						

口縁部が外反するもの。

（甕Ⅱ類の機能）長胴甕の出現は、カマドの出現によって促されたと言われているので、栗遺跡出土の長胴甕もカマドと一体となって機能していたと考えられる。甕Ⅱ類の大型と小型とでは、どのような使用区分がされていたのか検討が必要と考えられる。この点については後述する。

〈鉢類概観〉鉢は甕Ⅱ類に類似するが、甕Ⅱ類に比して器高が低く、長胴とは言い難い器形を呈す。第53表でもわかるように、鉢類と甕Ⅱ類とでは器高が異なる部分に集中している。鉢類の器高は第53表の24を除くと８cm以上17cm以下で、特に11～16cmの間に集中している。

鉢類には、口縁部が内弯（または直立）するものと、外反するものがあり、これによって二分することができる。口縁が内弯（または直立）するものを鉢Ⅰ類とし、口縁部が外反するものを鉢Ⅱ類とすると、鉢Ⅰ類は器高が口径より大きくなるのが特徴で（第53表－３・13～17・22)、反対に鉢Ⅱ類は器高より口が大きいのが特徴である。

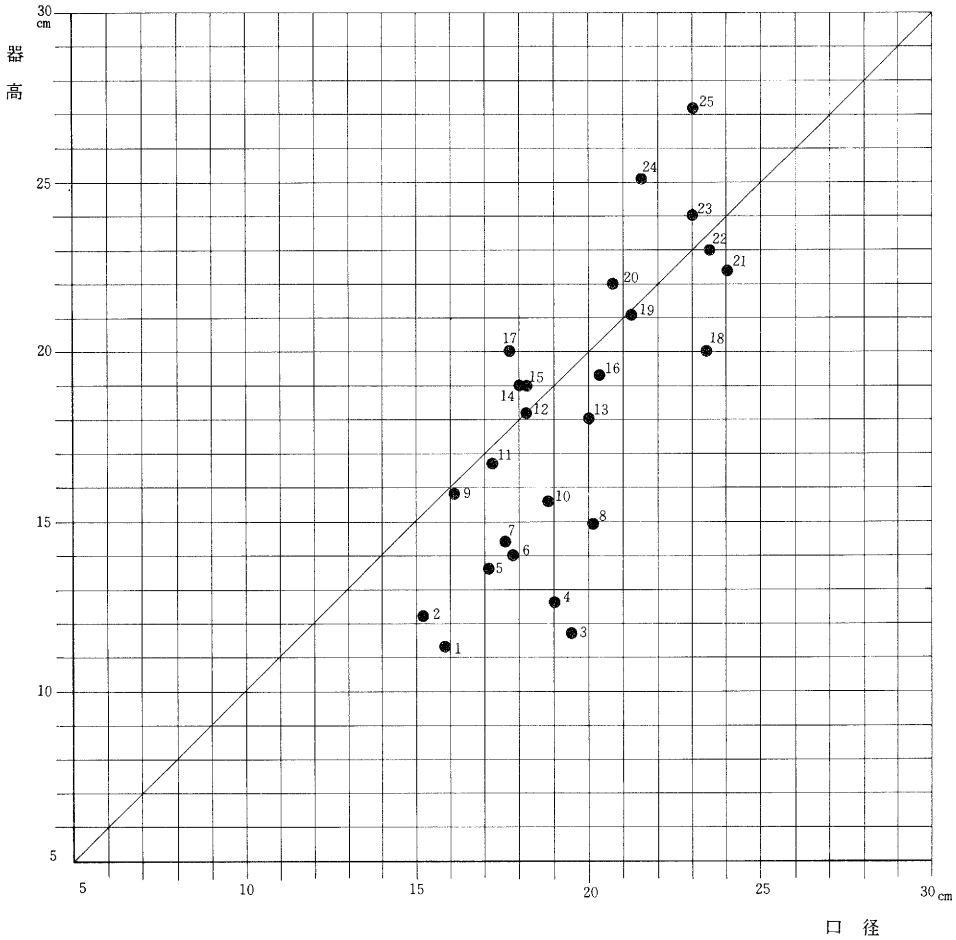
器　種	特　徴
鉢　Ⅰ　類	：器高が（８cm以上）17cm以下で、口縁部が内弯（または直立）する。一般に器高は口径より大きい。
鉢　Ⅱ　類	：器高が（８cm以上）17cm以下で、口縁部が外反する。器高は口径より小さい。

（鉢の機能）鉢は、甕と坏の中間的器種であるが、その具体的機能については、後に述べるように鉢Ⅱ類についてだけ、甑との関係において考える資料があるだけである。

〈甑類概観〉栗遺跡出土の甑は、完形品（図上復元可能なものを含む）をみると、器高が11.3cmから27.2cmのものまである。甑類は、器高の割に口径が広く作られるという外形的特徴があり、第54表のような器高と口径がほぼ等しい所から、器高より口径が大きい所に各個体が分布する傾向を認めることができる。

器形的にみると、砲弾形を呈する大型のものと、外形は鉢Ⅱ類に類似し、鉢の

第54表　甑器高口径計測表



No	年　次	遺物No	器高	口径	No	年　次	遺物No	器高	口径
1	49・50	98	11.3	15.8	14	49・50	84	19.0	18.0
2	49・50	96	12.2	15.2	15	49・50	87	19.0	18.2
3	49・50	101	11.7	19.5	16	49・50	91	19.3	20.3
4	49・50	94	12.6	19.0	17	56	7－1	20.0	17.7
5	49・50	103	13.6	17.1	18	49・50	85	20.0	23.4
6	49・50	97	14.0	17.8	19	56	12－41	21.1	21.2
7	49・50	95	14.4	17.6	20	56	8－1	22.0	20.7
8	49・50	93	14.9	20.1	21	49・50	82	22.4	24.0
9	56	18－3	15.8	16.1	22	49・50	88	23.0	23.5
10	49・50	102	15.6	18.8	23	49・50	89	24.0	23.0
11	49・50	99	16.7	17.2	24	49・50	86	25.1	21.5
12	56	19－16	18.2	18.2	25	49・50	81	27.2	23.0
13	49・50	83	18.0	20.0					

(cm)

底部を削り取り、一孔または多孔を穿ったような小型のものとに大別される。小型のものと大型のものとの境は、鉢と甕Ⅱ類小型の境界である器高17cmと一致しており、小型のものは全て器高より口径が広くなっている。

器　種	特　徴
甑　大　型	器高が17cm以上で、砲弾形を呈す。器高の割に口径が広く、底部は無底で大きな一孔が穿たれている。
甑　小　型	器高が17cm未満で、外形は鉢Ⅱ類に類似するものが多い。器高は口径より小さい。底部は無底と有底があり、孔も大型の一孔と小型の一孔及び多孔式のものがある。

（甑類の機能）甑の機能は、言うまでもなく物を蒸すためのもので、水を入れた他の容器と組み合わされて使用された。この甑に大型と小型の区別があるのは、蒸される材料の量（あるいは材料の質も関係した可能性もある。）に関係したと考えられる。また、甑に大小の区別があれば、当然その甑の容量に見合う蒸気量（水量）が必要となるので甑の大きさに応じて、水を入れる容器（甕または鉢）も別なものが使用されたと考えられた。この点については別に後述する。

〈坏類概観〉これまでに出土した坏の大部分は丸底で、底部と体部の境には内外に対応する段を有し、口縁部が外反するものがほとんどである。（口縁部が内弯または直立するものも若干ある。）坏の大きさは、小型のものでは口径が9.9cmのものからあるが、その大部分は口径が13cmから18cm位である。なかには少数ではあるが口径が20cmを超える大型のものがあり、一般的な坏とは区分される。大型の坏と一般的な坏とは単なる大きさの差異だけではなく、その容量の大きさからみて、他の坏とは別の機能を持たされていた可能性が考えられる。このことから本報告書においては、大型の坏を他の一般的な坏とを区分して取り扱うこととし、一般的な坏を小型の器種とした。

器　種	特　徴
坏　大　型	ロクロは使用されていない。口径が20cm以上あり、底部は丸底で、底部と体部の境に段を有す。口縁部は外反するものが多い。

坏　小　型：ロクロは使用されていない。口径は20cm未満で、底部は丸底のものがほとんどであるが、希に平底のものもある。底部と口縁部との境に段を有するものが多く、口縁部は内弯するもの、直立するもの、外反するものがあるが、外反するものが一般的である。口縁が直立するもののなかには、須恵器の坏を模倣したと考えられるものも数点ある。

（坏類の機能）坏は、食物などを盛るために使用されたと考えられるが、容量の大きく異なる大型と小型のものが、同様の機能を果していたとは先にも述べた通り考えられないことである。一般的な小型坏が個人の飲食物を盛るために使用され、大型の坏は共同の飲食物または特別な飲食物を盛ったことが考えられる。この２つの器種の用途については、今後の検討が必要と思われる。

〈蓋類概観〉蓋は出土点数は少ないが、２種類ある。第Ⅰ類は、偏平な円錐形の蓋部に短かい円筒状のつまみが付くもので、３点出土している。第Ⅱ類は、須恵器の蓋を模倣したもので、器形は半球形を呈し端部がわずかに内弯する。第Ⅱ類は１点だけが確認されているが、この蓋の出土地点に接近している住居跡から出土した坏にも須恵器を模倣したものがあり、両者は胎土・焼成・色調・調整とも酷似している。

器　種	特　徴
蓋　Ⅰ　類	偏平な円錐形の蓋部に、短かい円筒状のつまみが付く。
蓋　Ⅱ　類	須恵器の蓋を模倣したもので、器形は半球形を呈し、端部がわずかに内弯する。つまみは付かない。

（蓋類の機能）蓋Ⅱ類は、須恵器を模倣した坏と一体となって機能したと考えられるが、蓋Ⅰ類はどの器種と組み合わされたのか不明である。

〈その他の器種〉栗遺跡から出土した土師器には、上記の12器種の他に、大型、小型の別や、器形・機能に大きな差を認めることのできない器種が５種類ある。

器　種	特　徴
高　　坏	：坏部は丸底で、口縁部と体部の境に内外面とも段を有し、口縁部が外反する。脚部は円錐台形状のものと、裾の広がる円筒状のものとがある。
片口土器	：これまで2点出土しているが、いずれも口縁付近の破片で全体の明らかなものはない。残存部から判断すると、小型で鉢に類似する器形を呈すると考えられ、口縁の一ヶ所がわずかに外側に押し出されている。
椀	：外形は坏に類似するが、坏に比べて器高が高い（深い）ものを椀とした。坏と椀を分類する境界としては、器高を口径で割った数値が2以上と、2未満とで分けられ、椀の場合は2未満となる。椀は2点出土している。
小形土器	：小型土器には、壺や甕Ⅰ類に似た器形を呈するものから、小型手捏ね土器に近いものまである。統一的な器形をもつ器種ではなく、むしろ個別、個性的な器種の土器として成立している。機能としては、今後の検討が必要である。
小形手捏ね土器	：小型手捏ね土器は、祭祀用に作られたと考えられるもので、Ⅲ－9－1)に述べたように5類に分けられる。

栗遺跡の土師器は、上記のように17の器種により構成され、器種の分化が進んでいたことがわかる。しかし土師器の全器種が、どの住居跡においても一律に使用されたとは限らず、また、器種によっても使用個体数の多少や、常用、非常用といった差異があったと考えられる。

そこで次には、土師器の使用量と使用状況について検討を加えることにする。

②　各器種の出土量と使用状況について

栗遺跡出土土師器のうち、図化した個体を器種別にまとめたのが第55表である。この表の個体数が調査地区の全個体数ではないが、各器種の全体における割合をある程度反映していると考えられる。

表からは、次のことを判読できる。

イ．出土率が高い器種は、甕Ⅰ類小型、甕Ⅱ類大型・小型、鉢Ⅰ・Ⅱ類、甑大型・小型、坏小型、高坏、小形手捏ね土器の10器種である。

ロ．同じ甕であっても、甕Ⅱ類の出土率の方が高く、甕Ⅰ類の3倍以上になっている。

ハ．小型の坏の出土率が高いのは、この器種が人間一人につき１個以上の割合で使用されたことによると考えられる。これに対し甕Ⅰ類や鉢・甑の出土率が低く、しかも各器種の出土量に大差がないのは、各住居毎に数点あればよい器種であったことによる結果と思われる。

ニ．甕Ⅱ類も、甕Ⅰ類や鉢・甑と同様の割で使用されていたと思われるのに、この器種の出土率は非常に高い。これは甕Ⅱ類（長胴甕）が煮沸用土器として、２次的な火を常時受け、しかも頻繁な出し入れが繰り返えされたので、土器自体の耐用期間が短かったことが原因となり、使用量（＝生産量・出土量）が多くなったと考えられる。

ホ．蓋類・片口土器・埦・小型土器の５器種は、他の器種の出土量からみると、少量であることから器種としては普遍性に乏しいものであったと考えられ、各住居跡に共通して存在したものではなかったと考えられる。

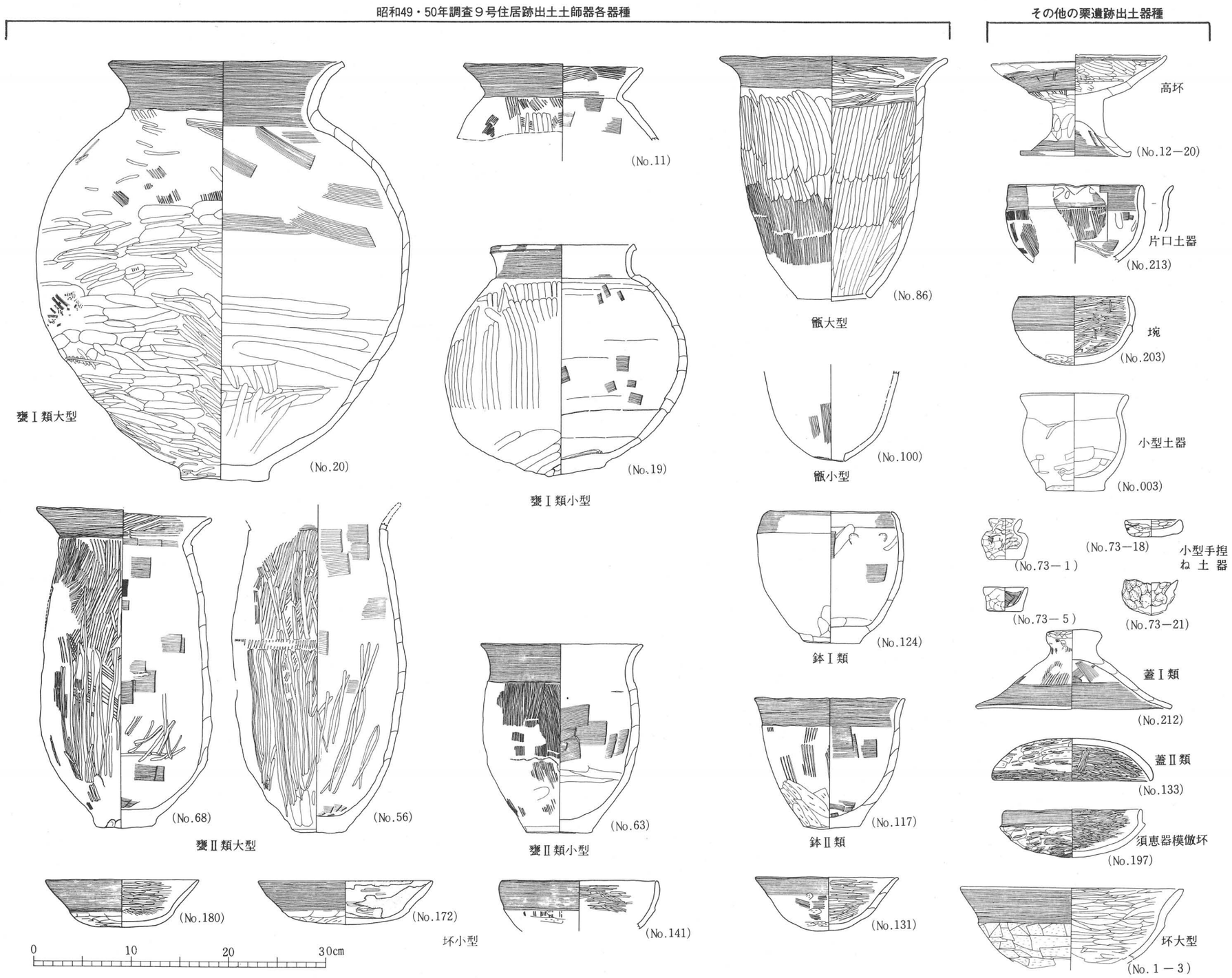
ヘ．この他に、第55表からは、鉢Ⅱ類は、鉢Ⅰ類の２倍以上の出土率があり、甑の大型・小型では出土率に差がないことがわかる。

第55表　栗遺跡出土土師器器種別出土量

器種		個体数			%	
甕Ⅰ類(体部球形)	大型(器高35cm以上)	完形資料	破片資料	37	0.9	8.4
		3	1			
	小型(器高35cm未満)	完形資料	破片資料		7.5	
		8	25			
甕Ⅱ類(体部長胴)	大型(器高25cm以上)	完形資料	破片資料	118	9.1	26.9
		17	23			
	小型(器高25cm未満)	完形資料	破片資料		17.8	
		13	65			
鉢Ⅰ類　(口縁部内弯)		11			2.5	
鉢Ⅱ類　(口縁部外反)		31			7.1	
甑大型　(器高18cm以上)		25			5.7	
甑小型　(器高18cm未満)		12			2.7	
坏大型　(口径20cm以上)		11			2.5	
坏小型　(口径20cm未満)		124			28.2	
蓋Ⅰ類　(つまみ付)		3			0.7	
蓋Ⅱ類　(つまみ無し)		1			0.2	
高坏		19			4.3	
片口土器		2			0.5	
埦		2			0.5	
小形土器		9			2.0	
小形手捏ね土器		31			7.1	
異形土器		3			0.7	
実測個体数		439 点				

③　住居跡における各器種の出土状況

先に分類した各器種の土器が、実際の住居内における使用状況がどうであったかについては、



第104図　昭和49・50年調査９号住居跡出土土師器及び栗遺跡出土各器種

昭和49・50年調査の９号住居跡の資料によって知ることができる。９号住居跡は、Ⅳ－１－(７)に記した通り、住居使用時に火災に遇ったもので、カマドの両側及び前面から使用時のままの状態で多数の土師器が出土している。土器の上面が多量の炭化材で被われていたことから、この住居跡出土の土器群は、栗遺跡の住居跡における土器の各器種の基本的な組み合わせを知るための極めて良好な資料であると考えられる。

栗遺跡の昭和49･50年調査９号住居跡床面出土土器の組み合わせ状況を示したのが第104図である。この住居の出土土器は土師器だけで、甕Ⅰ類大型１点、甕Ⅰ類小型１点（２点あるがうち１点は体部下半を欠損しているので、使用できる状態のものであったとは考えられないので１点とした)、甕Ⅱ類大型２点、甕Ⅱ類小型１点、鉢Ⅰ類１点、鉢Ⅱ類１点、甑大型１点、甑小型１点（実測図は下半部の破片のようになっているが、出土時はほぼ完形であった。調査中に盗難にあい、土中に埋っていた部分を石膏で形取りし、これを実測したために破片のようになっている。）坏小形４点の９器種13点で構成されている。

９号住居跡の器種構成及びその点数を第55表の栗遺跡出土土師器器種別出土量に照してみると次のことが言えるようである。第１に、９号住居跡では遺跡全体としてみた場合に出土率の高い11器種のうち、高坏と小形手捏ね土器を除く９器種で構成されている。高坏と小形手捏ね土器がこの住居跡から出土しなかったのは、この２器種は日常的に使用されていたものではなく、特別な場合や場所において使用されたことによると考えられる。(ただし、本調査における17号住居跡からは、小型手捏ね土器６点がまとまって出土している例もある。)

第２に、甕は、甕Ⅰ類・甕Ⅱ類及びその大型と小型がそれぞれ共存し、４器種によって構成される。甕Ⅰ類の大型と小型が共存する例としては、昭和56年調査の17号住居跡がある。また甕Ⅱ類の大型と小型の共存する例としては、昭和49・50年調査の２・４・６号住居跡、昭和56年調査の19号住居跡がある。

第３に、甑についても大型と小型のものがそれぞれ１点ずつ共存しており、必要量に応じた使用区分が行われていたと考えられる。

第４に、鉢も口縁部の内弯する鉢Ⅰ類と、口縁部の外反する鉢Ⅱ類とが共存しており、何らかの使用区分が行われていたと考えられる。

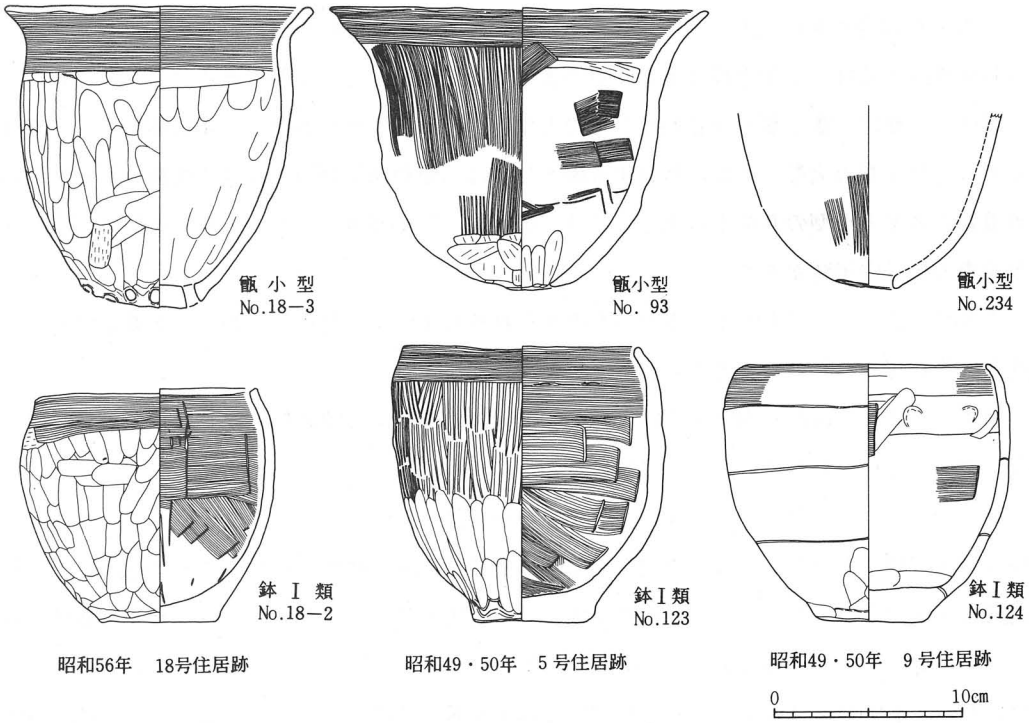
第５として、坏に次いで出現率の高い甕Ⅱ類が実際の住居跡においては大型２点、小型１点程度の保有数であったことは、前述したように甕Ⅱ類の耐用期間が短かいことに起因してこの器種の生産量が多くなり、従って遺跡全体としても出土量が多くなったという考えを裏付けると思われる。もし、器種によって耐用期間に著しい差があったとすれば器形変化の遅いものと早いものとが生じる可能性があり、短期的な編年を考える際には大きな問題として注意が必要と思われる。

④　甑と甕・鉢の使用関係について

甑という器種は言うまでもなく、何らかの容器と対になって機能するのであるが、出土土師器のうちいかなる器種と組み合わされていたのか検討することにする。この場合、甑の大型と小型では必要な水量と消費燃料の関係により、それぞれ異なる器種が使用されていたと想像される。

小型の甑は、その容量が小さいことから長胴甕は必ずしも必要ではなかったと考えられる。この使用状況を示す資料として本調査における18号住居跡の小型の甑と、鉢Ⅰ類がある。この2点は図版19のように鉢の上に甑が乗せられ、そのまま横転した状態で出土した。単なる偶然でこのように重なった状態になったのではないことは、鉢の口唇部の内側が図版57に示したようにかなり摩滅していることからわかる。すなわち、日常この甑と鉢が組み合わされて使用されたため、鉢の口唇部が次第に摩滅していったと考えられるのである。また、甑との密着性を良くするために、口縁部を内弯させた結果としてこのような器形の鉢が成立したと考えられる。

鉢Ⅰ類と小型の甑が同一住居跡の床面から出土した例としては18号住居跡だけでなく、昭和49・50年調査の5号住居跡、9号住居跡にもあることからすれば、この組み合わせは18号住居跡に限定されるものではなく、栗遺跡においてはかなり普遍性のある組み合わせであったと考



第105図　鉢Ⅰ類・甑小型関係図

えられる。(第105図参照) 18号住居跡と5号住居跡の鉢と甑は第105図をみると明らかなように、それぞれ器面調整が類似し、しかも胎土の色調も類似し、同時期の焼成と考えられるものである。

では、この鉢Ⅰ類と小型の甑がカマドにおいてどのような状態で使用されたのであろうか。18号住居跡のカマドは、Ⅳ－1－5)で試みた復元結果によると、支脚を有効に使用するために、23cm＋α（口縁部高）＋β（カマド天井高と焚口天井石上面高との差）の器高が必要であった。18号住居跡出土の鉢Ⅰ類No18－2は、器高が12.2cmしかないことから当然この支脚を利用することはできず、また、体部最大径も13.5cmで器高の高い甕Ⅱ類の利用を前提した穴にこの鉢を据えて使用するということは不可能と考えられる。この鉢を使用するには、鉢が落ちないため何らかの調整器具、あるいは甕Ⅱ類を挿入するための穴以外に、この穴より壁際にでも鉢専用の挿入穴があったのではないかと考えられるが、現段階では具体的資料がないので、今後検討を必要とする問題点として指適するだけに止めざるをえない。

大型の甑はその容量が大きいことから、それに比例して多量の水蒸気を必要とするために、鉢Ⅰ類のような小形のものではなく、やはり甕Ⅱ類のような容量の大きいものと組んでいたと考えられる。甕Ⅱ類には大型と小型の両器種があるが、大型の甑と、どのような組み合わせがあったかは明らかではない。

⑤　甕Ⅱ類の大型と小型について

甕Ⅱ類は、器高が25cmを境として小型の器種と大型の器種があることを器高の分布表（第53表）によって確認したが、カマドの構造と密接な関係があるように思われるので、この点に少しふれておく。

カマドは、18号住居跡を例とすると、支脚を利用するためには23cm＋α(口縁部高)＋β（カマド天井高と焚口天井石上面高との差）の器高が必要であることは再三述べているとおりである。このαを約3cmとし、βを±0とした場合、支脚を利用するためには26cm（≒25cm）の器高が必要となるのである。すなわち、器高が25cmを超す甕Ⅱ類の大型の器種は、この支脚を利用するための器種である。逆に言うと、甕Ⅱ類の大型のもののために支脚が立てられていたと言うことができる。これに対し、25cmに満たない甕Ⅱ類の小型のものは、支脚を利用するには不向きであったと考えられる。

甕Ⅰ類の大型と小型との間には、支脚の使用を前提として作られたものと、使用しないことを前提として作られたものという相違が認められることは、両器種の独立性を示していると考えられる。

尚、甕Ⅱ類の大型のものと小型のものでは、器形の特徴についても異なっている。すなわち大

型のものは最大径が体部にあり、体部最大径は体部中央から下半にある。これに対し、小型のものは最大径が口縁部にあるものが多く、体部最大径も体部中央から上半部にあるのが一般的なようである。

2)　栗囲式期土師器の細分

①　栗囲式期土師器細分の方法

本調査によって、栗囲式期の住居跡の重複が確認され、また住居跡の配置関係からみても、数期にわたって住居が営まれたことが明らかになった。出土した土器（土師器）もこれに対応して、多少異なる特徴を有するものが混在している。このことから、栗囲式期の土師器および住居跡は、何時期かの段階に分類できると考えられる。

栗囲式期土師器の細分を行うにあたっては、

1．各器種を、底部・体部・口縁部等器形各部の特徴によって細分する。

2．細分化された各個体の住居跡床面での共伴状況を分析し、共伴状況に差異が認められるか、またこの差異を類型化できるか検討を加える。

3．共伴状況が類型化できた場合は、類型化された土師器群が時期差として認知できるかどうか、前後型式との対比と、住居跡の重複関係によって検討する。

という手順によることとし、以上の過程を経て時期差と考えられる土師器群をもって、栗囲式期土師器の細分とした。

②　各器種の細分

細分化を行なった器種は、甕Ⅰ類大型・小型、甕Ⅱ類大型・小型、鉢Ⅰ・Ⅱ類、甑大型・小型、坏大型・小型、蓋Ⅰ・Ⅱ類、埦、高坏、片口土器で、個体差の大きい小形土器と、他型式にも共通する特徴を有する小型手捏ね土器とは、細分を行わなかった。

細分に当っては、器形の特徴による分類を基本とした。器面の調整については、調整の個体差の大きい甕Ⅰ類小型においてのみ分類基準とした以外は、各器種毎の共通性が高いために分類の基準とすることを避けた。

器形の特徴としては、大形器種（甕・鉢・甑）においては、栗囲式の特徴である「口縁部と体部との接続部分である頸部外側に段を形成」（註21）しているかどうかを分類基準の第1位とし、体部の形状を第2位、口縁部の形状を第3位の基準点として分類した。小形器種(坏類)については、栗囲式の特徴である「口縁部と体部（底部）との接続部分において稜線、もしくは括れの形成がみられる」（註22）かどうかを分類基準の第1位とし、口縁部の形状を第2位

として分類した。

なお、この分類は、「栗囲式」の範中での分類であるので、表現上は他型式にも該当することも考えられるが、その不足分は、具体的実測図によって理解することにしたい。

1．甕Ⅰ類大型

第56表　甕Ⅰ類大型分類表

器　種	体部と口縁部の境(頸部)の形状	体部最大径の位置	口　縁　部　の　形　状	分　類	遺物番号
甕Ⅰ類 大　型	1．無　段	A．肩部付近	a．外反の後内弯し、さらに端部が外反する。	1Aa	32－5
	2．有　段	A．肩部付近	b．口縁幅が広く、端部は強く外反。口唇部は平坦。	2Ab	20
		B．体部中央	c．口縁幅は狭く、「く」字状に外反。	2Bc	17－6
	分類不可能破片	236			

底部片を含む4点があるが、それぞれ個性的な器形及び調整が行われており、3類に分類された。32－5は、体部外面の調整はハケメだけによるが、他は、最終的にヘラミガキ調整が加えられ、丁寧に作られている。

2．甕Ⅰ類小型

第57表　甕Ⅰ類小型分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	体部径と口縁部径の差	口縁部の形状	体部外面の主調整	分類	遺　物　番　号
甕Ⅰ類 小　型	1．無　段	A．　大	「く」字状に外反	a．ナデ・ヘラミガキ	1Aa	7・8・9
				b．ハケメ	1Ab	10
		B．　大	外傾後、端部外反	ヘラミガキ	1B	6
		C．　小	わずかに外反	ナデ・ヘラミガキ	1C	32－4
	2．有　段	A．　大	「く」字状に外反	a．ハケメ	2Aa	11・12・13・14・15・16・21・2－3・3－5・12－39・17－3
		A．　大	「く」字状に外反	b．ナデ	2Ab	18
		A．　大	「く」字状に外反	c．ヘラケズリ	2Ac	19
		A．　大	「く」字状に外反	d．ヘラミガキ	2Ad	17
		B．　小	外反		2B	17－5
	分類不可能破片	22・233・234・235・237・238・239・240・12－38・12－40・19－8				

底部片を含む33点がある。9類に分類された。頸部が有段のものが多く、無段のもの(6点)は有段のもの（15点）の½以下である。体部外面の調整は、ハケメ調整が主体で、特に頸部有段の場合は、約⅔を占める。反対に頸部無段の場合は、ナデ及びヘラミガキにより調整されるものが比較的多い。

3．甕Ⅱ類大型

破片を含めて40点ある。8類に分類された。頸部有段のものが多く、無段のもの（13点）は、有段のもの（27点）の½以下である。無段・有段にかかわらず体部最大径の位置は、体部下半・体部中央・肩部付近のいずれにもあるが、体部中央から体部下半にかけてのものが32点と、多くなっている。

器面調整の基本は、体部外面ハケメ調整・体部内面ヘラナデ調整・口縁部内外面ヨコナデ調整によるものが一般的である。しかし希に、体部外面がヘラケズリやナデにより調整されるものや、ハケメ後ヘラミガキ調整されるものがあり、また体部内面もヘラケズリやナデにより調整されるものもある。

第58表　甕Ⅱ類大型分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	体部最大径の位置	口縁部の形状	分　類	遺　物　番　号
甕Ⅱ類 大　型	1．無　段	A．体部下半	a．緩く外反	1Aa	23・31・34
			b．「く」字状に外反	1Ab	12—31・12—35
		B．体部中央	外　反	1B	24・26・27・28・32
		C．肩　部	外　反	1C	29・30
		1類破片			7－5
	2．有　段	A．体部下半	外　反	2A	37・28・39・41・45・46・47・51・68・69・12-32
		B．体部中央	外　反	2B	40・42・48・49・50・56 1－4・12—37・19—12・19—13・19—14
		C．肩部付近	外　反	2C	52・19—11
		D．頸部付近	緩く外反	2D	12—36
		2類破片	79・80		

4．甕Ⅱ類小型

第59表　甕Ⅱ類小型分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	体部の形状及び体部最大径の位置	頸部の形状	口縁部の形状	分類	遺　物　番　号
甕Ⅱ類 小　型	1．無　段	A．丸味あり・体部中央	括れている	外　反	1A	7－4
		B．丸味あり・体部中央	ほとんど括れない	外　反	1B	5－8
		C．長胴・体部中央	括れている	外　反	1C	19－9・31－3
		D．長胴・肩部	括れている	緩く外反	1D	19—15
		E．長胴・頸部	括れない	外　反	1E	33
		1　類　破　片	25・35・36・0－25・0－26・0－30・0－33・0－34・2－2・5－9・20－1			
	2．有　段	A．長胴・下半	括れない	外　反	2A	43
		B．長胴・体部中央	括れない	外　反	2B	57・58・59・77・3－4・12—29
		C．長胴・肩部付近	わずかな括れ	外　反	2C	62・66・12—27・12—30・19—10
		D．長胴・肩部付近	大きく括れている	外　反	2D	53・54・61・63・64・71・0－28
		E．長胴・頸部	括れない	外　反	2E	60・67
		2　類　破　片	44・55・65・70・72・73・74・75・76・78・0－27・0－29・0－31・0－32・0－35・4－3・4－5・4－6・7－3・12—24・12—28・12—33・18－4・19－7・20－3・23－1			
	底部破片	224・225・226・227・228・229・230・232・0－36・0－37・4－4・5－10・12—34・19－6・20－2				

破片を含めて、62点ある。10類に分類された。頸部無段のもの（17点）は、有段のもの（45点）の⅓強である。体部最大径は１点を除く全てが、体部中央から頸部にかけてあり、甕Ⅱ類大型とは対称的である。

器面調整の基本は、甕Ⅱ類大型と同様に、体部外面ハケメ調整・体部内面ヘラナデ調整・口縁部内外面ヨコナデによるものが一般的である。例外としては、体部外面がヘラケズリ調整によるものや、ハケメ調整の後にナデやヘラミガキ調整されるものがある。また体部内面もナデやヘラケズリ調整されるものがある。

５．鉢Ⅰ類

第60表　鉢Ⅰ類分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	口縁部の形状	口　縁　部　の　状　況	分　類	遺　物　番　号
鉢Ⅰ類	１．無段	A．直立	口唇部は丸くなっている	１A	19－４
		B．内弯	a．緩く内弯し、器高に比して口径が小さい	１Ba	122・７－２
			b．強く内弯し、器高に比して口径が大きい	１Bb	０－24・18－２
			c．強く内弯し、器高に比して口径が小さい	１Bc	123・125
	２．有段	A．直立	段は強く、口唇部は尖っている	２A	121
		B．内弯	a．段が緩くつくられている	２Ba	124
			b．段が強く、外面に対応して内面も屈曲	２Bc	126・21－１

11点あり、７類に分類された。頸部無段のもの（７点）は、有段のもの（４点）より多く、また口縁が直立するもの（２点）より、口縁が内弯するもの（９点）の方が多い。

器面調整は、口縁部は共通してヨコナデによるが、体部内面はハケメ調整によるものと、ナデ、ヘラナデ調整によるものとが約半々である。体部内面は、ヘラナデ調整が主体となっている。

６．鉢Ⅱ類

第61表　鉢Ⅱ類分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	底部から口縁部にかけての立ち上がり	頸部の形状	口縁部の形状	分　類	遺　物　番　号
鉢Ⅱ類	１．無段	A．直線的に傾斜	括れない	わずかに外反	１A	105・12－22・22－３
		B．直線的に傾斜	括れない	外　反	１B	104・106・108
		C．弯曲して立つ	わずかに括れる	外　反	１C	107・109・５－７・12－21 12－23・12－25・19－５
		D．甕の底部付近の転用と考えられるもの			１D	12－26
	２．有段	A．直線的に傾斜	括れない	わずかに外傾	２A	119・120
		B．直線的に傾斜	括れない	外　反	２B	110・111・112・113・116・ 117・32－３
		C．弯曲して立つ	わずかに括れる	外　反	２C	114・115・17－４・18－１ 20－４・22－２・22－４
		D．台状の底部がなく、広い底部から直線的に立ち口縁外傾			２D	118

31点あり、８類に分類された。頸部無段のもの14点と有段のもの17点とがある。段の有無を

除くと両者とも類似した器形となっており、無段・有段ともにc 類の個体数が多い。

器面調整は、体部外面ハケメ調整・体部内面ヘラナデ調整・口縁部内外面ヨコナデ調整されるものが一般的であるが、体部外面がナデ調整によるものや、ハケメ調整の後に部分的にナデやヘラケズリ調整されるものなどもある。

7．甑大型

第62表　甑大型分類表

器　種	体部と口縁部の境の形状	孔部から口縁にかけての立ち上がりの状況	口縁部の形状	分類	遺　物　番　号
甑大型	1．沈線で区画	孔部から斜めに立ち上がった後体部中央から直立して口縁に至る	軽く外反	1	81・82
	2．無　　段	A．斜めに直線的に立つ	軽く外反	2A	7－1
		B．緩く弯曲して立ち，頸部がわずかに括れる	外　反	2B	83・12—41
	3．有　　段	A．孔部から体部の下⅓まで斜めに立ち、体部上⅔がほぼ直立	強く外反	3A	88・89
		B．3A類に類似するがやや細身のもの	外　反	3B	84・86・8－1・19—16
		C．緩く弯曲して立つ	外　反	3C	85・90・91
		D．体部中央まで外傾して立ち、中央から段まで内弯ぎみに立つ	外　反	3D	87
	体部下半破片	92・241・242・243・0－38・0－39・4－2・12—42			

23点あり、7類に分類された。頸部無段のもの3点・有段のもの10点の他に、体部と口縁部の境（頸部）が沈線で区画されるものが2点ある。器形的には類似性が強い。

器面調整は、体部外面はヘラミガキによるものが多いが、ハケメ調整されただけのものや、ハケメ調整の後部分的ナデやヘラミガキされるものもある。体部内面もヘラミガキによるものがほとんどであるが、希にヘラナデやナデ調整だけのものがある。口縁部は内外面ともヨコナデによるものが一般的であるが、内面や内外面ともヘラミガキ調整されるものもある。

8．甑小型

12点あり、9類に分類された。頸部無段のもの5点と有段のもの6点がある。個体差がやや著しいので、出土点数に比して分類数が多くなった。

器面調整は、体部外面がハケメ調整によるものと、ナデ調整によるものが約半々ぐらいあり、体部内面調整はヘラナデが主体となっているが、ナデにより調整されるものもある。口縁部の内外面は、ヨコナデにより調整されている。

第63表　甑小型分類表

器種	体部と口縁部の境の形状	孔部から口縁にかけての立ち上がりの状況	口縁部の形状	孔部の形状	分類	遺物番号
甑小型	1．無段	A．強く弯曲して立つ	軽く外反	無底単孔	1A	93
		B．直線的に立つ	軽く外傾	有底単孔	1B	96
		C．弯曲して立つ	外反	有底多孔	1C	18－3
		D．粗製・異形のもの	外傾・外反	無底単孔	1D	94・95
	2．有段	A．強く弯曲して立つ	外傾	a．無底単孔	2Aa	98
				b．無底多孔	2Ab	103
		B．直線的に立つ	外反	a．無底単孔	2Ba	97
				b．有底多孔	2Bb	101・102
		C．2A類に類似するが体部が長いもの	外反	無底単孔	2C	99
	体部下半破片					100

9．坏小型

第64表　坏小型分類表

器種	底部の形状	底部と体部から口縁部との境の形状	口縁部の形状	口縁部幅または口縁端部の形状	分類	遺物番号
坏小型	1．平底	無段	A．内弯	――	1A	127
			B．外反	――	1B	128・129・130
	2．丸底	内外面とも無段	A．内弯	――	2A	0－1・0－2・0－4・0－5 1－1・1－2・12－7・12－17
			B．外傾	――	2B	131・132・134・0－3 3－1・12－8・12－13・32－1
	3．丸底	外面のみ有段	内弯	――	3	135・136・137・138・139・140 141・0－6・12－9
	4．丸底	内外面とも有段	A．内弯	a．幅広い	4Aa	161・3－2・3－3・31－2
				b．幅狭い	4Ab	12－5・12－14
			B．内傾	幅狭い	4B	199
			C．直立	a．幅広い	4Ca	193・17－1
				b．幅狭い	4Cb	194・195・196・197・198・200 5－6
			D．外傾	幅狭い	4D	179・181・186・12－15
			E．外反	a．端部内弯	4Ea	148・176・189・190・191・192 0－12・0－13・0－14・5－4 7－7・12－1・12－6・12－10 12－18・12－19
				b．端部外反	4Ed	142・143・144・145・146・149 150・151・152・153・154・155 156・157・158・159・160・162 163・164・165・166・167・168 169・170・171・172・173・174 175・177・178・180・182・183 184・185・187・188・246 0－7・0－9・0－10・0－11 0－15・4－1・5－3・5－5 7－6・12－2・12－4・17－2 19－1・19－3・22－1・32－2 33－1
				c．端部外反し内面に稜	4Ec	201・0－8

124点あり、14類に分類された。平底のものもあるが4点と極めて少なく、丸底が主体となっている。丸底のものには、内外面とも口縁部と底部の境が無段のものと、外面のみに段のあるもの、内外面とも有段のものとがあるが、栗囲式坏の特徴となっている内外面とも段のあるものが圧倒的に多い。さらにこのなかにあっては、口縁部が段から口縁部端部に至るまで外反しているものが、58点と全体の½近くを占めている。

器面調整は、平底の坏は底部から口縁にかけて外面がナデ調整、内面がヘラナデ調整、口縁部がヨコナデ調整される。内面黒色処理されたものはない。丸底の坏の基本的な調整は、外面底部がヘラケズリ、段から口縁部がヨコナデ調整され、内面は丁寧にヘラミガキされた後黒色処理されている。例外としては、外面の底部や口縁部をヘラミガキ調整したものや、逆に内面にヘラミガキを加えないもの、内面黒色処理をしないものが少数ある。

10．坏大型

第65表　坏大型分類表

器種	分類の基準	分類	遺物番号
坏大型	1．坏小型2A類に類似するもの	1	0－17
	2．坏小型4Ea類に類似するもの	2	5－2・12－6
	3．坏小型4Eb類に類似するもの	3	147・0－16・1－3・5－1・10－1・12－3・19－2・51－1

11点あり、3類に分類された。分類は坏小型に準じ、このうち2A・4Ea・4Ebに相当するものがある。器面調整も坏の基本と同様であるが、1点だけ外面底部にハケメ調整痕のみをもつものがある。

11．蓋Ⅰ類

第66表　蓋Ⅰ類分類表

器種	蓋部の形状	つまみ	分類	遺物番号
蓋Ⅰ類	浅い円錐形を示す	短かい円筒状	——	211・212・7－8

現在まで3点出土しているが、器形はほぼ同形で細分はできなかった。器面調整は、端部内外面がヨコナデ調整、外面の他の部分はヘラケズリ調整によるもの、ハケメ調整によるもの、ナデ調整によるものと各様である。内面も、ヘラナデによるものとヘラミガキ、ヘラケズリによるもの等、各様である。

12．蓋Ⅱ類

第67表　蓋Ⅱ類分類表

器　種	蓋　部　の　形　状	つ　ま　み	分類	遺　物　番　号
蓋Ⅱ類	坏を伏せたような、浅い半球形を呈す	な　し	——	133

現在まで、蓋Ⅱ類と確実に認定できるものは１点だけである。器面調整は、外面がヘラケズリ後ヘラミガキ調整、内面が丁寧なヘラミガキ調整されている。内面黒色処理はなされていない。

13．埦

第68表　埦分類表

器　種	底部の形状	底部と体部から口縁部との境の形状	口縁部の形状	分類	遺　物　番　号
埦	1　丸　底	内外面とも有段	口縁幅が広く内弯する	1	203
	2　丸　底	内外面とも有段	口縁幅が狭く内傾する	2	202

２点あり、器形が異なり、２類に分類した。双方とも坏に類似した器面調整が行なわれているが、内面は黒色処理されていない。

14．高　　坏

第69表　高坏分類表

器　種	部　位	各　部　の　形　状	分類	遺　物　番　号
高　坏	脚　部	1．脚裾部縦断面の内側が半円形を呈す	1	208・0—23・11—1 12—11・12—12・31—1
		2．脚裾部縦断面の内側が三角形を呈す	2	204・207・0—19・12—20
		3．脚裾部縦断面の内側が台形を呈す	3	0—18・2—1
	坏　部	A．底面部と口縁部の境に段を有し、口縁部が外反	A	204・206
		B．底面部と口縁部の境に段を有し、口縁は外反後内弯	B	205・12—20
	全　体	脚部２と坏部Ａとの複合	2 A	204
		脚部２と坏部Ｂとの複合	2 B	12—20

脚部から坏部まで全体のわかるもの２点・坏部片２点・脚裾部片10点、坏部と脚裾部の中間（脚筒部）の破片５点の計19点がある。高坏は完形品が少ないため、坏部と脚部を別々に分類し、全体のわかるものはその組み合わせによって分類した。坏部は坏小型と器形・調整とも類似する。脚部は太めで短かいもので、裾部は扇状または端部の広がる台状を呈するものである。台状を呈するもののなかには、楕円形の透孔が１つ穿たれたものも１点ある。脚部の調整はヘラケズリまたはナデによってなされ、端部はヨコナデ調整されている。

15．片口土器

2点出土している。1点は小破片であるため器形は不明である。他の1点（№212）は、半球形の体部と口縁部の境には段を有する。体部外面はハケメ、内面はヘラナデ調整される。口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。

③　細分土師器の住居跡床面における共伴状況

細分した土師器の共伴状況を、住居跡別にまとめたのが第70表である。共伴状況の検討に際しては、2号性格不明遺構出土土師器も一括遺物として、住居跡床面出土のものと同様に取り扱った。住居跡床面出土及び2号性格不明遺構から出土した土師器の総数は約200点で、出土土師器全体の約半数にあたる。40軒の住居跡のうち、11軒の住居跡床面上には、復元できる資料が残存しておらず、共伴状況検討の資料とならなかった。また、出土個体数の少ない住居跡もある。

以下、第70表をもとに、栗遺跡出土土師器の共伴状況について検討する。

なお、これ以後の文章及び表・図においては、昭和49・50年調査の住居跡は番号に○を付して（①号～⑱号住居跡）と表わし、昭和56年調査の住居跡は（1～23号住居跡）と表して、両者を区別することにする。

まず、各住居跡内での細分各器種の共伴状況をみると、第71表のようになる。住居跡内では、各器種のうち何類かが共伴する場合があり、それが大形器種の場合は頸部が有段のものと無段のものとが共伴する例もある。坏の場合は、その出土点数が多い住居跡においては、何類かの別形態を呈するものが共伴することが多く、単一の形態で構成される例は少ない。

第71表　住居跡内における器種別共伴状況

器　種	住居№	時期	共　伴　状　況
甕Ⅰ小型	⑨	Ⅲb	2Aa＝2Ac (11)　(19)
	⑩	Ⅰ	1Aa＝1B (7.8)　(6)
	17	Ⅲa	2Aa＝2B (17－3)　(17－5)
甕Ⅱ大型	③	Ⅱ	1B＝2A (28)　(46)
	⑨	Ⅲb	2A＝2B (68)　(56)
	19	Ⅱ	2B＝2C (19－12・19－13)　(19－11)
甕Ⅱ小型	②	Ⅲa	2C＝2D (62)　(64)
	⑧	Ⅲa	2D＝2E (54)　(60)
	19	Ⅱ	1C＝1D＝2C (19－9)　(19－5)　(19－10)
鉢　Ⅰ	⑪	Ⅲb	2A＝2Bb (121)　(126)
鉢　Ⅱ	22	Ⅱ	1A＝2C (22－3)　(22－4)
坏小型	⑥	Ⅲa	1B＝4Cb (130)　(197・198)
	⑧	Ⅲa	1B＝4Cb (128)　(194)
	⑨	Ⅲb	2B＝3＝4Eb (131)　(141)　(172・180)
	⑩	Ⅰ	4Ea＝4Eb (189)　(162・182)
	⑮	Ⅲb	3＝4D (137)　(181)
	⑯	Ⅲa	4Cb＝4Ea＝4Eb (200)　(148)　(149・184)
	⑱	?	1B＝4Eb (129)　(177)
	3	Ⅲb	2B＝4Aa (3－1)　(3－2・3－3)
	12	Ⅲb	2A＝2B＝4Ab＝4D＝4Ea (12－17)　(12－13)　(12－14)　(12－15)　(12－18)
	17	Ⅲa	4Ca＝4Eb (17－1)　(17－2)
	SX2	Ⅱ	2B＝4Eb (32－1)　(32－2)

（　）内は遺物番号

第70表　栗遺跡出土土師器器種別・遺構別分類集計表（遺構は床面出土資料のみ）

調査年次	住居跡番号	時期	甕Ⅰ類大型				甕Ⅰ類小型									
			1	2		他	1				2					他
			1Aa	2Ab	2Bc		1Aa	1Ab	1B	1C	2Aa	2Ab	2Ac	2Ad	2B	
昭和49・50年	①	Ⅱ					9									22
	②	Ⅲa									14					
	③	Ⅱ														
	④	Ⅱ									13					
	⑤	Ⅱ				236										
	⑥	Ⅲa														
	⑦	Ⅱ										18				
	⑧	Ⅲa									15					
	⑨	Ⅲb		20							11		19			
	⑩	Ⅰ					7 8		6							
	⑪	Ⅲb														
	⑫	?														
	⑬	Ⅱ														
	⑭	Ⅰ						10								
	⑮	Ⅲb														
	⑯	Ⅲa									16					
	⑰	Ⅲb														
	⑱	?														
昭和56年	1	Ⅱ														
	2	?									2-3					
	3	Ⅲb														
	4	?														
	5	?														
	6	?														
	7	Ⅱ														
	8	?														
	9	欠番														
	10	?														
	11	?														
	12	Ⅲb														
	13	?														
	14	?														
	15	?														
	16	?														
	17	Ⅲa			17-6						17-3				17-5	
	18	Ⅱ														
	19	Ⅱ														
	20	Ⅱ														
	21	?														
	22	Ⅱ														
	23	?														
	SX2	Ⅱ	32-5							32-4						
昭和49・50、56年	表土・遺構内堆積土中										12 21 3-5 12-39			17		231 233 234 235 237 238 239 240 12-38 12-40 19-8
計			1	1	1	1	3	1	1	1	11	1	1	1	1	12

調査年次	住居跡番号	時期	甕Ⅱ類大型										甕Ⅱ類小型												
			1					2					1						2						底部
			1Aa	1Ab	1B	1C	他	2A	2B	2C	2D	他	1A	1B	1C	1D	1E	他	2A	2B	2C	2D	2E	他	
昭和49・50年	①	Ⅱ						37																	
	②	Ⅲa						38													62	64		70	
	③	Ⅱ			28			46																	
	④	Ⅱ						39															67		229
	⑤	Ⅱ																		57					
	⑥	Ⅲa							49												66				
	⑦	Ⅱ						45																	
	⑧	Ⅲa																				54	60		
	⑨	Ⅲb						68	56													63			
	⑩	Ⅰ															33								
	⑪	Ⅲb																				71			
	⑫	?										80													
	⑬	Ⅱ								52														74	
	⑭	Ⅰ	34															25 36							
	⑮	Ⅲb										79												75	
	⑯	Ⅲa							50																
	⑰	Ⅲb																							
	⑱	?																		77					
昭和56年	1	Ⅱ							1-4																
	2	?																							
	3	Ⅲb																							
	4	?																							
	5	?																							
	6	?																							
	7	Ⅱ																						7-3	
	8	?																							
	9	欠番																							
	10	?																							
	11	?																							
	12	Ⅲb							12-37																
	13	?																							
	14	?																							
	15	?																							
	16	?																							
	17	Ⅲa																							
	18	Ⅱ																						18-4	
	19	Ⅱ							19-12 19-13 19-14	19-11					19-9	19-15					19-10			19-7	19-6
	20	Ⅱ																20-1							
	21	?																							
	22	Ⅱ																							
	23	?																							
	SX2	Ⅱ																							
昭和49・50、56年	表土・遺構内堆積土中		23 31	12-31 12-35	24 26 27 32	29 30	7-5	41 47 51 69 12-32	40 42 48		12-36		7-4	5-8	31-3			35 0-25 0-26 0-30 0-33 0-34 2-2 5-9	43	58 59 3-4 12-29	12-27 12-30	53 61 0-28		44 55 65 72 73 76 78 0-27 0-29 0-31 0-32 0-35 4-3 4-5 4-6 12-24 12-28 12-33 20-3 23-1	224 225 226 227 228 230 232 0-36 0-37 4-4 5-10 12-34 20-2
計			3	2	5	2	1	11	11	2	1	2	1	1	2	1	1	11	1	6	5	7	2	26	15

調査年次	住居跡番号	時期	鉢Ⅰ類							鉢Ⅱ類								甑大型							
			1				2			1				2					2		3				他
			1A	1Ba	1Bb	1Bc	2A	2Ba	2Bc	1A	1B	1C	1D	2A	2B	2C	2D	1A	2A	2B	3A	3B	3C	3D	
昭和49・50年	①	Ⅱ																							
	②	Ⅲa																					85		
	③	Ⅱ															118	82							
	④	Ⅱ																							
	⑤	Ⅱ				123										114									
	⑥	Ⅲa																							92
	⑦	Ⅱ																							
	⑧	Ⅲa													112										
	⑨	Ⅲb						124							117							86			
	⑩	Ⅰ																81							
	⑪	Ⅲb					121		126																
	⑫	?													111										
	⑬	Ⅱ									104														
	⑭	Ⅰ																							
	⑮	Ⅲb																							
	⑯	Ⅲa																							242
	⑰	Ⅲb													116										
	⑱	?												120											
昭和56年	1	Ⅱ																							
	2	?																							
	3	Ⅲb																							
	4	?																							
	5	?																							
	6	?																							
	7	Ⅱ		7-2															7-1						
	8	?																							
	9	欠番																							
	10	?																							
	11	?																							
	12	Ⅲb																							
	13	?																							
	14	?																							
	15	?																							
	16	?																							
	17	Ⅲa														17-4									
	18	Ⅱ			18-2																				
	19	Ⅱ	19-4									19-5										19-16			
	20	Ⅱ														20-4									
	21	?																							
	22	Ⅱ								22-3						22-4									
	23	?																							
	SX2	Ⅱ													32-3										
昭和49・50、56年	表土・遺構内堆積土中			122	0-24	125			21-1	105 12-22	106 108	10 109 5-7 12-21 12-23 12-25	12-26	119	110 113	115 18-1 22-2				83 12-41	88 89	84 8-1	90 91	87	241 243 0-38 0-39 4-2 12-42
計			1	2	2	2	1	1*	2	3	3	7	1	2	7	7	1	2	1	2	2	4	3	1	8

調査年次	住居跡番号	時期	甑小型										坏小型													
			1				2					他	1		2		3	4								
			1A	1B	1C	1D	2Aa	2Ab	2Ba	2Bb	2C		1A	1B	2A	2B		4Aa	4Ab	4B	4Ca	4Cb	4D	4Ea	4Eb	4Ec
昭和49・50年	①	Ⅱ																							153 155	
	②	Ⅲa																								
	③	Ⅱ																								
	④	Ⅱ				95																			144 152	
	⑤	Ⅱ	93																						156 183	
	⑥	Ⅲa												130								197 198				
	⑦	Ⅱ																							188	
	⑧	Ⅲa					98							128								194				
	⑨	Ⅲb										100				131	141								172 180	
	⑩	Ⅰ																						189	162 182	
	⑪	Ⅲb																								
	⑫	?																							154	
	⑬	Ⅱ																						176		
	⑭	Ⅰ				94																			159	
	⑮	Ⅲb															137						181			
	⑯	Ⅲa																				200		148	149 184	
	⑰	Ⅲb																						192		
	⑱	?												129											177	
昭和56年	1	Ⅱ													1-1											
	2	?																								
	3	Ⅲb														3-1		3-2 3-3								
	4	?																								
	5	?																								
	6	?																								
	7	Ⅱ																								
	8	?																								
	9	欠番																								
	10	?																								
	11	?																								
	12	Ⅲb													12-17	12-13			12-14				12-15	12-18		
	13	?																								
	14	?																								
	15	?																								
	16	?																								
	17	Ⅲa																			17-1				17-2	
	18	Ⅱ			18-3																					
	19	Ⅱ																							19-1 19-3	
	20	Ⅱ																								
	21	?																								
	22	Ⅱ																							22-1	
	23	?																								
	SX2	Ⅱ														32-1									32-2	
昭和49・50、56年	表土・遺構内堆積土中			96				103	97	101 102	99		127		0-1 0-2 0-4 0-5 1-2 12-7	132 134 0-3 12-8	135 136 138 139 140 0-6 12-9	161 31-2	12-5	199	193	195 196 5-6	179 186	190 191 0-12 0-13 0-14 5-4 7-7 12-1 12-6 12-10 12-19	142 143 145 146 150 151 157 158 160 163 164 165 166 167 168 169 170 171 173 174 175 178 185 187 246 0-7 0-9 0-10 0-11 0-15 4-1 5-3 5-5 7-6 12-2 12-4 33-1	201 0-8
計			1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	3	8	8	9	4	2	1	2	7	4	16	58	2

調査年次	住居跡番号	時期	坏大型			蓋Ⅰ類	蓋Ⅱ類	埦		高坏					片口土器	計
			1	2	3			1	2	脚部			坏部			
										1	2	3	A	B		
昭和49・50年	①	Ⅱ														5
	②	Ⅲa									204		204			7
	③	Ⅱ														4
	④	Ⅱ														7
	⑤	Ⅱ														7
	⑥	Ⅲa						203								7
	⑦	Ⅱ														3
	⑧	Ⅲa														7
	⑨	Ⅲb														14
	⑩	Ⅰ														8
	⑪	Ⅲb												205		4
	⑫	?														3
	⑬	Ⅱ														4
	⑭	Ⅰ														6
	⑮	Ⅲb														4
	⑯	Ⅲa														7
	⑰	Ⅲb													213	3
	⑱	?														4
昭和56年	1	Ⅱ														2
	2	?														1
	3	Ⅲb														3
	4	?														0
	5	?														0
	6	?														0
	7	Ⅱ														3
	8	?														0
	9	欠番														
	10	?			10-1											1
	11	?														0
	12	Ⅲb		12-16							12-20			12-20		8
	13	?														0
	14	?														0
	15	?														0
	16	?														0
	17	Ⅲa														6
	18	Ⅱ														3
	19	Ⅱ														14
	20	Ⅱ														2
	21	?														0
	22	Ⅱ														3
	23	?														0
	SX2	Ⅱ														5
昭和49・50、56年	表土・遺構内堆積土中		0-17	5-2	147 0-16 1-3 5-1 12-3 19-2 51-1	211 212 7-8	133		202	208 0-23 11-1 12-11 12-12 31-1	207 0-19	0-18 2-1	206		41-1	236
計			1	2	8	3	1	1	1	6	4	2	2	2	2	391

第72表　複数の住居跡から出土した細分各器種

調査年次	住居跡番号	時期	甕Ⅰ小型 1Aa	甕Ⅰ小型 2A	甕Ⅱ大型 2A	甕Ⅱ大型 2B	甕Ⅱ大型 2C	甕Ⅱ小型 2C	甕Ⅱ小型 2D	甕Ⅱ小型 2E	鉢Ⅱ 2B	鉢Ⅱ 2C	甑大型 1A	甑大型 3B	甑小型 1D	坏小型 1B	坏小型 2A	坏小型 2B	坏小型 3	坏小型 4Cb	坏小型 4D	坏小型 4Ea	坏型 4Eb	高坏 2	高坏 B
昭和49・50年	①	Ⅱ	●		●																		●		
	②	Ⅲa		●	●			●	●															●	
	③	Ⅱ			●								●												
	④	Ⅱ		●	●					●					●								●		
	⑤	Ⅱ										●											●		
	⑥	Ⅲa				●		●								●				●					
	⑦	Ⅱ			●																		●		
	⑧	Ⅲa		●					●	●	●					●				●		●			
	⑨	Ⅲb		●	●	●			●		●		●	●				●	●				●		
	⑩	Ⅰ	●																			●	●		
	⑪	Ⅲb							●																●
	⑫	?									●												●		
	⑬	Ⅱ					●																		
	⑭	Ⅰ													●								●		
	⑮	Ⅲb																	●		●				
	⑯	Ⅲa		●		●														●		●	●		
	⑰	Ⅲb									●											●			
	⑱	?														●							●		
昭和56年	1	Ⅱ				●											●								
	2	?		●																					
	3	Ⅲb																●							
	4	?																							
	5	?																							
	6	?																							
	7	Ⅱ																							
	8	?																							
	9	欠番																							
	10	?																							
	11	?																							
	12	Ⅲb				●											●	●			●	●		●	●
	13	?																							
	14	?																							
	15	?																							
	16	?																							
	17	Ⅲa		●								●											●		
	18	Ⅱ																							
	19	Ⅱ				●	●	●						●									●		
	20	Ⅱ										●													
	21	?																							
	22	Ⅱ										●													
	23	?																							
	SX2	Ⅱ	●								●							●					●		
計			3	7	6	6	2	3	4	2	5	4	2	2	2	3	2	4	2	3	2	5	13	2	2

細分各器種のうち、複数の住居跡から出土するものには第72表に示したとおり23類ある。この表で、同一分類の土師器を出土する住居跡間には、相互に時期的な関係があると考えられる。また他方で、全体的な出土量とともに出土する住居跡も多い細分各器種、例えば坏小型4Eb類のようなものは、「栗囲式」の代表的、普遍的器形として位置付けることもできる。

上記のことを踏まえ、第70表をもとに各住居跡（SX2を含む）の土師器の共伴状況を全体的に検討し、類型化を行うと次のようになる。

1．大型器種（甕類・鉢類・甑類）について、栗囲式の特徴で、前型式には認められない頸部の段に着眼点をおいて類型化すると、

Ⅰ＝大型器種は頸部に段をもたない（無段）のものだけによって構成される住居跡（⑩・⑭号住居跡）

Ⅱ＝大型器種は頸部に段をもたないものと、段をもつ（有段）ものの両者で構成される住居跡（①・③・④・⑤・⑬・7・18・19・20・22号住居跡及びSX2）

Ⅲ＝大型器種は頸部に段をもつものだけによって構成される住居跡（②・⑥・⑦・⑧・⑨・⑪・⑫・⑮・⑯・⑰・⑱・1・12・17号住居跡）

となり、3つに区分される。Ⅱの大型器種が無段と有段で構成されるグループでの無段と有段との合計比率は16：25で、約1：1.6となり、2～3点に1点は無段のものが含まれることになる。（第73表参照）この点を考慮すれば、Ⅲに分類された住居跡のうち、頸部の段の有無を検討できる資料が1点（ないし2点）の住居跡（例えば、18号住居跡に切られている1号住居跡）等は、本来Ⅱに分類されるべきものである可能性もある。

2．次に大形器種による類型化を前提として、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに共伴する坏小型について検討する。まず、Ⅰ・Ⅱに分類され、頸部に段をもたない大形器種を含む住居跡から出土する坏は、第73表に示したとおり、14類に細分された坏のうち2B（1点）と4Ea（2点）・4Eb（13点）の3類だけであり、そのなかで特に4Eb類が主体となっていることがわかる。

これに対し、頸部が有段の大形器種だけを出土する住居跡（Ⅲ）に共伴する坏は、第74表に示したとおり、バラエティーに豊み、Ⅰ・Ⅱに分類された住居跡では主体となっていた4Eb・

第73表　頸部無段土師器大形器種出土住居跡とその共伴土師器坏小型

住居跡番号	※ 無段	※ 有段	1A	1B	2A	2B	3	4Aa	4Ab	4B	4Ca	4Cb	4D	4Ea	4Eb	4Ec
①	1	1													153 155	
③	2	2														
④	1	3													144 152	
⑤	2	2													156 183	
⑩	5	0												189	162 182	
⑬	1	2												176		
⑭	5	0													159	
7	1	2														
18	1	2														
19	4	7													19—1 19—3	
20	1	1														
22	1	1													22—1	
SX2	1	2				32—1									32—2	
計			0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	13	0
全実測個体数			1	3	8	8	9	4	2	1	2	7	4	15	58	2
大形器種は無段だけの住居跡			⑩・⑭				大形器種に有段と無段のある住居跡					①・③・④・⑤・⑬・7・18・19・22・SX2				

※印　体部と口縁部の境（頸部）の段の有無を検討できる大形器種の出土点数

4Ea類の割合は約⅓に下がっている。Ⅲに分類された住居跡のなかには⑥号・⑧号・⑮号・⑱号のように、4Eb・4Ea類以外の形態の坏だけで構成される住居跡もあり、Ⅰ・ⅡとⅢとでは、共伴する坏の様相は異なったものとなっている。

第74表　頸部有段土師器大形器種だけを出土する住居跡とその共伴土師器坏小型

住居跡番号	※	1A	1B	2A	2B	3	4Aa	4Ab	4B	4Ca	4Cb	4D	4Ea	4Eb	4Ec
②	6点														
⑥	2点		130								197 198				
⑦	1点													188	
⑧	5点		128								149				
⑨	8点				131	141								172 180	
⑪	3点														
⑫	2点													154	
⑮	2点					137						181			
⑯	2点										200		148	149 184	
⑰	2点												192		
⑱	1点		129												
1	1点			1－1											
12	1点			12－7	12－13			12－14				12－15	12－18		
17	4点									17－1				17－2	
計		0	3	2	2	2	0	1	0	1	4	2	3	7	0
全実測個体数		1	3	8	8	9	4	2	1	2	7	4	15	58	2

※印　体部と口縁部の境（頸部）の段の有無を検討できる大形器種の出土点数

第75表　坏小型２・３類と４類の共伴状況

住居跡番号	1		2		3	4								
	1A	1B	2A	2B		4Aa	4Ab	4B	4Ca	4Cb	4D	4Ea	4Eb	4Ec
⑨				131	141								172 180	
⑮					137						181			
1			1－1											
3				3－1		3－2 3－3								
12			12－17	12－13			12－14				12－15	12－18		
SX2				32－1									32－2	
計	0	0	2	4	2	2	1	0	0	0	2	1	3	0
全実測個体数	1	3	8	8	9	4	2	1	2	7	4	15	58	2

第76表　坏小型４Ｃ類と共伴する坏

住居跡番号	1		2		3	4								
	1A	1B	2A	2B		4Aa	4Ab	4B	4Ca	4Cb	4D	4Ea	4Eb	4Ec
⑥		130								197 198				
⑧		128								194				
⑯										200		148	149 184	
17									17－1				17－2	
計	0	2	0	0	0	0	0	0	1	4	0	1	3	0
全実測個体数	1	3	8	8	9	4	2	1	2	7	4	15	58	2

Ⅲに共伴する坏について、さらに細かく分析すると、第75表及び第76表に示したとおり、坏小型４Ｃ（4Ca・4Cb）類（内外面有段・口縁部直立）は、１Ｂ類・4Ea・4Eb類とは共伴するが、２（2A・2B）類・３類・4Aa類・4Ab類・4D類とは共伴しない傾向がある。このことからⅢに区分された住居跡は小型坏が4C（4Ca・4Cb）類と1B類及び4E（4Ea・4Eb）類で構成れることを第２の特徴とする類型（⑥・⑧・⑯・17号住居跡）と、小型坏が２（2A・2B）類・３類・4Aa類・4Ab類・4D類で構成されることを第２の特徴とする類型（⑨・⑮・１・３・12号住跡―なお、SX2は、坏小型2B類を１点共伴しているが、頸部有段の大形器種１点とともに無段の大形器種２点を共伴しているので、Ⅱに分類される。）とに細別できる。

仮に前者をⅢa、後者をⅢbとして分類する。両者をそれぞれに共伴する大形器種についてだけみると、第77表及び第78表に示したとおり、先に行った分類においては、両者の共通性が高いようで、特に甕Ⅰ類小型2Aa類や、甕Ⅱ大型2B類等の共存率が高い。

細分した土師器の共伴状況は、上記のとおり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb の４類に区分できる。これを各住居跡（SX２を含む）にあてはめてまとめてみると、第79表のような類型化ができる。

第77表　坏小型４Ｃ類出土住居跡とその共伴大形器種

住居跡番号	坏小型４Ｃ類に共伴する大形器種	坏４Ｃ類
⑥	甕Ⅱ大型２Ｂ(49)　甕Ⅱ小型２Ｃ(66)	４Ｃｂ　197・198
⑧	甕Ⅰ小型２Ａａ(15)　甕Ⅱ小型２Ｄ(54)　鉢Ⅱ２Ｂ(112)　甑小２Ａａ(98)	４Ｃｂ　194
⑯	甕Ⅰ小型２Ａａ(16)　甕Ⅱ大型２Ｂ(59)	４Ｃｂ　200
17	甕Ⅰ小型２Ａａ(17－３)２Ｅ(17－５)　鉢Ⅱ２Ｃ(17－４)	４Ｃａ　17－１

第78表　坏小型２・３類出土住居跡とその共伴大形器種

住居跡番号	坏小型２・３類に共伴する大形器種	坏類
⑨	甕Ⅰ大型２Ａｂ(20)　甕Ⅰ小型2Ａａ(11)　甕Ⅱ大型2A(68)　甕Ⅱ小型2D(63)　甑大3Ｂ(86) 2Ａｃ(19)　2Ｂ(56)　鉢Ⅰ２Ｂａ(124)　鉢Ⅱ2Ｂ(117)	2Ｂ・3　4Ｅｂ
⑮	甕Ⅱ大型２(79)　甕Ⅱ小型２(75)	3　4D
1	甕Ⅱ大型２Ｂ(１－４)	2A
3		3・4Ａａ
12	甕Ⅱ大型２Ｂ(12－37)	2A・2B　4Ａｂ・4D・4Ｅａ
ＳＸ２	甕Ⅰ大型１Ａａ(32－５)　甕Ⅰ小型１Ｃ(32－４)　鉢Ⅱ２Ｂ(32－３)	2B　4Ｅｂ

この表では、１号住居跡の土器はその重複関係において、18号住居跡より古く、頸部有段の大形器種も１点だけの共伴であり、かつ坏No１―１も2A類に分類したものの、内外面にわずかな段を認めることもできるのでⅡに分類した。②号住居跡の土器群は、そのうち甕Ⅱ類小型No62が、⑥号住居跡の甕Ⅱ類小型No66と極めて類似し、また、甕Ⅱ類の全体的な様相が似ていることからⅢａに分類した。⑦号住居跡の土師器群は、そのうち甕Ⅱ類大型No45が、①号住居跡甕Ⅱ類No37、19号住居跡甕Ⅱ類No19―12・No19―13に極めて類似することからⅡに分類した。

第79表　土師器共伴関係の類型化とその住居跡

区分	類型化の分類基準・特徴		住居跡番号
	大形器種	坏小型	
Ⅰ	頸部が無段のものだけで構成される	４Ｅｂ類を主体とし、希に４Ｅａ類を共伴する	⑩・⑭
Ⅱ	頸部が無段のものと有段のものとで構成される	４Ｅｂ類を主体とし、希に２Ｂ類を共伴する	①・③・④・⑤・⑬ １・７・18・19・20・22・ＳＸ２ (⑦)
Ⅲａ	頸部が有段のものだけで構成される	４Ｃ類を共伴することを特徴とし、この他に１Ｂ類・４Ｅａ類・４Ｅｂ類も共伴する	⑥・⑧・⑯ 17 (②)
Ⅲｂ	頸部が有段のものだけで構成される	２類・３類・４Ａ類・４Ｄ類を共伴することを特徴とし、この他に４Ｅａ類・４Ｅｂ類も共伴する	⑨・⑮ ３・12 (⑪・⑰)

⑪号住居跡は、Ⅲに分類されるが、この住居跡に共伴する高坏の坏部が、坏小型の4Aaに類似する特徴をもっていることから、Ⅲｂに分類した。⑰号住居跡は、Ⅲｂに分類された⑮号住居跡を切っていることから、Ⅲｂのなかに位置付けた。このほか、⑫・⑱・２４・５・６・８・・10・11・13・14・15・16・21・23号住居跡については、出土土師器が少量であるために、分類を行うのは困難である。

④　類型土師器群の時期的関係

栗遺跡出土土師器の共伴状況については、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲａ・Ⅲｂという類型化を行うことができた。この各類型は、栗遺跡、あるいは栗囲式期の土師器変遷と密接な関係にあると考えられる。そこで、各類型を栗囲式の前後の型式との関係、及び類型間の相互関係を検討し、各類型の土器群の時期的関係を分析することにしたい。

Ⅰ類型の土器群は、長胴甕を含む大型器種が頸部無段のものだけで構成され、これに共伴する坏は、丸底の底部と外反する口縁部の境に内外面とも段（括れ）を有するものであった。これらの土器群の特徴は、氏家和典氏の東北土師器の編年では、栗囲式（第五型式）の前型式とした住社式（第四型式）の標式遺跡である住社遺跡の竪穴住居跡出土土器に類似している。(註23) Ⅰ類型の土器群は、このことをもってすれば住社式として考えることもできるが、氏家和典氏は、住社式の坏の特徴を「口縁部と体部との接続部分が外側において稜線を形成する。」ものとし（註24)、栗遺跡Ⅰ類型の坏に類似する住社遺跡竪穴住居跡出土の坏の一部に関しては、「やや退化したもの」（註25）としている。このため、口縁部と体部との接続部分の外側に稜線を形成し、幅の広い直立する口縁部をもつ坏を伴わない栗遺跡Ⅰ類型の土器群を、住社式と

考えることは疑問がもたれる。そこで本書では、Ⅰ類型の土器群を坏形土器においては栗囲式の特徴をもち、大形器種については住社式の特徴をもつ、住社式から栗囲式への過渡的段階の土器群として報告しておく。

大形器種が頸部無段のものだけで形成されるⅠ類型の土器群を、住社式から栗囲式への過渡的段階のものであるとすれば、栗囲式の特徴である頸部に段をもつ大形器種（註26）が含まれるようになるⅡ・Ⅲa・Ⅲb類型の土器群は、Ⅰ類型の土器群に後続するものとして、時間差が考えられる。さらに、Ⅱ類型の土器群とⅢa・Ⅲb類型の土器群とでは、住社式的な頸部無の大形器種と栗囲式の頸部有段の大形器種とが共存している段階と、大形器種の全てが栗囲式の特徴である頸部に段をもつようになった段階という違いがある。この違いも栗囲式の変遷における時間差と考えられるものである。この考えに従うと、Ⅱ類型の土器群がⅢa・Ⅲb類型の土器群に先行することになる。

次に、Ⅲa類型とⅢb類型の土器群について検討してみたい。まずⅢa類型の土師器についてみると、Ⅲa類型の特徴である坏4Ca・4Cb類は、関東の土師器編年における鬼高式の後半期に位置付けられるものである。これに対し、Ⅲb類型の土器群のうち、3・4Aa・4Ab・4D類に分類された坏は、国分寺下層式第1類（註27）に近いものである。またこれに類似する坏に伴って、関東の編年における鬼高式末から真間式の土師器が伴出する例が近隣遺跡をはじめとする県内数遺跡で報告されている（註28）ので、真間期に近い時期と考えられる。このことから、Ⅲ類型のaとbについては、Ⅲa類型の土器群がⅢb類型の土器群に先行するという前後関係が考えられる。

以上のようにⅠ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb類型の土器群の検討を行なった結果、各類型は、時間差によるものと考えられ、古い方から順にⅠ期・Ⅱ期・Ⅲa期・Ⅲb期の4時期からなる栗遺跡出土土器群の変遷過程として結論付けられる。（註　Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期は前の報告書のⅠ・Ⅱ・Ⅲと同様である）

なお、各期の型式的な位置付けについては、Ⅱ期からⅢb期までの土器群を栗囲式とし、Ⅰ期の土器群については、先に述べたように、住社式から栗囲式への過渡的段階のものとして位置付けるだけとし、明確な区分については今後の資料の増加と、議論に待ちたい。

住居跡での共伴状況を基本として、Ⅰ期からⅢb期まで4期に分類した土器群については、第108図から第119図に図示した。また、それ以外の土師器についてな、器種ごとの分類に従って第119図から第133図に示し、時期別の図とともに栗遺跡出土土師器集成図となるようにした。紙面の都合上、集成図のスケールは全て1/5に統一してある。

3)　土師器の年代

栗遺跡の土師器はすでに述べたとおり、住社式から栗囲式に移行する時期から、国分寺下層式に近い時期の土器群まで4段階に分けて考えることができた。ここでは、その年代について考えることにしたい。

栗囲式の年代については、氏家和典氏が型式設定した際には明記されていなかった。(註29) その後同氏は、栗囲式と対馬式の間に国分寺下層式を設定され、その年代については8世紀後半を中心とする時期とした。(註30) しかし、栗囲式の土師器の年代については、奈良時代に下るものではなく、7世紀後半から8世紀初頭頃と一般に考えられていたため、8世紀後半を中心とする国分寺下層式と、下限が8世紀初頭を下らないと考えられる栗囲式との間に型式的に空白が生じた。そこで、氏家氏はこの空白を埋めるものとして、栗囲式Ⅱ類を新に設定し、その年代を奈良時代初期前後頃に置いたのであった。(註31)

だが、栗囲式Ⅱ類の型式的特徴に関しては、坏の形態について「外壁の段に対応して、内壁段面にくせのある曲線をもつ」(註32) という指摘があるだけであり、他器種を含む十分な説明がなされなかった。このため、栗囲式Ⅱ類については、栗囲式や国分寺下層式といった型式のようには一般化せず、氏家氏の指摘した坏に関して、そのまま栗囲式Ⅱ類として扱う研究者と拡大解釈して栗囲式、または国分寺下層式として扱う研究者があった。

さらに近年には、奈良時代全般(8世紀初頭から8世紀末)の土器を国分寺下層式ととらえる考えも提示されている。(註33)

国分寺下層式を奈良時代全般の土器とする考えに従えば、型式的関連性によって栗囲式の年代は、奈良時代以前の8世紀初頭が下限となる。この年代は、昭和49・50年調査分の報告書中に、筆者が宮城県刈田郡蔵王町塩沢北遺跡出土土器と、福島県郡山市麓山瓦窯跡出土須恵器によって考えた年代と一致する。(註34)

しかし最近になって、仙台市郡山遺跡や宮城県栗原郡志波姫町御駒堂遺跡(註35) の例のように、栗遺跡の分類でいう、坏4Ea・4Ebを共伴せずに、同分類の2・3・4A・4D類似する坏とともに、鬼高式末から真間式の土師器を出土する遺跡が調査・報告され、その年代については7世紀末から8世紀初頭とされているので、8世紀初頭をそのまま栗囲式の下限と考えることはできなくなっている。御駒堂遺跡の土器について小井川和夫氏は、8世紀中葉以前の土器を三段階に分け、その1段階の土器群を7世紀末から8世紀初頭に位置付けているが、この土器群には、栗囲式の特徴的坏である4Eb類は含まれず、2・3・4Aa類と関東系の土器が出土しているので、栗囲式のⅢb期より一時期新しいものと考えられる。また郡山遺跡の出土土器との関係もまた同様である。さらに郡山遺跡から出土している、内面にカエリのある須恵器の蓋や、体部外面に段を有し、底部が回転ヘラケズリ再調整される須恵器坏といった、7世紀

末から8世紀初頭にかけての特徴的な土器が、遺跡の性格の相違があるとはいえ、郡山遺跡に比較的近い栗遺跡から全く出土していないことも、両遺跡の土器群と、栗遺跡のⅢb期の土器群との間に年代差のあったことを示していると考えられる。したがって、栗遺跡Ⅲb期の土器群の年代については、7世紀末を下限年代と考えたい。

上限について前報告書においては、栗遺跡の遺構外単独出土の蓋坏（本調査で出土したNo70－7に類似するもの）を、幾内の編年におけるⅡ期後半に比定し、7世紀中葉項と考えた。（註36）、宮城県内においては、仙台市大蓮寺窯跡の調査によって、初期須恵器の生産が確認されている（註37）が、集落内で須恵器が一般化するのは8世紀以降のことで、それ以前に土師器と須恵器が共伴する例が少ない。このため、栗遺跡でも須恵器の出土量が極めて少なく、しかも出土品は小片であり、かつまた明確な共伴状況を示すものもない。年代的にもⅡ期のものばかりではなく、Ⅰ期のもの1点、Ⅳ期のもの2点が含まれるなど、必ずしも、同一時期のものばかりではない。しかし、敢えてⅡ期に比定される蓋坏の坏3点（昭和49・50年調査No 272・No274・本調査No70－7）、蓋坏の蓋2点（No70－5・No70－6）高坏脚部片1点（No70－11）を、栗遺跡に関係する資料としてとらえると、栗遺跡の土師器の上限年代を6世紀前半から7世紀前半のなかで位置付けることができる。（註38）この年代幅のなかでの栗遺跡出土土師器の位置は、先に述べたとおり、蓋坏の坏はⅡ期の後半期（TK209）類似であり、また、関東土師器編年において6世紀代とされる鬼高Ⅰ式（註39）に類似するものは、住社式のように含まれておらず、関東系の土器としては、Ⅲa期の坏4Ca類にみられるような鬼高Ⅱ式のものであることから、7世紀に入ってからのものと考えられる。

第106図　昭和49・50年出土須恵器

栗遺跡の土器群は4時期に分けられ、そのなかでもⅢb期の⑮号住居跡と⑰号住居跡との重複や、Ⅱ期の7号住居跡と19号住居跡の重複及び、12号住居跡と19号住居跡との重複といった関係があることを考えると、相当の年代幅があったと考える必要がある。とすれば、下限を7世紀末とした場合、上限は、7世紀の早い時期と考えることができるであろう。

なお、栗遺跡土器群の上限年代については、今後確実な年代決定資料の出土を待って再考の必要がある。

以上のように、栗遺跡出土土師器の年代については、上限を7世紀初め頃、下限を7世紀末と考えることが出来る。したがって、Ⅰ期からⅢb期までの位置付けも、この年代幅のなかで行なわれるものである。しかし、各時期の具体的な年代幅については、Ⅰ期が7世紀初め頃以降の時期、Ⅲb期が7世紀末以前の時期と考えられるだけで、Ⅱ期・Ⅲa期については、残念

ながら年代決定資料がないため、Ⅰ期とⅢb期の中間における前後の時期としか比定できない。

栗遺跡の各時期の土器群は、大きくみると、氏家和典氏の設定した「栗囲式」に包括される特徴を有するため、各土器群がこのまま細分型式に置き換えることが可能かどうかについては、今後の類例増加後の検討に待ちたい。また、細分型式と認められるような場合には、あらためて、型式の特徴についての詳細な検討が必要と考える。

5．祭祀遺物について

土師器以外の出土遺物のところですでに述べた通り、栗遺跡からも祭祀遺物と考えられるものが数種類出土している。本調査においては、円盤状土製品（鏡模造品）、各種土玉・小形手捏ね土器・滑石製玉類・小形土器等が出土し、前回の調査でもこれとほぼ同様の祭祀遺物が出土している。祭祀遺物の各個体数は、第80表のようになっている。

栗遺跡の祭祀遺物の特徴は、小形手捏ね土器の数が多いことにあり、祭祀遺物の約半数を占めている。また、土製模造鏡や土玉、小形土器といった土製品の祭祀遺物が多く全体の80％を超えている。これに対し石製品としては、滑石製玉類が5点出土しているだけであり、石製模造品類の祭祀遺物は完全に姿を消している。

祭祀遺物の出土地点に限定性はなく、住居跡の床面や堆積土中から出土するものが目立つ程度である。このため、祭祀遺物がどのような状態で使用されていたのか明らかでない。ただ、本調査5号住居跡第1カマド焼土面上から出土した2点の小型土玉は、カマド（火）に関係する祭祀が行われたことを想起させる。栗遺跡及び『栗囲式期』における祭祀の実体究明は今後の課題である。

第80表　栗遺跡出土祭祀遺物集計表

種別	分類	年次別出土個体数		小計	合計
		49・50年	56年		
土製模造鏡	単紐	1		1	2
	多紐		1	1	
土玉	丸玉　大型		1	1	16
	丸玉　中型		3	3	
	丸玉　小型		4	4	
	臼玉	1		1	
	管玉	3	3	6	
	勾玉	1		1	
滑石製玉	平玉	3	1	4	5
	丸玉		1	1	
小形手捏ね土器	1類	4	1	5	30
	2類		1	1	
	3類	4	14	18	
	4類	2	2	4	
	5類		2	2	
小形土器	壺形	5	4	9	9

6．石製品について

栗遺跡出土の石製品には、祭祀に関係する滑石製の玉の他に、実用品として紡錘車・砥石・磨り石がある。また用途不明のものとして輪状石製品がある。

石製紡錘車は本調査では出土しなかったが、これまでに3点（表面採集品1点、昭和49・50

年調査出土品２点）出土している。このうち形状のわかる２点は、截頭円錘形を呈する。２点のうち昭和49・50年調査12号住居跡から出土したものには、側面と底面にそれぞれ８単位と７単位の鋸歯文が線刻されている。紡錘車の材質は全て滑石である。栗遺跡から出土する紡錘車には、石製の他に土製のもの４点（表面採集品１点、昭和49・50年調査出土品１点、本調査出土品２点）があるが、両製品の出土点数には大差がない。

砥石には、自然石をそのまま利用したものと、面取りの加工を行ったものとがあり、それぞれ２点と３点の計５点が出土している。自然石を利用した砥石には、本調査の№76－２のように円盤状のものと、前回の調査で出土した棒状のもの（昭和49・50年出土№252）とがある。加工を行っている砥石には、分銅形を呈し頂端部に紐穴が穿孔されたもの１点（昭和49・50年出土№251）と、短冊形を呈するもの２点（昭和49・50年出土№253、本調査№76－３）がある。砥石のうち、№76－２と№76－３については、平滑な砥面とは別に細い溝状の摩痕が観察できるが、何を研いだためにこのような摩痕が生じたのか不明である。ただ、先端部の非常に尖った針状の製品であることは間違いないと思われる。

磨り石は、今回出土した球形のもの（№76－１）の他にも、昭和49・50年調査の９号住居跡床面より、同じような球形のもの１点（№255）と乳棒状のもの１点（№256）が出土している。古墳時代後期に至ってもなお、栗遺跡においては磨り石を何らかの道具として使用していたようである。

輪状石製品は、本調査において２点出土している。これについては他に出土例がないため実用的なものであったのか、または祭祀用であったのか判断できない。

以上のように、栗遺跡においては数は多くないが多種の石製品が道具として利用されている。また加工された石の他にカマド焚口の補強や支脚としても自然石が活用されるなど、当時の生活においても、石は利用価値の高い材料であったようである。

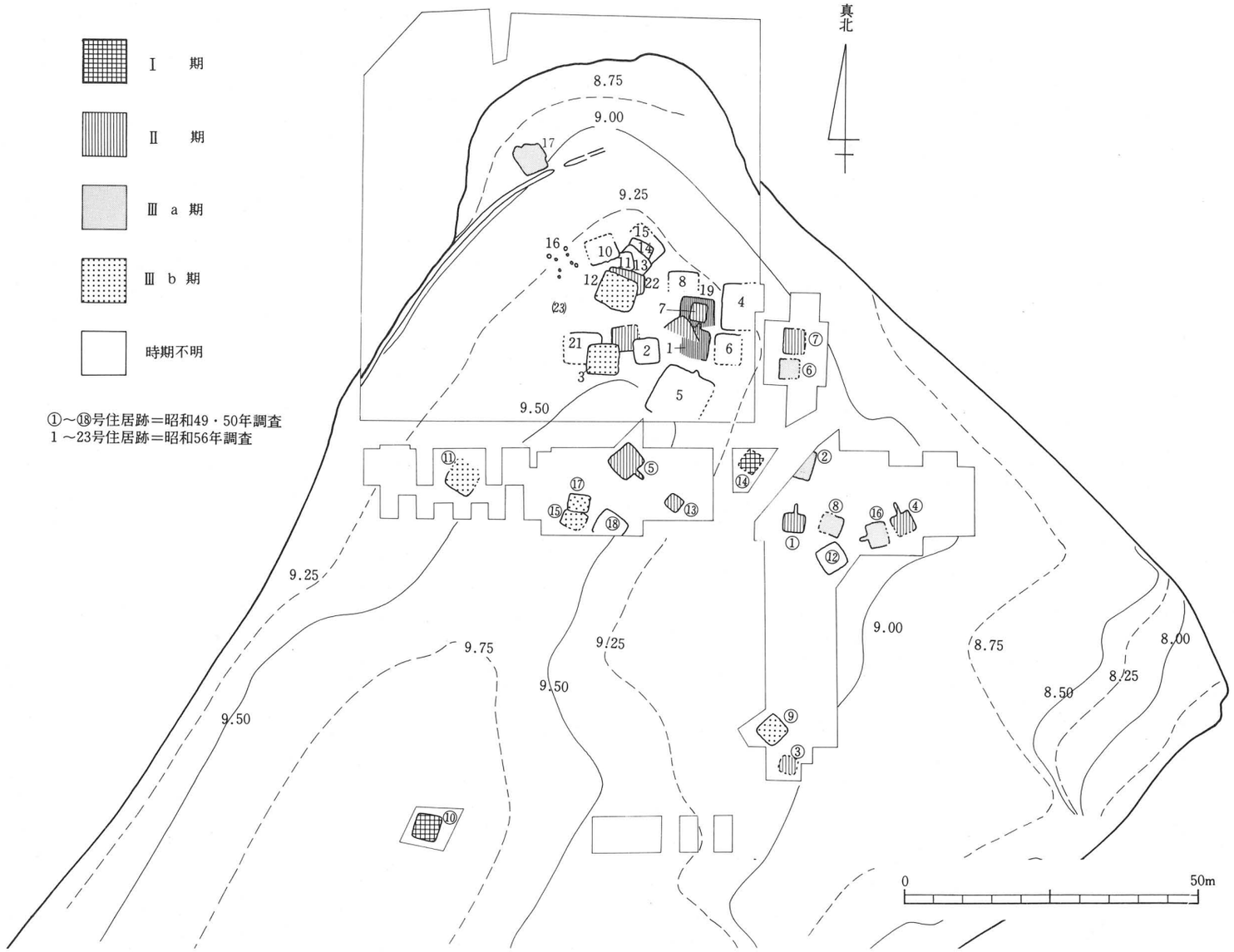
７．栗遺跡の集落構成

栗遺跡の住居跡は、その土器の共伴状況によって、４時期に区分することができた。ここでは、各時期の集落構成状況を概観する。

Ⅰ期からⅢb期までの住居跡の分布状況を時期別に示したのが、第107図である。

Ⅰ期は、40軒の住居跡中２軒だけある。両住居跡は遺跡の南寄りと北寄りに離れて分布している。住居跡の数からみて、初期の集落は、かなり小規模であったと推察される。

Ⅱ期は、12軒の住居跡があり、数的には多い。しかし、１・７・18・19号住居跡のように４軒の重複があり、しかも同時存在が考えられない住居跡も含まれているので、12軒の住居跡が全て同時に存在したのではなく、さらに細分化して考えられるものであろう。Ⅱ期の住居跡の



第107図　時期別集落構成図

分布は、遺跡の北東部に広がっているようである。

Ⅲa期は、５軒の住居跡がある。重複関係にあるものはなく、遺跡の北東縁辺付近に列状に並ぶようにして分布する。

Ⅲb期は、６軒の住居跡がある。⑮号住居跡と⑯号住居跡が重複関係にあるので、細分化される可能性もある。分布は、Ⅲa期の南西側に移行し、広く散在するようになる。

遺跡の全体的な住居跡分布状況については、遺跡南部の調査がほとんど行われていないために論述することはできない。しかし、これまでの調査状況や、遺物の散布状況から考えると、住居跡の分布は、栗遺跡の北部地域に集中する傾向がありそうである。

第81表　栗遺跡発見住居跡一覧表

住居跡番号	時期	規　模(m)	方　向	カマド・位　置	柱穴配置	その他
①	Ⅱ	3　× 2.7	N－19°－E	北壁中央	不　明	
②	Ⅲa	(5.0)×(3.2)	N－16°－E	不　明	不　明	
③	Ⅱ	――×――	不　明	不　明	不　明	
④	Ⅱ	3.9　× 3.3	N－21°－W	北壁中央	不　明	
⑤	Ⅱ	5.15 × 4.95	N－37°－W	北西壁中央	台形４本柱型Ⅱ類	(Ⅲ期)
⑥	Ⅲa	2.5　× 2.4	N－1°－W	北壁東寄り	不　明	
⑦	Ⅱ	3.7　×(3.5)	N－4°－W	北壁中央	不　明	
⑧	Ⅲa	3.2　×(1.18)	N－16°－E	(北壁中央)	不　明	
⑨	Ⅲb	5.3　× 5.7	N－32°－E	南壁東寄り	方形４本柱型	火災住居
⑩	Ⅰ	4.0　×(2.3)	N－23°－E	不　明	不　明	
⑪	Ⅲb	(3.9)× 5.4	N－28°－E	不　明	不　明	
⑫	?	4.5　× 4.4	N－15°－E	西壁中央	台形４本柱型Ⅱ類	火災住居
⑬	Ⅱ	3.05 × 2.7	N－37°－E	南壁中央	不　明	
⑭	Ⅰ	――×――	N－37°－E	北　壁	不　明	
⑮	Ⅲb	3.4　× 2.8	N－19°－E	不　明	不　明	
⑯	Ⅲa	3.9　× 3.4	N－27°－W	西　壁	不　明	
⑰	Ⅲb	3.0　× 4.0	N－12°－E	(西　壁)	不　明	
⑱	?	4.0　× 5.2	N－44°－E	(北壁中央)	不　明	
1	Ⅱ	(4.91)× 4.49	N－11°－E	北壁中央	方形４本柱型	
2	?	(5.0)× 4.55	N－4°－W	東壁中央	台形４本柱型Ⅱ類	
3	Ⅲb	(4.76)× 5.18	N－7°－W	不　明	方形４本柱型	火災住居
4	?	7.93 ×(3.16)	N－4°－W	不　明	台形多柱穴型	
5	?	8.62 ×(7.95)	N－24°－E	東壁中央	台形４本柱型Ⅰ類	
6	?	(2.96)×(4.45)	N－6°－E	不　明	不　明	
7	Ⅱ	3.8　× 3.26	N－15°－W	不　明	竪穴内無柱穴型	
8	?	(2.3)× 5.05	N－8°－W	北壁中央	方形４本柱型	
10	?	(3.75)×(4.84)	N－10°－W	不　明	不　明	火災住居
11	?	(3.04)×(3.54)	N－3°－W	不　明	不　明	
12	Ⅲb	5.36 × 6.16	N－15°－E	北壁中央	台形４本柱型Ⅰ類	
13	?	5.08 ×(3.76)	N－32°－W	不　明	不　明	
14	?	(5.50)×(4.11)	N－26°－E	不　明	不　明	
15	?	(4.47)×(3.85)	N－38°－W	不　明	不　明	
16	?	(4.12)×(4.45)	N－29°－W	不　明	方形４本柱型	
17	Ⅲa	5.22 × 5.50	N－32°－W	不　明	方形４本柱型	
18	Ⅱ	(6.1)×(1.5)	N－20°－W	東壁中央	不　明	
19	Ⅱ	(5.93)× 6.15	N－10°－E	北壁中央	台形多柱穴型	
20	Ⅱ	(5.20)× 3.70	N－2°－E	不　明	不　明	
21	?	(5.20)×(4.90)	N－5°－E	不　明	方形４本柱型	
22	Ⅱ	3.30 × 6.05	N－3°－E	不　明	不　明	
23	?	(3.85)×(3.80)	N-(34°)-E	不　明	方形４本柱型	

(　　)内は不確実または現存

註　記

註1　東北学院大学考古学研究部：「栗遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第14集 P.1～147 (1979) 仙台市教育委員会

註2　松木秀明：「仙台平野の沖積層と後氷期における海岸線の変化」『地理学評論』第52巻2号 P.72～85 (1981)

註3　仙台市教育委員会：「山田上ノ台遺跡－発掘調査概報－」『仙台市文化財調査報告書』第30集 P.1～65 (1981)

註4　仙台市教育委員会：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集 P.1～196 (1982)

註5　仙台市教育委員会：「埋もれた仙台の歴史」『仙台市文化財パンフレット』第1集 (1978)

註6　丹羽・柳田・阿部：「西野田遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅰ」『宮城県文化財調査報告書』第35集 P.18～166・307～337 (1974) 宮城県教育委員会

註7　宮城県教育委員会：「金剛寺貝塚・今熊野遺跡概報」『宮城県文化財調査報告書』第33集 P.1～46 (1973)

註8　岩渕・田中：「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集 P.1～68 (1976) 仙台市教育委員会

註9　伊東・伊藤・岩渕：「裏町古墳発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第7集 P.1～65 仙台市教育委員会

註10　宮城県教育委員会：「兜塚古墳－宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）」『宮城県文化財調査報告書』第53集 P.200～215

註11　古窯跡研究会：「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群』Ⅱ P.1～29 (1976)

註12　「国造本紀」に示されている国造の北限は、阿武隈川河口周辺とされている。

註13　氏家和典：「法領塚古墳調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第5集 P.1～15・図版1～19 (1972) 仙台市教育委員会

註14　註8に同様：P.58～59

註15　註8に同様：P.58～59

註16　土岐山　武：「安久東遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集 P.1～111 (1980)・宮城県教育委員会

註17　岩渕・田中：「宗禅寺横穴群発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第9集 P.1～88 (1976) 仙台市教育委員会

註18　田辺昭三：『陶邑古窯跡群』Ⅰ P.1～80・図版1～43 (1966) 平安学園考古学クラブ

註19　註1に同様：P.70～71

註20　氏家和典：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』十四輯 P.1～14 (1957)

東北史学会

註21　註20に同様　：P. 5 上段

註22　註20に同様　：P. 5 上段

註23　志間泰治　：「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第4号　P.43～51　(1958)　日本考古学会

註24　註20に同様　：P. 4 下段

註25　註20に同様　：P.11上段

註26　註20に同様　：P. 5 上段

註27　氏家和典　：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』P.77～88　(1967)

註28　このような遺跡としては、仙台市郡山遺跡ー南西外郭大溝出土土器群ー（仙台市教育委員会「郡山遺跡Ⅰ」『仙台市文化財調査報告書』第29集　1981）や、名取市清水遺跡ー第Ⅴ群土器ー（丹羽・小野寺・阿部「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書　Ⅴ』1981　宮城県教育委員会）：志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書　Ⅵ』1982　宮城県教育委員会）等が知られている。

註29　註20に同様

註30　註27に同様　：P.86下段

註31　伊東・氏家　：『善応寺横穴古墳群調査報告書』　P.1～33・図版1～37　(1968)　仙台市教育委員会

註32　註27に同様　：P.84下段

註33　小井川・手塚　：「糠塚遺跡ー宮城県文化財調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第53集　P.44～198　(1978)　宮城県教育委員会

註34　註1に同様　：P.93

註35　註28に同様

註36　註1に同様　：P.92

註37　註11に同様

註38　註18に同様

註39　杉原荘介他　：「後期の土師器」『土師式土器集成　本編』3　P.1～117・図版81～120　(1973)

参考文献

阿部　義平：「東国の土師器と須恵器ー多賀城外の出土土器をめぐってー」（1968）帝塚山考古学No.1

石田琢二他：『新編　仙台の地学』（1980）　地学団体研究会仙台支部編

石野　博信：「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究　家』（1975）社会思想社

梅宮　　茂：「郡山市麓山窯跡調査報告書」『福島県文化財調査報告書』第8集　（1960）福島県教育委員会

大場磐雄他：『平出ー長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究ー』（1950）平出遺跡調査会

岡田淳子他：『八王子中田遺跡ー古墳時代集落跡の調査ー資料編Ⅰ～Ⅲ』（1966～68）　八王子中田遺跡調査会

小川　淳一：「塩沢北遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第67集　宮城県教育委員会

奥津　春生：『大仙台圏の地盤・地下水』（1973）

木本　元治：「郡山市麓山瓦窯跡出土の須恵器」『しのぶ考古』5　（1975）

工藤　哲司：「八幡西遺跡発掘調査報告」『年報』1　（1980）　仙台市文化財調査報告書第23集　仙台市教育委員会

椙山林繼他：「小室　千葉県船橋市小室町白井先における古墳時代集落址の調査」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ（1974）　房総考古資料刊行会

玉川　一郎：『舞台ー福島県天栄村における古墳時代集落跡の調査ー』（1981）

玉口　時雄：「土師器とその集落」『日本考古学の現状と課題』（1974）

第82表　昭和49・50年出土遺物目録（1）

No	器形	分類	遺構	出土層位	図面No
1	土師器・小形土器			地山面	133
2	土師器・小形土器			地山面	133
3	土師器・小形土器			地山面	133
4	土師器・小形土器			—	133
5	土師器・小形土器		第14土壙	埋土	133
6	土師器・甕 Ⅰ小型	1B	10号住居跡	床面	108
7	土師器・甕 Ⅰ小型	1Aa	10号住居跡	床面	108
8	土師器・甕 Ⅰ小型	1Aa	10号住居跡	床面	108
9	土師器・甕 Ⅰ小型	1Aa	1号住居跡	床面	112
10	土師器・甕 Ⅰ小型	1Ab	14号住居跡	床面	108
11	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	9号住居跡	床面	119
12	土師器・甕 Ⅰ小型	2A		—	132
13	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	4号住居跡	床面	112
14	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	2号住居跡	床面	116
15	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	8号住居跡	床面	116
16	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	16号住居跡	床面	116
17	土師器・甕 Ⅰ小型	2D		—	132
18	土師器・甕 Ⅰ小型	2B	7号住居跡	床面	112
19	土師器・甕 Ⅰ小型	2C	9号住居跡	床面	119
20	土師器・甕 Ⅰ大型	2Ab	9号住居跡	床面	119
21	土師器・甕 Ⅰ小型	2A	18号住居跡	1層	132
22	土師器・甕 Ⅰ小型		1号住居跡	床面	113
23	土師器・甕 Ⅱ大型	1Aa		—	129
24	土師器・甕 Ⅱ大型	1B		—	130
25	土師器・甕 Ⅱ不明	1	14号住居跡	床面	108
26	土師器・甕 Ⅱ大型	1B		撹乱層	129
27	土師器・甕 Ⅱ大型	1B		撹乱層	129
28	土師器・甕 Ⅱ大型	1B	3号住居跡	床面	111
29	土師器・甕 Ⅱ大型	1C		表土	130
30	土師器・甕 Ⅱ大型	1C	18号住居跡	埋土	130
31	土師器・甕 Ⅱ大型	1Aa		表土	129
32	土師器・甕 Ⅱ大型	1B		—	130
33	土師器・甕 Ⅱ小型	1E	10号住居跡	床面	108
34	土師器・甕 Ⅱ大型	1Aa	14号住居跡	床面	108
35	土師器・甕 Ⅱ不明	1		—	126
36	土師器・甕 Ⅱ不明	1	14号住居跡	床面	108
37	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	1号住居跡	床面	113
38	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	2号住居跡	床面	115
39	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	4号住居跡	床面	111
40	土師器・甕 Ⅱ大型	2B		—	131
41	土師器・甕 Ⅱ大型	2A		表土	130
42	土師器・甕 Ⅱ大型	2B		—	131
43	土師器・甕 Ⅱ小型	2A		—	127
44	土師器・甕 Ⅱ不明	2		—	128
45	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	7号住居跡	床面	111
46	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	3号住居跡	床面	113
47	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	18号住居跡	2層	130
48	土師器・甕 Ⅱ大型	2B		表土	131
49	土師器・甕 Ⅱ大型	2B	6号住居跡	床面	115
50	土師器・甕 Ⅱ大型	2B	16号住居跡	カマド袖	115
51	土師器・甕 Ⅱ大型	2A		—	130
52	土師器・甕 Ⅱ大型	2C	13号住居跡	床面	111
53	土師器・甕 Ⅱ小型	2D		撹乱層	128
54	土師器・甕 Ⅱ小型	2D	8号住居跡	床面	115
55	土師器・甕 Ⅱ不明	2	第5土壙	埋土	128
56	土師器・甕 Ⅱ大型	2B	9号住居跡	床面	118
57	土師器・甕 Ⅱ小型	2B	5号住居跡	床面	110
58	土師器・甕 Ⅱ小型	2B		—	127
59	土師器・甕 Ⅱ小型	2B	河原石群	地山面	127
60	土師器・甕 Ⅱ小型	2E	8号住居跡	床面	115
61	土師器・甕 Ⅱ小型	2D		—	128
62	土師器・甕 Ⅱ小型	2C	2号住居跡	床面	115
63	土師器・甕 Ⅱ小型	2D	9号住居跡	床面	118
64	土師器・甕 Ⅱ小型	2D	2号住居跡	床面	115
65	土師器・甕 Ⅱ不明	2		—	128
66	土師器・甕 Ⅱ小型	2C	6号住居跡	床面	115
67	土師器・甕 Ⅱ小型	2E	4号住居跡	床面	110
68	土師器・甕 Ⅱ大型	2A	9号住居跡	床面	118
69	土師器・甕 Ⅱ大型	2A		—	131
70	土師器・甕 Ⅱ不明	2	2号住居跡	床面	114
71	土師器・甕 Ⅱ小型	2E	11号住居跡	床面	118

第83表　昭和49・50年出土遺物目録（2）

No	器形	分類	遺構	出土層位	図面No
72	土師器・甕 Ⅱ不明	2	第3土壙	埋土	128
73	土師器・甕 Ⅱ不明	2	第3土壙	埋土	128
74	土師器・甕 Ⅱ不明	2	13号住居跡	床面	110
75	土師器・甕 Ⅱ不明	2	15号住居跡	床面	118
76	土師器・甕 Ⅱ不明	2	18号住居跡	ピット内	128
77	土師器・甕 Ⅱ小型	2B	18号住居跡	床面	127
78	土師器・甕 Ⅱ不明	2		—	128
79	土師器・甕 Ⅱ大型	2	15号住居跡	床面	118
80	土師器・甕 Ⅱ大型	2	12号住居跡	床面	131
81	土師器・甑 大型	1A	10号住居跡	床面	108
82	土師器・甑 大型	1A	3号住居跡	床面	110
83	土師器・甑 大型	2B		—	125
84	土師器・甑 大型	3B		—	125
85	土師器・甑 大型	3C	2号住居跡	床面	114
86	土師器・甑 大型	3B	9号住居跡	床面	118
87	土師器・甑 大型	3D		表土	126
88	土師器・甑 大型	3A		表土	125
89	土師器・甑 大型	3A		表土	125
90	土師器・甑 大型	3C	第5土壙	埋土	126
91	土師器・甑 大型	3C	中田中学蔵		126
92	土師器・甑 大型		6号住居跡	床面	114
93	土師器・甑 小型	1A	5号住居跡	床面	110
94	土師器・甑 小型	1D	14号住居跡	床面	108
95	土師器・甑 小型	1D	4号住居跡	床面	110
96	土師器・甑 小型	1B	中田中学蔵		125
97	土師器・甑 小型	2Ba	河原石群	地山面	125
98	土師器・甑 小型	2Aa	8号住居跡	床面	114
99	土師器・甑 小型	2C	18号住居跡	埋土	125
100	土師器・甑 小型		9号住居跡	床面	118
101	土師器・甑 小型	2Bb		—	125
102	土師器・甑 小型	2Bb	河原石群	地山面	125
103	土師器・甑 小型	2Ab	中田中学蔵		125
104	土師器・鉢 Ⅱ	1B	13号住居跡	床面	109
105	土師器・鉢 Ⅱ	1A	18号住居跡	埋土	123
106	土師器・鉢 Ⅱ	1B		表土	123
107	土師器・鉢 Ⅱ	1C	中田中学蔵		123
108	土師器・鉢 Ⅱ	1B	中田中学蔵		123
109	土師器・鉢 Ⅱ	1C	第9土壙	壁上部	123
110	土師器・鉢 Ⅱ	2B		—	124
111	土師器・鉢 Ⅱ	2B	12号住居跡	床面	124
112	土師器・鉢 Ⅱ	2B	8号住居跡	床面	114
113	土師器・鉢 Ⅱ	2B		—	124
114	土師器・鉢 Ⅱ	2C	5号住居跡	床面	109
115	土師器・鉢 Ⅱ	2C		—	124
116	土師器・鉢 Ⅱ	2B	17号住居跡	床面	117
117	土師器・鉢 Ⅱ	2B	9号住居跡	床面	117
118	土師器・鉢 Ⅱ	2D	3号住居跡	床面	110
119	土師器・鉢 Ⅱ	2A	12号住居跡	1層	124
120	土師器・鉢 Ⅱ	2A	18号住居跡	炉	124
121	土師器・鉢 Ⅰ	2A	11号住居跡	床面	117
122	土師器・鉢 Ⅰ	1Ba	18号住居跡	埋土	123
123	土師器・鉢 Ⅰ	1Bc	5号住居跡	床面	109
124	土師器・鉢 Ⅰ	2Ba	9号住居跡	床面	117
125	土師器・鉢 Ⅰ	1Bc	18号住居跡	埋土	123
126	土師器・鉢 Ⅰ	2Bb	11号住居跡	床面	117
127	土師器・坏 小型	1A	第6土壙	埋土	119
128	土師器・坏 小型	1B	8号住居跡	床面	114
129	土師器・坏 小型	1B	18号住居跡	—	119
130	土師器・坏 小型	1B	6号住居跡	床面	114
131	土師器・坏 小型	2B	9号住居跡	床面	117
132	土師器・坏 小型	2B		—	119
133	土師器・蓋 Ⅱ		6号住居跡	—	122
134	土師器・坏 小型	2		—	119
135	土師器・坏 小型	3		—	119
136	土師器・坏 小型	3		—	120
137	土師器・坏 小型	3	15号住居跡	床面	117
138	土師器・坏 小型	3	18号住居跡	埋土	120
139	土師器・坏 小型	3	第15土壙	1層	120
140	土師器・坏 小型	3		—	120
141	土師器・坏 小型	3	9号住居跡	床面	117
142	土師器・坏 小型	4Eb		—	120
143	土師器・坏 小型	4Eb		—	120

第84表　昭和49・50年出土遺物目録（3）

No	器形	分類	遺構	出土層位	図面No
144	土師器・坏 小型	4Eb	4号住居跡	床面	109
145	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
146	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	埋土	121
147	土師器・坏 大型	3		撹乱層	122
148	土師器・坏 小型	4Ea	16号住居跡	床面	114
149	土師器・坏 小型	4Eb	16号住居跡	床面	114
150	土師器・坏 小型	4Eb		撹乱層	121
151	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
152	土師器・坏 小型	4Eb	4号住居跡	床面	109
153	土師器・坏 小型	4Eb	1号住居跡	床面	109
154	土師器・坏 小型	4Eb	12号住居跡	床面	120
155	土師器・坏 小型	4Eb	1号住居跡	床面	109
156	土師器・坏 小型	4Eb	5号住居跡	床面	109
157	土師器・坏 小型	4Eb		—	120
158	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
159	土師器・坏 小型	4Eb	14号住居跡	床面	108
160	土師器・坏 小型	4Eb		撹乱層	121
161	土師器・坏 小型	4Aa	9号住居跡	埋土木炭1層	120
162	土師器・坏 小型	4Eb	10号住居跡	床面	108
163	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
164	土師器・坏 小型	4Eb	9号住居跡	埋土木炭層	121
165	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	1層	121
166	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
167	土師器・坏 小型	4Eb		撹乱層	121
168	土師器・坏 小型	4Eb	第3土壙	埋土	121
169	土師器・坏 小型	4Eb	第2土壙	埋土	121
170	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	2層上面	121
171	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
172	土師器・坏 小型	4Eb	9号住居跡	床面	117
173	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	2層	121
174	土師器・坏 小型	4Eb	第14土壙	埋土	121
175	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	1層	121
176	土師器・坏 小型	4Ea	13号住居跡	床面	109
177	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	炉	120
178	土師器・坏 小型	4Eb		—	121
179	土師器・坏 小型	4D		—	120
180	土師器・坏 小型	4Eb	9号住居跡	床面	117
181	土師器・坏 小型	4D	15号住居跡	床面	117
182	土師器・坏 小型	4Eb	10号住居跡	床面	108
183	土師器・坏 小型	4Eb	5号住居跡	床面	109
184	土師器・坏 小型	4Eb	16号住居跡	床面	114
185	土師器・坏 小型	4Eb		表土	121
186	土師器・坏 小型	4D	第6土壙	埋土	120
187	土師器・坏 小型	4Eb	18号住居跡	埋土	121
188	土師器・坏 小型	4Eb	7号住居跡	床面	109
189	土師器・坏 小型	4Ea	10号住居跡	床面	108
190	土師器・坏 小型	4Ea		—	120
191	土師器・坏 小型	4Ea		—	120
192	土師器・坏 小型	4Ea	17号住居跡	床面	117
193	土師器・坏 小型	4Ca	18号住居跡	埋土	120
194	土師器・坏 小型	4Cb	8号住居跡	床面	114
195	土師器・坏 小型	4Cb		—	120
196	土師器・坏 小型	4Cb	第15土壙	1層	120
197	土師器・坏 小型	4Cb	6号住居跡	床面	114
198	土師器・坏 小型	4Cb	6号住居跡	床面	114
199	土師器・坏 小型	4B	第7土壙	炭化物層上面	120
200	土師器・坏 小型	4Cb	16号住居跡	床面	114
201	土師器・坏 小型	4Ec	1号住居跡	埋土	122
202	土師器・椀	2		撹乱層	124
203	土師器・椀	1	6号住居跡	床面	114
204	土師器・高坏	2A	2号住居跡	床面	114
205	土師器・高坏	B	11号住居跡	床面	117
206	土師器・高坏	A	第3土壙	埋土	123
207	土師器・高坏	2		—	123
208	土師器・高坏	1		—	123
209	土師器・高坏			—	123
210	土師器・高坏			—	123
211	土師器・蓋Ⅰ		12号住居跡	1層	122
212	土師器・蓋Ⅰ			—	122
213	土師器・片口土器		17号住居跡	床面	117
214	土師器・小形手捏ね土器		第5土壙	埋土	
215	土師器・小形手捏ね土器			表土	

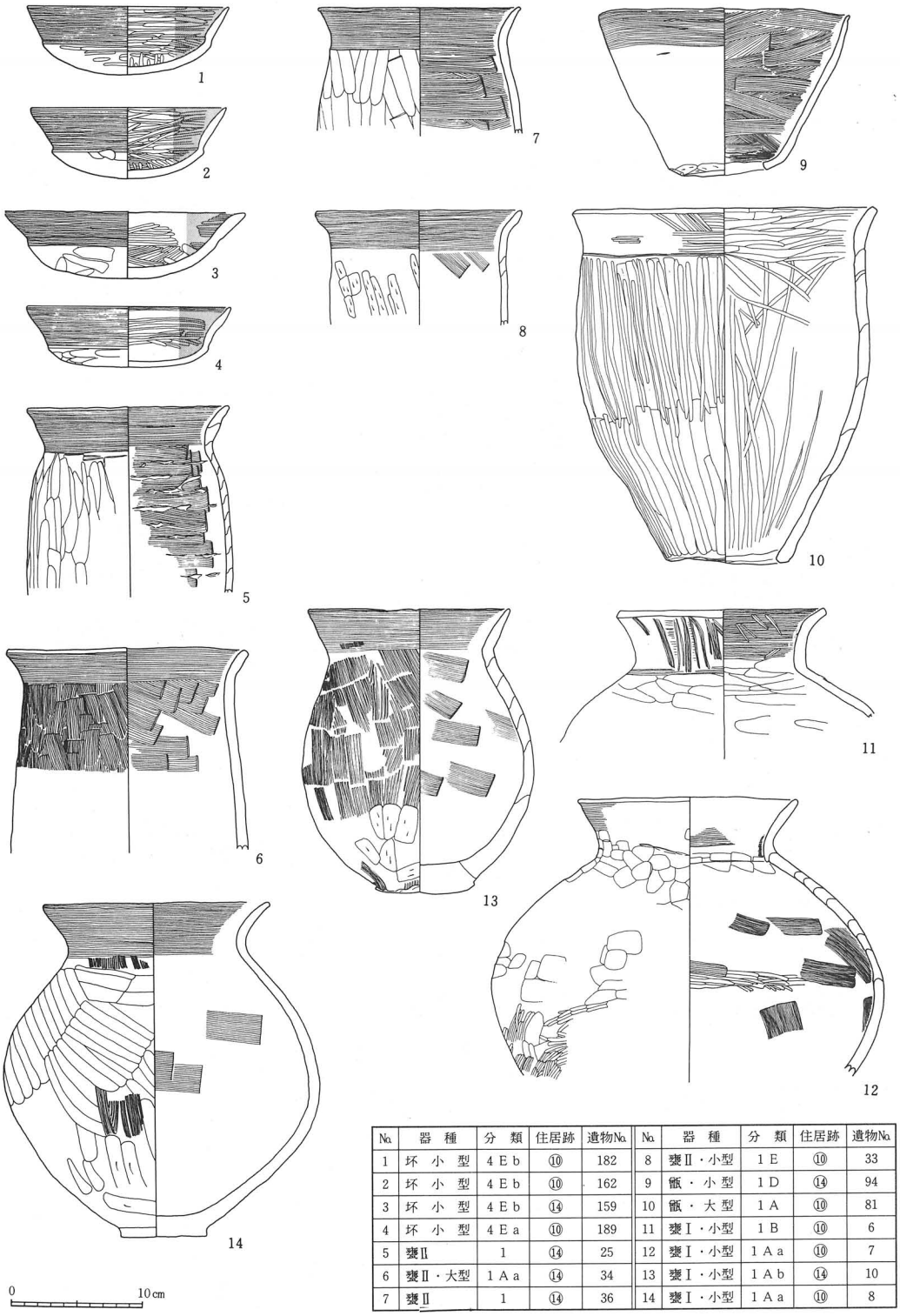
第85表　昭和49・50年出土遺物目録（4）

No	器形	分類	遺構	出土層位	図面No
216	土師器・小形手捏ね土器				
217	土師器・小形手捏ね土器				
218	土師器・小形手捏ね土器				
219	土師器・小形手捏ね土器				
220	土師器・小形手捏ね土器				
221	土師器・小形手捏ね土器		18号住居跡	2　層	
222	土師器・小形手捏ね土器		18号住居跡	2　層	
223	土師器・小形手捏ね土器		第3土壙	埋　土	
224	土師器・破片甕Ⅱ不明		12号住居跡	2　層	131
225	土師器・破片甕Ⅱ不明		12号住居跡	—	131
226	土師器・破片甕Ⅱ不明			—	131
227	土師器・破片甕Ⅱ不明			—	131
228	土師器・破片甕Ⅱ不明			—	131
229	土師器・破片甕Ⅱ不明		4号住居跡	床　面	113
230	土師器・破片甕Ⅱ不明			—	131
231	土師器・破片甕Ⅰ小型			—	133
232	土師器・破片甕Ⅱ不明			表　土	132
233	土師器・破片甕Ⅰ小型			—	133
234	土師器・破片甕Ⅰ小型		第5土壙	埋　土	133
235	土師器・破片甕Ⅰ小型			—	133
236	土師器・破片甕Ⅰ大型		5号住居跡	床　面	113
237	土師器・破片甕Ⅰ小型		18号住居跡	埋　土	133
238	土師器・破片甕Ⅰ小型		3号住居跡	—	133
239	土師器・破片甕Ⅰ小型			—	133
240	土師器・破片甕Ⅰ小型			—	133
241	土師器・破片甑大型		第15土壙	床　面	126
242	土師器・破片甑大型		16号住居跡	床　面	114
243	土師器・破片甑大型			—	126
244	土師器・破片異形土器			表　土	124
245	土師器・破片異形土器		18号住居跡	埋　土	124
246	土師器・破片坏小型	4Eb	18号住居跡	2　層	121
247	石製品		15号住居跡	埋　土	
248	石製品		18号住居跡	2　層	
249	滑石製紡錘車		12号住居跡	床　面	
250	滑石製紡錘車		9号住居跡	ピット4上面	
251	砥　石			撹乱層	

No	器形	遺構	出土層位	図面No
252	砥　石		撹乱層	
253	砥　石	12号住居跡	床　面	
254	石製品	8号住居跡	床　面	
255	石製品	9号住居跡	床　面	
256	石製品	9号住居跡	床　面	
257	支　脚	9号住居跡	（カマド内）	
258	石製品・臼　玉		—	
259	石製品・臼　玉		地山面	
260	土製品・管玉模造品	第3土壙	埋　土	
261	土製品・管玉模造品	第3土壙	埋　土	
262	土製品・臼玉模造品	第3土壙	埋　土	
263	土製品・勾玉模造品	第6土壙	（壁　面）	
264	土製品・鏡模造品		地山面	
265	土製品・錘		撹乱層	
266	土製品・錘	18号住居跡	埋　土	
267	土製品・紡錘車		地山面	
268	鉄　鏃		—	
269	鉄　鏃		—	
270	刀　子		—	
271	鎌　？	18号住居跡	1　層	
272	須恵器・坏	15号住居跡	床　面	
273	須恵器・瓶		撹乱層	
274	須恵器・平瓶		表　土	
275	須恵器・提瓶	5号住居跡	1　層	
276	須恵器・甕		撹乱層	
277	須恵器・甕			
278	須恵器・甕		撹乱層	
279	須恵器・甕		表　土	
280	須恵器・甕		撹乱層	
281	須恵器・甕			
282	須恵器・甕			
283	須恵器・甕	5号住居跡	2　層	
284	須恵器・坏			
285	須恵器・壺		撹乱層	
286	須恵器・蓋？			
287	須恵器・蓋？		撹乱層	

栗遺跡出土土師器集成図

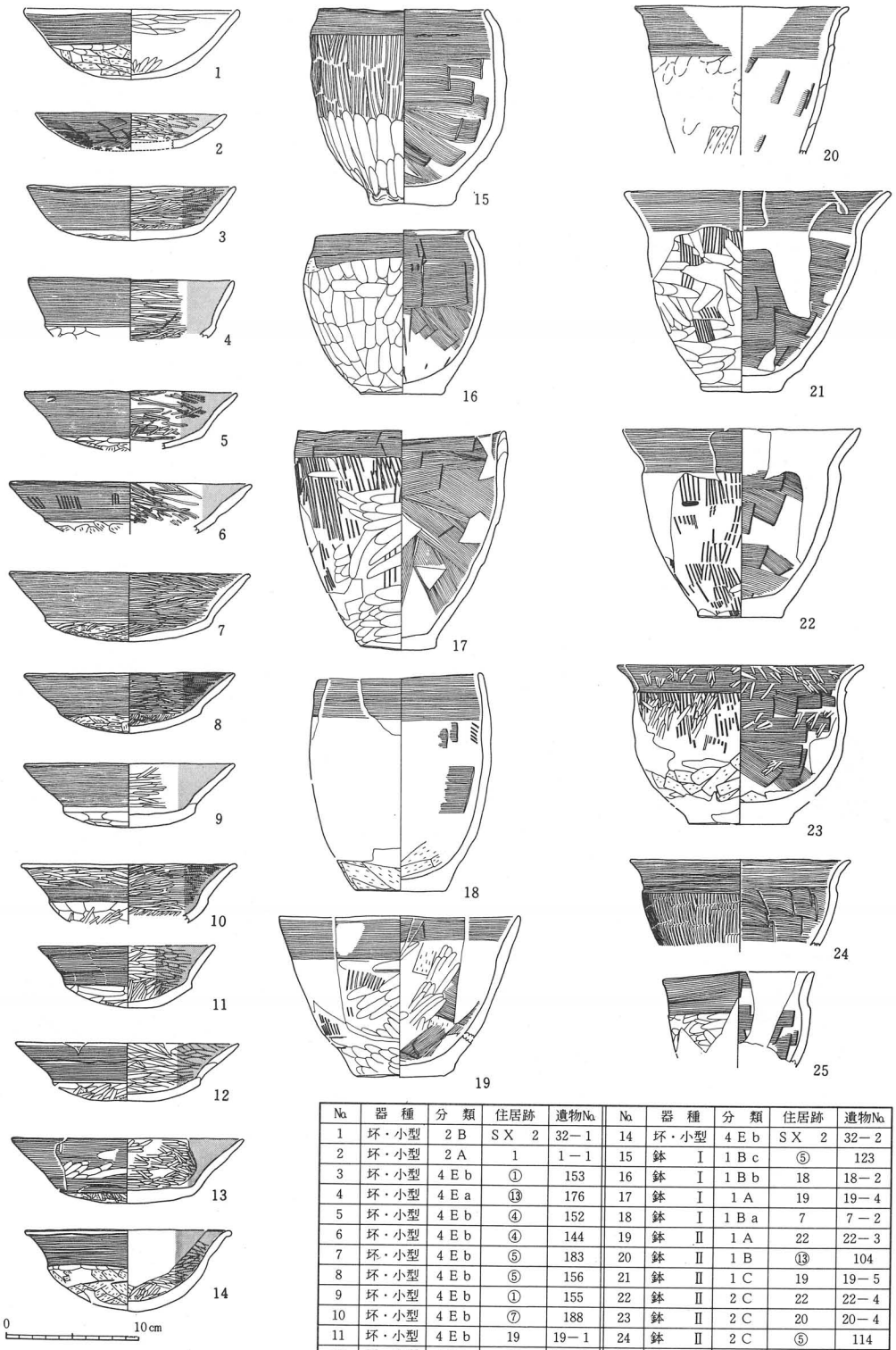
Ⅰ期土器群



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏　小　型	4 E b	⑩	182	8	甕Ⅱ・小型	1 E	⑩	33
2	坏　小　型	4 E b	⑩	162	9	甑・小型	1 D	⑭	94
3	坏　小　型	4 E b	⑭	159	10	甑・大型	1 A	⑩	81
4	坏　小　型	4 E a	⑩	189	11	甕Ⅰ・小型	1 B	⑩	6
5	甕Ⅱ	1	⑭	25	12	甕Ⅰ・小型	1 A a	⑩	7
6	甕Ⅱ・大型	1 A a	⑭	34	13	甕Ⅰ・小型	1 A b	⑭	10
7	甕Ⅱ	1	⑭	36	14	甕Ⅰ・小型	1 A a	⑩	8

第108図　栗遺跡出土土師器集成図－1

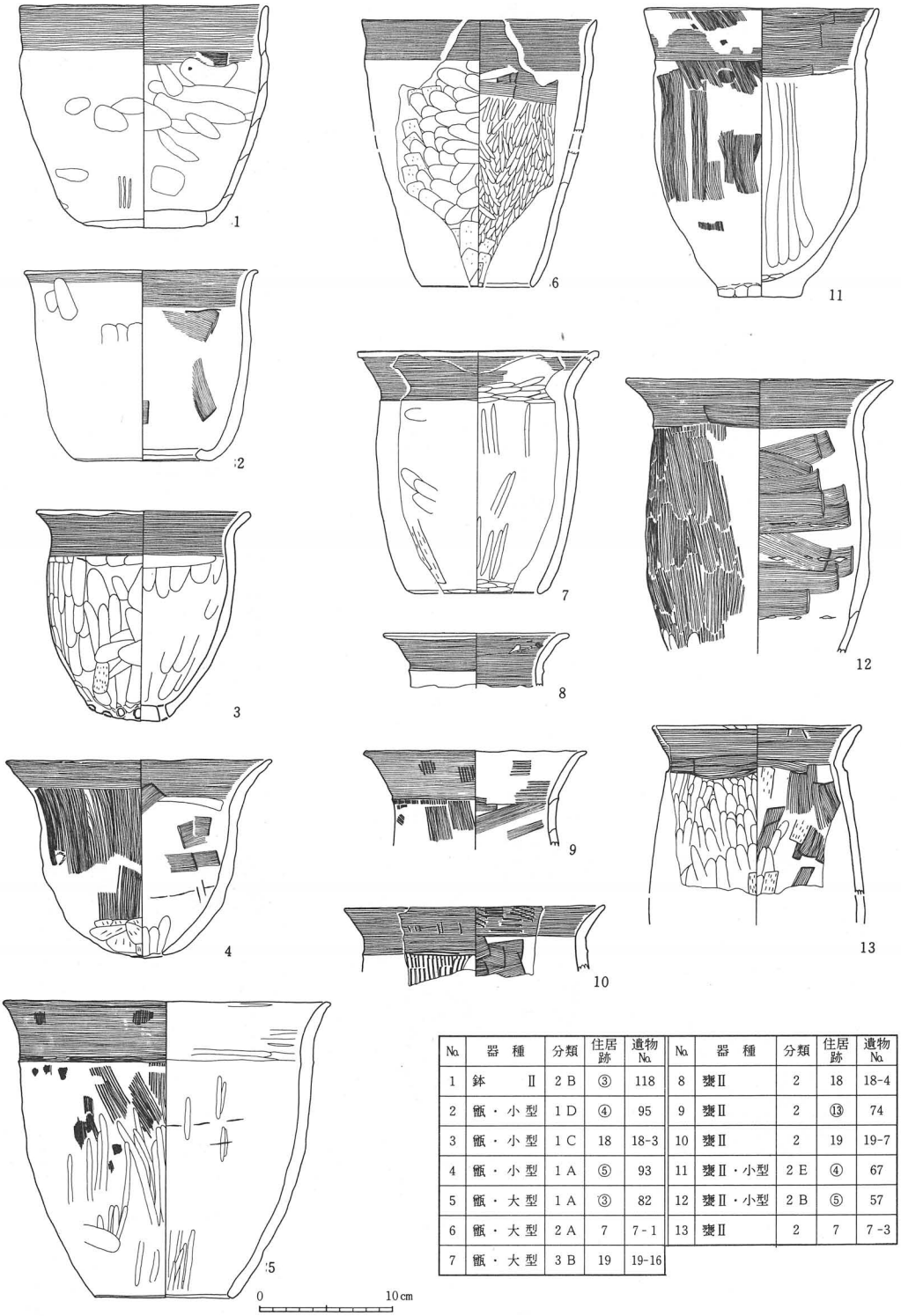
Ⅱ期土器群（1）



No.	器種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器種	分類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	2B	SX 2	32－1	14	坏・小型	4Eb	SX 2	32－2
2	坏・小型	2A	1	1－1	15	鉢 Ⅰ	1Bc	⑤	123
3	坏・小型	4Eb	①	153	16	鉢 Ⅰ	1Bb	18	18－2
4	坏・小型	4Ea	⑬	176	17	鉢 Ⅰ	1A	19	19－4
5	坏・小型	4Eb	④	152	18	鉢 Ⅰ	1Ba	7	7－2
6	坏・小型	4Eb	④	144	19	鉢 Ⅱ	1A	22	22－3
7	坏・小型	4Eb	⑤	183	20	鉢 Ⅱ	1B	⑬	104
8	坏・小型	4Eb	⑤	156	21	鉢 Ⅱ	1C	19	19－5
9	坏・小型	4Eb	①	155	22	鉢 Ⅱ	2C	22	22－4
10	坏・小型	4Eb	⑦	188	23	鉢 Ⅱ	2C	20	20－4
11	坏・小型	4Eb	19	19－1	24	鉢 Ⅱ	2C	⑤	114
12	坏・小型	4Eb	22	22－1	25	鉢 Ⅱ	2B	SX－2	32－3
13	坏・小型	4Eb	19	19－3					

第109図　栗遺跡出土土師器集成図－2

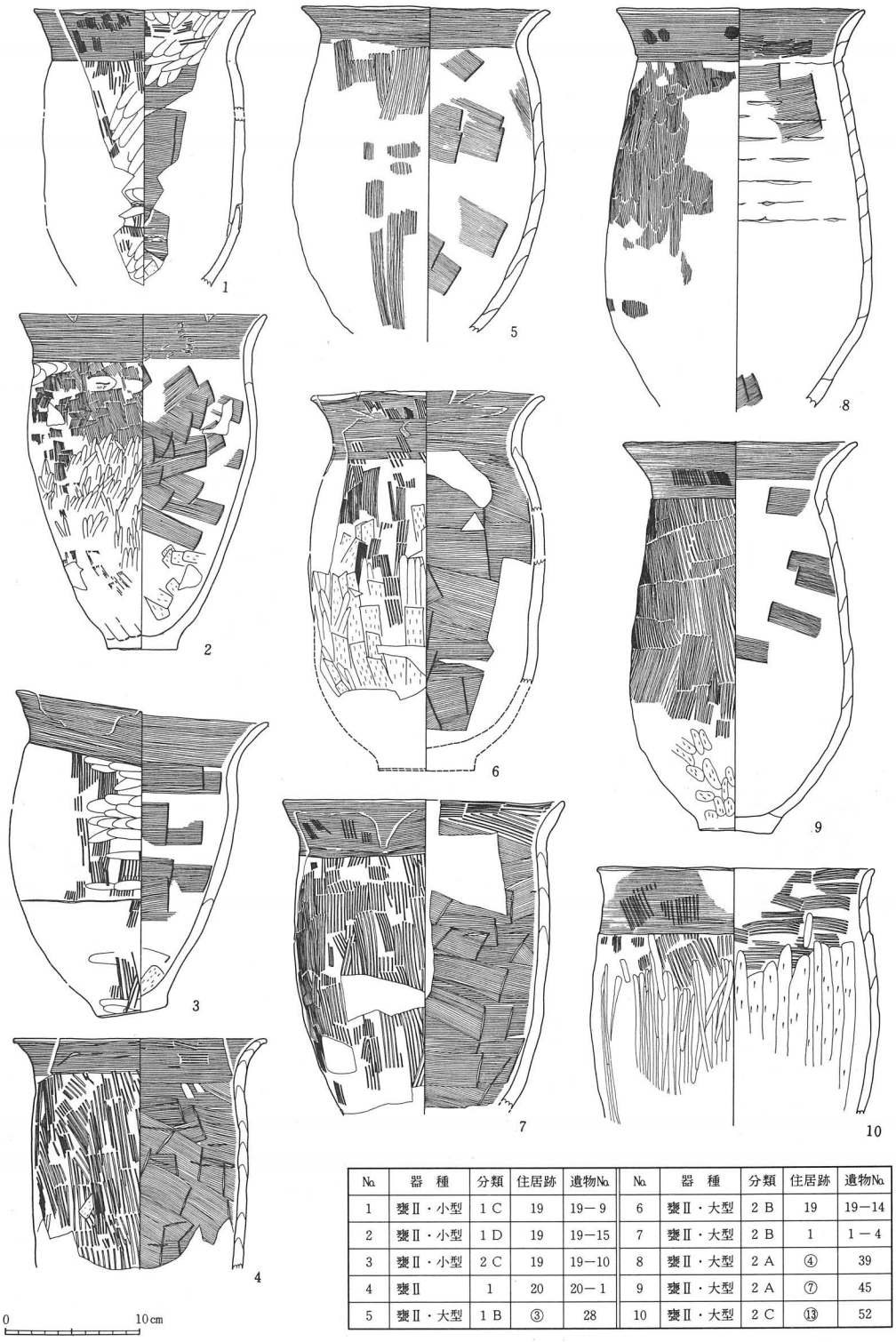
Ⅱ期土器群（2）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	鉢　Ⅱ	2 B	③	118	8	甕Ⅱ	2	18	18-4
2	甑・小型	1 D	④	95	9	甕Ⅱ	2	⑬	74
3	甑・小型	1 C	18	18-3	10	甕Ⅱ	2	19	19-7
4	甑・小型	1 A	⑤	93	11	甕Ⅱ・小型	2 E	④	67
5	甑・大型	1 A	③	82	12	甕Ⅱ・小型	2 B	⑤	57
6	甑・大型	2 A	7	7-1	13	甕Ⅱ	2	7	7-3
7	甑・大型	3 B	19	19-16					

第110図　栗遺跡出土土器集成図－3

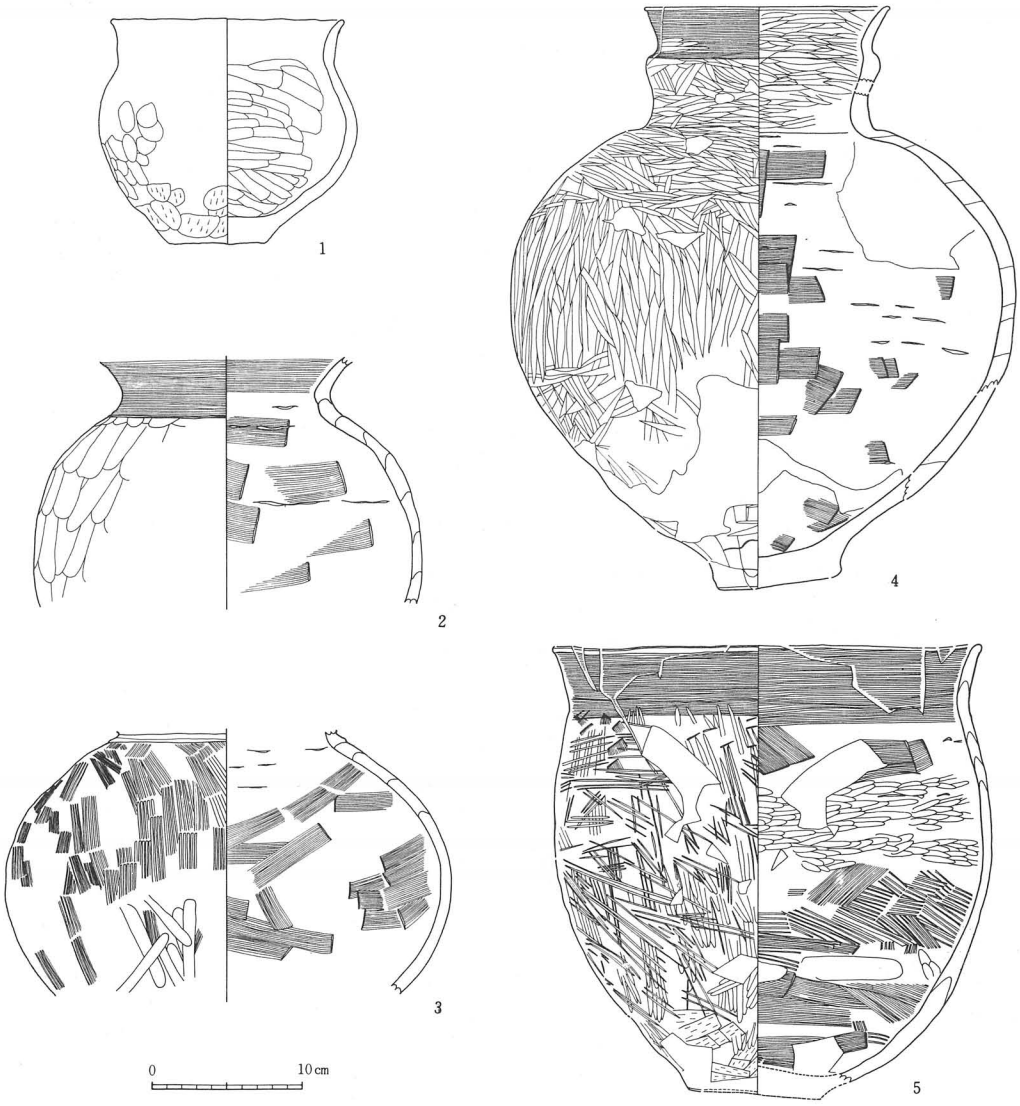
Ⅱ期土器群（3）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ・小型	1 C	19	19－9	6	甕Ⅱ・大型	2 B	19	19－14
2	甕Ⅱ・小型	1 D	19	19－15	7	甕Ⅱ・大型	2 B	1	1－4
3	甕Ⅱ・小型	2 C	19	19－10	8	甕Ⅱ・大型	2 A	④	39
4	甕Ⅱ	1	20	20－1	9	甕Ⅱ・大型	2 A	⑦	45
5	甕Ⅱ・大型	1 B	③	28	10	甕Ⅱ・大型	2 C	⑬	52

第111図　栗遺跡出土土師器集成図－4

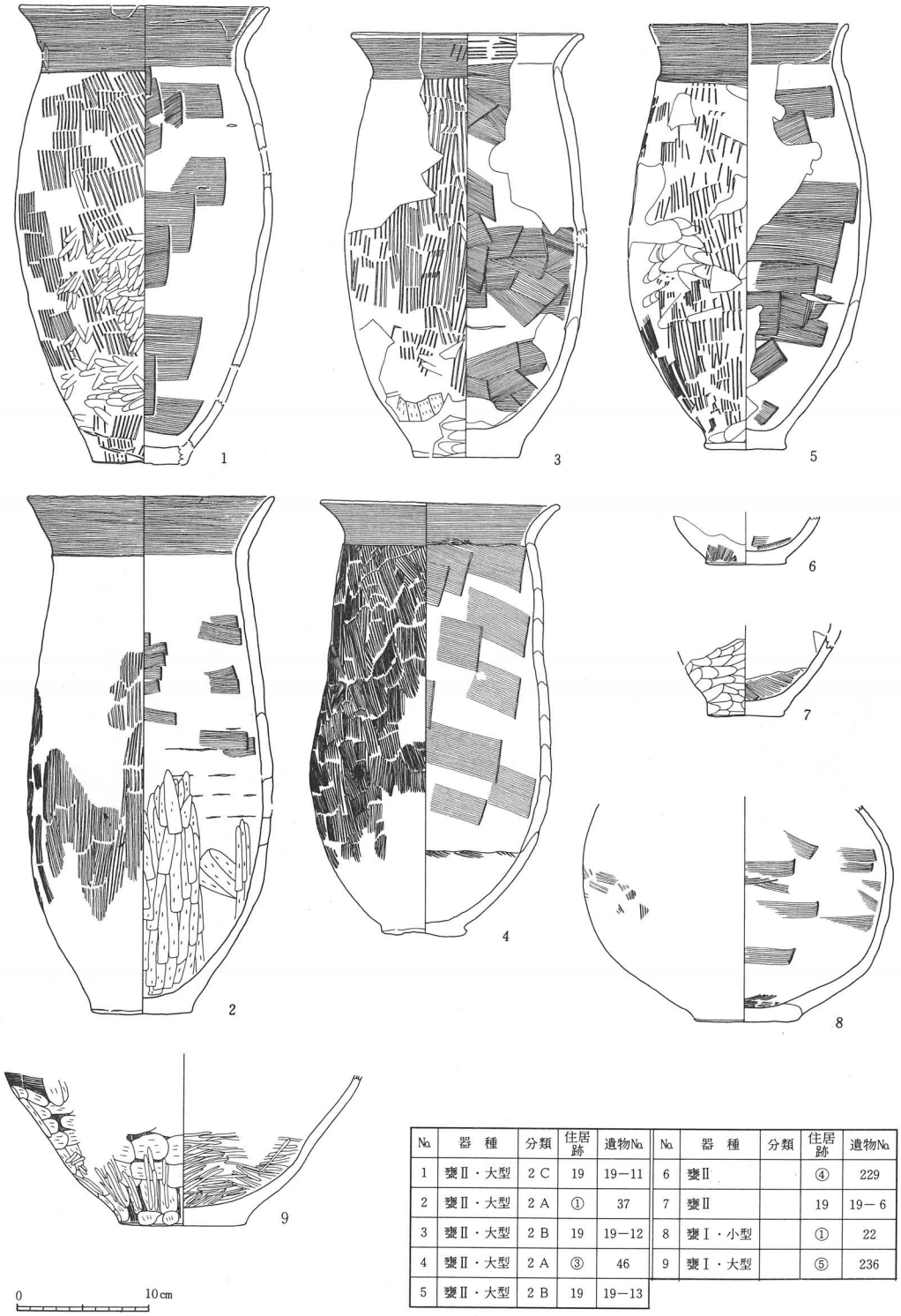
Ⅱ期土器群（4）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅰ・小型	1Aa	①	9
2	甕Ⅰ・小型	2B	⑦	18
3	甕Ⅰ・小型	2A	④	13
4	甕Ⅰ・大型	1Aa	SX　2	32－5
5	甕Ⅰ・小型	1C	SX　2	32－4

第112図　栗遺跡出土土師器集成図－5

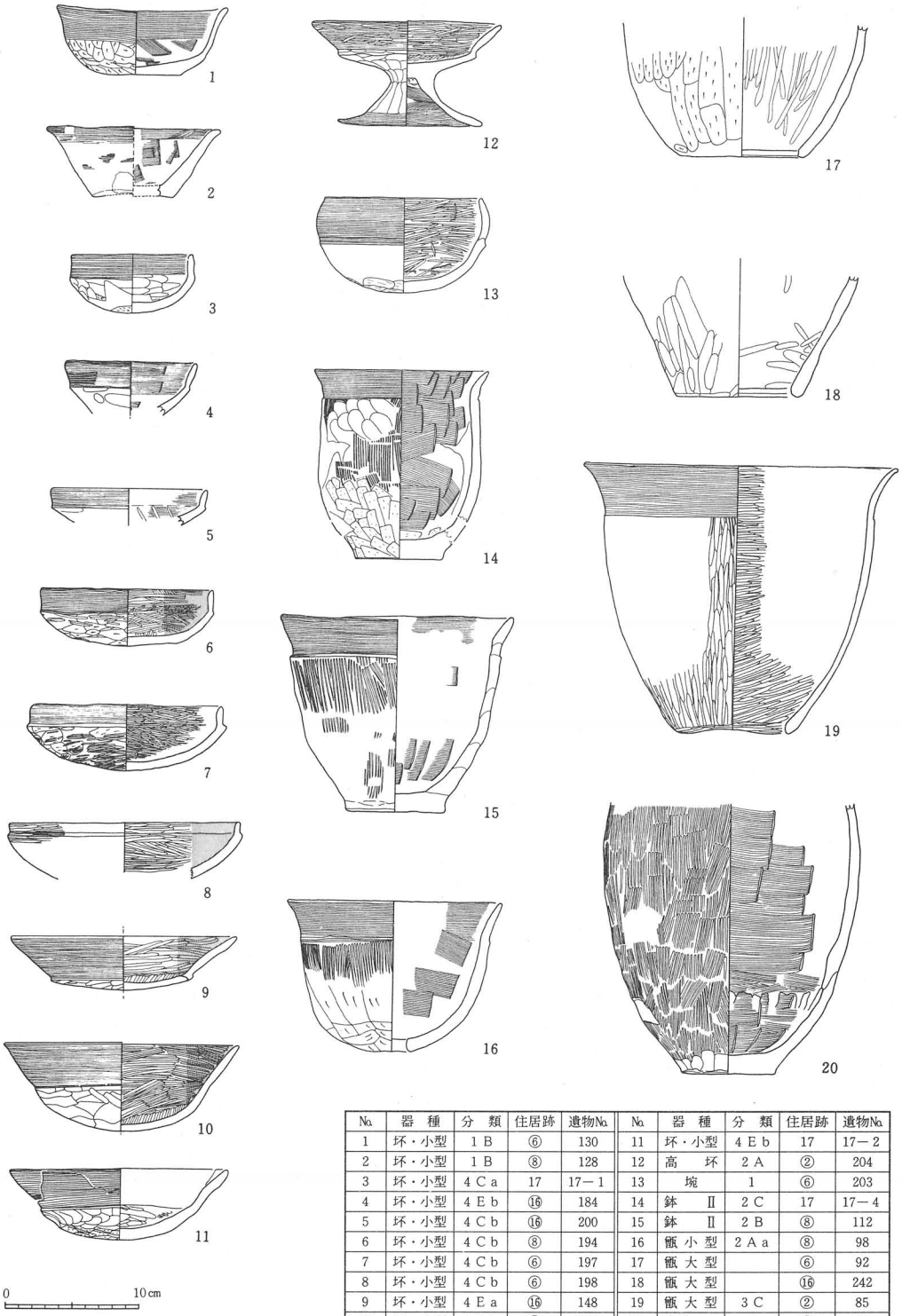
Ⅱ期土器群（5）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ・大型	2 C	19	19−11	6	甕Ⅱ		④	229
2	甕Ⅱ・大型	2 A	①	37	7	甕Ⅱ		19	19− 6
3	甕Ⅱ・大型	2 B	19	19−12	8	甕Ⅰ・小型		①	22
4	甕Ⅱ・大型	2 A	③	46	9	甕Ⅰ・大型		⑤	236
5	甕Ⅱ・大型	2 B	19	19−13					

第113図　栗遺跡出土土師器集成図－6

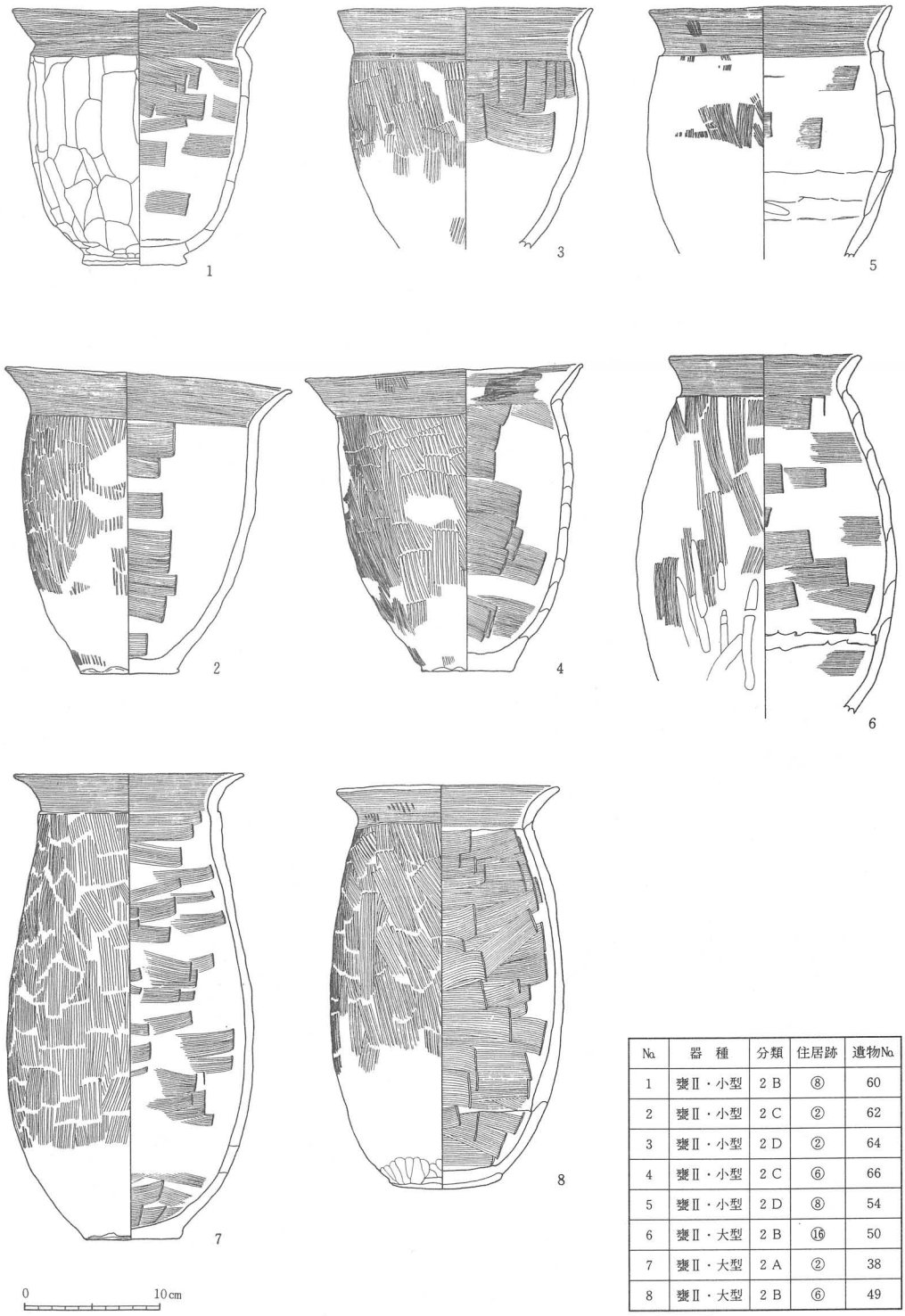
Ⅲａ期土器群（1）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	1 B	⑥	130	11	坏・小型	4 E b	17	17－2
2	坏・小型	1 B	⑧	128	12	高　坏	2 A	②	204
3	坏・小型	4 C a	17	17－1	13	埦	1	⑥	203
4	坏・小型	4 E b	⑯	184	14	鉢　Ⅱ	2 C	17	17－4
5	坏・小型	4 C b	⑯	200	15	鉢　Ⅱ	2 B	⑧	112
6	坏・小型	4 C b	⑧	194	16	甑 小 型	2 A a	⑧	98
7	坏・小型	4 C b	⑥	197	17	甑 大 型		⑥	92
8	坏・小型	4 C b	⑥	198	18	甑 大 型		⑯	242
9	坏・小型	4 E a	⑯	148	19	甑 大 型	3 C	②	85
10	坏・小型	4 E b	⑯	149	20	甕Ⅱ	2	②	70

第114図　栗遺跡出土土師器集成図－7

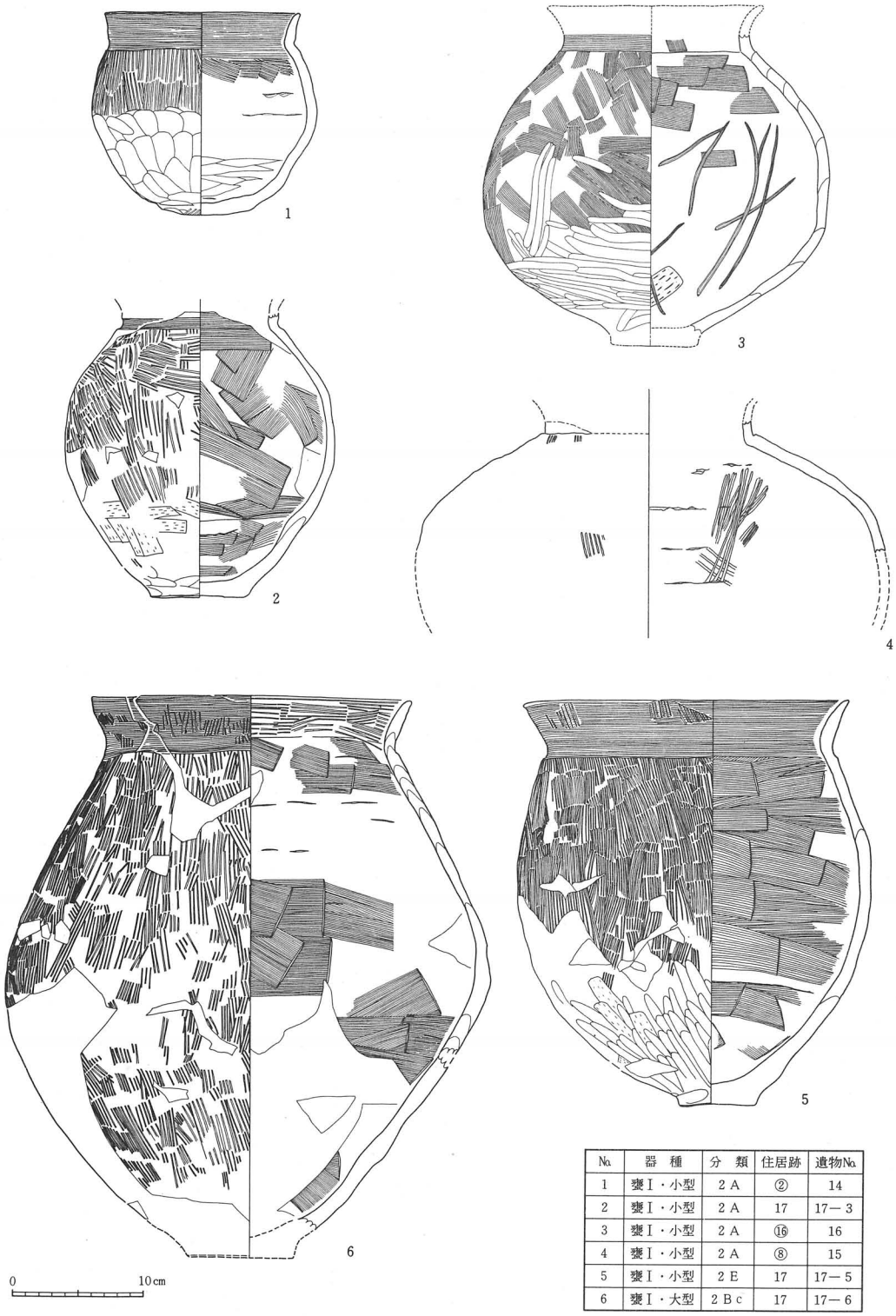
Ⅲａ期土器群（2）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ・小型	2 B	⑧	60
2	甕Ⅱ・小型	2 C	②	62
3	甕Ⅱ・小型	2 D	②	64
4	甕Ⅱ・小型	2 C	⑥	66
5	甕Ⅱ・小型	2 D	⑧	54
6	甕Ⅱ・大型	2 B	⑯	50
7	甕Ⅱ・大型	2 A	②	38
8	甕Ⅱ・大型	2 B	⑥	49

第115図　栗遺跡出土土師器集成図－8

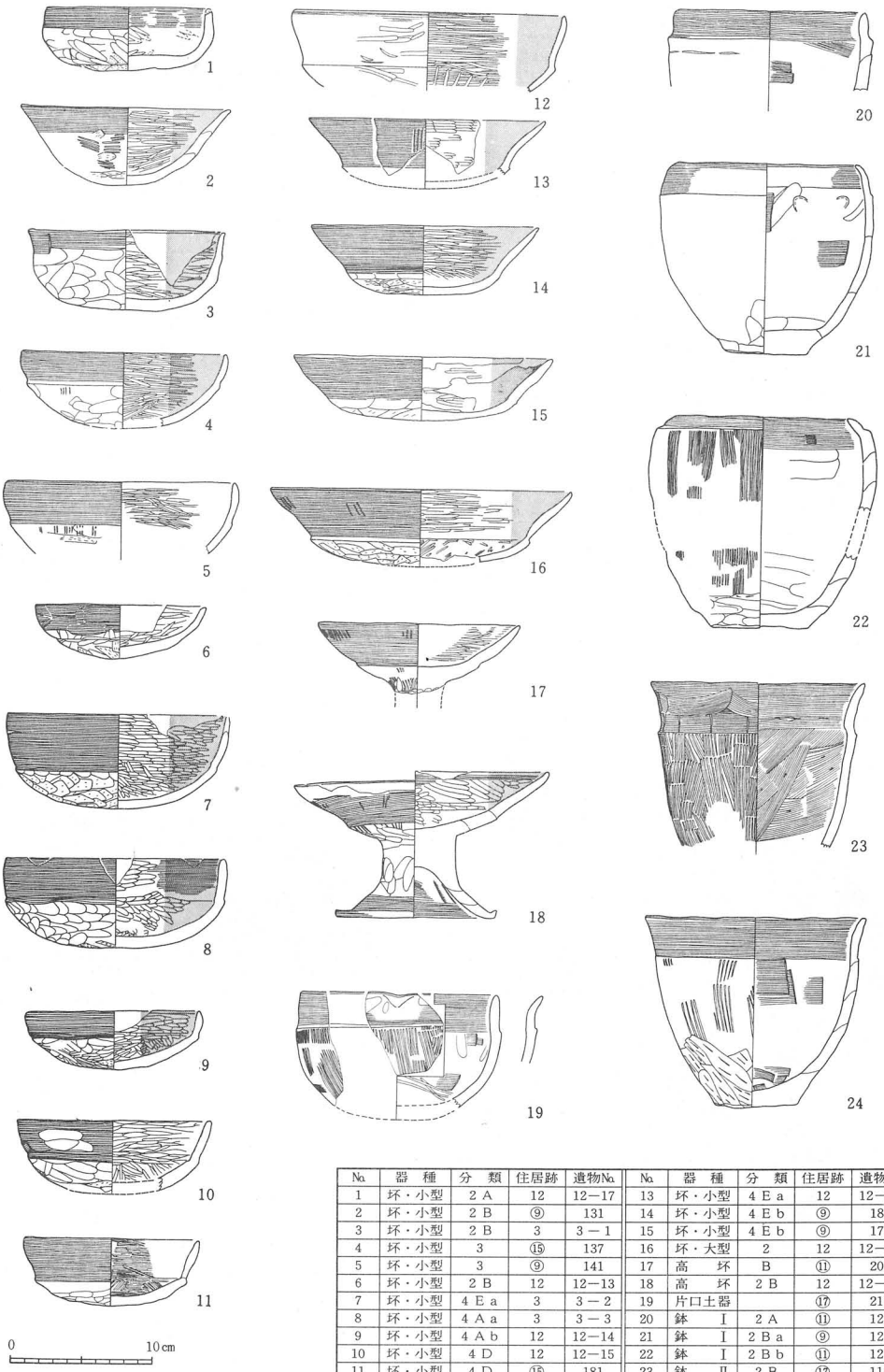
Ⅲａ期土器群（３）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅰ・小型	２Ａ	②	14
2	甕Ⅰ・小型	２Ａ	17	17－３
3	甕Ⅰ・小型	２Ａ	⑯	16
4	甕Ⅰ・小型	２Ａ	⑧	15
5	甕Ⅰ・小型	２Ｅ	17	17－５
6	甕Ⅰ・大型	２Ｂｃ	17	17－６

第116図　栗遺跡出土土師器集成図－９

Ⅲｂ期土器群（1）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	2 A	12	12—17	13	坏・小型	4 E a	12	12—18
2	坏・小型	2 B	⑨	131	14	坏・小型	4 E b	⑨	180
3	坏・小型	2 B	3	3 — 1	15	坏・小型	4 E b	⑨	172
4	坏・小型	3	⑮	137	16	坏・大型	2	12	12—16
5	坏・小型	3	⑨	141	17	高　坏	B	⑪	205
6	坏・小型	2 B	12	12—13	18	高　坏	2 B	12	12—20
7	坏・小型	4 E a	3	3 — 2	19	片口土器		⑰	213
8	坏・小型	4 A a	3	3 — 3	20	鉢　Ⅰ	2 A	⑪	121
9	坏・小型	4 A b	12	12—14	21	鉢　Ⅰ	2 B a	⑨	124
10	坏・小型	4 D	12	12—15	22	鉢　Ⅰ	2 B b	⑪	126
11	坏・小型	4 D	⑮	181	23	鉢　Ⅱ	2 B	⑰	116
12	坏・小型	4 E a	⑰	192	24	鉢　Ⅱ	2 B	⑨	117

第117図　栗遺跡出土土師器集成図—10

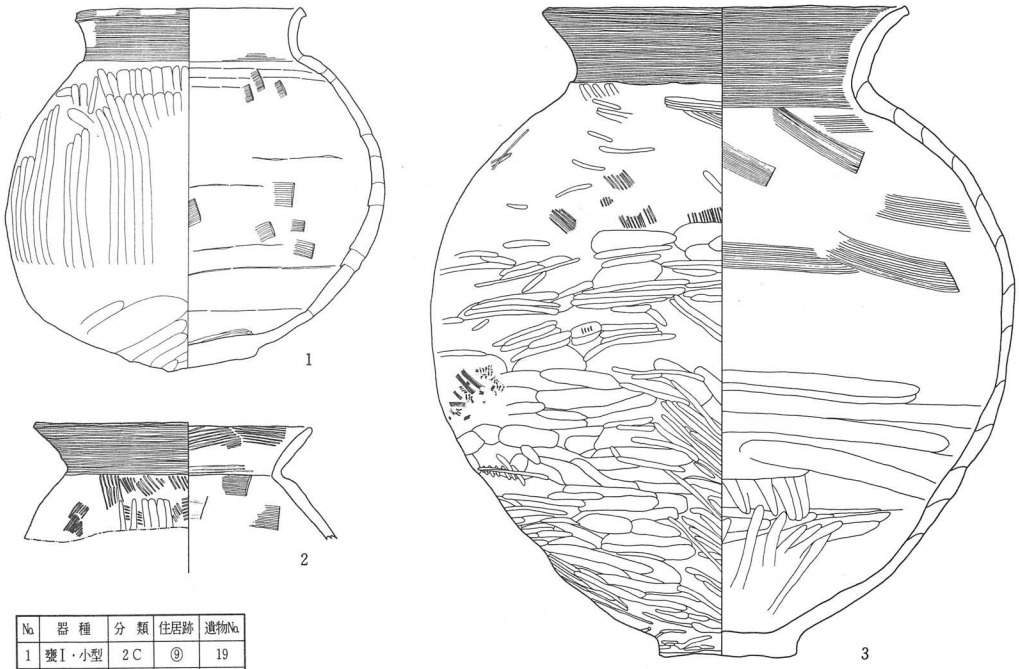
Ⅲｂ期土器群（2）

No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甑　小　型		⑨	100
2	甑　大　型	3 B	⑨	86
3	甕Ⅱ・小型	2 D	⑨	63
4	甕Ⅱ・小型	2 E	⑪	71
5	甕Ⅱ・大型	2	⑮	79

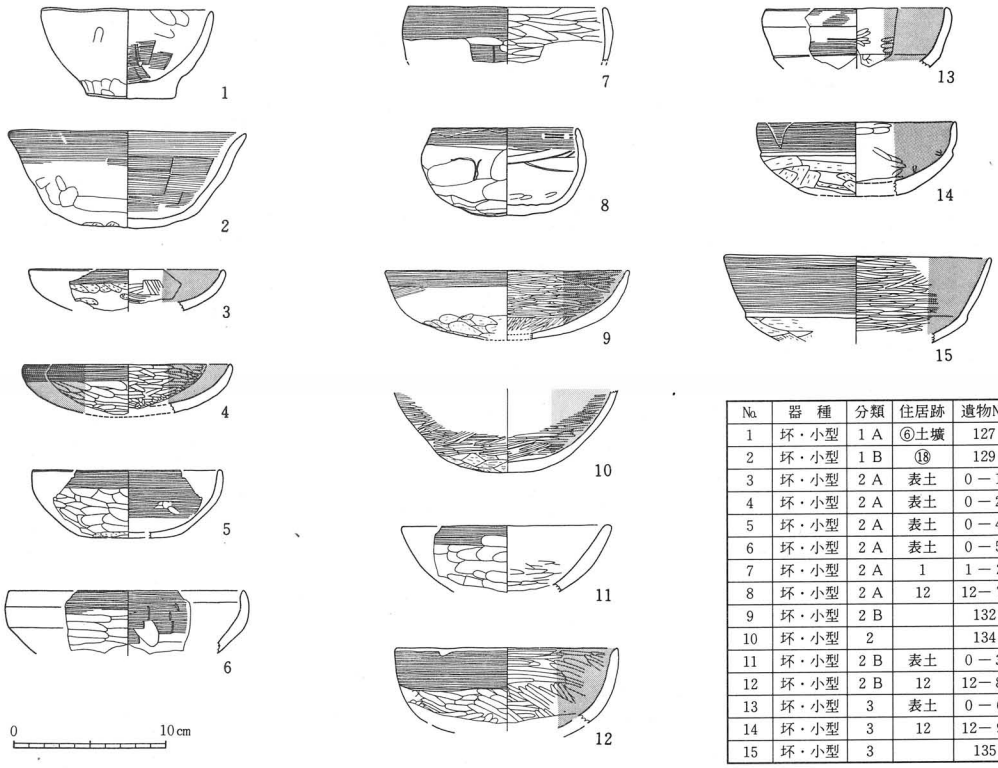
No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
6	甕Ⅱ	2	⑮	75
7	甕Ⅱ・大型	2 B	12	12−37
8	甕Ⅱ・大型	2 A	⑨	68
9	甕Ⅱ・大型	2 B	⑨	56

第118図　栗遺跡出土土師器集成図−11

Ⅲｂ期土器群（3）・坏小型（1類～3類）



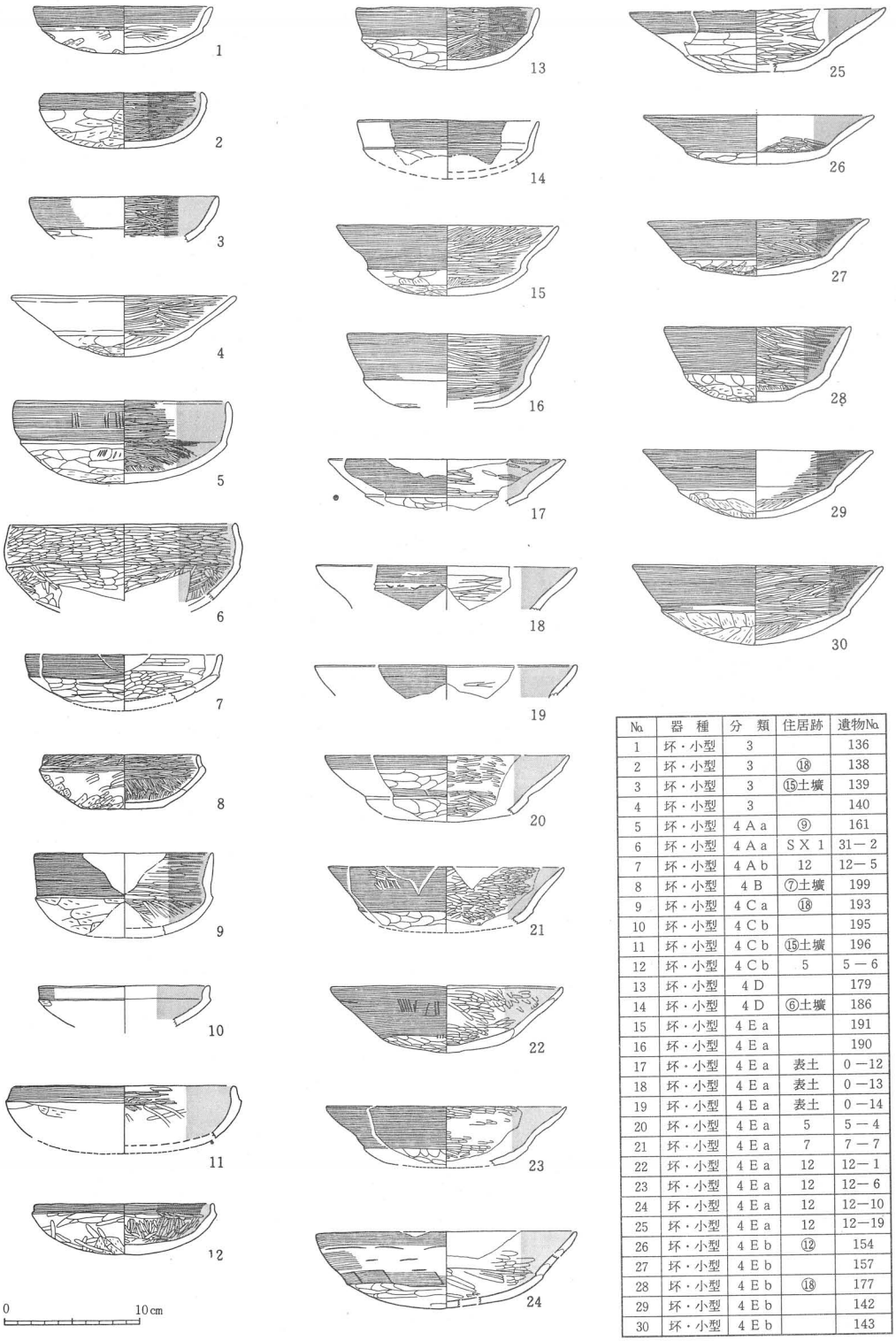
No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅰ・小型	2C	⑨	19
2	甕Ⅰ・小型	2A	⑨	11
3	甕Ⅰ・大型	2Ab	⑨	20



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	1A	⑥土壙	127
2	坏・小型	1B	⑱	129
3	坏・小型	2A	表土	0－1
4	坏・小型	2A	表土	0－2
5	坏・小型	2A	表土	0－4
6	坏・小型	2A	表土	0－5
7	坏・小型	2A	1	1－2
8	坏・小型	2A	12	12－7
9	坏・小型	2B		132
10	坏・小型	2		134
11	坏・小型	2B	表土	0－3
12	坏・小型	2B	12	12－8
13	坏・小型	3	表土	0－6
14	坏・小型	3	12	12－9
15	坏・小型	3		135

第119図　栗遺跡出土土師器集成図－12

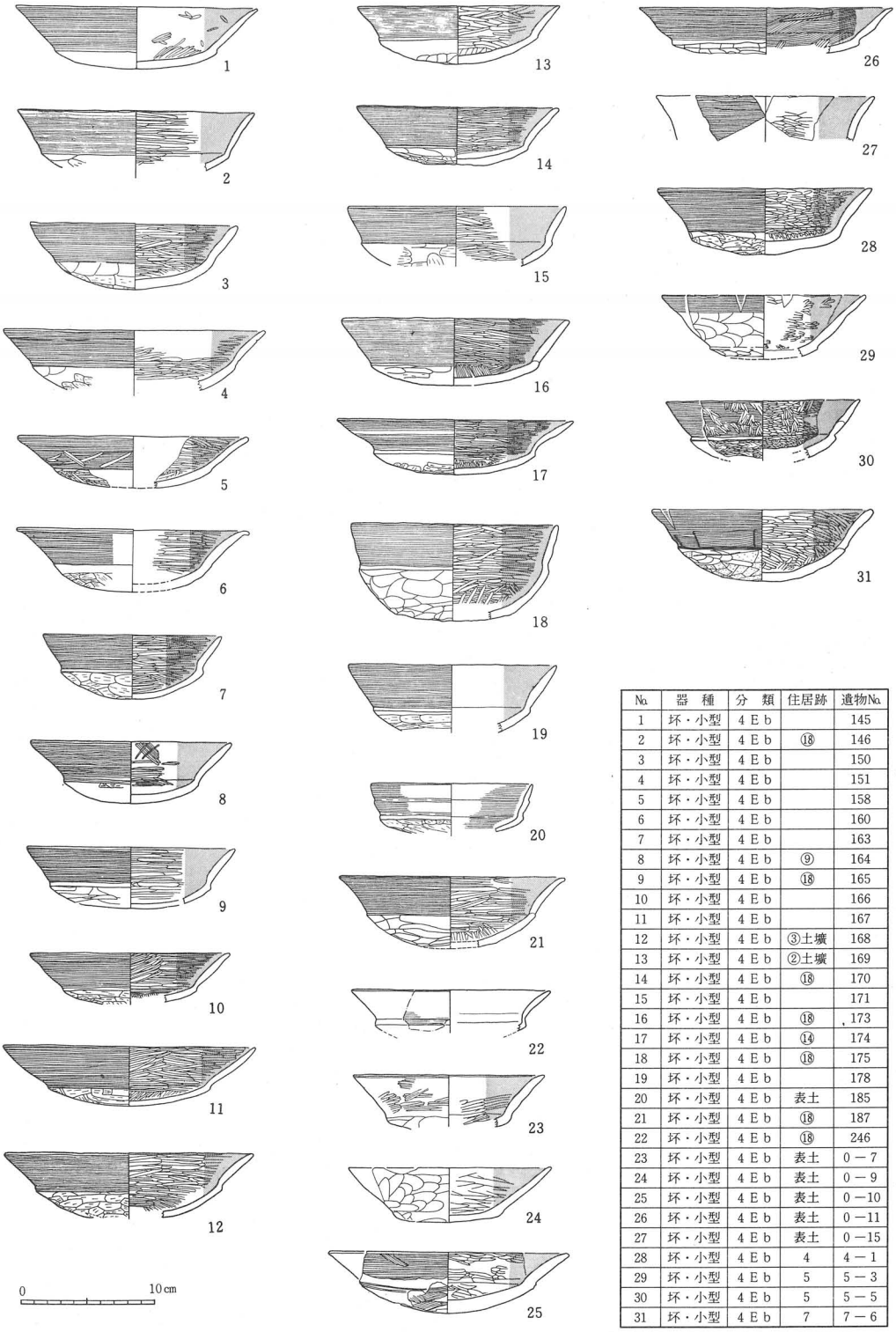
坏小型（3類～4Ｅｂ類）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	3		136
2	坏・小型	3	⑱	138
3	坏・小型	3	⑮土壙	139
4	坏・小型	3		140
5	坏・小型	4Ａａ	⑨	161
6	坏・小型	4Ａａ	ＳＸ１	31－２
7	坏・小型	4Ａｂ	12	12－５
8	坏・小型	4Ｂ	⑦土壙	199
9	坏・小型	4Ｃａ	⑱	193
10	坏・小型	4Ｃｂ		195
11	坏・小型	4Ｃｂ	⑮土壙	196
12	坏・小型	4Ｃｂ	5	5－６
13	坏・小型	4Ｄ		179
14	坏・小型	4Ｄ	⑥土壙	186
15	坏・小型	4Ｅａ		191
16	坏・小型	4Ｅａ		190
17	坏・小型	4Ｅａ	表土	０－12
18	坏・小型	4Ｅａ	表土	０－13
19	坏・小型	4Ｅａ	表土	０－14
20	坏・小型	4Ｅａ	5	5－４
21	坏・小型	4Ｅａ	7	7－７
22	坏・小型	4Ｅａ	12	12－１
23	坏・小型	4Ｅａ	12	12－６
24	坏・小型	4Ｅａ	12	12－10
25	坏・小型	4Ｅａ	12	12－19
26	坏・小型	4Ｅｂ	⑫	154
27	坏・小型	4Ｅｂ		157
28	坏・小型	4Ｅｂ	⑱	177
29	坏・小型	4Ｅｂ		142
30	坏・小型	4Ｅｂ		143

第120図　栗遺跡出土土師器集成図－13

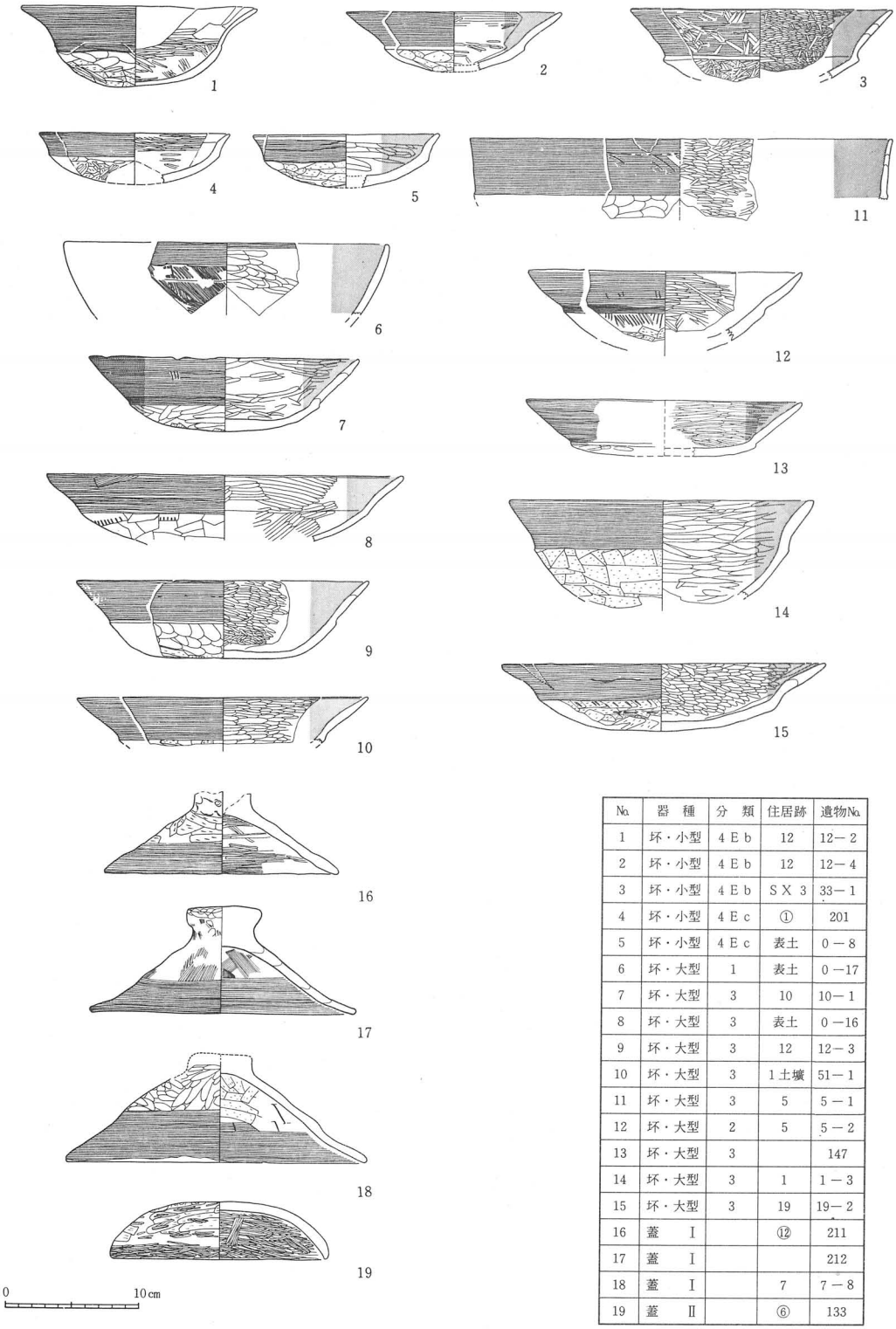
坏小型（４Ｅｂ類）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	４Ｅｂ		145
2	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	146
3	坏・小型	４Ｅｂ		150
4	坏・小型	４Ｅｂ		151
5	坏・小型	４Ｅｂ		158
6	坏・小型	４Ｅｂ		160
7	坏・小型	４Ｅｂ		163
8	坏・小型	４Ｅｂ	⑨	164
9	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	165
10	坏・小型	４Ｅｂ		166
11	坏・小型	４Ｅｂ		167
12	坏・小型	４Ｅｂ	③土壙	168
13	坏・小型	４Ｅｂ	②土壙	169
14	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	170
15	坏・小型	４Ｅｂ		171
16	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	173
17	坏・小型	４Ｅｂ	⑭	174
18	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	175
19	坏・小型	４Ｅｂ		178
20	坏・小型	４Ｅｂ	表土	185
21	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	187
22	坏・小型	４Ｅｂ	⑱	246
23	坏・小型	４Ｅｂ	表土	０－７
24	坏・小型	４Ｅｂ	表土	０－９
25	坏・小型	４Ｅｂ	表土	０－10
26	坏・小型	４Ｅｂ	表土	０－11
27	坏・小型	４Ｅｂ	表土	０－15
28	坏・小型	４Ｅｂ	4	４－１
29	坏・小型	４Ｅｂ	5	５－３
30	坏・小型	４Ｅｂ	5	５－５
31	坏・小型	４Ｅｂ	7	７－６

第121図　栗遺跡出土土師器集成図－14

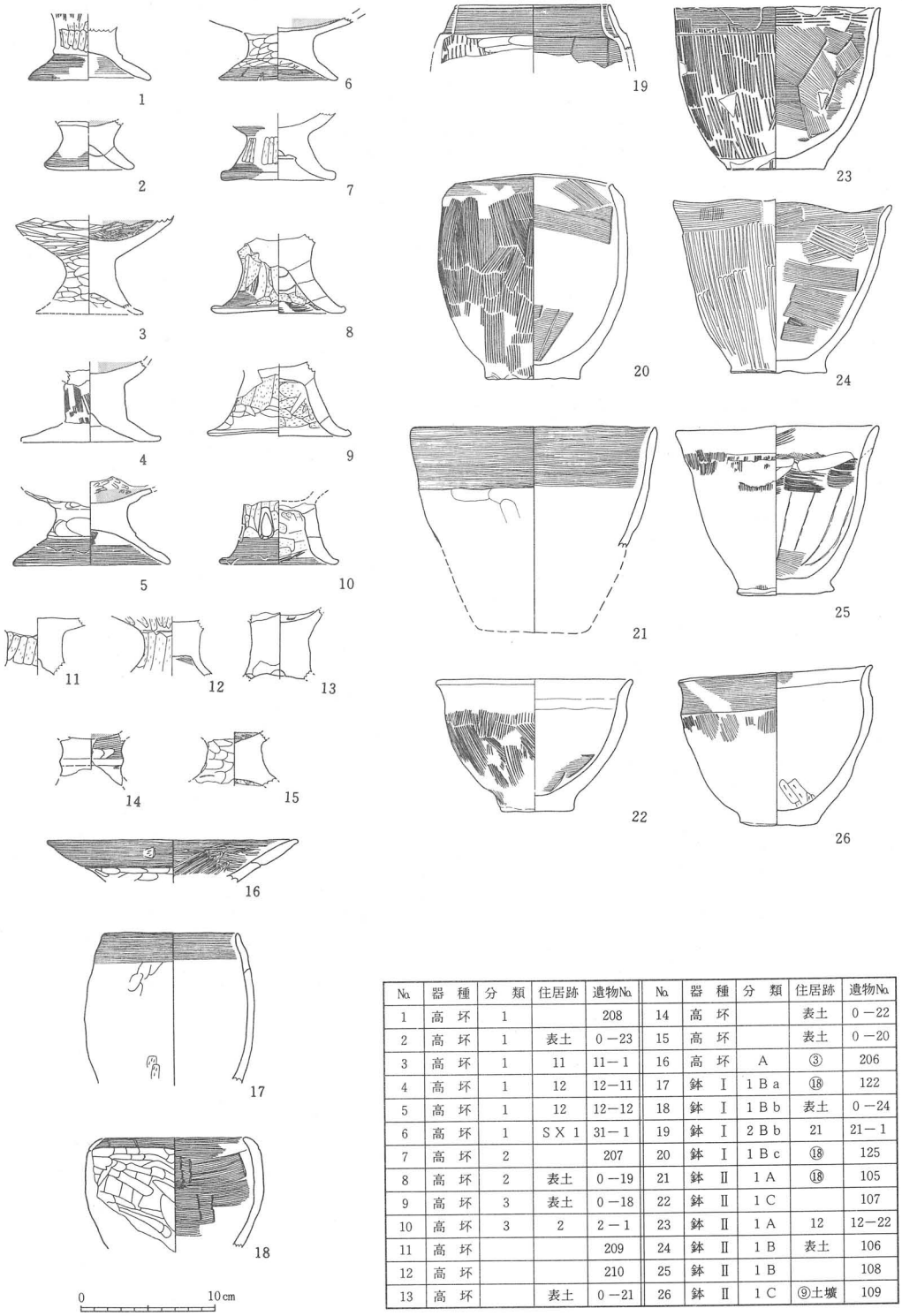
坏小型（４Ｅｂ類～４Ｅｃ類）坏大型（１類～３類） 蓋（Ⅰ・Ⅱ類）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	坏・小型	４Ｅｂ	12	12－２
2	坏・小型	４Ｅｂ	12	12－４
3	坏・小型	４Ｅｂ	ＳＸ３	33－１
4	坏・小型	４Ｅｃ	①	201
5	坏・小型	４Ｅｃ	表土	０－８
6	坏・大型	１	表土	０－17
7	坏・大型	３	10	10－１
8	坏・大型	３	表土	０－16
9	坏・大型	３	12	12－３
10	坏・大型	３	１土壙	51－１
11	坏・大型	３	５	５－１
12	坏・大型	２	５	５－２
13	坏・大型	３		147
14	坏・大型	３	１	１－３
15	坏・大型	３	19	19－２
16	蓋　Ⅰ		⑫	211
17	蓋　Ⅰ			212
18	蓋　Ⅰ		７	７－８
19	蓋　Ⅱ		⑥	133

第122図　栗遺跡出土土師器集成図－15

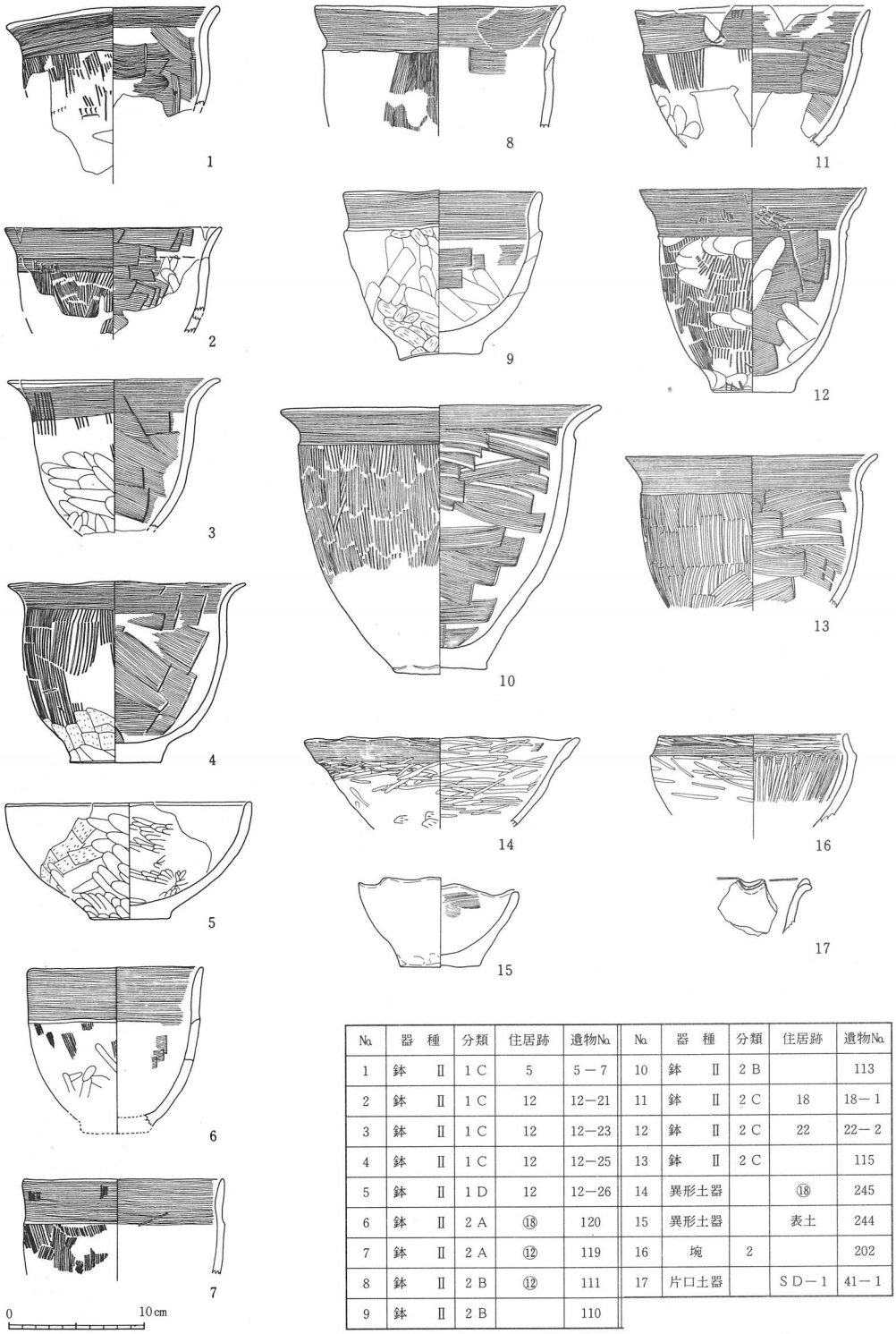
高坏・鉢（Ⅰ類１Ｂａ～２Ｂｃ・２類１Ａ～１Ｃ）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	高　坏	1		208	14	高　坏		表土	0－22
2	高　坏	1	表土	0－23	15	高　坏		表土	0－20
3	高　坏	1	11	11－1	16	高　坏	A	③	206
4	高　坏	1	12	12－11	17	鉢　Ⅰ	1Ｂａ	⑱	122
5	高　坏	1	12	12－12	18	鉢　Ⅰ	1Ｂｂ	表土	0－24
6	高　坏	1	ＳＸ１	31－1	19	鉢　Ⅰ	2Ｂｂ	21	21－1
7	高　坏	2		207	20	鉢　Ⅰ	1Ｂｃ	⑱	125
8	高　坏	2	表土	0－19	21	鉢　Ⅱ	1Ａ	⑱	105
9	高　坏	3	表土	0－18	22	鉢　Ⅱ	1Ｃ		107
10	高　坏	3	2	2－1	23	鉢　Ⅱ	1Ａ	12	12－22
11	高　坏			209	24	鉢　Ⅱ	1Ｂ	表土	106
12	高　坏			210	25	鉢　Ⅱ	1Ｂ		108
13	高　坏		表土	0－21	26	鉢　Ⅱ	1Ｃ	⑨土壙	109

第123図　栗遺跡出土土師器集成図－16

鉢Ⅱ類（1C～2C）・片口土器



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	鉢　Ⅱ	1C	5	5－7	10	鉢　Ⅱ	2B		113
2	鉢　Ⅱ	1C	12	12－21	11	鉢　Ⅱ	2C	18	18－1
3	鉢　Ⅱ	1C	12	12－23	12	鉢　Ⅱ	2C	22	22－2
4	鉢　Ⅱ	1C	12	12－25	13	鉢　Ⅱ	2C		115
5	鉢　Ⅱ	1D	12	12－26	14	異形土器		⑱	245
6	鉢　Ⅱ	2A	⑱	120	15	異形土器		表土	244
7	鉢　Ⅱ	2A	⑫	119	16	埦	2		202
8	鉢　Ⅱ	2B	⑫	111	17	片口土器		SD－1	41－1
9	鉢　Ⅱ	2B		110					

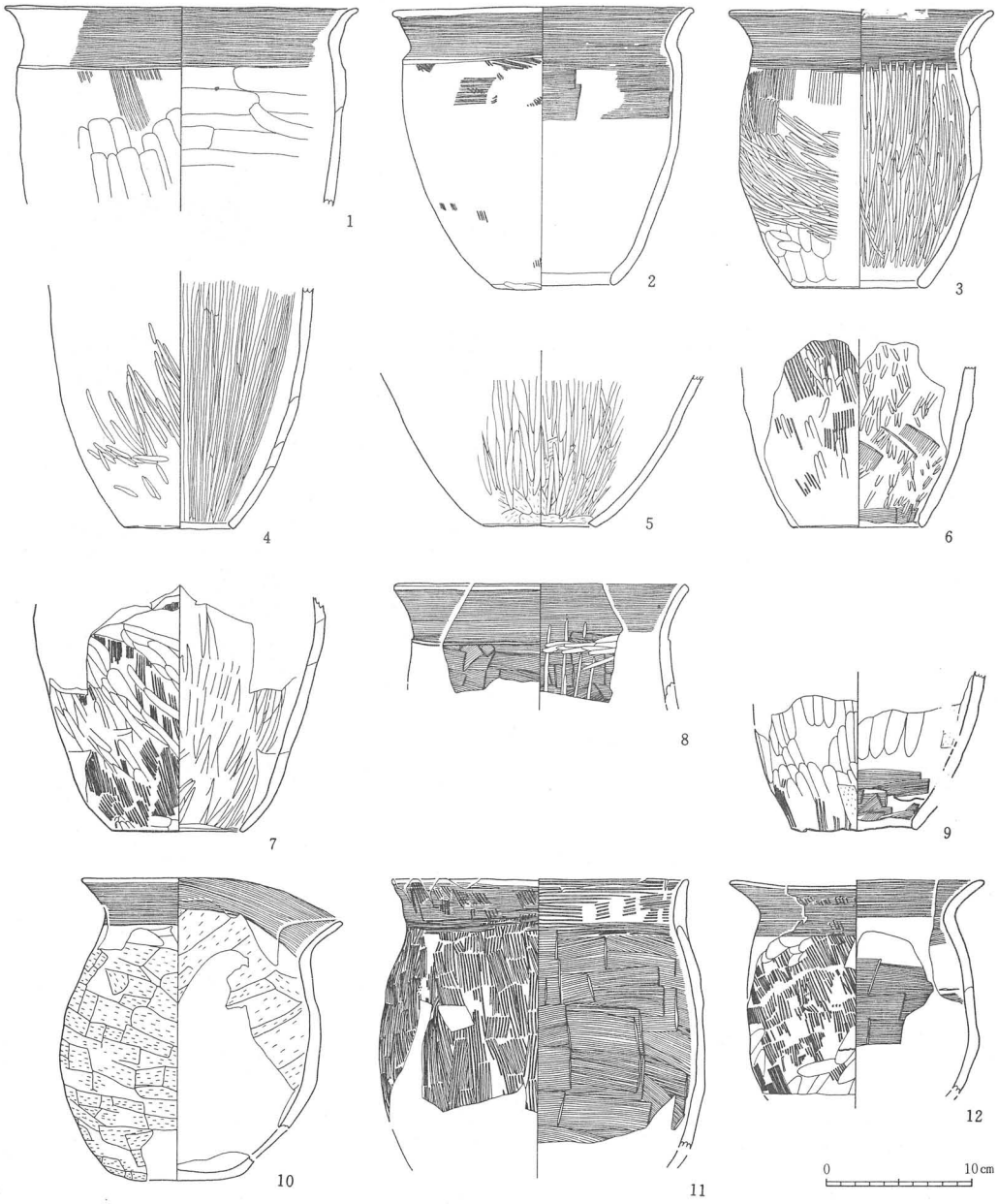
第124図　栗遺跡出土土師器集成図－17

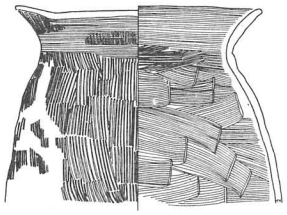
甑小型（1B～2C）・甑大型（2B～3B）

No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	甑・小型	1B		96	7	甑・大型	2B		83
2	甑・小型	2Ab		103	8	甑・大型	2B	12	12－41
3	甑・小型	2Ba	河原石群	97	9	甑・大型	3A	表土	88
4	甑・小型	2Bb		101	10	甑・大型	3A	表土	89
5	甑・小型	2Bb	河原石群	102	11	甑・大型	3B		84
6	甑・小型	2C	⑱	99	12	甑・大型	3B	8	8－1

第125図　栗遺跡出土土師器集成図－18

甑大型（３Ｃ）・甕Ⅱ類小型（１Ｂ～１Ｃ）

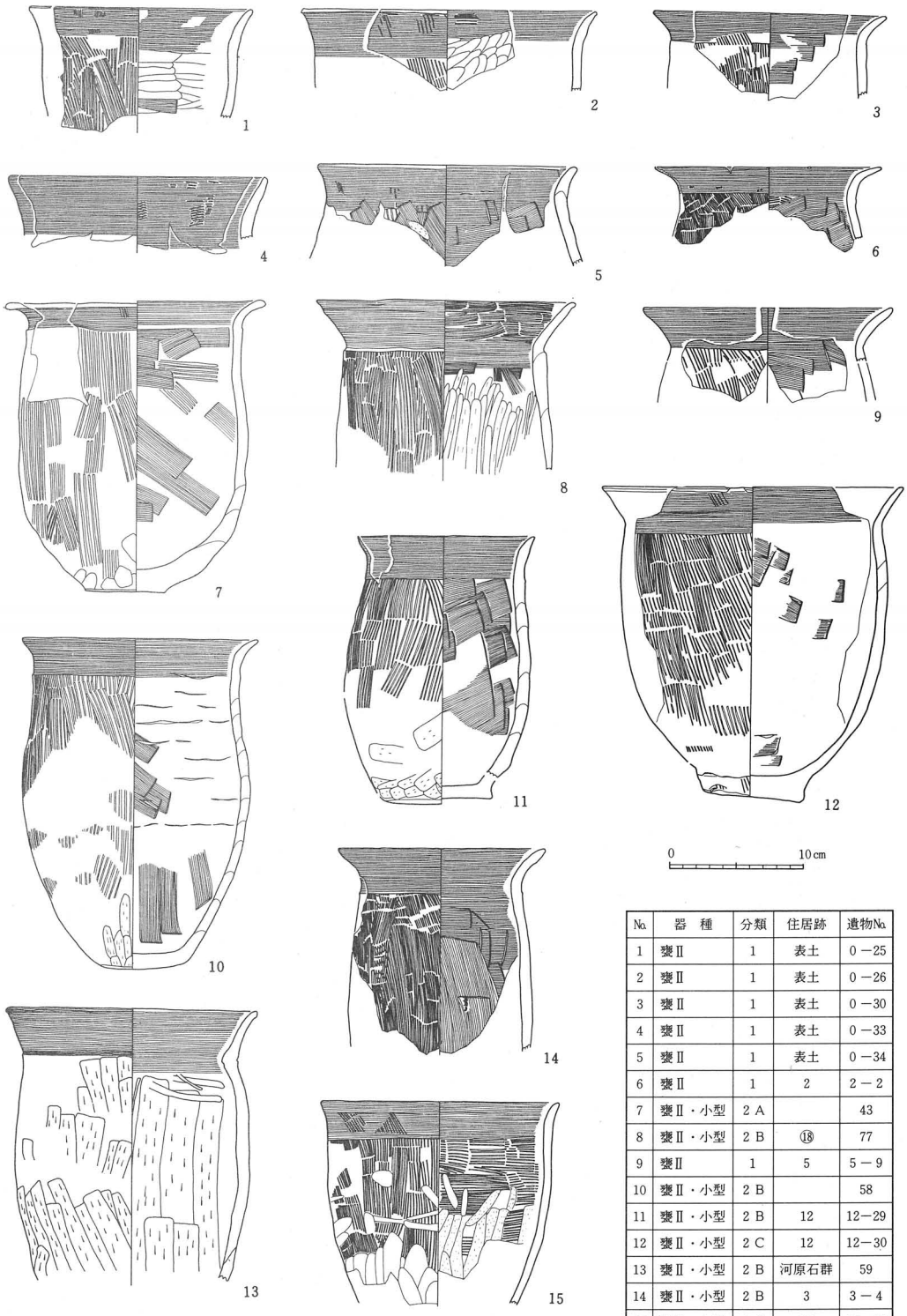




No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.	No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甑・大型	３Ｃ	⑤土壙	90	8	甑・大型		4	4－2
2	甑・大型	３Ｃ		91	9	甑・大型		12	12－42
3	甑・大型	３Ｄ	表土	87	10	甕Ⅱ・小型	１Ａ	7	7－4
4	甑・大型		⑮土壙	241	11	甕Ⅱ・小型	１Ｂ	5	5－8
5	甑・大型			243	12	甕Ⅱ・小型	１Ｃ	ＳＸ１	31－3
6	甑・大型		表土	0－38	13	甕Ⅱ	1		35
7	甑・大型		表土	0－39					

第126図　栗遺跡出土土師器集成図－19

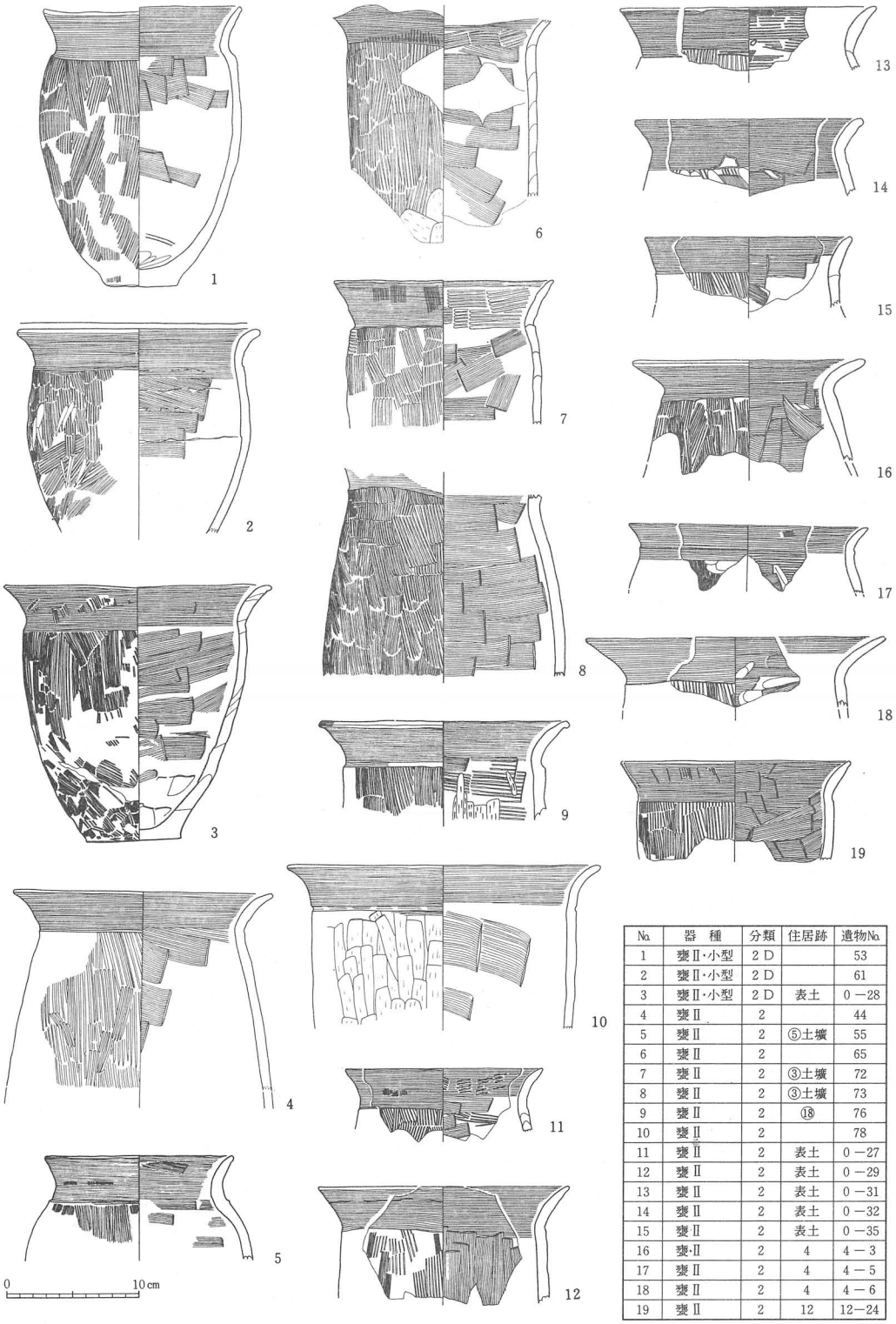
甕Ⅱ類小型 （1～2C）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ	1	表土	0－25
2	甕Ⅱ	1	表土	0－26
3	甕Ⅱ	1	表土	0－30
4	甕Ⅱ	1	表土	0－33
5	甕Ⅱ	1	表土	0－34
6	甕Ⅱ	1	2	2－2
7	甕Ⅱ・小型	2 A		43
8	甕Ⅱ・小型	2 B	⑱	77
9	甕Ⅱ	1	5	5－9
10	甕Ⅱ・小型	2 B		58
11	甕Ⅱ・小型	2 B	12	12－29
12	甕Ⅱ・小型	2 C	12	12－30
13	甕Ⅱ・小型	2 B	河原石群	59
14	甕Ⅱ・小型	2 B	3	3－4
15	甕Ⅱ・小型	2 C	12	12－27

第127図　栗遺跡出土土師器集成図－20

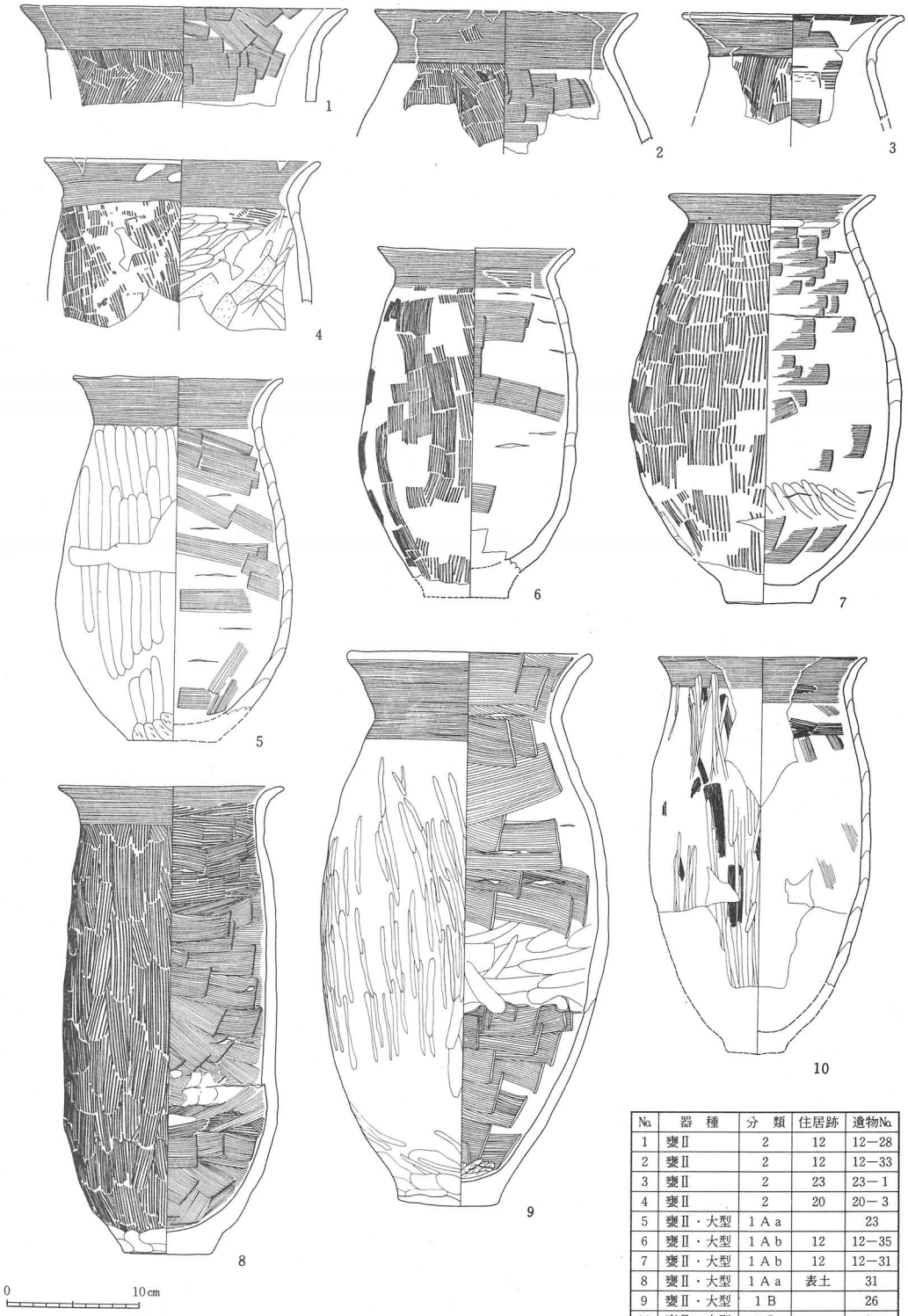
甕Ⅱ類小型（２Ｄ）



No.	器　種	分類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ・小型	２Ｄ		53
2	甕Ⅱ・小型	２Ｄ		61
3	甕Ⅱ・小型	２Ｄ	表土	０－28
4	甕Ⅱ	2		44
5	甕Ⅱ	2	⑤土壙	55
6	甕Ⅱ	2		65
7	甕Ⅱ	2	③土壙	72
8	甕Ⅱ	2	③土壙	73
9	甕Ⅱ	2	⑱	76
10	甕Ⅱ	2		78
11	甕Ⅱ	2	表土	０－27
12	甕Ⅱ	2	表土	０－29
13	甕Ⅱ	2	表土	０－31
14	甕Ⅱ	2	表土	０－32
15	甕Ⅱ	2	表土	０－35
16	甕・Ⅱ	2	4	4－3
17	甕Ⅱ	2	4	4－5
18	甕Ⅱ	2	4	4－6
19	甕Ⅱ	2	12	12－24

第128図　栗遺跡出土土師器集成図－21

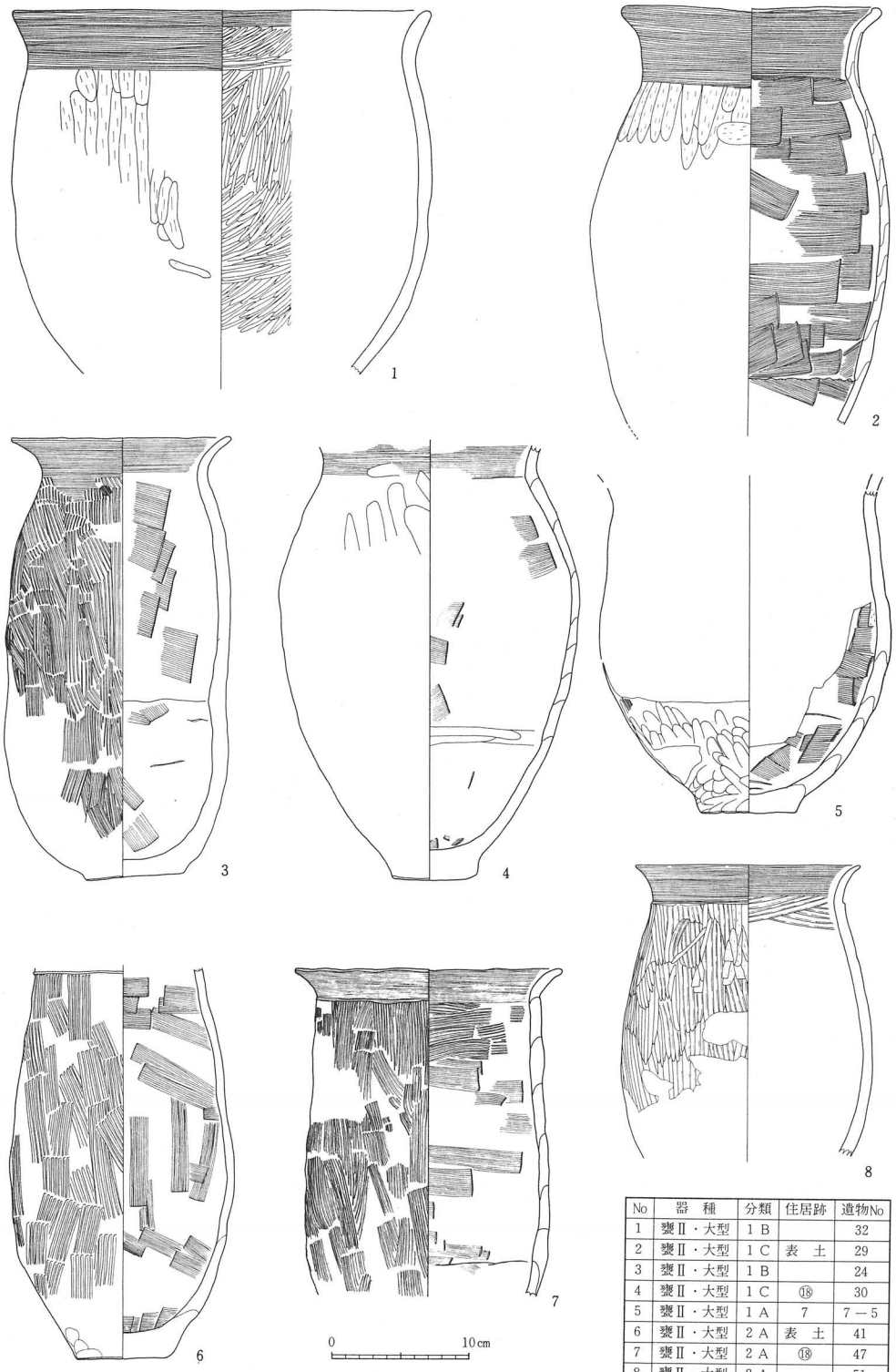
甕Ⅱ類小型・甕Ⅱ類大型（１Ａａ～１Ｂ）



No.	器　種	分　類	住居跡	遺物No.
1	甕Ⅱ	2	12	12—28
2	甕Ⅱ	2	12	12—33
3	甕Ⅱ	2	23	23—１
4	甕Ⅱ	2	20	20—３
5	甕Ⅱ・大型	１Ａａ		23
6	甕Ⅱ・大型	１Ａｂ	12	12—35
7	甕Ⅱ・大型	１Ａｂ	12	12—31
8	甕Ⅱ・大型	１Ａａ	表土	31
9	甕Ⅱ・大型	１Ｂ		26
10	甕Ⅱ・大型	１Ｂ		27

第129図　栗遺跡出土土師器集成図－22

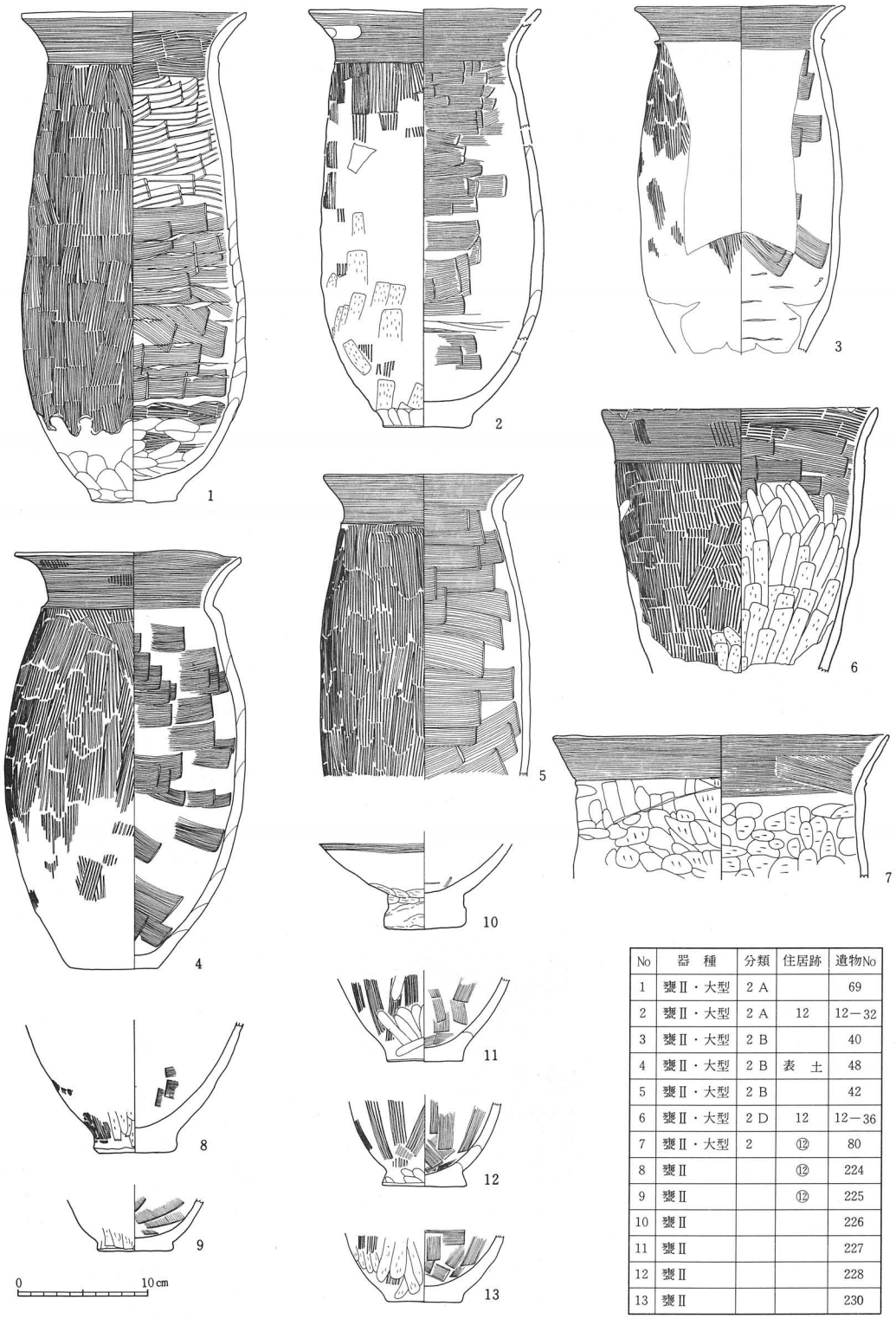
甕Ⅱ類大型（１Ｂ～２Ａ）



No	器　種	分類	住居跡	遺物No
1	甕Ⅱ・大型	１Ｂ		32
2	甕Ⅱ・大型	１Ｃ	表　土	29
3	甕Ⅱ・大型	１Ｂ		24
4	甕Ⅱ・大型	１Ｃ	⑱	30
5	甕Ⅱ・大型	１Ａ	7	7－5
6	甕Ⅱ・大型	２Ａ	表　土	41
7	甕Ⅱ・大型	２Ａ	⑱	47
8	甕Ⅱ・大型	２Ａ		51

第130図　栗遺跡出土土師器集成図－23

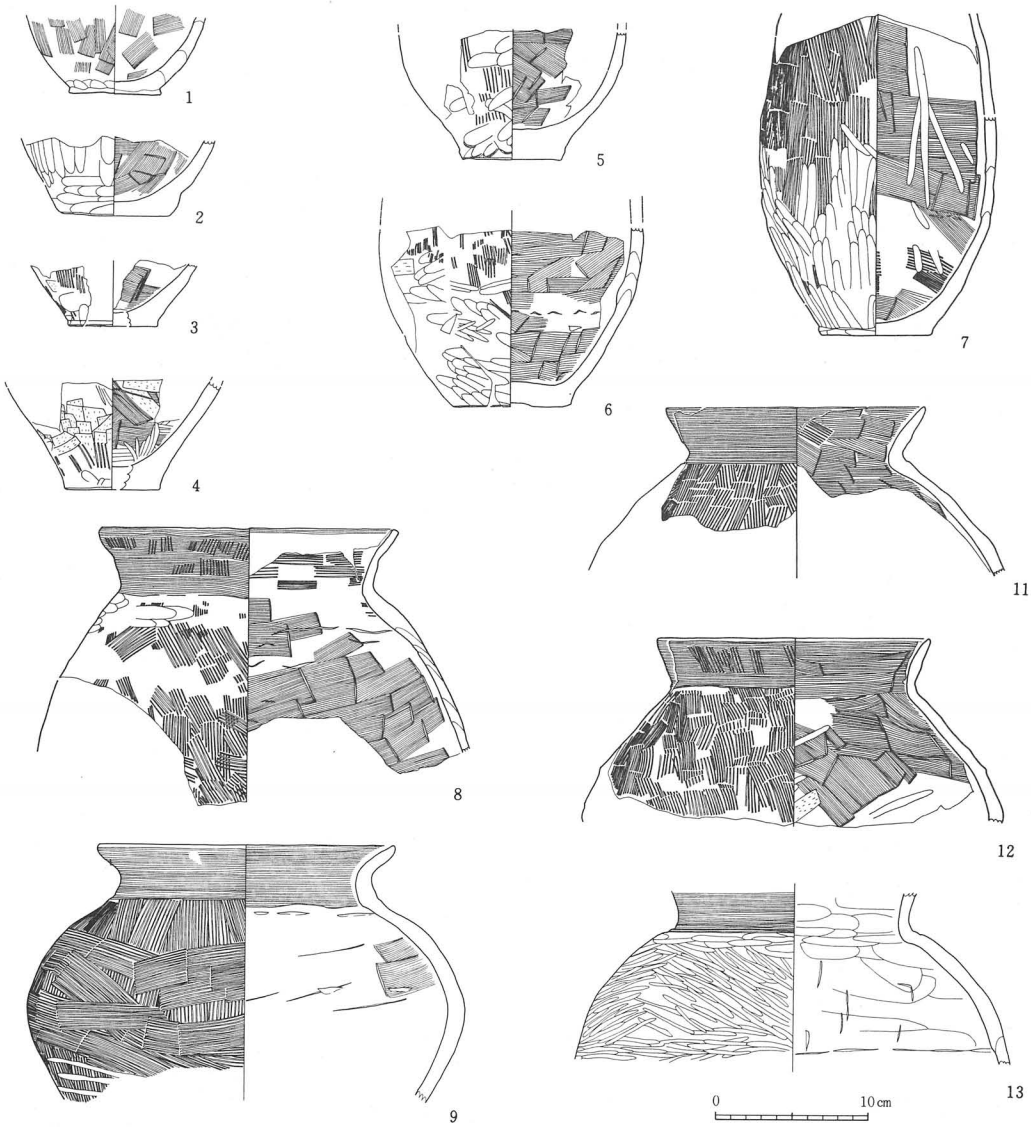
甕Ⅱ類大型（２Ａ～２Ｄ）・甕Ⅱ類小型底部



No	器　種	分類	住居跡	遺物No
1	甕Ⅱ・大型	２Ａ		69
2	甕Ⅱ・大型	２Ａ	12	12－32
3	甕Ⅱ・大型	２Ｂ		40
4	甕Ⅱ・大型	２Ｂ	表　土	48
5	甕Ⅱ・大型	２Ｂ		42
6	甕Ⅱ・大型	２Ｄ	12	12－36
7	甕Ⅱ・大型	２	⑫	80
8	甕Ⅱ		⑫	224
9	甕Ⅱ		⑫	225
10	甕Ⅱ			226
11	甕Ⅱ			227
12	甕Ⅱ			228
13	甕Ⅱ			230

第131図　栗遺跡出土土師器集成図－24

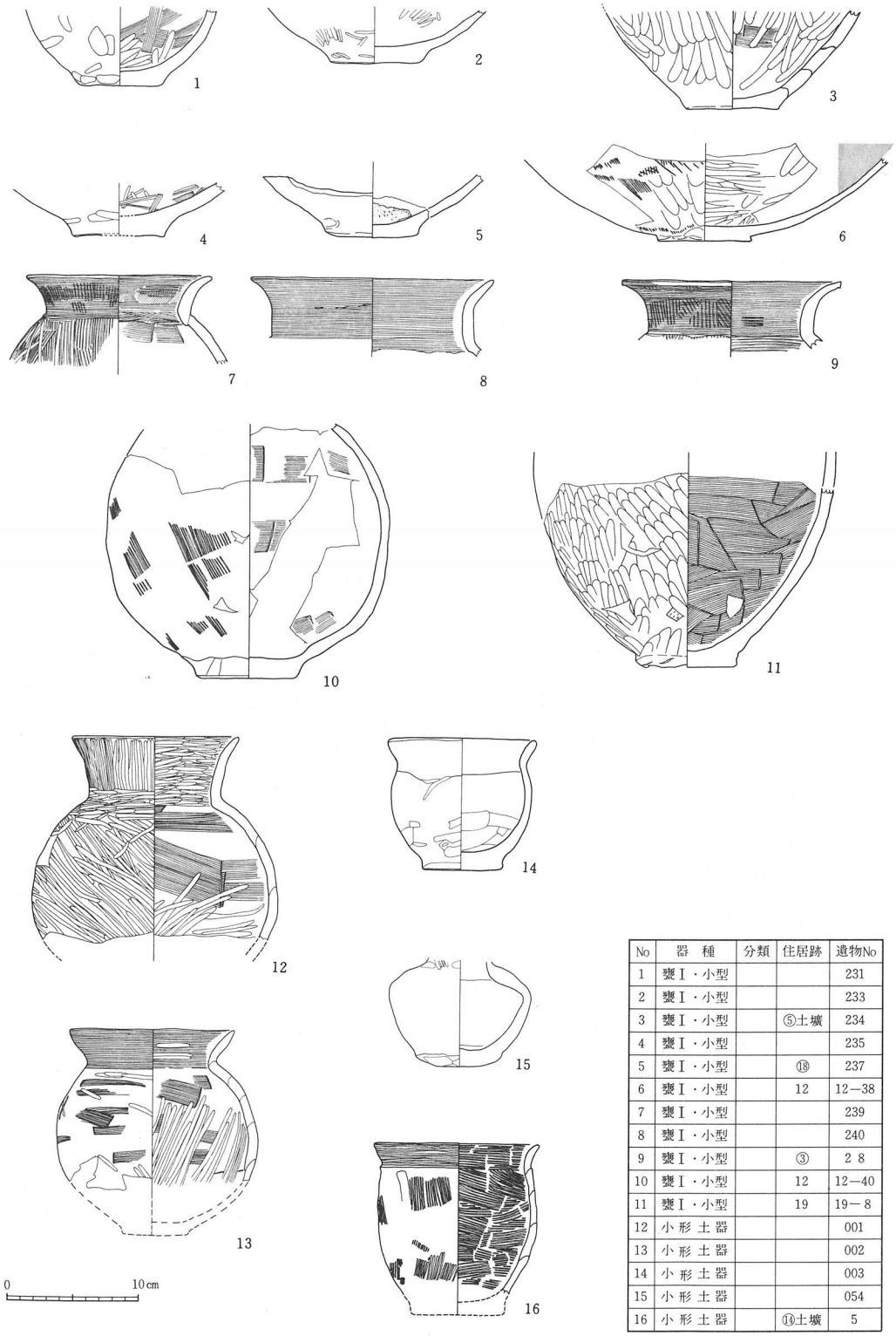
甕Ⅱ類小型底部・甕Ⅰ類小型（２Ａａ～２Ａｄ）



No	器　種	分類	住居跡	遺物No
1	甕Ⅱ		表　土	232
2	甕Ⅱ		表　土	0 －36
3	甕Ⅱ		表　土	0 －37
4	甕Ⅱ		4	4 －4
5	甕Ⅱ		5	5 －10
6	甕Ⅱ		20	20－2
7	甕Ⅱ		12	12－34
8	甕Ⅰ・小型	2Aa	2	2 －3
9	甕Ⅰ・小型	2Aa		12
10	甕Ⅰ・小型	2Aa	⑱	21
11	甕Ⅰ・小型	2Aa	3	3 －5
12	甕Ⅰ・小型	2Aa	12	12－39
13	甕Ⅰ・小型	2Ad		17

第132図　栗遺跡出土土師器集成図－25

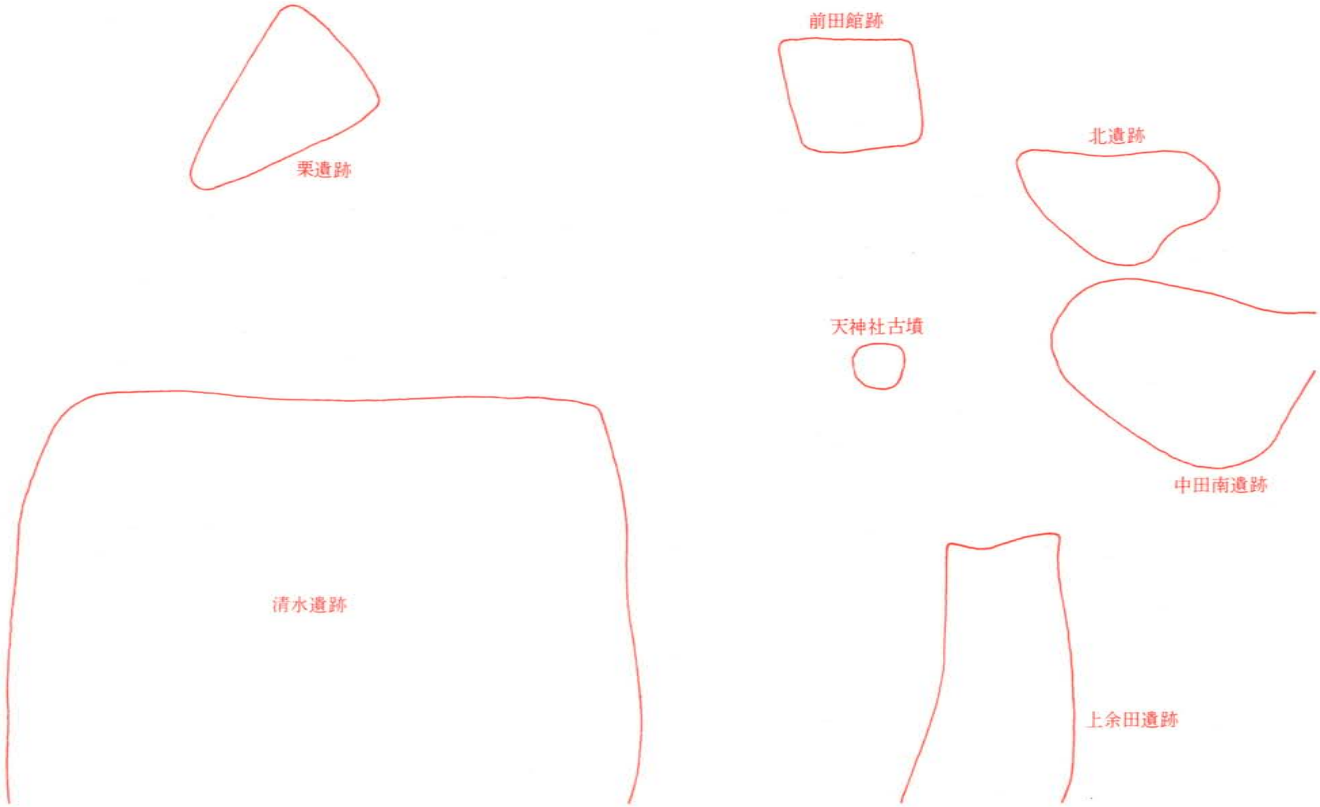
甕Ⅰ類小型・小形土器



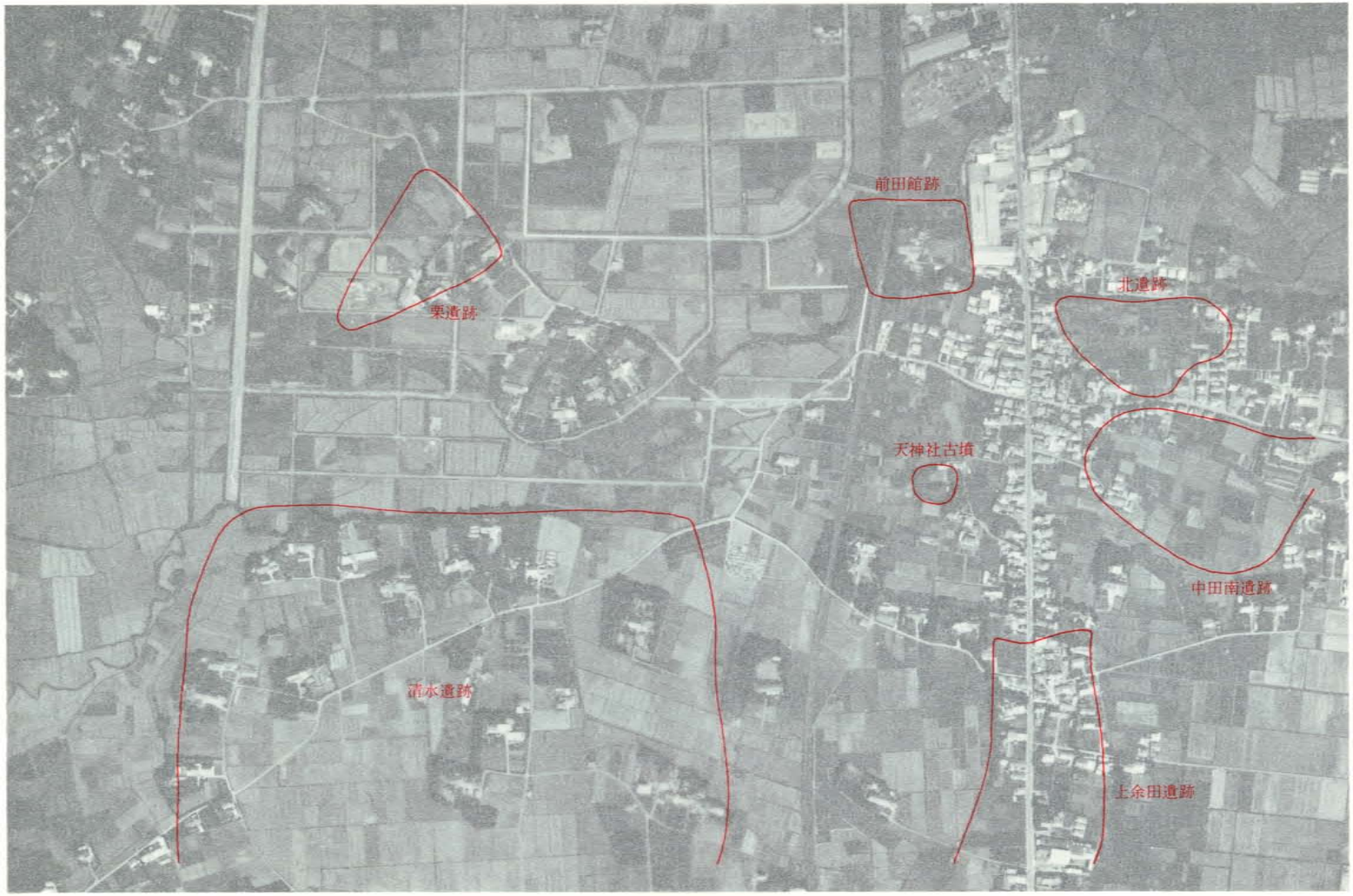
No	器　種	分類	住居跡	遺物No
1	甕Ⅰ・小型			231
2	甕Ⅰ・小型			233
3	甕Ⅰ・小型		⑤土壙	234
4	甕Ⅰ・小型			235
5	甕Ⅰ・小型		⑱	237
6	甕Ⅰ・小型		12	12−38
7	甕Ⅰ・小型			239
8	甕Ⅰ・小型			240
9	甕Ⅰ・小型		③	2 8
10	甕Ⅰ・小型		12	12−40
11	甕Ⅰ・小型		19	19−8
12	小形土器			001
13	小形土器			002
14	小形土器			003
15	小形土器			054
16	小形土器		⑭土壙	5

第133図　栗遺跡出土土師器集成図−26

写　真　図　版


栗遺跡
前田館跡
北遺跡
天神社古墳
中田南遺跡
清水遺跡
上余田遺跡

図版１　栗遺跡周辺の空中写真1/10,000(建設省国土地理院)

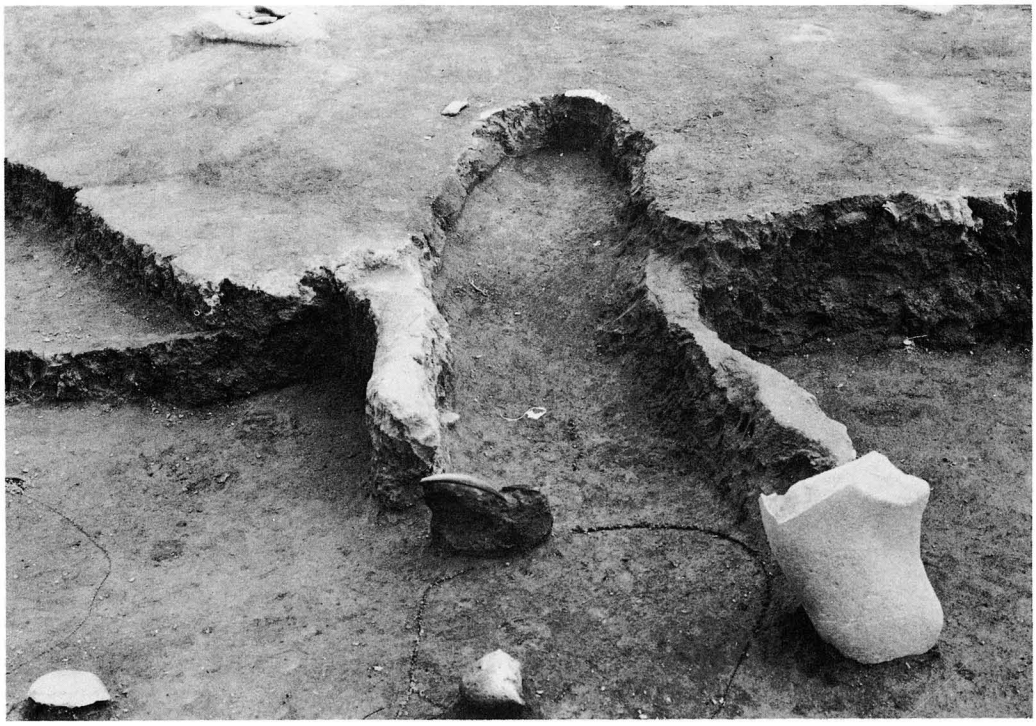


図版１　栗遺跡周辺の空中写真1/10,000(建設省国土地理院)

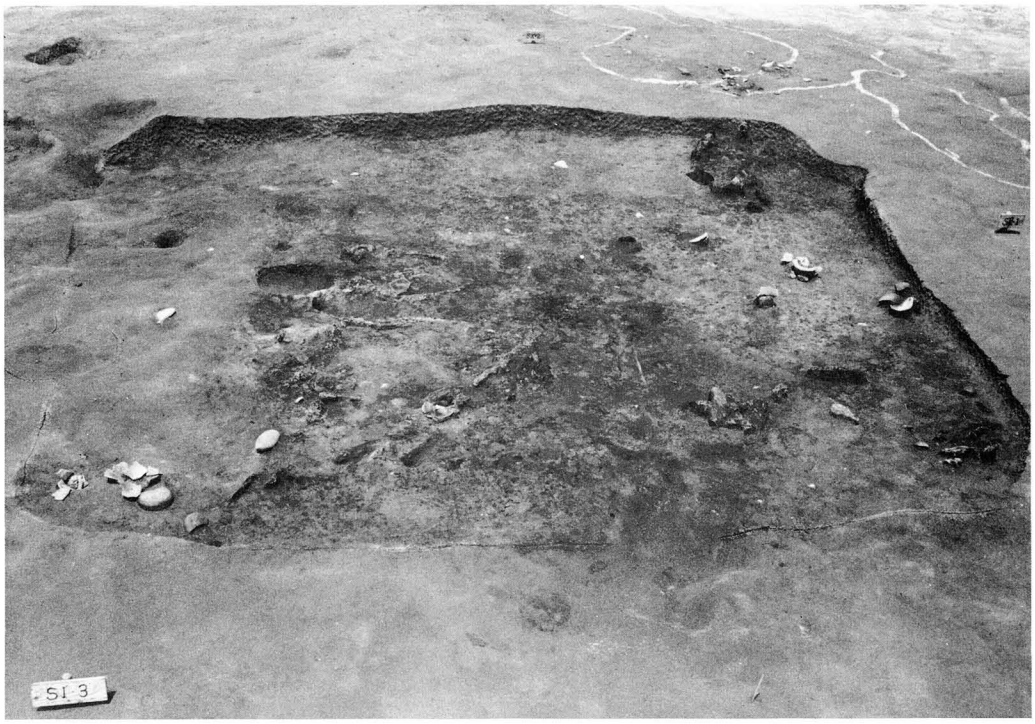
図版２　栗遺跡全景―南東より―

図版３　栗遺跡全景―北西より―

図版４　上：遺構検出状況―南東より―
下：１号住居跡―南より―

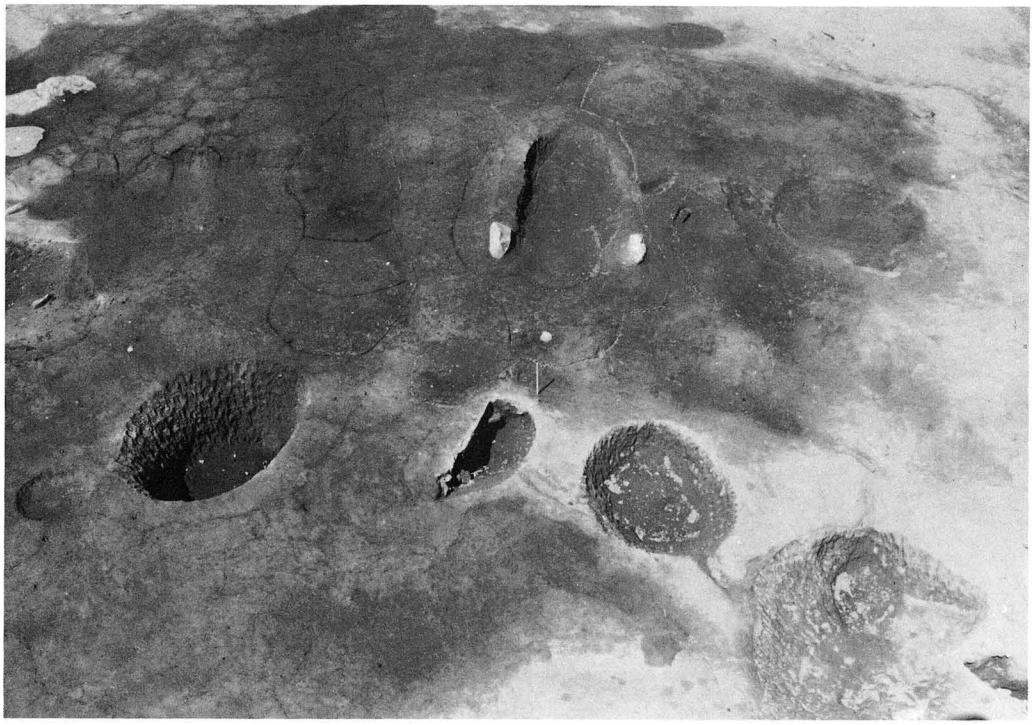


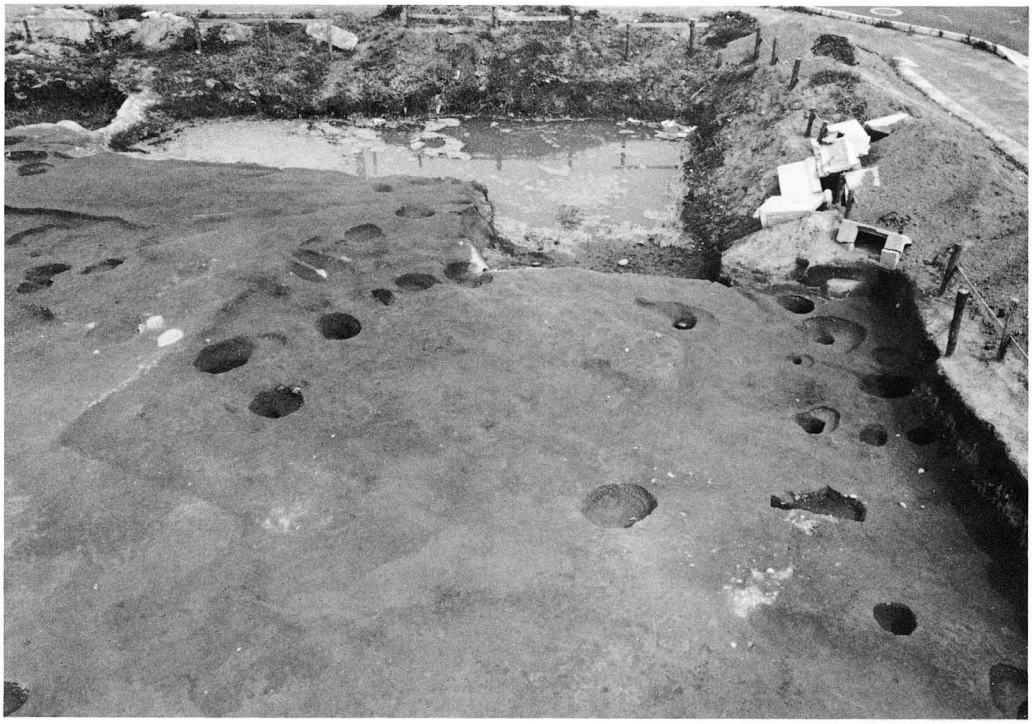
図版５　上：１号住居跡カマド―南より―
下：２号住居跡―南より―



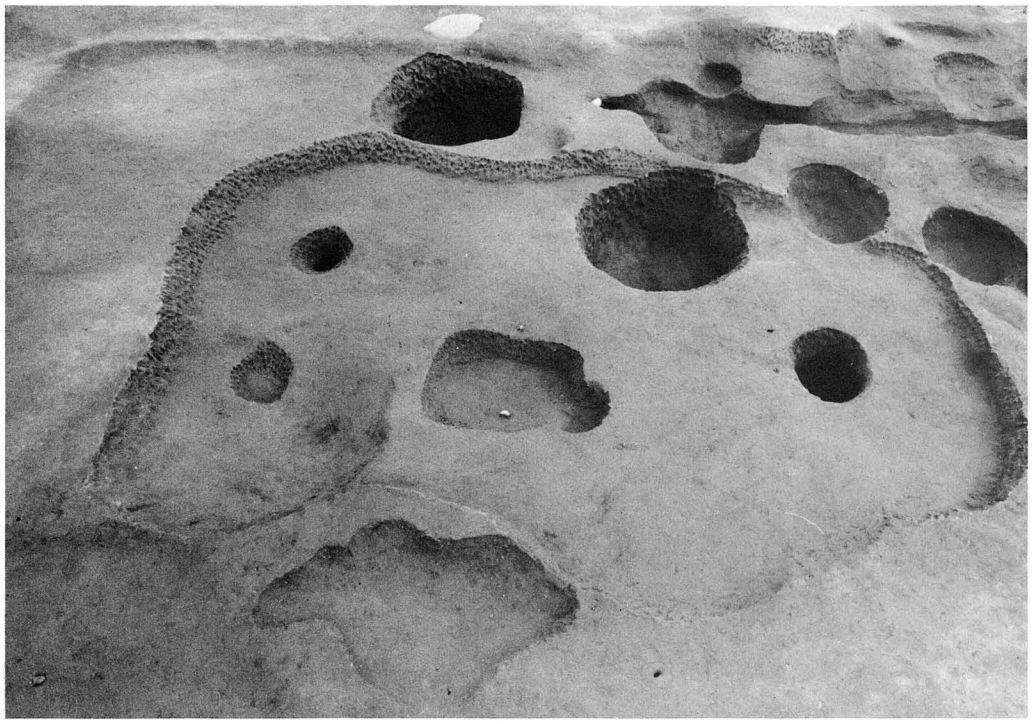
図版６　上：３号住居跡炭化材・遺物出土状況―南より―
下：３号住居跡―南より―

図版７．　上：４号住居跡―東より―
下：５号住居跡遺物・礫出土状況―南より―

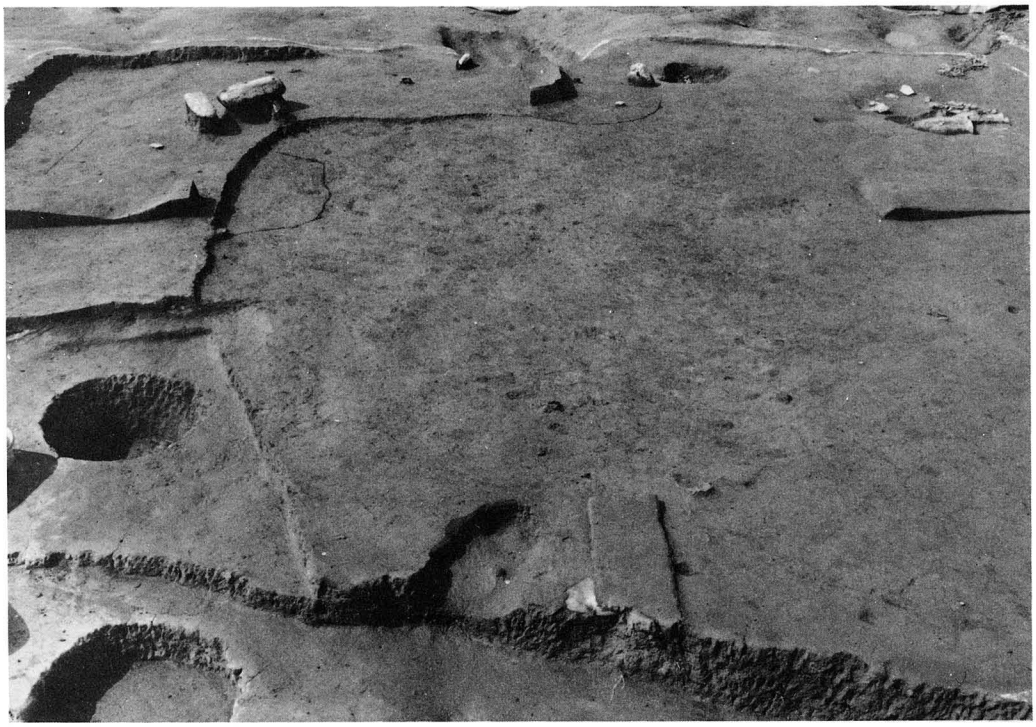




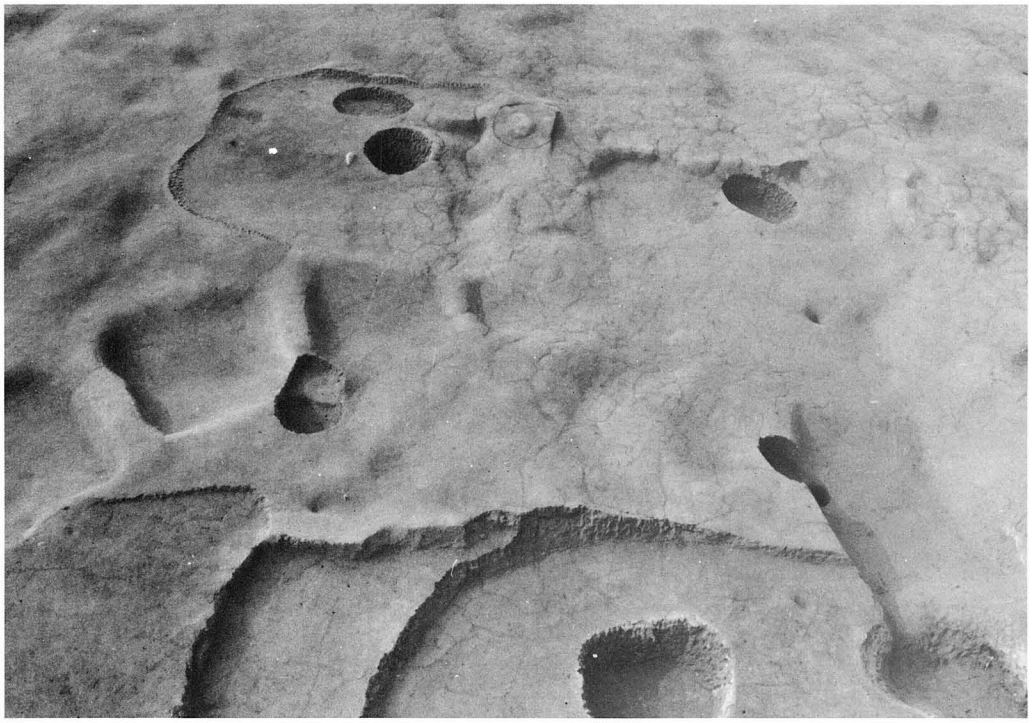
図版８　上：５号住居跡カマド(中央が第２カマド)―南より―
下：５号住居跡―南西より―



図版９　上：５号住居跡貼床下土壙―南より―
下：６号住居跡―南より―

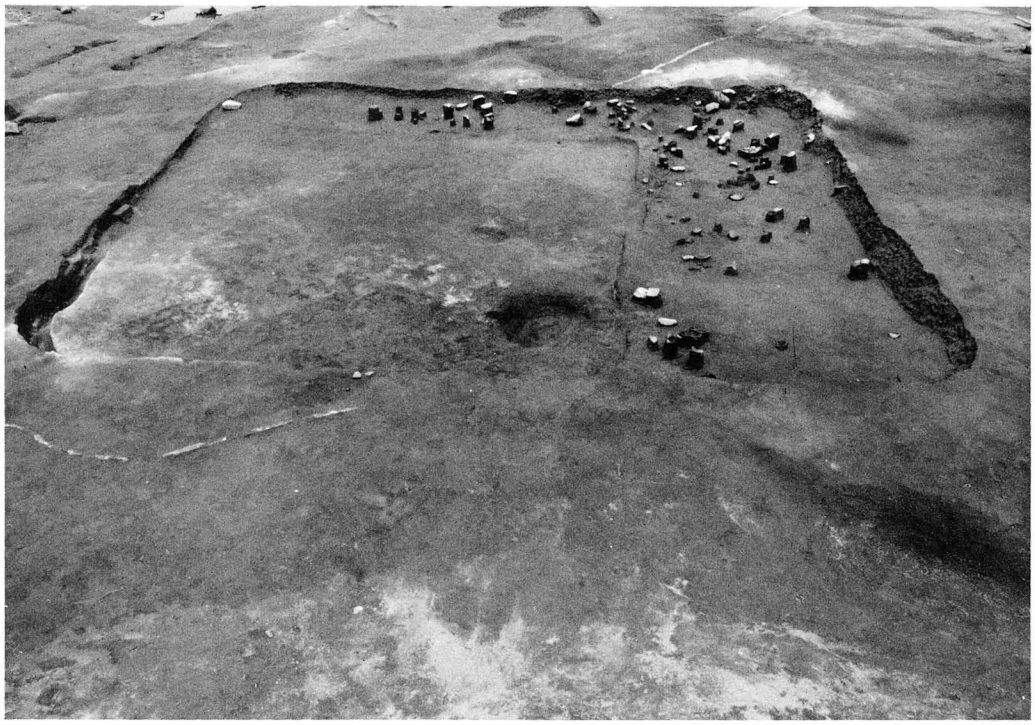


図版10　上：７号住居跡遺物出土状況―南より―
下：７号住居跡―南より―

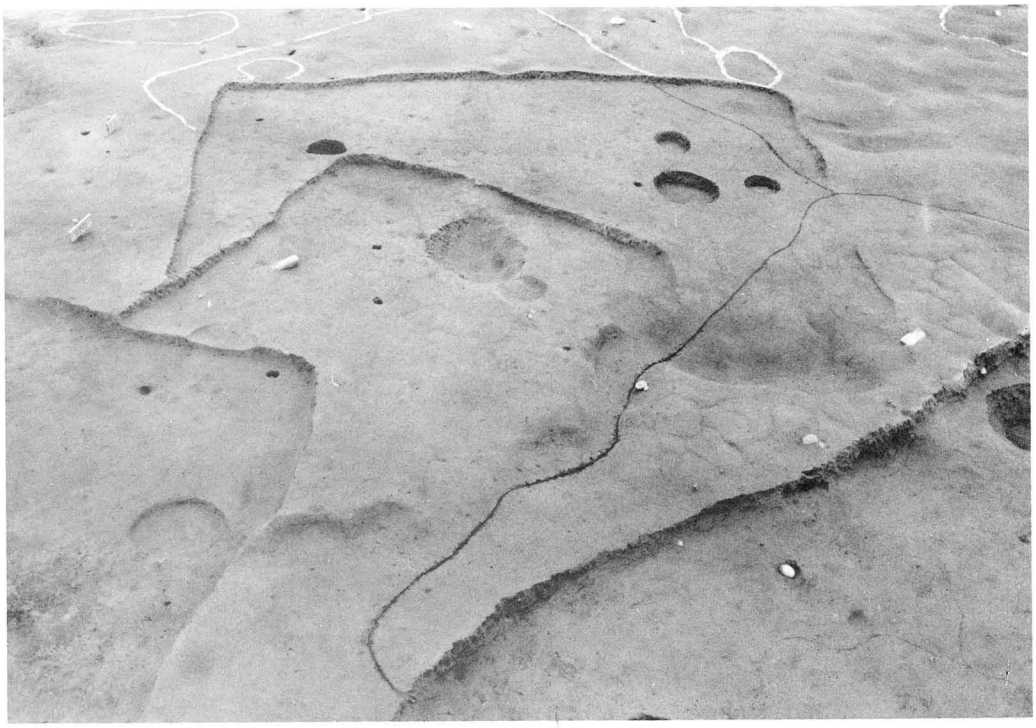


図版11　上：８号住居跡―南より―
下：10号住居跡炭化材出土状況―南西より―

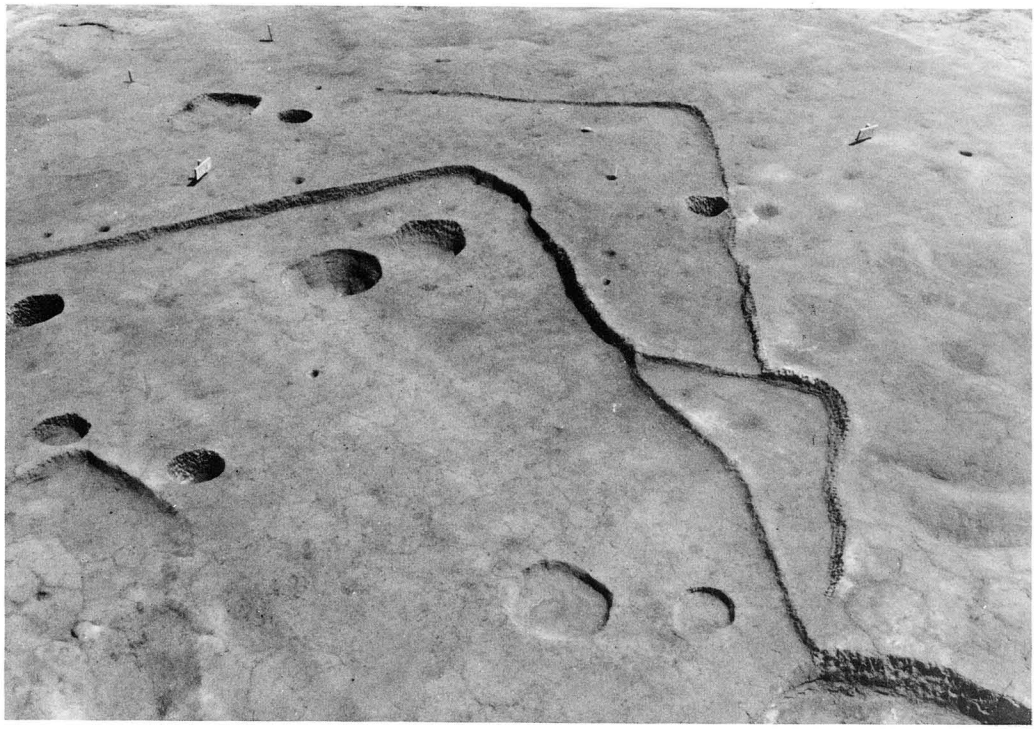
図版12　上：10号住居跡―南西より―
下：11号住居跡―南西より―



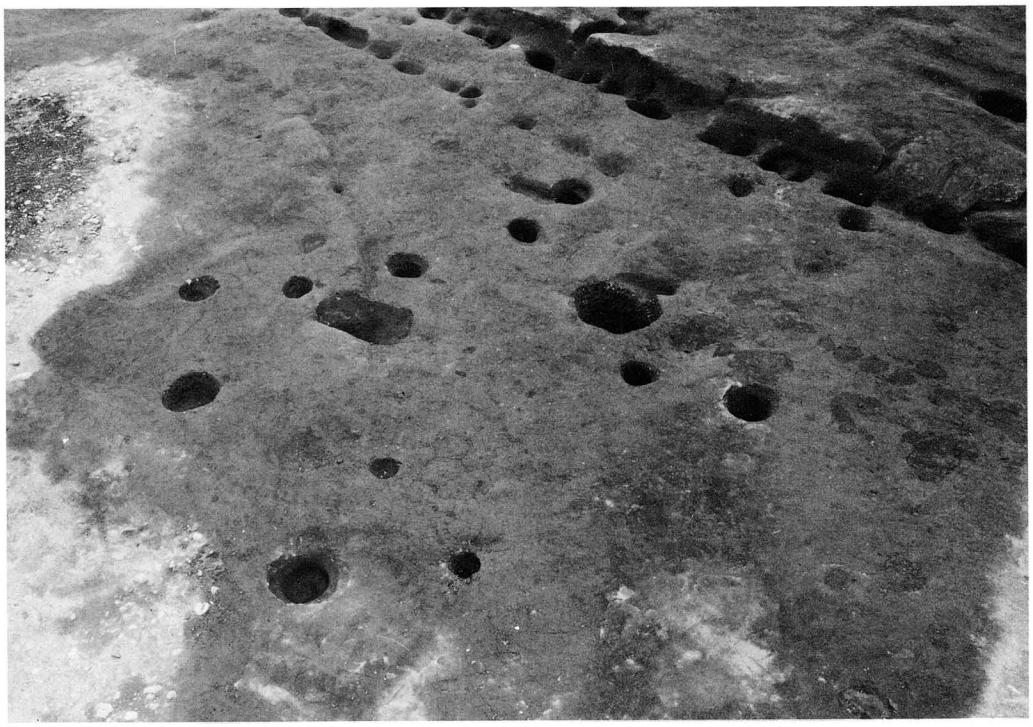
図版13　上：12号住居跡遺物出土状況（９号住居跡とした部分）―南より―
下：12号住居跡遺物出土状況―南より―



図版14　上：12号住居跡―南より―
下：13号住居跡―南西より―

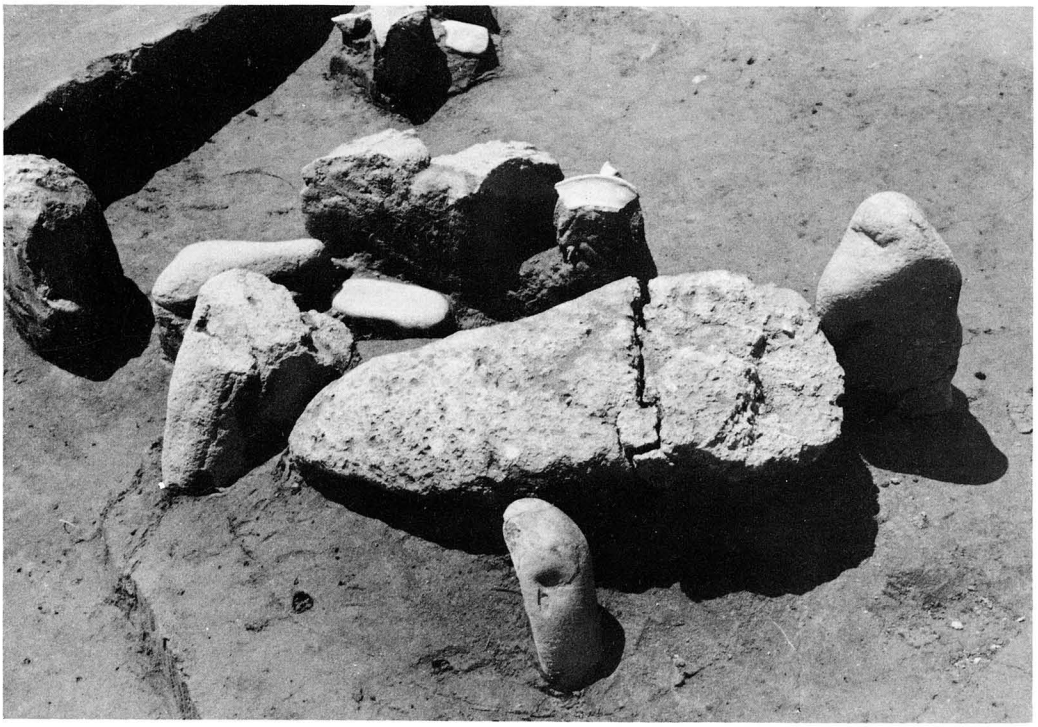


図版15　上：14号住居跡―南西より―
下：15号住居跡―西より―

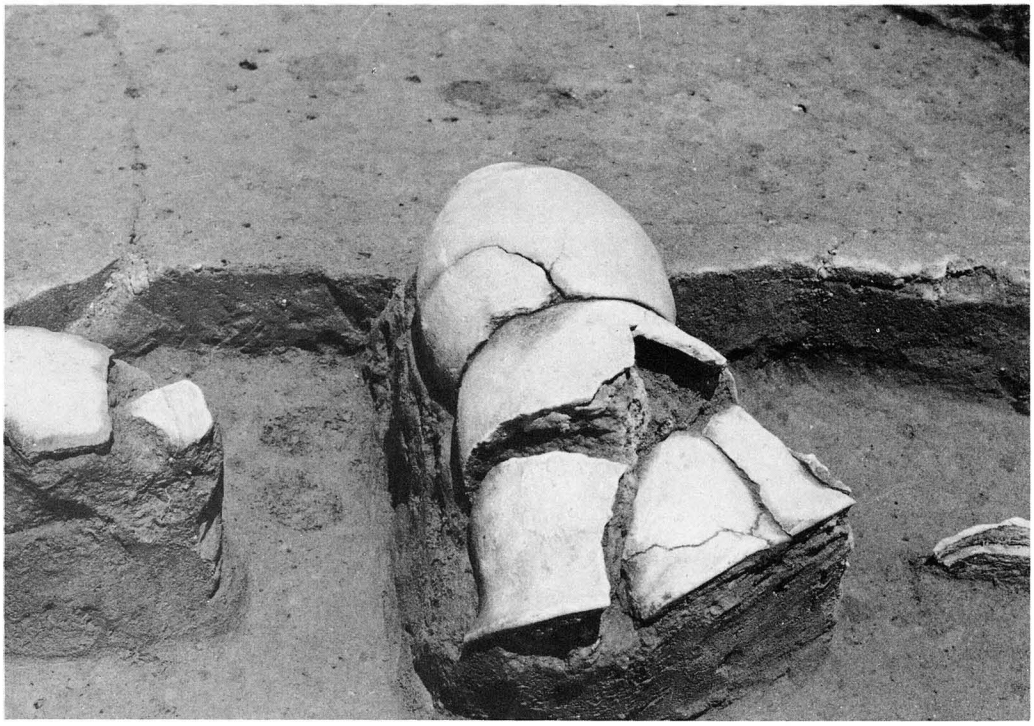


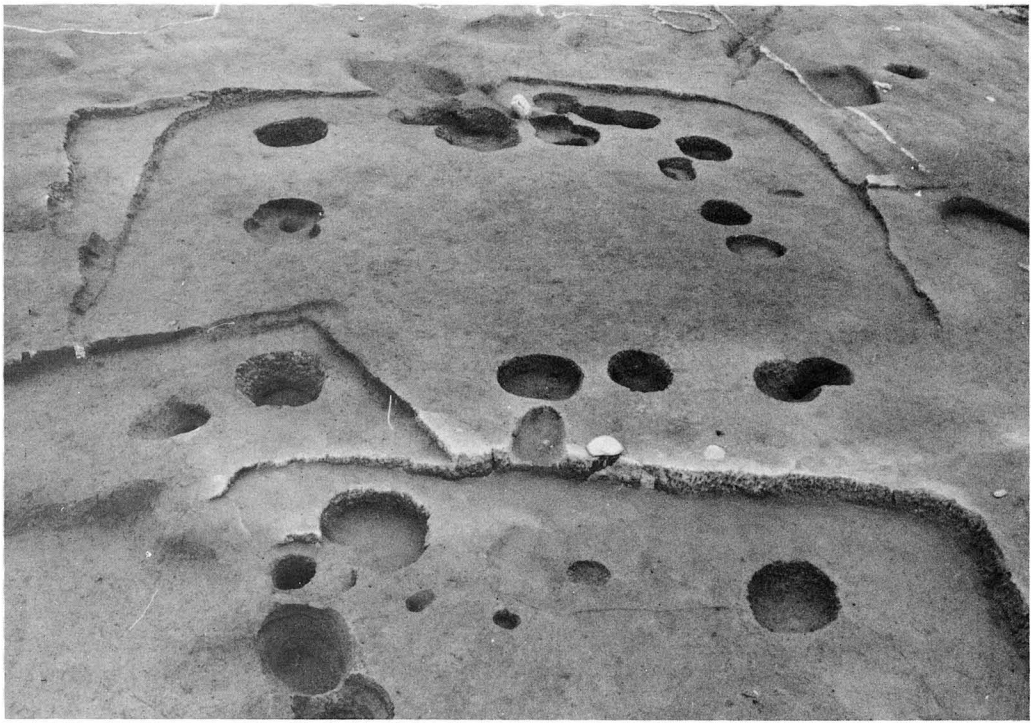
図版16　上：16号住居跡―南西より―
下：17号住居跡―北西より―

図版17　上：17号住居跡遺物出土状況（東側）―北西より―
下：17号住居跡遺物出土状況（西側）―南東より―



図版18　上：18号住居跡
下：18号住居跡カマド―北東より―



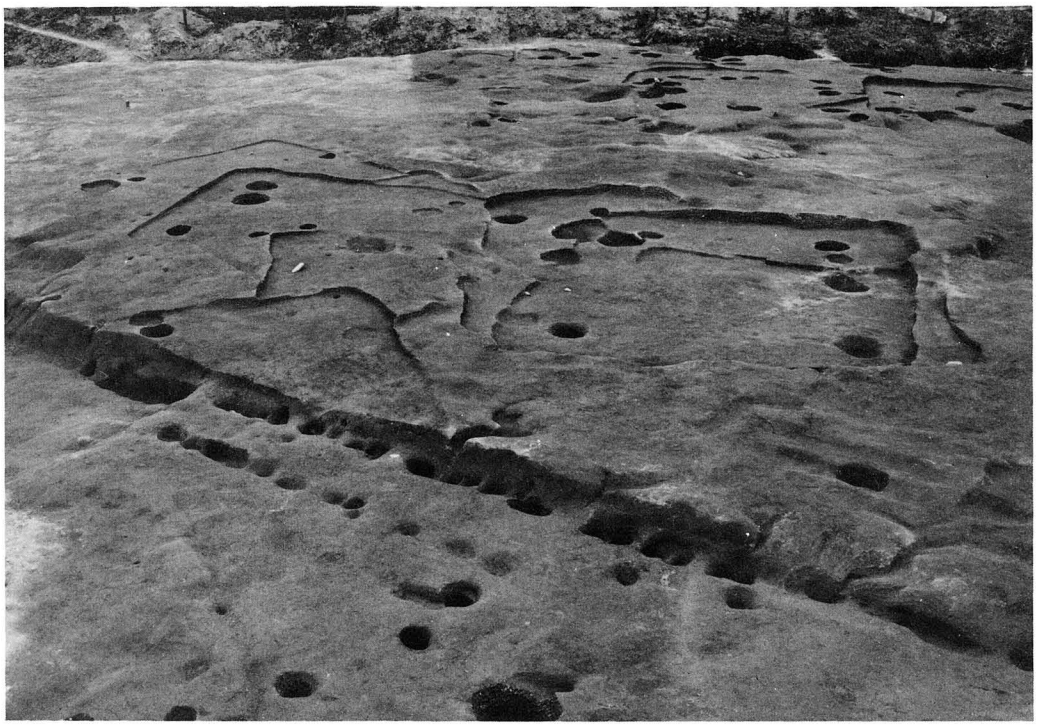


図版19　上：18号住居跡遺物出土状況
下：19号住居跡―南より―

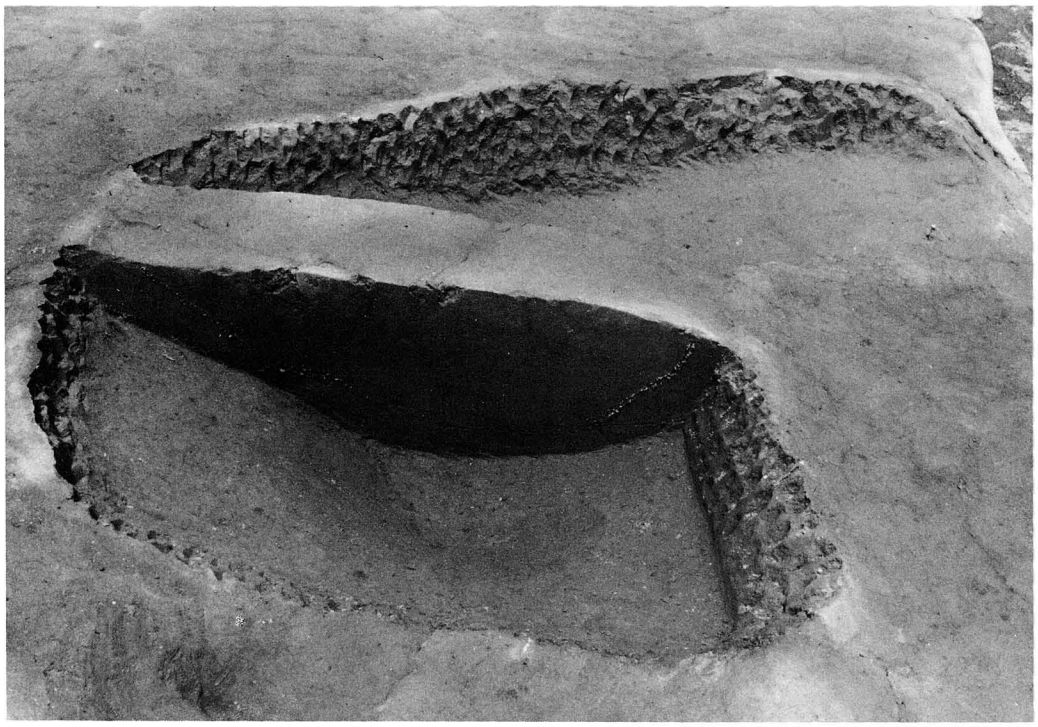
図版20　上：19号住居跡遺物出土状況（北東角）―南より―
下：19号住居跡遺物出土状況（北西角）―東より―

図版21　上：20号住居跡―東より―
下：21号住居跡―南より―

図版22　上：22号住居跡―南より―
下：23号住居跡―西より―

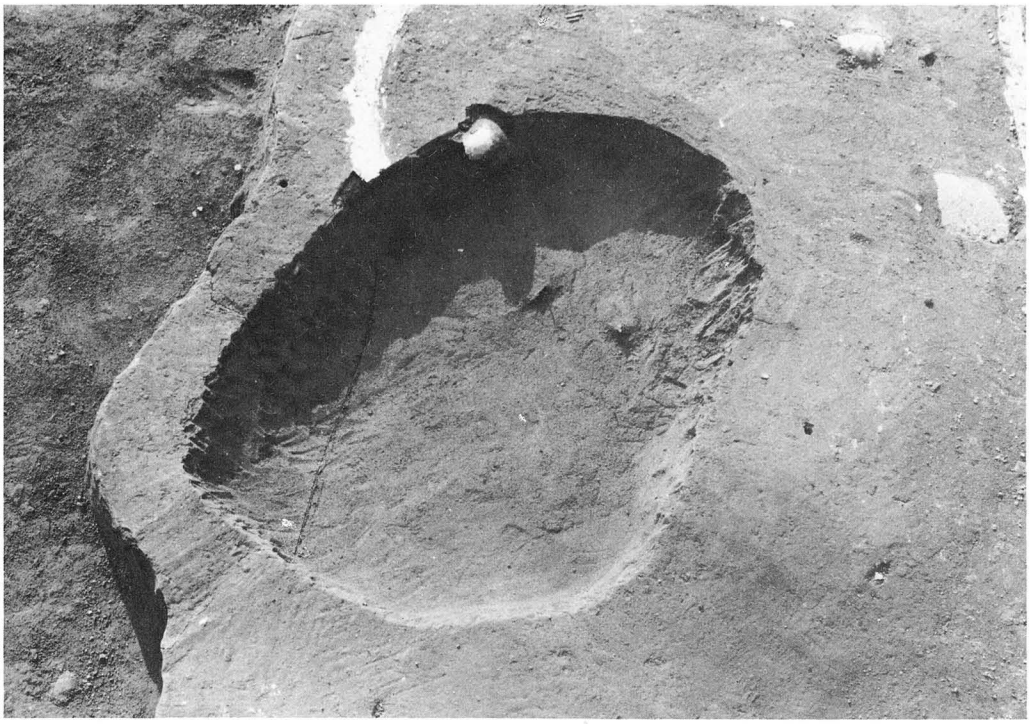


図版23　上：西部住居跡群（1・4・6・7・8・18・19号）―西より―
下：中央部住居跡群（10・11・12・13・14・15・16・22・23号）―西より―

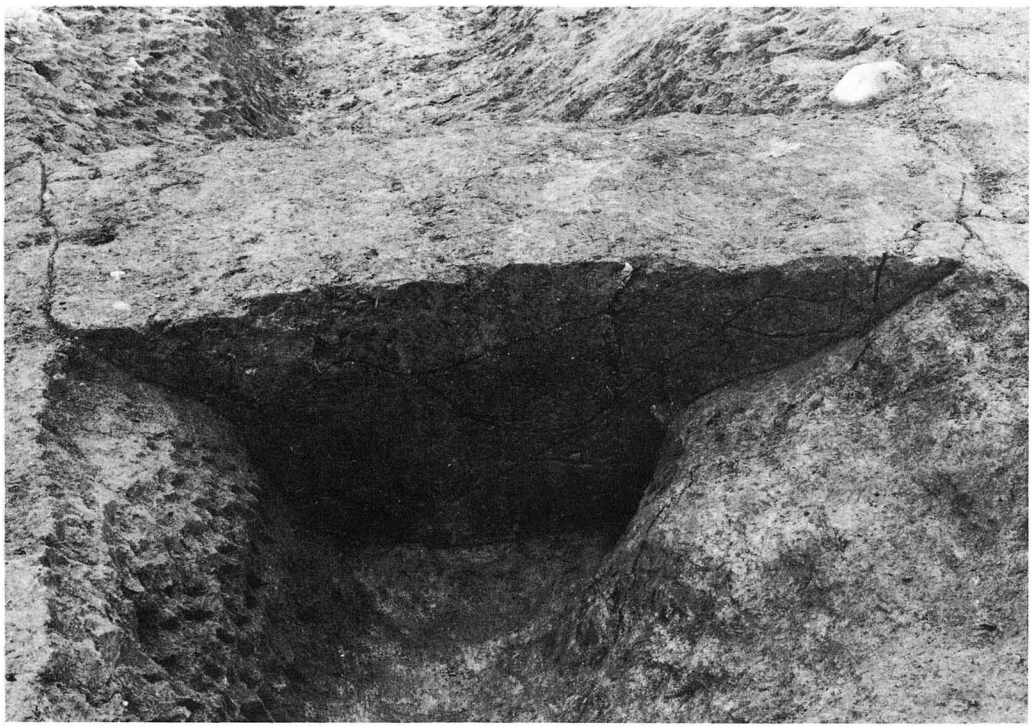


図版24　上：１号土壙(右上)―西より―
下：２号土壙―南より―

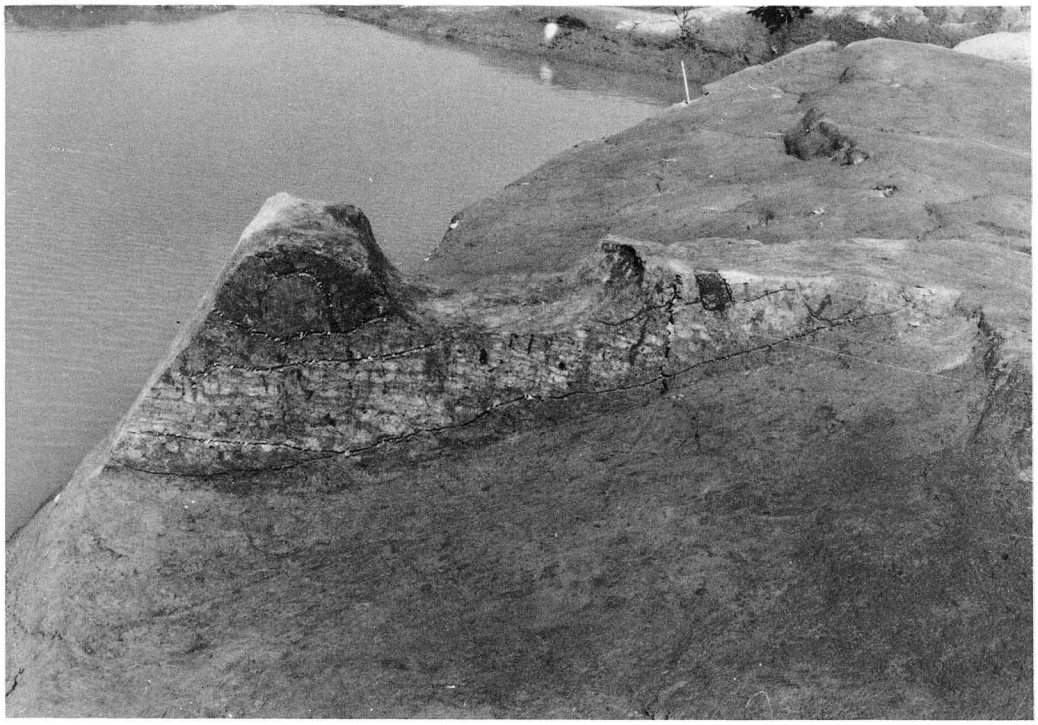
図版25　上：３・４・５号土壙(左より３・４・５号)―南より―
下：８号土壙―南より―



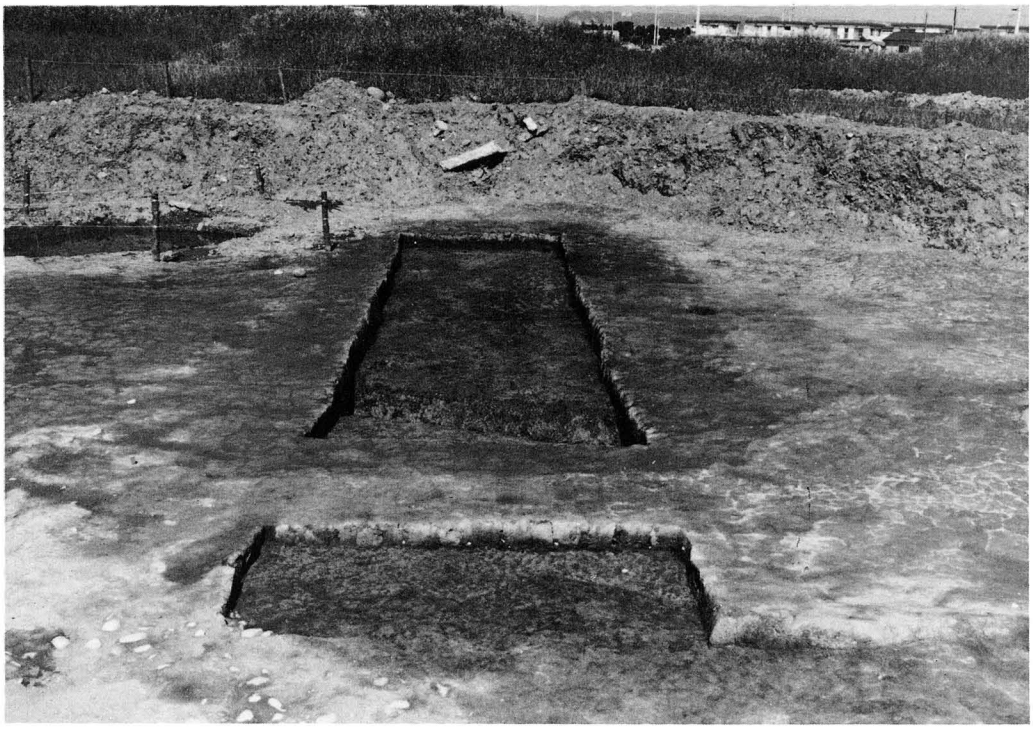
図版26　上：９号土壙―東より―
下：１号溝―南西より―



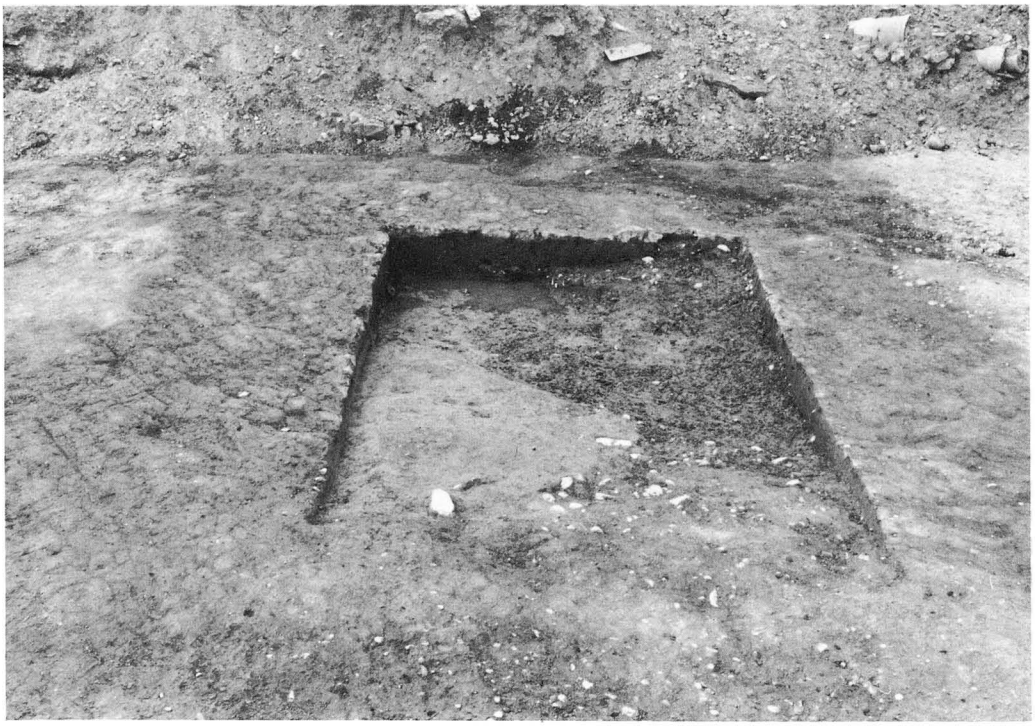
図版27　上：１号溝断面(北側ベルト)―南より―
下：１号溝断面(南側ベルト)―南より―



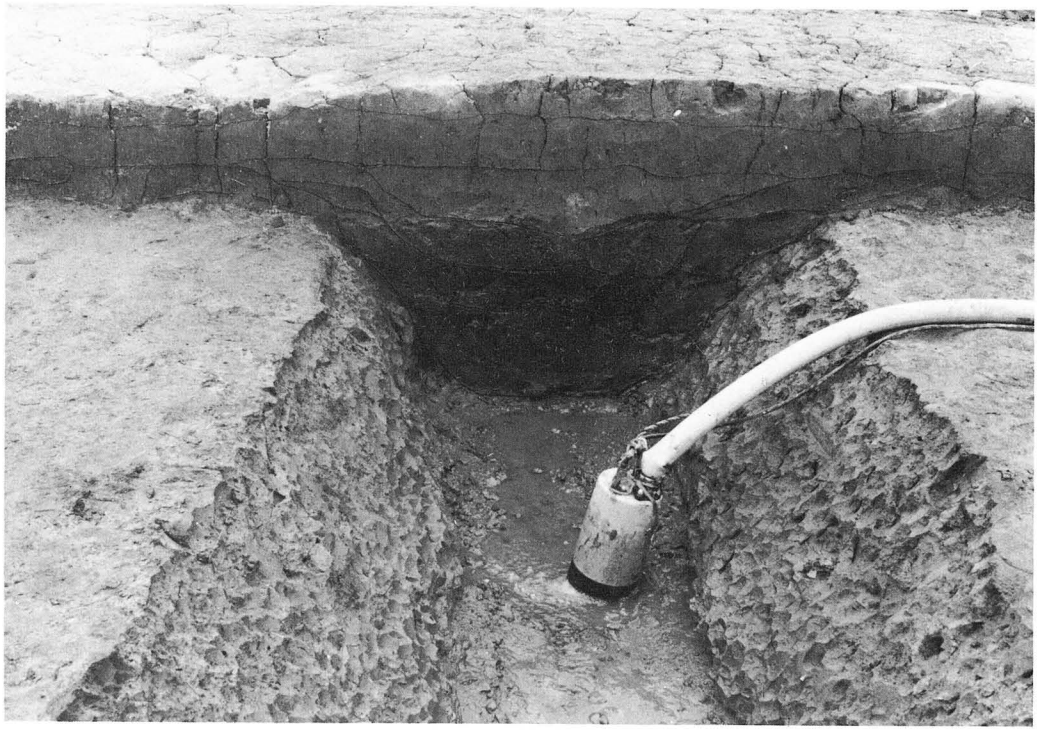
図版28　上：２号溝―南西より―
下：３号溝―西より―



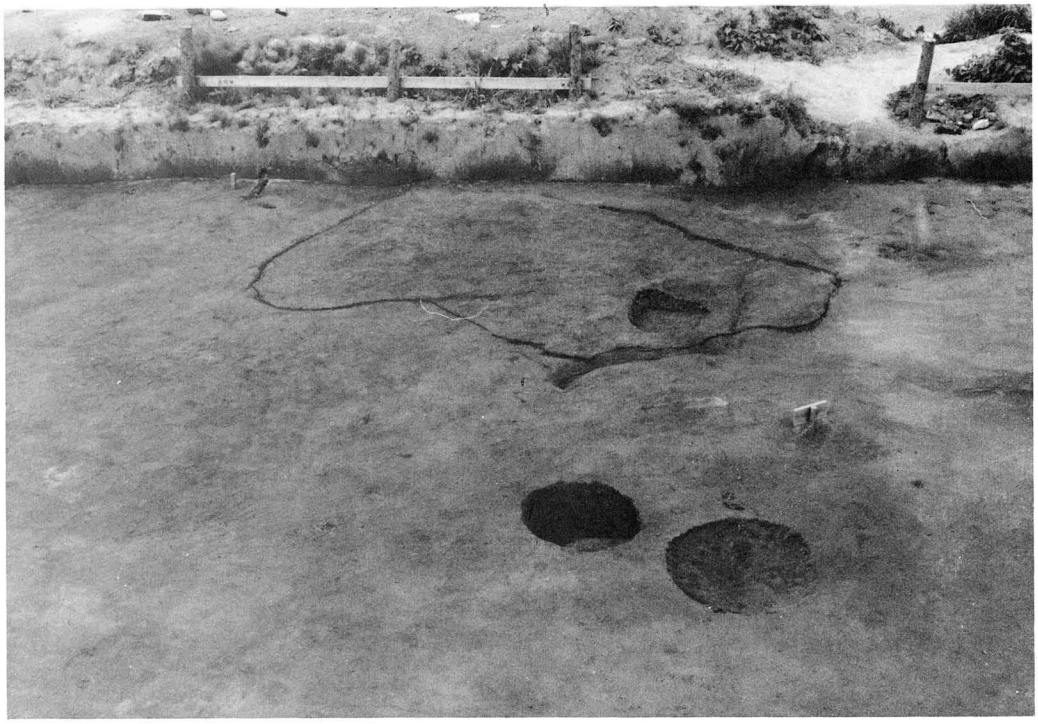
図版29　上：１～２トレンチ・４号溝―北より―
下：３トレンチ・４号溝―南東より―



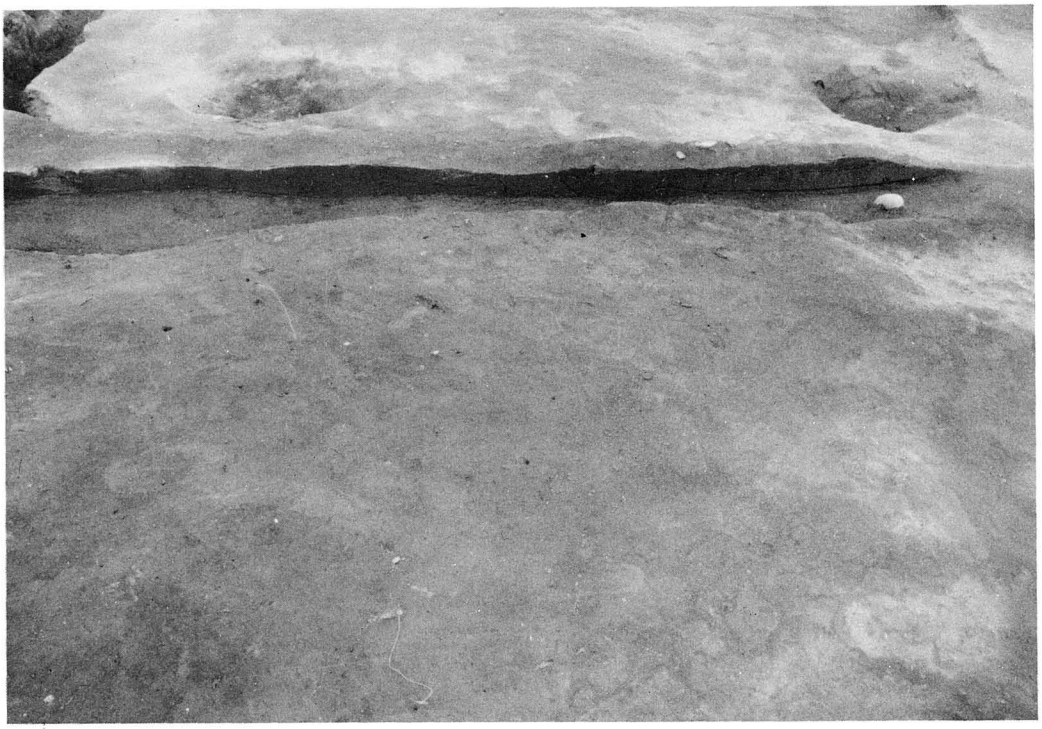
図版30　上：４トレンチ・４号溝―南より―
下：５トレンチ―南より―



図版31　上：４号溝断面（２トレンチ）―北より―
下：４号溝断面（３トレンチ）―北より―



図版32　上：１号性格不明遺構遺物出土状況―南より―
下：１号性格不明遺構―北より―

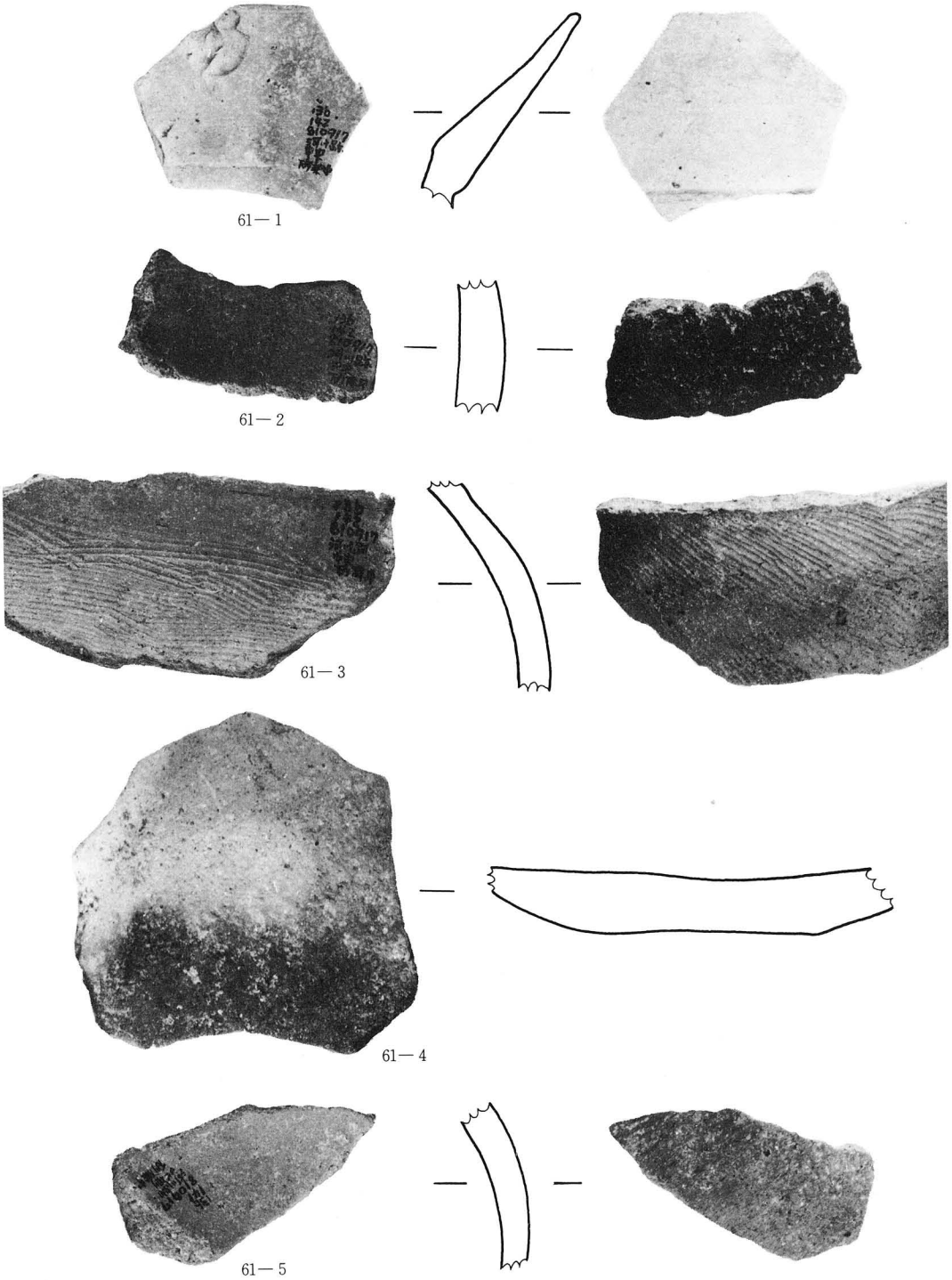


図版33　上：２号性格不明遺構―東より―
下：３号性格不明遺構―南より―

図版34　上：調査区縦断トレンチ―南より―
下：室内作業風景

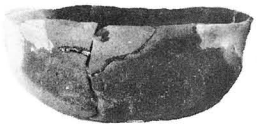
図版35　上：現地説明会風景
下：現地説明会風景

図版36　上：調査風景
下：調査参加者



図版37　旧河川跡出土土師器

No. 1 — 3



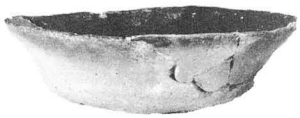
No. 3 — 1

No. 2 — 3

No. 3 — 2

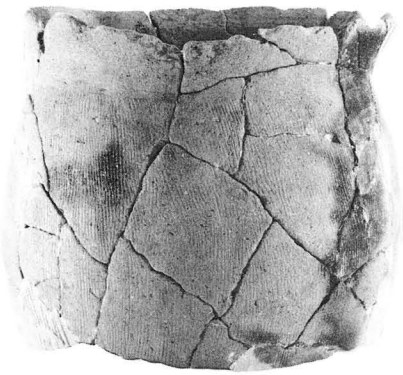
No. 3 — 3

No. 2 — 1



No. 4 — 1

No. 5 — 6

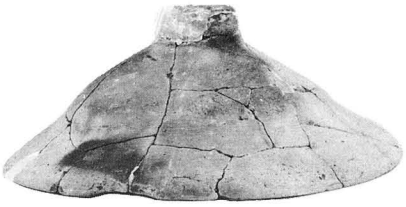


No. 5 — 8

No. 5 — 7

図版38　1・2・3・4・5号住居跡出土土師器

No. 7 — 6



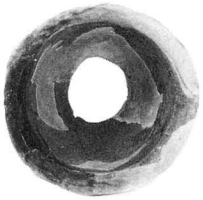
No. 7 — 8

No. 7 — 2

No. 7 — 4

No. 8 — 1

No.10— 1



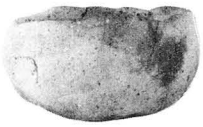
No. 8 — 1

No.11— 1

図版39　7・8・10・11号住居跡出土土師器

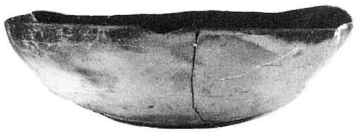
No.12— 1

No.12— 2



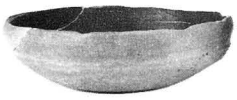
No.12— 7

No.12— 9

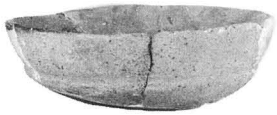


No.12—10

No.12—13



No.12—14



No.12—15

No.12—16

No.12--17

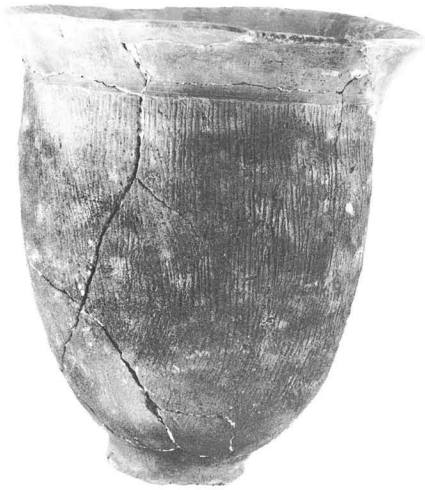
No.12—11

No.12—12

No.12--20

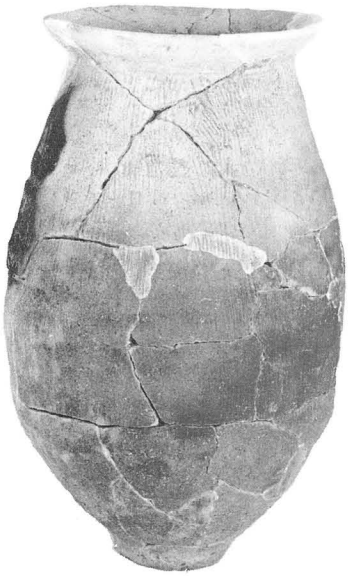
図版40　12号住居跡出土土師器(1)

No.12—25



No.12—30

No.12—27

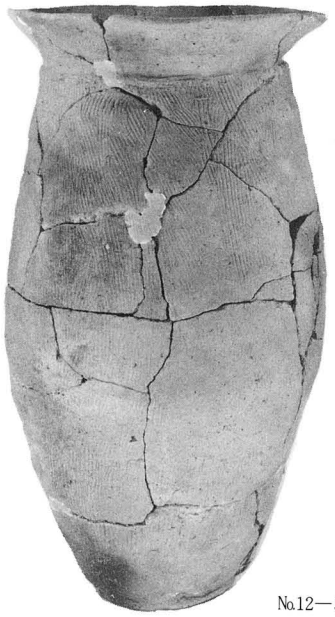


No.12—31

No.12—29

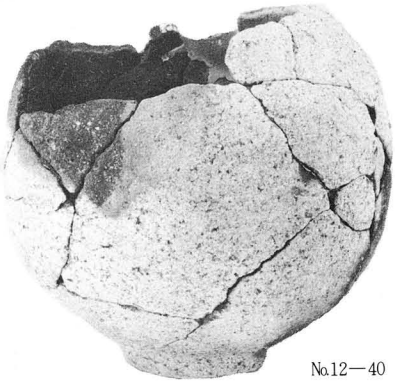
図版41　12号住居跡出土土師器(2)

No.12—32

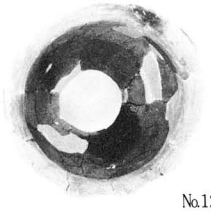


No.12—37

No.12—34



No.12—40

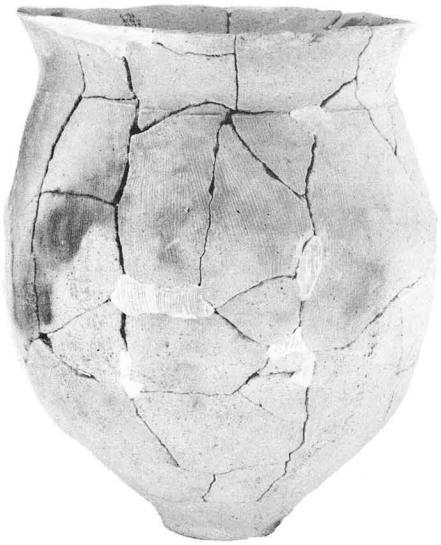


No.12—41

図版42　12号住居跡出土土師器(3)

No.17－1

No.17－2



No.17－5

No.17－3

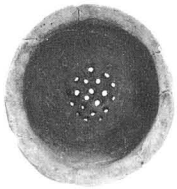
No.17－6

No.17－4

図版43　17号住居跡出土土師器

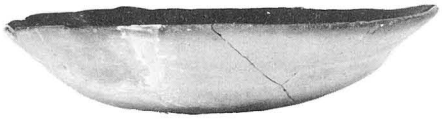
No.18－1

No.18－2



No.18－3

No.19－1



No.19－2

No.19－3

No.19－4

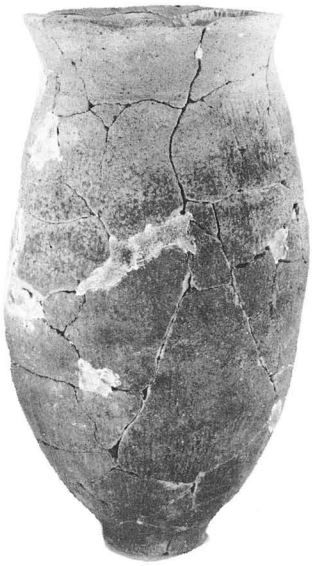
No.19－5

No.19－10

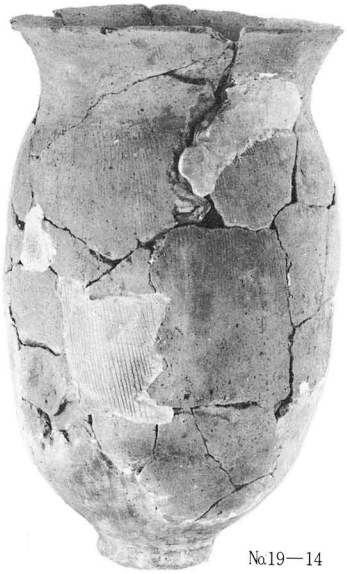
図版44　18・19号住居跡出土土師器(1)

No.19—11

No.19—12



No.19—13



No.19—14

No.19—15

図版45　19号住居跡出土土師器(2)

No.20－4

No.22－2

No.22－1

No.22－3

No.22－4

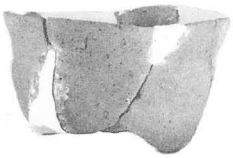
No.31－1

No.31－3

No.31－2

図版46　20・22号住居跡　1号性格不明遺構出土土師器

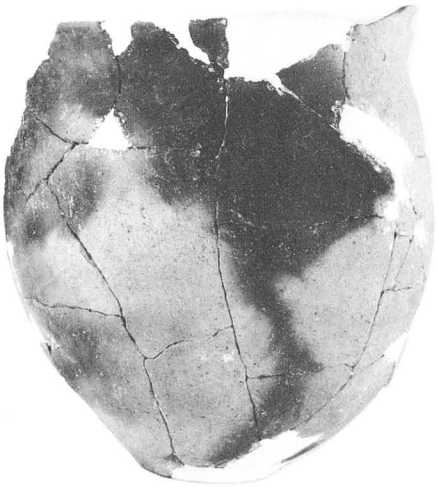
No.32— 1



No.32— 3

No.32— 2

No.32— 5



No.32— 4

No. 0 —18

No. 0 —20

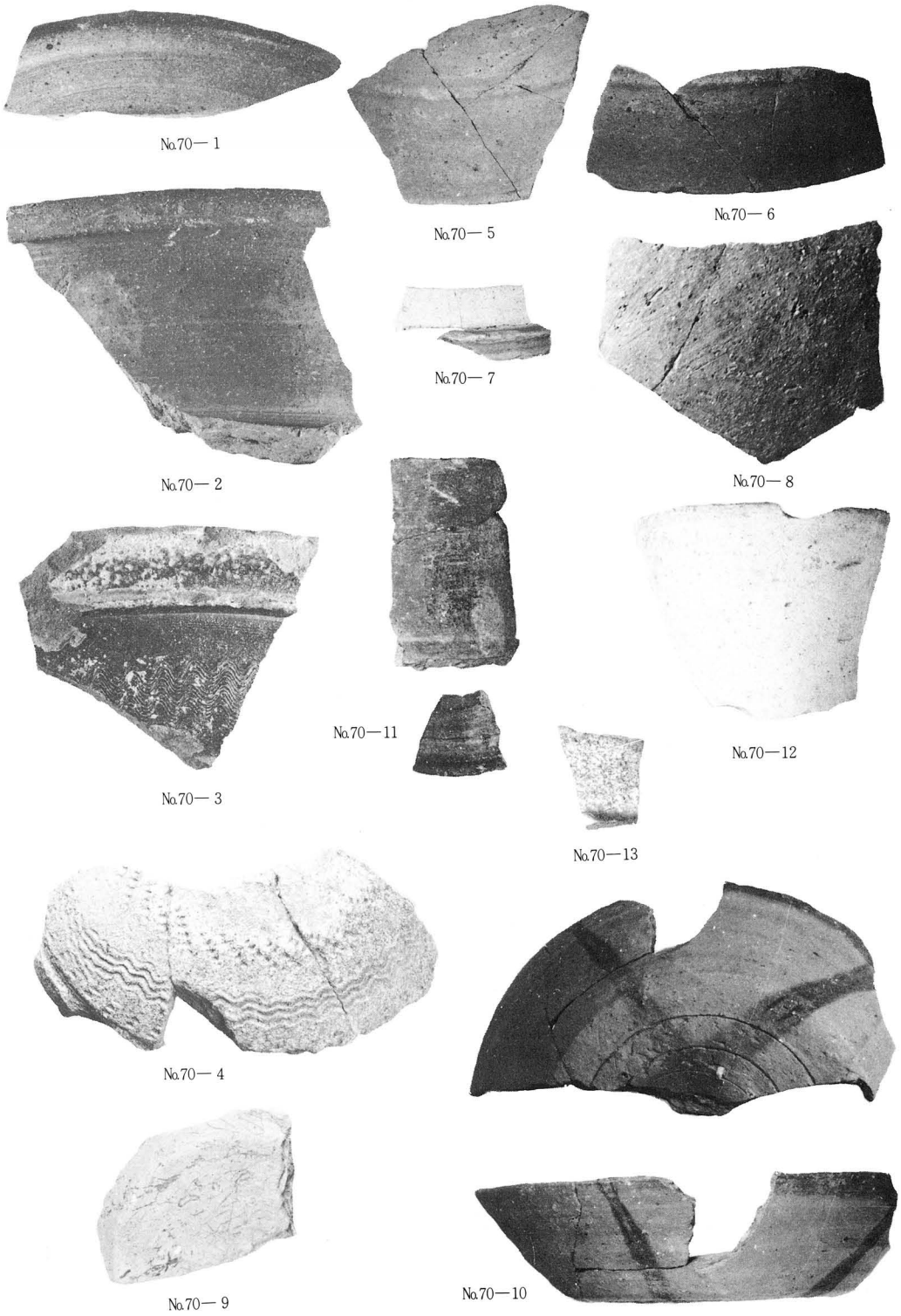
No. 0 —22

No. 0 —19

No. 0 —21

No. 0 —23

図版47　２号性格不明遺構・表土出土土師器


No.70— 1
No.70— 5
No.70— 6
No.70— 7
No.70— 2
No.70— 8
No.70— 3
No.70—11
No.70—12
No.70—13
No.70— 4
No.70— 9
No.70—10

図版48　須 恵 器(1)

No.70—14

No.70—16

No.70—17

No.70—15

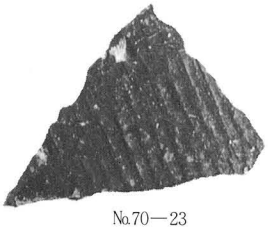
No.70—18

No.70—19

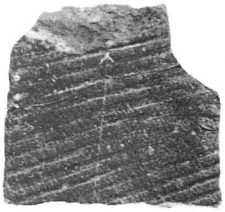
No.70—20

No.70—21

No.70—22



No.70—23



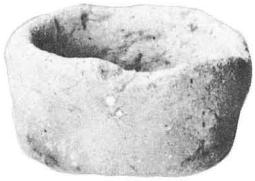
No.70—24

No.70—25

図版49　須 恵 器(2)

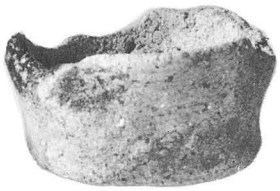
No.73— 1

No.73— 2

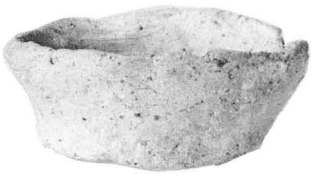


No.73— 3

No.73— 4



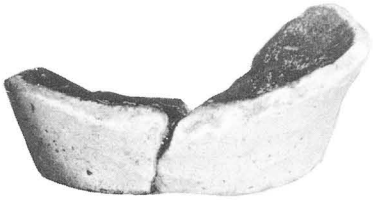
No.73— 5



No.73— 6

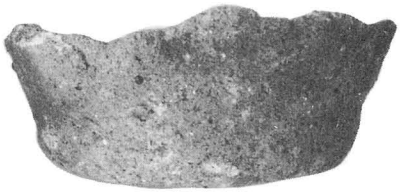
No.73— 7

No.73— 9



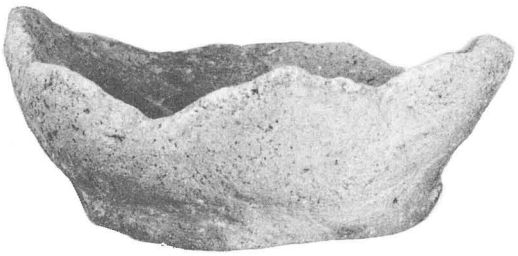
No.73—11

No.73—12



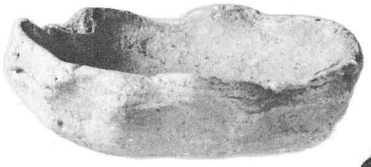
No.73—13

図版50　手捏ね土器(1)



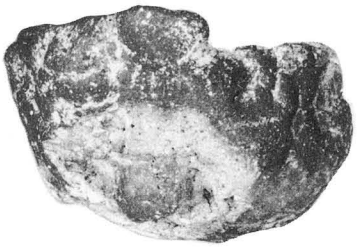
No.73—15

No.73—16



No.73—18

No.73—20

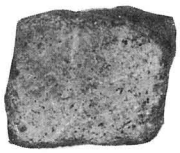


No.73—21

No.73—22

No.73—23

No.73—24

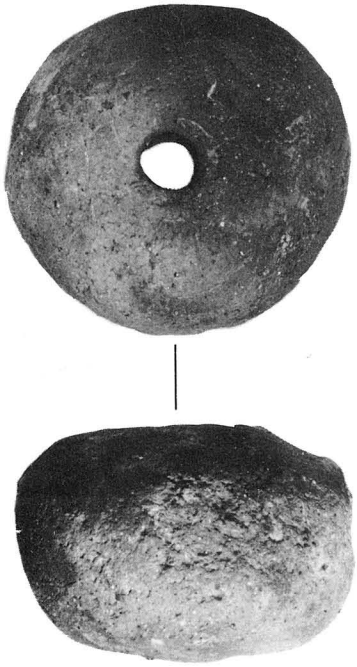


No.73—25

図版51　手捏ね土器(2)—小形土器—

No.74－1

No.74－2



No.74－4

No.74－3

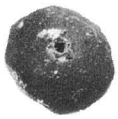
図版52　栗遺跡出土土製品

No.74— 5

No.74— 6

No.74— 7

No.74— 8



No.74— 9

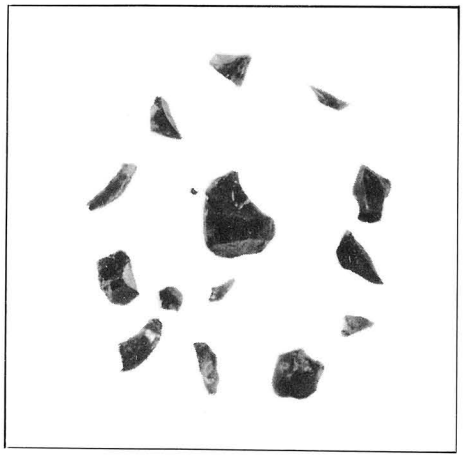
No.74—10

No.74—11

No.74—12

No.74—13

No.74—14



No.76— 8

No.76— 4

No.76— 6

No.76— 5

No.76— 7

図版53　土製品・石製品

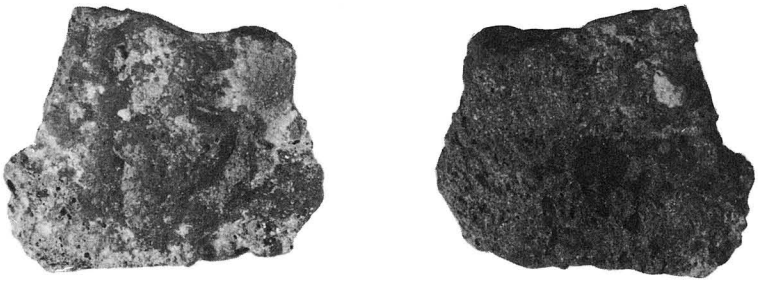
No.75— 1

No.75— 3

No.75— 4

No.75— 2

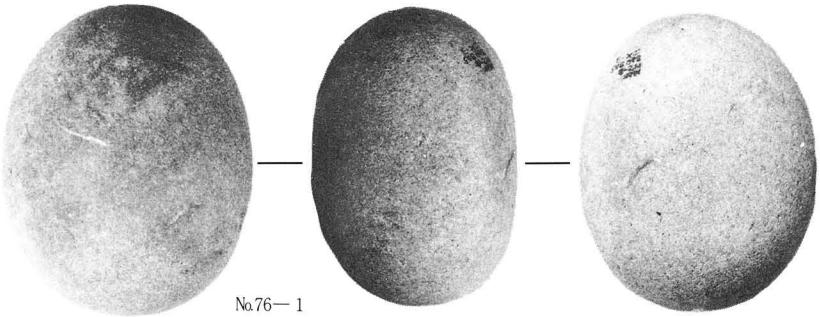
No.75— 5



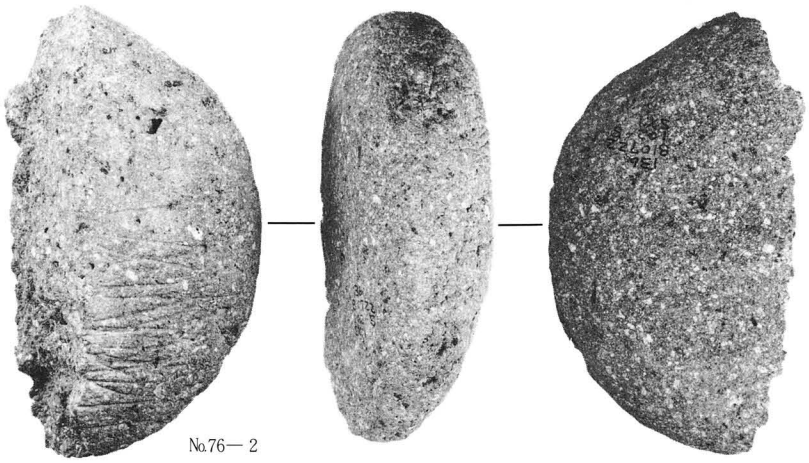
No.75—10

No.75— 7　No.75— 6　No.75— 8　No.75— 9

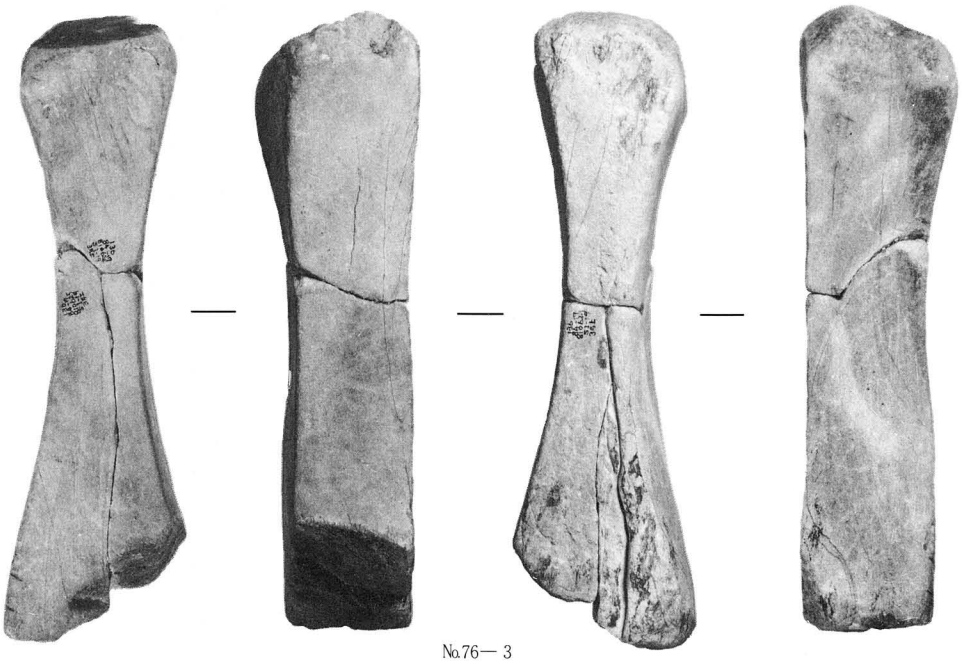
図版54　鉄製品・古銭



No.76— 1

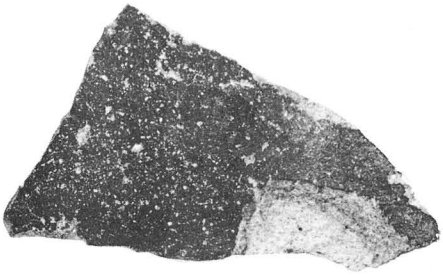


No.76— 2



No.76— 3

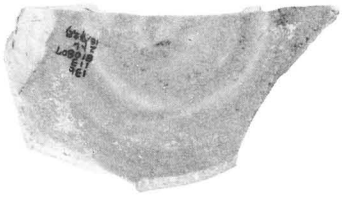
図版55　石 製 品



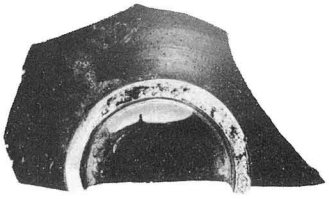
No.78— 1

No.78— 2

No.78— 3



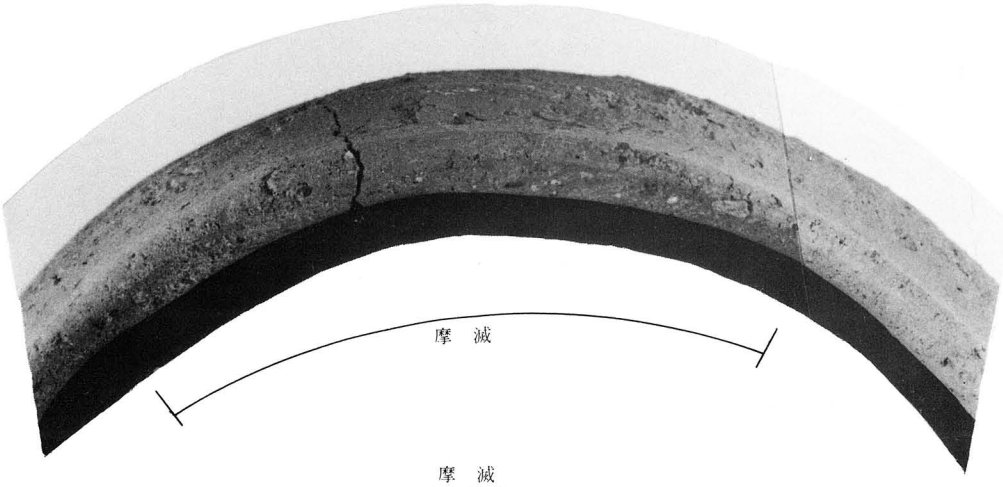
No.78— 4

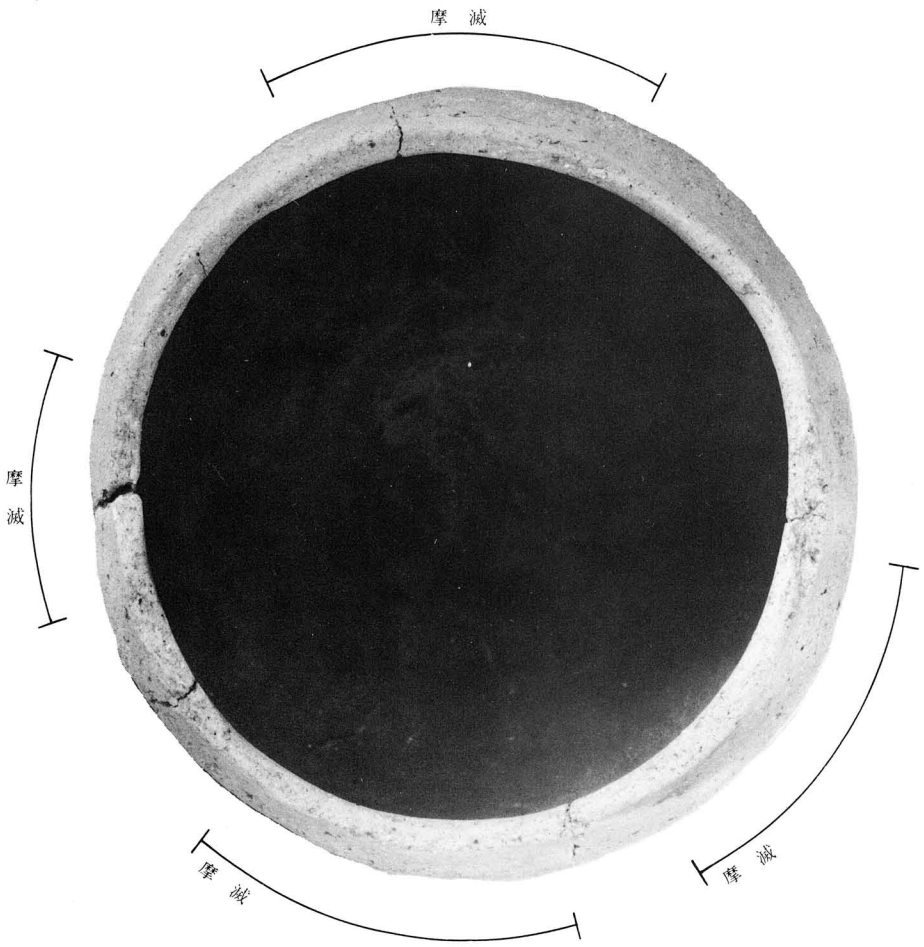


No.78— 5

No.78— 6

図版56　中世・近世陶磁器





18号住居跡出土鉢Ⅰ類　No.18－2

図版57　鉢Ⅰ類使用痕

安久遺跡・栗遺跡周辺の微地形の形成について

安　田　喜　憲

Ⅰ．仙台平野の微地形

仙台湾周辺の沖積平野の微地形は、扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道、潟湖性低地、浜堤、砂州、人工改変地からなる。それぞれの微地形の分布パターンは、後背地の河川流域の特性を反映して、顕著な違いがみられる。1/10000空中写真と1.5mハンドオーガーの実施調査に基き分類したものを第１図に示す。

扇状地

仙台湾周辺の沖積平野は、扇状地的性格が弱く、わずかに名取川の谷口と、丘陵を解析する小支谷の谷口にみられるにすぎない。

扇状地の表層２～３ｍまではシルトと粘土層の互層に中砂が混入する地層がのり、その下部に粒径20～30cmの亜角礫、亜円礫層がくる。扇状地面には、旧河道が網状流をなしており、旧河道と高位扇状地面との比高は１～２ｍである。扇状地の扇端部は、等高線10ｍとほぼ一致する。扇端部と前面の後背湿地の間には、比高２ｍほどの傾斜変換点がみられる。

自然堤防

自然堤防をもっとも顕著に発達させているのは、名取川である。曲流する旧河道沿い、ならびに現河道沿いには、時には河道との比高が５ｍにも達する大きなものがみられる。

七北田川では、現河床沿いの堤外間には、比高３ｍにも達するシルト質細砂の堆積が認められる。堤内ならびに旧河道沿いにみられるものは、比高１ｍ前後の小規模なものである。

阿武隈川では、岩沼市押分から下野郷、長塚にかけての旧河道沿い、ならびに中泉から榎袋にかけての旧道沿いに自然堤防が発達している。

これらの自然堤防は、海岸部において浜堤を切って、その上にオーバーラップしたり、また浜堤によって、その前面が切られていることもある。浜堤と自然堤防とは、その表層地質によって、明白に区別される。すなわち、自然堤防の堆積層はシルト質の要素が強いのに対し、浜

堤の堆積物は、ソーティングのよいサラサラした細～中砂からなる。

この自然堤防の発達は、第１図をみて明らかなように、名取川流域では顕著であり、七北田川、阿武隈川では、規模、ならびに発達の面積において著しく劣っている。

後背湿地

自然堤防と自然堤防の間にはさまれた、主に暗黒色の粘土～シルトからなる部分を後背湿地とした。この後背湿地は、名取川の沖積平野部にしかみられず、七北田川、阿武隈川ではあまり顕著でない。つまり、名取川では自然堤防と後背湿地のくり返す自然堤防帯がみられるのに対し、七北田川や阿武隈川では、自然堤防の発達は、海進にともなって形成された浜堤背後の潟湖性低地の上にオーバーラップする形でのっているのである。

旧河道

旧河道の配列、形態は、その河川が過去数千年間たどってきた、河川の特性をもっとも適確に反映する。

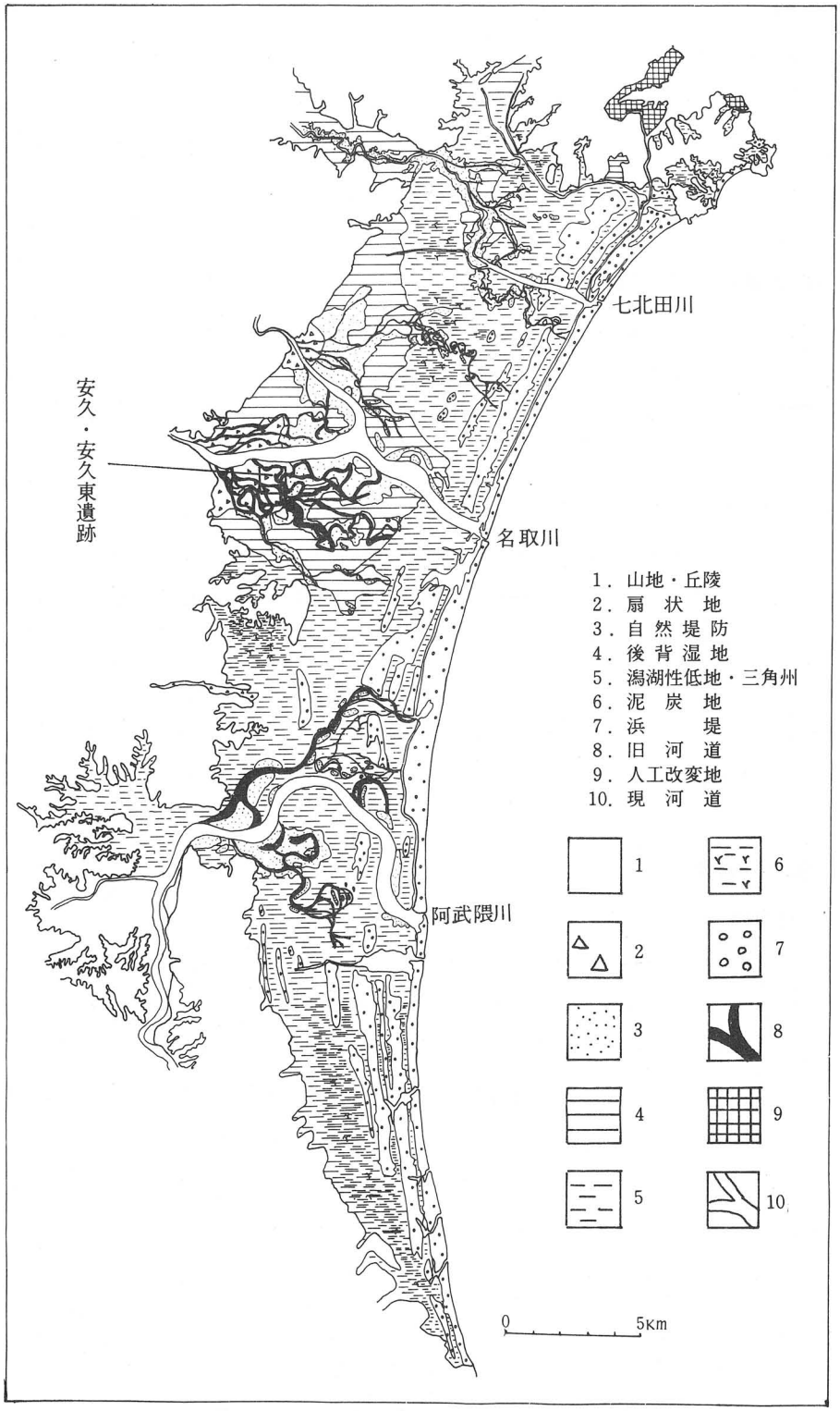
名取川では、旧河道は激しい乱流をくり返し、平野の全面に渡って分布する。これに対し、七北田川や、阿武隈川ではあまり乱流をくり返さず、旧河道の数も少ない。すでに大矢(1968)は、土砂礫の供給量の大きな河川ほど河道の変遷ははげしく、土砂の供給量の少ない河川は安定していることを指摘している。この三河川における旧河道の配列パターンからみても、名取川の土砂礫の供給量が大きなことがわかる。

潟湖性低地

七北田川と阿武隈川の沖積平野には、潟湖性低地が顕著に発達している。また松島湾沿岸においても顕著である。この潟湖性低地の堆積物は、暗黒褐色の粘土と、ソーティングのよい青灰色の細～中砂からなっており、暗黒色のシルト～粘土を主とする後背湿地とは異なり、空中写真の色調では、より黒色にみえる。仙台市の福田町、苦竹、多賀城址周辺の解析された丘陵の小支谷の中、あるいは、仙台市荒井、七郷周辺、藤田新田、名取市愛島などには、スクモと呼ばれる厚い泥炭層が顕著に発達している。すでに述べたように、七北田川や阿武隈川では、前面を浜堤に保護されたこの潟湖性低地の上に、直接河川の堆積物がのってくるのである。

浜　堤

浜堤は大きく５列の群にわけられる。浜堤の発達は、仙台平野の北部ほどよい。名取川の南部一帯は、発達が遅れている。そしてその大きさは、新しい時代のものになるほど大きくなる。



第１図　仙台平野の微地形分類図

浜堤の構成物質は、ソーティングのよい細～粗砂である。内陸部から順に第１・第２……浜堤とする。第１浜堤の高度は４～５ｍで、最大幅約500m、第２浜堤の高度は１～３ｍで、最大幅約500m前後、第３浜堤の高度は２～３ｍで、最大幅1000m前後、第４浜堤の高度は２～３ｍで、最大幅600m前後、そして第５浜堤の高度は、２～５ｍ前後で、最大幅700m前後である。浜堤の高度に関しては、その後の人為的改変があるので、正確には論じがたい。

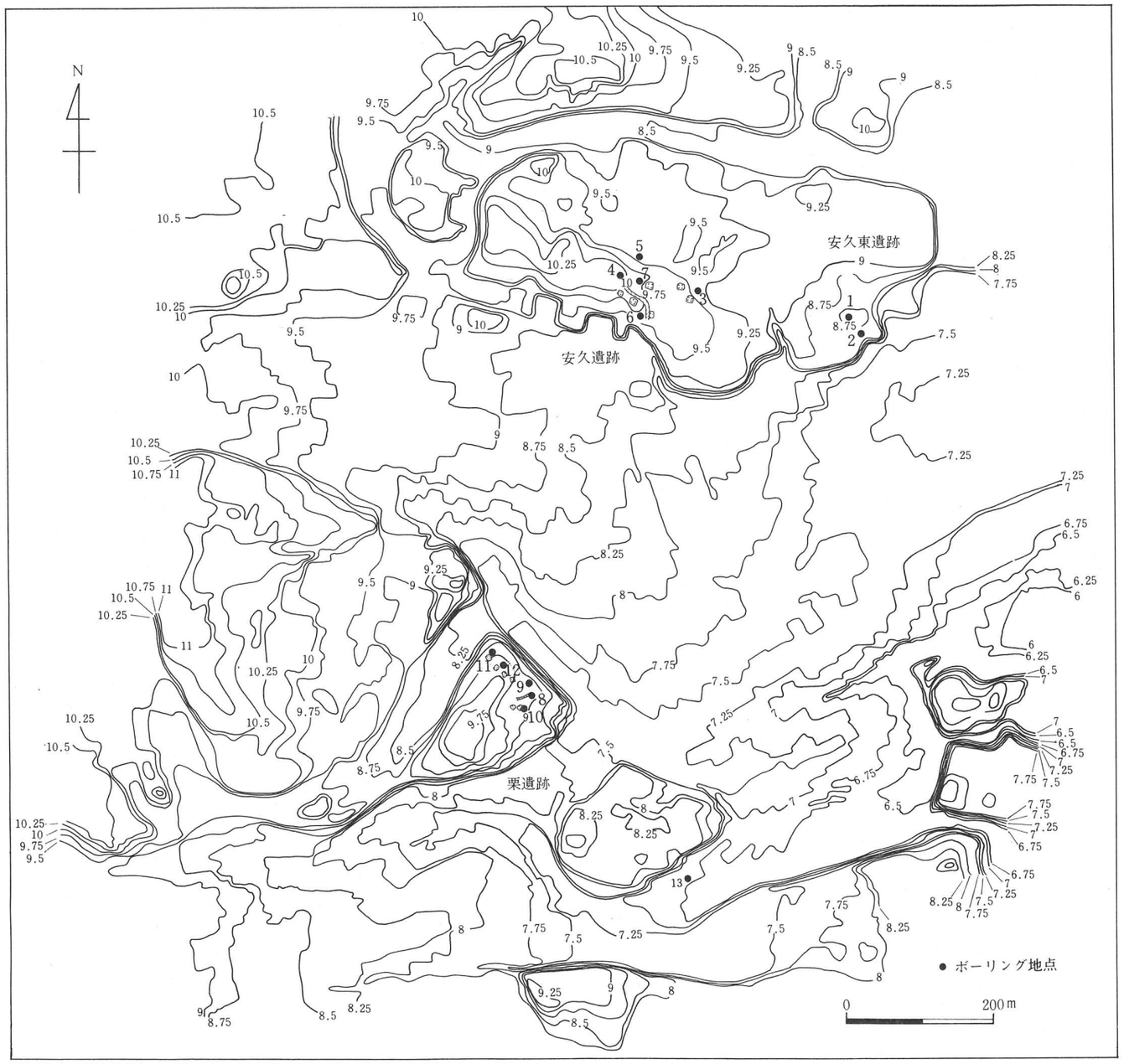
Ⅱ　安久遺跡、栗遺跡の立地

安久遺跡と栗遺跡は名取川の扇状地の末端から自然堤防帯への移行部に立地する(第１図)。遺跡周辺の微起伏は第２図に示す如くである。遺跡は海抜8.5～10m前後の微高地に立地する。微高地は南と北の二つの大きなブロックに分けられ、現在は宅地、畑として利用されている。北部の微高地には安久遺跡が、南部の微高地には栗遺跡が立地する。そしてこの南・北の微高地の間には低平地が存在する。安久遺跡と栗遺跡はちょうどこの低平地をはさんで南北に対向する形で立地する。また遺跡の立地する微高地は溝状の凹地によっていくつかの小ブロックに分断されている。低平地と溝状の凹地は現在水田として利用され、溝状の凹地の一部にはセリの栽培が行なわれている。遺跡周辺の地盤高ならびに遺跡の層序・ハンドオーガーによる調査から微地形分類を行なったのが第３図である。すなわち安久・栗の両遺跡が立地する微高地は自然堤防であり、その間の低平地と溝状の凹地は旧河道であることがわかる。旧河道は細かにみると古いものから旧河道Ⅰ―旧河道Ⅱ―旧河道Ⅲに区分される。

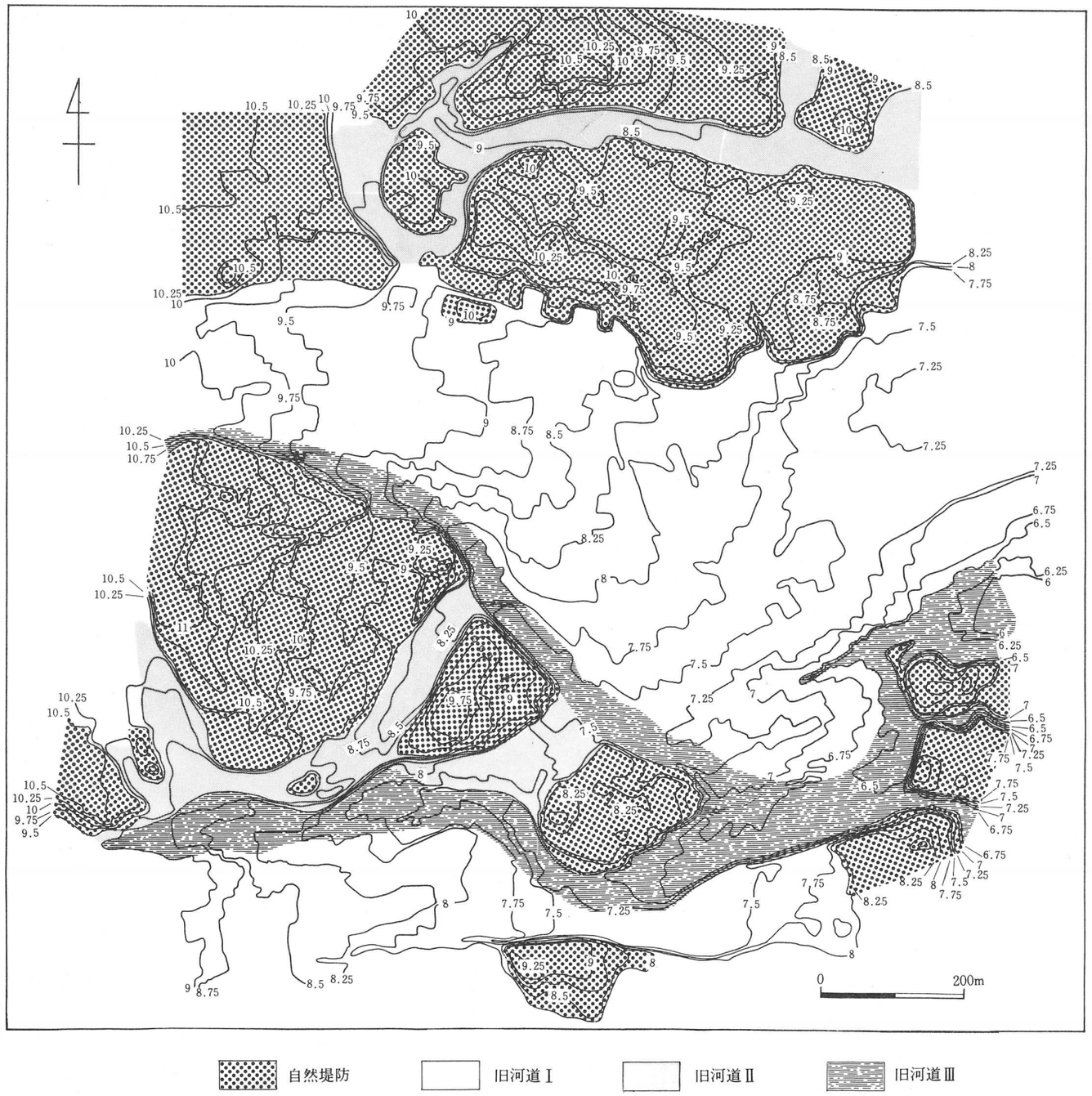
Ⅲ．遺跡の層序

(1)安久東遺跡

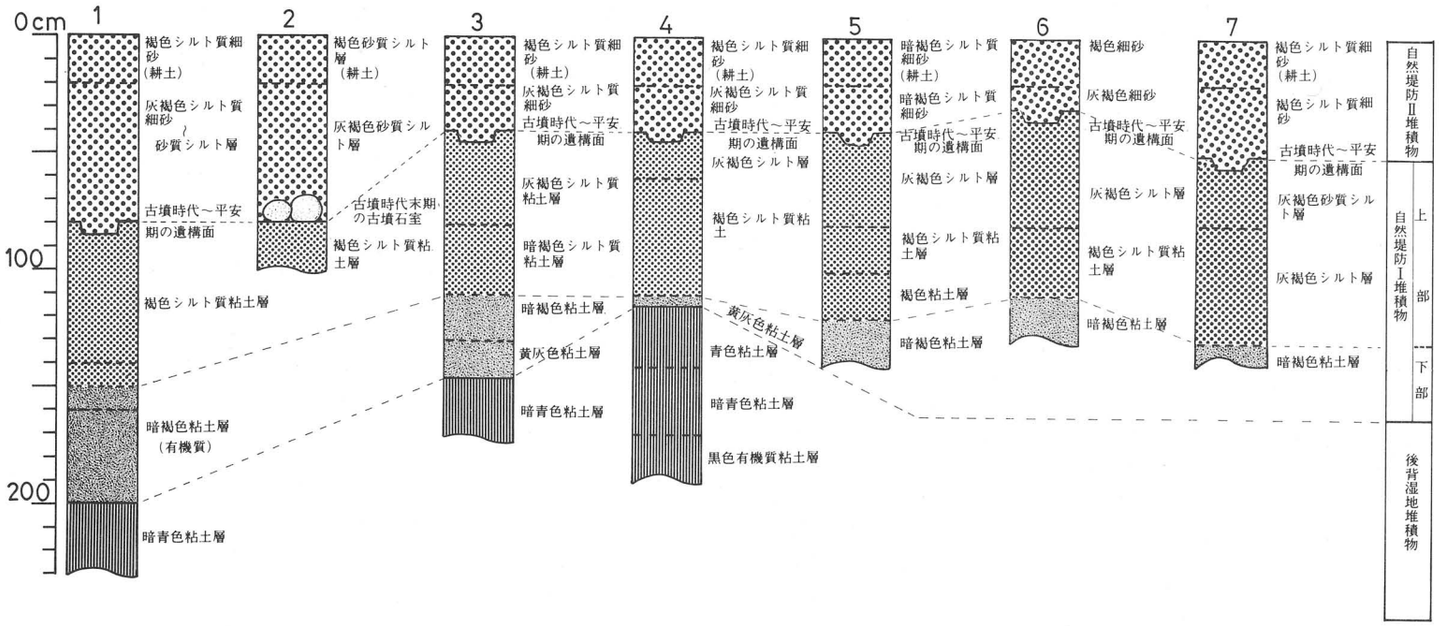
安久遺跡の立地する微高地の東部が1972年秋に発掘され、安久東遺跡と命名された。筆者は1972年９月20日と10月20日の２回にわたって発掘現場を訪れ、遺跡の層序の観察を行なった。発掘の結果、古墳時代後期の石室と平安時代の堀の遺構が検出された。（註１）遺構はいずれも地表下80cm前後に埋没していた。遺跡の１地点と２地点の断面図は第４図に示す如くである。すなわち地表下200cm以下には暗青色有機質粘土層が堆積する。遺跡に近接した地点８において行われたボーリングの結果（第５図)、この暗青色有機質粘土層は地表下6.5ｍ前後まで連続して堆積していることが明らかとなった。したがってこの堆積物は自然提防を構成する堆積物ではなく、現在の沖積平野の堆積環境とはかなり異なった状況の下で形成されたものである。おそらく後背湿地の環境の下に堆積したものであろう（安田1973参照)。この暗青色有機質粘土層の上位には、暗褐色粘土層・褐色シルト質粘土層が堆積する。褐色を示しシルト質であることからみても、この堆積物は明らかに自然堤防構成層である。古墳時代後期～平安時代にかけ



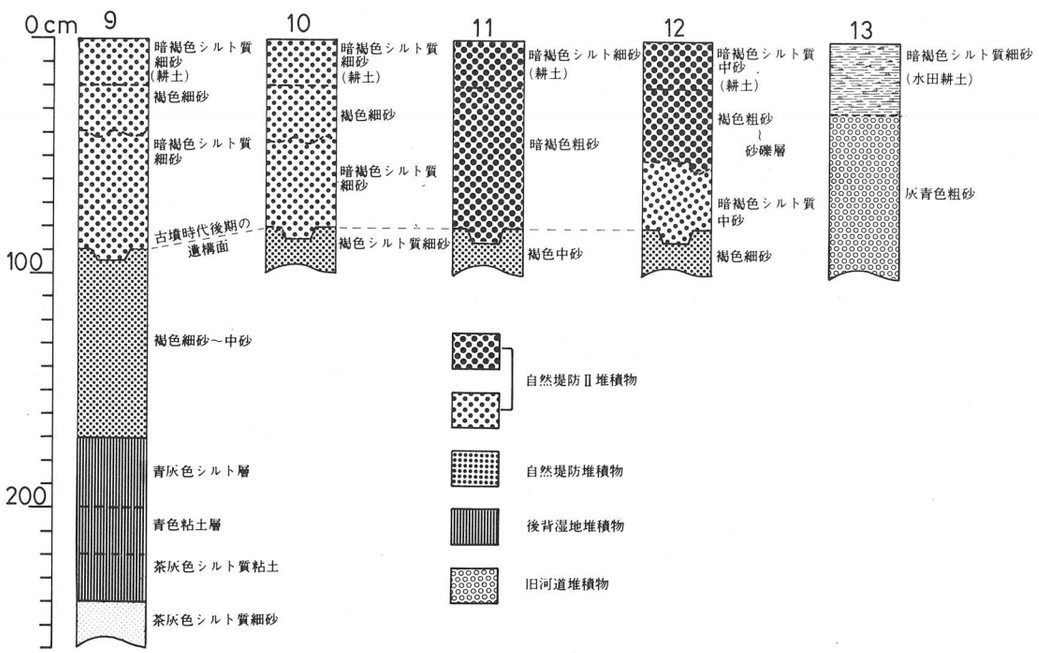
第２図　安久遺跡・栗遺跡周辺の地盤高図



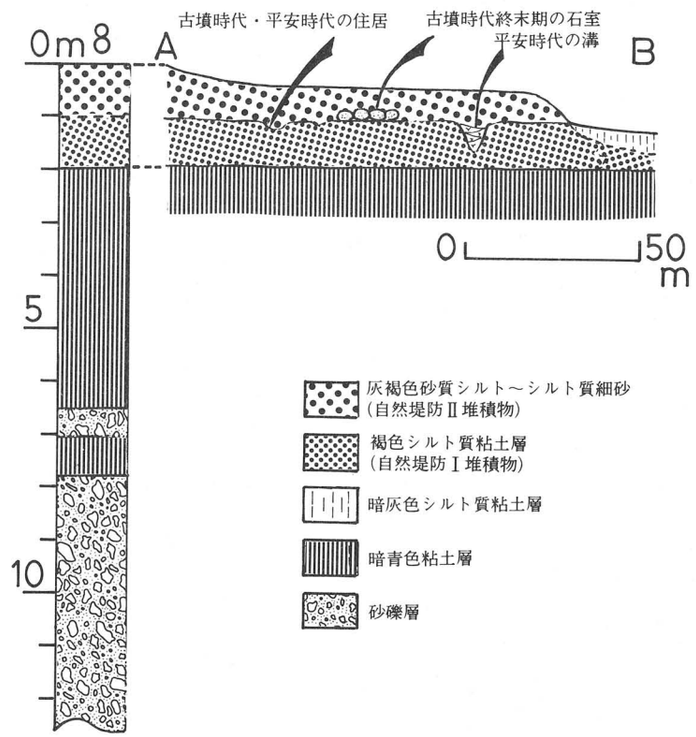
第３図　安久遺跡・栗遺跡周辺の微地形分類図



第４図　安久遺跡とトレンチ断面図



第６図　栗遺跡トレンチ断面図



第５図　ボーリング試料と安久東遺跡の自然堤防断面図

ての遺構が営まれているのは、この褐色粘土層～シルト質粘土層の上面である。この古墳時代後期から平安時代にかけての遺構を覆って、層厚80cm前後で灰褐色のシルト質細砂が堆積している。下位の褐色粘土層～シルト質粘土層に比して、砂質で粒径が大である。

このように、安久東遺跡のトレンチの断面からは、自然堤防の形成に2時期があることが明らかとなった。すなわち、古墳時代後期にすでに形成を終了していた下位の自然堤防堆積物（以下これを自然堤防Ⅰとする）と、平安時代末期以降に形成された上位の自然堤防堆積物（以下これを自然堤防Ⅱとする）である。そうして自然堤防Ⅰの形成期と自然堤防Ⅱの形成期の間の古墳時代後期～平安時代にかけては、著しい土砂の堆積はなかった。また、自然堤防Ⅰが形成される以前、この地域は後背湿地の環境であったことも明らかとなった。

(2)安久遺跡

1975年の春から晩秋にかけて、微高地の中央部に立地する地区が発掘され、安久遺跡と命名された。筆者は1975年3月30・31日、同年10月9日、同年12月2日にわたって調査を行なった。遺跡の層序の断面は第4図の地点3・4・6・7に示す如くである。また地点5は自然堤防の断面観察のため特別に設定した試掘ピットである。地点3・4においては、安久東遺跡と同様に、地表下150cm前後から以下には暗青色の有機質粘土層がみられ、その上位には自然堤防Ⅰの構成層である暗褐色～灰褐色のシルト質粘土層が堆積している。発掘によって検出された奈良末～平安期の住居跡・溝状遺構は、この自然堤防Ⅰの上面に営まれている。そしてこれらの遺構を覆って、層厚40cm前後で自然堤防Ⅱの灰褐色シルト質細砂が堆積している。

このように安久遺跡においても、後背湿地―自然堤防Ⅰ―奈良末～平安期の遺構―自然堤防Ⅱという一連の層序が安久東遺跡と同様に認められた。

(3)栗遺跡

栗遺跡は1975年春に発掘された。栗遺跡の立地する自然堤防は旧河道Ⅱによって3つの小ブロックに分断されている。遺跡が立地するのはその内、中央の微高地上である。筆者は1975年3月30・31日の両日遺跡を訪れ調査を行なった。遺跡のトレンチの断面は第6図に示す如くである。地点9においては、地表下170cm以下に青色粘土層が堆積し、安久遺跡の後背湿地の堆積物に比定される。ただ安久遺跡の暗青色粘土層より有機物の含有が少ない。地表下170～80cm前後にかけて自然堤防Ⅰに比定されるソーティングのよい褐色の細～中砂が堆積している。安久遺跡の自然堤防Ⅰの堆積物より粒径は大きい。この自然堤防Ⅰの上面に古墳時代後期の住居跡と溝状遺構が検出された。この遺構を覆って層厚80cm前後の自然堤防Ⅱの堆積物が堆積している。下位の自然堤防Ⅰの堆積物はソーティングのよい細～中砂で、各地点においてそれ程

大きな差はなかった。ところがこの自然堤防Ⅱを構成する堆積物は、各地点において大きく異なる（第６図参照）。すなわち旧河道Ⅱに近い地点11・12において、堆積は暗褐色の粗砂～砂礫層からなり、ポイントバーの堆積物の性格を有している。一方旧河道Ⅱから離れた地点９・10において、堆積物は暗褐色のシルト質細砂となる。このことは、自然堤防Ⅱの堆積物は、旧河道Ⅱによってもたらされたことを示している。それはまた、旧河道Ⅱと自然堤防Ⅱの頂面との比高が、ほぼこの自然堤防Ⅱの堆積物の厚さに等しいことからもわかる。

このように栗遺跡の層序においても、後背湿地－自然堤防Ⅰ－古墳時代後期の遺構－自然堤防Ⅱの連続関係が認められた。そして自然堤防Ⅱの堆積物は旧河道Ⅱによってもたらされたことが明らかとなった。なお、旧河道の堆積物は第６図の地点13に示す如く、灰青色粗砂～砂礫層からなっている。

Ⅳ．地形環境の変遷

以上の遺跡の層序ならびにボーリング試料から明らかになった遺跡周辺の地形環境の変遷を模式的に図示すると第７図の如くになる。

(1)後背湿地の時代

この時代は暗青色の有機質粘土層によって特徴づけられる。現在のような自然堤防の微高地や旧河道の凹地はなく、低湿な堆積環境がこの地域一帯には存在した。顕著な自然堤防が形成される以前に低湿地が存在した事実については、仙台平野の他の地点においても筆者（安田1972）が報告している。この低湿な地形環境が形成された時代がいつ頃であったかを明白に決定する証拠は今の所得ていないが、おそらく縄文時代晩期頃と考えられる。

(2)自然堤防Ⅰの時代

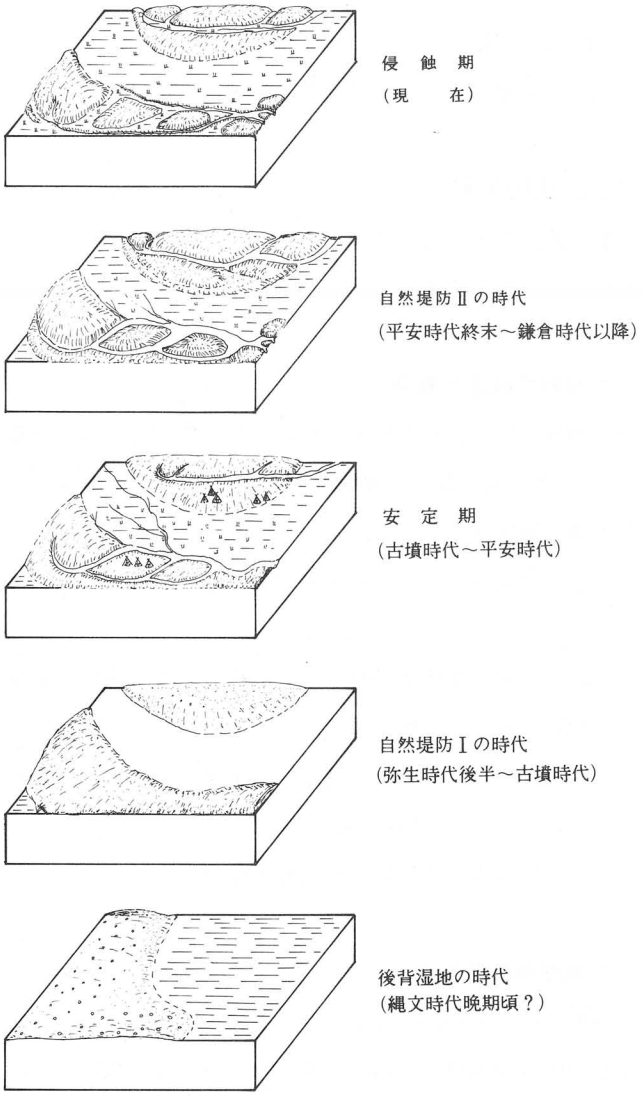
自然堤防Ⅰの堆積物は、安久遺跡の立地する自然堤防では褐色のシルト質粘土であったのに対し、栗遺跡の立地するところでは、褐色の細～中砂であり、前者に比して粒径が大であった。この事実は、自然堤防Ⅰは旧河道Ⅰによって形成されたということとよく符合する。すなわち安久遺跡の立地する自然堤防は第１図からも明らかの如く、旧河道Ⅰの滑走斜面に、栗遺跡の立地する自然堤防は攻撃斜面にあたっているからである。この様に自然堤防Ⅰの時代は幅500ｍ前後の旧河道Ⅰとその両岸に大規模な自然堤防Ⅰが形成された時代である。その時代はこれまでの日本各地の事例（井関1972、安田1977）からみて、弥生時代から古墳時代にかけてであると推定される。（註２）

(3)安定期

安久遺跡や栗遺跡が営まれた古墳時代の後期～平安時代にかけては、この地域では顕著な自然堤防堆積物の堆積はみられなかった。もっとも、人為的に洪水を防止したことも考えられる。が、この時代には旧河道Ⅰは廃絶され、この部分が重要な生産の場となっていたと考えられる。むしろこの時代には、旧河道Ⅱが自然堤防を侵蝕して、小谷を形成していたとみるのが妥当のようである。

(4)自然堤防Ⅱの時代

平安時代の末～鎌倉時代以降、再び自然堤防の形成が活発化する。平安時代の遺構は層厚80cm前後の自然堤防の堆積物で覆われる。自然堤防Ⅱの堆積物をもたらしたのは旧河道Ⅱである。



第7図　古地理変遷図

褐色のシルト質粘土や細砂からなる自然堤防Ⅰに比して、自然堤防Ⅱの堆積物は粗大で、河道近くでは砂礫層からなるところもあった。こうした自然堤防Ⅰと自然堤防Ⅱの堆積物の相違は、河川流域の特性の変化や気候環境の相違にもとづくところが大と考えられる。筆者（安田1972）はその原因の一つとして人類の森林破壊による土壌侵蝕量の増大をあげた。自然堤防Ⅱの形成時代は濃尾平野の事例（安田1971）ともよく一致する。

(5)現　　在

現在は旧河道Ⅳの時代に相当する。第1図からも明らかの如く、旧河道Ⅳは自然堤防Ⅱや旧河道Ⅱをも侵蝕しつつあり、この地域は現在は侵蝕期にあることがわかる。

Ⅴ。花粉分析

安久遺跡周辺の自然堤防の形成期については、一応の目安が明らかとなった。次にこの沖積平野の植生環境を明らかにするため花粉分析を行った。

(1)試料の採取と層序

今回報告する花粉分析の試料は、1975年12月2日に採取した。試料は安久遺跡の大溝の壁面より2.5～5cmの間隔で連続的に採取し、ポリ袋に密封して実験室に持ち帰った。試料を採取した大溝の層序は下位より、

暗灰色泥炭質粘土：最大層厚80cm前後、大型植物遺体を多く含む。鎌倉～室町時代の遺物を出土する。

暗褐色植物遺体集積層：ヨシの根からなる遺体の集積層。層厚10cm前後。

暗灰色粘土：植物遺体を多く含み、近世以降の遺物を出土する。層厚10cm前後。

灰褐色シルト質粘土：層厚30cm前後で近世以降の遺物を出土する。

灰褐色シルト：層厚20cm前後。

灰褐色シルト質細砂：層厚40cm前後。

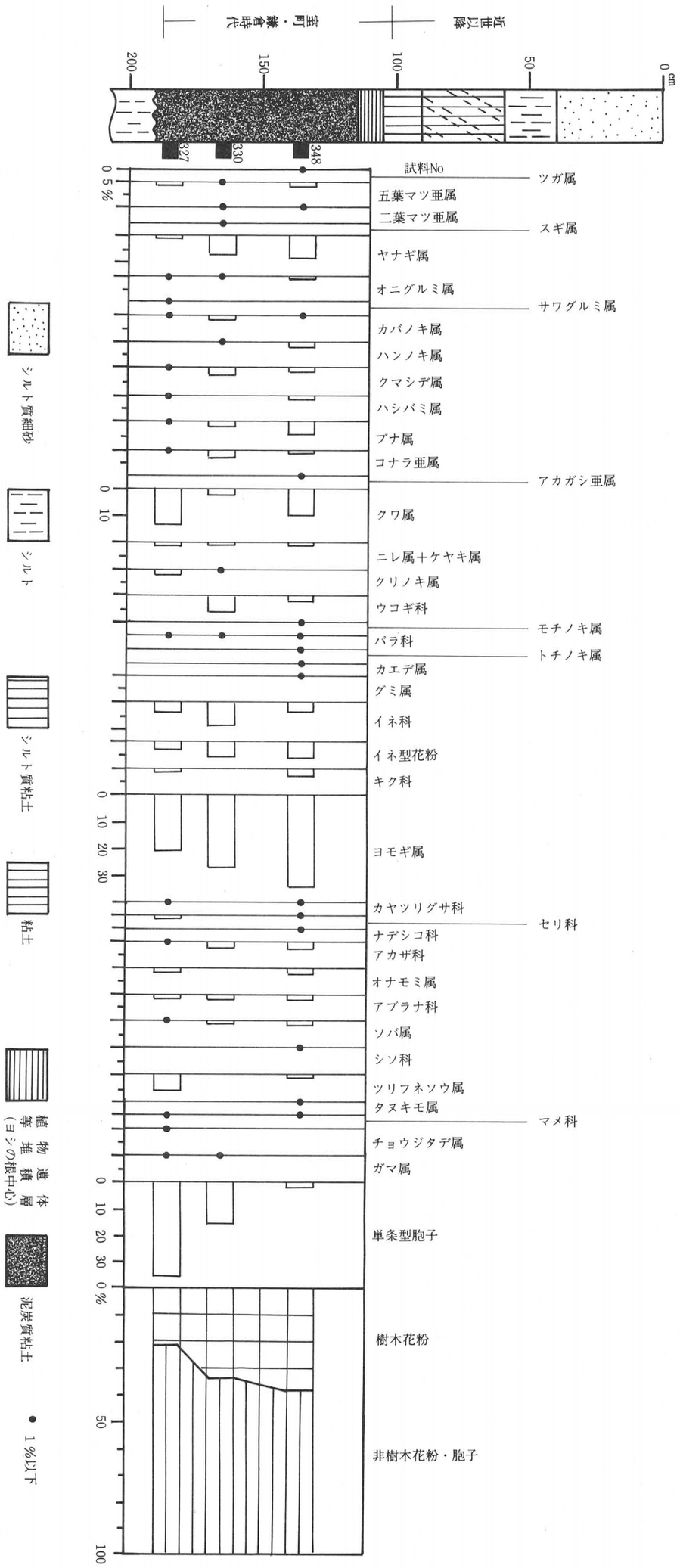
(2)花粉分析の方法

花粉分析の方法は、計量スプーンによる単位体積の計量－KOH処理（10％水酸化カリウムを加え15分間湯煎）－水洗（蒸留水で上ずみが透明になるまで水洗、遠心分離）－比重分離（70％塩化亜鉛溶液、比重2.1～2.2を加え、遠心分離）－HCl処理（上ずみをスポイトで採取し、1％塩酸を加え遠心分離）－水洗－酢酸処理（氷酢酸を加え遠心分離）－アセトリシス処理（濃硫酸1：無水酢酸9の混合液を加え、3分間湯煎）－酢酸処理－水洗－50％グリセリン溶液を加え－定量にうすめる－マイクロピペットにて－定量採取－マウント－検鏡の順に行った。

検鏡は通常400倍で行い、必要に応じて1000倍を使用した。

(3)花粉分析の結果

花粉分析の結果は表1と図8に示す。図8の花粉ダイアグラムは総出現花粉・胞子数を基数とするパーセントで描いてある。



第８図　安久遺跡大溝の花粉ダイアグラム

（出現率は総出現花粉・胞子を基数とするパーセント）

表１　安久遺跡大溝の花粉・胞子出現率表

	№327		№330		№348	
Tsuga	個	%	個	%	1個	0.2%
Pinus (Haploxylon)	5	1.0	1	0.6	8	1.4
Pinus (Diploxylon)			1	0.6	1	0.2
Cryptomeria			1	0.6		
Salix	6	1.2	11	7.0	45	8.2
Juglans	2	0.4	1	0.6	6	1.1
Betula	1	0.2	2	1.3	2	0.4
Alnus			1	0.6	11	2.0
Carpinus	2	0.4	4	2.5	6	1.1
Corylus	2	0.4			6	1.1
Fagus	3	0.6	2	1.3	23	4.2
Quercus (Lepidobalanus)	1	0.2	5	3.2	7	1.3
Quercus (Cyclohalanopsis)	3	0.6			1	0.2
Moraceae	62	12.8	4	2.5	55	10.0
Celtis−Aphananthe	1	0.2	5	3.2	13	2.4
Ulmus＋Zelkova	5	1.0	2	1.3	6	1.1
Castanea	7	1.4	1	0.6		
Araliaceae			10	6.4	6	1.1
Ilex					2	0.4
Rosaceae	1	0.2	1	0.6	10	1.8
Aesculus					1	0.2
Vibrunum			1	0.6		
Ericaceae					1	0.2
Pterocarya	1	0.2				
Rhus	1	0.2	1	0.6	2	0.4
Acer					1	0.2
Elaegnus					1	0.2
AP　Total	103		54		215	
Gramineae (Wild)	18	3.7	14	8.9	19	3.4
Gramineae (Ovyza type)	15	3.1	9	5.7	34	6.2
Compositae	5	1.0			15	2.7
Artemisia	100	20.7	43	27.4	192	34.8
Cyperaceae	4	0.8			2	0.4
Umbelliferae	6	1.2			4	0.7
Caryophyllaceae					2	0.4
Chenopodiaceae	4	0.8	4	2.5	12	2.2
Xanthinm	7	1.4			6	1.1
Curuciferae	6	1.2	3	1.9	12	2.2
Fagopyrum	4	0.8	2	1.3	9	1.6
Persicaria					1	0.2
Labiatae					3	0.5
Rumex					1	0.2
Impatiens	33	6.8			6	1.1
Utricularia					1	0.2
Legminosae	1	0.2			3	0.5
Ludwigia	1	0.2				
Typha	1	0.2	1	0.6		
Vitis					1	0.2
Grass　Total	205		78		323	
Monolete spore	174	36.0	25	15.9	12	2.2
Trilete spore	2	0.2			1	0.2
Osmunda					1	0.2
Spore　Total	176		25		14	
AP＋NAP	484		157		552	
AP／NAP	21／79		34／66		38／62	

(4)植生環境の復元

図8の花粉ダイアグラムは、ヨモギ属、イネ科、アカザ科、オナモミ属等の、荒地に生育する草本花粉や羊歯類胞子が高い出現率を示し、中世のこの時代、すでに安久遺跡周辺は森の少ない環境であったことを示している。一方、樹林花粉ではヤナギ属、クマシデ属、ブナ属、コナラ亜属、クワ科、ウコギ科などが高い出現率を示す。その中でも二次林的性格の強いヤナギ属やウコギ科が高い出現率を示し、クワの栽培を想定させるようにクワ科の花粉が高い出現率を示すことが注目される。栽培作物と関連するものとしては、この他イネ型花粉、ソバ属、アブラナ科（おそらくナタネ）の花粉が高い出現率を示し、周辺では湿地に稲やナタネが、また畑にはソバやクワ、あるいはナタネの栽培がなされていたことを想定させる。

すでに山口遺跡の花粉分析の結果（安田1981）において明らかにした如く、名取平野の自然堤防上には、人間が破壊する以前には、クマシデ属やニレ属、ケヤキ属の森林が生育していた。それが主として古墳時代以降破壊され、周辺にはコナラ亜属、クリノキ属、ヤナギ属、ハンノキ属等とともに、ヨモギ属、カナムグラ属、羊歯類胞子からなる草原が拡大したことを明らかにした。事実同じく名取平野に立地する奈良末～平安初期の清水遺跡では、井戸内の堆積物ということも反映しているが、花粉分析の結果は、ヨモギ属やアカザ科等の荒地に生育する草本の花粉が高い出現率を示した。またソバ属やクワ科の花粉も検出された。このことは、名取平野では奈良時代末～平安時代に入ると、すでに沖積平野の自然堤防上の自然林はかなり破壊されていたことがわかる。

そしてこの安久遺跡でみるように、鎌倉、室町時代には、自然堤防上の自然林としてのマシデ属やニレ属、ケヤキ属は出現率を著しく低下させ、かわってヤナギ属、ウコギ科あるいはクワ科などの二次林的性格の強い樹木と、イネ科、ヨモギ属、オナモミ属、アカザ科それに羊歯類胞子などからなる草原が拡大し、自然堤防上ではソバやクワの栽培がなされていた。またすでに清水遺跡の植物遺体の分析（粉川1981）から、アサ、ソバ、アズキ類、ナスビ(？)、マクワウリの類、ヒョウタンの類、イネ、ムギの類、アワの類(？)などが検出されており、こうした栽培作物が安久遺跡でもつくられていたとみられる。しかし、現代の二次林を代表するアカマツ林は、この時代いまだ高い出現率を示していないことは注目される。

Ⅵ. 終　論

遺跡の層序・ボーリング試料・大縮尺の地図等から、仙台平野の一部、名取川の沖積平野の微地形について調査した結果、以下の事実が明らかとなった。

1)現在の沖積平野の地表面に展開する自然堤防、後背湿地の微地形の分布パターンが形成される以前、仙台平野のかなり広い部分には、後背湿地型の低湿な環境が展開していた。その時代は縄文時代晩期頃と推定された。

2)弥生時代～古墳時代頃に、自然堤防Ⅰの形成が行なわれた。その自然堤防は大規模で河道中、巾500m前後を有していた。

3)古墳時代の後期～平安時代にかけては、比較的安定した堆積環境が続き、自然堤防Ⅰはむしろ侵蝕された。

4)ところが平安時代の末から鎌倉時代以降、再び自然堤防の形成が活発化した。ただその場合、自然堤防Ⅱを形成した河道（旧河道Ⅱ）は小規模で、かつ自然堤防堆積物も自然堤防Ⅰの上に載る形で堆積した。

5)自然堤防Ⅱの堆積物は、自然堤防Ⅰの堆積物に比して粒度が粗く、両時代における堆積環境の相違、なかんずく河川流域の特性の変化が考えられた。

6)名取川の平野で明らかになった後背湿地の時代－自然堤防Ⅰ形成期－安定期－自然堤防Ⅱ形成期－侵蝕期（現在）という一連の変化は、日本各地においてこれまで筆者等（安田1971、77、井関1973）が明らかにした事実ともよく一致する。

7)遺跡の発掘によって、多くの溝状遺構が検出され、溝内には有機質粘土層、泥炭層が堆積していた。こうした泥土の花粉分析にもとづく当時の植生環境の復元についても、若干の議論を行った。

謝　辞

資料集収・調査に際して絶大なる協力を惜しまれなかった仙台市教育委員会田中則和氏に末筆ながら厚く御礼申し上げる。

註1　安久東遺跡では、1975年の仙台市教育委員会の調査により、古墳時代前期の住居跡が3軒発見され、また、1977年の宮城県教育委員会の調査によって、古墳時代前期の方形周溝墓と弥生時代中期と後期の土器が発見されている。仙台市文化財調査報告書第10集安久東遺跡発掘調査概報（1976）、宮城県文化財調査報告書第72集、東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ（1980）

註2　註1に記したように、この時期にも一時的に遺跡の形成も認められる。自然堤防の形成期に遺跡が放棄されたとはかぎらない。

引用文献

井関弘大郎(1972)　日本における三角州平野の変貌、第四紀研究11、117—124

粉川　昭平(1981)　宮城県清水遺跡出土の植物遺存体、宮城県文化財調査報告書第77集 423—436

大矢　雅彦(1968)　木曽川と筑後川流域の地形、洪水、およびそれが水利用、土地利用に及ぼす影響の比較、水利科学63　23—41

安田　喜憲(1971)　濃尾平野庄内川デルタにおける歴史時代の地形変化、東北地理23　29—36

安田　喜憲(1972)　仙台平野における自然堤防形成期について、日本地理学会秋季学術大会予稿集 3 74—75

安田　喜憲(1973)　阿武隈川下流域における縄文時代の自然環境の変遷と人類、東北地理25　51—63

安田　喜憲(1977)　倭国乱期の自然環境、考古学研究92　83—100

安田　喜憲(1981)　仙台市山口遺跡の泥土の花粉分析、山口遺跡、仙台市教育委員会　235—240

安田　喜憲(1981)　宮城県清水遺跡周辺の古環境、宮城県文化財調査報告書第77集、423—436

栗遺跡出土動物遺存体

高　橋　　理

出土動物

魚綱　Clas Pisces

1．ホホジロザメ　Carcharcdon carchrias LINNE´

歯芽　1　（熱を受けている）

直立三角形の形状を呈し、鋸歯縁を備えており、あおざめ科のホホジロザメと思われる。ホホジロザメはサメ類の中でも大形で体長12m、体重1,870kgに達する。世界中の熱帯及び温帯に分布。

2．スズキ　Lateolabrax japonicus CUVIER & VALENCIENNES

椎骨　1

スズキは体長1m以上に達する魚で沿岸に生息する場合が多いが、汽水域、淡水域においても生息できる。北海道以南から台湾まで分布。

現生の標本との比較から上記の椎骨をもつ個体のおおよその大きさを推定してみた。出土した椎骨は、椎体径16.8mm、椎体長13.3mmである。一方現生標本は椎体径11.7mm、椎体長9.7mmで全長（吻端から尾鰭端までの長さ）が530.0mmである。椎骨～全長が相関をもって成長すると仮定すると、出土椎骨をもつ個体は、椎体径の比較から726.0mm、椎体長の比較から765.0mmとなり、およそ72～77cm程のスズキであったことになる。

哺乳綱　Clas Mammalia

1．イノシシ　Sus scrota leucomystax　TEMMINCK & SCHLEGEL

明確に部位の判明した骨は次の3点である。

基節骨（遠位端）　1

中節骨（近位端）　1

末節骨（近位端）　1

出土したイノシシが当時（7世紀）において、すでに飼育されていたのか、あるいは野生の

イノシシを捕獲したものであるのかの判断は困難である。

2．ウマ Eguus przewalskii var orientalis

中節骨 1

基節骨 1

中手（足）骨 1

未節骨（いわゆる蹄）を欠き、そのすぐ上の部位から出土している。この3点については保存が良好で、中手（足）骨遠位端の一部が欠如していただけであった。

なお、他に橈骨と思われる骨片が出土しているが、保存状態が悪く計測も不能であった。

直良信夫（1970）によれば、日本在来のウマはモウコノウマから出た畜馬で朝鮮馬などと系統を同じくする小型のウマであったという。分類学上まだ不明な点も少なくないが、ここでは直良の説をとり、上記の学名を付しておく。

第1表　栗遺跡出土動物遺存体計測表

遺物番号	種類	部位	数	計測値（mm）	出土地点	層位	写真図版
	（魚綱）						
71－1	ホホジロザメ	歯	1	現存部歯冠高：19.0最大幅18.0	SI－2	貼床下中央Pit	(1)
71－2	スズキ	椎骨	1	椎体径×椎体長：16.8×13.3	SI－12	堆積土1－4層	(1)
	（哺乳綱）						
71－3	イノシシ	基節骨(遠位端)	1	滑車部最大幅12.1最大高11.5	SI－12	堆積土	(1)
71－4	イノシシ	中節骨(近位端)	1	関節面最大幅13.3最大高8.2	SI－12	堆積土	(1)
71－5	イノシシ	末節骨(近位端)	1	関節面残存部最大高8.7	SI－12	堆積土	(1)
71－6	ウマ	中手(足)骨	1	中手(足)骨残存部長221.5	SD－4		(2)
				上部関節部前後径×内外径：30.0×49.3			
				骨体中央位置における前後径×内外径:23.2×30.0			
71－7	ウマ	基節骨	1	基節骨長75.5	SD－4		(2)
				上部関節部前後径×内外径：32.4×46.9			
				下部関節部前後径×内外径：23.5×40.6			
				骨体中央部前後径×内外径：21.8×30.9			
71－8	ウマ	中節骨	1	中節骨長43.0	SD－4		(2)
				上部関節部前後径×内外径：29.0×49.5			
				下部関節部前後径×内外径：22.5×44.0			
				骨体中央部前後径×内外径：21.8×30.9			

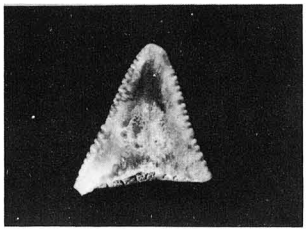
文　献

阿部　宗明(1963)　原色魚類検索図鑑　北隆館

加藤嘉太郎(1963)　家畜比較解剖図説　養賢堂

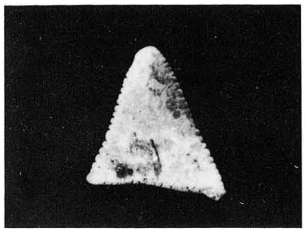
直良　信夫(1970)　日本および東アジア発見の馬歯・馬骨　日本中央競馬会

直良　信夫(1973)　古代遺跡出土の家畜遺体　校倉書房

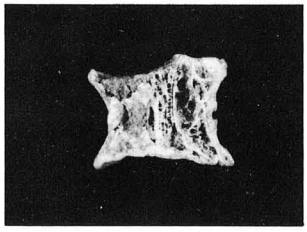


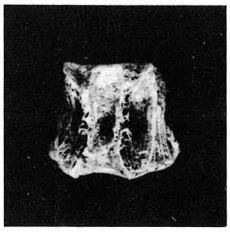
No.71－1

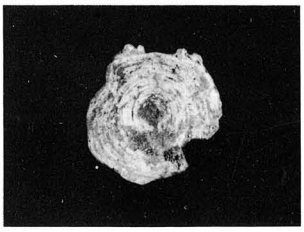
（ホオシロザメ
歯　　牙）



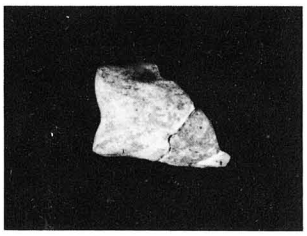
No.71－2





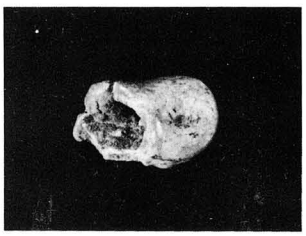


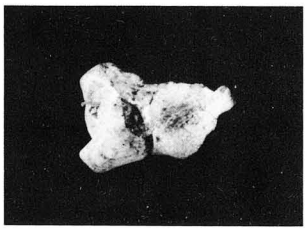
（スズキ椎骨）



No.71－3

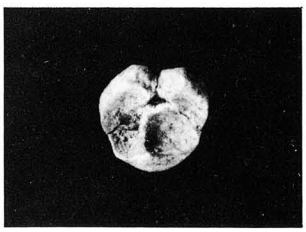
（イノシシ
基 節 骨）





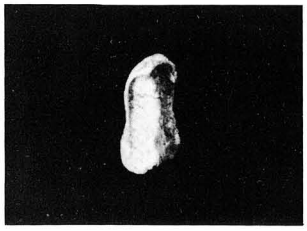
No.71－4

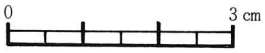
（イノシシ
中 節 骨）



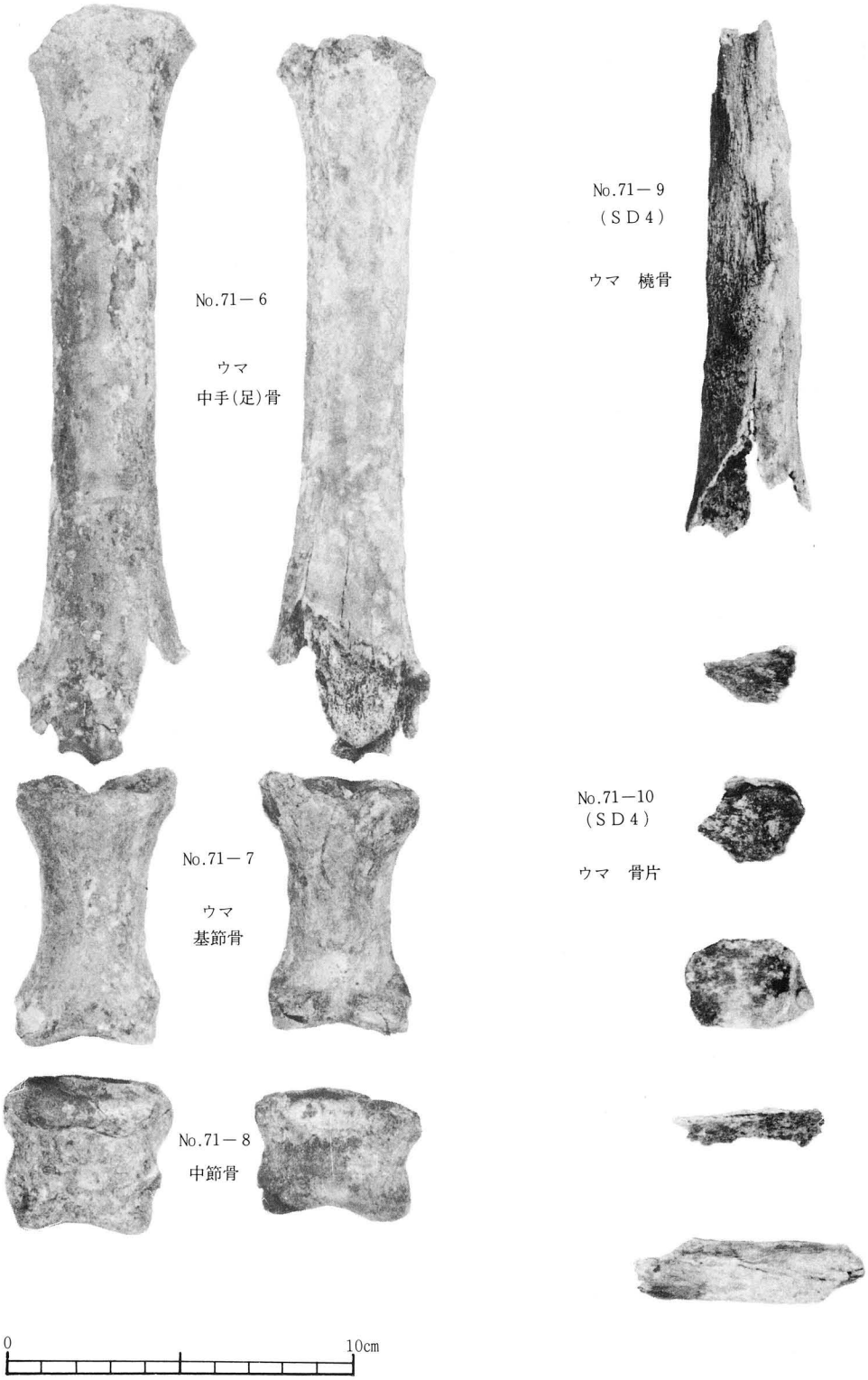
No.71－5

（イノシシ
末 節 骨）





図版１　栗遺跡出土動物遺存体（１）



図版２　栗遺跡出土動物遺存体（２）

栗遺跡出土炭化材樹種同定結果

光　谷　拓　実

栗遺跡出土炭化材は下表のとおり同定された。

遺物番号	資料名	出土遺構	層位	種類
72－1	炭化材	56年3号住居跡	床面	キハダ
72－2	炭化材	56年3号住居跡	床面	キハダ
72－3	炭化材	56年3号住居跡	床面	キハダ
72－4	炭化材	56年3号住居跡	床面	オニグルミ
72－5	炭化材	56年10号住居跡	床面	サクラ属
72－6	炭化材	56年10号住居跡	床面	トネリコ属

栗遺跡出土土師器の使用痕観察

森　　剛　男

使用痕の観察は、器種の果たした機能の過程を意義づけ出来る方法の一つである。使用痕は機能開始と同時に発生し、機能喪失までの間に、ある痕跡は繰り返して付けられ、またある痕跡は、偶発的事情によって一次的に付けられる。ここでは、栗遺跡出土の土師器を通して、今まであまり問題とされることのなかった、土師器の使用痕についての観察結果を若干述べて、今後この方面からの土師器研究の必要性を提示したい。

Ⅰ．観察の方法

〔1〕 発生の要因

1．各器種との組合わせで生じる痕跡
2．器種に付属される物で生じる痕跡
3．内蔵される物と煮こぼれで生じる痕跡
4．付属施設の活用と二次加熱で生じる痕跡

〔2〕 痕跡の状態

1．摩滅
2．剝離
3．煤の付着と二次加熱による変色
4．水垢の付着と煮こぼれの固着

〔3〕 観察の位置

1．口縁（口唇部）
2．最大胴部
3．最小内頸部
4．外頸部
5．胴部下端
6．胴部内面
7．底面部

Ⅱ．観察の状況

1．摩滅痕について

口唇部の内側で顕著に摩滅痕の認められる鉢Ⅰ類の２点は、いずれも口縁部が内弯する。口縁部が外反又は直立する他の器種の口唇部や最大内頸部では認められない。底面部の観察では、中心部分に摩滅痕が認められるのは、甕Ⅱ類小型と鉢Ⅰ類に１点づつ確認されるだけである。摩滅痕跡が確認出来ると予想した他の観察の位置では、付属施設や他の器種とのかかわりあいを明確にできる結果は得られず、使用痕観察の上

で今後の検討が必要であろう。

2．剝離痕について

甕Ⅰ類の内1点は、内面胴部に認められ同器種の3点ではともに最大胴部の位置に一周する形で認められ、その形態は列点状と斑点状の2つのタイプに見られる。他の器種では二次加熱を受け、その多くは加熱の繰り返し現象によるものか、剝離の重複が認められる。鉢Ⅰ類は胴部下端に、鉢Ⅱ類の1点は外反する頸部下端で剝離痕が認められた。

3．煤の付着と二次加熱による変色痕について

煤の付着には2つのタイプが見られる。「火焔状に薄く」付くものと「タール状に濃く」付いているもので、その付着の位置はさまざまである。甕Ⅰ類以外の各器種は二次加熱との関係は強い。煤は底部から口縁部へ抜けるもの、又頸部から下端へと、器種に関係なく一定ではない。甕Ⅱ類大型器種の1点には、明瞭に支脚との接触を示す煤の付着痕跡が認められ、加熱の繰り返しによる胴部外面の赤変現象と煤痕の重複、中には空焚き現象であろうか内面に赤変痕が達している長胴甕さえ確認される。二次加熱痕の認められる全器種に付いて赤変及び煤痕の方向を見ると一様に片面方向に一定するものが多い。これらは付属施設、所謂「カマド」とのかかわり合いを明確にしたと同時に、器種自体の機能的活動の〝痕跡〟と見られよう。

4．水垢の付着と煮こぼれ痕について

垢の組成は複雑であるがここでは水垢として扱う。確認される器種は甕Ⅱ類の大型、小型の6点と鉢Ⅰ類の1点がある。大型の1点は内頸部に2本の水位線が見られる。両線は、1cm程の間隔で下方の線が後行し、下端にかけ薄くなる。小型の内2点は胴部と頸部との中間に1本の水位線が見られる。胴部の位置に水位線があるもの2点は下端にかけ痕跡が認められ、内頸に2本の線が見られる1点は幅2cm程に水垢が付着する。各種の痕跡が認められる鉢Ⅰ類の1点は外面剝離の位置に対応し、水位線が認められた。これら全器種ではいずれも複数の使用痕が観察されている。又、煮こぼれによる痕跡は全器種から得られない。

以上の使用痕の観察結果を、器種別にまとめたものが第1表である。今後さらに使用痕を通しての土師器各器種の使用法や、組み合せについての具体的な検討が必要と考える。

第1表　使用痕観察表

使用痕の種類	確認の位置とと状況	甕Ⅰ類	甕Ⅱ類	甕Ⅱ類	鉢Ⅰ類	鉢Ⅱ類
			大　型	小　型		
摩　　滅	口　縁(口唇部)				2	
	底　面　部			1	1	
剝　　離	最　大　胴　部	4 (※)				
	外　頸　部				1	
	胴　部　下　端			1		
煤の付着と二次加熱による変色	煤	2	2	3		
	赤　変		1	3	1	1
	煤と赤変		8	16	3	
水垢の付着（内　面）	内　頸　部		1	1		
	頸部と胴部の間			2		
	頸　部　下　端				1	
	胴　部			2		
使用痕の確認点数		6　点	12　点	29　点	9　点	1　点

（※）　内面胴部にて確認の1点を含む

編　集　後　記

本報告書の編集を終えるにあたり、本書のために御寄稿下さいました安田喜憲氏（広島大学総合科学部助手）、光谷拓実氏（奈良国立埋蔵文化財センター文部技官）、高橋　理氏（東北大学文学部大学院生）、森　剛男氏ほか、調査に協力していただいた各氏には、末筆ながら深く感謝申し上げます。

また、現地調査中より遺物の整理・実測にあたり、さらに本書の編集を援助してくれた小林広美、神尾紀以子、相沢尚子の各女史の協力によって、調査終了後半年という短期間で本書が刊行できたことを記して三女史への感謝の意を表し、報告の終わりといたします。

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　大沢隆夫
主　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　諭　青沼一民
主　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
派遣職員　高橋勝也
嘱　託　鈴木　実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡 ― 範囲確認調査報告書 ―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ ― 昭和55年度発掘調査概報 ―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ ― 昭和56年度発掘調査報告書 ―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ ― 昭和56年度発掘調査概報 ―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）

仙台市文化財調査報告書第43集
昭 和 57 年 度

栗　　遺　　跡

昭 和 57 年 8 月

発行　仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市国分町 3 － 7 － 1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24－24　TEL 63－1166